

PL Shin gunsho ruiju
755
 .35
S5
v.8

East Asia

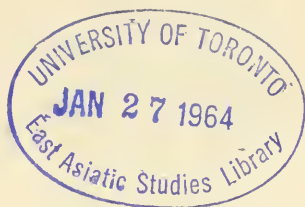
PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY





新
群
書
類
從
第
八



PL
755
.35
S5
v.8



一幸若舞の詞は何人の何時の頃に作り出したるものなるか明らかならず。されど幸若舞といふ事は桃井播磨守直常の孫宮内少輔直詮の幼時比叡山にありて幸若といひし頃仕出でたるものなりといへば、おほよそ足利氏の義満義持の頃にあたりて世に起りしものなるべく、隨て其の詞も其の頃よりの人々の作りしものとおぼし。義政の應仁の頃には既にめづらしからず行はれ、降つて徳川氏の寛文延寶あたりまで諸侯貴人のこれを用ひて宴を助け酒を侑めたること諸書に散見す。されば詞も一時一人の手に成らざる事明らかなり。されども今存するものゝ中には、新曲といふもの最も新らしく、其の餘は皆新曲以前のものと推測らる。新曲は後醍醐天皇皇子尊良親王の御上を作れるものにして、餘の例に倣ふ時は題して一ノ宮とも武文ともいふべき

二
筭なるに、たゞに新曲とのみ云ひ傳へて其題名無くて濟みぬるを思へば其の後に新らしき作は出でざりしなるべし。新曲の文勢筆意を考ふるに、他の曲とは大に其の様を異にして、巧ならぬにはあらねども、蕪陋の中に健剛の氣を含める中古のをかしき趣は更に無く、他の曲と新曲との間に幾千の歲月あることはいと明らかに見ゆ。たゞ新曲と古曲とを併せて、すべて皆何人の作るところなるか、一證左の存して之を明らかにするだに無きを恨むべしとなすのみ。

一 今刊するところの舞曲計四拾一番、一のいづみが城を除きては、新古書目に散見するところのものを網羅して剩さず。

一 舞曲古刊本の其の一は明曆板にして四年戌九月吉日山田市郎兵衛開板とあり。其の幾番を刊したるやは明らかならず。予はただ其の敦盛を睹たり。十四行本なり。其の二は寛永板にして、寛永

十二年乙亥二月吉日開板之と烏帽子折の末に見えたり。此の種の本は三十六番を具足せりとおぼしく、予は其數番を除きて之を目睹せり。すべて皆十行本なるが、中に八島一番のみは十一行にして字體もまた聊か異に、二部見たる本の二部とも然るを見れば、故ありて板本を亡ひなどし、蚤く既に他の板をもて闕けたるを補ひ、書肆みづから拙くも不揃ひなるものを鬻ぐに至りしとおもはる。其の三は刊刻の年時不明なる十五行本にして、予ただ其の高館一番を睹たり。此の種の本の刊せられしもの三十六番なりやはた幾部なりやは亦不明に屬す。此の他猶異板の刊本ありや否や、年代久遠、今遽に武斷すべからず。

一舞曲寫本は淺草文庫舊藏にかゝる内閣文庫現存のもの最も古し。字體、紙質、綴様より考ふるに蓋し慶長前後のものなり。九行、烏の子紙、大和綴、豎本にして繪無し、繼信忠信記と題したる畫卷の

影寫本一卷あり。題名は異なれども其の文は全く八島に同じ。而して其の卷端に詞書二條爲重卿筆とあり。爲重卿は後小松天皇の至徳年間に新後拾遺和歌集を撰みたる人にして桃井幸若と年代相當るといへども、後人の記入に係れば深く信ずるに足らず。原本を目撃して後之を考ふべきのみ。唯中古の草子畫卷の類を其の儘舞の詞として舞々の用ゐたるか舞の詞の時に或は思ひのほかなる名を負ひて、草子畫卷の類として人に玩ばれたる事あるか、いづれにしても猶此の類の寫本ありや、是等は聊か心に留むべき事たり。別に予が所見に俗に奈良繪本と稱する畫入りの横本の景清あり。此の類は所謂仕入本なれば、予の目睹以外に猶多く存すべきやもとより論を待たず。予は目撃せずと雖も、予の友人素影齋藤君の予の爲に之を見、且つ其の幾部を影寫して予に餽られたる幸若氏故領地越前丹生郡西田中邑幸若氏舊

家隸打波氏の所藏寫本は、横本にして字體も優美に、年代の古さは蓋し閣本に及ばずと雖も、其の佳本にして信憑すべきは比類無しといふべし。此の他寛永刊本に詞章相同じき百數十年餘の古寫本十餘冊あり。今刊するところの舞曲皆是等の本を比較して及ぶべき限りは佳良ならしめんことを期したり。

一入鹿、大職冠、百合若、志田、滿仲、硫黃が島、築島、伏見常盤、常盤問答、文覺、伊吹夢合せ、馬揃、那須與一、笛之卷、烏帽子折腰越、堀河夜討、四國落、富樫、笈さがし、八島、清重、高館、濱出、景清、元服曾我、和田酒盛、小袖曾我、劔讚歎、十番切、新曲の三十二種は寛永本に依り、鞍馬出は寛永本同様の古寫本に依り、敦盛は明曆本に依り、鎌田、未來記、靜切兼曾我、張良の五種は内閣寫本に依り、木曾願書、夜討曾我は幸若氏寫本に依りたり。

一今刻一に各々其の本づくところの本に依り、一點を増減せず、一

畫を改竄せず。假名遣ひの誤謬、文字の假借等、まさに改め正すべきものと雖も、其の舊を存するは却て當時の一般の發音ならびに舞舞の語り癖等を想見するに足るの料たるを以て之を改正せず。間々特に本のまゝなる旨を挿記して、奇異なる語法、難解の文言、既存の誤謬、無理なる文字の假借等を明らかにし、今刻の誤脱して然るにあらざるを明らかにす。

一番の曲其のやゝ長きものは、舊刻或は分つて上下とす。然れども本是書肆の便宜に隨つて分冊せしに過ぎず。故に各刻定め有ること無し。其の初より上下を爲せるにあらざること分明なるを以て、今刻すべて通じて一部を完くし、強ひて分冊せず。

一舞曲もと今を距る近からざる時代の語り物なるの故を以て其の文法おのづから今人の耳目にも親しからず、上代の習風にも似通はざるものあり。例を舉ぐれば、してのて文字を略して、君の

御おぼえめでたくして、とあるべきて文字を省き、君のおぼえめでたくし、と云ふが如き、ともものも文字を略して、如何に覗うとも撃たるまじ、とあるべきも文字を省き、いかに覗うと撃たるまじ、と云ひ、たとへばしやうもんあなたにあるともと云ふべきを。たとへばしやうもんあなたにあると、と云ふが如き、又事態切逼せる情景を叙する時は、ぞ、る、こそ、けれ、の古代語法中に、忽然として、此處に下女一人ゆきあふた、やあ此やかたのうちに何事かあるととふた、爰に和田の右座に疊が一でうあいた、といふたぐひの近代語格を交ふるが如き、又自他の談話の區別を明らかにすべき語を省きて、甲者乙者の言語を、わいだめ無く續くるが如き、間投詞を形狀の詞と名詞との間に挿むで、八尺五寸のさても棒をば、六尺三寸のさても長刀水車にまはいてといへる如き、皆卒然として之に臨めば、本文に誤謬脱漏あるべく思はるゝもの甚だ

多し。讀むもの漫に武斷して誤謬脱漏とする勿れ。

一語形もまた希異なるもの少からず。頭の事をうんきと云ひ、足にはくものをけいちといふが如き、普通辭書に其の語無しとも、漫に疑ひて本文誤脱あるべしとなす勿れ。

一本文一に舊に依れるは前記の如し。たゞ婆心止む能はずして讀者の便利の爲に濁音の點のみを付したり。佛經の音讀を假名のみにて記したるが如きは、濁點無き時は殆ど之を讀みて錯過すべければなり。若し嚴刻の士の婆心醜甚と叱呵するあらば、予もとより甘んじて其の責を受くべき也。

明治丙午十月初六

幸田露伴識

新群書類從第八目次

舞 曲

入鹿……………一

大職冠……………一〇

百合若大臣……………三三

志田……………五三

滿仲……………七八

硫黃が島……………九六

築島……………一〇〇

鎌田……………一二〇

伏見常盤	一三五
常盤問答	一四七
文覺	一五三
伊吹	一六五
夢合せ	一七四
馬揃	一七七
木曾願書	一八一
敦盛	一八四
那須與一	二〇〇
未來記	二〇四

笛之卷	二〇八
鞍馬出	二一五
烏帽子折	二二〇
腰越	二四二
堀河夜討	二四九
四國落	二六五
靜	二七一
富樫	二八九
笈さがし	二九九
八島	三一〇
清重	三二七
高館	三三三

濱出……………三五五

景清……………三五八

切兼曾我……………三八一

元服曾我……………三九三

和田酒盛……………四〇〇

小袖曾我……………四一五

劔讚歎……………四二六

夜討曾我……………四三〇

十番切……………四五〇

新曲……………四六二

張良……………四七七

目次終

新群書類従第八

舞 曲

いるか

抑かまたりの先祖をくはしくたづぬるに天津こやね
のみことに三十六代の御末みけこのきやうと申て天
下にかくれぬ臣下たりゑかるにみけこのきやうは君
の御おぼえめでたくし天下のまつりごとをわがまゝ
にゑたまへば世そねみ人へんしゆしていかにもして
御なかのあさらけなむをたくみさんにんのきやうか
いをさうもんすると申せ共みかど御もちゐなかりし
かどげには又しよきやう一味のおんるにてなだめが
たくやおぼしけんとがもなかりきみけこのきやうに
ちよつかんのせんじをかうぶりてはるかなりける東

路やひたちの國にはいしよありおもひをはかんざむ
のゆふべの雲にかけながら涙を遠島のみちよりすゑ
にさきだてゝ見もならはざる東路やひたちの國にく
だりみやのあたりにいほりしてあかし暮させ給ひけ
ればあたりの里人見參らせかしまのみやにすめばと
て四郎ねぎとぞ申けるいつしかはやく落ぶれのうふ
でんしやにまじはりさんわうのときを得一けいのす
きをになひすんの田をかへしいつしのくはの葉をと
りけんはくのたぐひをいとなみていみじからねどく
わういんを去年は今年にをしうつりあやめもゑらす
すみ給ふかくてすぎゆき給ひしにわりなきいもせの
なかなればわかざみ出来給ふ有しにかはる御すまゐ
にもいつきかしつき給ふ

すでにそのとしもうちすぎなつくれゆけばみな月の
中の五日のあつき日に田のくさとりにいで給ふいた
はしや若ぎみをこの田のあせにぐし出てあを葉のゑ
ばを折かざしなかでいねよとちをふくめ夫婦ともに

もくさをとる手に付てなへのはのさかへむ事をよろこびてひめもす取てくらさるゝかゝりけるところにいくからとも煮らざるに一つのきつね來りがまをくちにくはへようしのまくらがみにをきかきけすやうにうせければちゝはゝいそぎたちよりかまをとりて見たまふにこほり手のうちにかゝやくやうなかまでありもしもたからになるやとて此子にそへてぞそだてらるぶゆくれんまの時を得はや十六になり給ふたちばなのきやうの御時にのうぶでんじやのわざなれば庭の夫にさゝれなくゝ京へのぼりしにもゝしきや大内の庭の小草をきよめしにきやうしのべんは御覽じておほくのしちやう夫のなかにいとけなきわつばありかたちはやつれはてたれどたゞ人ならすおぼえたりこんこつのさうの有こんこつのさうとは大臣のさうの事成るなかへ今はくだすまじ宮中にとどまりてみかどをしゆごし申せとてもんせうしやうににんせられ右京の太夫に經あがりて宮中のまじは

りはやうんかくに成給ふくわほうのほどのゆゝしさよかゝりける處にそがの入鹿の大位臣ノアヤマリ殿とて大惡行の臣下あり君の御位をうばひとつて我わうにならんとたくむ此事天下の大事とて東山のおくにふぢのおほくはいかゝりたる大木のもとにてせんぎひそかにときを得かのいるかの玄んをば右京の太夫に仰付うたるべきとのりんげん也ちよくめいなければそむきえずりやうじやう申かへりようしの時きつねのあたへたる一つのかまをたばさみねらひうかゝひ給へども彼入鹿かの大臣は三年の事をかねてゑりつるぎをたばさみほこをもち宮中の出仕にもけいごのもの前後にみちさきをはらはせ出ればうつべきやうこそなかりけれかまたりこゝろにおぼしめす人をたばかるはかりごとゑたしくならではかなはじとおぼしめされけるあひだみめよき女を尋わがひめとがうしいつきかしづきたまひけりびしんはいはねとかくれなしみやこの上下かつ知てをよぶもをよばざりけるも望をか

けぬ人はなしある時かまたりいるかのしんの御かたへ御ふみをつかはさるうき世にきたるゑるしにぐしを一人もちて候がせめて武運の至りにやかひなきひめにて候をいもとやらの其ためかのぞみはおほく候へどもうけひくかたも候はず當君の御代に御かたさまならではゑたしみ申さむたよりもなしゑうぢよとおぼしめさるゝともめしをかせ給ひなば身の面目めんばくたるべしとかきこそ送給ひけれいるかはをもき人なれ共いもにははやくくつろぎたねんのぞみの折節御ゆるされはきゑつとてやがてむかへとりいつきかしづき給ふかくてわが君出來たまへば家門のはんじやう時をえこれにゑかじとさゝめひたりかまたりおぼしめすいまはやうちとけぬたばかりよせてやすやすとうたばやと思召かせのこゝちにもてなし日を経てばんし一せいのふりをまなびたまへば宮中の上下とはせ給はぬ人はなしされどもいるかは見えさせ給はずましかね給ふふせいにているかのしんの御かた

へ御ふみをつかはさるすでにうきよのしやうがいよめい今をかぎりなり親子わりなき對面も今度斗の事なるべし入鹿の臣も北の方も御いりあれとかゝれたりいるか此よし御覽じておほきにおどろき給ひくるまやりだせうしかひよいそがせ給へ御前とてさうなくいで給ひしがちうにてこゝろをひつかへしゑばしようにしかひ此くるまといめよ御前ばかりやり申せ我はゆかじと思ふなりそれをいかにと申にむかし異國にさるたとへありみなめんゝもきゝ給へ語てきかせ申べしれうきんこくのれうわうとけんこくのけんわうと國のさかひをあらそひて數度のたゝかひ隙もなしけんこくは多勢れうこくは無勢なりしかりとは申せともれうこくの味方にきんそんきんらくとて二人たけきつわものありてんをかける時うきくもをはしる事平路をつたふごとし大地をとるときばんしやくをうがつ事はくへうをとをすがごとしうみのうへにて馬をのりみやうくわの中に身をかくし大つう

じぎいにかけまはればけんこくのつはものかすをつ
くしてうたれけりすではやけんわうもうたるべき
にておはせしがけむわうかしこき人にてみめ能女を
たづねわがひめみやとがうしはとうによと名付きん
そんをむこにとるきんそんたけきつはものなれ共い
もにははやくくつろぎかのひめみやにちぎりをこめ
けむこくへこそわたりけれをとうのきんらくもあ
にがやうになるうへちから及ばぬ次第とて兄弟つれ
でぞわたりけるけんわうなゝめにおぼしめし兄弟を
ちかづけかの姫宮と申はまるがまさしきひめなりち
ぎりをこむるなんたちなどか子にてはなかるべき親
子わりなき中ならばれうわうをうつてたべもしさも
あらばかたぐにれうこくをわたさんとむつましけ
にのたまへば兄弟の者のがれがたくや思けんやがて
りやうじやう仕りれうこくへまのび歸てびんぎあら
ばとねらひけりれうわう此由御覽じてれいならずな
んちらがまるに近付ことよきはうちに悪心こもるゆ

へうたれじとだにおもひなばいかにねらふともうた
るまじまかりとはいへども日比まるにつかへ數度の
けういをほろぼし今まで國をやる事も只なんちらが
きうこうたりひごろのちうのふかければ命をなんち
にあたふべしきりながら五體ふぐに有ものはぶつた
いをうけがたしまるがほうぎよのはうたひをちつと
もそゝがさずしてきんさんにべうをつき籠奉るべき
也すはたましゐとの給ひてみづからむねのあひだよ
りあをきくちなはとり出しみわけにとつてさしわけ
きんそんにたび給ふ御さいごのりんげむにまるの命
は惜からずなんちらたこくのたばかりを知ざりける
こそむざんなれかならずこくわいすべきそとこれ
をさいごのりんげんにてたちまちほうぎよなり給ふ
御ゆいごんにまかせてきんぎむにべうをつき御から
だをほりうづみたましゐのくちなはをけんこくへわ
たしけんわうにこれをみせ申けんわうなゝめに思召
こゝまでのわざなればきんそんをもきんらくをもも

ろともにうち取て代をおさめんとのせんじにて官軍
うんかにとりまひたりむざんのありさまやれうわう
のおはせし時にこそきんそんきんらくがゆみ矢のゆ
うもつよくしてゐながらしよこうをせいせしにれう
わうほうぎよの其後はつうりきもつかれはてはかり
ごとめぐらずつるきもとばすいはんやほこをなぐ
る事もなくいたづらにかれらうたるべきにて有しが
猶兵法のとくによりおほくのなかを打やぶりれうこ
くさしてにげてゆくあとよりくわんぐん追かくるせ
んはうつきてれうわうの御べうのまへにまいりいか
いせんとかなしむべうのうちにこそ有てまるがまつ
ごのりんげん今こそ思ひゑるべけれかたきはちか付
ぬいたづらにかれらうたせん事のむざんさいいでい
でさらばなんぢらを一見つぎ見つぎ今度のいのちた
すけんまるがからだをほりおこししゝきのしゝにを
しのせ一つのほこをあたへよふせいでみんとせんじ
有べうはおほきにえんどうしつかは二つにわれにけ

りふしぎの思ひをなしつゝほねをひろひつぐほどに
いかゞはしてなかりけんおとがいのほねのたらざれ
はひだりのひざのかはらをとつておとがひのほねに
さしつく扱ゑゝむらはくちうせぬとりつくるふにあ
たはず青黄赤白の四色のしゝにをし乗ほこを參ら
せたりければ拍子にあはせかけひくおもてをあはす
るものはなしけんこくのつはもの敷をつくしてうた
れけりゑかりとは申せども其日もすでにくれいりあ
ひ時になればばうこつをつがふかばねにて日もいら
ばはなれてかなふつべしとも覺えずとたかきをかに
あがりいり日をゑはしといまれとまねき給ひけりけ
ればげに日光もあはれみて山のはにかゝる日が又巳
の刻にたちかへるかたき是をみていよくしんいを
とゝめ合戦をとゝめてにげかへるこうだいのめいせ
きふかくにつくりをかれたり入日を返すまひの手此
御代よりもはじまれりれうわうのひきよく此御事な
りけりはたうのまひと申は養子のひめの事なりきん

そんきんらくはらくそんあつそり是也げんじやうらくはやたいなけんじやうらくに作らるゝ此ことはりを聞時は我も女にちぎりかまたりにたばかられあすこうくわいのあらん時せんびをくふとかなふまじけふはゆかでもありなんあすは日がらよからずとうちとけ給ふ事もなく今度もたばかりそんじてうたでぞやまれるとかやかまたりちから及ばせ給はす春日の宮にさんろう有て一せつたしやうの道理にてころすはとがにて候へども彼入鹿の大臣は天下をかくするのるならず國をついやすげきとたりゑかるにかのいるかのしんをやすゝとうたせ給ふものならばならのみやこの其うちにこうぶくじのこんたうてちやうろくの釋迦しゃかのざうを作りきやうわうをいのり國家をごくすべしと大願をおこしすこしまどろみ給ひけるにゆめ共あらずうつゝともなくあふひのさかき葉一ふさなをしのそでに落かゝる又あたりを御らんあればさかきのほそづえ一つありそも此つえと

申は何といへる子細ぞやをよそつえにもたしゆありほとけのつえはまかさつちやう無明常夜のやみのうきまよひをゑるつえ也ぼさつのつえはしやくちやうくどくの高きをへうせりごんぐげだつのちくちやうはくたわうのしゆはんちやうしゆもんのとてしゆも駄ちやうこそふかきこゝろの有成に今のさつきのほそづえはまうろうのめいあんちやうゆめくらのつくつえなり照日月はあきらかにましませどこくう常夜のごとなればつえにひかれてたどりゆくかるがゆへに名付てめいあんちやうと申なり我もめくらにあらすとも此つえをつきつゝまうもくのまなびをして敵にこゝろゆるされてうてと思召るゝぞとやがて下向のみちよりもこのつえをつきつゝ此間の病氣に目をやみつぶしたりとてたどりありき給ひけりいるかこのよし御覽じて人をたばかるはかりごと何とかくませ給ふらんおそろしやとて用心すみな人の申けるはかのかまたりと申はひたちのくに四郎ねぎが子にて

てんぶやじんのものなるが宮中へめしだいだされ宮路官ノア

ヤマリ歟

にのぼり天下をけがすがによつてくらゐにうて、
まうもくになりたるものぞといひければ入鹿げにも
と思召ちつとくつろぐふせいありころは玄もつき下
旬なかにかまたりいるかをしやうじゐろりに火をを
かせいるかのしんとかまたり御手をあたゝめ給ひし
にかまたりの若ぎみのまだいとけなくましますをめ
のとがいだき参らせてあたりをとをり申時むづから
せ給へばなにとてその子はなかくするぞこれへくと
おほせければさうなく御手にまいらするといかや
はしけんさかりの火のなかへとりおとし給ふいるか
此由御らんじてまこといつはり爰なるべしなど見お
とさで有べきかとさしのびて見給ふかまたりいとや
さとつてあらざるかたに手をあげてもだへこがれ給
ふまにつゐにむなしく成給ふかひなき玄がいをと
りあげておひぎのうへに参らするかまたりいだき取給
ひ爰はいづくぞおもこかほかしこはいづくまへうし

ろあし手をさぐりまはしつゝこはいかにあさましや
あたりに人はおはせぬかなど取あげてたび給はぬじ
ひとくどせんとたはぼさつのぎやうにあらすやあは
れかたわの其中にめくらはことにうらめしや玄かも
一子の若なればかくかたわなるうき身こそさきだち
ばたいをもとはれんとこそおもひしに眼前みやうく
わのなかにいるをたすけぬ事のむざんさよいきてか
ひなきうき身をもころしてたべや人々と天にあふぎ
地にふしてりうていこがれ給ひければみる人も聞人
もそでを玄ばらぬ人ぞなきいるかこのよし御らんじ
てあらいたはしや誠にまうもくしたまひけるぞやさ
れば我身いつはりあるものが人のまことをうたがへ
り今より後はうたがひのこゝろをとゝめ玄たしむべ
しと思召はやうちとけさせ給ひけりかまたりいまは
かうとおぼしめしひんぎよさまなり御用意あれとう
ちへそうもん申さるゝみかどえいらんましゝてか
ねてより御たくみの事なれば異國よりさんかのひよ

うをわたされたりひらかるべき道理有しよきやうの
 こらず参内あれとちよくしを立させ給ふしよきやう
 のこらずさむだい有かまたりばかりふさんありたと
 へまうもく成とも大事のせんぎ有あひださんだいな
 くてかなふまじとかさねてちよくしたちければかま
 たりのしんも参内あるいつよりもほうゑひきつくろ
 ひようしのととききつねのあたへたるひとつのかまを
 たばさみこはらえうのくるまのあざやかなるにめさ
 れやうめいもんにくるまをといめざつしきに手をひ
 かれ御前ちかくなりければそれよりかいしやく申も
 のもなし玄やくもつてかまたり紫晨殿のきだはしを
 さぐり／＼よちのほり御床のすのごにしやく取なを
 しかしこまり御前をうしろになし申あらざるかたを
 ふしおがむこゝろを知たる人々は爰をせんどゝきも
 をけすこゝろをえらざる人々はゆゝしかりける玄ん
 かなとなげく人もありにけりみかどえいらんまし
 ましてあはれいかにかまたり本座にあれとのせんじ

なりしよきやうたちも残らず御本座あれと申さるゝ
 御こゑ付てかまたりさぐり／＼よちのぼりすでにい
 るかの座ちかくなる入鹿かたひざをおし立かまたり
 の御手をとつてをしあげむとのしきだいなりかまた
 りはいるかさをさしあげむとゑたまひけりすではや
 御座敷身の毛を立ておちおそれはやさわがしく成し
 かばかたきにいろをさとられてあしかりなと思召
 三とせが間ふさいだる兩眼をくわつと見ひらき弓手
 のなをしの下よりもくだんのかまを取出しうちふり
 給ふと見えしかばいるかのしんの御くびは水もたま
 らずおちにけるくびもなきむくろがゐたるところを
 つんと立てかまたりををしのけめてのなをしの下よ
 りもこほりのやうなけんをぬき御座へはしりかゝつ
 て御玄とねにいだきつき切つついしくして北枕
 にぞふしにけるされ共君はかねてよりあらうみのし
 やうじのまにうちかくれさせ給へばさらにつゝがも
 ましまさずいるかうたれて其後國土もとみさかへた

みのかまどもゆたかなり

大職冠

それわがてうと申はあまつこやねのみことのあまの
いはとををしひらきてる日のひかりもろともにかす
がのみやとあらはれてこつかをまほり給ふ也されば
にやかすがをはるの日とかく事はなつの日はこくね
つす秋の日はみじかく冬の日はさむけしはるの日は
のどかにしてよくばんぶつをしやうちやうす四きに
ことさらすくれめいしつなるによりつゝはるの日と
かきたてまつりてかすがと名づけ申なりかのみやの
うちこはふちはらうちにておはします藤原のその中
にたいしよくわんと申はかまたりのしんの御事也は
じめはもんしやうせうにて御さありけるがいるかの
しんをたいらげたいしよくわんになされさせ給ふそ
もこのくわんと申は上たいにためしなしてまつた
いによりかたきめてたきくわんどなりけりこれによ

つて此きみをはふひとつとも申いともかまをもち給
へばかまたりのしんとも申なりかすがのみやにさん
ろうあつてあまたのくわんをたてさせ給ふ中にもこ
うぶくじのこんだうをさいしよに御こんりうあるべ
しとてしやうぐん七ほうをちりばめしやこんたうを
たてさせ給ふくわほうは天よりあまくだり國のなび
きゑたがふ事はふるあめのこくどをうるほふした
草葉の風になびくがごとし
きんだちあまたおはしますちやくによはくわうみや
うくわうぐうと申たてまつりてせうむてんわうのき
さきにたゝせたまふ二によにあたり給ふをこうはく
によとなづけて三こく一のびじんたりゑかるにかの
ひめぎみのゆうにやさしき御かたちたとへをとるに
ためしなしかづらのまゆはあをふしてゑんざんにに
ほふ霞にもものこびあるまなさはせきやうのきり
のまにゆみはり月の入ふせいひすいのかんざしはく
ろうしてながければやなぎのいとをはるかぜのけづ

るふせいにことならずがたは三十二さうにしなさはてんかにならびもなしかゝるゆうなる御かたちのいこくまでもきこゑのありて七みかとのそうわうたいそうくわうていはつたへきこしめされてみぬこひにあこがれ雲のうへもかきくもり月のともゝおのづからひかりをうしなひたまひけりしんかけいしやう一とうにそうし申されけるやうはぎよくたいの御ふせいよのつねならずおがみ申て候なにをかつゝませたまふべきおぼしめさるゝ事のさうばちしんの中へせんじあれとそうし申されたりければみかどゑいらんましゝてあらはづかしやつゝむにたへぬ花のかのもれても人のさとりけるかいまは何をかつゝむべきこれよりとうかいす千里日ほんならのみやこにすむたいしよくわむがをとひめを風のたよりにきくからにみぬおもかげのたちそひてわすれもやらでいかいせんしんかけいしやううけたまはつてこれは何よりもつてめでたき御しよまうにて候物かなちよ

くしをたてゝりんげんにてむかひとらせたまひゑいらんあれとのせんぎにてうんかと申つはものをちよくしにたてさせ給ふうんかすでにたいそうのきんさつを給はりす千ばんりのかいろをすぎ日ほんならのみやこにつき大しよくわんのみもとにててうさつをさゝぐたいしよくわんは御らんじてわれはこれちいきとて小こくのわうのしんかとしいかにとしていこくの大わうをさうなくむこにとるべきと一どはちよくしをぢたい有ちよくしたちもどつて此むねをそうもんすたいそういとゝあこがれ二どのちよくしをたてさせ給ふせうむくわうていきこしめしなさは上下によるべからず小こくのしんかの子なりともそのはゝかりはあるべからずまるへんでうをいたすとかたじけなくもくわうていのゐんはんをなされければちよくしめんぼくほどこしていそぎたちもどつてへんでうをさゝぐればたいそうおほきにゑいりよあり吉日えらびさうゝにむかひぶねをぞこされけ

るこんどのむかひのちよくしにはたちばなのあつそ
んにうだいしんほうけんなりそもほんてうと申は小
こくなりとは申せどもちゑ第一のくになりみれんの
いでたちかなふまじけつかうあれとのせんぎにてむ
ねとのたいせん三百そうきさきの御ふねをばれうと
うげきしうとなづけてしゆつたんをもつてかたどり
へにはあふむのかしらをまなびともにはくじやくの
おをたれたりふねのうちににしきをゑきちんたんを
まじへくわうようらんけいみがきたて玉のはたは風
になびきこがねのかはらは目にひかりぐせいふね
ともいつつべしはつひてんくわん玉をたれみをかざ
つたるによくはんじによ三百人すぐつてこれはせん
ちうの御かいしやくのためにとてかざりふねにぞの
せられたりけるじちいきよりもろこしまです千ば
んりのかいしやうの御なぐさみのそのためにおんが
のまひあるべしとてちご百人すぐつてみをかざつて
ぞのせられたりすでにふ月のすゑつかたともづなと

いておしいだすあまのかはせにあらねどもつまこし
ふねのはをあげたりかくてなみかせゑづかにてふね
はほんてうつのくにやなんばの浦につきしかばちよ
くしはならのきやうにつくたいしよくわんはうけと
つてひとつはいこくのきこへといひ又一つはほんて
うのいくわうのためとおぼしめされさんかいのちん
くわを山とつみ五千人の上下をそのとしの八月なか
ばよりあくるう月はじめまでもてなしたまふ大しよ
くわんくわほうのほどのめでたさよ卯月もやうく
すゑになりゆきければ吉日をえらびたまの御こしを
たてまつるなんばのうらへ御出ありそれよりもれう
とうげきしうにめされじゆんぶうにはをあげれば
ふねはほどなくたいたうのみやうしうのみなとにつ
かせたまふだいにきこしめされてすはやこくむの
ぎやうけいよいざ御むかひにまゐらんとてひだ
りみぎの大臣によくわんところ百くわんけいしやう
くわんにんしちやうにいたるまでのころところはな

かりけり

そもく大こくのくにのかずを申に一千四百四十くにこほりのかずを申に九萬八千よぐんでうのかずを申に一萬二千六かじいちのかずを申に一萬二千八百ちやうあんのいちと申はざいけのかずは百萬けん人のかずを申に五十九おく十萬八千人たついちなりちやうあんじやうのみなとより十のみちわかてりけんろけんなんだうとはたつみをさしてゆくみち三十五にふみわけりおくなんだうと申はひつじさるへゆくみち五十九にふみわけりさいけいだうと申はにしをさしてゆくみち二十六にふみわけりかうほくだうと申はきたをさしてゆくみちすゑはたゝふたつとうやうだうはふなちにてすゑは日ほんにつゝけりかゝるみちくよりもみつぎ物をそなへきさきをおがみたてまつるあら有がたやたゝめおがみ申人だにもひんくをのがれたちまちにふつきのいへとなるさればにやくわうていもれうがんにゑたしみなれちかづか

せたまへばしよびやうをいやしたちまちにやうじやうの大いにあへるこゝちして御持の間世すなをにたみのかまどもゆたかなり

かくてうちすぎゆくほどにきさきのみやおぼしめすわれはこれ小こくのものとなりながら大こくのきさきにそなはりたるそのこうめいを日本にのこしてこそとおぼしめし御ちゝたいしよくわんこうぶくじのこんだうおなじきしやかのれいごうを御こんりうあるべきにかの御だうのせにうにぶつぐほうぐをおくつてまつだいのゑるしともなさばやとおぼしめしそろへ給ふたからにはまづくわけんけいしゆひんせきくわけんけいと申はうちならしての其後にこゑさらになりやますとゝめんとおもふときには九でうのけさをおほふなりしゆひんせきはすゝりかのすゝりのとくゆうは水なくしてすみをすつてこゝろのまゝにつかふなりほんぼんのほけきやうをたらようにてあなんそんじやのあそばしたるしちしやうるりのみづ

がめしやくせんだんのけいだいへいるりのはなたて
せんだんのけうそくにくたんじゆのじゆす一れんく
わうこのとらのかはこんじきのゑゝのかはくわその
かは三まいかゝるたからの其中にしやくせんだんの
みそきにて五寸のしやかをつくりたてにくじきの御
しやりを御しんにつくりこめながらはう八寸のすい
しやうのたうの中におさめてむげほうじゆとなづけ
てこれを一のてうほうにしをくりふみをべつしにか
きいしのはこにをさめておくらせたまひけるとかや
此たまはすなはちこうぶくじのほんぞんしやかほと
けのみけんゑりはめ給ふべきなりとかきこそをく
り給ひけれさてしもかゝるてうほうをたれかはしゆ
ごしてをくるべききりやうの人をえらめとてつはも
のどもをめさるゝに大こくのならひにて百人が大し
やうを百ことなつけ千人が大しやうを千こといひ萬
人が大しやうを萬ことなづくかうほくだうのすゑう
んしうといふ國にまんこしやうぐんうんそうとてだ

いがう一のつはものありをとらぬほどのつはものを
三百人あひそへみやこをたつて大たうのみやうしう
のみなとより一よふのふねにさはをさしをひての風
にはをあげてす千萬里ををくりけりかいていにすみ
給ふ八大りうわうのそうわうたまの日ほんへわたる
事をじんつうにてゑろしめしもろゝのりうわうた
ちをあつめおほせられけるはわれらはすでにかいて
いのりうわうたりといへど五すい三ねつひまもなく
をつこうにもあひがたきしやくせんだんのみそきに
て五寸のしやかのれいぶつの此なみのうへに御ざあ
るをいさゝくむばひとつてわれらしやうがくなるべ
しもつともゑかるべしとて八大りうわうのなみかせ
あらくたてたまへばふねひよう口うしちさんしなみ
ちゑづかならざりきされどもきどくふしぎのほとけ
のめしたる御ふねなればじやうかいの天人はくもを
ゑのぎぶつぼうしゆごのやしやらせつはなみ風をゑ
づめさせたまへばふねにしさいはなくしてみつばの

そやをいるごとくことさらをひてとなりけりりう
わういとしいかりをなしなみかせにてといめすばお
さへてむばひとるべしさあらんときにいこくのもの
さだめてつよくふせぐべしりうわうのけんぞくに玄
かるべきものはなししゆらはたけきものなればたの
ふでみんとなたまひてあしゆらたちをぞたのまれけ
るかのしゆらの大しやうまけいしゆらもうくのけ
んぞくをひきぐしてこそいでられけれどもとよりこの
むとうじやうなれば百千にやつかんのけんぞくども
をいぎやういるいに出たゝせほこたうちやうをと
りもたせかたきはすまんぎ候ともいくさはいゑのもの
なればたまにをひてはむばいとつてまいらせんと申
て口ほんとたうとの玄ほぎかひちくらがおきにちん
をとるまんなかふねをまちゐたりこれをば玄らでま
んこじゆんぷうにほをあげこゝろにまかせふかせゆ
くに日ごろありともおぼえぬ所に玄まひとつうかべ
り見ればはたあしひるがへしくろがねのたてのあひ

よりもつるぎやほこのいなびかりたうちやうのかげ
どもがうんかのごとく見えければあれはなにといへ
る玄さいぞやいかなる事のあるべきぞとこゝろもと
なくおもはれけれどもさあらぬていにふかせゆくに
かのしゆらの大しやうまけいしゆら一ちんにすゝみ
いで天をひゝかす大をんにてたいいまこのおきにせ
きをすゑたるつはものをいかなるものとおもふらん
しゆらといへるものなりかいていの龍わうたちを見
つがんだめしいしゆをいかにとおぼすらん御ふねに
ましますしやくせんだんのみそきにて五寸のしやか
のれいぶつよのたからはほしからずそのすいしやう
の玉すみやかにわたされ候へさらずば一人もとをす
まじいと申まんこ此よしきくよりもあらことゝし
のいきほひさうや扱はをとにうけ給はるこのあしゆ
らたちにてましますよなわが大こくのならひにて百
人が大しやうを百こと名づけくわん人といふ千人が
大しやうをせんことなづけてしゆりやうといひ萬人

が大しやうを萬こと名づけしやうぐんとこれをいふなりかいぐしくはなけれども一萬人が大しやうなればまんこしやうぐんうんそうとはそれがしが事に候もつともりうぐうよりの御しよまうにゑたがひてすいしやうの玉まいらせたくは候へども七御かどのなかよりもきりやうのしんとえらまれ日ぼんのちよくしを給はるときの日よりもして命をばわがきみのおんのためにたてまつるさればめいのかろき事は此ぎによる事なればいのちのあらんかざりはたまにをゐてはとらるまじいぞげにと玉がほしくば萬こをうつてとれやとてからぐとぞわらひけるしゆらどもこのよしきくよりもさらば手なみを見せんとててつちやうらんばのつるぎをひつさげうんかのごとくせめかゝるまんこ是を見てかなふべきやうあらざればふなぞこにつゝと入てしやうぞくをぞきたりける萬こがその日のしやうぞくにじんつうゆげのうでがねさはんやかのすねあてしめうほうれんげのつな

ぬきはきにんにくじひのよろひをくさすりながにきくだしてあのくたら三みやく三ぼだいの五まいかぶとをゐくびにきゑのびのをぞゑめたりけるがうまりけんの大がたなま十もんにさすまゝに大たうれんといふつるぎあしをなかにむすんでさげけんみやうれんといふほこもつてふねのへいたにつゝたちあがる三百よ人のつはものどもおもひぐにいで立てはしふねおろしをしうかべすでにかけんとしてたりけりたうのいくさのならひにてみたんにかくる事はなしてうしをとつてがくをうつてひようしにあはせかけひくせいぞろへのたいこはらんしよくしよつてうしかけよとうつたいこはさそうぐとうつなりひけよとうつたいこはおんてうこつとうつなりくんでくびをとれとはつるてうこつとうつなりかなはぬときおのせんにはしはうてつはうけなしみだれびやうしきりびやうしきうにをよぶときにはちをばたきとながしてかうべをつかにつめよとうつしゆらだう人の

たゝかひはむかしもいまためしなしそのうへしゆ
らがたゝかひにくわゑんのあめをふらしあくふうを
ふきとばせばんじやくをふらす事はゆきのはなの
ちるごとくつるぎをとばせほこをなげどくのやをは
なす事まなごをまくがごとしみをかくさんとおもふ
ときけしの中へわけていりあらはれんとおもふとき
しゆみにもたけをくらぶべしかゝるゑんづうめいよ
をまのまへにげんじこゝをせんとたゝかへばすで
にはやたう人こゝろはたけくいさめど此いきほいに
をされてのがれがたくぞ見えにけるさるあいだまん
こはみかたのぐんびやうどもをちかづけてとてもか
なはぬ物ならばしゆらの大しやう四五人そのみく
づとなしてこそいこくのきこえもゑかるべけれわれ
とおもはん人々は供をしてたべやとてこんがうかい
のまんだらたいざうかいのまんだらりやうかいしよ
そん一千二百よそのまんだらをほろにかけてふき
そらしふなぞこよりもめいばどもそのかずあまたひ

きいだすまんこがひさうのめいばにじんつうあしげ
となづけて七き八ふんあけ六さいおがみあくまであ
つうしてをつさまむかふよこはたはりおぐちそうと
うつまねのくさりしゝあひほねなみよめのふしあふ
つくりつけたるごとくなりらんでんのくらをゝきし
よつかうのにしきのうはしきにこんぐぬつたるり
のあぶみりきしゆのちからがはをばしやうぐのち
にてそめたりけりおなじきおもがひをかけさせこが
ねのくつはがんじとかませにしきのたづなゑつてか
け萬こゆらりとうちのつてなみにゑづまぬうくつ
を四つのあしにかけたればなみのうへをはしる事は
へいろをつたふごとくなり三百よ人のつはものども
いづれもむまにのつたれどもみなくくくつかけ
たればくも井にかりのとぶやうに一むらがりにさつ
とちらししゆらがちんへきつて入しゆらどもこれを
見て一ひき二ひきのみならず三百ひきのむまどもが
いづれもなみをはしる事はふしぎなりときもをけし

かほどにいさむしゆらどもにげまなこにぞなつたりける大しやうのうしあしゆらすゝみいでゝいひけるはなふこゝざうそかねてより申せし事のちがはぬなふめたれがほのすくやかしおもてかほくせめにすみたていらんあちそひあらがふぎにはにまじき事にて候ぞやてをくだかではいかにとしてかうみやうふかくが見えばこそ一合せんせんとていでたつたりしありさまはあくこうしんゐのよろひをきむみやうけんごのかぶとのををゑめとうじやうむざんのほこつゐてゑんゐぐちのはたさゝせ百千にやつかんのけんぞくどもをあひゑたがへゑきりにときをつくればへきてんやぶれはじやうにおちかいていをうごかしなみをあげこゝろさながらどうようして月のひかりもうづもれてひこへにちやう夜となつたりけり此ほどをとにうけたまはるまんこしやうぐんうんそうにげんざむをせんといふまゝに萬こを中にとりこめたり萬こがつはものどもこゝをせんどゝきつたりけり

ごあしゆら三百人からこんらあしゆら五百人手をくだいてぞきつたりけるまんこはめいよの馬のりうみのうへにてのるたづなさうかいふとりうはいふのりうかべたるむまのあしゆんでのものをつくときあふぎやうのたづなきつとひくめてのものをつくときにふぎやうのむちをちやうどうつにぐるものををふときにはせんぎやうあをりのあぶみのむちをきよくゑんだいにのつたりけりにしからひがしへうつてをとるときには三百よ人があとに付てこゝをせんどゝきつたりけりいれかへくたゝかへばしゆらがいくさはうたれかゝつてかなふつべしとも見えざりけりそふ大しやうのまけいしゆら八めんはつびをふりたてゝ八したのほこをうちふりうちじにこゝなりとおめきさけんでかけにけりまんここれを見てかなふべきやうあらざればうしほをむすびてうすとししよ天にふかくきせいするゑかるべくはくわんせをんひぐわんたがへ給ふなふ

ぐんじんちうねびくわんをんりきしおんしつたいさ
んちかい今ならではしゆらがおそろゝけまんのはた
をたいさしかけよいやさしかけよとげむすればけま
んらんばう玉のはたをまつさきにさゝせわれをとら
じとせめかゝるまんこがつはものかつにのつてをつ
ぶせゝきつたりけりゑんりきもつきはてつうりき
ひぎやうもかなはずしてそこのみくづと成にけりい
きのこるしゆらどもすみかゝにかくれたりまんこ
かちどきつくりかけもとの舟にとりのりしゆらたう
じんのたゝかひにかちぬやゝといさみをなしたう
どかうらいはしりすぎ日ほんちかうぞ成にけるさる
あひだりうわうたちこれをばさていかゞはせんとせ
んぎせられけりその中にとつてもなんだりうわうの
たまはくそれにんげんのちゑをたばからんにはみめ
よき女によもゑかじこゝをもつてあんずるにりうに
よをもつてこの玉をたばかつて取べきなりりうわう
のをとひめにこひさいによと申てならびなきびじん

たりしをみめいつくしくかざりたてうつぼぶねにつ
くりこめなみのうへにをしあぐるこれをばゑらでま
んこじゆんぷうにほをあげこゝろにまかせてふかせ
ゆくにかいまんゝとして又はしやうちゝむたり
へきこんのおきぬく風くわうゝとして又いづれ
のほくさうにかゑやどさんかしらなしおほかはら
きどのしまもろみのしまもめいしまさつまのくにゝ
きかいがしまゆきのもとほりつしまのないことゆゑ
なくはしりすぎ九ぐくのちをはゆんで見てさぬき
のくにに聞えたるふさゝきのおきをとをりけりなが
れき一ぼんうかんでありすいしゆかんとりこれを見
て此ほどの大風にてんちくたうどのちんかうばしふ
かれてなぐるゝやらんと人々あやしめたりければ萬
こ此よしきくよりもなんのあやしめ事ぞたゝとりめ
げよとげちをなす御ぢやうにゑたがひはしふねおろ
しとりみるにちんかうにてはなしあやしやわつて見
よとて此きをわつてみるになにとことばにのべがた

きびじん一人おはしますすいしゆかんとりこれを見てをのまさかりをなげすてゝあつとばかり申萬こ此よしみるよりいかさまにも御身はてんまはじゆんのけゝむにてしやうげをなさんそのためなあやしやいかにといひけれどなにと物をばいはずしてたゞなみだぐみたるばかりなりまんこかさねていひけるはいやなにとたるませたまふともせひにつけておぼつかなしたゝかいていにゑづめみくづになせといきみをなせばあらけなきつはもの御てにすがりうみへいれんとすりうによはいとゝあこがれてあらうらめしの人のことばやのにふし山をいへとするこらうやかんのたぐひだにもなさけはありとこそきけみづからと申はけいたんこくの大わうのいつきのひめにてさふらふなるがあるきさきのざんによりうつぼぶねにつくりこめさうは萬里へながさるゝたまゝきどくふしぎにじんりんにあひたればさりとともとこそおもひしに何のつみにうきかいていにゑづむべきぞうら

めしさよとかきくどきみだれがみをつたひてなみだのつゆのこぼるゝはつらぬく王のごとくなりしもをおひたるをみなへしゑたはしほるゝふせいしせいしがやさうにすてられてひしきものにはそでしぬれほす日もなしとわびけるもいまこそおもひゑられたれかつらをかきしまゆすみはちすをふくむくちびるものこびますあひきやうなみとなみだにうちぬれ物おもふ人のふせいかやうちむつけたる御ありさまよそのみるめもいたはしやさしもかしこき萬ことは申せどもやかてたるまかされげにゝそれはさぞあるらんそれゝとうせん申せとおなじふねにのするりうわうのわざなればむかふさまにかせふきてふささきのおきに十日ばかりとうりうすさなきだにりよはくはことにもものうきにまんこあまりにたへかねて風のたよりにかよひきていねかりそめのうたゝねはなにとなるこのをとたかくよにもすいめのすみうきにおどろかさんがいたはしさにあふぎの風をいさめ

つゝ月てうさんにかくれぬればあふぎをあげてこれ
をたとへ風たいきよにやみぬればきをうごかしてこ
れををしゆあひみる人をこうるにはふみかよはねど
こうるならひきみがこゝろをとりにくるなふいかに
くゝとおどろかすりう女はもとよりねもいらすさり
ながらうたゝねいりたるふせいにてたぞやゆめみる
をりからにうつゝともなきことのはゝゆめのうきよ
のあだなれば人のことばもたのまれずよのまにかは
るあすか川みづぼのあ口のかりそめにかせにきえぬ
ることのはの末もとをらぬものゆゑにあだなちて
はなにかせんなくゝ人にははじめよりとはれぬは
うらみあらばこそそのうへわれはうまれてより此か
たかいもんをあやまたずむかしよりいまにいたるま
でおほくのしやうをうけし事あるひは六よく四しや
うにうまれ五すい八くのくをうけあるひは三づしや
くににおちしだいもつのひにあへりかゝるざいごうを
ふりいま人げんとうまるゝ事もかいりきによつてな

り第一せつしやうかいをたもつてはしんのざうとな
るちうたうかいをたもつてかんのざうとなるじやい
んかいをたもつてひのざうとなるまうごかいをたも
つてはいのざうとなるおんじゆかいをたもつてはじ
んのざうとこれなるこれに五いんしつせいありいは
ゆるきうしやうかくちうそうわうひやうばんいちこ
つこれ又みめうの御のりとしごちのおんせいこれ也
これに五つのたましゐんこんしづくいしむなりき此五
つのかたちをぐそくするをほとけと申五のかたちか
けぬればぐちあんへいのちくるいたりいかにも佛を
ねがはんずる人はまづ五かいをよくだもつべしひと
つもかいをやぶりなばむそくだそくのものとなつて
ながく佛になるまじおほせはをもくさふらへど第三
のかいもんをいかにとしてやぶらんとなみだぐみた
るばかりにておもひ入てぞおはしけるまんこもたい
たうそだちぶつぼうるふのくになればあらゝかた
り申あらしゆせうやさてはごしやうの御ためにきん

かいをたもたせたまふかそのかいもんのなかに六は
らみつのぎやうありその中にとつてもにんにくはら
みつとは人のこゝろをやぶらずいかに五かいをたも
つても人のこゝろをやぶりなば佛とさらになりがた
しさればにやほとけには三みやう六つうおはします
是はひとへにくわこにしてしよはらみつをぎやうせ
しくどくいまにあらはれてほとけとなり給へりたと
ひ一どはたきのみづにござりてすまぬものなりとつゐ
にはすみてきよからんこひには人のまなぬかさても
むなくこひしなば一ねん五百しやうけんねんむり
やうごうしやうくせゝのあいだにつきせぬうらみ
のふかうしてともにじやしんとなるならばほとけと
はならずしてじやだうになかくおつべしかいのしな
あまたあり五かいをよくたもつては人げんとうまれ
て五たいをうくるなり十かいをたもつては天にんと
うまれて五すいをうくるなり二百五十かいは又しや
うもんとうまれてほとけにはなりがたし五百かいは

たもつてはゑんかくとこれなるこれもほとけにゑな
らずぼさつさんしゆ一しんかい此かいをたもつてや
がてぼさつとなりつゝほとけとさらに成がたし大せ
うゑんどんかいこのかいをたもつてはやがてほとけ
になるなり大せうのかいぎやうは二ねんをつかぬか
いなりしんたいはむさうにてかしんもとよりじくう
なりしやうじにもつながらねはんにとさらにぢうせ
すじやしやうすなはちきよければすゝべきあかも
なしいとふべきぼんなうなしねがひてきたるほとけ
なしみる一ねんをほうとしきく事をみのりとすこゝ
を煮らぬをまよひとすゑんやうふたつわがうのみち
いもせふうふのながらへこれぶつぼうのみなもとお
ろかにおもふべからずおんなびきあれやとぞおもふ
いかにくゝと申けるりうによはきこしめされてそれ
はほつしんのみのりとしぶつぼうにをゐてはひさう
のところなれどもねがふ事なくしては佛とさらにな
りがたし上だいはきもじやうこんにしてちゑも大ち

ゑなるべしまつせのいまは下こんにてちゑある人も
すくなしむかし上だいの大ちゑの人だにもいゑをい
でさいしをすてほうのためになんぎやうすしちた太
子はかうゑなるばんせうのくらゐをふりすてわりな
くちぎりふかゝりきやしゆたらによをよそに見十九
にてしゆつけをとげだんどくせんのはうれいあらゝ
せん人をしとたのみわしのみやまのれいほうにたき
きをこりみをこがしせんこくにむすぶあかのみづこ
ほりのひまをくむたびになんだはそでのつらゝとな
るよるは又夜もすがらせんにんのゆかのうへにしぎ
せんのとこのふとんとなりかゝるまんのこうをつ
みまさしくしやかとなりたまひ三がいのどくぞんし
しやうのゑことましゝて一大しやうけうをとときひ
ろめ給ふなりこゝをもつてあんするにぼんやうそく
ぼだいしんしやうじそくねはんとてさいしをたいし
さふらひてほとけとやすくなるならばなどやたいし
しやくそんはわうのくらゐをふりすてゝきさきをい

とひ給ひけんそのほかしやうぐわのらかんたちいづ
れかさいしをたいして佛となりし人やあるさてもほ
とけの御をとゝなんだたいしと申せしはしつけぼん
なうつきすしてによ人をこのみ給ひしをかくてはほ
とけにならじとて佛はうへんめぐらしてじやうどち
こくのありさまをそくしんに見せたてまつりつゐに
しゆつけとげさせてなんだびくとぞなし給ふいとゝ
このじやぎやうをよしとをしへたまふはまうもくに
あしきみちをしゆるふせいなるべしかやうに申せば
とてもとより我は佛にてあるなりこくう一しやうと
う一體かしらはやくしみゝはなはあみだむねはみろ
くはらはしやかこしは大日如來也そのほか十はうの
しよ佛たちもろゝのぼさつとしわがたいにぐそく
して十ばうのこくうにほうによとしておはしますき
たりもせずさりもせずいつもたへせずしますをほ
つしん佛と申形を作りあらはし淨土をたてゝ住家と
し給ふをほうしんふつと申なり八相成道したまひて

法をときすなはち衆生をりやくしたまふを應身佛と申也三身をとりわき一しんをえんするはさとのまへの佛なり三じむ一そくとくわんじいづれをも信ずるをさとりのまへと申佛とならんそのためなんぎやうくぎやうせんものいかで善惡みだるべき身はいたづらになさるゝとかなふましとそおほせける

まんこ此よしきくよりもことのほかにはらをたていかにやくきこしめせほとけをねがふ人はみなたうとちゑとじひしん一つかけてもなりがたしたうといつばきやうたいちゑといつばさとのしんじひといつば一さいのしゆじやうをふかくあはれみて人のころにゑたがへり第一じひのかけてはほとけとさらに成がたじあふしよせんものを申せはこそことはもおほくつくれいまは物を申ましかくてこゝにひれふしおもひじになつて此よのちぎりこそあさくともぢごくがきちくしやうしゆらにんてんにうまれかはりしにかはり六だう四しやうのその中をくるりく

とをひめぐつてうさもつらさもののちのよにおもひゑらせ申さんとそのゝちはものをいはすりうによはもとよりかやうにめされんためたばかりすまさせたまひ玉をのべたる御てにてまんこがたもとをひかへさせ給ひなふいたふなうらみたまひそよまことにころざしのましまさばみづからがしよまうをかなへてたべくさのまくらのうたゝねのつゆのなさけはゆめばかりちぎりなんまんこあまりのうれしさにかつばとおきてみをいだきなふこはまことにて御さ候かふたつとなきいのちをもまいらせんと申りうによはきこしめされていやそれまでもさふらはすげにやらんうけ給はればしやくせんだんのみそきにて五寸のしやかのれいぶつのましますよしをこのふなうちにてうけたまはるそのすいしやうの玉みづからに一夜あづけさせ給へともかくもおほせにゑたがふべしといふまんこ此よしきくよりもあらしやうたいなやじよのしよまうとこそおもひしに此すいしやうのたまに

おゐては中／＼おもひもよらぬ事なりとふつとおもひきりけるがいや／＼なにはどの事のあるべきぞとおもひなをしさても／＼御みは何として御ぞんじ候ひけるぞやさしくも御しまう候ものかなさらばそつとおがませ申さんとてくろがねじやうをさしゐんばんをもつてふうじたるいしのからうとの中よりもすいしやうの玉をとりいだしりうによのかたへわたすけいせいとかいてはみやこかたぶくとよまれしも今こそおもひえられたれかくてしうあひれんぼのわりなきちぎりとみえつるが三日もすぎざるにかきけすやうにうせぬたまはと人に見せければとりてうせぬと申たゞばうせんとあきればてこくうにてをこそたんだくすれあらくちおしやりうぐうのみやこよりたばかりけるををらずしてとられけることのむねんさよさりながらとかふ申におよばずとのこるたからをさきとしていそぎみやこにのぼりさま／＼のほうぶつをとりいだしてたいしよくわんにまいらせあ

ぐる太しよくわんは御らんじてをくりぶみの其中に第一のたからものすいしやうのたまの見えぬはいかにとたづねとひたまふつゝむべきにてあらざればありのまゝに申あぐるかまたりきこしめされてあまりおもへばむねんなるにせめてわれをぐそくしそのうらのありさまを見せよとおはせければうけ給はると申てもとりのふねにのせ申ふさ／＼きのおきへをしいだしてこゝなりと申たゞばう／＼としたるなみのうへを御らんじてむなしくもどり給ふみちすがらおぼしめすさもあれむねんなるものかな三ごく一のてうほうをわがてうのたからとはなさずしていたづらにりうぐうのたからとなしけんくちおしさよ／＼物をあんするにりうぐうかいは六だうにおゐてもちくしやうだうのうち人げんのちゑにははるかにをとるべきものをさあらんときはなにとしてたばかられけんふしぎさよ我又せんげうほうべんしいかにもあをめぐらしこの玉におゐてはとらふずものとおぼ

しめしみやこにかへり給ひててうせきあんをめぐらし玉をとるべきはかりごとくふうまし／＼けれどもさすがにかいちうへだゝつてたしうゑんたうならざればふねのかよひぢあらばこそゑかりとは申せどもしんそくにおゐてをやたいせ太しはかたじけなくもによいの玉をとらんとてゑんしのかひをもつてちよつかいをはかりつくしつゝつぬにはうじゆゑたまへり大ぐはんとしては又つぬにむなしきことあらじわれもちかひてねがはくはしやう／＼せいのあひだに此玉ををめてはとらふずものとおぼしめしみやこのうちをゑのび出かたちをやつし給ひ又ふさゝきへくだらるゝかのうらにつきたまひうらのけしきを見たまふにあまどもおほくあつまりてかづきする事おびたしくかのあまのなかにとしのよはひはたちばかりに見えみめかたちじんじやうなるが流すいにもつれてあそぶ事たいへいろをつたふごとくなりかまたり見こめたまひてかのあまのとまやにやどをかり日か

ずををくらせたまひけるにあまにもいまだつまもなしかまたりたびのひとりねのこともさびしき事ながらこゝにてひをやかさねけん根かたけれどもひめまつのはやうら風にうちなびきなにはもつらきうらながらそよよしあしといひかたりてふたりあればぞなぐさみぬうきねのこのかちまくらなみのよるにもなりぬればともゝなぎさのさよちどりふきゑほりたるうら風にこゑをくらぶるなみのそとすぎきのまつにさぎあればこすゑをなみのこゆるににてゑはやのけふり一むすびすゑはかすみにきえにはひゆめちにたるうたかたのなみのこしふねかすかにてからろのをとのとをければはなになくねのかりがねわれもみやこのこいしさにこゑをくらべてなくばかりうきみながらもまきの戸をあけぬくれぬとすぎゆけば三とせになるはほどもなしかくてなんによのなからへわりなき中のちぎりにやわかぎみいできたまふいはたがひに何事もうちとけたりしいろ見えたりかま

たり見こめ給ひていまはなにをかつゝむべきわれこそみやこにかくれもなき太しよくわんとはわが事なりこゝろにふかきのぞみのありて此ほどこれにありつるぞ玄かるべくはみづからがしよまうをかなへてたびてんやあま人うけ給はりなふこはまことにて御ざさふらふかあらはづかしや四かいに御名かくれもなきかゝるき人に玄たしみ申ける事よひとつはみやうがつきぬべし又ははくちよげせんにてはだへはなみのあらいそたちゐはいそのながれきこゑはあらいそにくだくるうつせなみのをとかみはやしほにひきみだすつくものごとくなるみにてみやこのくものうへ人にをきふしひとつとこにしてまみえぬることはずかしけれ玄かじたゞみをなげて玄なんとこそはくどきけれかまたりきこしめされてとても玄せんいのちをわがためにあたへりうぐうかいへわけいつてたづぬる玉のあり所を見てかへれとの御ちやうなりあま人うけたまはつてりうぐうかいとやらんはありと

はきゝていまだ見ずゆきてかへらん事かたかるべしたとひいかなるおほせなりともいかでかをむき申べきとかまたりにいとまをこひ一よふのふねにさほをさしおきをさしてこぎいでなみまをわけてつつといり一日にもあがらず二日にもあがらず三日四日もはやすぎて七日にこそなりにけれかまたりおほせけるやうはあらむざむやかのものはうをのゑじきともなりけるかあやしやいかにおぼつかなしとこゝろをつくさせ給ふところによみがへりたるふせひにてもとのふねにぞあがりけるいかにとはせ給へば玄ばしは物を申さずやゝあつて申けるはなふこのどよりりうぐうかいへゆくみちは事もなゝめの事ならずひとつのかしらをさきとしてくらきところをまぼつてちいろのそこへわけいるにうしほのるすいつきぬればくれなゐのいろのみづぞあるなをしそこへわけ入にこがねのはまぢにおちつく五しきのれんげをひふしあをきくちなうおほくしてれんげのこしをまとへり

なをしきを見わたすにれいかきよくながれみづの色は五しきにてさうがんだかくそばだてりかわにひとつのはし有七ほうをちりばめ玉のはたほこたてならべかせにまかせてへうようすかのはしをわたるにあしすさまじくきもきえゆめうつゝともわきまへすなをしきを見わたすにろうもんこゝにさしはさみたまのまくさはかすみのうちこがねのかはらは日にひかりさうてんまでもかゝやり三むうのくわいらうに四むうのもんをたてたり一つの太りおはしますりうぐう城これなりけりへいるりのはしらをたてめなうのゆきげたにはりのかべを入にけり四しゆのまんとしゆのやうらく玉のすだれをかけならべちやうにもあやをかけつゝとこににしきのゑとねをゑきちんたんをまじへなをらんけいを見がきたつかゝるめでたきさうたくなしやかつらりうわうはじめとしわしきつりう王にいたるまでほう口をかざりさせらるゝもろくのせうりうどくりうこがねのよろひ

かぶとをきて四つのもんをまばれりさてもたづぬる玉をばちにでんをつくつてたからのをはたをたてならべかうをもりはなをつみ二六じちうにぶんをおきいねうかつがう中くゝに申にをよばざりけり八人のりうわうじゝこくくゝにしゆぐすれば此玉をとらん事こんじやうにてはかなふまじましてみらいでとりがたしおぼしめしきり給へわがきみとこそ申けれかまたりきこしめされてさては玉のありどころをたしかに見をきつるものかなあるとだにもおもひなばとりゑん事はけつちやうなりりうどももはかりごとをめぐらしたばかつてとりたればわれもたくみをめぐらしたばかつてとるべきなりそれりうじんと申は五すい三ねつひまもなくくるしみおほき御身なり此くるしみをまぬかる事はゑらべのをとにもゑかじこゝをもつてあんずるにりうわうをたばかるならばまいとくわげんにてたばかるべしこのうみのおもてにごくらくじやうどをまなび玉のはたほこ百ながれた

てならべさて又かくやをさうにかざつて左右のげんくわんをゑらべすましそのみぎりにみめよきちごをそろへおんがくをそうするほどならばたい天にんにたるべしさあらんときに大そうじやうからりんをうちならししやうてん下かいのりうしんをおどろかしくわんじやうするならばすゝめによつてかみほとけのぞみらいりんましまさばりうぐうのみやこより八大りうわうをさきとしてそこはこのけんぞくどもをひきぐしていであるべしそのあひだはりうぐうかいにりう一人もあるまじきぞるすのまをうかいつてそろりと入てぬすみとつてやあたへかしとぞおほせけるあま人うけ給はりあらゆゝしのきみの御たくみやさふらふかゝるせんげうなくしてはいかでかたやすくとりゑなんたいしるすのまなりとも玉のけいごはあるべしたとひむなしくなるともたまにおゐては去さいなくとりあげきみにまいらすべきがもしもむなしくなるならばまたたゝちうのみどりごのちぶ

さをはなるゝ事もなしきみならではのちの世をあはれむ人のあるべきかとてなくよりほかの事はなしかまたりきこしめされてこゝろやすくおもへもしもむなしくなるならばけうやうのそのためにならのみやこに大がらんをこんりうすべし又此わかににおいてはいまだようちなりといふともみやこへぐそくし天かの御めにかけふさゝきの大臣とがうしふちはらのとおりやうたるべきよしをこまぐゝとのたまへばあま人うけ給はつてよろこぶ事はかぎりなしやがてみやこへししやをたてまひぬしをめしくだしあたりのうらのふねをよせしゆたんをもつていろとれるぶたいをこそはりたてけれ十ちやうのはたほこ百ながれ立ならべかせにまかせてひるがへせばさうかいはやがてじやうどゝなるひだりみぎのがくやにかざりたてたる大だいこまんまくをあげさせしゆれんに玉のすだれをかけほうぎをさうにかざつてうげんちとくの大そうじやうからりんをうちならし上てん下かい

の龍じんをおどろかしやうすれば八大りう王しゆ
らいしてせんぎまぢくなりけりなんせんぶしうふ
さゝきのうらにしてほうぎをかざりちうしやうある
いざやらいりんやうがうなつてちやうもんせんとせ
んぎしてそこばこのけんぞくどもをひきぐしてこそ
出られければにりうじん出たまへばこく中のちご
たちみをかざりまうけこゝをせんどゝまひ給ふたゝ
天にんのごとくなりさるほどにりうじん五すい三ね
つたちまぢまぬがれ給ひけるあいだに事もうちわ
すれまひにみとれたまひてふさゝきに日をぞをくら
るるすはやひまこそよけれとてあまもいでたちをぞ
かまへける五しきのあやをもつてみをまとひやくわ
うの玉をひたいにあてかねよきかたなわきばさみぬ
のづなのはしをこしにつけなみまをわけてつつと入
たとひなんしのみなりとも一人うみにいらん事どく
のうをりうかめ大じやのおそれもあるべきに申さん
やおんなの身とあつて一人うみへいる事はたぐひす

くなきこゝろかなす千ばんりのかいろをすぎりうぐ
うのみやこにつくやくわうの玉にてらされてくらき
ところはなかりけりことさら見をきたりしことなれ
ばまよふべきにてさふらはずりうぐうのほうでんに
あがめをくすいしやうの玉おもひのまゝにぬすみと
つてこしにつけたるやくそくの布づなをひけばせん
ちうの人くゝあはややくそくこゝなりとてゝにつな
をくりあぐるあまもいさみてかつげばうへよりいと
ゝひきにけりいまはかうと見えしところに玉をまも
れるせうりう此よしを見つけあとをもとめてをふ事
はみつばのそやをいるごとくせんちうの人々あはや
ほのかにみゆるはくりあげよとげちするにあまのあ
とにつゐてひとつの大しやをふてくるたけは十ちや
うばかりにてひれにつるぎをはさみたてまなこはた
いせきじつのみつにうつろふごとくなりくれなるの
ごとくなるしたのさきをふりたてすきまなくをつか
くるあまかなはじとおもひけるあひだかたなをぬい

てふせぎけりせんちうの人々このよしを御らんじて
をあがきみをいだきおつつふひつころんつあはや
／＼とおほせけるかまたり御らんじぎよけんをぬき
ようちのとききつねのあたへたる一つのかまにとり
そへとんでいらんとし給ふを船中の人々ゆんでめて
にすがつてこはいかにとてとめけりすではやこ
のつなのこりすくなく見えしとき大じやはしりかゝ
つてなされなくもかのあまの二つのあしをちぎれば
みづのあはときえにけるむなしきゑがいをはきあげ
しよ人のなかにこれをゝき一どにわつとさけぶかま
たり御らんじて玉はとりゑぬものゆゑに二世のきゑ
んはつきはてぬむねのあひだにきすあり大じやのさ
けるのみならずとあやしめ御らん有ければ此きすの
中よりもすいしやうの玉いでさせ給ふさては大じや
のをつかけしときかたなをふると見えしはふせがん
ためになくしたまをかくさんそのためにわがみをが
いしけるかとよせめて此きすをわがみすごしおひた

らばかほどに物はおもふまじきをおんなははかなき
ありさまかなおつとのめいをそむかじとていのちを
すつるはかなさよともしびにきゆるよるのむしはつ
まゆゑそのみをこがすなりふゑによる秋のゑかはは
かなきちぎりにいのちをうしなふそれはみな、／＼し
うあひれんばのわりなきちぎりとはいひながらかゝ
るあはれはまれなるべしわれには二世のきゑんなれ
ば又こん世にもあひ見なんちはいまこそかぎり
なれわかれのすがたをよく見よとていとけなきわか
ぎみをゑがいにをしをへたりければしゝたるおやと
ゑらぬこの此ほどはゝにはなれつゝたまにあふたる
うれしさよむなしきちぶさをふくみつゝはゝのむね
をたゝくを見て上下ばんみんをしなべてみななみだ
をぞながしけるあまはむなしくなりたれどかしこき
せんげうはうべんによりりうぐうかいへむばはれし
むげほうじゆをことゆゑなくむばひかへしたまふこ
とありがたしともなか／＼に申におよばざりけり此

たまはすなはちおくりぶみにまかせこうぶくじのほ
んぞんしやかはとけのみけんにゑりはめたまひける
とかやしやうじんのれいざうしやくせんだんのみそ
きにて五寸のしやかをつくりにくじきの御しやりを
御しんにつくりこめながら方八寸のすいしやうのた
うの中にをさめむげほうじゆとなづけ三こく一のて
うほうりうわうをしみ給ひしことはりところきこえ
けれ

ゆりわか大臣

抑むかし我てうに嵯峨の帝の御とき左大臣きんみつと申てならびなき臣下一人おはしますゑかれ共きんみつに御代をつぐべき御子なしかくてはいかゝ有べきと大和の國初瀬のてらにまふでしてひぐわんつきせぬ觀音のりしやうをあふぎ三十三度のあゆみをはこび申子をこそゑたまひけれ今にはじめぬくわんおんのねがひのゑほもはやみちてほどなく御子をまうけ給ふゑかも男子にて御座ある夏のなかばのわかなればはなにもよそへてそだてよとてゆりわかどのと名付申いつきかしづきたまひけり七歳にて御はかまめし十三にてうゐかふりめし四位の少將殿と申奉る十七にては程なくうだいじんにならせ給ふ御わらは名によそへてゆりわかだいじんと名付申三條みぶの大納言あきときのきやうのひめぎみをむかへとらせ

給ひならびなうこそかしづきけれそもわがてうと申は國とこよりもはじめてさていざなぎといざなみは彼國にあまくだりふたはしらの神と成て第一に目をうみ給ふ伊勢の神明にて御座あるそのつぎに月をうむ高野のにうのみやうじん月よみのみここれなりそのつぎにうみをうむつの國に御たちあるひるこの宮ゑびす三郎殿にておはしますそのつぎに神をうむ出雲の國そさのおはおほやしろにておはしますそのほかまつしやのふるいとうはみな此かみのそうしやたりかみのほんちを佛とはよくもゑらざることばかなこんぼんちのかみこそ佛とならせ給ひつゝ衆生をけどし給ふなれ其はともあらばあれそも我てうと申はよつかいよりもまさしくまわうの國となるべきをゑんみづからひらき佛法ごちの國となす大まわうたけ自在てんにこしをかけ種々のはうべんめぐらしていかにもして我てうをまわうの國となさんとたくむによりて則天下にふしぎおほかりき此度のふしぎに

はむこくのむくりがほうきして四萬ぞうのふねども
におほくのむくりとりのりりやうさうとくわすいと
ぶくもとははるくもかれ四人が大將にてつくしのは
かたにふねをよせせめ入とこそ聞えけれ

國に有あふゆみとりふせぎたゝかひけれどもかれら
がはなつどくの矢はふる春雨のごとくにて四方でつ
ぱうはなちかけ天地をうごかしせめいればかなふべ
きやうあらずしてみな中國さしてひきゑりぞくそも
我てうと申は國はぞくさんへんどにてちいさしと申
せ共ぞんだいよりもつたはれる三のたからこれあり
一つにはしんじとて大ろくてんのまわうのをしての
判是あり二つにはないしどころとてあまてるかみの
みかいみなり三つにはつるぎほうけんとしていつも
くにひがみのやまの大じやのおよりもとりしれいけ
んなり是みな天下のてうほうにて代々の御よに異國
よりきういおこつてあざむけ共神國たるによりつゝ
ばうこくとなす事もなし今もあまてるを御神のいす

ず川のすゑつきす伊勢へほうへい奉らないしどころ
の御たくせんによりつゝ討手をつかはすべしとてし
よしやのほうへいりんじの御神樂參らせ給ひけり其
中にとつてもないしどころの御たくせんはかたじけ
なうぞきこえける七つにならせ給ひしをとぬがそで
にたくしてすいふり立てゑんたくあるむくりがむか
ふ日よりして天下のかんたちたかまがはらにしゆゑ
していくさひやうぢやうとりゝ也ぞかりとせは申
せ共むくりが大將りやうさうがしよてうにはなつど
くの矢がすみよしのめされたる神馬のあしにたち此
きすいやさんそのためにかみのいくさをのべられた
りこれによつてきういどもちからを得たりとせめい
るなりされどもかれらがふるまひは風ふかぬまのは
な成べしいそぎこのたびばんぶのいくさはやめよ
かみもむかはせ給ふべし凡夫のいくさの大將には左
大臣がちやくなむにゆり大臣をむくべきなり彼人討
手にむくならばしよじんかうりよくましゝてこん

がうのちからをそゆべきなりもしさも有て下向せば
くろがねのゆみ矢をもつべきなりをそくて此事あし
かりなんいそげくゝとゑんたく有てかみはあがらせ
たまひけり御ちゝさだいじんは御子のゆりだいじん
若脱スルカ
をめして下かうせよとの御ぢやうなりゑんたくと申
りんげん又はぶめい成ければ吉日をえらびみやこい
でと風聞す扱去むたくにまかせてかねの弓矢をもつ
べしとてかちの上手をめしよせ一所をきよめかちや
とさだめせいゝをつくしてつくり立る弓のながさ
は八尺五寸まはりは六寸二ふん矢つかは三尺六寸矢
かすは三百六十三ねには八つめのかぶらを入弓矢
もくろがねにて引てはかへすべからずと人魚のあぶ
らをさし給ふ國にありあふゆみとりみなたうせん
のつはものにて一騎も残るところはなしすでにえらぶ
吉日はこうにん七年かのへさる二月八日にみやこを
たつだいじんのゝ御せいはいは三十萬騎とあるさるゝ
そのほか以下のぐんびやうは百萬餘騎とぞ聞えける

みやこを立て其日はやはたの御まへに陣をとりあく
ればつの國なにはがたこや野にちんをとり給ふ去程
にわうじやうのちんじゆをはじめ奉りいくわんをぬ
ぎかへよろひをめしせいれいみさいの色のうへには
やしやらしんのかたちをげんじ雲にのりかすみにの
り一つは國家をまぼらんため又は氏子をしゆごせん
爲我氏子わがうち子かたちにかげのそふごとくさき
に立てぞまぼらるゝさてかみたちのきによりてうみ
かせすゝしく吹ければつくしにちんどもむくり共こ
のよしを承て今度はまづゝひけやとて四萬ぞうに
とり乗てむくり國へぞひきにけるさてこそ天下もお
だやかに國も目出度おはしけれだいじむどのはこの
よしをうもん申されたりければ内よりのせんじには
だいじんがこのたびのけしやうにはつくしの國司を
とらするぞ急てまかりくだれとのせんじあり大臣殿
は九國にすまむものうさにぢたい申されけれどもく
にのまぼりの爲なれば在國せではかなふまじとかさ

ねてちよくしたちければちからをよばず御臺所をひきぐしていそぎつくしにくだり豊後のこうに京をたてさながら都にをとらずすませ給ふ又みやこにはくぎやうせんぎまぢくたりむくりが大將は四人ときこふるをせめて一人討取てこそいくさにかちたるゑるしはあるべけれきういは二さうのものなれば何とか思ふて引つらんころのうちもさとりがたし先かうらいこくへうちこえ七百六十六國をせめゑたがへ其大勢をそつしはくさいこくをせめなびけ其後むこくをせめん事何の子細の有べきとせんぎしてつくしへせいをぞこされける大臣殿も吉日をえらび御いでとこそ聞えけれゑんぎうの大船百よそうえだふねは數えらずそのほかうらうのれうせんかたせふね^{たかせの誤カ}そうじてふなかなすは八萬ぞうむくりは四萬ぞうにてむかひけるに一ばいましてぞむかはれける扱大臣殿の御座船をばにしきをもつてかざりたてともへにいはふかみく六十餘州のれい神たちるがき鳥ゑさかき

は雲に光りをまじへつゝはうくわたいこをそうすれば身のけもよだつばかりなり卯月半に大臣ははや御座船にめされけり御臺なごりをおしみておなじ船にとのたまへども思ひよらずとの給ひてをしこそいめたまひけれさてふねどのものともへには五色のへいをはきたてゝ神かせすいしくふきければまゑんまかひもおそるべしむかしのたとへをひくときは神宮^{功ノ誤}くわうぐうのゑんらをせめさせ給ひし時神あつめてむかはれしもかくやとおもひゑられりむこくにちんとるむくりどもてんのいろをきつとみて二さう神通のものなれば討手のむくとさとりをなしちかふよせてはかなふまじゑほさかひへうついでふせいでみんとせんぎして四萬ぞうのふねどもにおほくのむくり取乗唐と日本のゑほさかひちくらがおきにちんをとる大臣殿の御座ふねをもちくらがおきへをし出すかれもをそれてちかづかずたがひにをそれてよりもせで五十よちやうをへだてつゝ三とせ

の春をぞをくられけるむくりが大將りやうさう一陣にすゝみいで天をひゝかす大音にてわれらがいくさの手立にはきりをふらすならひ有きりふらせよとげちすれば承ると申てきりんこくの大將ふねのへいたにつゝたちあがつてあをきいきをつくいかなるじゆつをかかまへけんきりと成てぞふりにけるはじめはうすくふりけるが次第くにあつく成て月とも日とも見えわかすこくうぢやう夜のごとくにて一日二日にてはれもせで百日百夜ぞふりにけるさしもにたけきゆみとりもきりのまよひにわろびれてゆみのもとすゑをだにもゑらざればひくべきやうこそなかりけれこのきりばかりにおかされてさうはのみくづとならん事うかりなんとぞなげける大臣殿はむねん至極におぼしめしいまならではいつのときかみのちからをあふぐべきとおぼしめされけるあひだうしほをむすび手水とし南無天照皇太神宮そのほか六十餘州の大小の神祇此きりはらしてたび給へときせいを

申させたまひければあらありがたやきせいのゑるしはや見えて伊勢の國おきふくあらしにきりもほどなくすみよしのまつふくかせもすゝしくてまよひのみも白山のゆきよりはやくきえければいつしかかしまかんどりもよろこびのほをぞあげにける大臣殿はなゝめならず御よろこび有てさらばいくさはやめんとてはしふねおろさせ給ひ熊大せいはいむやく思ふ子細のあるぞとて十八人を引ぐしてむくりが船へぞかゝられけるりやうさうくわすいこれをみてたらうがをのといさみつゝほこをとばせつるぎをなげ四はうてつはうはなちかけ天地をうごかしせめけれども大臣ちつとも御さはぎなくむくりが船へぞかゝられけるふねのへさきにつかせたるくろがねのたてのおもてにははむにやしんぎやうくわんおんぎやうこんでいにてかゝれたるそんせうだらにの中よりもしややしややひしややといふもじが三とくふしぎの矢さきと成てむくりがまなこを射つふいたりふどう

のしんごんにかんまん二つの文字がつるぎと成てと
びかゝりおほくのむくりが首をきる觀音經のめいも
んにおふるきうなんといふもじが金のたてと成てむ
くりが矢さをふせげはみかた一騎も手もおはすさ
てこそ諸人ちからを得ちんこのかつせん手をくだく
大臣殿は御らんじていつのれうぞとおほせ有てくろ
がねのゆみのつるをとすればくものうへ迄ひいきあ
り三百六十三すぢの矢を残りすくなくあそばせばり
やうさうはうたれぬくわすいはらきりぬとぶくもと
はしる雲かれら二人はいけどられぬそのほか以下の
むくりどもあるひはうたれはらを切てうみへ入て死
するもあり四萬ぞうにとり乗たるむくり多くうた
れてわづか一萬ぞうになるさのみはつみになるべし
とて起請を書せたすけをき本地へもどさせ給ひて日
本はいくさにかちぬとて八萬ぞうのふなうちよろ
こびあふ事かぎりなし大臣殿は此まゝ御歸朝有なら
ばめでたかるべき事どもをこのあひだのながちに

せいきをつくさせ給ひめのとのべつぶつをめしてお
ほせけるはいづくにか島やあるあがりて身をやすめ
んとの御誕なりべつぶ兄弟承てはし船おろしたづぬ
るになみまにひとつの小島有げんかいがしまこれな
りみかたのふねをばえのびやかにあげ參らせ御しき
がはをのべいはのかどをまくらにせさせ申すいめん
ならせ給ふだいちからのくせやらんね入てさうなく
おきさせたまはず夜日三日ぞまどろみ給ふ
さる間べつぶ兄弟はとせんさの餘りにものがたりを
ぞはじめけるをとうとのべつぶのしんが申けるはあ
らめでたやこの君先度はつくし九箇國をたまはらせ
たまひうへみぬわしと御座ありしが剩このたびは
おほくのむくりをせめほろぼし給へば日本國をたの
さまたげなくたまはらせ給はん事のめでたさよ人の
くわほうをねがはひみな此君のやうにと申兄のべつ
ぶが是を聞さればこそよその事よきみはさやうに
とみ給はゝわれら兄弟はもとのまゝにてくちはてむ

事こそ口惜けれいざこの君をうち申しうなくして御
あとを知行せんと申をとうとが是をきゝあらもつた
いな御たくみや候此きみの御おんをあめやまにか
ふぶり人と成し我等ぞかしいにしへの御おんをわす
れ申われらが手^てにかけ申ならば天命いかでのがるべ
き御^まあん有べく候べつ^ぶ此よしきくよりも扱はな
んちはきみと一たいよなつゐにこの事もれ聞えなば
われ一人か^とがたるべしよそにかたきはなきぞとよ
わどのとあふて死なんとてかたなのつかに手をかけ
てとんでかゝらむとすをとうとがこれをみてげにと
さやうに思召給はいたとへば手^てにかけころし申さず
ともいきながら此島にすてをき申て歸るならばとこ
ろはわづかのこじまにて十日ばかりも御いのちの何
にながらへ給ふべきあにのべつぶが是をきゝこはあ
もしろくも申されたるものかなさらばさやうに仕ら
んとていたはしやきみをばげんかいがしまにすてを
き申もとのふねにあらがみかたのぐんびやう共を近

付て申けるはいたはしや君はむくりが大しやうりや
うさうがはなつ矢を御きせながのひきあはせにうけ
とめさせ給ひて候をうす手にて御座有しをさりと
さりともしたのみをかけし^しゑるしもなくつゐにむな
しくならせたまひて候御^まがいをもくがにあげ御臺
所の御目^めにかけたくは存候へども諸神をいはひたる
御座船にて有あひだいたはしながら海底に^まづめ申
て候さて有べきにてあらざればふね出せよとげちす
ればみかたのぐんびやう共はひとへにゆめの心ちし
て我をと召しとをしいだす一そ二そうのふねな
らずそうじて船數は八萬そう一度にほをあげ梶をと
れば天地もひくばかりなりこのころどもに大臣は
夢うちさませ給ひてたれかあるとめさるれど御返
事申ものはなしこはいかにとおぼしめしかつばとお
きさせ給ひてあたりを御覽ありければひと一人もな
かりけりめしたる船を見給へばほをあげてこそをし
いだせさてはべつぶがこゝろがはりを仕るかたとへ

ばべつぶこそそこゝろがはりをするとなどや以下の
ぐんびやうら我をばつれてゆかぬぞやあのふねこち
へとのたまへどもみなふねどものをとにかくきゝつ
け申者もなしせめて思ひのあまりにやかいしやうに
飛びたつていきをばかりにをよがせ給へど船はうき
木の物なればかせにまかせてはやかかりけりちからを
よばず大臣はうかりし島に又もどりそなたばかりを
見をくりてあきれてたゝせ給ひけりさうりそくりが
いにしへかいがんはたうにすてられしもこれに似た
りと申せどもせめて其はふたりにてかたりなぐさむ
かたもありところはわづかのこじまにて草木も更に
なかりけりさうてん廣くとをうして月の出べき山も
なしあしたの日は海より出又夕日もうみにいる露の
身はたのみなや夜ふけて聞もなみのをといはまのや
どをたのめてやうちふしかたもぬれまさるまれにも
こととふものとはなみになるゝむらがもめなぎ
さのちどりなく時は猶又ともゝこひしくていとゝあ

けゆく夜もながく暮行日かげもをそかりけれつゆの
いのちをくさの葉にやどすべきやうなけれ共なのり
そつみていのちをつぎうき日かすをぞをくらゐい
たはしゝ其なかゝに申ばかりもなかりけりさるゝい
ひだべつぶきやうだいはつくしのはかたへふねをよ
せよろこびのきてうと風聞す豊後のこうに御座有御
臺所はめづらしききよく共をかまへさせ給ひ御出を
そしとまちさせ給ふところにさはなくしてべつぶ兄
弟うちつれて先御しよさまさして参るみだいどころ
は御らんじてあれはいつもの御さきへのあんない申
にこそ参りつらんと人してきこしめすべき事をそ
くおぼしめし自身みすまじかく御出有てめづらしの
きやうだいやなにとて君はをそく見えさせ給ふぞ兄
弟まばし御返事申さずかさねていかにとたづねさせ
給へばそのとき兄弟涙をながすていをして申さんと
すれば涙おつる申さずばまろしめさるまじいたはし
や君はむくりが大しやうりやうさうと申ものとし

ならべくませ給ひ二人ながらいにゑづませ給ひてそのうち又も見えさせ給はねばそのおもひのみふかうしていくさにかちたるゑるしも候はずさりながら御かたみの物をば給て候と御きせながとかねの弓御劔をそへて參らせあぐるみだいこのよし御覽じてこれはふしぎの事どもかなかたきとくませたまはんにいつのひまに御かたみをとめて海にいり給ふべきぞや前後ふかくの事を申ものかなあはれこのもの兄弟を取ておさへてごうもんしめしとはばやとは思へどもはかなきによしやうの御事なればこゝろひとつにくたしつゝれんちうふかくいり給ひかたみのものをめしあつめいだきつかせ給ひてりうていこがれたまひければ御まへなかるのねうぼうたち一度にわつとなきければよそのたもとに至るまでゑぼるばかりにあはれなり

其後べつぶ兄弟打つれて急都へ上りよろこびのき朝と風聞す天下のはんじやうよのきこえ何事かこれに

まさるべきと上下さゝめき給ひけりゑかりとは申せどもだいじんの御きてうなきあひだ天下はやみのごとし御父左大臣御母御臺所としたけよはひかたぶきさかりの御子にをくるゝ事はかれ木にえだのなきふせいつれなきいのちにかへばやとなげき給へどかなはずうちよりのせんじには大臣がきてうするならば日本國をと思ひつれどもうたれぬるうへちからなしたれにけじやうををこなふべきべつぶ兄弟にはつくしの國司をとらするぞいそぎまかりくだりごけにみやつきだいじむがけうやうねんごろにとへとのせんじなりべつぶ承てあんに相違のせんじかな日本國をと思ひてこそ君をばふりすて申たれめづらしからぬつくしへとて又こそくだりけるとかやべつぶみちみちあんにけるはさもあれ我君の御臺所は天下一の美人にてましませばかせのたよりのたまづさを參らせて見んするにうけひき給はゝゑかるべしそむき給ふものならばふしづけ申さんとたまづさねんごろに

こしらへこれはみやこよりの御狀なりとてさへげければきんじよのねうぼうとりつぎみだいどころにまいらせあくるみだいどころはみやこよりの御狀を聞召なか／＼うはがきをだにも御らんじあへずいそぎひらいて見給へばおもひのほかに引かへてべつぶがかたよりのたまづさなりあまりの事のかなしさに二つ三つに引きさかしこへがばとすてさせ給ひいのちあればこそとの給ひて御まぼりがたなをめしよせじがいをせんとゑたまへばめのとのねうぼう參り御まぼりがたなをむばいと申御道理にて御座さふらふ三條みふの御所よりもかならず御むかひのまいりさふらふべしいのちをまたふしたまへととかくなだめたてまつり返事をせぬ物ならばふとくしんなるべつぷにていかなるしよぞんかたくむべきとめのとの女房がそばよりも返事をする

三とせの後の新枕我にかぎらぬ事なれ共すまふ草も取／＼にひけばやなびくならひ也ま見えむ事はやす

けれどもきみのむこくへ討手に御むきのときうさのみやにまいり千部の經を書よまむと大願を立七百よぶはかきよみぬいま二百よぶはかきよますこのしゆくぐわん成就の後とはともかくもと書とめてこれは御臺所の御返事なりとてかへす使は急ぎ立歸りべつぷどのにみせ奉るべつぷひらいて見奉りあらめでたや扱はなびかせ給ふべきやしゆくぐわんじやうじゆの間はいか程か有べきと百年をくらす心ちしてあかしくらしまちゐたり其後みだいどころかすのねうばうたちをめしあつめさせたまひ命あればこそかゝる事をもきくなればいまもふち瀬に身をなげ跡かきくれたく思へどもくさのゆかりもゑのぶゆゑをよぐころもよしあしと君がおもかげのゆめうつゝにたちそふ時は又ゑしたる人とは見え給はすこひはいのりものときくあふまでのちおしき也大臣殿此まゝ御歸朝なきならばわれも身をなげむなしくなるべしさあらん時に御かたみを山野のちりとなさんよりた

つとき人にほうじ跡をもとはせ申さんとして御手なれ
のびはことわごんしやうひちりきさうしのかずを取
あつめたつとき人にほうせらる四十二疋の名馬ども
みな寺々へひかれけり三十二疋の鷹犬たかのきづなを切
てぞはなされける此程有したかじやうたちをも思ひ
思ひにちらされけり十二てうのたかどものあしをと
いてぞはなされける十二てうのそのなかにみどりま
ると申ておほたかの有けるがきみのなぐりを玄たひ
てやたちさるかたもなかりけり御臺所は御らんじて
あれはきみの祕藏のみどりまるなるがつかれにのぞ
みてあればこそ羽をたれひれふしてはゐたらめあれ
あれ女房達ゑじきをあたへてはなし給へとおほせけ
れば承るとは申されけれ共いづれもみなねうばうた
ちの事なればゑかやうやうを玄らずしてはんをまろめ
てそなふるこのたかうれしげにて此はんをくはへ雲
井はるかにとびあがりはねうちのとてとびけるがだ
いじんの御座あるげんかいがしまにとびつきぬ

はんをばとあるいはのうへにをきわが身もそばなる
いはおに羽をやすめてぞゐたりけるあらいたはしや
大臣殿は只うつせるかげのごとくにて岩間のやどを
たちいでみぎはのかたを見給へばこのほど見なれぬ
たか一もとはをやすめてぞゐたりけりだいじんあや
しく思召いそぎ立より見給へばいにしへ手なれしみ
どりまるなりあまりの事のうれしさにいそぎたちよ
り給ひてさてだいじんが此島に有とは何とて知てき
たりけるぞげに鳥類はかならず五つう有とはこれか
とよさてもこれなるはむは御臺所の御わざかや此は
んをたばんよりなことづてぶみはなきぞ豊後にい
まだましますかみやこへかへり御のほりかふちは瀬
となるならひかやいかにくとのたまへばこゝろぐ
るしきふせいにてなみだばかりぞうかべけるだいじ
んの御うんじていまこれほどの身と成て此はん
ぶくしてあればとていくほど命のながらへむ鳥類な
れ共あの鷹たかのみるところこそはづかしけれくはでも

あらでと^{本ノマ}おぼしめすがさめあれみどりまるが萬里の
なみを分こしたる心ざしのせつなきにいで／＼さら
ばぶくせんとて御手をかけさせ給ひければうれしげ
にてこのたかが羽をたゝきつめをかき御ひざのまは
りにひれふしてもいはいぬ計のふせいなり大臣殿は
御覽じてあらたよりもなやみどりまるなんぢがみる
ごとく木葉だにもなきしまなればおもひのいろをも
書やらすいかせんとおほせければこのたかうれし
げにて又雲井はるかに飛びあがるだいじんの御
らんじてゑばしもかくて候へかしあらなごりおしの
みどりまるやとおほせければさはなくしてみどりま
るいづくよりとりて來りけんならのかしは葉ふくみ
て大臣殿に奉るそぶがここのたまづさをかりのつ
ばさにことづてしもいまこそ思ひゑられたれわれも
思ひはをとらじと御ゆびをくいきり木葉にものをぞ
あそばしたる^{本ノマ}たんの落葉なりければたゞ歌一首かき
付てをしたゝみまろめてすゝつけにゆひつけてはや

かへれよと有しかばうれしげにてこのたかう三日三
夜と申には豊後の御所にまわりけりまださうてうの
事なるに御臺所はぎやうだうして御座ありしがみど
りまるを御らんじてなんぢはこくうをかけるものな
ればいたらぬところよめあらじ物いふものにてある
ならば大臣殿の御ゆる衛をなかは申さで有べきぞ
あらうらやましのみどりまるやとおほせければこの
たかうれしげにて御前さして參りすゝつけをふりあ
げるなをりたりみだいふしぎにおぼしめしくはしく
見給へば木葉に^ち血のついたるありいそごとりあげ見
給へばいにしへのんのことづてに一首のうたにかく
ばかり

とふとりのあとはかりをはたのめきみ

うはのそらなるかせのたよるを

かやうによませ給ひつゝ扱は此世に大臣はいまだな
がらへ給ふぞやそこそいのちのあるゑるしなれかみ
なきかたにてあればこそ木葉にものをばあそばした

れすいりとすみ筆なければこそちにてものをばあそ
ばしたれいざや硯を參らせておぼしめされん事のは
をくはしく書せ申さんとてむらさきすいりゆゑんの
すみかみ五かさねにふでまきそへ御臺をはじめ奉り
そのかすくのねうぼうたちわれをとらじとふみを
かくとりあつめたるまきものはよしなきわざとおぼ
えたり

すいつけにゆいつけかまへて今度はとくまいれみど
りまると仰ければこの鷹うれしげにて又雲井はるか
にとびあがりはねうちのべてとびけるがむらさきす
ずりのならひにてまほのみちひにまたがつて時々を
もく成ほどに次第にひかれてさがりけりいまはとお
もひとびけるがおほくのふみとかみ共につゆふくみ
てをもくならない引にひかれつゝそのまゝうみにひ
たりてむなしくなるぞむざんなるまにまします大
臣殿鷹だにもいまはかよはねば何になぐさみ給ふべ
きぞや此たかの又も參らぬはらしもへつふがかたへ

もきこえころされてもあるやらんとときくかよふ
いきだにもかぎりのいろと見えさせ給ふ猶も命のす
てがたくてみるめあをのりとらんとていはまのやど
をたちいでみぎはのかたを見給へばなみうちかゝる
いはまに鳥の羽すこし見ゆる大臣あやしく思召いそ
ぎとりあげ見給へば此程かよひし御たかなりあまり
の事のかなしさにかしこにどうとまろびゐてたかを
御ひぎのうへにかきのせあらむざんのありさまやと
くはしくていを見給へばまづむもひとつことはりな
りむらさき硯ゆゑんのすみそのかすくのふみ共が
まほにみだれて見えわかねどもこゝろまづかに見給
へばとりくゝにこそ見えにけれこれやによしやうの
はかなきとはかみすみふでだに有ならば是ほどおほ
きいはほにていかほども物をばかくべきにすいりを
つくるはなにごとぞやしても此たかゝきかいかうら
いけいたんごくへもゆかずして又このまにゆられ
きて二度ものをおもはするかならず生をうくるもの

こんはくふたつのたましゐ有こんはめいどにをもむ
けばはくはうき世にあると聞われもいのちのついま
りていまをかぎりの事なればめいどのみちのゑるべ
をしてつれてゆけやみどりまるわれをば誰にあづけ
てさてなにとなれと思ふぞとて此鷹にいだきつきり
うていこがれ給ひけり

彼大臣の御なげききみに見せばやとぞ思ふこれは大
臣殿まにて御なげき豊後のこうに御座ある御臺所
の御なげきはなか／＼申ばかりもなしせめておもひ
のあまりにや宇佐のみやにまゐり給ひ七日こもり願
書を書きてこめさせ給ふきみやうちやうらいそうべ
うしんもしも大臣殿きてうのゑみをふくませ給ひ二
度御目にかゝるならばうさのさうゑひ申べし玉のほ
うでんみがき立こがねの戸びらをのべひらきるりの
かうらんやり渡しゑやこうのぎぼうしみがき立みぎ
りのいさごにこがねをませかべにはゑつぼうをちり
ばめていけにはたまのはしをかけるがきはくわうえ

うらんけいしくわいろうとはいでん四つのろうもん
たまのまぐさをみがくべしとურიやうのむねをうき
やかにゑんでんひさしをひろくといかにもやうら
くむすびさげけまんのはたはくもをわけゑせんへい
はくゑしこまいぬこがねをもつてみがくべし大塔と
しゆろうをいかにもたかく雲のうへにひかりをはな
つてつくるべしゑきのさいれいべちりんじはなのみ
ゆきをなすべきなり九本のとりゐをたかく立極樂淨
土をまなぶべしむぐらくほかに更になし諸神のしよ
けう淨土とすあゆみを神にはこべゑんたうよりも
ぶつだうにきする方便これなりそのかいていのいん
もいまもたえせずあらたなりほうさいかみにいたせ
ばぼだいのたねをつゝむなりそも／＼神と申はゑん
そくたるをすがたとし正直たるをこゝろとすちりの
うちにまじはりわれらにゑんを結べりほんぐわんか
ぎりあるならばわれをばもらし給ふなよ敬白とかき
とめてくる／＼とひんまひてゑんせむにとうど置七

日七夜までまじやうしんにぞいのらるゝ
まことにかみのちかひにやいきのうらのつりんつり
におきへいでたるがみなみのかせにはなされてきた
のおきへながれゆき大臣殿の御座あるげんかいがし
まにふきつくる船人どもはまなかげにあがりいとい
物うきおりふしに大臣殿を見付申けうがるいき物有
やとてかなたこなたへにげさつておちてさうなくち
かつかすだいじんどのは御覽じてあらくちおしやさ
てははやわがすがた人間とは見えざりけるや何と成
行事共とて御涙にむせばせ給へばなみだをながす體
をみてちつとこゝろがうに成てさもあれなんぢは
いかやう成いきものぞととへば大臣うれしく思召有
のまゝにかたらばやとおぼしめすがもしもべつぶが
たの者にてもありもやせんと思召いつはりかうぞ仰
ける是は一とせゆりわかだいじんどのむこくへうつ
てに御むきの時ふなぶにさゝれてむかひたりしもの
なりしがふしぎに船にのりをくれこのしまにすてら

れて候大臣殿御歸朝の後ははや三とせになるかとお
ぼえたりまかるべくは御はうしに我を日本の地につ
けてたべとおほせければ船人共が是を聞あらふびん
の次第やなくしする身にはなにはにつきものうき事
のおほひぞや人の上ともおもはねばたすけてさらば
もどらふする風のこゝろをまらぬなりわれ人くわほ
うめでたくばじゆんぶう次第に出すべし有ともうん
がつきはてなばなをしもとをくはなさるべし只くわ
ほうをねがへだいじんげにもとおぼしめしうしほを
むすび手水とめされあらうらめしやなにとて日本の
佛神は我をばすてはて給ふらんくわんおんぎやうの
めいもんににうを大海けしこくふうすいこせんぼう
ひようだらせつたとひせんばうひようだらせつの國
におもむくとわれ一人がきねんによつて本地のきし
へつけてたべときせい申させ給へばまことに佛神も
ふびんにおぼしめさるゝか八大龍神なみかせとめ俄
に順風ふき來るほばしらのせみくちに八大りうじん

ことごとくおもてをならべ座せられたり船のへさきには不動明王のがうまのりけんをひつさげてこんがうけんごのさくのなはあくまをよせじとしゆごせらるゝかんまん二の御まなじりともにはかうもくぞうじやうでんびしやなてんたいくわうてんとらせつてん風天水天火天とう雨風なみをまづめんためじやうかいげかいの龍神しやしんのとくをといめて夜日三日と申にはつくしのはかたにふきつくる有がたし共中々に申ばかりはなかりけり

ふな人申けるはこれ迄といけたるちうに我にまばらく宮使恩をくれといひければ大臣げにもと思召ならはぬわざをまたまひて恩をぞをくらせ給ひけるこくないつうげの事なればべつぶのしんがつたへ聞ききの浦のつり人がけうがる者をひろいきてやしなひをくとつたへきくいそぎつれてまいれと御つかひたつそのころなびかぬくさ木もなしやがてぐしてぞまゐりけるべつぶたちいでつくつくみてあらけうがる

いきものかな鬼かと見ればをににてもなし人かとみれば人にてもなしたゝがきとやらんはこれかとよわれにまばらくあづけよ都へぐしてのぼりものわらひのたねとなさんとてをしといめかどわきのおきなにあづけやがてふちをぞくはへける彼がどわきのおきなと申は年比大臣殿にめしつかへしものなれども御かほにも御あし手にもさながらこけのむし給ひ御せしもちいさくいろも黒く有しにかはる御すがたをいかでかみしり申べきされ共なさけふかきふうふにてあらむざんとやせおとろへたるがきやとてかさねてふちをぞくわへけるある夜のねざめにおほちかむばに語りけるは扱もせんぞのきみゆりわか大臣殿むこくへうつてに御むき有て又も御歸朝なき間そのおもひのみふかうしてそいろにとしもよるぞとよさても御臺所はこのちやうやにましますよなむば此よしを聞よりもさればこそとよその事よべつぶどのゝみだいにこゝろをかけさせ給ひ御たまづさのありしか

どもさらになびかせたまはねばむねん至極におぼしめし此二三日さきほどにまんうがいけにふしづけ申けるときく是につけてもうきいのちつれなくひさにながらへかゝる事をもきくやとてせきあへずこそ泣にけれどいじんどのはものごしにて聞召あらなにもなの事どもや今迄いのちのおしかりつるも君にやあふと思ふゆへ今はいのちもおしからずあけなば急ぎたづねゆきまんうがいけに身をなげて二世のちぎりをなさばやと思ひ入てぞおはしける其後おほちがこゑとして今よりのちはいまゝしうな泣きそこそ申けれむばこのよしを聞よりもあはれげによの中に心づよきは男子なりおほちのやうにつれなしこそしうのわかれもかなしまねわれら日比の御なさけ只今のやうにおもはれていかに云共なかうぞとて又さめゝとなきゐたりおほち此よしきくよりもあらやさしのむばごせやさほど君を大事におもひ申さば物語をして聞すべしかまへてくちばしきくなおそ

ろしや彼べつぶどのゝうしろ見の忠太はおきながをひにてあるあひだ御臺所のふしづけられさせ給はん事をおほちかねて承り是をばさていかゞはせんと思ひあい玄のびとりひめみだいどころと御同年にまかり成を御命にかはるべきかとたづねてあればひめはなゝめによりこふで男子女子にはかぎりさふらふまじ御しうのいのちにかはらむこそさいはいにてさふらへ玄のびやかにと申程におほち餘りのうれしさにひめをばみだいどころとがうしまんうがいけに玄づめ姫がゐたりしちやうだいにきみをばかくし申たれかたみはこれにあるぞとてかすのかた見を取出しむばが手へこそわたしけれむばはかた見をとりもちてこれはゆめかやうつゝかやさりながら君をたすけ申こそなげきのなかのよろこびなれ玄かりとは申せ共人間にかぎらず生をうけぬるたぐひの子をおもはぬはなかりけり三界一のどくそん釋迦むに如來だにも御子のらごらそんじやをば又みつけうるとき給ふ

こしつてうは子をかなしみまゆらのなづきにはしを
たつるよるのつるは子をかなしみれんりのえだにや
どらすやぎうこうしをねむりやぐわいのゆかにふす
ときくいきとしいき生をうけぬるたぐひの子をおも
はぬはなきものを我身をわけしひとりひめしうのい
のちにかへし事うらみとはさらにおもはねどあらお
しのひめやとてりうていこがれ泣ければおほぢもと
もになくときこそ大臣殿は聞召ともにつれてまのび
ねのせきとめがたき御なみだやるかたなふぞ聞えけ
る大臣殿はたいいまま立出名乗てきかせばやとおほ
しめされけれ共まはしとおもふしよぞんにて時節を
またせ給ふかくて其年もうちくれあらたま月にもな
りければ九國のざいちやうらゆみのとうをはじめべ
つぶどのをいはふいたはしやたいじんのには御か
ほにも御あし手にもさながらこけのむし給へばこけ
まると名付申矢とりのやくをぞさしにける大臣弓場
にたゝせ給ひこゝにて運をきはめばやと思召あそこ

なる殿の弓立のわるさよゝなるとのゝをしでのふ
るうとさんくゝに悪口し給ふべつぷこのよしきくよ
りもいつなんぢがゆみを射ならふてさかしらを申ぞ
もどかしくば一矢射よ大臣殿は聞召射たる事は候は
ね共あまりに人々のいさせ給へるが見にくきほどに
申て候べつぷ聞てさほどなんぢが射ぬ弓をさかしら
を仕るぞ是非射じと申さばうさ八幡も御ちけんあれ
人手にはかくまじぢきに切てすつべしとくいよとせ
めかくる大臣殿は聞召仰にて候程に一矢いたくは候
へどもひくべきゆみが候はずべつぷ聞てやさしく申
ものかなつよきゆみの所望か又よはき弓の所望かお
なじくはつよき弓の所望にて候やすきあひだの事と
てつくしにきこゆるつよ弓をすちやうそろへてまい
らせあぐる二三ちやうをしかさねはとと引おつ
ていづれもゆみがよはくしてことをかひたと仰けれ
ばべつぷこれをみてきやつはくせものかな其儀にて
あるならばだいじんのゝあそばしたるかねのゆみ

矢を射させよ尤まかるべしとてうさ八まんの御ほうでんにあがめをくかねのゆみ矢を申おろし大臣殿に奉るいつしかもとよりおんたらしかゝりのまつにをしあてゝゆらりととはつてすびきしてかねの御てうつをうちつがひ的には御目をかけられすくわんらしくしてゐたりけるべつぷのまんに目をかけて大音あげておほせけるはいかにや九國のざいちやうら我をばたれとか思ふらんいにしへまにすてられしゆりわかいじんが今春草ともえ出づる道理にまかせてわれやみん非道にまかせてべつぷやみんいかに／＼と有しかばおほともまよきやう松浦たう一度にはらりとかしこまりきみにまたがひ奉る

べつぷもはしりおりかうさんとて手をあはするいかでかゆるし給ふべきまつらたうに仰付たか手こてにいましめかゝりの松にゆひつけ自身立出たまひてなんちがまたのさへづりにて我に物をおもはするいんぐわの程を見せんとてくちのうちへ御手を入れたを

つかんで引ぬいてかしこへがはとなげすてくびをは七日七夜にひきくびにまたまへり上下萬民おしなべてにくまぬものはなかりけりととうとのべつぷのしんをもおなじごとくざいくわあるべかりしを嶋にて申ことばのなさを有のまゝ申さらばなんぢをばるさいにせよとていきのうらへぞながされけるそのゝち大臣殿こうのちやうやへうつらせ給ふ御臺このよし聞召ひとへに夢の心ちしてたもとをかほにあてながら涙とともにいで給ふあはぬがさきのなみだはことほりなれば道理なりあふての今のうれしさにことの葉もたえてなかりけり何のつらさにわがなみだおさふるそでにあまるらんみだいどころはうさのみやの御しゆくぐわんのよしを御物語ありければだいじんなゝめに思召たてさせ給ふ御ぐわんは事のかすにてかすならず金銀珠玉をちりばめたまふ其後だいじんだのいきのうらのつり人にたづぬべき子細ありいそぎまいれと御つかひたついかなるうきめにかあふ

べきと只をににかみとるふせいにてこうのちやうやへ参り庭上にひれふすだいじんどの御らんじていのちのしうにてあるものがなにとてをそれをばなし給ふぞそれへくと仰有てひろえん迄めし出されうれしきをもつらきをもなかはかんせざるべきと御さかづきに指そへていきとつしま兩國をうら人にくだしたびにけりかどわきのおきなをめし出させ給ひてつくし九ヶ國のそうまんどころたび給ふおきながひめのためにまんうがいけのあたりに御寺を立給ひ一萬町の寺領をよせさせ給ひけるとかやみどりまゐるがけうやうにみやこのいぬゐにゑんごじと申みてらをたて給ひけり鷹のためにたてたれば扱こそいまの世までもたかお山と申なれ大臣殿の御ちやうにはつくしに住居をするならばものうき事もありなんと御臺所を引ぐして都へのぼりたまひけりあじろのこしは十二ちやうはりごしは百餘ちやうおほともしよきやう松浦たう御供を申さるゝきのふ迄はいやしく

もこけまるとよばれたまひしがけふはいつしかひきかへて七千餘騎をひきぐしてみやこへのぼりちゝはは對面有てのちやがて参内申さるゝみかどえいらんましゝていかにめづらしや先度べつぶが上りうたれぬるよし申せしをまことぞと思ひてちよくしをくだす事もなしふしぎのいのちながらへ二度参内する事一眼のかめのたまさかに浮木にあふがごとくとて日のもとを將軍になさせ給ふぞ有がたきさてこそ天下太平國土あんをん壽命ちやうおんなりとかや

あだ

改ノ誤

すでに承平は七年にて開元す天慶九年にかはる天曆
十年きのと卯彌生するつかたに相馬殿のひめぎみを
小山の太郎にとらせらるゝをやまの太郎ゆきしげは
のぞむ所望のかなふうへよろこびこれにゑかじとて
むかへもてなしかしづき申ひとつには仁儀の法とい
ひ草のかげなるさうまどのゝおぼしめされんところ
も有けうやうふかく申さんとてさむがのせつしやう
をきんだむし有時はせんをひき又有ときは經を書て
おもひいりてぞとぶらひけるゑだにましますみだい
どころつたへきこしめされてをやまの太郎ゆきしげ
はあらおとこかとおもひてあればなさけのみ有人に
てありおやの事を思ふものだにもよにはまれなる事
ぞかしましてや見もせぬゑうとをかやうにふかくと
ぶらふ事はよくたのもしきこゝろかなときゝこな

たへ來れかしさうまどのゝかたみとも見ばやとこそ
おほせけり

有時みだい所うきしま太夫をめして仰けるはさう
まどのゝ末期の時おぼしめしやわすれけんあれほど
おほき所領をひめに一所も御ゆづりなしたとへばそ
れこそなくともむこのおもはんところも有ゑだのし
やうを半分わけ小山にとらするものならばゑだがゆ
ゆしきうしろだてよのらうどうを百騎二百騎たのま
んよりも一人なりともをやまはまことのせんにたつ
べきものぞ能はからひさふらへうきしまゑばし御返
事を申さずやゝ有て申けるは古殿のあしき御はから
ひをいかでかおほせをかるべきそれ弓とりの君達に
ひめ子はつるに他人となるむこはいしやうちかゝら
ずうつればかはるよのならひわりなくおぼしめされ
候はゝおりゝのひきでものにたからはつくさせ給
ふとも所領にをゐては一所もゆづらせ給ふべから
ず人にはどんよくこまうとてよくしんうちにふくめ

ばまたしきなかもうとうなり候よそ／＼ながらの御
對面こそなか／＼するの世迄もめでたくわたらせ給
ふべけれ小山殿に御たいめんもむやくの御事たるべ
しと以外に申けりみだいこのよし聞召御返事なふて
たゝせたまひいつしかさうまにすぎをくれうちの者
さへかろしめておかしきものとおもはるゝくわほう
のほどのつたなさよなか／＼うきよに有がほにいへ
をもちてせんもなしまたどのにいとまごひたつとき
山のかくれがにも引こもらばやなんどゝふかくぞう
らみ給ひけりまたどのきこしめされては、子のう御ノ誤
らみは御道理あすはなにともならばなれ一人ましま
す母上の御意にもれてはせんなしとて信太の庄を半
分わけはゝうへにまいらせらるはゝうへなゝめなら
ずに御よろこび有て小山のたちへをくらせ給ふをや
まなゝめによろこふでひとつにはむこいり又はよろ
こびの所知いなりければあじろのこしは八ちやう
はりごしは十二ちやうそうじてきは三百騎上下は

なめきゆゝゑくしてしだの館へぞうつられける
新殿をつくらせかくて爰に住給ひ今みたち殿とはや
りまたの先祖の郎等ども日々に仕出はひまもなしさ
れ共うきしま父子六人はおり／＼ばかりの仕出にて
さながら御前につめざればみだいの御意もうすく成
何はに付て昔よりものうき事共おほくしてこゝろの
とまる方もなしよの有さまをみるにつけ後の世あや
うかりければながらへざらん物ゆへにしやいつまで
と思ひきりまたの河内にひきこもりいんきよしてこ
そゐたりけれ御臺此よしを御覽じてあらおかしのう
きしまがふるまひやそもあのうきしま太夫を郎等に
もたぬものは世にはすまれぬものか小山殿一人だに
もましまさば何の子細の有べきとよろこびをなして
さかへ給ふさりながら浮島太夫はいんきよしのまた
はいまだようちなり大事のちけんまるかし家につた
はるてうほうをうちちにをきてはせんなしとて一つも
のこさずをしまくつてをやまの太郎にあづけらるゝ

さるあひだをやまなき所にひまこもりくはしくみ
るにまさかどだい／＼よりももちつたへたるせうも
んども一つものこらず／＼にありなに／＼まだ玉つ
くりとうてうは八萬町の所也あらおびた／＼しや此内
わづか一萬町それがし知行仕るをだによにふそくも
なきとぞんずるましてや殘る七萬ちやうひたち下總
兩國のおほいのすけとなるならばわれにましたるゆ
みとりの國に二人ともあるべきかとやがて大よくし
んぞ出來るかゝるめでたきてうほうをさうなくあづ
かる事天のあたへとぞんずれば安堵を申さんそのた
めにくまのまふでに事よせていそぎくにを打たつて
都へぞのぼりける關白天下につき申あんのむねを
そうもん申うちよりのせんじにはさうまが跡を申は
なにもものぞとのせんじなりさうまが爲には一子で候
ゆづりの手つきせうもんども代々の御書共を_{別當ノ誤歟}ませう
だ／＼しく參らせあげ理非をすまひてそうもむす其上
國はうとくなりようにも_{別當ノ誤歟}まよしにも當別にもたから

をあかせていさませたりける君にもこがねれうの馬
れうら金銀のたぐひを數をつくしてまいらせあぐる
左右の大臣きさきのみやねうばうたち其外の人々に
もたからをあかせていさませたりけりたとへばてき
はうささうるともなかはかなはであるべきまして
あらそうものはなしむくうしさいに申なしあんど給
はりくだりけりさるあひだ小山みち／＼あんどける
は御臺所と_まだどのに少分なりともとらせふちせば
やと思ふがいや／＼かゝるむづかしきものをたすけ
をくならば後のよのわづらひと成事も有べしたちま
ちうしなはんと思ふがそれは餘りなさけなし_まよせ
ん領内にをかぬ迄とおもひ國もとにもつきしかばさ
きへ人を立みだいどころと_まだどのにひたち下總兩
國に安堵はかなふべからずとをきくにの_まらぬ里へ
とく落行給へへんじも國にまし／＼て我ばしうらみ
給ふなとをつたてのつかひをたつるみだい此よしき
こしめしひとへにゆめのこゝちしてうつゝとさらに

わきまへずをやまどのが所存にはてんまはじゆんが
 入かはりたるかやいかなる事にてかくいふぞとくど
 きなげき給へ共あらけなきつかひにてなさけをすて
 てふるまへば浮島太夫が言葉のすゑいまさと思ひま
 られたりさてあるべきにてあらざればまだどのばかり
 御ともにてなみだとともにいで給ふけふいで、又
 歸るべきみちだにもわかれといへば物うきにけふ出
 てのそのうちに歸らん事もかたかるべしゆくもとま
 るをしなべてもろきは今のなみだかなかひの國に
 聞えたるいたがきの里といふところにたづぬべき人
 ありて彼さともではおちゆき給へとたづぬる人も跡
 なくなるなにはにつけてたよりなしいまはいづくへ
 行べきぞ名はいたがきと聞きけれどかせもたまらぬ
 あばら屋にやどかりてこそおはしけれめづらしから
 ぬ事なれど頼もしきは人の郎等也さうませんぞの家
 人さつしま兵衛むらをか五郎をかへの彌次郎たかみ
 の左衛門この人々をさきとして以上十一人御あとを

またひ申いたがきのさとにまいりきみを見付申よろ
 こぶ事はかぎりなし
 さて／＼なにとすべきぞと内儀ひやうぢやうとりど
 りなりそのなかにとつてもさつしま兵衛すゝみいで
 て申われらがせんぞのさつしまたゆふ主君らうどう
 のけいやくを申君もわれらも三代也せうへいの合戦
 はしまつて數度のたゝかひ有しかどもつるにふかく
 をかゝざりしにきみもにやくに御座あり我等もわか
 き者なればをやまどのにいやしまれ無二の本領おふ
 りやうしてをひいだし申むねんさよいつまでかくて
 こらふべき敵は大せいなれ共ぶせいでうかゝふはか
 りごと夜討にまゐくはよもあらじもとより我等あんな
 いしやひまをうかゝひまのび入三方よりも火をかけ
 一方よりも切ていり千騎萬騎のなか成とも思ふかた
 きは只一人をやまとくまんす事共は何の子細の有べ
 きとはや手にとるやうにぞたくみける其中にとつて
 もといたの太郎が申やうこれこそよからぬせんぎな

れ理をもちながらのあらせんぎは思ひもよらぬ事に
て候さいさんつがふたさたにてなし一もんだう二も
んだう三もんさむたうつがつてまけをはつたるさた
をだにもおつそふかんと名付て又取たつるはさたの
はうましてや一度もせざらぬさたをてきはうさゝへ
ぬそのさきにむくうに申なをしてたまはるところの
安堵なりあれはまさしきたしやう是はさうまの御子
とはよにはかくれもましまさずたとへばせうもんあ
なたに有とぬすみとられししよけんを立などかは取
てかへさゝらんと理非をすまひていひければ尤此義
に同ずるとて御臺所とゑだどのをぐしてみやこへの
ぼりけり小山此よし傳へ聞さればおんをみておんを
ゑらざるはほくせきのごとしあはれみをたれたすけ
をきたればかたきとなるこそやすからねのぼせ立て
はかなふまじ道にてをつつめてうてやとてくつきや
うのつはものを七十餘人さしつかはすかゝりけると
ころにこしまの五郎の申やううつては國にかくれ候

まじ理のなければこそうつたれとてやがてほんりや
うをばめさるべしさればむかしがいまにいたるまで
ちからに及ばぬかたきをば佛神申事のたちまちな
ふよしをうけてたまはれば信田殿を調伏めされて御
覽せよと申をやまげにもとおもひやがてかしまへ使
者をたてかんぬしいそぎしやうじよせいつよりもき
らめいてちうをつくしてもてなす酒も三こんと見え
し時しやきん百兩よき馬にくらをひて引立たりかん
ぬしゑつきのいろ見えそゝろぎいさむふせいあり小
山今はかうよとおもひあたりの人を遠々とのけゑだ
をてうぶくすべきよしをひとへにたのみ奉る神主け
しきかはつてこはくちおしき御誼かなわれらはかし
まのしやにとし天長地久御ぐわんゑんまんそくさ
いえんめいといのるより外別にひしゆつは候はず殊
さら人をてうぶくすべき事はなか／＼みやうのちけ
んもおそろしう候さるべしきほどのかうそうへおほ
せつけられ候へと立てにげむとすをやまこのよし

るよりもゐたるところをづんと立てたもとをとつて
ひつとゝめさては御へんは敵方と一所の人や一期の
ふちんみの大事をありのまゝにかたらせてたのまる
まじきとはなに事ぞちから及ばず御身をばえこそは
返すまじけれとてすでに討むとしたりければせんは
うつきてかんぬしもはや事うけをそしたりけるには
かの事にてあるあひだ吉日えらぶまでもなし一所を
きよめだんをたてゝ本尊をあんちしたりけりてうぶ
くのだんの次第はおそろしくぞ見えにける

四面のだんをかざつてほうびようにぼけの花にうも
くに山うつ木しやすいの水に井もりのちくゝにはひ
つちのいひをもつてせうかうつかううしのほねけま
んにあせぼのはなをもりあかにはくじやの水をたれ
すでにとうみやうにはほそきのあぶら立にけりおん
じき日々にかはつて初一日のほんぞん地ざうさつた
南むき二日は観音北向三日はせいし東向四日はあみ
だ西むき五日はぐんだりがうさんせ六日はすでにこ

んがうやしや第七日にあたる日はちうぞん不動みや
うわうせめにせめてぞいのりけるされども道理なき
によつて其ゑるし見えざればぎやうじや面目うしな
ひて二七日ぞかぢしける是にもゑるし見えざればお
んころゝせんたりしやなんまかるしやなむとぞせ
めにける珠數のをつかれきければこゝを持ってひざ
をたゝきさんごをもつてむねをたゝきとつこを持って
かうべをうちいたゝきをうちやぶりちやうじやうよ
りもあへけるちをばぶどうのりけんをしぬつて是
はてうぶくにんの身の血成とくわんねんして天地を
うごかしせめければあまりにつよくせめられて五だ
いそんはしんどうしてがうさんせはとつこをふりこ
んがうやしやはほこをつかふ大いとくののりうしが
つのをふつてぞほえにけるちうそむぶどうのけんの
さきになまちがついて見えしかば一ほうは成就した
りとしてたんをやぶらせ給ひけるあらいたはしや信田
殿これをは夢にもゑるしめされずあけぬくれぬとの

ぼらせ給ひけるほどにをはりの國に聞えたるくろた
のしゆくにつかせ給ふされどもてうぶくかぎりある
によつて^そだとのにはおひたまはで母御臺におひ給
ふ事のいたはしさよされどものぼらでかなはぬ道な
やみながらものぼらせ給ふ日數やうく^かさ成て近
江の國に聞えたるばんばの宿につかせ給ふ^{四次或ハ肢體}次第日々
^{ノ誤歟}におとろへ今はぎやうぶもかなはねば四五日とうり
うしたまへり信田殿をはじめ奉り十一人の人々はあ
とや枕にたちよりていかゞはせんとなげゝどもつゐ
にはかなはぬ生死の道あしたの露ときえ給ふあはれ
と云もあまりあり^そだどのゝ御なげきたとへをとる
にためしなしたれとてもむじやうはのがれがたけれ
どかゝるあはれはまれなるべし扱あるべきにてあら
ざればむえんのひとをかたらひてけふりとなすぞあ
はれなる十一人の人々は一つこゝろに申やう^そだとの
のゝ御くわほうはこゝまでなりとおほえたりいつま
でつきそひ奉り京よゐなかと^そんくせん又よの人を

たのまばこそ弓矢のきず共なるべけれ是をばだいの
ちしきとし世をのがれんと思ふとて^そのびくにも
とひきりまどろみ給へる信田殿のまくらがみにとり
をきていとまごひをも申たけれど^そこそは^そだはせ
給ふべき^そのびねなひて出てゆくすがたねんの御
なじみたのみし君にてましませばなごりのおしさは
かぎりなしされ共思ひきりつゝわかれゝゝになり
けり

てん明ければ^そだ殿御目をさませ給ひてなげきて
もかなふべき道かやいそげくゝと仰けれ共御返事申
ものもなしこはいかにと思召かつばとおきさせたま
ひてあたりを御らんありければあらなに共なや十一
人の人々のたぶさばかりぞのこりける^そだどのこの
よし御覽してあらなさけなの^そわわざとともうき世
をいとはゝなどもろともにつれゆかで年にもたらぬ
^そだ一人を何となれと思ひてすてゝはいづくへ行け
るぞとくどきなげき給へどもその^そるしもましまさ

ずはらをきらんとし給ふところへ宿のていしゆ参り
事の子細をうかひ申にはじめをはりの事共をくは
しくかたり給ふていしゆ承てきほどの道理をもちな
がらなどやみやこへ御のぼりあつて御さたはなきぞ
と申せどもとも人ひとりもあらばこそうきよにすみ
てせんもなしふしぎにたづぬるものあらばかく成つ
るとかたれとてねんぶつ申かたなをぬきすでにゑが
いと見え給ふていしめ餘りのいたはしさに御かたな
をむばひとりゑがいをとまり給へとよみやこまでの
御ともをばこのおとこが申べし命をまたふもつかめ
はほうらいにあふとつたへたりつらき人のはてをば
いきてぞ見はて給ふべきしゝては何のきよくあるべ
きとといめ申たりければ御ゑがいとはまりけりあく
ればていしゆ御ともして都へとてぞのぼりける五條
にやどをとりてをきさたの法をば申をしへていし
ゆはいとまたまはりてばんばのしゆくにくだりけり
ゑだどのたい一人都にとまりたまへども羽ぬけのか

ものみづなみにうかれてたゝぬふせいしかたわぐる
まのなかゝにやるかたもなきごとくにてみやこに
目をばをくれどもさたするむねもましまさするなか
のえんをつたへねばながざいきやうもかなはずした
よりもなふておはしますしよせんかなはぬ事をあん
ずるは却而ぐちの至なりわれひたちの國へくだりあ
ねごを頼てゐんするにせいじんの後びんひまをうか
ひひ一かたなうらみん事なにの子細のあるべきとお
ぼしめされけるあひだめづらしからぬゑだへは又こ
そくたりけるとかやかざりあらば我こそ人をふちす
べけれどもとき世にゑたがふならひとてをやまが門
のへんにたゝすむであんないとおほせければうちよ
りもたそとこたふるいやくるしうも候はずゑだにて
候萬事はたのみたてまつるかうさんなりと仰ければ
をやまこのよしつたへきゝ尤かうこそあるべけれこ
なたへといはまほしけれども所存のうちにをさつし申
たるに便隙をうかひつてひとかたなうらみんために

きたり給へるこゝろのうちかゝみにかけておぼえたり
おさへてうちたけれどもかうにんの法なればたす
け申片時もくにましゝてわればしうらみ給ふな
とはるゝくだるゑるしもなくもんよりうちへいれ
ざるはいとゝむねんぞまさりけるあらいたはしや信
田殿はるゝちかくめぐりきて父のみはかをいまな
らではいつの世にかはおがむべきぞとおぼしめし
みはかにまいり給ひ草本のはなをつみ手向何とてくわ
ほうつたなき身をひとつはちすのれいたいへむかへ
とらせたまはずしうき世にのこし給ふ事よとくどき
なげき給へ共ばうれいなればどくつより御こゑ出る
事もなしさくゝとゑたるかせのをとまつにぎんず
るばかりなりばうゝとゑたる草のつゆのすそもた
もともうちゑほれつきせぬものはなみだなり
みはかを下向ありけるところにたちきばさむだる
男のあみがさふかゝとひつこうたるがあやしきさ
まにまいりあふたれなるらんと御覽すれば是はわか

れてとしひさしきうきしま太夫成けりかねてはゑら
ざるすみよしのまつ年なればよろこびを引あはせ
るさいはいとてぐして河内に歸り五人の子共をちか
づけやこれゝおがみ申せなんぢらがこのあひだこ
ひ奉りたるにしようんのめぐみあるによつて不慮に
まいりあふたるは一がんのかめのたまさかにふぼく
にあへるがごとしつゝむとすると此事さだめて披露
有べしこの山里と申はむかしよりも能じやうくわく
いかにかたきがせむる共たやすく落つべしとおぼえ
ずなんぢらにいくさをさせ時々みてめさまひてとし
を送てゐんするにさだめてみやこへもれ聞え國のみ
だればなに事ぞとかみの御つかひ立ならばとりつゝ
きをつそを立てよろこびのさたをきはむべしいまこ
そいしのせいなりともつゐには國をおさむべし俄に
あはてゝなにかせんだにゝみねゝ尾つゝきども
を人夫をそろへてほりきらせよはしりどうつきいし
ゆみ爰かしこのつまりゝにはりかけさせよかいり

をたかせかひだてをあげうちとけるなどげちすれば子共もなゝめによろこふでとてもきゆべき露の身をきみゆへまなんうれしやとよろこびいさむぞたのもしきつゝむとすれどこの事小山がかたへきこえければをやまおほきにおどろきさてはせんぞの郎等にうきしまがたのまれけるや方々ひきあひつのつてはことの大事たるべしいまだちからのなきさきにはやよせよと申承ると申てをやまがしつしよこすか大將にて一の木戸迄せめいりけれども大勢うたせ引かへすかくてはかなはじとて小山が舍弟三郎ゆきみつ三千餘騎をそつしこゝをせんとたゝかひけれどもこれも大せいうたせてひつ返すては自身むかはではかなふべからずとをやまどののむかはれればひたち下總兩國にのこるつはものは一人もなし城にもここをせんとたゝかひけれ共げにやよせ手は國がひとつに成て谷をもみねをもへいちに道をつくらせあら手を入かへせめければさのみはいかでこらふべき

ぞや二三の木戸をも打やぶられつめの城にぞこもりける父の太夫やぐらのうへより大音あげていひけるはいのちをたばふ合戦は事によるぞよにある人をまうにもちすゑをたのむときにこそいのちもおしくおもはるれいつまでいきて何どきに世に出づべしとおぼえず子ともはなきかうちじにをせよ太夫もこゝろやすく腹きらんと云まゝにれいのおほゆみとりいだしはりかへあまたもたせ矢びつ三がうかゝせ追手のやぐらにはしりあがつていかにやねうばうこなたへきてさま引てたべいくさをして見せんと有しときねうばう生年五十六かすをなるかみをからわにあげうすぎぬかづきやぐらにあがりなにとて子どもがいくさはこたれて今までをそひぞとまきりにちからをつけられてはやうきしま太郎かけ出るその目をさいごと思へばれうをぬふたるひたゝれにをにがたすつたるさうのこてびやくたんみがきのすねあてくまのかはのもみたびまろがねにてへりがねわたしあくちだ

かにふんごうだり^ましにぼたんのはいだてしいとひ
おどしのよろひのみのときとかややくをわだがみと
つてひつたてくさすりながにぎつくと着ゆつて上帯
ちやうと^まめ九寸五分のよろひどをしをめてのわき
にさひたりけり一尺八寸のうちがたなを十六字にさ
すまゝに三尺八寸候ひし^まやくどうづくりのたちは
ひて四十二さひたるたかうすべりをはすだかにとつ
てつけおなじけの五まいかぶとにくわがたうつてゐ
くびに着^まあやのほろをさつとかけぬりごめのゆ
みの四人ばりせめのせきづるかけさせ真中にぎりよ
こたへ三のへだちの^まあしげ七き八分あけ六さい
にきんぶくりんのくらをかせゆんづえにすがりゆら
りとのも堀のはばたにこまをすゆる兄弟五人のもの
共がおもひ／＼のぐそくを着こゝろ／＼のむまにの
りたがひにたづなをとちがへかけうかけしと^また
りしをかたきみかたが是をみてあつばれむしやのい
きほひかなとほめぬ人こそなかりけれちゝの太夫や

ぐらのうへにてつく／＼みてあれ／＼ねうばう御ら
んせよいづれもきりやうはをとらぬよなふあつたら
子どもをよにあらせ所領のぬし共なさずして只今こ
ろさんおしさよなはや^まね子どもさはいひながら今
をかぎりの事なれば今一度こなたへかほ見せよたれ
も名残はおいしいぞとさしもにがう成太夫もはら／＼
とぞなきゐたるねうばうがこれを聞から／＼とうち
わらひおひにほれたか太夫殿わかれたいまのなさ事^き
かな泣^{誤敷}てもかなふべき道かやいかにや子どもいくさ
はさすが大事のものこゝろががうなるばかりにて兵
法^まあらでかなはずみかたぶせいに有ながら敵の陣に
かゝるにはすきのさきとかり矢かたぎよりんくわく
よく雨陣也ぎよりんといへるかけあしは魚のいろこ
を學べりくわくよくといへるは鶴の羽がひをへうし
たりこまのたづね^{な敷}あらずしてかたきがむぐうにきら
れぬぞむかふかたきをきるときはけあげのむちをち
やうとうつておもて返し^なのたづなをすくひおがみき

りに切すてよ弓手へかゝるかたきをばすみのたづな
きつと引さうかうのむちをうつてきれめてへかゝる
かたきをばたちのつかをかへしてさはらのむちをう
つてきれおほちもむばもこれにてみるぞさじきの前
のはれいくさぞふかくをかくなよ子共とおかしき
事はなけれども子共にちからをつけんがためさまの
いたをうちたゝきからくゝとわらひけりいとゞはや
りた子どもが父にも母にもいさめられおごゑをあげ
てかけいづるまへのかはらはあしひきなりならひつ
たへしたづなの祕事をしへをかれしむちのきよくむ
ぐうにむまをのりつれかけてはさつと引てみればま
へのかはらのいしよりもおほきは死人なりけりとつ
てかへしてさつとはかけ五六度迄たゝかふたりねう
ばうこれを見て子どもがいくさのおもしろきにうし
ろづめしてとらせんとてかづいだきぬをさつとおろ
せばゑだはむしやにいでたつたりくれなぬのはかま
のゑたにひざよろひにすねあてしもえぎにはひのよ

ろひ着たけなるかみをからわにすへ太夫がこのみし
つげのばうをゑばしかせとてうちかたげ追手の木戸
をひらかせほりのはゝたにこまをすゑだいをんあげ
てなぬるやういかにや小山の人々我をばたれと思ふ
らんやうせいゐんより三代つのらいくわうに五代也
わたなべたうに大將軍みたのげんじがむすめにみた
やしや女とはみづからなりとしつもつて五十六二つ
となき命をばゑだの御れうに奉るぞ我とおもはん人
人かけよ手なみを見せんとかぶとをとつてうち着つ
つすでにかけむとしたりけりちゝの太夫やぐらのう
へにてつくゝみて子ともががうなるは道理はゝが
心ががうなればかほなるもの共が親子兄弟ふうふ
と成てよりあひけるこそふしぎなれいかにや御れう
こなたへ御出有てをんないくさを御らんせられ候へ
ためしすくなき事どもとてゑだどのをやぐらへしや
うじ申くはしく見奉てまさかどの御まなこに人見が
ふたつましゝゝて八ヶ國のわうと成て八ヶ年を御た

もち有しがきみにもゆん手の御まなこに人見が二つ
ましませばわうぬまでこそおはせずともかならず坂^{はな}
東八ヶ國のぬしとはならせ給ふべしたとひわれく
討死を仕るとも君はいのちをまたふして廿五まで
は御ま候へかならず二十五にて御代にたゝせ給ふ
べしわれらもそれがおもはれて子どもが命もおしけ
れど當座のはぢをかゝじためみなうちじにをつかま
つるおほぢもむばもうちじにせば御身はかたきにい
けどられてをやまがたちにとしを経てよろこびの御
代を待給へいとま申てさらばとてやぐらをゆらりと
んでおりひとまどころへつゝといり一牧ませのおほ
あらめそでをはとひてからとすてどうばかりゆりか
けえびらがたなくびかきがたな三こし迄こそさひた
りけれその目さいごのうちものにとをちがうつたる
なぎなたの四尺八寸有けるがえをば三尺五寸にこし
らへひたえにかねをのべつけたり今ちつと此え長し
てきりかずやをとらんと二しやくばかりにさしさげ

ふつゝとねぢきりなげすてころにまはひてふつてみ
てあつばれかねやとうちうなづゐてなむさんぼうあ
ぢきなやいか程のものがきられ妻子にものをおもは
せんなふねうばうと語りふうふともにこまのたづね
をかひくつてかたきの陣へかけて入おもてをあはす
るものはなしばうをつかふ兵法にまばなざいしづき
はらひうちこの葉返しみづぐるまむま人きらはすう
ちふする長刀つかふ兵法になみのこしぎりいなづ
まざり車返しやるかたなねうばううちとをれば太夫
跡より切めくるさきに子共かくれはちゝはゝあとよ
りかけにけりものによくゝたとふればてんぢくし
うのたゝかひにふひやうがさきにかくればわうぎや
うかくぎやうかけあはする金銀けい馬かゝる時太子
もかゝり給ひけり此たゝかひの兵法をしやうぎのば
んにつくれるもこれにはいかでまさるべきうきしま
太夫がなぎなたもこらへで三つにうちおれば大手を
ひろげかけあはせねぢ首つゝぬき人つぶてからたけ

わりにひつさひたりきのふけふとは思へ共三年三月の合戦也此たゝかひは夜日七日うたるゝものはかすゑらす子共も五人と申せどもこゝやかしこにをしへだゝりひとりものこらすうたれたり太夫ふうふばかりなりさのみにつみを作ては未來のごうとなるべきなりかちもせざらぬものゆへいざむばごせと申てたがひにかたなをぬきもつてさしちがへて死たるををしまぬものはなかりけりしだどのこのよし御覽じてうきしまが云言はさる事なれどもふうふ討死するうへ何にいのちをたばふべきと御こしのものをぬきもつて腹をきらんとし給ふところへ小山が郎等参りまさなき君の御じがいや候こなたへ御出候へとていけどり申て出る

小山此由みるよりもさればひとのくわほうの有ときは只何事も心に任せけるぞや去ながらはくちうにかうべをはねむ事も天下の聞えもしかるべからずゆふさりの夜半にうちうみにゑづめはやとおもひさうま

せんどの家人ちほら太夫におほせつくるちはら信田殿をあづかり申大事の囚人は成べしもうせや申さんといましめたりし其うへをかさねてつよくいましめおくふかにをしこめてふけゆく夜半をまちたりしはひつじのあゆみのちかづくもかくやとおもひしられたりあねごこのよし聞召あさましやみづから男のこゝろとひとつに成かくなすとやおぼすらんさいごを一目みると人ゑづまつて夜はんにはらがもとへ御出ありしだどのにつけたりしかすゝのなはを御覽じてあらなさけなのゑわざやみづからにもつけずしてなどしだどのばかりにつけるぞや何とてものをばおほせられぬぞうらみのこゝろにてましますか日のもとにあらゆるかみもゑろしめせうしろぐらき事はなしとかきくどきのたまへばゑだどのきこしめされてうらむるしよぞんはなければなみだにくれてことばなしとてもわが身はくわほうなく今をかぎりの事なればかやうにあこがれ出給ひ小山がかた

へもれ聞えかさねてうきめを見給ふな御歸りあれと
ありしかばあねごこのよしきこしめしたとひをやま
にもれきこえおなじふちにしづむともうらみとは更
に思ふまじかやうにならせ給ふ事たいこれゆへの事
なればうきものもちてまいりたり御らんせよとおほ
せありたもとよりもまきものをとり出してたびにけ
りしだどのひらいて見給ふに本領のちけんまるかし
これは家につたはるべきてうほうにて候へばもちて
は何のゑきあらんとりて御歸りましませやあねご此
よしきこしめしそれはさる事なれ共たとひ御身しゝ
たりとゑんまのちやうの出仕の時ぐしやうじんの御
まへにてさゝげ給ふものならば道理かぎりあるによ
りなど一ここのつみとがもうかびのがれで有べきぞ
たい持給へとありし時とりてぞもたせ給ひけるさて
しあらぬ浮身にてなごりのたもと引さけてあねご
はかへり給ひけりすでにそのよも夜はん斗の事なる
に小山よりもつかひをたてゑだをばゑづめて有ける

かとくしづめよと有しかばちはらちからなふして小
船一そうこしらへゑだどののをのせ奉りゑづめのいし
をくびにかけさせ申おきをさしてこぎいて爰にてや
ゑづめんかしこにてやしづめ申さむとさすがにしづ
めかねうかれてしばしたいよへりあらあぢきなやよ
のなかにすまじきものはみやづかへわれ奉公の身な
らずばかゝるうき目によもあはじむかしはさうまに
つかへ申このきみを主君とあふぎしそのときは月共
日とおもはずやさんがくよりもたかきおんしらん
よりもかうばしくつきをひまいり申せしがいつぞの
ほとに引かへてうつればかはるみのうさはわが手に
かけてゑづめなばくさのかげにてさうまどのさこそ
にくしとおぼすらんたとへこの事もれ聞えてあすは
ふちにゑづむとも一たんこのきみをおとさばやと思
ひてたいいまこそ御さいごよと念佛をすゝむれば手
をあはせたからかにかうしやうねんぶつを申さるゝ
ちはらもともに申こしのかたなをひんぬいてなはさ

んく切て捨しづめのいしばかりをばだんぶとう
ちいれ南無三ぼう今が見はてとたかくいひゑづめた
體にもてなしたすけてくがにもどりけりこれやしく
わうの御ときにゑんたんが古郷に歸りしもかくやと
思ひゑられてあり

あけなば人めゑげしとてよの間にをくりたてまつり
あかつきかけてちはらはわが宿にぞ歸りけるすでに
其夜もあけゝれば小山よりも使を立ちらはら御前にめ
されゑだをばゑづめてありけるか中々御尋迄も候は
すゑづめ申て候小山聞てさほどゑづめけるに其時の
けむ見をばなどこはぬぞやがて心得たりなんぢはさ
うませんぞの家人心がはりをしておとしぬるとおぼ
えたりたゝとはんにはよもおちじあれがうもんして
とへ承ると申てむざんやちはらを取てふせちうにあ
げ七十餘度のがうもんはめもあてられぬふせい也五
體しむぶんきれそんじ餘りくつうの有ときはしやお
ちばやとは思へ共までゑばし我こゝろちはらは入日

のごとくなり信田殿をたとふれば出る日つぼむはな
なれやよめいをいふ共かぎりありかはれや命とてい
かに間ふともおちざりけり水火のせめをあてゝとふ
是にもさらにおちざれば枯木よりもなはをさみげあ
ぐる時にはいきたえておろせばすこしよみがへる七
日七夜はひまもなくあらてを入かへせめければさの
みはいかでこらふべきあしたのつゆときえにけり小
山おほきに腹を立妻子はなきかかさねてとへ承ると
申て二人のわかはゝもろともに庭上にひつすゆるを
やまたちいでつくくみてかほどくわほうめでたき
身が世になきしだに思ひかへおとしぬるこそむねん
なれ男が云し事をしらぬ事はよもあらじいつはるけ
しきのあるならばやがて男がごとくになすべしとお
ほきにいきり給へばねうばううれへたるいろもなく
たとへばみちになされ申ともしらぬ事は申まじ
有し夜のあかつきしだとのをしづめ申に出るとて小
船一そうこしらへゑだどののをのせまいらせゑづめの

石を首にかけさせ申おきをさしてこぎ出るみづから
あまりのいたはしさにはまにくだり事のやうを聞さ
ふらへば信田殿の御こゑとしてかうしやうに念佛を
めされちほらもともに申だんぶとのゝなつてより
のちはをともせずとてもかやうにうしなはれ申身を
信田殿の御いのちにかはり申一まづおとし申さぬぞ
や是いつはりとおぼさはあたりの浦人をめして御尋
あれと申さらばめせとてあまたをめされくはしくと
はせたまへばその夜のおきのていなに事ありとはぞ
んせねどもみなこの體と申扱はしづめけるものをふ
びんにちはらをとひけると妻子を返し給ふあらいた
はしやゑだどのなをもみやこのこひしくてあけぬく
れぬとのぼらせ給ひけるほどにあふみの國に聞えた
る大津のうらにづかせ給ふかどなみこそおほきにう
んのきはめのかなしさはひとをうとへてうるつじの
藤太が小家に宿かりそめに御とまり有藤太は信田殿
を見參らせかどへてうらむそのためよますがらこし

らへたり御年もにやくに御座あるがいづくよりいづ
かたへ御とをりあるぞと問ければゑだとのきこしめ
されてこれは坂東がたのものにて候がみやこへのぼ
り候藤太承て歩行の御ありきのいたはしさよみやこ
までの御供をばこのおとこが申さんとてやせたる馬
に鞍ををきしだどののをせ奉り我身もともにいでに
ける不案内の御事なれば御やどをもそれがしがひけ
い申さんと五條に行てばくらう座の人あきびとのそ
うりやうわう三郎にいひかたりこま一びきにかへと
つて藤太は國に下るわう三郎がもとよりも鳥羽のふ
なとへうるそれよりも津の國さかひのはまへぞうつ
たりける四國西國にうりまはりのちにはほくらくだ
うのなだをうられさせ給ふわかさのをばま越前のつ
るがみくにのみなと加賀の國に聞えたるみやのこし
へぞうつたりけるものゝあはれはおほけれ共みやの
こしにてとゝめたりおりふしはるの事なるにゑづが
ゑわぎををしへて田をうてとせめければくわといへ

るものを持をだのはらへは出給へどうつべきやうは
 さらになしかのさむくわうのいにしへはまんなわうく
 わうていかたじけなくみづからすきをになひて其一
 けいの田をかへし五こくのたねをまきしかばまんなわ
 うかんわう目度ましやくのほたけも長かりきそれ
 はけんわうせいしゆにてくにをはぐくむ道理ありか
 のしだとののうげうは涙の種をまくやらん野にも
 山にもたつたひめさほのはやしにひれふしてなくよ
 りほかのことはなし

是をみる人々がいたづらものと申てとなりの里りん
 ぐくにかはんといへるものはなしもてあつかふてま
 だどのををひいだし奉るあはれとよそにしろくもの
 たちいでぬればあまのはら身はなかぞらに成かみの
 といろく／＼とあゆめどもとまりさだめぬうかれどり
 なくねに人もおどろきあけぬる門をすぎのした道あ
 るかたにまよひゆく身はうへ人となるまゝたもとに
 ものをこつ本ノマじきくさばにかゝる命をばつゆのやどに

やをきぬらんさだむるかたのなきまゝあしにまかせ
 てゆくほどに能登の國にきこえたるをやのみなとに
 つき給ふおりふしをやのみなとへは夜たうがよせて
 來るとてもん／＼かどをきりふさぎ用心きびしかり
 けりかゝるとよそにてまろしめされずもん／＼門に
 たゝすんで世になしものゝうかれたるにまひまし
 せと有しかばおりふしよはひかたぶきたるせう一人
 來てあらおそろしやこのほど待かくるぬす人のけこ
 見こそきたつたれあれよつてうちころせわかもものど
 もと下知をなすおりふしありあふわかもものどもがろ
 かひのをれやすのえを引きさげ／＼たちいでさやうな
 るしれものはいづくのほどに候とてまだどの見つけ
 申まづ一つえづゝぞうつたりける太夫かさねて云け
 るは一つえづゝはあそび事かあれといのものをたす
 けをきものをいはすれば後には人がそんじ候ぞたゝ
 ひたうちうつてうちころせ若ものどもとげちをな
 すいとゝはやりたるわかものがいたはしやまだどの

をさんぐにうちふせ申今ははや御命もたすかりが
たく見えさせ給ふところにかのうらのとねのねうば
うなさけのみ有者にてゑだどのを見まいらせあら
いはしやこの人はよにすてらるゝ人の子のおやのゆ
くゑをたづねかねかゝる遠國はたう迄來りたりとお
ぼゆるなりまづひらこの人われにたべと申若者ども
これをきゝねうばうのおほせなりとも承る事も候べ
し又うけたまはらぬ事も候べしこの事にをひてはお
もひもよらぬ事なりとひたうちにぞ打にけるねうば
うあまりかなしさにさけをもらふぞたすけよさけと
だにもきゝければおとなしきからわらはべ迄つゑを
すてゝぞつきにける

かくてわかいゑにいれ申いつきかしづきたてまつる
有しほどはなけれどもかたちもすこしなをらせ給ふ
かゝりけるところにはるかおくむつの國そとのほま
のしほあき人かのうらへふねをのるとひはとねのも
となればしだどのを見參らせあの人我にたべとお

さへてゑほにかへとつてふねにうちのせ申十八日と
申にははるかおくむつの國そとのほまにぞあがりけ
るか太夫はなさけもさらになきものにて一兩日も
すぎざるにこのうらにすむものはゑほをやかではか
なほぬぞゑほやきたまへまれ人とゑほ木をこらせて
ゑほがまの火をたかするこそものうけれいといゑほ
たれ衣きてしたもえくゆるかまの火をたくこそは物
うかりけれつらき中にもなぐさむはしはやのけふり
一むすびすゑはかすみにきえにほひてゆく衛のほど
もゑらなみのよるゝそでをゑぼらしてひたちのく
にのこひしさはいとい日々になぐさりけるあきも半
の事なるにかのうらの領主しほぢのしやうじどのと
いつし人はま出して夜もすがら月をながめてあそば
れしがゑだどの御覽じてこゝにゑほやくわつばのめ
のうちのけだかさよ見いれなどのじんじやうさよい
かさまにも太夫はよに有人をかどへきたりたるとお
ぼゆるなり我此としになるまで子をたす我子にせ

んとの給ひておさへてばふてとりたまひちやくそん
とがうしいつきかしづきたまひけりかくてげんぶく
せさせ申さほぢの小太郎殿と申てかみからしもにい
たるまでかつがうせぬはなかりけりかゝりしとき
おりふしこくし國にくだり給ひたがのこうにつかせ
給ふざいちやう御家人はせあつまつてひばん當番を
つとむる國司よりの御ぢやうにはわれひたちの國に
有しときさうまとないきがちんじによつて兩方たえ
て年ひさしくそれも座敷のろんさかづきのけんぱい
さだめのなかつしゆへ也われ在國のあひだに座敷の
やうをさだめんとて左はかつまの太夫右はゑばたの
しやうじそうじてざしきは十三ながれ人數かれこれ
三百餘人くもりたる者をつけざればはれがましさは
かぎりなしなかにもしほぢのしやうじどのわが身老
體なるあひだ養子のちやくそん小太郎殿をいだし申
さるゝならびのざいちやうこれをみてかなふまじと
ぞさゝへける國司よりの御ぢやうには何とてしほぢ

は自身參らぬぞ上をかるくするゆへが其義ならばし
ほちか本領ことゝくめしあぐべきとの御誼也しだ
どのきこしめされて名のらばやとおぼしめすがいや
いや國ひろきところにてもしをやまがないゑん一ぞ
くのありもやせんと思召名乗かねてましますがいま
なのらずば養子の父母のはちといひ又ざしきをたゝ
んもむねんなり名のらばやとおぼしめしけいづをと
り出して國司の前にさゝげらるこくしこのよし御ら
んじなにゝかつらはらの親王よりも六代のこうゐ
んまさかどの御孫さうまの實子しだの小太郎なにが
しとうぢふみけんしよなるあひだ五十四ぐんが其う
ちに是にましたるぞくしやうなしと國司のたい座ゆ
るさせ申なをり給ふぞめでたけれすでに御さかもり
七日とぞ聞えけるざいちやう御番人いとまを申てや
かたゝに歸らるゝゑだどのもおなじくいとまをか
うてかへらるゝ

國司御らんじていたはしゝゝ奥州の國司を三とせ

かあひだ奉る其まにこくしは都へのぼつて安堵を申
て參らせんとてこくし都へのぼらるゝ去程に信田殿
きのふまでは玄ほをやき浮身をこがし給ひしがけふ
はいつしか引かへて五十四ぐんの主と成國をたいら
げ給ひけるひたちの國に候ひしをやまの太郎ゆきし
げはゑいぐわさかへてきはもなし七月七日ひとてた^{本ノマ、}
からものを取いだし七夕にかすならひなり小山殿も
金銀れうらかすのたからを取いだしてたなばたにか
されけるなかに玄だたまつくりちけむまるかしをい
かにみれ共なしこれはよの人のゑるべからず御身の
ぬすみ取てたのたからとなしたるとおぼゆるなりか
かるうしろぐらき人をたのみて何のゑきあらんはや
はや御出候へとていたはしやひめ君ををひだし申
あらいたはしやひめぎみもとよりもかく有べしとご
したればはじめてなげくに及ばずとてめのとばかり
を引ぐしてをやまのたちをぞいでられけるあさまし
やみづからたれを頼ていづくへとてかまよふべき

ぞや信田殿が身をいれしうちうみにゑづまんとては
まぢへくだらせ給ひけりかゝりける處にちはらがご
けまいりなふいたふな御なげきたまひそよ信田殿の
御命には男のちはらがかはり申てさふらふぞやかす
かすのふみ共をとゝめをかせ給へ共ひまがなくて
參らせずさふらふこれ〱御覽さふらへとて有しむ
かしのふみ共をあねごの御手にまいらせあぐるあね
ごこのよし御覽じてあらうれしや玄だはいまだうき
よにありけるぞやかなはぬ迄もさたのためみやこへ
とてぞのぼりつらにいざやめのと是よりもみやこへ
上り尋むさりながらかくて都へのぼりなばよしなき
あだなや立たんとあたりのたつとき寺によりたけと
ひとしき御ぐしをそりこぼし給ひけりめのともやが
ておなじすがたにさまをかへこきすみぞめに身をや
つしみやこへのぼりたまひけり名所きうせきをなが
めこえさせ給ひつゝ三十五日と申にみやこにつかせ
給ひけりにしひがしの京をたづねぬれど其ゆきがた

もなかりけり清水にまいり南無大悲觀世音よろづの
ほとけのぐわんよりもせんじゆのちかひはたのもし
や今一度まだどのにあはせてたばせ給へやときせい
ふかくぞ申さるゝ熊野のたうを尋ねんを脱スルカと南海道にさしか
かりてんわうじすみよしねごろこがはをうちすぎて
くま野に參りて三つのやまこゝろゑづかにふしおが
みたづね給へどゆきがたなし四國九國をたづねむと
だうしやぶねにびんせむこうて四國に渡りあはぢし
まもこゝろゑづかにたづねけりつくしくだりのみち
すがら長門のこうあかまがせきあしやのやまがはか
たの津しかの島迄たづねれどそのゆきがたもなかり
けりなごやを出てせとをゆくひらとのおほしままつ
らみろくじゑづのさとくわんきぎたうじまいはうが
島もちかく成ゆきのもとおりとをるにぞきゆるばか
りのわがこゝろ日向の國にとさの島きのさとにあは
しま豊後ぶせんをさしすぎて肥後の國にきこえたる
おとりたうの山をこえこひはしうしのみつしあその

たけをこえすぎて筑前の國にいきの里遠國はうに
いたるまで名所はつきぬ物也まだの小太郎なにがし
ととへどこたふるものはなしつくしのうちにくもり
なししいざやめのと是よりもちうごくさしてたづねむ
とすはうの國にさしかゝりおほちのこほりあさくら
やごくらくいちときくからに立とゞまりて尋けりは
りまの國にいりぬればあかまつ河原ゆいのしゆくた
かたのわたりやのゝやど名所きうせきをながめこえ
させ給ひてさかひのまつに出させ給ふさうまのもり
からすぎき人まつがをかを尋ぬれどそのゆきがたも
なかりけりすまの浦はすのいけと聞からにおなじは
ちすにのらばやな兵庫につけばみなと川すゝめの松
原うちでのしゆくこや野いたみ手嶋のやどおほたの
まちやあくたがはかうないやまざききつねがは舟に
乗らねどくがなはて月のやどるかかつら川うき世は
くるまのわのごとくめぐりきぬればこゝのえのはな
のみやこにつき給ふこゝのえの内にくもりなししいざ

やめのとこれよりもとの道にさしかゝりくだらん
との給ひてわれをばたれかまつぎかやあふさかの關
の清水にかけ見えていまやひくらん望月のこまのあ
しをと聞なるゝ大津うちでのほまよりもゑがからさ
きを見わたせばかたゝのうらに引あみのめぐにも
ろきなみだかな勢多のからはしはるゝとたづぬる
人のおもかげをうつしもやせんかゝみやまゑちの河
瀬のなみちりてすそは露そではなみたのひまよりも
すりばりやまをこえゆけばあれてなかゝやさしき
はふはのせきやのいたまもる月見たるゐのしゆくす
ぎてうゑしさなへのくろ田こそ秋はなるみとうちな
がめ參河の國のやつはしのくもでに物や思ふらんふ
じをいづくをとをたうみこひを駿河の身のゆく衛ま
つよひの月も雲間を伊豆のくにしだにはいつか奥州
まで三とせ三月がそのあひだゑだの小太郎なにがし
ととへどこたふる者はなしそのとしの文月半にたが
のこうにつかせ給ふころは十四日うらぼんとて上下

ばんみんなをしなべて慈悲をほどこす日成けりゑだど
のも父母のけうやうのそのためにつじくゝにふだを
たてせぎやうをひかせ給ひしがびくにたちを御覽じ
てあれゝゝしやうじ申せとてぢぶつだうにうつし申
能にいたはりたてまつるあらいたはしやひめぎみぢ
ぶつだうにうつらせ給ひ夜もすがら御經をあそばせ
しが曉方になりしかばゑかうのかねうちならし御こ
ゑたかくゑかうありこの御きやうのくりきによつて
一切の衆生ことくゝくむじやうばだいとせうすべし
ことにはちゝさうまどの母御臺ゑだどの成佛とくだ
つなり給へ其中にゑだどのいまだうき世にあるなら
ば御此經の十羅せつによのくりきによつてきたうと
ならせたまひて信田の小太郎に今一度あはせてたび
給へなむさんぼうゝと衣のそでをかほにあてもろ
きは今のなみだかな信田殿もちゝはゝのけうやうの
そのためにぢぶつだうに御座ありて夜もすがら御經
をあそばせしがゑかうのこゑをきこしめし夢うつゝ

共わきまへずあひのしやうじをさつとあけくはしく
見奉りしにあねごのなりゆくすがたなりする／＼と
はしりより御たもとにすがりつき是こそ志だの小太
郎にて候へとてきえいるやうになき給ふあねごもこ
の事をうつ／＼と更にわきまへず扱ひかに小太郎かこ
れこそいにしへのせんじゆのひめでさふらふなれう
きときは道理なりうれしき今のなにとてかさのみ涙
のこほるらんとむつまじげなる御ありさまよそのた
もともぬれぬべし

志だどのおほせるやうはかほどめでたきよのなか
に何をかして御なげき候ぞいさませ給へあね御前
われひたちのくにへうちこへあまりうかりし小山が
かうべをはね此あひだのむねんをさんせんとこそお
ほせけれ尤点かるべしとて五十四ぐんがそのうちよ
りもよかりけるつはものを三千餘騎をろへらるゝを
やまこのよしつたへ聞國にこらへがたふしてにげて
みやこへのぼりけるさるあひだこくしは志だどのゝ

安堵を申給て國にくだり給ひしがみちにてをやま參
りあひこまよりもとんでおりまつびらこのたびのい
のちを御たすけあれと申やすきあひだの事とてたば
かりよせてからめとり京づとゝ名付志だどのにたび
給ふ志だどのなゝめならずに御よろこび有てむさし
のくにつまごひが野邊にひきすへくびうちおとした
まひてあしたの露ときえけるをにくまぬものはなか
りけりやがて志だどの上洛ましまして天下の御目に
かゝらるゝみかどえいらんまし／＼て坂東八ヶ國を
志だどのにたび給ふこのついでにあふみのくにとか
や大津のうらを申うけつしの藤太をからめ取十日に
とをのつめはなし廿日にはたちのゆびをもひでくび
をひき首に志たまへり只人はなさけあれなさけは人
のためならずつゐにはわが身にむくふとにくまぬも
のはなかりけりばんばのしゆくへうちこえまし／＼
てはる草と小太郎もえ出で候ぞうれしきをもつらき
をもなどかはかんせざるべきとをしまの庄三百町ば

んばのていにたび給ふひたちの國へ下向有て信田の
河内にて討死したりしうきしま太夫が子孫はないか
と問給ふ太夫が孫は三人めし出し候ひて三千町をた
びにけりちらはらが後家わかもろともにまいればな
めならずにおぼしめし坂東八ヶ國のさうまんどころ
を若どもにたび給ふやがて御身は信田の河原に御所
を立て御とし廿五にて御代にたゝせ給ひて日非ノ誤ばんた
うばんつとめさせゑいぐわにさかへ給ひけりあねご
のびくにおほかたのと申ていつきかしづきたまひ
しすゑはんじやうときこえけり

満仲

それひそかにおもむみるにおほつてほかなきは天の道なりのせてすつる事なきは地のとくなりはじめきよくしてすめる物はのぼつて天と成をもくしてにぎれるものはくだつて地となるちうわうはにんたり是よりしてくんしのみちをこなはるゝものかをよそ仁王五十六代のみかどをば清和天皇と申奉る王子六人おはしますやうせいゐんさだひでの親王さだもとのゑんわう彼さだもとのゑんわうはびはひきにておはしますかつらの里にすみ給へばかつらの親王とも申さだひらのゑんわうさだよしのゑんわうさだすみの親王とて兄弟六人おはします中にも第六さだすみの親王の御子をば六そんわうと申六そんわうの御子はたゞのまんちうと申奉る其頃みなものしやうを初て給はらせ給ひ上野守と申奉てゆみ矢をとつて天下

にならぶ人なかりけり嫡子津のかみ頼くわう二男大和守よりのぶ三男たゞのほうげむとてひえいざんはちふゐんをはじめてたてられし人なりすこぶるてうかの御まほりとしてうてきをほろぼし國をゑたがへ給ふ事はふる雨のこくどをうるほふすに似たりしやうりのくすりを以そせうの病をいやしけんはうのもし火をかゝげしうたんの暗をてらすゑかる間人うやまふ事かぎりなし爰にまんちうおぼしめしたち給ふ事ありそれしやうじのならひうゐてんべんのことはりはみなゆめまぼろしの世の中也此しやばのぢやうみやうをおもへばわづかに六十年下天のけうらうせう不定の夢なりゆく末とても夢ならざらんやせうじゆせんねんのみどりもしもの後の夢とつゐにさむべしいかにいはんやきんくわ一日のさかへも露のまの身たちちがたし朝にはこうがん有てせいろにほこるといへどゆふべにははつこつと成てかうげむにくちぬよひにはらうげつをもてあそぶといへどあかつ

きはべつりのくもにかくれりわづかなるよのなかに
何にこゝろをとめてかいたづらにあかしくらすら
ん我今生にてかく弓矢をとつて人にをそれらるゝと
いふともまことのみにをむかんするときは數千
人のけんぞくども一人もつきゑたがふべからず只む
じやうのせつきにをつたてられあはうらせつにかし
やくせられんことのくちおしさよ佛法に近付三ぼう
をうやまはんとおもへば弓矢のみちゆるくなるべし
とおぼしめされけれども思ひたち給ふその御こゝろ
すてがたくてあるたつとき上人のあんじつに入ての
給ひけるは我等ごときのしゆじやう等は何として後
生をたすかり極樂にわうじやうすべく候やとたづね
給へば上人きこしめされてかしこくも御たづね候も
のかな尤出家のゑるしにはさやうの事こそ承りたく
候へそれきんめい天わうの御代より佛法我朝に渡り
しやうぐう太子もりやをうちゑたがへしより此かた
ぶつぼうはんじやうの今にをいてそうきやうたにこ

となり爰に法花經と申て八ちくのきんもむの候が無
二無三のほうもんにて候かれにちぐうしけちえんし
給ふべしとおほせければまんぢうきこしめされてさ
て法花めうてんのほんしやくをば佛は何ととかせた
まひ候らんとたづね給へば上人きこしめされてそれ
法花はとんぢんちの三どくより我等衆生の佛生はま
さに出生すと見えたりぢよくすいうでいのなかより
ものりのはちすを開出すぢんらうまうざうはむさの
かくたい也これによつて一代八萬のはなは五時のは
るにひらき三代そくせの月ははつけふのあきに明ら
かなりきうせんたうちやうにたづさはりせつにんた
うくわつにんげんみな一ねんのうち也ぼんなうそく
ぼだいえんしやうじそくねはんのとけりゐんぬちも
みなこれむしやうのめうきやう也ゑやうどもえども
ほんらいいくしやく成とかやさても此御經を釋尊四十
餘年のせつけうの後八ヶ年にゑむじつのさうをと
きはしたまひて候この御きやうにげんせあんをん

後生せむしよとき又はにやくうもんぼうしや無一不成佛とのべたりいちげもんぼうのくどくは五はらみつのぎやうにもすぐれ五ぎやくのせうだつはたうらいさぶつのきべつをうけ八さいの龍女も南方むく世界のしやうだうをとげたりいかにいはんやゆみ矢をとり給ふこともわたくしならずわうぼう佛法のげご國家をまぼりたみをはごくみ給はんゆへなり一世つたしやうのくどく有へし佛もあくまがうぶくしたまふ經ありざいぞくの身にてましますとも御心のむけやうにこそより候はんすれかの天ちくのちやうみやうこじ我てうのしやうとく太子も在家にましゝながら佛法しゆぎやう去たまひぬ十惡五ぎやくの輩もしゆゆのねんによつてむしゆごうのざいしやうをせうめつすべき事はうたがひなく候なりまんぢうとこそおほせけれまんぢうきこしめされあら有がたや候その儀にて候はゞ法花經を一部てむじゆ申度候たとへばぐどんに候共つねは參るべく候一字づゝなり

とも御さづけ候へと仰ければ上人間召れて子細にをよばずさづけ申べしさても此御經を釋尊ときたまひし時は草木國土まつかいじやうぶつと見えたりそくしん成佛をとげ給ふまでこそなくともすいりきえんせつ申べしとてほどなく一部てんじゆ去たまひけるとかやまんぢう心におぼしめすそれ人の一大事は後生なり末の子を一人出家になしわれらが後生をとればやとおぼし召びぢよ御せんと申て十二歳になり給ふ若君をめしておほせけるはなんぢ寺へのぼりかくもんしほうしに成われらが後生をとぶらひてたべと仰ければびぢよ御前はきこしめしあら何ともなや人のうへにだにも出家のすがたはこゝろにそますおもひしにいまさら我身にあたつて請ける事のむようさよとはおぼしめされけれどもちゝの仰にて有あひだちから及ばずりやうじやう申されければやがてなかやまといふ寺へのぼせ給ふまんぢうかさねておほせけるはなんぢ寺へのぼりせはかくもんさいしよに

法花經をよくよみおぼえ其外よろづのぎりをゑるべしと御やくそくありければりやうじやう申てらへはのぼらせ給へども御經あそばさん事は中ノおもひもよらずむりやうの木のかはをはぎあつめよろづのかつらをもつてくさりよろひはらまきなんどいひ木なぎなた木だちをつくつて多坊のちごをかりもよはしとびこえはねこへはやわぎすまひちからわぎかゝる武藝のまねならでは一かうよるひるたいてんぐの矢とりのごとなりゑしやう同宿けうくんすればけつく却而ちやうちやくす寺一番のあくぎやうは此若君一人のちやうきやうなりとぞ聞えけるまんぢう此事を夢にも思召よらず今はやびぢよ御せんきやうをば能よみおぼえてぞ有らんよびくだし御きやうよませちやうもんせんとおほせあつてふぢはらのなかつかさなかみつと申さぶらひを使にてびぢよ御せんをよびくだし給ふちごおもひたまひけるはあら何ともなやこの二三ヶ年寺には候へとも經の一字もな

らはす里にくだるものならば治定法花經よめとおほせあるべしいかはせんと思召がいまさらならふに及ばずとてたいのさにとくだり給ふまんぢうやがて御對面有てめづらゝやびぢよ御せんはひさしく見申さねばねんふせいじん候やしてもやくそく申せし御經をよみおぼえてぞ有らんそれノよませ申せちやうもんせんとおほせければ承はると申てゑたんのつくえに八ぢくのこんでいの御きやうをならべちごのまへにぞをかれけるまんぢう御らんじてかねて申せし事はこれなりあそばせちやうもんせんと仰けれどもとかくの御返事もゑたまはずまんぢう御らんじてなふなにとて經をばあそばさぬぞせひ一字もよみそんじそれがしうらみ給ふなとひぎの上にたちぬきかけてはやノよめとぞ仰けるいたはしやびぢよ御前はつゐに一字もならはぬ經の事なればひほとくまでもましまさず赤面してこそおはしけれまんぢう御らんじて頼むゑるしのなきやつをばかくこそはから

ふべけれどとぬきうちちやうと打給へばこのほど
てらにてならはせたまひたるはやわざのゑるしにつ
くえのうへなる御經一卷をつとつてちやうりやう一
くわんの書と名付しつとゝあはせゐながらうしろへ
ひらりと飛いなづまでん火ふゆうかげろふとぶとり
なんどのごとくにはやちらりとうせて見へたまはず
まんぢうおほきに御はらをたてさせたまひなかつ
をめて仰けるはなんぢ此たちにてびぢやがくびう
つて參らせよとてやがて御重代の御はかせを出させ
給ふ

なかつはあまりの御道理至極にて御座有あひだと
かくの御返事を申さずしかうべを地につけ赤面すま
んぢう御らんじていかさまなんぢはいぎにをよぶか
是非うつてまいらせずば今生後生ふちうのものにて
あるべしと仰ければかさねてちたいの義はあしかり
なんとぞんじ御はかせを給てわが宿所にまかりかへ
るあらいたはしやびぢよ御前はなかつがもんのう

ちへにげいりよにめんぼくなげ成ふせひにてたゝす
みたまふところへまかりかへるひたゝれのそでにす
がりつき給ひかねてより御うちにおほきさぶらひの
なかにとりわきなんぢをこそたのもしくおもひつれ
とてさめぐとなき給へばまさにうつてにつかはさ
れけれ共あまりの御いたはしきになふ何とてそれに
御座候ぞこなたへ御出候へとて内へいれ奉てなかつ
つ申さても御うちにおほきさぶらひの中にたれにも
仰つけられずしわか君の討手をなにがしに給はる事
はひとへに御命のたすかり給ふべきゆへなりたとひ
それがしかくびをはうたれ申共御いのちにをひては
たすけ申べし御こゝろやすくおぼしめせと申ところ
へまんぢうの御方よりもかさねて使をたて何とてび
ぢやがくびをそなはりたるぞとくうつてまいらせよ
とのかさねぐの御つかひたつなかつ承てあら何
ともなや扱は御いのちにかはり申それがし腹を切た
りとも若君の御いのちたすけ給ふ事あらじさあらん

時は何にもむやくたるべし扱なにとすべきぞやまさ
にうてとおほせらるゝは三代さうおんの主君又たす
けよとおほせらるゝも主君にておはしますとやせん
角やあらましとかきあつめたるもしほ草玄んたい爰
にきはまりてせひをもさらにわきまへずいやゝこ
ゝにおもひいだしたる事あり若きみと御同年に参り
あふ子一人あり名をばかうじゆ丸といふ九つのとし
より寺へのぼせ今年十五にまかり成わかきみと御ど
うねんにまいりあふこそさいはいなれ彼者をよびく
だし御命にかへばやとこそおもはれれそうじてこ
のちこのころざしよにうなんにして神妙なりけ
れば玄しやう同宿もおほく有ちこの中にも一大事と
こそおもはれれおほかたすがた玄んじやうにして
やうりうよりもたをやかなりはだへははくせつのご
としあたかもテ脱スルカ十五夜の月の風情一たびゑめばものこ
びありがくもん世にすぐれ一字を千字にさとするなら
びなきちがくしやうの名を得たり殊には詩歌くわ

げんのみちにちやうじしゆえんゆうけう人にすぐれ
玄かる間一字寺ノ誤歟のそきやうあるひはこゝろをたかね
の月にかけておもひを玄がのうらなみによせざりける
はなかりけり一じゆの花をみてはみな我家のひかり
をあらそふごとく也およそ心ざしはさんがくのごと
くきはわうこんよりもなをかたし半夜のかねのこゑ
あかつきのわかれをうらむ一たんのはう本ノマしわかれも
これもたゞおなじいつもこゝろに詩をつくりうたを
ゑいじてかんきよに月日をくり給ひけりかゝるゆ
う成ちごのかたへおやきしよくして迎をのぼせちと
申だんすべき子細の候いそぎくだられ候へといへば
かうじゆ聞て此六七ヶ年か間父母にかうかん申さず
内々こひしくおもふところへむかへの來りたりけれ
ばうれしさたぐひなふして玄しやうどうしゆくにい
とまをこひやがて里に下る父なかみつはもんにたち
てまつちご父を見つけうれしげにて馬よりおりあゆ
みよりけるすがたこつがら禮義したるふせいおとな

しやかなりけりちゝつくぐゝと是を見てあらむざん
 やかほどまでそだてをきたるゑるしもなく只今我て
 にかけん事のふびんさよとおもへば玄のびのなみだ
 せきあへずなんぢをたゞいまよびくだす事べちの子
 細ならずそのゆへは主君びぢよ御せんまんだうの御
 意にそむかせたまひなにがしに討手を給はるところ
 に又若ぎみのたのみてにげいり給へば何としてなさ
 けなくうち奉らんとぞんするそれ義をおもくして命
 をかるくしさかひに望てかばねをとちうにすつる事
 はくんしむの法君は臣をつかふるにおんをもつてし
 玄ん君につかへ奉るに義をまぼつて身をおしまざる
 は忠臣の法なり恩にそくするしんかつゐに一度は主
 君の御命にかはるべきもの也おやにかうある子は身
 を捨てばだひをとぶらふと云事有なんぢ此間寺にて
 がくもんのゑるしにさだめて此むねをは能存知つら
 んめんぼくなき事なれどもあはれ此若君の御いのち
 にかはり申てたべかしとおもひて扱よびくだしたる

ぞといへばかうじゆ聞てにつことわらひうれしくも
 うけたまはり候ものかな弓とりの子とむまれ候より
 しては主君の御命にかはるべき事をおもひまうけ
 て候ひとつには御しうの御いのちにかはり申又はお
 やの御 いに玄たがはんずる事こそさいはいにて候
 へはやゝ首をめされびぢよごせんをたすけまいら
 せ給へ身のいのちにをゐては露ちりほどもおしみ申
 まじそれゑんおふのふすまをかさねても玄んたいの
 やぶれざる間也きくわくのちぎりをいたすもつゆの
 いのちのきえざるほどいつくの里人かひとりとして
 のこりといまり候へき只とくしやうをかへんこそ身
 のよろこびにて候へ去ながらすこしの御いとまを給
 はり候へ母子にさいごのたいめん申たく候といへば
 なかみつ聞てあらふびんの申事やいそぎたちこえた
 いめんあれかまへて此事を母にゑらせてたふなとい
 へば其時かうじゆはらをたて扱は子ながらもみれん
 玄ごくの者と思召御みかぎり候かそのほどは御こ

ゝろやすくおぼしめせとさもけなげに申なし母の御前に参りはゝを見奉てやがてなみだをながす母御らんにてめづらしのかうじゆや此六七ヶ年があひだてらに居たまゝくくだりければさこそよろこぶべきとおもふ身が我を見てなく事よとおほせければ其時かうじゆおつる涙をおさへとりあへず申すさん候彼もろこしのかんわうこくをせめられしときかうせいしやうぐんを大將とし百萬騎をそつしこくへ御つかはされけるに合戦すでに十二ヶ年経てつるに軍にうちかつて古郷へ引てかへるときとくしやうのみやこをよそに見はゝのましますところへゆき母を見奉てやがてなみだをながすはゝ御らんじてこれほどいくさにうちかつてよろこびにてのぼる人の何のうれへの有てなき給ふそとおほせければ將軍きこしめされてさん候こくへまかりむかひしときはゑろき御ぐしも見えさせたまはざりしが今いくほどもなきあひだに御ぐしゑろたへに見えさせ給ひて候ほど

にそれをなき候と仰ければしやうぐんのはゝきこしめし身につもる年月をぬしだにもおもはぬにおやのよはひのかたぶきすゑのちかくなる事をみてなく事よとあはれにもうれしくもおもはれけるとあるふみに見えて候を今更おもひあはされて候ぞや九つとし寺へまかりのぼりし時は黒くわたらせたまひし御ぐしの今年十五にまかりなりくだりて見たてまつれば御ぐしやうゝゑろたへに見えさせ給ひ候ほどにいまいくほどか見まいらせんとかなくてふかくのなみだをながすなりといつはり申たりければ母は誠とおぼしめしふびんのものゝ申事やげに子にてなくば何ものかはゝがかみのゑろくなるをばかなしむべきましてなからんのちの世をとはれんことのうれしやとたいいまさきに立給はん事をばゑろしめされずしよにたのもしくおもはれける母のこゝろぞあはれなる是にゑばらく候て御物語申度は候へどもうけたまはれば主君びちよごせんまなぢうの御意にそむか

せたまひこれに御座のよしをうけ給はる卒度参り御
めにかゝりやがてまいり申さんといつはり母の御前
をまかり立これをさいごと思はれるかうじゆのこ
ゝろぞあはれなる

其後ちご一間所にたちいり御經よみ念佛申一首の歌
にかくばかり

きみかためいのちにかはる後のよの

やみをはてらせ山のはの月

かやうに書えしやうどうしゆくこしのはうへかすか
すのかたみのふみまいらせたくは候へ共これさへか
なふべからずとたゞ文一通にいつはりかうぞかゝれ
けるさてく此たびまかりくだる事はべちのえさい
ならず其ゆへは主君びぢよ御せんまんちうの御意に
そむかせたまひ自身御手にかけてさせ給ひて候をとぶ
らひ申せとてよびくだして候ほどにわがきみの御さ
いごのていみるにこゝろもこゝろならずちゝにもは
ゝにもえのびわか君の御骨をとりくびにかけ高野の

みねとやらんへおもひ立て候ぞや三とせがあひだの
春秋ををくりむかへかならず参り御めにかゝり候べ
しえしやう同宿こしのはうへかうじゆ丸とかきとめ
びんのかみをすこしぬいて文のおくにまきこめてこ
そをかれける我文なから一しほになごりのおしさか
ぎりなし一間所をたち出父の御まへにまいり母ごは
さいごのたいめんこゝろえづかに申て候今ははや今
生に思ひ置事候はすさりながら一間所にふみの一つ
う候をばこの年月すみなれしてらへをくりてたべと
たしかに申をきつぼのうちにわれとしきがはをしき
たけ成かみをたかくまきあげにしにむかつて手をあ
はせなむ西方極樂世界の阿彌陀佛ことには我頼をか
け申大慈大悲のくわんせをんねがはくはほんぐわん
をすてすわれを道引給へとまことにこゝろすいしく
見えければちゝたちぬきもつてたちよりけるがめも
くれこゝろもきえはてゝ太刀のうちどもみもわかす
かなしきかなや春三月の花も無常のかせのふかざる

ほど三五のよるの月も雲のおははざるほどなりむじやうのつるぎをぬき一度身にふれなばいつきのくらゐをてんじてすなはちとくだつすべき也いづれの人かおやとなり何ものか子と生れためしなき事をもらすらんめいえうおちやすし秋一時のでんくわうのかげのうちにつるぎをふると見えしかばくびは前へぞ落にける

かねておもひまうけたる事なればいまさらなげくにをよばずとて若ぎみの御ひたゝれを申おろしひたゝれの袖にかうじゆがくびをつゝみまんぢうの御まへに參り御意そむきがたきによりいたはしながら御くびを給て候今ははや御本望をとげさせ給ふうへ御はらゐさせ給へあら御なさけなの我君の御所存やと申もあへずくびを御まへにさしをきひたゝれの袖をかほにをしあてければまんぢう御覽じあへすいしくも仕りたりさりながらくびをばなんぢにとらするぞ能にけうやうし跡をばとふて得させよとてれんちうふ

かくいりたまへばそのちくびをとりわがしゆくしよにかへりねうばうをよびいだしくはしきことをかたりかうじゆがくびを見せければははかうじゆがくびを見てやがてきえいりものいはすそれえうてうたるくれなるのかほばせはなにそねまれしすがたもゆふべのかせにさそはれせんけんたるみどりのまゆすみつきにねたまれしかたちもあかつきのくもにかくれゑしやぢやうりにんげんのならひしやうじむじやうのことはりはさま／＼おほしと申せどもとりわきあはれなりけるはかうじゆがこととゝめたりさればこそかうじゆてらよりくだりわれを見てなくほどにふしんをなしてさふらへば異國の事をかたり出しみづからをなぐさめしを夢にもみづからゑらぬなりたとへば御しうの命にかはるべき事をみづからいかでとゝむべきぞかくとゑらする物ならばともにかいしやくしさいごのていをみるならばかほどに物はおもふまじなさけなのなかみつやとくびにいだきつ

きふしゑづみてぞなきわたり

おりふしびちよごせんはものごしちかく御座有しかうじゆがさいごのよしを聞召あひのしやうじをさつとあけ立出させ給ひて何と申ぞ夫婦のものかうじゆがくびをうつ程ならば何とてびちよが首をばうたぬぞかうじゆをきらせ我うきよにながらへたれに面をあはすべきとおもひきらせたまふ御色を見て急ぎふうふの者まいり御まぼりかたなをむばひとりけふよりしてぶようの御心中をとめさせ給ひかくもんよきにめされかうじゆがぼだいをねんごろにとぶらひて御とらせ候へはや／＼御ゑのび候へとて人めをつゝむ事なれば夜半にまぎれてたゞのさとを出都につき爰は人めもゑげしとて天台山のゑもやま十せんじの御まへに御供申この神意の御はからひとして此山のいかならんずるせきがくの人にも御付有てがくもん能にめされ候へいかにわが君聞召され天づくにゑしと申はけだものゝ中のわうなり彼ゑし年に三つ

づゝの子をうむ生れて三日と申に萬ぢやうの岩石をおとしてみるにそんせすやぶれざるを子としむなしく成はそのまゝ也かゝるけだもの迄も子をばためすならひの候まんぢうのわかぎみ様を御かんどう候をうらみとはし思召され候ならひせにてはかならずけちえんすべき道理の候いとま申て若きみびちよごせんは聞召やはや歸るかなみつよ浮世はくるまのわのごとく命のうちに今一度めぐりあふべきよしもがななごりおしやとのたまひてはる／＼見をくりたゝすみたまへばゆく道更に見もわかずたま／＼こと問ものとはみねにさわたるさるのこゑも我身のうへとあはれなりふりかへりふりかへり見をくりてあとに心はといまりてたゞの里にぞくだりけるなかみつ我宿所に歸り女房をよび出しなんぼう人のいのちはすてがたきものぞかうじゆがさいごのときとにもいかにもならばやと千度百度おもひつれ共わか君をひとまづおとし申さんためつれなくいのちながらへた

りいまは今生におもひをく事候はすいとま申てさらばとてこしの刀をひんぬいてはらをきらんとせし時女ばらかたなにすがり付しづまり給へなかつよたれも思ひはをとらぬぞ先みづからをがいしつゝ其後腹をきり給へげにまことわすれたり我々なからん其跡にかうじゆ丸がさいごのていきみの御耳に入ならばいたはしやわか君の野の末山のおくにかくれしのかけてましますをさがし出させ給ふならばくさのかけにてかうじゆまるなげかん事もふびん也然るべくばなかつよ自がいをおもひとまりてわれゝふうふ一すぢに念佛申かうじゆかぼだいをとふらひてとらせなばなどかはとくだつならざらんかやうに申せばみつからがいのちをおしむに似たるべしとも角もよきやうに御はからひ給へといひければおもひきりぬる道なれ共至極の道理になかつかさじがいをとまりけるとかやは津の國たゞの里の事扱も若君は十せんじの御前に誠に東西をもわきまへさせ給はず誰

につきがくもんし何と成給ふべき御覺悟もなく只ばうゝとして御座ありしがまことに十せむじの御引あはせかとおぼしくて山よりもゑしんのそうづさんしやましゝけるが若君を御らんじてあらいつくしの少人や當山にては未見まいらせたりともおぼえず國はいづく御里はいかやうなる人にてましますぞとたづね給へばびぢよごせんはきこしめしさん候是はようせうよりもおやにをくれいやしきひとり身にて候とおほせければそうづ聞召れてそれはいかやうの人にては御座あれかしそれゝ御とも申せとて同宿たちに手をひかせわがばうにをきたてまつりてかくて年月つもりければけいせつのまどのまへにひぢをくだきてんだいしくわんのもんこゝろをてらしさんかうのしつないにはゑんどんじつさうのくわんねんにそこをきはめ御年十九と申時しやうほうねんじゆ經をよみ給ひしがかたはらにうちむきさめゝとなき給ふそうづ御らんじてきやうこつやちごはなに

をなき給ふぞと仰ければさん候此御經をよみ候におやにふけうの子はあび地ごくを出す候ほどに身のをきどころのなきまゝにそれをなき候とおほせければそうづきこしめされてふしぎの事をたまふものかな御身はようせうよりも親にをくれいやしきひとり身にて候とまさしくかたり給ひしが今さらふけうとおほせらるゝ事こそ意得がたふ候へびぢよごせんはきこしめしいまはなにをかつゝむべきがくもんもせずふように候ひしにより親のふけうをかうぶりたるものにて候扱おやはいかやうの人にて候ぞ津の國たいの里にまんぢうと申人にて候とおほせければ僧都聞召してさればこそかねてよりたゞ人ならず御すがたを見参らせて候ひしが扱はをとに承るたゞのまんぢうの御若君にて御座ありけるを今迄存申さぬこそ愚僧がふかくで候へ是につけてもがくもんをいかにもめされ候へ御かんだうの御事をばげんしむ参てこひゆるし申さむとて十九のとし御ぐしおろしゑし

んゐんのゑんがくとこそ申けれさればしくわんのまどのまへにはいちしづちうだうの月をすまし又にんにくのころもの袖には四萬相應のはなをつゝみつゐにてんだいゑんしうのわうさうをきはめ給ひて御年二十五と申にししやうゑんしの御供してたゞのさとにぞ下られる昔のばいしんはにしきのはかまをきてこそこきやうの人に見えぬると承りて候が今のびぢよごせんはにしきにまさるすみぞめのころもをめされてふるさとかへり給ひけりまづなかつかさがところへ御出有てひそかにあんないとおほせければなかみつゐそぎまかり出若君の御すがたをつくゝと見まいらせあまりの事のうれしさにしばしはものを申さずやゝ有てなかつかさながるゝなみだををしとゝめあらめでたのわか君の御すがたや候これに付てもかうじゆが事をこそおもひ出されて候へかねてよりまんぢうも御ほつたいの御すがたを御のぞみにて御座候あひださだめて御たいめん有べしやがてま

いりて申さんとてまんぢうの御まへに参り若きみの御事をばなにとも申しださずしこのほくれいに聞えさせ給ふゑしんのそうづ御たいめんのそのために只今御らいいんと申まんぢうきこしめされて何と申ぞゑしんの僧都これ迄の御出とやあらおもひよらずそれ／＼こなたへ申せとて僧都をしやうし奉りまんぢうやがて御對面有てしよたいめんにかやうの事をたづね申せばはかりおほく候へどもわれらごときの大惡ぎやうのぞくはいかにとして後生をたすかり極樂に往じやうすべく候やと尋給へば僧都きこしめされてそれ法花のめいもんにだいつうちせうぶつじつこうざだうじやう佛法ふげんせんふとくじやう佛道ととかれたりほとけも未出世したまはざるときは成佛もなくとがもなし一ねんみしやうい前にはむしやうむしにして成佛のちきだうにあらす人のをしへによらずたゞわれとおぼしめすべきなりそれいちげもんぼうのくどくは九ていこうのせんこんたりをよそ

たしやうくわうりん有べし尤ぶつだうのたよりあり殊更ゆみ矢を取給ふとも合戦のみちまでもこれを思召いださは一念しやうかいのみなもとに立歸てじゆざいは草露のごとしきえてそくしん成佛たるべしとけんしうといふものに見えて候とのべたまへばまんぢうきゑつのまゆをひらきさては弓矢を取候ともしんのむけやうによつてごくらくにわうじやうすべく候ひけりとて御よろこびはかぎりなしときしも比は九月十三夜の名月くまもなかりしにやまありとしらするしかのとをゑもこゝろすごく聞なしてちぎにすだくむしのねまでも我有がほにものあはれなるおりからにゑんがくたつとき御聲にてじやくまくむにんしやうどくじゆしきやうてんかにしいけんしやう／＼くわうみやうしんとたからかにあそばせは誠にむりんのぢうしよなりといふ共じやくまくにして人のこゑもなし四明のならにはあらね共どくじゆの御こゑはばん天たうりてんの雲のう

へにもきこゆらんたつとしと申もあまり有こゝろの有もあらざるも袖をまぼらぬ人はなしまんぢうしゆせうにおぼしめしまことにすいきのなんだをうかべそうづをしばしとめ申されければそうづきこしめされて是は目をさしてごんぎやう子細の候明日歸山とおほせければさらば御弟子の御僧を一七日とめ申たく候そうづ聞召れてこれはようせうよりも身をはなさぬ弟子にて候へども御きやう御ちやうもんのためならば一七日はとめをかるべし御用過なば本山へをくりてたべとのたまひて御かんだうの御事をば何とも仰出されずしよくじつにそうづは御登山有えんがくひとりとまづて七日御經をあそばすまんちう御らんじてさもあれ貴方はいかやうの人にてましますぞそれがしも御年ほどの子をもつて候ひしがかくもんもせずぶように候ひしによつてさぶらひに申つけくびをうつて候が今更こうくわい仕つれどもそのまゐるしも候はず是に候女は其子がはゝにて候がわ

かれをかなしみ御覽せられ候ごとく兩眼をなきつづして候何とやらん御すがたを見奉れば其子にすこし似させ給ひて候事よいかに御臺聞召せこのほど御經あそばされ候御僧こそ有しびぢよに少似させたまひて候と仰ければみだいきこしめされてあらなつかしやさふらふ今より後はさしたる御ようさふらはす共つねはたちよらせ給ひ御きやうあそばしみづからなぐさめて給はりさふらへえんがく聞召れてさては我ぶようによつて母のまうもくとならせ給ふ事よさこそ佛神三ぼうも我をにくしとおばすらんざいしやうのほとこそくちおしけれとほつとていきうしたまひてきねん申されける事こそしゆせうなれなむりやうせむ世界の釋迦せんせ法花しゆご三十ばんじん本山こわうさんわう十せんし佛法のいりきれいげん地におち給はずば母のまうがんをたちまちひらかしめ給へがけんとうみやうぶつほんくわうすいによしと此もんをとなへかんとんをくだきいのられければ誠に

佛神もふびんにおほしめさるゝか本尊の御まへより
こんじきのひかり立てきたの御かたのいたゞきをて
らし給ふまんぢう大きにおどろきなふあれゝ御ら
ん候へほんぞんの御前よりこんじきの光りのたゝせ
たまひて候と仰有ければ北の御方聞召それはいづく
に候と御らんじければありがたやしゐてひさしき兩
眼たちまちはつとひらけゝりきどくなりとも中々申
ばかりはなかりけりまんぢう夫婦手をあはせ誠のい
き佛にて御座有けりとてくぎやう禮拜したまへばゑ
んかく座をさつてをそれをなすまんぢう御らんじて
あらかたじけなや何とて御座をさらせ給ふぞさん候
釋尊御せつぼうのみきん父じやうばん大わうの御ち
やうもんに出させ給ふ時は佛たにもれんげ座をさり
給ふにましてやわれらはいやしき僧いかでかをそれ
をなさゝらんまんぢうきこしめされてあらおろかの
おほせやそれはをや子のれいぎ是はいしやうたもん
の事何かはくるしう候べきゑんがくきこしめされて

今はなにをかつゝむべき我こそ有しびぢよにて候へ
なかつかさかなさけによつて我子のかうじゆをきり
我をばたすけ候ぞや彼僧都につき奉りふしぎにかゝ
る身とまかり成て候とかたり給へばまんぢうふうふ
ゑむがくのころもの袖にすがり付是は夢かやゆめな
らばさめての後をいかゞせんまことはうつゝなりけ
ればうれしきたぐひましまさずさればこそ能らうど
うには別しておんをあたへめしつかふとは今こそお
もひしられ候へなかつかさ情をば生々世々わする
ましとのたまひていそぎふうふをめされやこれゝ
見よやふうふの者今より後はびぢよごせんをなんぢ
ら婦夫がためにはかうじゆ丸とおもふべし後生の事
をばたのもしくおもへとてまんぢうも北のかたもな
かつかさふうふのものゑんがくにいだきつき給ひう
れしきいまのなみだには一しほぬるゝたもとかなを
よそ九萬八千町の御領をふたつにわけ藤原のなかつ
かさななみつにあてをこなはせ給ふ又かうじゆ丸が

ぼだいをとはんためせうとうじと云てらを立本尊にはちごもんじゆを作てしゝにのせ給ふそれ法花といつばみたゑしやうほうまんとくのくらゐ三世の諸佛しゆつせほんくわいは衆生成佛のちきだうなりきやうにあらはすときはめうほうれんげの五字につゝめなにとく時はなむあみだぶつの六字にせつする也あるひは五ごうしゆいのゆひしのきやうを六字のなにつゝめ十こうしやうがくのくわとく一念しやうねんの衆生にほどこす見えたりしゆいといつば座せんのみみつ也てんだいにはしくわんとときしんごんにはしつさうけうさうとのべたりほつさう三ろんにはくう有のにうの二相にかゝはるくきやうきよゆうのめいせむも皆是いちしつふさうのかいけんにかすたいしゝふしゆせつかほうめうなんしとくわんすべしめうらく大師の御しやくにいはいくしよけうしよさんたさいみたゐる西方にゐ一しゆんゆいしんのみだこしんのしやかとなればほんらいむとうざいがせう

うなんばくときくときはいかにもしてこゑに出して念佛を申べしあみだは本來のめんもく也十まんをくどもへだてす我等がほうすんのうちれきゝとして分明なりもとよりはうがくなしたねんしやうゝたりあにしきさうにあづからんやもとより法花と念佛はいちくのほうもんなりされば古佛のてんにいはくしやくざいりやうせんみやうほつけこんざい西方みやうみだぢよくせまつだいみやう觀音三せりやくと一體りしゆしやと云々いかにとじて法花と念佛かくべつにこゝろうべき只生死は春の夜の夢のごとししんによの月はもとよりめいはくたりたにんのじゆみやうをかつて自身の命をつぐまよひのまへのせひは是非ともにひなりさとの前のせひはせひとともにせなりじた一によたりふんみやう成かなやさきに死するかうじゆ後ににするびぢよ御前今ははや名のみばかりぞのこりけるさればくうや上人の一しゆの歌にかく計

よの中にひとりといふものあらは

もしわれかはと身をやたのまんと

ゑいじ給ひけるとかやとうばうさくか九千ざいうつ
らの八萬ざいも名のみばかりぞのこりけるひさう八
萬こうむとうかねぶりもたゝ夢のよのうちなりまん
ぢうの御こゝろ法のためにくわだてざいしやうみな
かれをくみぼだいのみちあきらかにしゝそんゝも
はんじやうし天下をたもち給ふ事千秋ばんせいのみ
なもとをあらはし給ふ物なり

又かやうに義をもんじ命を軽くし名をのちのよに
のこしをくかうじゆまるが心中じやうこもいまもま
つだいもこれやためしなかるらんと人々申あひにけ
り

いわうかしま

爰にかどわきのへいざいしやうのりもり折を得て小松殿にまいりおとゝに申されけるは其人のなげきをやめ給はい身のよろこびも有ぬべしいわうが嶋のるにんを今度のうちにしやめんなりたまはゞさこそよろこび申べき先あんじても御らんせよさつまがたいわうがしまのうきすまゐおもひやるさへふびん也おといげにもとおぼしめしじやうかいへ参り此よしかくと申されければじやうかい聞召れて丹波の少將なりつね平判官やすより二人の御教書出さるゝおとゝかさねて仰けるは三人をめしあつめ一つ島へながし二人めしかへし一人とゝめさせ給ひなばいよゝうらみはふかかるべし只このついでではゑかるべうもや候らんと申させたまひければじやうかいいきこしめされてほつせうじのしゆぎやうが事はすいぶんじやう

かいが口入によつて人と成しものぞかしそれに東山しゝの谷にあつまつてさんゝにあつこうしぬと聞しゆぎやうが事にをひてはじやうかいはゑるべからすとおほきにいからせ給へば此上ちからをよばすとて二人のみげうしよばかり八でうどのより出さるゝおなじき使廿日に京を立さつまがたと惣名奥七たうはたうどくち五たうは日本なりそうじてしまは十二島はじめは白石がしまちどりがしまいわうが島へ一人づゝながさるべきにて有しを問わきどのゝ御せうふかきによつていゝわうがしまへながさるゝかく三人の人々はとせんさのあまりにいざや島めぐりしてあそばんとて島めぐりをぞゑたまひけるげにや都にてつたへきゝしよりはるかにこえておぼえたりいぬゐよりたつみへてうさんつらなつて百千まんのいかづちのをとたえずみねにはらいでんひまもなくふもとのさとにあめふりて昔は鬼がすみければきかいがしまとも申なりいまは又何となくみねにいわう

がたらければさつまがたいわうがしまとも申なりた
またま此しまにすむ人は我住國の人にかはり我いふ
事をかれゑらずかれいふ事をわれゑらず男はあれど
もゑばしきす女はあれ共かみさげすゑつがやま田を
かへさねばべいこくのたねもなかりけりそのくわ
をとらざればけんばくのたぐひもなかりけり水をむ
すばんとはさはにくだりこたら木をとらんとては
さんりんに入てまよひけり明暮月日ををくりけるう
き身のほどこそかなしけれ

され共少將の御ために御しうとにておはしますかど
わきの平ざいしやうのりもりの所領肥前のくにかせ
の庄たるによつて少將一人のいしやうしよくじを日
にゑたがつてをくり給へばせうしやう一人のいしや
うしよくじをもつて二人の人々をはぐくみ給ふたん
ばのせうしやうなりつね平判官やすより一つこゝろ
に仰付けるはわれ都に有しときくま野をゑんかう申
十度參らんと大願をおこし五度づゝまいり十度にた

さむと思ふときこのゑまへながされぬまことや熊野
のごんげんはわれをねんせむ衆生のあらばのゝすゑ
山のおくにありともひかりをさしてみちびかんと
御せいぐわんほんしん今にたかはせ給はずばいざや
此島へごんげんをくわんしやう申我等が歸路をいの
り申さんさて僧都はなにとかおぼしめすそうづ聞召
さんわうの御事ならばゑかりごんげんの御事ならば
さして信心は候はずこのうへちからをよばずとて二
人すぐゝと御立ありまんゝたる海上を見わたし
かくとあるいそ邊をめぐり三の御山に似たるところ
をたづねけりあるひは山高して津水ひさしくながれ
出あるひは木々のこずゑれいゝとしてをばだてり
爰は本宮せうじやうでんかしこはゑんぐうかんのく
らはるかのかきたにあたりつゝはくせきのがゝとある
よりもりうすいくもよりながれ出松のあらしもかみ
さびひれうごんげん出たち有なちの御山に似たりと
てこゝをなちとぞ定めけるつの國くほつの王子より

九十九所のわうじくをかたのこくくわんじやう
申それよりくろへに御下向あるそのまにそうづはた
かきところにあがり東西南北を見わたしようづくわ
んねんじてましますに黒雲あつくへだゝつてせきが
んくづれて海に入其時僧都本ノマせんにふるき詩を思ひい
で風佛前に花をさんすきしくづれて魚がいますそのき
しこゝろなふして罪をえずされば五體は五つのかり
物地すい火風をかたどれりこゝろはこくうのごとく
にてかたちなければいろもなし諸法は有無の二道に
てありとも見え又はなし立ててもゐても座せん也とは
かいむぎんの高枕しをきぬふしぬとゑたまひけりか
くて二人の人々は日數つめどもたちかふべきじや
うえのあらざればあさのころもゑほにくちたるをさ
はの水にてあらひ岩田川のきよき瀬にてぼんなうの
あかをそゝぎ五だい王子ふしおがみそれより山路に
あがりければたかはらやみねのあらしにさそはれて
いわうをこして參るにぞちうてんちくもとをからず

ちうでうちかつゆくませ河はつしんもんにもいりぬ
ればはやほんぐうにまいりけりあら有がたやこれこ
そ本宮せうじやうでんにてましませいざやわれらが
きらくをいのり申さんさんまいがあらざればはまの
まさごをうしほにてあらひさむまいと定め花を手折
て御へいにさゝげ歸洛ののつとをぞ申されけるさい
はいくこれあたり來るさいし治承二年つちのへい
ぬ月のならびは十月二日目の數三百五十餘ケ日吉日
りやうしんをえらむでかけまくも忝くまします日本
第一だいいりやう權現ゆや三所ごんげんならびにひれ
う大さつたのけうりやううつのひろまへにして信心
のだいせ主羽りん藤原のなりつねならびにしやみし
やうしゆ一しんしやうくのまことをいたし三ごう
相應の心ざしをぬきんで謹以敬白それ清淨大ぼさつ
はさいどくがいのけうしゆさんじんゑんまんのかく
わうたり兩所ごんげんはとうはうじやうるりいわう
のしゆ衆病しつちよの如來たりあるひはなんばうふ

だらく能化しうにうしゆけんもむのたいしにやくわ
うじはしやば世界のほんしゆせむしやのたいしちや
う上のぶつめんを現して衆生のしよぐわんをみてし
め給ふかるがゆへにかみ一人をはじめしも萬民にい
たるまであるひはげんせあんをん又は後生せんしよ
のために朝には淨水をむすんでほんなうのあかをそ
そぎゆふべにはせんざんにむかつてほうがうをとな
ふるに感應をこたる事なしがくと有みねのたかきを
ばせんとかの高きにたとふけんくとある谷のふか
きをばぐせいのふかきになぞらへ雲をわけてのぼり
露を去のびてくだり爰にりやくの地をたのますばい
かゝあゆみをけんなんの道にはこばんやごんげむの
とくをあふがすばなんぞかならずしもゆうゑんのさ
かひにましまさんやよつてしやうく大ごんげむな
らびにひれう大ぼさつはしやうれんじひの御眼をな
らべさをしかの御みゝをふり立われらが無二のたん
せいをぢげんして一々のこんしゆをなふじゆせしめ

本ノマ、

給へまくのみりやうしよごんげむは各儀にまたがつ
てあるひはうえんの衆生をみちびき又は無縁のぐん
るいをすくはんがためにまづほうしやうごんのすみ
かをはなれ八萬四千の光りをやはらげかりにすいし
やくとげんじ六道三有のちりにどうじ給へりかるが
ゆへにしやうこうやくのうてんくちやうしゆとくち
やうしゆとらいはいそでをつらねはいはくれいてん
をさゝぐる事隙もなしにんにくのころもをかさねか
つごうの花をさゝげ神殿の床をうごかし信心の水を
すましてはりしやうのいけにたへたりせんめいな
ふじゆましまさば諸願なんぞ成就せざらんやねがは
くは十二所ごんげんりしやうのつばさをつらねては
るかにくかいのそらをかけつてせんこのれへをや
め歸洛のほんくわいをみせしめたまへさいはいく
と禮拜してじやうえのたもとをまぼるはありがたふ
こそきこえけれ

つきしま

抑中むかしの事かとよ其ころ平家の大将をばあきのかみ清盛と申奉る御出家有てのかいみやうをば淨海とこそ申けれある時一門れん座の座敷にてのたまひけるはそれ人のよに有ゑるしには大ぐわんおこしあるひは國をあらため里山くわうやを名所となしたみすなを成まつりごとを末代のかたみとするなり天下のまきしゑきやうを我まゝにふるまふといへど平安城のこうりうはじやうかいがわざならずまかるにかの平の京は左青龍右白虎せんしゆじやくごげんむしじむ相應の地をまめし北にはたゞす鞍馬寺きぶねの奥よりながれ出る水のゆく衛を白川や東山に三井寺しゝの谷のみねつゞき鬼門にひえい山でんげう大師のさうくたり南におとこ山いは清水と名付和光のかげくもりなくはくわうほうそをしゆごし給ふ西山

のふもとにまつ尾とほうりんじかめやまのおくよりもながれいづるきよたきをおほ井川と名づけすゑをばかつら河といふ仁和寺御むろくわうりうじ佛法ごぢのこの京にてたえす事あるまじいつらくもの案ずるになんばの四天王寺とならの京もたえせずたとへば九條にたらずとも末代のかた見に新京をたてゝ見ばやとてとをき國のさしつまでくはしくみるに地きやうなしさでのみやまんむねんさに兵庫のうらをわつてみるにわづか五でうのところなりこれならではまかるべき地形も更にあらざればしよせん是をふくはらの新京と名付里大りをざうしんせん此京はんじやうするならばじやうかいのなきあとのかた見と人もおもへかしあきのいつくしまをもこの儀をもつてざうしんす人々ところおほせけれ御一門の人々此儀尤まかるべう候とおのゝひやうごにくだりさと大りをたてかくてこゝにすませ給ふ時の御しうとに平大納言時忠すゝみ出て申さるゝあ

はれおなじう候は、あのしゆかいをうめさせふねの
とまりとなすならば本てうにをひてかほどの名所あ
らじとこそ申されけれじやうかいきこしめされてそ
れこそなによりもつてきかまほしき事さうよ西國西
國の船どもがつくならばいよくふつきたるべしす
まいたやとはとをあさなり一の谷にあらいそにてわ
だのみさきへよる船のいそまでつく事なきあひだ江
島がいそより吹風にはつそんするとてかなしめば此
京立てきよくもなしとてもいちごの大ぐわんにわた
のみさをすぢかひにたつみむきに海上を三町計う
めさせそのしまのうへに任家をたて船のとまりにな
すならば數千ぞうのふねつくともかせのなんにはあ
ふまじいたゞしはるかのかのしむゑんをうめんする事ど
もこそはかりがたふは候へども民をはごくむまつり
ごと龍神も佛神もなかあはれみなかるべき五條の
大納言くにつなのきやうはおはせぬか御身奉行して
嶋つかせられ候へ國つなのきやうは承りかやうに申

せばおほせのむねをそむき申に似て候へども昔もさ
るためしの候せうへいにまさかとはばんどう八ヶ國
をたいらげ下總の國さうまのこほりに京をたてまつ
りごとをなし給へどもこよみのはかせがなくして年
のさかひをえらざれば五せつのいはひもさだめえず
ほどなく運命つきはてぬ是は末代までもめでたかる
べき御ぐわんなればはかせをめされ候てくはしき事
の子細をも御たづねあれと申されたり淨海聞召さる
事ありとの給ひて清明がながれあべのやすちかやす
のりに三代のけうい安氏と申て天下のきつけう世を
はかるはかせをいそぎめされけりやすうぢやがて參
らるゝじやうかい御らんじていまにはじめぬやすう
ぢがうらかたにふしんはよもさうしわだの三さきの
すぢかひにたつみむきに海上を三町ばかりうめさせ
て其まのうへにざいけをたてふねのとまりにせさ
せんと近日におもひ立ぬるは成就すべきかいかさ
う占かたかんがへ吉日とつてまゝ成就のきせいをみ

やうのかごにまかせてたべやすうぢところ仰けれ安
氏承てもとよりうらは上手うらきところのしかん
きやくごぎやうさうそくのうをんたうしゆくやう十
二道六みやうたいやうさんじつ迄わうさうをきはめ
てかんがふるにあやまる處はなけれ共うらに一つの
ふしんが候島をつかせて御覽せよ一度にこのま成
就せし事のていにりをうけうらなひ申候はん吉日は
三月十八日吉時はたつの一天とうらなひさだめ申し
やうかいきこしめしさらば國つなぶぎやうをせよう
けたまはると申て大和山城伊賀いせはりま津の國丹
波七ヶ國の人夫をもつてむこ山しうち山のいはがん
せきをくわつ／＼と引くづしてわたの三さきへはこ
ばせけり朝うめける大もつはみつしほはやくてさし
のくる岩をかさね人夫をましょゐにうめける大もつ
はあかつきひくしほはやくしておきへはつと引ては
出うむればさつとゆりくづす大もつ大石數えらすろ
うぎがいさごのだうにはおもはゝたよりも有ぬべし

五萬人の人夫をもつて十日ばかりはうめけれどもす
こしも煮るしの見えざるは龍神なふじゆなきやらん
扱いかゞはせんとの御誼なり

じやうかいきこしめしことのほかに御はらをたてさ
せたまひはかせのやすうぢをめしておほせけるはな
んぢは何とうらなひたるぞさらに此島成就せずい
れんを入て見せてあればうむべきところにいしもな
くよしなきかたにちりぬさすがそこにはなみもなく
殊外ゑづかなると申がいかがやうの子細にてさやうに
は有らんさてのみやまんずむねんさよいかゞはせん
との御ぢやうなり安氏承てさうなくふしんをひらき
えずやゝあつて申けるはげに世にすむならひは大事
にて候うらのまゝ申せばわが身のあだ申さねばてん
しのゐをくだすりやうやうちうくわの身たるべしそ
れ人間にかぎらず生をうけぬるたぐひのいのちに過
たるたからはなしされば佛もいましめて五百かいの
其中にせつしやうかいを第一にたもてとけうげし給

へり此大願に御とが御座あるべし是はひとへにやす
うちががうと成なん事こそ何よりもつてくちおしけ
れそれをいかにと申に人ばしらを御たてなくしては
更に此ま成就あるまじきとうらのおもてに見えて
候ゆゑしき罪業これなるべし御思案あるべく候一人
ならず二人ならず三十人の人ばしらが立べきなりと
申淨海聞召れてもたせ給へる御あふぎにてたゝみの
おもてをちやうとうつてやあ此事披露有べからず何
としても此島の成就すべき事こそさいはいなれそれ
堂たうをたつるにも一たん國のゆるぎたみのこゝろ
をなやませばせんも惡をさきとする也それ善惡の二
法といつぼうらとおもてのごとしいまこのまの人の
ばしらにたちなむものもかならずくわこのしゆくゑ
んなくしてはいかに思ふとよもとられじさりながら
人ばしらを一度にとらばあらはれてるじをとめて
惡かりなるときぐゝとれとの御誼にていくたこやの
のあたりにいかにも人をかくしをき京よりも下るも

のはじめて京へのぼる者中にてとつてをしこめてこ
ゑばしたつなといましめてこくしやうするぞむざん
なるさこそきうりのこひしさをおもひやるこそあは
れなれとられぬるもの共がかく有べしとごしたらは
老たるおやにいとまごひなりおしき妻子にも形見
をとらせてゆくすゑのすぎはつべき言の葉をなか
は語りをかざらん只かりそのめの事なればけふよあす
よとまちくらし風のそよとふかんにもすはやおも
はん心ざしいつをたのみにまつかね山むなしき月日
をぐら山ゆく衛をゑらねばよもたづねじ我身のきえ
む命より待よむむなしきなるさとをおもひやるこそ
あはれなれとろうのとぼそにとり付てかなしみあへ
る有さまをみるになみだもせきあへず一人二人の事
ならず二十餘人とりぬればいゝ田こやのゝへんにこ
そへんげのものが住やらん道ゆき人を中にてとつて
ゆきがたゑらずと風聞すれ親をとらるゝ者も有一人
もちたる子をとられきえむとかなしむものもあり丹

波はりま伊賀いせ近國たこくのもの共がいくたのあたり
にみち／＼てたとひまゑんのものがきてわがち
ち我子を取たりともせめてまがいを見せてたべいつ
ごろかこの野邊にたび人うせて候と尋かねたる有さ
まは野がひのうしのくれごとに子をたづぬるがごと
くなりかくするほどにかべにみゝいはの物いふよの
ならひ兵庫の浦の人 しらにこと／＼くとられぬる
とぞきこえける

たづねかねたるもの共が里大裡に参りていしやうに
ひれふしこれは丹波のわだのものははりまのあか
しの者これはきんやかたのゝものあるひはいが伊勢
都のものたすけ給へと聲々にかなしみあへる有様は
めいどにおもむく罪人のゑんまほううぐしやうじ
んみやうくわん達のしやばにてのつみをかゝみにう
つされごくそつの手にわたる時六道能化の地さうそ
んたすけ給へとこゑ／＼にかなしみ給ふもかくやら
ん生死むじやうのうきよのなかげんせもめいどにた

がはずとよそのたもともぬれぬべし御一門の人々此
よしを御覽じてまづむものこるもをしなべて一かた
ならぬしうたんども未來のごうとならせ給ふべした
とへばこのまもなくしても何にふそくの御座あるべ
き今は扱のみ候へかしとをの／＼申されたりければ
じやうかい聞召れて何とさう一門の人々たま／＼淨
海が思ひたちぬる大願をさまたげんとのせんぎさう
やじやうかいもさほどの道にまよふべきにて候はず
それまかだこくのおじやせわうは佛生國のしやうぐ
んわうにうたれさせ給ふかいにち大わうは八萬四千
人のきさきをころす一しやう太子はりうじゆぼさつ
のいのちをとる神通第一のもくれんはちくしやうげ
だうにうたれ給ふむしやうのく本ノマにのほり給へる釋尊
だにもだいばだつたに御あしをうたれ給ふこれおん
ぞうゑくのほうなりいはんや末世の人間にをひてを
やせんあくふたつのりなくして成就する事あるべか
らずくにつなのきやうはおはせぬか庭上にひれふす

やつばらをもむよりそとへをひいだしじやうをつよくさひてをけ左右なく人をいるゝなどないしんにはらはたゝねどもあるゝけうきを見せんがため御ざしきを御たちありいたあらかにふみならし此島むやくとおぼさんする御内とざまの人々御出仕はかなふまじいじやうかいけうくんせむものはあめがゑたに覺えずとあひのしやうしをはたとたてれんちうふかく入たまへば御一もんの人々此よしを御らんじてやく神こんまがきたつてもこの人などむる事あらじ三十人の人ばしらをなかゝいそぎそろへよとてゑのびゝにとらすれば二十九人ぞとつたりける今一人とらんする國ともへいあんあらざれば道行人もとゝまつてへんろ遠路のたび迄もおぢをのゝひてとをらす一人と成てぞ日をくるあつばれ國土のわづらひやあふさながらたみのなげきなり爰に諸國をめぐるしゆぎやうじや一人兵庫のうらをとをりける取手の人數是をみてこゝをとをるはしゆぎやうじやの身

なれ共人待かぬるおりふしとをりあふこそさいはいなれ是を人數にせんとてくびにかけたる笠もぎすてやがて人數にぞなしにけるかくて三十人の人ばしらの思はいづれをとらねどなかにも彼しゆぎやうじやのゆらいをくはしく尋ぬるにたとへは津のくになにはいりえのみつまつに刑部左衛門國はると申人にて候か四十のいんにいるまで子のなき事をかなしみくらまのたもんに參り申子をこそしたまひけれくにはる三十二妻女二十八と申八月にゆふなる姫をまうくるときしも八月十五夜のくまなき月のさよなかに生れぬるひめなればとて名月女と名付てかん家本てうにもためしなふこそかしづきけれ其心中はくわう女にてえんでんたりしさうかはるんさむの月にあひおなじかすみのうちのやまざくらにはひあくまで身にあまり人にまみゆる其すがたいけのはちすのあさつゆにかたぶくふせいもかくやあらんひめのすがたを見きく人をよぶもをよばげりけるものぞみはおほく

ありけれどもせのうちの八重ぎくもつゝめば色のま
すふせいりやうじやうするかたあらずして十三のく
れまでひとりすむ十四と申花の春父にも母にも玄の
びめのとのねうばうはかりひきぐしてあしやの野邊
にたちいでちぐさのいろをながめてあそぶ爰にひと
つの物語あり丹波の國をがはのしやうのせと申とこ
ろはおむろの御領也けりかのとこのあづかせをば
仁和寺の藏人かねうちとこそ申けれその人の子に藤
兵衛いへかぬとて其ころ十九になりしが詩歌くわけ
んのみちにちやうじなさけも人にすぐれたりしが河
内の國きんやに所領あるによつて十日ばかりきんや
に有しが是もつれぐさのあまりにあしやののべに
たちいでゝうづらがりぞしたりけるいへかぬ何と
なくひめのすがたを見付うつろひやすきむらさきの
いろそめぬるこそよしなけれこゑたつばかりに思へ
ども思ひのいろに立出てはあしかりなんとおもひと
ものものをばはるぐと玄のばせ我身は一むらすゝ

きのさぶらひけるにやすらひ立てひめのすがたをこ
ころ玄づかに見たてまつれば夕日にしにかたぶき給
へば姫は家路に歸らんとてこまつなぎの一ふさもえ
出たるをとりもちて

春はまつこまつなぎにぞわか葉さす

・ ふるはのいろも見えわかばこそ

くさむらに玄のぶいへかぬが玄のおころのつゝみ
かねて

春の野にぬしも見えさるはなれこま

くものいにてもつなぎとめばや

かやうにゑいじてあらはれ出る名月は御覽じてあら
はづかしや此のべに人あるべし其玄らすしてくちず
さみけんかなしやと思召れけるあひだおもひのいろ
もあをやぎのいとはづかしげなる御有様はつゆに玄
ほるゝ花かとよめのともさそはでふりすてゝいそが
はしげにてかへるさはあらしにたぐふ落花のふけゆ
くふせいもかくやらん家かねいとゝころのあこが

れてめのとがたもとをひかへふうふなさけの和合も
わたくしならずまじゆうのうちのあひしやうもいづ
もじの神の結びなりとらふすのべをふみならし草む
らにきえむも此道なりいせ物語げんじにもかやうの
事をこそつたへて候へたとへばそつじの儀なりとも
かせのたよりになびけてたべ御供の人といひすてゝ
いそぎをつつき候ひてらうせきながら御ともを申べ
きにて候とこそこともまらぬのべよりも取て馬にう
ちのせ申めのともともにひきぐして丹波ののせへぞ
かへりけるあらいたはしや二人の人々はふるさとま
のぶはなか／＼てうせきひまなくおもへ共めのとほ
をそれてをとづれす名月はちゝはゝのふけうをいた
くはゝかりあけぬくれぬとせしほどに三年になるは
ほどもなし國はるふうふのなげきは申ばかりもなか
りけり人の子の能よりもあしき我子をばなをしふび
んにおもふならひいはんや是は佛神にきせい申て只
一人もちたるひめにて有あひだよにたぐひなふかし

づきしをゆきがたまらずうしなひてなげく思ひはい
かばかりいたはしやはゝ御せんは三とせと申秋のま
もおもひにきえてぞはてにける刑部のせうくにはる
はひとかたならぬ思ひともに妻女のかたみをとりの
つめ高野のみねにのぼりつゝおくのゐんにてもとひ
きり妻女のかた見をこめをきて姫がゆく衛をたづね
んとて高野のみねを下かうして先三熊野にまいらる
る三つのお山をふしおがみたづね給へどゆきがたな
しだうしやぶねにびんせむし四國に渡りてたづぬれ
どもそのゆきがたのあらざれば又船にびんせんしは
りまのむろにあがりつゝ都の方のゆかしさにあけぬ
くれぬとのぼるとて兵庫のうらをとをりけるが取手
の人数にゆきあひておさへてとられてろうしやと成
ともにかくにも國はるの運のきはとぞ聞えけるすで
にこのまは三月十八日のたつの一てんとさだまり
けれ共人ばしらのわづらひによつて卯月も過て五月
になる卯月五月はよき日もなしとて六月二十三日の

うしの刻にぞさだまりけるとられぬる者共がとても
たすかるべきいのちにあらずはやしてうみに入られ
てみくづと成てきえばやおもひきることあはれな
れなかにもくにはるの思ひぞいとあはれなるかく
あるべしとごしたらば高野のみねにてつゆとも玄も
ともきゆべきものをうきよにもしもながらへばひめ
がゆく衛やきくとおもひかゝるしゆぎやうにおもひ
たつて今さらうきめをみる事よかほどにうすきゑん
ならばなにしに生れきたりけんうらめしのちぎりや
とてをや子のちぎりをは今更うらみ給ひけりか様に
おもひたまひけるうらみのねんやつうじけん又かみ
のめぐみにてや候ひけん丹波ののせにまします名月
女の御かたへふしぎのたよりぞ候ひけるそのゆへい
かにと尋ぬるにたとへは津の國わたなべちかきかん
ざきにくつはのしやうじながきよと申人の子にこん
どうじまげともとてさふらひしが是もくにはるのひ
めのすがたを見つけよりくこゝろをつくせしに思

ひのほかにかのひめのうせぬるよしをつたへきゝ世
をあぢきなく思ひきつてやがてとんせいし諸國をし
ゆぎやう仕るがたんばの野せにつく名月女のましま
すとは夢にもおもひよらすいへかぬかもむぐわいに
たゝすんでそでのうへのときれうを所望してやすら
ふかさもあれくにはるせんもむはひやうごのうらの
人ばしらにとられぬるよとあさましくて何となく一
しゆのうたをぞゑいじける

うき世そとおもひすてゝも一すぢに

人のうへにもうき事そきく

かやうにゑいじてたゝすみけりおりふし名月はもの
ごしちかく御座ありしが今のうたをきこしめしなに
とやらんむねうちさはぎ人をいだしてしゆぎやうじ
やはいづくの人ぞと問すればしゆぎやうじや承てか
くあさましき身にてよにありがほにふるさとを申べ
きにてあらね共つゝみても又何かせん是は津の國か
んざきのもにて候めのとも名月もかんざきの者と

聞召ふきくるかせもなつかしくてしやうじをほそめ
にあげそのひまよりも見いだせばとしにもたらぬし
ゆぎやうじやなりなふしゆぎやうじやいせんのあら
ましにうき世ぞとおもひすてゝも一すぢに人のうへ
にもうき事ぞきとくちずさみ給ひしはさて世には
何事のさふらふぞしゆぎやうじや承て人のうへと申
も此ほつしんのゆらいなにをかつゝみ申べきかたつ
てきかせ申さんたとへば津の國なにはいりえのみつ
まつに刑部左衛門國はると申人の候ひしが一人のひ
めをもつたまのすがたを身にまとひなさけのふかき
心ざしはやうきひりふじんにもあひをとらじときこ
えしをすみよしまふでのありしときそつとみしより
ゑづこゝろなきこひと成てよりゝ心をつくせしに
思ひのほかにかのひめのうせぬるよしをつたへきゝ
世をあぢきなくおもひきつてやがてとんせいしか様
に諸國をめぐり候がこの二三日さきほどにあき人の
たよりにふるさとの事をたづねて候へば名月女のは

はは去年の秋むなしくならせ給ひぬちゝくにはるは
高野のみねにてとんせいし諸國をしゆぎやう仕ると
てひやうごのうらの人ばしらにとられ六月二十三日
にゑづめらるべきよしをつたへきくあふゆかりし人
のゆく衛さへかくなりゆくよとあさましくて何とな
くこしおれをつらねぬると申名月はきこしめしゆめ
かとおもへばうつゝうつゝかとおもへばまことしか
らずかさねていかにとたづねさせ給へばなふさのみ
にとはせたまひそようきみのかやうになる事もその
ひめゆへの事なればなにはにつけてうらみのかすな
みたならではともななしよそのみるめもはづかしや
とたもとをかほにをしあつる名月はきこしめしさる
事のありしぞやすみよしまふでの有し時こしのさき
にたまづさをひきむすびておとせしを供の下女が拾
ひ取てみづからに見よと云何なるらんとみてあれば
思ひもよらぬはなをみてつゆときえなんかなしさよ
もし此風のたよりをふびんと思召御返事ましまさば

かんざきに聞えたるしやかだうのかねのをにむすび
てたべと書とめておくに一しゆのうたをかく

ゑらせてもゑるしなくてはすぎのかど

あけぬくれぬといかでまちなん

とかきとゝめたりし水くきを只おほかたにおもひな
しすてたりし事のありしぞやわれをゑのかのこひご
ろも今きてみるぞよしなき我ゆへかやうになる人な
らずばたゞいまもたちいでゝ父母の御事をもとはま
ほしくは思へ共われゆへかやうになるといへばさす
がかうともいはしゐのまつことの葉もかきくれてお
つるなみだのひまよりもめのとほなきかしゆぎやう
じやにときれうたてまつれやとてれんちうふかくい
り給ひきぬひきかづきたをれふしりうていこがれ給
ひけりそのころ丹波のくにへはみよこよりほんけの
一ぞく御下向有て三日のかりくらあり國に有あふ弓
とりたち皆かりくらにいでらるゝ家かぬもおなじく
まかり出るかゝるたぎやうのひまなりしにめのとの

ねうばうをめしておほせけるは此人歸らせ給ひては
いかに思ふとかなふまじすこしもいそぎゆきちゝの
いのちにかはらんとおほせ有てとるものをとりあ
へず夜半にまぎれて只二人丹波の野せをたちいでゝ
あしにまかせてたどりゆくかのみくさやまと申は木
こりのかよふ道おほしかなたこなたとふみまよひと
ある木かげに立よりて一夜をあかし給ひけりかくて
もはてぬ夜半なれば月西山にかたぶきほのゝとあ
かしかたなるさうてんにやうゝ木かげをたち出る
末の松山こひのもりこゝろばかりはいそげ共ゆく道
さらに見もわかずにちりいんでさせ給ふをこそひが
しとばかりわきまゆれせいほくにまよへど何とてか
南へみちのなかるらんかくて二人の人々そのぬしゑ
らぬたまづさのふみまよひゆくおりふしをのまさか
りをもちたりし山人一人ゆきあふたり此山人が見参
らせあらふしぎや秋まぢかぬるはぎの花ききやうか
るかやおみなへし露をもげにてくねるかやゑぐれに

そむるもみぢ葉とませのうちの八重ぎくにあひまが
ひぬる上らうのやかんのをそれもはゝからでそで玄
はれたる立すがたは何を煮るべのたよりにか人りん
まれ成玄んぎむにかやうにたちいり給ふらんとあや
しめ申てたつほどにとがめもとひもせられずしてた
がひにやすらふばかりなりいやこらうのへんげかあ
やしやと山人の思ふもことはりなりめのとのねうば
うこれをみてこゝろありげなる山人なればすこしい
つはりひやうごへのみちのあんないをも問ばやとお
もひいかに是なる山人にたづね申たき事のさふらふ
わらは其と申は當國はつかのこほりのものにてさふ
らふがこれにまします上らうのちゝ子御ノ誤はひやうごの
うらのつきしまのぶぎやうにたゝせ給ひて更にひま
なくおはします母子はけいばにて殊外にくませ給ひ
父子かへらせ給はぬさきにあらざる事を申つけうし
なふべしとのたくみのさふらふほどにみづからあま
りのいたはしさに夜半にまぎれて御供し是までまよ

ひてさふらへどもゆく衛を玄らでたゝすむ也野にも
山にも煮るべぐさ兵庫の浦への案内ををしへ給へや
山人よ此山人がうけたまはつてさらばとくにも此み
ちをかくとはおほせもなくしてこなたへ御出候へと
てたに河をわたりそばを行めのとも名月もたがひに
たもとをと리카はし草葉々々をわけてゆきたかきと
ころにあがつて是はいにしへひやうごへのおひわけ
と申て候を近年人まつがたうけと申ならはすゆらい
の候をかたつてきかせ申度は候へどもすこしもさき
へといそがせ給ふ上らうたちにてましませばねんご
ろにはかたり申さぬなりあれ御覽候へにしへみちの
候はあれはむろたかさごへ下る道かまへてそなたへ
ゆかせ給ふなたつみへすこしゆき一だんたかきとこ
ろより東のかたを御らんせられ候へみなとがはさい
たかしもかんとりすゝめの松原みかげのもりくもゐ
にさらすぬのびきやわたなべかんぎき天王寺すみよ
しのはまも見えぬべしにしはあかしたかさごおほく

ら谷といふかたなり南にかすめるなぎさこそひやう
ごのうらにて候へ東西へわかつみちのべのいかにお
ほく候とさうへあやぶみましまさで兵庫のうらをめ
にかけてすぐにゆかせ給ふべしなごりおしほのゆふ
日かげこれより御いとま申とて山人はみねにとまり
けりめのともしうももろともにこのおそろしきやま
の内道走るべせしうれしさよいかさま是は山人にて
よもあらじ多年たのみをかけ申くらまの大悲たもん
の山人とげんじ給ふかやありがたさよとかたりつゝ
さしもにもものうきみちなれども此物語になぐさみて
やう／＼ゆけば津の國のひやうごにつかせたまひけ
りあるうら人にゆきあはせ給ひ人ばしらのゆく衛を
たづねさせ給へばこのうら人が承て惣じて人ばしら
のゆく衛とてたづねきたりたらんずる者にあんない
をもゑらせ音信をもしはせたらん者をやがてとつて
人ばしらに立べきとさだめさせたまへばいかに上ら
うたちをいたはしくおもひ申せばとてわが身にかへ

て申べきかなかく思ひもよらぬ事なりとかたりす
てゝとをるさすがに道理なりければかさねてたづぬ
るまでもなくとあるところによりやどを取て日敷をくら
せ給ふさても丹波のいへかぬは三日の狩くらすぎわ
がしゆくしよにまかりかへる御内の者はしりむかつ
てなふかみさまこそ過夜めのとのねうばうはかりひ
きぐしてうせさせ給ひて候をいかに尋申せ共御ゆき
方もましまさすいかゞはせんと申しへかぬ聞てふし
ぎの事を申ものかなとれんちうにたちいり見ればげ
に／＼うせて見えたまはずこはいかにとあきればて
つねにすみ給ひしところを見ればくはしき事をかき
をき給ふなに／＼今生ならざるはなのえんかやうに
ちりかはるべしとはゆめ／＼おもひよらざりしに父
はゝきゝの御事をかせのたよりにきゝぬれば身のと
ががうもおそろしく御身のとがもうらめしやいたは
しや母御前は去年のあきむなしくならせ給ひぬちゝ
くにはるは高野のみねにてとんせいし諸國をしゆぎ

やうめさるゝとてひやうごのうらの人ばしらにとら
れけふともあす共御さいごを定めぬよしを承るなさ
けのゑんがつきばこそ御身のうらみもおはせんめす
こしもいそぎゆきちゝの命にかはるべし我もなから
んそのあとにいかなる花になれ給ふ共おぼしめしわ
すれずはばだいをとふてたび給へ返々とかきとゝむ
いへかぬこれをみてこはいかにひやうごのうらの人
ばしら只大かたに思ひなしよそのなげきとおもひし
に身のうへかゝるわがたもとの涙のあめと感ぬる事
よ道理なりことはりやさりながらかねてはひよくれ
んりとこそちぎりしになどやゆめばかりゑらせてお
はせたまはぬぞととる物もとありあへずこまをはやめ
て打ほどにひやうごのうらにつきかなたこなたとた
づねけるにひやうごひろしと申せどもげにやつきせ
ぬちぎりにやねうばうのやどにたづねあひうれしと
いふもなかくに申ばかりもなかりけり

拙ちゝの御事はと聞は中々音信をだにも申さぬ也と

ぞなげかれけるあふ御心やすくおぼしめせこのしま
と申は五でうの大納言くにつなのきやうの一ゑんに
御あづかりとうけたまはることさら國つなのきやう
にはよきないゑんをもちて候やがてまいりてこのよ
しかくと申されければ國つなのきやうは聞召めんめ
んさまの御せうを自餘の事にて候はゞいかでかそ
むき申べき此しまと申はわたくしならぬ御ぐわんに
てくにつなばかりがはからひにて中々おもひもよら
ず明々日はかならずゑまつかるべきないだん有べし
さとだいに御まいり有てていちうあらはくにつな
もこゝろのをよびは申べし御一門の御ざしきをうか
がひ給へと仰ければいへかぬなゝめによりこびてわ
がしゆくしよにまかり歸りよますがらしゆつしのい
でたち引つくろひ明ればしゆつしつかまつるとてね
うばうに語りけるは此事申かなへずば庭上にてはら
きつてゑんまのちやうにてまち申さんとかたり里だ
いりに参り事の子細をうかがひけるにじやうかい

ねての御定めに三十人の人ばしら十八人はおとこにて今十二人は女ときくおとこをおきにゑづめをんな十二人をいその方にゑづめよとりくゝのなげきをわきて見んする事ども中々おもふもふびんなるべし一度にばつとゑづむべしと仰いだされたりければ思ひきりぬるいへかぬもきもたましゐも身にそはず今申さではいつのよに申べきぞとおもひふるへるこゑをさしあげ一人ならぬなげきをわけて言上せしむる事世にもをそれいりたる申狀にて候へども三十人の人ばしらのまんするときめしをかれししゆぎやうじやはたとへばつの國なには入えのみつまつに刑部左衛門くにはると申ものにて候が去年のあき妻女にはなれさやうの心中にてや候ひけん高野のみねにてとんせいし諸國をしゆぎやうつかまつるとてこのうらをまかりとをり御ぐわんの人数にめしをかれ島のはしらと成さうべきか彼しゆぎやうじやがむすめは此いへかぬめがさいぢよにて候がちゝがさいごのよしを

聞命にかはらんと申てこれまで参りて候へどもさが女の身にて候ほどにをそれをなし庭中へ申あぐる事なふてあまりになげき候ほどにこの家かぬめが参りていちうに申あぐる事のかたじけなさよと申てをそれをのゝく有さまは水にゑたがふ柳のふしゑづめるが如くなりじやうかい御らんじてやああれはなにといひたるそせうぞやそうじて人ばしらのゆく衛とてたづね來たらんものにあんないをもゑらせいんしむをもいはせたらんものをやがてとつて人ばしらに立べしとさだめをきたるにたがはからひによつて是迄はきたりたるぞなんちも思ふても見よ三十人の人ばしらを一人あはれ見とりかへば自餘のうらみはいかゝせんなかゝ思ひもよらぬ事なれどもあまりになんちがじやうかいにかけて申ところのふびんなれば明々日を相まちよそつとげんぎむさすべしと仰有て御内にいらせ給へばいへかぬ時のめんぼうをほどこし我しゆくしよにまかりかへりねうばうにかたり

けるはあらめでたや明々日はかならず國はるを給はるべしとの御誕の候ぞ御こゝろやすくおぼしめせととにかくになぐさむれども名月はちゝにもあはでこのまゝ扱のみはてむかなしさよちゝよくといひけるをものによくゝたとふればきろうこくのはくとうがさんろにすてし父をこひらうふゝと三度よびきえ入つらんありさまもかくやと思ひゑられたりさるあひだ人ばしらの吉日吉時にはや成ぬ三十のかごをつくらせ三十人の人ばしらをろうのうちにてかごにいれさせふね一そうに一人づゝとぞさだまりけるとられぬるもの共の妻子ゑたしきものどもか近國たこくよりきたつてあれはわが子かわがちゝかあるひは兄弟などとてたもとにすがりかなしむをはういつじやけんのものゝふ共こゝろよはくてかなはじとしもつをあてゝをひのくる今をさいごの事なればいひたき事はかずゝさこそと思ひやらるれどせめてちかづく事なければかさをあげたもとをあげ有にあ

られぬありさまはめもあてられぬふせいなり中にもくにはるをばよの人ばしらにはまじはらせずそのゆへいかにとたづぬるに家かぬもさるゆみとりなればとてもさいごのきはと思ひいかなるしよぞんかたくむべきにくんびやうあまたそへよとてろうよりかごに入させちうになひて出るめのとのねうばう是をみて只いまとをらせ給ふこそちゝくにはるにてましますと申もあへず名月はかさをかしこになげすて諸人の中ををしわけて此かごにすがりつきなふ名月女こそこれ迄まいりてさふらふ我もろともにゑづまるといはんとすればものゝふ共ゑもつをあてゝのけむとすいへかぬ其身をはゝからでやあなさけなしとよものゝふたちその人一人ばかりをは御めんなるぞといひければ時の奉行のかづさのかみあらくな申そ其人はでうゝそせうのあるかたなりすこしかごをかきすへなごりおしませ申せ承ると申てかごをかしこにかきすゆるつゐのわかれとおもへどもつかのまの

たいめんさこそやと思ひやられてなかくによるこ
びの涙はふちと成てくがにてゑづむばかりなりやゝ
有て父くにはるおつるなみだのひまよりもげに心ざ
しのましませばこそ是迄たづねきたり給ふらめなに
とてか人の子の親の思ふ心中にさういして有らんわ
ごせがおもひふかうしてはゝはつゐに死してありく
にはるもおなじみちへと千度百度思ひつれどもうき
よにもしもながらへばわごせがゆく衛や聞とおもひ
かゝるしゆぎやうにおもひ立て今さらうきめをみる
事もひとへにわごせゆへぞとよ子はかたきかたから
かとせんあく二つをあんするに人の子はたかからにて
わごせはおやのかたき也かくはいひてあれ共ふかき
うらみはのこらぬぞ此年月佛神にきせい申せしりし
やうには命のうちに見つるこそ何よりもつてうれし
けれか様に小車のめぐりあふべきみちならばはゝも
ろともにながらへてみるとだに思ひなばいかゞはう
れしかるべきぞたゞしうれしきなかにもかくあさま

しきさいごのていをあのまれ人に見えぬこそなに
よりもつてはづかしけれよしゝそれもことのゑん
ひめを思ひすて給はずばみしものとおぼしめしぼだ
いをとふてたび給へなきけなのめのとやかやうにち
かきあたりになみながらへてあるものが今までいん
しむせぬ事のうらめしさよと有しかは姫はなみだの
ひまよりも御道理にておはしますゆるさせたまひさ
ふらへやみづからともにゑづみつゝ御手をひかへて
三津の川をの山路をこえすぎてゑんまのちやうの
御供も申べきにてさふらふぞやみづからをもこのか
ごにそへさせ給へ人々とてもだへこがれかなしめば
ちゝもかごのうちに泣てはくどきうらみてなく
うとうがながす血のなみだ今こそおもひゑられたれ
人のなげきも我思ひもうきよにすめばおほけれどか
かるあはれはたぐひなしと上下ばんみんをしなべて
あはれと問ぬ人ぞなきかづさのかみは御らんじてか
くては時刻もうつるなりはやしてかごをかくせよと

て又ちうになひて出る

さるあひだじやうかいのはわたの三さきの観音だうに
て御けんぶつあるべしとてぎわうぎちよをさきとし
て御一門三百餘人ぎゝめき渡て見えさせ給ふ扱もは
かせのやすうちはなぎさになしむありさまをみて
是はひとへにやすうぢががうとなりなん事こそくち
おしきよと思ひ觀音堂に參り庭上にかしこまりあれ
あれ御らん候へ諸人のなげきはひとへにあび大しや
うの罪人のねつてつのほにむせぶらんもかくや
と思ひゑられて候さればけうしゆ釋尊のなんぎやう
くぎやうじつさうをとかせ給ひて候を御思案あるべ
く候えやくそん一代のせつけうに法花經を經王とす
一萬部の法花經をえよしやさせられ三十人の人ばし
らの名字名乗を書しるししつめの石には年號目付龍
神なふじゆましませとてかいていにしづむる物なら
ば五十電鯨てんぐすいきのくどくには八十をつこうの
生死のつみをめつし龍神なふじゆましまさばかなら

すえまは御成就候べしいかいと申されたりければ淨
海きこしめされてとかくの御返事もましまさず御ま
なこのけしきかはりければ御一門の人々もはかせの
安氏もみなせきめんしてこそおはしけれさても丹波
のいへかぬはそのをそれをもはからでねうばうめ
のとをひきぐしてくふんおんだうにまいり庭上にひ
れふしあら御なさけなの御事やたゞ御たすけあれと
申さんにこそにくし共おぼしめすべけれ二人のもの
に一人とりかへさせたまはんに何にふそくの御座有
べきぞえかるべくも候はゞ我々ふうふにくにはるを
とりかへさせ給へやとてんにあふぎ地にふしりうて
いこがれかなしみける淨海御らんじてふびんとや思
召れけんぎわうをめして仰けるは人のうへにふく風
の我身にあたらぬ事やあるいかにこゝろつよくとも
あの女にあはれをとふて得させぬかと仰いだされた
りければぎわうなゝめによろこふでいそぎ名月女の
そばにゆき御なげきをばじやうかいもふびんとおぼ

しめさるゝに御前ちかふ御まいり有て御申あれとて引たつるじやうかい御覽じてやあちかふきたつて申さず其なんぢがせうをば聞わけぬるぞさらはくにはる一人をばあの女にとらせよのこる二十九人をば時刻うつればなげきのあるにとつくしづめよとおほせ出されたりければのこる人數のなげきはなか／＼申許もなしかゝりけるところに淨海の御内に三十人のわらはの中にまつわうこんでいと申てみめかたちじむじやうなるが觀音たうに參り申けるは三十人の人はしらをみな／＼たてさせ給ふとも人のなげきのしまならば成就する事候まじ又おぼしめしたち給ふ御ぐわんをむだにしたまひては君の御意にもそむくべきまよせんはかせ御申のことく一萬部の法花經をまよしやさせられ三十人の代官になにがし一人立なれば末代島は成就してたえする事候まじいと申うけたるまつわうは上古も今もまつだいのためしすくなきこゝろかな

淨海ふびんに思召誠にすいきの涙をうかめあらふびんのものゝ申事やさらばはかせともかくもはからひたまへとおほせければはかせなゝめによりこふでいそぎはまに下り先くにはるをとりいだして名月女にたぶ扱又のこる二十九人をもみなとり出し給ひてこゝ／＼かへしたびければうけとり請取はまに出うれしきにもなみだつらきにもなみださきだつ物は涙なり三十人の人ばしらふしぎのいのちたすかるはなにはいりえのくにはるのひめゆへなりとよろこび我國さとへ歸てあるひは兄弟まこ子共に取付／＼よろこぶ事うらしまがいにしへ七世のまごにあひぬるも是にはいかでまさるべきじやうかいよりの御誕にはたんばのくにのいへかぬがまうとが命にかはらむと思ひ切こそやさしけれきんやかた野のせの庄八百町をとらすまうとをふちし天下へ能心みやつき申せとてくだしたぶこそめでたけれ又吉日をあらため七月十三日にさだめさせたまひて一萬部の法花經をら

くちう洛ぐわいのてらへへ日記をあげてまよしや
させらるゝ程なく御經出來ひやうこの浦へまいらす
るはかせ御經とりあつかすの御へいを切たてふね
をしかめ打乗てはるかのおきへをしいだし御經ま
づめ御へいをふつてきようしやくのつとを申さるゝ
まことに松王のぞみ申ける間彼一にん人ばしらにた
てられけるぞまゆせうなるどくじゆの御經あるべし
とて一千餘人の御僧達を洛中洛外よりしやうじくだ
し給ひてなぎさに御經あそばせば大小ちくのけちゑ
んの龍神なふじゆあるによつて島は成就する十四町
の所なりきやうのしまと申て平相國のこうりうの今
に有とぞ見えにける名月と申も只よのつねの人なら
ず鞍馬の大悲たもむてんの御はからひによつてきち
じやうてんによのけしんにてしまをも成就人ばしら
をもたすけんために名月とげんじ給ふ也扱松王と申
も只よのつねの人ならずだいにちわうのけしんにて
島を成就の其ためにたて給ふとぞ聞えけるつたへき

くいにしへのたいせ太子はかたじけなくもによいの
たまをとらんとてゑんしのかひをもつてちよつかい
をはかりつくしつゐにほうじゆ得たまへり大ぐわん
としては又つゐにむなしき事あらしこの淨海も末代
たみをあはれみてひやうぐに島をつき給ふ地ざうさ
つたのけしんしくうせいぐわんの御ちかひありがた
しともなかなかに申ばかりはなかりけり

かまた

源氏左馬の頭義朝は侍賢門の夜軍にかけまけさせた
まひ東國さして落給ふ爰にせんぞくががけにてよか
はほうしの大將におほやのちうきかはなす矢を信朝^進
^{假借}長の弓手の膝口にうけとめさせたまひ其御手大事に
て美濃の國わうはかの長者のたちにつかせ給ふ長者
いそぎたち出義朝の御目にかゝりさては朝長は御供
かきかまほしやとありしかば義朝聞しめされて大事
の手負さいごのきはといふならば長者の歎きふかゝ
るべしと思召さん候朝長をば悪源太とうちつれ鎌倉
へつかはして候明年のころかならずぐしてまいるべ
しとふかくつゝませ給ひ其後鎌田を召れいかに正清
朝長が手を見よ尾張をさしてひとまづおつべきにて
もあるやらんくはしくとへ正清承りちうぐうの太夫
信朝長に参りみやうにちは都よりうつてのまいり候

べし夜半にまぎれてひとまづ御供めされ候へと申す
朝長聞しめし御供申たくはさふらへどもいた手うす
でに七かしよの手おいごたひやすからねば御供申が
たし詞さらば平家の者どもにかきくびなにとせら
れてはかばねのうへの耻辱たるべし唯々腹を切なん
と御返事を申させ給ひやがて鎌田を召れいかに正清
弓箭にたづさはりきゝうの家といひながらじがひを
いまだゑらぬなりいかやうにするものぞくはしく申
せ鎌田承りさん候それじがいと申は十方じやうどと
は申せども先最後の時は西にむかつて手をあわせか
うしやうに念佛申腰の刀をするりとぬき弓手の脇に
がはとたてめてへきりゝと引まはし心もとにさした
てゝ袴の着きはへをしおろし臍をつかんでくり出し
ずん／＼に切てすてたるをきよき自がいと申なり朝
長聞しめし頓而心得たまひてをしてをしおきなをり
腰の刀をするりとぬきゆんでのわきにがはとたてめ
てへやう／＼ひきまはしかへす刀を取なをしこゝろ

もとにさしたてゝきらん／＼とゑたまへどもいたで
うすでにうでこはり御身かうこうならざればゑがひ
をはんにゑかけたまひ鎌田はなきか首をとれ正清こ
のよし見まいらせ泪とともにまいりつゝ御首をとら
んとしけれども三代さうおんのしう君にいづくに刀
をたつべきとなくよりほかの事はなし朝長は御覽じ
てふかくなり正清はやとく／＼とのたまへばいたは
しや御首をみづもたまらずかきおとし義朝にまいり
つゝ御自がいのよしを申せば御落泪はひまもなし其
後義朝かまだをめされこれより尾張へは何として着
べきぞ鎌田承り長者の弟にわしのすのびんくわうを
おたのみあゑと申やがてわしの尾たのませたまへば
やすきほどの御事とて柴舟くだすにことよせ人々を
のせ申かせをたかくゆひあげ上に柴をつみかけこふ
づの七良が七百餘騎にてさへたる關所のまへをと
かくちんじてをしとをしうつみの浦に船をよせ鎌田
兵衛を御使にて長田をたのませ給ふ長田なんなくた

のまれ申新造に御所をたて君をいれ申いつきかしづ
きたてまつるこの事都にかくれなし時刻うつしてか
なふまじひいそぎうつてを下さんとて彌平兵衛家清
に三百餘騎を下したぶ小松の内府御詮にはおろかな
る御はからひかなかの東國と申は源氏に心ある事な
りうつてくだると風聞せばあづまに残る源氏がうん
かのごとくはせあつまりいかさま大事も出来なんし
よせんたばかり狀をこしらへ長田をたのませたまひ
くわぶんの國所領を一旦あたへみかたにめされ義朝
をたばかりやす／＼とうつてのちかの長田もちうば
つたるべきに何のゑさい候べき此儀にゑくはあらじ
とてやがてたばかり狀をこしらへ長田が館へつけさ
せ給ふ長田なんなくたのまれ申御教書を戴きひらひ
て拜見申す其御書にいはく「下狀源氏左馬頭義朝は
親の首をきるのみならずゑたしむべき兄弟をほろぼ
し六親ふはにして三寶のかごなし父母ふかうにして
天ばつをかうむるそのいわれあひかはすカ、ル」去年

のつみきんねんにかんじ平治のたゝかひにかけまけ
ていとをさつて遠島おんびにまよふわづかにろめい
をせきさりにかけばせうのゑたひをらんぶうにまか
すはゝたのみすくなきことは樺花一日の陰を待がご
とくゑうふう春の雨をまつに似たり迎もゑめつすべ
きものおや此みかたにくみせんことはたゝゑんゑん
にのぞんてはくひやうを踏に似たるべしはや義朝が
かうべを切て天下に捧申べしけしやうには美濃尾張
三河三ヶ國を宛行同じゆりやうは望たるべし仍狀如
件平治二年正月一日長田が館へとかゝれたり詞長田
御げうしよを戴夜半に人をまはし五人の子どもをち
かづけこれゝおがみ申せ繪旨のむね至極の道理是
にありげにも義朝は親の首を切たまふ五ぎやくざい
の人なるをしうにたのみてなにかせんいざ此君を討
申美濃尾張三河三ヶ國をたまはり上見ぬ驚とおもは
いいかゝはからう子ども承りこはゆゝしき御大事有
候此人々三人を討には尾張國がうごきてもたやすく

案ノ假借

うたれ給ふまじ御恩安あれと申す長田聞てふかくな
りなんぢら勢をそろへてうたばこそたばかつて打べ
きに何の子細の有べきぞと申かゝつしところに三男
せんじやうと申者ゑぼしのさきを地につけ仰のごと
く此君は親の首を切たまふ五逆罪の人扱又一代なら
ず二代ならず三代さうおんのしうの首を切たまは
五ぎやくざいはさてをきぬ八逆罪をいかせんなが
ながしくは候へども爰にたとへの候を語てきかせ申
すべし昔てんぢくせつせんのかたはらにめいみやう
てうといふ鳥ありかの鳥どうひとつにてはし二つひ
とつのはしがゑをもとめぶくせんとせし時ひとつの
はしかしこくて此ゑをちうにてばうてくうひとつの
はし思ふやういかなればよの鳥はどうも一つはしも
一つ我等いかなるいんぐはにやどうひとつにてはし
二つたまゝもとむるゑじきをもうばはるゝ事の口
惜さよ所詮一方をたいぢせばやと思ひ毒の蟲をもと
めてぶくするまねをせしとき常のごとく心得此ゑを

ちうにてばうてくう、フシはしは二つと申ともどうが一つであるあひだ、フシ其毒どうにおさまりてゑんたひがやぶれつゝどう、たひがそんなしてをのれさへに死したると承りて候ぞ我も人も自然はもつてわひとしかるべし此君と申はせいたうかしこくおはします鎌田兵衛正清はならびもなきがうの者わらはにしぶやのこん王は弓矢をとつて名人と名をえたるほどのもの也是三人をうたんに尾張八郡うごきてもたやすく討れ給ふまゝ、^{ツメ}我々が心中にはとてもすする命ならば君にたのまれ奉りうつみに城をこしらへかたきむかふて見るならば軍兵どもをさしつかはして目ざまし軍せさせ軍兵つきば腹切てゑでの山の御供こそ弓矢をとつての面目なれむかしが今にいたるまでむことしうとをうちとつていや世に出たるはうはなしゑかるべくば此事をたゞ思ひとゞまり給へとよ詞長田聞てことの外に腹をたて何と申ぞあのくはじやめそれ天地ひらはじめてよりこのかた天は父地は

母父母のおんをかうむつて庄司が申事を直にそむくはきつくはいなりそうじてあのせんじやうめを見れば中々腹もたつ罷たてといふ儘に居たるところをづんとたち簾中ふかくいりたるはとかう申すにをよばれず、^クトキ荒むざんやせんじやうは父にゑかられ常のところ立ち入つくゝあんじけるやうは親のめいをもむくとしてしうに弓矢をひくならば八逆罪のものが主と一所になり申父に弓矢を引ならば五ぎやくざいのとがたるべしゑかじたゝもとひきつてさまをかへうき世をいとはばやと思ひとし十七と申すには緑のたぶさを押切て刀と友に西へなげつたのふぢ笈かたにかけ心と衣を墨に染とんせい修行に出たりしかのせんじやうを見し人のほめね人こそなかりけれ詞其後長田殘て子どもをちかづけにせんじやうめはとんせいしたるとなさてなんぢらはせんじやうにどうすべきか早々返事を申せ子ども承りともなくも御はからひのあしくはよも候はじと申す長田聞てうち

わらひかやうに申も汝等を世にあらせんがためぞかし先むこの鎌田をばせんじやうがていへしやうじ山海の珍物とりかづゝ酒をしいよ酔たらんところを見て酌にたつたる者持たる酒をなげかけひらまんところをむすとかめひとまどころによき兵をかくしをきおりあふて討べしわらはのこんわうをばうつみの沖に大あみをおろしあみの奉行にことよせうつみにてうつべし主の義朝をば此庄司めにまかせよまづこんわうをたばかつてこそといふまゝにまゝとみのものちりとらせ若き女をつかひにてこん王をしやうするまぶやさうなくきたる長田いそぎ立出三こん盃すぎて後いかになふまぶや殿を頼み申べき事の候が但たのまれたまはんらば申べしこんわう聞て何事を仰候べき長田が大事たるべくは一命をなりともまゐらずべし長田聞て打わらひそれまでも候はず我君の是までの御下向を一期の面目うどんげと存知蓬萊をからくみ君をいわひ申さんため蓬萊の下ぐみに魚と鹿

がいることにて候程に五人の子どもをば三川の國あすけの山へ鹿狩にこしきふらひぬ又うつみの沖に大あみをおろして候が奉行にはつたことをかいて候若き時のあそびにれうすなざりと申てくるしからぬ事なれば奉行にたつてたべかしとうちとけがほにぞたばかりけるこんわうきゝあへずあかで腹こそたつたりけれたけなるかみをぶるゝとほどひておほわらはにぞなつたりける爰にたとへありはんくはいいさみをなせば髪甲のはちをおひぬくいつもはなさずもちたりし四尺三寸のかくつばの打ものつばもとツメ二三寸くつろげ長田をはつたとにらんで何とさう長田君を大事におもひ申さばごぶんなりともいづまじきかさなくばりんたんりんがうにはうばいどもゝありこそするらめなどよびよせて出さぬぞやうめいたいけんゆうはうもんとまりゝ關々にて合戦に骨おりもののぐにかたひかせくだつて三日もすぎざるにあはの奉行にたてとさうや鳥のこがしろくなつて

こまに角のおいんほどまはられよ庄司定めて上へ申
さるべし太刀とり縄とりさだまつて打て切てすてら
るゝともまつたくこんわう出まじひ見ればなかゝ
腹もたつ罷立と云儘に銚子かわらけけちらかしそと
のていまでおどり出しかのこんわうかいきおひはい
かなる天魔やくじんも面をむくべきやうはなし
詞去間長田はこんわうにおどされふるひゝ座敷を
たちかうのとのゝ御前にまいり何と物をば申さすし
たいさめゝゝとなく義朝は御覽じてあれはいかに長
田は何事をなげくぞさん候べちのまさいにてさふら
はず我君の是迄の御下向をいちごの面目うどんげと
ぞんじ當世はやる蓬菜をからゝみ君をいはひ申さん
ため蓬菜の下つみに魚と鹿がいることにて候ほどに
五人の子どもをば家の子郎等^がさしそへ三川の國足助
の山へ鹿狩に越さふらひぬうつみの沖に大綱をおろ
して候が奉行にはつたとことをかひて候ほどに御内
のまぶやをたのうで候へば奉行にこそたゝざらめ

クトキあまつさへとしよりたる庄司めをさんゝに
あつこうせられ申つれなく命ながらへこれまでまい
りて候とはらゝとなく詞義朝聞しめされてげにげ
にそれはさぞあるらんぢたひあのこんわうはものぐ
るわしき者にて我いふ事をさへ五度に三度はそむく
者ましてごぶんが申さんことをいかで承引すべきぞ
よしゝ庄司腹いて歸れ奉行には出さうするにてあ
るぞとて長田を歸させ給ひて後こんわうをめさるま
ぶや承りあい庄司がそせう申たごぎめゆゝしき大事
と心得御前にかしこまる義朝御覽じてあらけなくは
のたまはでやあ何とて汝はちがうたるぞ都より此國
まで長田をたのみくだる身が山ならば須彌山海なら
ば滄海よりも猶たのもしう候に一旦ちがうことあり
とながく承引はせざるべきその上れうすなぐりとや
らんは若き時の遊にてくるしからぬことぞとよ奉行
に立て魚を取庄司が心をなぐきめよこんわう承りつ
つしんで申けるはさん候それがしまつたく奉行に出

まじきにてもさふらはぬが長田がいまのふるまひを見候に君に心がわりを申五人の子どもをばかりくらにことよせさいそくまはし勢ぞろへ我君をうち申さんするたくみをめぐらすと見て候を御存なきこそおろかなれ義朝聞しめされてよしそれとてもちからなし長田が心かわるならば一所にありても何かせんもしもちうしんたるべくば後のうらみをいかいせんただいのでうををとり庄司がこゝろをなぐさめよクトキこんわう承りあかぬは君の御誼とておうけを申てごせんをまかりたつが君も聞し召せとたからかにッシ人はうんめいつきぬればちへの鏡もかき曇才覺の花も散はつるらふどふがたばかりを御存知なきぞ口惜き詞かやうにかきくどきひとまどころへつと入はだにはからくれなゐひつちがへしげめゆひのひたゝれの上下四つのくゝりをゆるくとよせさせ黒糸おどしの大鎧草すりながにさつとき惣而刀は三腰さす四尺三寸の角鍔の打物三尺五寸の太刀をか

さねばきにはき四尺八寸の長刀をひきづへにつゐてかうのとのゝ御前に参りとうたいせんこの夕煙さふものぼりけふも立ほくばう朝露のあたし本ノてみおくれさきだつ世のならひ君うつみにてうたれずばッ参りて御目にかゝらんと泪と友にたち出る義朝は御覽じていまはしゝこんわうかど出いはへの給ひてみづから酒をぞ下されける御暇申てこんわうはうつみの沖へ出にけりちぎりはあれど山鳥のおをへだつるがごとくなり詞去聞うつみにはかねてよりこんわうにくみての人数を定むるに先一番にきしのおかの十郎のくみをぐりをさきとしてむねとの大力卅六人大船八そうもよほし上にあゆみのいたをわたしこんわうをのせ沖をさしてこぎ出爰にも魚がなきぞかしこにも魚がなきかと爰かしこと目を見合こんわうをうたんとする湍谷もとよりぞんじのことちつともさはぐけしきもなくもつたりし長刀にて舟ぞこをとふとふとつきならし何とてめんゝは夕日にしにかたむ

きたまふに綱手をばとらずしてやゝもすればそれがしに目をかくることふしなれあふやがて心得たり汝等が主の長田君に心替り申某を此沖にてうたんずるたくみをめぐらすとおぼへたりカ、ル思ひうちにあれば色外にあらはるゝ天知地知る我知る人知まぢかくよつてかなふまじひッメ先長刀のきつてにはこむ手なぐ手ひらく手はつはうさひしき長刀の手をつかふものならばさんをみだしてうたるべし長刀おくれくだけば二ふりの太刀をもつてさんぐに切べし太刀のつかおれくだけば三腰の刀をぬきかつゝ取て引よせさしころしてそのみくづとなすべきなり運命つきはてゝ太刀も刀もおれくだけば汝らがたぶさを取て五人も十人もさうのわきにかひこうで海底につつと入五日も十日もそこにて目をおくるならば汝等がめいはいまゐるべしまぢかくよつてかなふまじひとともへをかけり廻ればうつみを出しときにはこんわうならば我くまん誰くまんとはいさみしかど

此いきおひにおそれつゝ舟底せがいにひれふしてふるひわななきゐたりけるはことおかしうこそ見えにけれ是はうつみの物語爰に物のあはれをといめしは鎌田兵衛正清なりよひまではごせんに伺公申さよふけがたにおいとまたまはりらうのやに歸りみたいしみた若として二人の若のありけるをゆん手めての膝におきクトキをくれのかみをかきなで涙をながし申けるは正清都にて度々の合戦にそゝろに命のおしかりつるもたゞなんぢらが有ゆへなりいつかなんぢらせいじんし父が供をつかまつり耻ある矢をも一筋いるそのおりからを見るならばいかゞはうれしかるべきとッあけ暮是をねがひしに思ひの外に引かへて君おちうどゝなり給へば御供申て正清もうたれんことは治定なりさあらんときに汝等は三川の國ゑんふくじのゐんしゆのごばうにふかくけいやく申なりゐんしゆの御坊にまいりつゝせうきやうの一巻をもよきに學して正清がなからんあとをとへやとてつゝむに

あまるその泪餘所のたとも濡ぬべし詞らうのおか
たは御覽じてこれはいまだ正月三日もすぎざるに御
身は何をの給ふぞといひもあへぬにしうとの長田く
みてをあまたよふひして鎌田どのやましますもの申
さんとありしかば正清しうとの聲と聞これに候とて
太刀をつとり出んヲ脱スルカとするらうの御かたは御らんで袂
をとつてひつとやめあはてたり鎌田殿さはいでみえ
させ給ふものやけふこの比のならひにて親は子をた
ばかれば子は又親にたてをつくゑかも御身おちうど
にてよろづに心を置べき身がサシあくまじき夜にて
もなし今夜をあかしたまひてフシ夜明てお出さふら
へやかまだ殿とぞとやめける正清聞いていつよりもむ
つましげなるふせいにて立歸りうちわらひなふさの
み留給ひそよめさるゝは御身の父正清がためにしう
となりいながら返事を申さんはふかくのいたりとぞ
んするなりやがて歸らんさらばとてなごりのたもと
ひきさけて長田とつれてぞ出にけるかりそめながら

別とは後にぞ思ひえられたる詞去問せんじやうがて
いへしやうじ山海の珍物こくどのくはしをとゝのへ
いろをかへては三度よりふせいをかへては五度七度
盃の数もかさなればさしもにがうなる正清も次第次
第にひらめいたり長田是を見てあは時分はよいぞと
思ひちやうだいへつつと入かいを一つ取いだしみち
んさつとうちはらひにつことわらつて申やういかに
なふ鎌田殿此間の御つかれ思ひやられていたわしう
候こどもあまたさふらひぬしやうじもかくて候へば
なにかはくるしく候べきたゞうちとけておあそびあ
れかいのみにとつては山田のがうと申て三百町の所
の候を鎌田殿に奉る庄司三度たまはるなりッ御身
も三度まいれとてむこの鎌田におもひさす去問正清
しうとの吞たる盃に所領をそへてえさするうへいづ
くに心のおかるべきさしうけゝのむほどにみちん
つもつて山となりいさごちやうじて岩となる盃の数
もかさなればゆんでの座敷がめてへまはりめての座

敷がゆんでへまはつて天上のおほゆかいひらりくる
りとまいければうしろの玄やうじによりそひてとろ
りくゝと眠けり酌にたつたるともやなぞもつたる酒
をなげかけおしならべてむすくとく鎌田もとよりが
うの者さつしつたりといふまゝにともやなぞがたぶ
さを取てひざの下にひつしいたり長田是を見て居た
る所をづんと立て鎌田がたぶさをとつてうしろへゑ
いとおりつくる鎌田是を見てなさけなし長田さやう
にはせらるまじひと長田をかいつかんでとつてひき
よせたりけれどもいかゞはもつてのがすべきかくし
をきたる兵がすきをあかせずおりあひて一刀づゝと
思へども十三万さゝれて焚喰といさむ正清もよはよ
はとなつてかつばとふす^{クド}キ荒むざんや正清最後
の言葉ぞ哀なるされば写取のもつまじきものは國を
へだつる妻子なりおやのおこす謀叛をなかはえら
であるべきぞたとひえんこそつくるとも二人の若が
あるなればなどさいごをばえらせぬぞやなゝのこは

なすとも女に心ゆるすなと申つたへて候さいしちん
ぼうぎうわういりんみやうじうじふすいしやげにも
おもへばかたきなり子は三界の首かせとはいまこそ
思ひえられたりさんがいのくびかせとほんなうのき
づなにひかれつゝふかくのしにをするものかなッシ
南無阿彌陀佛みだぶつと是を最後の言葉にてあした
の露ときえにけり正清のさいごのていをしはかられ
てあはれなり詞さすがに長田もふびんに思ひ夜あけ
て首をとらんとてむなしき死骸にきぬ引おほひ各々
なりをぞえづめける荒いたはじやらうのおかた是を
ば夢にもえろしめされずさよふけ人もえづまりて兄
弟のひとくもみなく歸らせ給ふがふしぎや妻の^{夫ノ}
^{假借}正清はなにとておそく見えさせ給ふらんとうすぎぬ
とつて髪にかけとうらうまはりまごびさしを通ると
き人に忍ぶたる聲にて鎌田殿やまします正清とよび
けれどよひにうたれた事なれば夜更てよぶに音もせ
ずよまのていを見てあればあぶら火すごくかきたて^{こし歟}

あたりに人一人きぬひきかづきふしてありうたれた
ると思ひもよらず酔臥たるぞと思ひする／＼とよ
つてなふ御身は鎌田殿にてましますかさやうに酒に
えひたまひてはません我君の御せんに何とてたゝせ
給ふべきおきさせ給へといふまゝにきぬ引のけて見
てあればクドキ紅に身をぞ染にけるあまりの事のか
なしさにフシ死骸にかばとうちかゝりまばしきえ入
給ひけりすこし心を取直しさこそ最後に自をうらみ
させ給ひつらん夢にも自まらぬなり我をば誰にあづ
け置すてゝいづくへゆくやらん我をもつれてゆけや
とて最後にぬかぬ刀をぬきすでに自害と見えけるが
まてまばし我心明日になるならばむざんや二人の若
どもは父母が行衛をまらずして父よ母よとよぶなら
ばじやけんの祖父伯父ごにて鵜鷹のゑを打やうにう
たせたまはんむざんさよ同じ道にと思ひ切又らうの
やにたち歸二人の若を見給へば兄が手をば弟にかけ
弟が手を兄にかけよねんもなうてふしにけりらうの

御かたは御らんじて二人の若をかきいだき父正清の
臥たりせんシテ脱スルカこにとうとおろしをきいかに二人のわか
共よ祖父おぢごのまはざを見よなさけなの事やとて
りうていこがれなきたまへば二人の若も諸ともに臥
まづみてぞなきにけるさてあるべきにてあらざれば
いかに聞か兄弟よくうらめしき浮世にながらへて
あらんよりちゝもろともにうちつれてゑんまのちや
うにて母をてよマテ脱スルカとかたりつゝ兎みたいしを引よせて
弓手のひぢのかゝりを二刀がいしてをしふする弟が
是を見てあらおそろしの母上や我をばゆるしたまへ
とて居たるところをづんとたちさらばよそへもゆか
ずしてころすべき母にすがりつくいと心はききゆれ
どもまなこをふさぎ思ひ切心もとをひと刀あつとば
かりを最後にて兄弟のわかどもを三刀にがいしつゝ
わが身ははだのまぼりよりしゆへんのじゆずを取出
し西にむかつて手を合アヒとゞだに女は五障三従にゑ
らまれて罪のふかいとうげたまはるきうせんにかゝ

るみづからをたすけたまへや神佛南無阿彌陀佛とさ
いごにて刀をくちにくはへつゝ鎌田の玄がいのうち
かゝりあしたの露ときえにけりらうの御かたのさい
ごのていあはれといふもあまりあり詞荒いたはしや
ごんせんは是をば夢にもえらしめされず鎌田うたれ
ぬると聞しめしさこそらうのおかたがなげくらんと
ふらはばやとおぼしめしらうのやに立寄よべどこた
ふるものもなしさては鎌田うたれぬるところにある
ぞとおぼしめしよまのていを見たまへばらうのおか
た二人のわかみなくあけにそみ同じ枕にふしてあ
り母此よしを御覧じて是は夢かや現かやクドキさり
ながらだうりなりことわりや何にいのちのおしから
ん子よりもごはいとうしきに花のやうなる若ども
をさきにたてよはひかたぶくみづからが一人あとに
のこりなば深山がくれの遅櫻フシ梢の花は散はてゝ
下枝にひとふさ残りにて嵐をまつににたるべし我をも
つれてゆけやとて母も玄がいをとげたまふ平治二年

正月の二日の夜の事なるに鎌田をはじめ父子五人み
づのあはとぞきえにける詞天あけゝれば長田鎌田が
首をとらんとてよまのていを見てあれば我女房をさ
きとしてみなくあけにそみ同じ枕にふしてありさ
しもなさけなき長田とは申せどもこゝろよりはりとん
せいするか腹を切かいやはせんと思ふがいやく
身より出せるざいなれば荒くはほうなのものどもが
なつたるありさまや長田が世にいづるものならばく
はほうのさいぢよはいかほどもあるべきになむさん
ぼうあみた佛とへんしゆの念佛を申鎌田が首をとつ
たるはとかう申にをよばれず其後義朝の御前にまい
り今日は三ヶ日の御かれい八幡宮へ御社参有べく候
たかみのゆどのと申て玄さいなきところのさふらへ
ば御出あつて御ぎやうすいと申義朝聞しめされてせ
んぞの郎等ならずはたがやうにふるまうべきかま
へて長田弓矢のみやうが七代まであんをんなれやと
の給ひて御ぢうたいの御劍御腰の物を長田に預け給

ひしは御うんのつくとこなりかくて義朝ゆどののうちへ入給ふよよりさだめし事なれば都合二百餘騎にてゆどのをふたゝ三重にをつとりまひてときをどつとあぐる義朝ゆしめされて心替りか長田さん候都よりうつての参りて候に御旨言あれと申す義朝聞しめされて長田がことはかねてより思ひまうけることなせけなし鎌田たとひ舅と一所になり我に心かわるとも三代さうおんのしうになどさいごをばゑらせぬぞやいかにゑい長田刀まいらせよ自がいせんと仰ければ承はると申て刀に鎌田が首をそへゆどののうちへまいらせあぐる義朝鎌田が首を御膝の上にかきのせ給ひてカゝル荒はかなのたゝ今のうらみごとや我よりさきにたちけるぞやフシ迄の山にてまちよゑいさんづの川でおひつかんツメ腰の刀をするりとぬきゆんでのわきにがはとたてめてへきりと引まはしかへす刀をとりなをしちとにさしたてゝ袴のきゝわへをしおろしぎうをつかんでくり出し四

方の壁になげつけゆふねにて御手をすゝぎ西にむかつて手をあわせ何とて義朝ゑなれぬぞさる事ありや父爲義天台さんぐわちりんの御坊にふかくゑのびておはせしをたばかり出し申て御首を切申すそのいんぐはたちまちむくうて死なれぬ事は口惜しいかにゑい長田いそぎまいりて首をとれ長田さうなくまいりえず長刀にてさしまいらせおづゝ御首たまはりぬフシちたの郡でうたれたまふたゝ人間のゐんぐははめぐるにはやきものであり去間長田は義朝の御首をもやすゝと給りぬいまはこんわうが首をおそしとまつるさてもこんわうはうつみの沖にありけるがれいならずむなさわざきりなるは何事か君にましますらんと心もとなくぞんずれば舟をよせよとげちをする力をよばぬ次第とてさうなく舟をさしよするこんわうゆらりととんでおりいとま申てめんゝとて五十町のところなるをもみにもうでぞはしりける爰に鎌田がめしつかひし下女一人はしりむかひさて御

身はいづくへ行てましますぞ鎌田殿はゆふべうたれたまひぬ君は今日たかみのゆどのにて御腹めされさふらひぬいまは御身の首を遅しとまちさせたまふにいづくへもひとまづ玄のばせ給へと申こんわうきゝあへず泪をはらぐとながしさばかりそれがしが申つる事を御せうゐんなくてうたれさせたまひて候やさては鎌田は御心替をば申ざりけるやあふ尤かうこそあるべけれさだめて長田は我館にはよもあらじ君の御さいご所たかみのゆどのにぞあるらんそれがしがうたれんする事を一定と心得うちとけたらん所へつつと行長田が首を打おとし御けうやうにほうせんと心のうちにぞんずればッメたかみの城を心懸てゆらり／＼とあがりけり長田是を見てすはやこんわうがうつみにてうちもたらされ迄きたつたるはあますなもらすなとてまんなかにとりこむるこんわう是を見ておもしろし長田そなたはまうせいなり我はたゞ一人まいりさうといふまゝに大勢のなかへわつてい

りさん／＼にきつたりけり去間長田かなふべきやうあらざれば我館をさひてもみにもうでにげにけりこんわう是を見ていづくまでといふまゝに長田を目にかけてはしりけり去間長田我が館へつつと入堀のはしをひいて四六のきどをちやうとうつこんわう是を見て荒もの／＼しけらのたけりといふまゝに三重の堀をばひらり／＼とはねこして八尺ついぢのありけるに手をかくるこそおそかりけれかけすゆらりとはねこへちう門めんらうとをさぶらひ長田をおつてはゑりしは荒鷹かとやくいつて雉子をおふがごとくなり去間長田つま戸よりもつつとぬけ行がたゑらずなりにけりこんわう是を見て力をよばぬゑだいとて又とつてかへして大勢の中へわつて入西東北南くもでかぐなは十文字八はながたといふものにさん／＼にきつたりけり手本にすゝむ兵を五十三騎切ふせ大勢に手をおふせ東西へはつとおつちらしうそのわたりをさうなくし都をさひてのぼりけるこんわうが心中

をば貴賤上下をしなべかんせぬ人はなかりけり

ふしみときは

盤ノ假借

抑常葉御前のせんぞをくはしく尋に父はむめづの源
左衛門は、はかつらのさいしやうとてゐんにみやつ
きたてまつる一年天下に女くらべの有しとき千人が
中を百人すぐり百人が中を十人すぐり十人のなかよ
りも三人えらびいださるゝ一人はあやめのまひ一人^{へノ誤}
はまこものまひ今一人はとつこのまひとぞ申ける彼
あやめまこもと申せしはかほいつくしくかざりつね
にいしやうをめしかゆるとつこの舞と申せしは更に^{前ノ假借}
けしやうはなけれ共いつもたへせぬすがたなれば名
をときはとつけよとてとつこのまひをひきかへて常
葉の舞とぞつけ給ふそのころよしとは天下のしゆ
ごとましくて家もさかへうへこす人もまします
よりくさんだいで有て所望申されたりけれ共みかど
御用まします有時よしとも玄しむでんの玄もくち

にてへんげの物をきりとむるみかどえいらんまし
してくわんもつかさもなにならずもとよりのぞみの
事なればさらばときはをとらせよとてかたじけなく
もみかどは常葉のまひのたもとに御手をかけさせた
まひて一二のきざはしたんすのいしあまおちのきは
にて給はりけり

そのころときは十七さいよしとは三十三かりそめ
ぶりになれそめていま三人の子をまうけかゝる思ひ
にふしゑづむあらいたはしや常葉御せんいづくへも
ひとまづおちばやなんどおぼしめすがまてゑばし我
こゝろ四條のばうもんほりかはのめのとが宿所にを
き申母子をばさていかいせん又三人のわかどもがよ
はひをものにたとふるに出る日つぼむ花なれやいか
にはういちじやけんの物のふと申共八十にあまり給
ふはゝ子に^{御ノ假借}よも目はかけじ其儀にてあるならばいづ
くへもひとまづおちばやなんど思召あにいまわかの
しやうぞくははだにねりぬき引ちがへあきぢしろの

ひたゝれめす次をとわかのしやうぞくはくれなるの
ふたつぎぬひきまはしのおびばかり御身は十二ひと
へもはかまのそばたからかにさしはさみ二さいにな
りし牛若を三五のあひにかきいだきいちめがさにて
かはかくしとうのうらなしさはひて五條あたりの
くろつちをはじめてふむぞあはれなる

ころはいつぞの比ぞとよるいうやく元年正月十七日
の夜の事也清水参りと申て諸人かすをゑらざりき上
下のだうしやにうちまぎれきよみづに参りつゝひだ
りのかうしにつや申とをのれんげをもみあはせ八ふ
んのかうべを地につけて抑御山は田村丸の御こんり
う大同二年に立られやまよりたきが落ればみなかみ
きよき御てらとて扱こそかくにも清水寺とはうたれ
たりみづからがてふり今までまいりのりしやうに
は三人のわかどもがゆく衛まほりてたび給へなむ大
悲くわんせおんとわにぐちちやうどうちならしなみ
だにむせび給へばことに御ほごんも御なふじゆやま

しくけんみすもきちやうもさゝめひてぼうしやも
ゆるぐかとおもへばいとゞしゆせう也さるあひだ常
葉御前とゞろきの御ばうにうつらせ給ふじり涙を
ながしそれきうちやうのふちはまつにはなれていろ
見えす三がいの女はかしこしと申せ共一人のつまに
をくれたよりなしとはいまこそもひゑられたれい
たはしやよしとものうき世に御座の御時はかりそめ
ぶりのまふでもこしくるま乗物よとさこそゆゝしく
おはせしにいつそのほどにひきかへてかちはだしな
る御ありさまを見まいらせ候へば更になみだもせき
あへずこれにゑばらくといめ申たく候へども六はら
近きところなればいづくへもひとまづおちさせ給へ
と仰けり常葉きこしめされてさんさふらふみづから
がおちうずるかたは大和の方にて候いとま申てさら
ばとてとゞろきの御坊を出させ給ひ爰はかたきのや
かたのまへこなたへこよやわかどもとて二人の若の
手を引てとをるところはどこぞ三十三間いまぐ

ま野一二のはし法性寺明れば正月けふははや十八日の事なるに宇治ははるさめふりけれどこばたの山は雪ぞふるいつ君がたまさかにあゆみもならはせ給はねどふるまら雪を御手にてうちはらひくあしにまかせて常葉御前まよはせ給ひけるとかやあらいたはしやわかぎみたち御こゑをあげさせ給ひ何とてわれわれにおちやめのとほそはざらんさて又みだいさまにかいしやくにんは參らぬぞつめたやなふはくみだいとおどろがなかにたをれふしりうていこがれたまひけりときは此よし御らんじてふかくなり若どもよさればにやなんぢらはげんじの大將たるべき身がかくふかくにみゆるか明々日に成ならば六はらがたへいけどられいま若はおとなしきとて六でうかはらできらるべしつぎをとわかはさしころしうしわかいまだにやくなれば母もろともにいけどられかも河かかつらがはにまづめられなん其時はつめたい共申まじさむいともやはかいふたゝいとおしきものとはう

しわかひとりで候とてそこをみすて、おち給ふわか君たちは御覽じてなふつめたいとも申まじさむい共申さじとて御たもとにすがりつきこばたの山にかゝらるゝいたはしゝともなかく申ばかりはなかりけり

さるあひだときはごせんと有松のこかげに立よらせ給ひてふる白雪をいとはれしがむかひの谷を見給へばともし火がほのくゝとみゆる人すむところにてあればこそ火は見えてあるらめとはるゝくだつて見給へば賤がいほりぞさふらひけるとぼそをほとゝとたゝき是はみやこのものにて候がこのゆきみちにふみまよひこれまで參りてさふらふ一夜の宿をかし給へとさも高聲にのたまへばうちよりもあるじのむばがたちいでゝ戸ぼそをあげ常葉の御すがたつくづくと見まいらせ内へはしり歸てなふいかにおぼぢかどのほとりに女のこゑとしてやどかせと申ほどにたち出でみてさふらへばあたりほとりもかゝやく程

の上らうのおさあひ人をあまたつれやどかせと申が
うつたへの人にてはなげなぞなふこの山にすむなる
こらうやかんのものがおほちやむばをじきもつにせ
んためかさらすば今夜はゆきけしからずふりつみた
ればゆきをんなといふ物かあらおろしやと申おほち
聞てそれはこらうやかんにてはあらじむばはよもゑ
らじおほちはあらくすいしたりいでく語てきか
せんかたじけなくもしゆじやうじやうくわうのくら
ゐあらそひの御時六でうの判官ためよしじやうくわ
うがたをつかまつりつゐに合戦にかけまけてんだい
さん月りんの御ばうにふかくゑのびてましますを眼
前の御子よしと討手を給てんだいさんよりさが
し出し七條しゆじやかこんけたうをか田と申ところ
にて御くびを切申其いんぐわたちまちむくふてたい
けいもんの夜いくさにかかけまけぬるは道理なりこれ
によつて六波羅よりよしとがたの落人をばいはを
もわりたない迄もさがせといふ事なればもしもよ

しとがたの落人にてや有らんにかりそめにやどを
まいらせておほちは何となるべきぞ其ねうばうに宿
かさすば今夜一夜のうらみたるべしうらみはするも
とをるまじやあこなたへこよやむば御前とてゑばの
あみ戸をはたとたてこばたの里の事なれば皆くちな
しとをともせずあらいたはしや常葉御前さきへとゆ
けばみちもなしあとへ歸れば山路なりあたりに人の
あらばこそかなたこなたとかりもせめさて有べきに
てあらざればおほちが家かげに立よらせたまひあた
りのゆきををはらひのけ御こそでをぬいでさつとゑき
若君たちをすへならべ人のおやの子を思ふみちほど
にあはれなる事よもあらじいちめがさをそばだてゝ
風ふく方のかきとなしかんふうをふせぎ給ひけるさ
るあひだ常葉御せんあかつきがたの事なるに諸法の
うゐてんべんのことほりをおぼしめしいだされてい
かにわか共ものをきけさればほつけ一乗のくりきは
たつとし一の巻のはうべんぼんに十方佛土中ゆいう

一せうほう無二やく無さんしよぶつはうべんせつと
とかれたり此もんの心は十方佛土の中にたゞ一乗の
ほうのみ有て二つもなく三もなしほとけのはうべん
のせつをのぞくのぞくといつばいちすなはちめう
なりされば妙とかける文字はへんには女作りにはお
さなしとかけり此ことはりを聞ときは只みづからと
わか共はめうの一字にてあらずやさあらん時は十方
の諸佛もなかあはれみなかるべきうらめしのうき
世やな南無阿みだぶつみだ佛と十べんとなへたまひ
つゝ又わかたちによりりうていこがれ給ひけ
り

おほち此よしきくよりもかどの邊に女のこととして
たつときをとのきこゆるは宵に宿かり給ふ上らうの
いまだかへりかねてましますげなぞなふたかきもい
やしきも女はおなじ事にてあらずやあらこゝろつよ
やと申むばこのよしを聞よりもそれもこゝにたとへ
のさふらふたにの枯木はたかしといへどもみねの小

松にかけさゝす宵におほちこのよしともがたの落人
にてやあるらんとかたくせいぶんし給ひしその一言
のおそろしさに扱こそなたへとは申さねおほちさ
なしとのたまはゞむばはいやにてはさふらはすいざ
やこなたへ申さんとてふうふたちいで戸ぼそをあけ
なふあれはよゐの上らうにてましますか御身一人な
らずおさあひ人をあまたつれいづくよりもいづかた
へ御通有ぞと問ければときは聞召れてうちうら見た
るこはねにてさればこそとよ山人よ風にはもろき露
の身のきえぬは人のいのちにていまだながらへてさ
ふらふぞやいたはしの事やとていまわかどのをばお
ほちがいだきをとわかどのをばむばがもりでゐへし
やうじたてまつりあたため申にゑたがつてすそのつ
ららもとけにけりかくておほちはあひのしやうじの
ひまよりも常葉の御すがたをつくゞ見まいらせな
ふいかにむば御前でゐにまします上らうはよのつね
の人にてはなげなぞなふそれをいかにと申にむかし

みめ能人はかんのりふじんそとをりひめをのゝ小町の
若ざかりびしやもんでんのいもうとにきちじやう
てんによと申せしはもうこしてんのほとけにてわれ
らごときの衆生等は名をのみ聞て目にはみず當時み
めよき人はあやめのまひまこもの舞よしとのみだ
いどころくものうへのときは御せんとやらんもこれ
にはいかでまさるべき一しゆのうたをかけまいらせ
御こゝろのうちそつとひき見申させ給へむば此よし
を聞よりもそれはわらはがわかざかりみやこに有し
ときこそ月見はな見と申てうたれんがをもたしなみ
さふらへ三十年かあひだふしみのさとにすてられ歌
道の事をばはつたとわすれてさふらふおほぢむかし
をわすれさせ給はずば一しゆのうたをかけ参らせ御
こゝろのうちをちつとひき見申させ給へおほぢな
めによりこふであひのしやうじをほと／＼と音づれ
一首はかうぞ聞えける

木はた山おろすあらしのはけしくて

やとりかねたる夜半の月かな
常葉きこしめされてあらはづかしやすがたこそ玄ま
のゑびすに似たれどもこゝろは花の都なりけりみづ
からもこしおれうたなり共よまばやとおぼしめし
木はた山すそのゝあらしけはしくて

ふし見ときけとねられさりけり

おほぢやむばが承て扱はうたがふところもなしよし
ともがたの落人なりでゐは人目もゑげければやあこ
なたへしやうじ申せとてぢぶつだうをこしらへとき
はをしやうじ奉り歌をよみ詩を作りけふもゆきがふ
り候けふもけはしう候天はれて上らうのおぼしめさ
れんもところ迄おほぢやむばがをくり申さんけふ
もけふとといむればあるじのなさけにほだされて伏
見の里にときは御せんはあらたまの月をこしきさら
ぎに成迄おはしますかくておほぢのあたりに人にめ
しつかはるゝゑもをんな共がひとつところにあつま
つて申けるはむかひのたにのおほぢ子の本にこそ正

御ノ假借

月のなかごろよりみめいつくしき上らうの御宿をめ
されいまだかへりかねてましますよしをうけたまは
れ共我も人も人につかはれ参らせてひまなき身にて
さふらへば参りておがみ申事もなしけふはそらはれ
月も能さふらへば主々にいとまを申しざやまいりて
おがみ申さん尤玄かるべしとて都合女は五人何をが
なもつて参らふ時世に玄たがふけうなればとてめん
／＼にちよくしゆを持つれておほぢがでゐへさつと
かゝりさけのいりたる物をとう／＼とすゑならべ常
葉の御すがたをつく／＼とまぼりとれてぞゐたりけ
るときは此よし御覽じてあらおそろしとまほるやあ
のやう成げすはかならずくちのさたうなるにみづか
らいつはりをかたらばやとおぼしめしなふいかにね
うばうたちわらはなぐさめにきたり給ふがうれしき
にめんばくなくは候へどもみづからが古郷を語てき
かせ申さん本國は大和の國ふる里はうだのこほりや
まざとのものなりみづから十四の春の比父母に玄か

られ参らせみやこにのぼり五條あたりにこやどを取
高きもいやしきも女のならひこゝろにまかせぬ事と
てやがてとのごをまうけ御覽さふらへ三人のわかを
まうけてさふらふかゝるわりなきなかと申せどもあ
らたのみな男の心や一でうむ町にはじめてつま
をかたらひ三とせかよふと申せどもみづからさらに
ねたまずそれもこゝにたとへのさふらふいせ物語に
つたへたり男は大和のものならひ河内の國たかやす
といふところにはじめてつまをかたらひこれも三と
せかよへどもあとにのこれるふるき妻のねたむ事こ
そなかりけれ男布而思ふやうわれならでよのこゝろ
があればこそ我をばねたまざるらんと却而女をねた
むある夕ぐれにわれは河内へゆき候いとま申てさら
ばとてたちをつとりわきばさみ河内へはゆかずして
南おもての花ぞのに夜すがらくれぬてさいぢよの
ていを相みるにあらむざんやこの女是をば夢にも玄
らずしてぢぶつだうに参り佛前にむかひかうをもち

花をつみ夜すがらことをひきならしうらみなひてぞ
ゐたりける夜半計に此女をきひさげに水をいれむ
ねのあひだにをきければかならずゆにぞなりにける
すててはみづをいれ夜すがらむをひやしけるこれは
三とせが其間ねたしとおもふ心ざしいろにはいださ
ざりけるがほむらとなりてにへにけりすでに曉のか
ねきくころにも成しかばくるしげなるいきをつきは
より河内のたかやすへはたつたごえと申て惡所の有
ときくものをいつの日の何時かこの山にて我つまの
死せん事のかなしやとおもひつらねて此女一しゆ
の歌をぞゑいじける

風ふけはおきつゑらなみたつ田やま

夜半にやきみかひとりゆくらん

とかやうにゑいたりければ男このよし聞よりもけ
んしむ二君につかへず貞女りやうふにまみえずとい
まこそ思ひゑられたれ

すがたかゝりのまさる女はありとてもこゝろのまさ

るねうばうのありつべしとおほえずとて河内がよ
ひをおもひきりふるき妻にぞちざりけるそれを誰ぞ
とたづぬるにざいご中將なりとかやかやうの事を思
ひよそへみづから更にねたまぬをあたりのもとたち
が我をとぶらひいふやうはおかたはいまだゑろしめ
されぬや一でうの上らうをこの家のうちへいれまい
らせ御身をば大和のうだへをくり申さんとのたくみ
のさふらふおかたとそはん事共もいまいくほどか有
べきあらなごりおしやといふまゝにたもとにすがり
なくほどにねたまじものとはおもへども其ときみづ
からはらがたちうらめしやてんにすまばひよくのと
り地にあらばれんりのえだ神ならばむすぶの神佛な
らばあひせんわう五道りんゑのあなたなるしやか大
悲のゆんでにさふらふねはんのきはかはる其われ
らがいもせはかはらじとふかくたのみをかけつるに
男のこゝろと河の瀬は一夜にかはるとつたへしもい
まこそおもひゑられたたとへみづからにこそ縁つ

きはてゝをくるとも三人のわかをさきにたてゝ出る
ならば子ともにめがくれよびかへさぬ事はよもあら
じとそれをたのみにかけそら出にいでゝさふらへば
なさけもゑらぬ子どもの親にてよび返す事こそなか
りけれゑかもそれはあらたま月一度出たる男のそこ
ろへ二たび歸らんはづかしさめんばくなくはさふら
へども又おやをたのみ大和のうだへくだりさふらふ
が此ゆきみちにふみまよひ有じのなさけにはだされ
このほど是にありつるぞやわごせたちも若ければせ
うゝねつたき事有とも男のもとをそこつにいでゝ
こうくわいすなとの給ひてあまりの事のかなしさに
ゑのびゝのなみだ也おほぢやむばが承てたゝ今こ
そ上らうの御ゆく衛をくはしく承て候へさてしも五
人のねうばうたち御しゆをばよくもちてまいりたれ
どもさかながなくてはきよくもなし歌をもうたひ舞
をもまふて上らうさまをなぐさめてたべ五人のねう
ばう承てみやこの人こそこゝろが月や花に似てうた

をもうたひまひをも舞給へわらはどもの申はねにふ
しとらにをききんうひがしにかゝやけば常夜のねぶ
りはやさめやもめがらすのうかれ聲かうぞとなひて
つげわたるとりもろともにねやをいであさゆふのせ
いろをいとなみ御主の御意にちがはじとそれをのみ
こそたしなみさふらへうたをもまひをもゑらぬなり
さりながらわらはどもの得たる事のさふらふ五月に
なれば田へおりてたうとおとこにはやはれてめん
めんにさなえをつとつて一拍子にさしかゝり田うた
といふ事をすこしづゝ覺えてさふらふがそれをなり
とも歌をふずるかなふおほむ聞てあふさる事ありう
しをばたうりんの野にはなし馬をくわざんのやうに
返すかもさむうして水に入にはとりさむうして木に
のぼるしよほうじつさうときくときはみねのあらし
も法のこゑそれをなり共ひとづつゝ申せゝとおほ
せけりさてしも五人のねうばうどもひとつくにのも
のにておなじ田歌を一拍子にうたふべきかとおもひ

てあればさはなくして五人が五國のものなり一人は
出雲一人ははりま一人は丹後一人はいづみいま一人
はとをたうみのくにの者なりおほぢ子のおほせにて
候にをぬしうたへいやそなたからうたひはじめてこ
そなたにもうたふべけれそれうたへたれうたへと
ばつたひしとあらそふそのなかにとつても出雲の國
のねうばうとしすこしおとなしく見えけるがいや
いやもんだうはむやくみづからうたひ初てそのつぎ
つぎをうたはせむといふよりはやくづんどたち時な
らぬ田うたをはつたと上てうたふたり田うへよや田
うへよさうとめ五月のふをはやむるはかんのふの
鳥ほとゝぎす山がらが四十がらのとりだにも
さわたれば五月のふはさかんなりゑどろもどろに
うたひなし舞を一手まひおさめ一せいをこそあげに
けれめでたやありがたや天照大神くまのゝごんげん
かしまかんとりすはあつ田すみよしかもの下上祇園
しやうちやにむめのみや八まん大ぼさつ惣じてかみ

の御數は九萬八千七しやとぞ聞えけるたかまがはら
に神ぞまします神の父神の母いざなぎいざなみのみ
こと也わらはが古郷出雲の國にたち給ふそさのをの
みことさればかみの御ためにそうまんどころこのた
びあゆみをはこぶともがらたれかりしやうをうけざ
らん此りしやうをうけとつてたい今の御座敷の上ら
うにまいらせんあらめでたやとうたふたりそのつぎ
をみてあればはりまなるたかさごや／＼おのへの松
は高からでゑたにすむは何やらん富とさいはいさつ
と請取て只いまの上らうに是をそへてまいらせんあ
らめでたやと申てさかづきををつとつてやがて御し
やくに參りけりそのつぎをみてあれば丹後の國のね
うばうかうこそうたふたれたんごの國にはひさしき
人をたづぬるにうら嶋の明神七百歳をたち給ふを
つかうなれあひあまのはしだてくせのとのもんじゆ
のちゑとさいかくをさつとうけとつてたいいまの上
らうのわか君さまにまいらせんあらめでたやとうた

ふたり其つぎをみてあればいづみの國のねうばう年
を申せば十八さいにまかりなるかほにもみぢをちら
してうたひかねつゝ打うつぶひてゐたりけりうたふ
たる女どもこのよしをみるよりもわごせは人に歌を
うたはせてわれはなににうたふまじきと申ぞうた
へ／＼といふまゝにたもとをとつて引立るそれまで
もさふらはすうたはんといふまゝにゐたるところを
づんとたつてながえのちやうしをきつとかざひてひ
しやくとつてうちかたげざしきを二三度まはり候て
はつたとあげてうたふためたやなわらはが古郷い
づみの國のものなれば其名によそへていづみがわひ
てさふらふぞのこりの女ども拍子を打そろへやごせ
わごせそこつなる事な申をいづくのほどにわひたぞ
あふこゝのほどにわひてさうながえのてうしに銀の
ひさくにてくむとも取共よしつきじかゝるめでたき
いづみをばたれにかまいらせん／＼あふそよまこと
わすれたりたい今の御座敷の上らうに參らせんあら

めでたやとうたふたり其次をみてあればとをたうみ
の國なるはまなのはしのつめのもの名所の者なれば
いかにおもしろくうたはんずらんどこゝるをすまし
目をすますところ此女がまひをば舞すしてまもお
ちさしてはしりいるうたふたる女どもこのよしをみ
るよりもわごせはうたをうたはずしいづくをさして
にぐるぞ出よ／＼とせめければさはなくしてこのを
んなきるものゝつまをたか／＼とさはさみたもと
よりもたすきとりいでさつとかけふりたるかさのと
ころ／＼やぶれたをきつと引そばめつゝといでゝき
よくにかゝつてうたふた遠江なる／＼はまな橋の
下成はこひかふなかはへの子かいかなになんぢらかり
りうめく共かりうめく共しや取てうちあげて只いま
の御座敷のさかなにまいらせんあゝめでたやと申て
きよくにかゝつてくるひけりざしきうちの人々一度
にとつとこゑをあげおどるばかりにまひおさめ座敷
にどうとなをりけりわかぎみの御くわはうするはん

じやうと聞えけり

ときは問答

去程にときは御前はほどなくきよもりになびき給ひけり老木の花のながらへてはるにあへるがごとし子共のみるめもはづかしやつまのかたきになびくこそたぐひすくなき次第なれこゝろつよくてさてはてばわが身の事は扱をきぬ母や子どものゆくすゑまでよもすなほにはあらじものをと思ひのほかにぞなびかれけるさてこそきよもり引かへてあさからずちぎり給ひけり

三人の若たちにもあまたのめのとをそへさせ給ふ母のにこうもいたはりていつきかしづき給ひけりときは心に思召今こそかやうに有ともかはるならひのあるならば又うきめにもあひぬべしすゑ迄子細のなからんは出家のすがたにまかじとていまわかどのはだいごの寺をとわかどのをばおんじやうじへこそそのぼ

されけうしわかどのはおさなくていまだめのとにいだかれてあかしくらすとせしほどに七歳にならせ給ひけりときはこゝろに思召あのうしわかと申は兄弟が中のくせものなりたいしよへのぼせをくならば人のくちもおそろしく都ほとりにひきこまれるてらをたづねてのぼすべしいづくにか有らんと仰いだされたりければ有人申けるやうは鞍馬寺と申はゆげの女院のみはかたう本尊は大悲たもんでんふくちゑともにもまんぞくせり牛若殿の御ためにはよかりなんとぞ申ける

ときは聞召れて其儀にて有ならばみづからよそながら一けんしさも有なんと思ひなばうしわかをくらまへのぼせばやと思召かりそめぶりの御まふでなればあじろのこしのまたすだれさあらぬていにかけさせ御ともの人々にも女房たち一二人はしたの女二三人りきしやばかりを御ともにてかはらをのぼりにまいらるゝかものみやしろふしおがみ七まがり八ちやう

ざくらまにつき給ひけり地しゆごんげんふしおが
みらいだうにまいらせ給ひてかうしのうちへ御いり
有らいばんにむかひ禮しつゝ高座にむすとあがりて
かうろとりあげけいならしゑばらくねんじゆゑたま
へりかゝつしところに鞍馬寺の別當とうくわうのあ
じやり日中のつとめのそのためにらいだうに参りか
うしのうちを見給へばゆふなる女着座してはやねん
じゆなかばと見えにけり

とう光御覽じてやはか女のみとしてたい法座へはあ
がるべきたさんのちごの僞て寺をわらはんそのため
にぶらいちやくざのねんじゆかやさありとても一た
んとがめばやと思召いかれる面をふりあげてやあい
かに聞か只今高座へあがる人をちごかとみればさは
なくてはいむざんの女なりおなじ人間といひなが
ら女人はさはりおほくしてきよきれい地ふむ事なし
ましてや持かいちりつの高僧貴僧ならではないちん
のかうしへのぞむ事はなきものをそのうへふじやう

げだいなき男子の身だにものぞまぬにかゝるいはれ
を去りながらてらをあなづりのぼれるか又もとより
ぐちのをんなにてまよへるまゝにのぼれるかせひに
付てひがことどもつたいなし女房よはや出よとぞい
かられけるときは聞召れてこなたの事をおほせさふ
らふか本よりぐちの女にてゑらで参りてさふらふぞ
をしへてたべとて仰ける東光聞召げに知すはをしゆ
べしそれ釋迦佛と申はじやうばんわうの御子なり七
多太子と申せしが十九にて出家をとげだんどくせん
にとぢこもりあらら仙人をゑとたのみなつみ水くみ
つま木取六年きうじゑたまひゑんくをとげさせ給ひ
て廿五にて僧に成ぐどんと申奉る又六年はちやう座
にてまどろむ隙もまします十二年を経給ひてぼだ
いじゆの本にて佛とならせ給ひて御名をば釋迦と申
なり三十の御年よりけごんきやうをととき給ふ三七日
の間なりしちしよはちゑに是をとくあごんきやうと
申は十二年のあひだ也はらないこくろくやおんにて

この法をとき給ふぞういちあごんちやうあごんざう
あごんちうあごん此四あごむのなかに女を殊にい
ましめりはんにやきやうと申は三十年にとき給ふあ
たらしきほんには一萬六百卷二百六十餘品なりかみ
のかすを申に一萬八百三十八文字の數は六十おく四
十萬字にゑるさるゝ此ほんにやきやうのなかにも女
高座へあがれといふようもん更になきぞとよもつた
いなし女房よはや出よとぞいかられけるときは聞召
れてげに／＼いはれのさふらひけるぞやもし此きや
うのなかに女をはめたるきやうもんのあらばこの高
座をば出まし御ひじりまけさせ給ひなば法師のうへ
のふかくたるべしわらはまけてさふらはいをんなの
ふかくたるべしすいぶん此女も一言つかひ申べしま
づそまかどうじ經にとくしよさいすべし男子をうみ
てたねをつぐなんし此ほうぎやうせばまさになげだつ
を得べしもしせん本ノマこうとあつくわのほうこのことば
をろんせばうちむちしゆたばらもんびしやしゆたと

うに至る迄しやべつも更に有まじ經のせつとのたま
はい一切經の惣一法花經をもつてほんとせり彼法花
經と申はだいごみのきやう也まき數は八卷文字の數
を申に六萬九千三百八十餘字につもれり彼だいがう
に妙法れんげきやうとく其第一の筆はじめにめう
といへるもじを書へんには女作りにはおさなしと書
てこそめうとはこれをよまれたれめうと書ける文字
のよみかず多とは申せ共先たへなりとよまれたり六
萬九千三百八十餘字のもん／＼は別の事をばほめず
してめうをはめんが爲也妙と書ける心は言にもものべ
がたし筆にもいかでつくすべきごんごだうだんなる
間しんきやうしよめつなりとかや爰をもつて安する
にまんぼうのいたゞきは女をもつて極たりかの法花
經と申は釋迦佛の御年七十三と申二月上の八日にと
きははじめ給ひて八ヶ年の間せりやうせんへの十ぼん
はじよぼんはうべんぼんひゆぼんしんげぼんやくさ
うゆぼんじゆき品けじやうゆぼん五百弟子品えんぎ

ふノ誤

品はつしぼんこくうへの十一品はほうたう品だいは品くわんち品あんらくぎやう品ゆしゆつ品じゆりやう品ふんべつくどく品すいきくどくほんほつしくどくぼんじやうふぎやうぼさつぼんしんりきぼん是也又りやうせんへ歸て七品とかせ給ひけりぞくるいぼんやくわうぼんめうおんぼんふもんぼんだらに品こんわうぼんふげんぼんこれなり惣じて二十八品なりそのほかのせうぎやう五千餘卷のなかにも女高座へあがるなといましめ給ふもんもなしおぼつかなしべつたうの扱こゝろのうちこそおかしけれとうくわうおほきにもきもをつぶさせたまひて此もんだうにまけなばかつうは寺の名おりたるべしかなはぬ迄も今一言つかはばやと思召面白ねうばうあるきやうのなかにせうさんせんかい男子しよぼんなうかつしゆゆい一人女人しごつしやうととかれたりこのもんのこゝろは三千界のあらゆるなんしのもろゝのぼんなうをあはせあつめもつて女人一人のごつしやうと

すされば地獄は外になしをんなにかぎるところ也女人一人生れなば地獄のつかひ來るとて三世の諸佛はゑたをまきおちさせ給ふところきけとをくかんかを尋ぬるに天台山の高山へ女の參る事はなしわうざんまれいさんしやうりやうせんに至迄女をゆるし給はずまぢかきあきつしまにもゑんりやくじ高野山初瀬をかでらやたへま寺たうのみねに至る迄ないぢんのかうしへのぞむ事のあらざればはるかにおがみ奉るかいぎやうの程のつたなさよ女と生れる事もひはうしやうほうなる間ぐちのやみふかふしてゑつとのおもひあさからすじやねんをつくる事もなし御堂のけがれ候ぞとうして御出ましませ猶も御出なきならばげそうともに申付をひいだすべしとぞいかられけるときは聞召おほきにはらを立給ひいかにやとうくわうものをゑらすば無言あれたつとき人のけしからず女をそしり給ふ事にくむにはあらずかならずりん糸のどうをはなれんがため也まよひの前になんに

よ有さとのまへになんによなし善惡二つなきゆへ
にじやしやうも更にへだてなしこれはふかきこゝろ
にて申ともゑろしめさるまじ先みゝちに申べし佛
も母がましませばこそまやのためにはじめてほうお
んぎやうをとき給ひたうりてんにあがりひちげがあ
ひだ法をときはゝのためにほうせらる佛も昔はぼん
ぶにて太子をおはせし其ときは三人のきさきおはし
ます一をばやしゆだらによ二のきさきをばいぎとて
さうなく人にみせられず第三にくたみとてことによ
うがんびれいなりその三人の御なかに御子あまたお
はします嫡子をばらごら太子つぎにせんちやうびく
なりきやしゆだらによと申は釋迦佛のいんにしゆと
うぼさつとおはせし時くいによといへる女に五もと
のれんげをうえてのちねんとうぶつとくやうせしそ
のやくそくのつきずしていまやしゆだらによと生れ
て太子にちぎりこめ給ふ大唐のいわうぎむしやうり
やうせんにいたるまでをんなをそしり給ふ共りやう

かいの法をばやはかはそしり給ふべきたいごんりや
うぶかけて後ぢやうゑの二法たちがたしさの玉ふ東
光も母のはらにやどつてくちゑんまんをぐそくせり
さいせかうらいしやうないしはらしやに至る迄父母
ともにあたへし女をそしるほうしははゝのおんをそ
むけり父母のおん知ざるをば只ちくるいにたとへた
りかみをそり衣をすみにそめたれ共ぐちなるものを
ぞくと云うへのかたちはかはらねどこゝろにほつし
ん有人を法師とこれを名付たりとうくわうのごとく
にきやうのものゑをてこゝろにほつしんなき
人をけうしやとこれを名付て木にかゝるふちのそら
へあがるがごとくにてをのがちからで更になしぐち
まうねんをさきとしていたづら事をほんとする人の
こゝろのはかなさよさもあれ此寺はいづれのみかど
の御時にいかなる人の御願にてたてられけるとひと
給ふとうくわうきこしめし我寺と申はくわうとくて
んわうの御代の時勸進のひじりはもとはならほつし

くわんちやうばうと申せしが南部をいで、天台山北谷にすみ給ふせうそうづと申てうげんちとくのひじり也。彼僧都のすゝめによつてめうらくだいしの御建立ゆげのねうゐんのみはかたう本尊は大悲たもんでんふくちゑともにまんぞくせりときは聞召よの事はさてをきぬこのもんだうにはかちぬるぞそれをいかにと申に女をいれぬてらならば女院のみはかをばなどこれには立をかれけん其うへだいひたもんでん女をそしり給はずしんの御弟子御いもときちぢやうてん女御前とてひだりのわきに立給ふげにと女をえらみていださるべきにさだまらば女ゐんのみはかときちぢやうてんによもろともに御寺をいだしおはしませみづからも御供してべちに寺を結てあんじせんはいかにやべつたうとこそおほせけり

もんがく

爰に源氏の御代にいでさせ給ひたる由來をくはしく
たづぬるにもとはつのくにわたなべげんじの大將に
えんどうむしやとうふさがその子に遠藤たきぐちも
りとうと申せしが出家してのかいみやうをもんがく
とこそ申けれそのころあらざる大行をくはだて玄ん
ごんけうに心をかけごくねつに笠をもきすげんとう
のさむき夜にふすまのかずをもかさねず大みねかつ
らぎを七度とをり熊野のなちのたきに三七日うたれ
正身の大聖明王にあひ奉りしかばすでにごんじやと
こそ申けれ其後みやこへのぼりあたご山のふもと高
尾の玄んごじと申古寺に御座有しがかゝるさうゑい
ぶつかくを建立すべき事こそ本望なれまづしゆろこ
んりうあるべしとて洛中らくぐわいをくわんじんし
てまはられしが東山ゐんの御所ほうぢうじどのへま

いり是はたかおの玄んごじのかねつきだうの勸じん
に參りて候御ほうがあれともんがくはくわんじんち
やうをたからかにこそよみ上げころは卯月上旬の
事なるにをそごくらちる木の玄たはさむからでそら
に玄られぬうの花の雪は御庭にちり玄きてやまほと
とぎす村雨にぬれてさわたる折ふしに雲上のくわん
げんかうは半也上らうたちは御覽じてそう／＼なり
あの法師後日にまいれ御ほうが有べしとの御誑也も
んがく聞召れ何雲上のくわんげんかうとや笙笛きん
くごびはねうとうのあそびは一たんのゑいぐわかね
つきだうの勸進は末世のためにあらずやくわんげん
かうをとゝめ御ほうがあれともんがくは又くわんじ
んちやうをたからかにこそよみあげけれ上らうたち
御らんじてそう／＼なりあのほつしををひ出せとの
御誑也承ると申て青侍七八人はらりとたつてもんが
くを引立後日にまいれ御ほうがあるべしとのせんじ
にて候にかさねて參る事こそきつくわいなれいそぎ

いでよといふまゝにそくびをついてをひいだすもんがくこゝろにあたはぬ事なればいかにもゑづかにあゆみ出るいそぎ出よと云まゝに勸進ちやうをひんばふて二つ三にひつさきかしこへがばとなげ捨又取て引立て門の外へぞいだすもんがく御らんじて抑これは何事ぞいなならばいくたびも其由をこそいふべけれ黒衣のうへのちじよくをあたふるところはいくなりつら／＼物をあんするにせんじゆの二十八ふしゆ薬師の十二神明とがうさんせぐだりやしや明王のがうまのりけんを引さげてあくまを退治し給ふに何ぞもんがくがたいしたる此けんはいつのれうぞと思召うすすみぞめのころものそでをくる／＼とくりあげてめてのわきよりもこほりのやう成劔をぬきをつぶせ／＼さすほどに青侍を七八人時刻もうつさずさしころすしゆもんのぶし共あつまつてたか手こてにいましめて庭上のこにはに引すへたり上らうたちは御覽じてはつかうものゝもんがくとはあのほつしが

事かいそぎうんきをはねよと儀せられればすでに死罪にをよびけり

され共ほうわうよりのせんじにはたとへばあのしやもんこそはかいの者といひながら種々のほうゑを身にまとひたるものをつるぎのさきにはかくべきぞ七でうおほぢにどくつをかまへおとしいれ百日を待べし百日すぎばほりおこし跡をはとふて得させよとのせんじなれば宮人等すきくわをもつていで七條西の洞院に二丈五尺につちあなをほつてもんがくをおとし入うへにもつちをはねおほひ百日日數をおくりしはげにあはれなる次第なりかくて十日計うちすぎてもんがくのろうのあたりに聲有てこの内のひじりひじりとありしかば文學きこし召れてかやうにどくつにこもりて後とひくる者もなきものを一向にわれをうしなはんとのせんじにてありけるなぢよくあく世中なるあひだそれとてもちからなしとこそ仰けれさはなくしてちうだう薬師いわうせんせいよりの御誼

にはたとへばあのしやもんこそはかいのものといひながらあらざる大行をくはだていまだ其願成就せず今度のいのちをたすけをき諸願せさんと御ちやうにて十二神の中よりもこんびら大しやう御つかひに参りて候どくつのくらきやみならばるりのつぼを得さするぞつぼのひかりでてらしてゆけ食事の望の有ならばとてもくすりを得さするうへ樂をぶくして命をつげそれ給はれやもんがくとてげにあてやかなる御手にてるりのつぼをぞくだされけりげにとくらきやみをばつぼの光りでてらしけりしよくじの望のあるときはくすりをふくしていのちをつぐ何に其身のおとろふべきやせず黒まずもんがくは日數をくりたまひけり又十日ばかり打すぎちうだうやくしいわうせんせいよりの御誼には左様にどくつにこもらんよりも我前にきたり御經をよみだらにをみて百日をまつべしとの御誼也文學承てかやうにどくつに籠て何としてかは出べきぞ其時こんびらはらをたてさ

やうの心中にてこそかゝる無明のくを受け神通自在たるべくばなどかたやすく出ざるべきもんがくげにもとおぼしめし居たる所を立とおもへばその身はけしのごとくにていでられけるぞしゆせうなるさてこんびらとうちつれてちうだう薬師に参りつゝきやうをよみだらにをみて給ひてあかしくらすとせしほどにはや百日になりにけりまんじける夜半にかたじけなくも御本尊はみちやうのうちよりもあらたに御こゑをいださせ給ひかにもんがく日數もけふは百日とおぼふるなり人のころをやぶるはばさつのぎやうにあらずやいそぎどくつにかへりほうわうよりの御尋にあふべしとの御誼也承ると申て急ぎどくつにかへらるゝさるあひだはうわうよりの御誼には有し時のひじりは日かずもけふは百日とおぼえたりいそぎどくつをあけあとをばとふて得させよとのせんじなればくわんにんらすきくわをもつていてどくつをあけてみてあればやせも

せずくろみもせずいとゝ氣色はあてやかににつこと
 笑て出給ふ官人きもをつぶしつゝ東西へはつとにげ
 ちつたり文學御らんじてなふなにとてどうてんし給
 ふぞこれは有しときのひじりにてはなきかともんが
 くにかからをつけられてやう／＼こゝろをとりなを
 しもんがくをしゆごし奉りほうぢうじとのへぞ参り
 ける

上らうたちは御覽じて御めを見あはせゑたをまいて
 おぢさせ給ふほうわうえいらんまし／＼てしゆせう
 なりもんがくさるたとへあり愚者のつくる善はせん
 ともにつみちしやのつくるつみは罪ともにせんとは
 今こそ思ひゑられて候へさらば有し時の勸進ちやう
 をよみ候へちやうもむあるべしとの御誼也もんがく
 聞召れてくわんじむちやうがあらばこそ時刻うつし
 てかなはじと持たるあふぎををしひろげくわんじん
 ちやうをたからかにこそよみ上げれしやみもんがく
 敬白ことには貴賤だうぞくの助成をかうぶりて高尾

山のれいちに一ゐんを建立し二世あんらくの大裡利ノを
 ぐんぎやうせしめんとこう勸進の狀それひそかにお

假借

もむ見ればゑんによくわうだい也しやうぶつのけみ
 やうを立絶ノ借といへどほつしやうすいまうのくもあつく

おほつて十二いんゑんのみねにたな引しより以來本
 有ゑんでんの月の光りかすかにしていまだ三徳毒端四萬
 のたいきよにあらはれすかなしきかな佛日はやくほ

して生死るてんのちまたみやう／＼たり只いろにふ
 けり香にふけるたれかきやうざうてうえんのまどひ
 をしやせんいたづらに人をはうし法をはうす是あい

借字

ゑんらごくそつのせめをまぬがれむや爰に文學たま
 たまぞくぢんを打拂て法衣をかざるといへど惡行猶

こゝろにたくましくして日夜に罪をつくりせんべう
 又みゝにさかつて朝暮にすたるいたましきかな二度

三づのくわきやうに歸てながく四生のくりんをめぐ
 らさん事を此ゆへに無二のけんしやう千萬ぢくチ脱スルカちく／＼

に佛種のいんをあかしすいえん至城のほう一つとし
誠ノ借字

てぼだいのひがんにいたらずと云事なしかるがゆへにもんがく無常のくわんもんになんだをながし上下のゑんぞくをすゝめ上ぼんれんだいのえんをむすびとうめうかくわうのれいぢやうをたてむとなりそれたかお山うづ高してじゆふせんのかすゑをへうし谷ゑづかにしてしやうさんとうのかけをゑけりがんせんむせんでぬのを引れいゑんさけんでえだにあそぶゑんりん遠してけうぢんなしゑせきことんなふしてゑじむのみありちけいすぐれたり尤ぶつてんをあがむべしはうがすこしきなりたれの助成せざらんやほのかに聞しゆしやゐぶつたうくどくたちまちぶつしんをかんすいはんやいつし半せんのはうざいにをひてをやねがはくは建立成就してきんけつほうりき御ぐわんゑんまんなんしとひりんみんゑんきんしんそぎやうしゆんぶゐのくわをとたひしんによさいくわいのゑみをひらかんことには又しやうりやうゆうぎ前後大小すみやかに一佛ゑんもんのうてなに至るか

ならずさんしん萬とくの月をもてあそばんよつて勸進しゆぎやうのをもむきけだしもつてかくのごとし治承三年三月日もんがくばうとぞよみあげけるほうわうえいらんましゝてしゆせうなりとよもんがく扱はごんじやにてましゝけるやけふよりしてもんがく上人にふせをき申しそぎ我山へあがり給へ御奉加有べしとのせんじはめんぼくところ聞えけれゑかりとは申せどもしよきやうのこらず一とうにそうもん申されけるやうはたとへばあのにしもむをすなをにをかせ給ふならばらうせき國にあまるべし死罪をばやめられてるざいさせられ候へとそうもむ申されたりければ右大將むねもりのきやうは此よしを承りもしさも有て候はいなにがし申給て伊豆のおほしまの観音堂へながしうしなふべしと申されたりければほうわうえいらんましゝてそのころ平家の事をせひをむだにゑたまはずそれはともかくもむねもりがまゝたるべしとのせんじ也むねもり文學を給はりか

まへてほんだうはむやく也熊野のなだをわたし船路
たるべしとの御誼にてふくゐのしやうしもつかさ次
郎太夫ありはると申さぶらひに仰付上下三十六人に
てもんがくしゆし奉りほうぢうじどのをぞいでに
けるあらいたはしやもんがく都のうちを出し事いま
ばかりとやおぼしけん七でうおほぢにたち出て東を
はるかにながむれば音羽の山の松かせはをのれとき
んやゑらぶらんふもとにおつるたきつぼはなになが
れたる清水寺本尊はせんじゆせんげんにやくがせい
ぐわんの御ちかひもだしたまはずば今一度みやこへ
かへし給へときせいしてにしをはるかにながむれば
丹波におひの山みねのだうたにのたうさがほうりん
じうづまさのやくしになをもなごりありきたには鞍
馬關山鬼門にあたりてひえいざん中だう薬師の十二
神さて我やまの十二神こんびら大將七千のやしや北
野をはいしたてまつりもんがくが此たびのおんるの
ざいをなだめつゝ今一度都へ返し給へときせいして

南をはるかにながむれば八幡山にたつきりの石清水
にやかゝるらんかいとくげだつぐせいりきこんがう
八まんねがはくはげんじをまほりたび給へときせい
を申させ給ひつゝゑつか作り道鳥羽院の御さんさう
よそながらふしおがみ刑部左衛門なにがしがそのき
うせきをみるからにいとゝ涙もせきあへず念佛申經
をよみそのゆふれいとぶらひてよどの津につきけ
ればはやかはふねにうつされて水にまかせてながれ
ゆく弓手をはるかにながむればことのねゑらぶるき
んやの里彼ざいご中將のましろのたかをてにすへし
かたのゝはらのかりごろもいまきてみるぞよしなき
めては山崎關戸のゐんたれかたてけんたから寺ひな
をぞだつるとりかひのかぶりの里は是かとよゑのぐ
はげたる古佛はや渡邊につきしかば海上はるかにか
ちを取をひてのかせにほをあげてなみちはるかにふ
かれゆく心ざしこそあはれなれ
文學仰けるやうはあつばれ源氏のよなりせばか程の

ざいによつてよも遠島まではながされじをこれも平家のやつばらがてうくわするによつて也是より伊豆の大島へなん十日にもゆかばゆげんじをまぼるゑるしには食事をとめぶくすまじとの給ひて船底にいらせ給ひまくら取てひきよせうちふし給ひてそののちはをきさせ給ふ事もなく又ねいり給ふ事もなしふしながらおほせけるは扱こゝはいづくをとをるぞ天王寺のおきと申もんがく聞召れて異國にてはなんがく大師我朝にては聖徳太子衆生さいどのゑひふかしさりとて佛法方のもんがくをばよもすてはて給はじなさてこゝはいづくをとをるぞすみよしさかひうちのみなとわが吹あげやたまつしまぬのびきのまつきみゐでら藤しろたうげゆらのみなときりへの王子ちりのはまみなへたなべのおきすぎてなちのおきとぞ申けるもんがく聞召れて我此御山にまいり三七日瀧にうたれしやうじんの大聖明王にあひ奉りし其ときははやごんじやとこそいはれしになにとをこなひ

なしたる文學がぎやうぞや爰はいづくぞはまの宮さのゝ松原太夫の松新宮のみなといたの里いせの國まの國尾張參河のおき過ててんりうのなだにつき給ふ彼なだと申は東國一の惡所也ふじのたかねに黒雲が二なみ三なみさつとかゝると見えしかばあはけしきのかはるはなは手をとひてほこもおろしほばしらを立なをせといへる時刻もなかりけりいせの國くつかあらしといふ風がま十文字に吹たりけりくま野成新宮おろしはうしろにふく一方ならず四四方よりもみあはせたる風なれば枯木はえだをおろしてふくもくえうをあらひくさの根をかへしてあぐるなみはひとへにけぶりのたつがごとくなり四方のかせが一度にはつともみあはせてふくときは今はこのふねかなふべきやうあらずしてかたはらをたてゝくるりくるりとめぐりけり船の中なるものどもが聲をそへて一同に南無あみだぶつと申けれども船底成もんがくはなに思ふたけしきもましまさずそらいびきし

てこそふされけれしゆごのぶし梶取どもこのよしを
みるよりもあらぶだうなあのひじりやたとへはびん
せんなんどにて乗たるとか申共かゝる風波のなんな
らば御きやうよみだらにをみて龍神なふじゆのきた
うなんどもあるべきに此おきにて我々が死せんずる
事どもはあのもんがくゆへとおぼゆるなりふなぞこ
よりひきいだし海へ入むといふもあり又有方のせん
ぎにはわたくしならぬもんがくなればいかゞはせん
と云もありかやうにいろ／＼さたしけるを聖はきこ
しめさるどもいよ／＼きかぬていをしてそらいびき
してこそふされけれかゝりけるところにとも打なみ
があまつて文學のつふりのうへをきつとうつてぞと
をりける其時もんがくはらを立ふしたるところをか
つばとおきふねのへいたにつゝたちあがつて大音あ
げていかにこのおきを上人がとをととゑらぬかえさ
こそるにんといひながら龍王だにもあなづりて此な
みかせをたゝするは大龍めがわざか小龍めがわざか

雨風やめぬものならばりうぐうとはいふまじきぞも
んがくわけ入てためしをたつてくれうぞえ龍王めり
うわうめとぞいかられけるしゆごのぶし梶取ども此
由をきくよりもさればこそもんがくにははやものが
ついてくるはするぞりうわうめとぞうごんせばいか
でなみかせやむべきぞ是につけてもわれ／＼が死せ
んずる事どもはうたがひあらじと申つゝいよ／＼念
佛しけれどもひじりはちつともどうてんせすりうわ
うめとぞいかられけるもんがくの御こゝろすゑたの
もしうぞ見えにける
かゝりけるところにびんつらさうにゆふたる龍女一
人なみのうへにうかむわれをばたれとか思召りうぐ
うのをとひめにこひさい女とはみづからなり聖人の
此なみのうへを通らせ給ふをおがみ申さん其爲につ
の國わたなべよりも是までつきをひ申せ共ふねのう
ちにぎよしん有てをきさせ給ふ事もなし角て大嶋の
御堂にあがらせ給ひては又いつのよにかはおがみ申

べきと思此なみ風をたゝせ申上人の御すがたを拜申
事の有がたさよ今は十六のつの落成佛とくだつた
がひなし いざさらばこうはの風やめて參らせんとて
かきけすやうにうせければいま迄あれとおそろしき
風ノ宇脱スルカ
やみうみのおもてへいゝとしてをひての風がふき
ければしゆごのぶし梶取ども上人をらいしたてまつ
りろかひかちをたてなをし風にまかせてふかすれば
都を立て文學伊豆の大島まで五十五日に着給ふ食事
をとゝめ給ひしはげんじをまぼるいはれなりかくて
もんがくは大志まの觀音だうにあがらせ給へばい
ごの人々も御いとま申都へこそかへりけれ爰にもん
がくの御弟子にがくもんばうと申ておはせしが片時
もはなれ申さねども今度はあるざいの事なればちから
をよばず一人みやこにとゝまつてなげく事はかぎり
もなしかくてもあらぬ事なれば御あとをゑたひ申
くだらばやと思ひほんだうにさしかゝり夜を日につ
いでくだるほどに大島のくわんおんだうに參り上人

にあひたてまつりよろこぶ事はかぎりもなしかく
て師弟子の人々は觀音堂に御座有けれどもあたりの里
人まいりたつとみ申人もなし何としてかはちかづけ
むと思召さうきやうの法ををこなはせ給ふこうする
かた八十日過しかた八十日をこなはせ給ふ
ひるがこじまに御座ある兵衛のすけ頼朝はつたへ聞
召れてめのともりながをめして仰けるはまことや承
はれば大島のくわんおんだうへこそみやこよりうげ
んちとくの上人の御下向有てさうきやうの法ををこ
なはせ給ふがつゆほどもちがはぬよしをうけたまは
るいざやまいりて御うら一つとひ申さん尤ゑかるべ
しとて主從御船にめされおほしまのくわんおんだう
にあがらせ給ひうしろだうのえんのいたをとうゝ
とふみならし給ふ折節もんがく初夜のつとめのその
ために高座にあがらせ給ひしが只今うしろだうのえ
んのいたのなつたるをとを聞召ひじりはふしんにお
もひゑかんを取て見給へばとをくは百日ちかくは五

十日の間に日本のあるじとなる人のあしをとゝ聞たる事のふしぎさよと師弟子御物語ありければ頼朝うしろだうにきこしめしあらめでたのうらかたや候是にましたる事あらじいざもどらんと仰ければもりなが承りかゝるうげんちとくの上人に御對面有てなをなをすゑのめでたかるべき事共御たづねあれと申よりともげにもと思召つとめ一座の過るまでうしろだうにたちやすらはせ給ふかくてつとめもすぎければたいいまのまれ人こなたへと仰けりよりも御座になをらせ給ふもんがく御覽じてあらふしぎや御身は誰人ぞわらは名はもんじゆ子げんぶくめされて其後兵衛のすけ頼朝にてましますかよりもふしぎにおぼしめしさん候とおほせけりもんがくおほせけるは御身のちゝよしものなれるはてが見たきかと仰ければよりともきこしめされて見たく候ともみたかな字衛尉ならずともなか／＼申ばかりもなしいで／＼さらばみせ申さんとぞばなるをひをひきよせからげなはぶ

る／＼とひとつとひて上だんよりもにしき七重につゝみたるされたるかうべを取りだし是こそ御身の父よしものなれるはてよ見給へとて頼朝の御手にまいらせらるゝよりも御らんじて更に誠とぞばさねばさあらぬていにもてなしそばなるつくゑにをき給ふ文學御らんじてほどふりたる事なればさだめて御うたがいあるべしそのゑるしを見せ申さんとてつくゑなるかうべにむかひ兵衛佐よりもこそ是迄來り給へ義朝よしとと二三度よばせ給へばされたるかうべのうちよりも御なみだそゝぎそれかあらぬかと御聲かすかに聞えければ其時よりもつくゑなるかうべをとりあげ御そでのうへにのせたか／＼とさしあげ只今いきたる人にももの給ふふせいにてさてもにし坂本までは御供申せしがくらさはくらしゆきはふるさがり松のへんにてをひをくれ參らせ夜もほのぼのと明るまでりうげのやまにまよひしがよるはほうしの大將大屋のちうきといふものあとより手あげく

をつかけすでになんぎにをよびしをきた近江いぶき
のふもと草野の庄司にたすけられかれがところにて
としををくり春にもならば御あとをゑたひ申さんと
おもひしに尾張のおさだにうたれさせたまひ御くび
のぼり獄門にかゝれるよしを承るせめてはかはらせ
給ふ御すがたをなり共見まいらせむとおもひ草野の
さとをたちいでゝ亥のびみやこへ上りけりいまづか
はらといふところにて彌平兵衛にいけどられうき六
はらへわたされて六でう河原にてすでに死罪にをよ
びしをいけのにこうにたすけられ此國へうつされて
二十餘年の春秋ををくりむかへてすぎゆけ共少も父
の御事をわすれ申事もなしあれはもんじゆか兵衛の
すけかと今一度仰候へとてきえいるやうになき給ふ
文學もがくもんもさて御とものもりながもこゑもを
しますなきゐたりもんがくこのよし御らんじてそれ
は五ぎやくざいのひとにてなみだをかけぬ事にて候
それこなたへとおほせ有てにしき七重につゝみもと

のごとくにおさめ給ひもんがくがあらんほどは御こ
ころやすくおぼしめせ平家をてうぶくすべしとてや
がて十二ヶ條のまきものをかきこそゑるし給ひけれ
そもく十二ヶでうと申は第一に天地のきたう第二
にくくわうのきたう第三にふものきたう第四に源氏
のきたう第五にはげんじをまほるしゆしやうのきた
うかくのごとく五ヶてうは五體五きやう五せつの
いはひをかたどるところなり今のこる七ヶてうは平
家をうしなひほろぼすべきてうふくのゑちふしぎを
あらはす七つの數なりけりこれは御身のはるくくと
きたりたまへるこのたびの御引出物とて參らせらる
よりともなゝめにおぼしめし三度いたゞきまぼりに
かけ萬事はたのみたてまつるいとま申てさらばとて
又御座ふねにめされてなごやの御所にぞかへられけ
るこれやこのげんじのはんじやうのはじめと聞えけ
り其後もんがくはしらきのこしをつくらせみなみの
えんにかきすへこくうにむかつておほせけるはもん

がくこそたゞいま上洛つかまつれこしかきやあるとおほせければをつとこたへて程もなくりきしや二人きたり御こしをかきこくうへあがると見えしかばせつながあひだにわうじやうのぎをんばやしにつき給ふひるは人のをばかりよにいればもんがく四條のまちへたちいでゝかすのぐぶつをかひあつめ祇園ばやしの其うちに三ちうにだんをつき七ちうにたなをゆひ百八十本のへいぐしをきりたてかすの人形を作て平家のむねとのうんかくの名字名乗を書ゑるしてうぶくの法ををこなはるゝ三七日にまんずるとき上だん中だん下だんの百八十本のへいぐしが一度にはつとみだれあひ平家のむねとの雲客の御くびきれてみやうわうのりけんに立と見えしかば一法は成就したりとてだんをやぶつていで給ふかくてじゆゑいのあきのころ平家みやこをおとされつゐにいくさにかたずしてほろびはてさせ給ひしはもんがくのいきどをりこはきゆへとぞ聞えける

いふき

義朝に三男わらは名はもんしゆ子げんぶくゑたまひて其なを兵衛佐頼朝いまだにやくにておはせしがたいけんもんの夜いくさにつけまけさせたまひ東國さしておち給ふ西坂本までは父の御ともめされしがくらさはくらしゆきはふるさがり松のあたりより追をくれさせ給ひよもほのくゝとあくるまでふぶきにふかれみちもなき雪の山にぞまよはれける御年は十二歳いつしかみやこにおはせしときはこしくるままれにもむまにめすをだによにもふしぎにおぼせしにかちはだしなるゆきの道これがはじめの事なればさこそ物うくおぼすべきうぶきぬと申よろひをば小原のさとにあづけをきひげきりの御はかせをつえにつゐてぞおちられけりされどもゆみ矢のめいしやうとてかゝるふぶきのものうきにひげきりばかりすてもせ

でいのちとともにたれたりすでにそのよも明ければ今はをひてぞかゝるらんゆく衛もゑらぬざうひやうのそのてにかゝり中々にげんじの名をくださんよき御はだのまぼりより法花經一卷とりいだしこゝろまづかにあそばしてをひ手かゝらばぞんじやうにきよきぢがいと思召ゑばらくいきをつき給ふかゝりけるところにみのかさきたるたび人の二人つれて京のかたへとをりしを頼朝御覽じて此者共を頼みいづくへもひとまづ落ばやなんとおぼしめしなふいかにたび人と御言葉をかけ給ふ何事にやと申て御そぢかくまいりければよりとも此よし御覽じて我は人のをつゝむものゑかるべくは御はうしにたすけてたべと有しかば庄司此よし承りこれはまぢかき此近江伊ぶきのすそにすまゐせしくさのゝ庄司とは我事なり子にて候藤九郎きみの御供つかまつりまかりいで候ひしがたいけいもんの夜軍にみかたかけまけ給ひて

ゆきがたゑらずとうけたまはれば其ゆく衛をもきか
んため片田のへんに有つるがみやこへのぼり候ぞや
かゝるさしあひなかりせばやすきほどの事なれ共人
をたすけまいらせて我子は何と成べきとすげなくそ
こをとりけり頼朝このよし御覽じてさてはうんめ
いつきぬるやゑばしといまりねがはくはゑがいをな
りともかくしてゆけはらをきるとのたまひてをしは
だぬがせ給へばしやうじこゝろよはくして御かたな
にすがりつきとしのほどを見申せばまだうらわかき
みどり子のまつもひさしきすゑまでもげにたのもし
きとしのほど御子もいきてあるならばこのきみにい
か程年まさむ此きみゑがいましまさばちゝ母つたへ
聞召さこそしやうじをうとましくきちくのやうにお
ぼすべきこのきみをいまづおとさばやと思ひてみの
にをしまき奉り十文字にゆひからげとものおとこに
かきおほせうへにふるみの打かけてみやこへはのぼ
らずかた田をさしてくだりしはなさけ一とぞ聞えけ

るいくほどなくてあとよりもよるは法師の大將に大
屋のちうきをさきとして五十餘人たてをつきあやし
しやたび人よとまれくゝをつかくる庄司にもちを
さきにたてわが身はあとにふみとゝまつて是はたし
よよりきたらず御領内の百姓小原のさとにすまゐす
る次郎太夫と申ものくわんさんのくわしのためにと
ころをもたせて坂本へ参るものにて候なり落人は此
さきへ其かずあまたおとをりあるとうしてをはせ給
へやと雪ふみのけてやりすぐすかくてよしともはか
た田より御船にめされむかひの地へと聞えければち
から及ばずをひての者どもはみなさかもとへぞかへ
りけるそのうちしやうじゑづかにあゆみかた田へ入
参らせしる人をたのみ一えうのふねにさほをさしあ
さづまのはまにあがりさのみ御身をいかにとしてみ
のにはつゝみ申さんとそれよりも御手をかたにかけ
くさのゝさとにいれ申我宿所にていたはりてあらた
まの月ををくりしはめでたかりける次第かなある時

しやうじ申けるはこれよりいづくをさして御いそぎぞ御心ざしのところ迄をくりといけ申べし頼朝此よしきこしめしさして行べきかたもなしいづくの里也共あはれと云人のあらばすみはてなんとぞおほせける庄司此よしうけたまはり我子の九郎まだ見えずおりふしきたり給へば九郎が生れきたれるかしう共子とも思ふべし是にましゝ候へとてふかくいたはりたてまつるこくないつうげの事なれば左馬のかみよしともは尾張のおさだにうたれたまひ御くびのぼりごくもんにかゝれるよしをきこしめしいかにしやうじわれをば誰とかおもふらんよしともに三男わらは名はもんじふ子げむぶくして頼朝なりさりとともと思ひしちゝはうたれ給ひ御くびのぼりごくもんにかゝれるよしを聞てあり今はいのちのいきたり共たれかあはれととふべきぞみやこにのぼり今一度父の御くび一目みてもしも命のながらへばさまをもかへてひたすらになき人々をとぶらふへいとも申てさらば

とてたちいでさせ給へば庄司をはじめ女房も御たもとにすがりさては我子の九郎めが主君にてましますやわが子にこそははなれむめきみさへわかれ参らせてわれらは何と成べきとたもとにすがりなきにけりよりとも此よし御らんじてげにゝ申もことはりなりひげきりをといめをく是にをきてはあしかりなん美濃の國あふはかのちやうじやがもとへをくりつゝいかならん世までもうしなはでもと申べし是に刀一つあり八まんだのゝ御かたな名をいはきりと申なりうきよのなかのかたみに庄司どのにとらするぞふしぎのよにもいでたらばこのかたなをゑるべにてたづねきたり候へとてわが身はわきざしばかりにてあみがさにやつれはてみやこへのぼり給ひける心ざしこそあはれなれさても六はらの御所には人々にけしやうををこなはる彌半兵衛むねきよには美濃の國たるをたまはりまかりくだりしがいまつがはらをとをるとて頼朝にまいりあふあみがさのうち人にゑの

ばせ給ふていあやしく思ひ申とて笠ひきおとし見申せばよりともにておはしますてんのあたふるかたきとてやがていけどり奉りみのの國へはくだらずいそぎ都にのぼり六はらどのに參りこのよしかくと申上るきよもり聞召さればこそ爰ぞとようんはてんのなすところくわほうはくわこのしゆくゆふよしともはうたれぬ惡源太ともなりははらきりぬよりともをばいけどりぬいまは誰かのこりゐて平家にてなをなすべきやがて朝頼きるべけれ共古刑部卿たゝもりの佛事おりふししさあひなり佛事すぎて切べしそのあひだはむねきよにあづくるぞ宗清頼朝をあづかり申いくほどならぬしやうがいのみるこそなか／＼あはれなれあらいたはしやよりともいくほどならぬしやうがいとてこゝろまします御そうたちをしやうじ申ごせのくわうせんくらきやみのまよひをたのみ奉りいまだようちにましませどぢきやうしやにて御座あれば日夜に御經をこたらずあかつきがたのゑかうには

此御きやうのくりきによつて父あに／＼さきだつ人一つはちすに生れ給へと一心にゑかうゑたまへばむねきよもねうばうもこのよしを承りたゞ人のたからには子にすぎたるはましますあれほどなげきの御なかにぬんぶつ申きやうをよみゑかうの心ざしをば十はうの神佛さこそうれしくおぼすらんくやしくも又むねきよがいけどりまいらせてうきめをみるかなしさよとふうふともにいひかたりふかきおもひとなりにけりさようちはけて殊更こゝろぼそげにましますところへむねきよふうふまいりしゆをすゝめ申せどもさらに見れ給はずわかき人にてましませばいつはり御こゝろをもなぐさめばやと思ひかに頼朝聞召れ候へげにや承はれば古刑部きやうたゝもりの佛事折節さしあひなり其ほか死罪の人々もみなくびをつぐと承る殊さら御身をばよかはのそうづめいしゆん三井の僧正ゆふはん仁和寺のけいうんおりゑきりに申さるゝ御そせうのまへなればたとひるざいは

なさるゝとも死罪は更に候まじ御心やすくおぼしめ
せといつはりすかし申せば頼朝きこしめしあらおろ
かなりむねきよ命をおしみよりともがなげく身にて
はなきぞとよむかしは源平兩家とてとりのふたつの
羽がひくるまのりやうわのごとくにてをとりまさり
はなくし天下のまぼりと有つるがせんせいかなる事
有て此時ほろびはつるらんちゝあにゝゝさき立人ひ
とつはちすに生れむと此事ならでたじもなし今夜は
此さけのむべき也をのゝも参り給へやとなげくけ
しきもましまさずよりとも仰けるは此ほどはくわん
げんすさみつるにあまり思へばこゝろなしふえやあ
るとの御誕なりむねきよ承りかんちくのやうでうを
とり出して参らせあぐるころは春のなかばなればそ
うてうにねを取てしゆつこんらくをあそばしうきみ
のうへのなげきにはくわいこんらくをあそばすむね
きよもねうばうもかんるいおさへがたふしてびは一
めんこと一ちやう取いだしねうばうにことををしあ

づけ我身もびはのををあはせばちをとけたかくひき
ければ女房なみだもろともに十二のけんをえり立ち
のをに手をかけにけりこれふつけうのうつはものう
さもつらさもうちわすれ是になぐさみ給ひけり
よもほのゝと明がたに門をたゝくもの有八を出し
て問すれば頼朝を今日きるべしと申使なりびはこと
をとりひそめ頼朝にいだきつき申なくより外の事は
なしよりともおとなしやかにの給ひけるは思ひまう
けたる事なればいまさらなげくにをよばずさだめて
くびをばおほちを渡さるべしかみけづりてたび給へ
むねきよもねうばうもなごりのためと思ひければ三
十三枚のくしとはらひをとりいだしきのふまでは一
すちを干すぢ百筋千秋萬歳といのりし黒かみをけふ
は又六でうがはらのよもぎがもとのちりとなさむ事
こそかなしけれと落るなみだに目がくれてくものた
てとも見もわかずさてあるべきにてあらざればふう
ふともにわけけづりぎやうずいせさせまいらせてす

ずしのひとへはだにめさせぬきにおほくちかさ
ねうかりけるかな法なりとてたかてのなはをかけ申
むねきよもねうばうもたかてのなはにとり付てそれ
人は一じゆのかげ一河の水をくむ事もたしやうのき
ゑんとうけたまはるがこんじやうならぬ御きゑんに
まいりあひ候て今さらうきめをみる事よ御もちるも
有ならばわれ／＼ふうふが首をめされ頼朝の御いの
ちをたすけ給へやかなしやとりうていこがれなきけ
ればげになさけなきかたまでもあはれとはぬ人ぞ
なきよりもぎやくしゆのためにそとばを三本きざ
み一ぼんは父のため一ぼんはあに／＼いま一本は我
ためとてかみにはあじをあそばしなにはきやうの
もんゑもにはしいしゆゑかうのむね年號日付みなも
との頼朝とあそばし此邊にいくにてもこまのひづ
めもかよはすくるまにをされぬところやあるたづね
てまいれとおほせければむねきよ承り三つのそとば
をたまはりいく／＼と申共こまのひづめもかよは

ずくるまにをされぬところはいけどののさむさうな
かしまなりと申てにし八でうにもちてゆきなかしま
にわたり三つのそとばをたつる彼いけどのと申は古
刑部きやうたゝもりのごけにておはしますきよもり
には御まゝはゝじひ第一の人なりおりふしゑんにま
しませしが誰そとばぞととひ給ふたゝいまきられ給
ふよりもものそとばなりと申めしよせ御らんじて人
してかゝせけるがいや自筆なりと申いくつになるぞ
と問給ふ十三と申としのほどよりも手ははるかにお
となしく見えけるややうもんおほしといへどもこと
にすぐれたるめいもんなりなに／＼我從無數こうら
いしやくじゆしよだいせんごん一ぶんふるがしんせ
よ十方しゆじやうこのもんのこゝろは我むしゆこう
よりこのかたつみあつむるもろ／＼のだいせんごん
を一ぶんも我身にとゞめす十方の衆生にほどこしあ
たふこれひけきやうのめいもんなり此ことはりをき
くときはたすけでいかゝあるべきくるまやりだせう

しかひよいそげ供せよむねきよとてとるものもと
あへず六でう河原にいで給ふさる間頼朝はをつたて
のくわんぐむ七八十人がなかにして源五右馬のせう
なは取なりかいしやく人はなんばせのを五條の橋よ
りしも六條河原へひきいだすさるあひだ頼朝まきが
はになをり給ひければかいしやくにんがまいり西の
はうへをしむけ御ねんぶつをすゝめければ手をあは
せ高聲に念佛申さるゝいけどのゝ御車をはんまちば
かりにやりよする御念佛の其こゑがくるまのうちへ
聞えければいけどの聞召みづからゆくとおもはゞや
がて頼朝きらふず人にまらせで此くるまをはやめよ
やれむねきよむちをうてやうしかひよたゞ一所にお
どるはわざとよりともしせんをやよりともきらるゝ
ものならば我は御所へはかへるまじやがて身をなげ
死なふぞいかによとのむねきよいだきおろしてたび
給へたゞ一とびにはしらふに物見のすだれをさつと
うちあげくるまのまぢにたゞ今ころびおちむとし給

ふをけん見にたてた後藤内車のとふを見付いかさま
まがの太寺より大僧正かそうづか囚人こはむくるま
ぞとくきれやつとゆびをさすたちとりうしろへ廻て
なげかけんとせしとき八幡のちかひかやかはらのい
しにふみくじけうつぶしにかつばとまろびたちをか
はらになげかけおきあがつてたちをとらんゝとす
るひまにくるまをさつとやりよせいまだとゞめもせ
ざりしにいけ殿ころびおち給ひよりともをひつたて
おなじくるまにうちのせもとめたのがくびかない
まはよもきられじこゝろやすくおもへとてはらゝ
となき給ふ頼朝もいけどのゝ御たもとにすがり付は
らゝとなき給ふものによくゝたとふればつみふ
かき罪人ぐしやうじんのてにわたりむけん大じやう
のそこにおとさるべかりしを六道能化の地ざうのし
やくぢやうをからりとうちふつてかゝかんみさんま
いとよばはりかけすくひあげたすけむとし給ふもこ
れほどぞありつらん八でうとのに歸らるゝけん見ぶ

ぎやうもきりても六はらどのにまいりきよもりにかくと申ければとうきらぬこそふかくと御こうくわいとぞきこえけるやがて主馬の判官もりくにをめしてなんぢ八でうどのに参り申べき事はちからをよばずよりともをばいけどのにまいらせ候げんじにつたはるてうほうによりひにはかんたかうぶぎぬ七りう八りうとて有たちにはひげきりとて候を今度よしともたいけいもんをいでし時嫡子悪源太にもゆづらず二男ともながにもゆづらず三男頼朝にゆづりぬるよし聞え候おほそれながらいけどの、御こうしゆによつてたづね出して給はらば平家のたからたるべしと御つかひを立たまへばいけどのきこしめされてよりともにかくと仰ければよりとも聞召あら何共なの事共やいへに傳はるてうほうを命をおしみいかにとしかたきのてにわたさんと思召れけるあひだとかくものをものたまはずおもひいりてぞおはしけるいけどの仰けるはおろかなりよともいのちだにも有な

らばたからをばもとめて持べし只みづからに御まかせさふらひてありのまゝ仰られよ頼朝げにもとおぼしめしさむ候うぶきぬをば山しなのしやうじんがもとひげきりをば美濃の國あふはかの長者がもとにあづけをき候とありのまゝにぞの給ひけるいけどの御よろこび有て六はらへかくとおほせければ六はらより使をたて二つのたからをめしいだすかくて二つのたから平家におさまるべきにて有しを小松のだいふのおほせにはおろかなる御ぢやうかな是はげんじのたから也源氏方にもちてこそたからとはなるべけれ平家方にもつならばしやうげをばなす共たからとなる事候まじたい返し給へとてみな、源氏へかへされけりさらばよりともをばいかならん波島へもながしうしなへと仰けり一番のたひにはいせのくにこそ島の島とぞ聞えけるいけどの聞召彼こさのままと申はいせへいじがおほくしてかなふまじとおほせけり二番のたひには伊豆の國ほうでうひるがこじまこれも

月にせめなびけ天下をおさめ給ふ事八幡大ぼさつの
御ちかひとぞきこえける

こゝろもとなしとて御身まちかき侍にくわうけつの
源五もりやすが子にもりながと申て生年十六歳にま
かり成をまちかくめされいかにもりながよ頼朝がと
もをして伊豆の國にくだりてうせきみやつき申べし
いさゝかの事もあるならばいそぎわれにしらせよ俄
の事にてあるならばもりながさきにはらをきれあと
をばとふてとらすべしいかによりともむますとも我
をばおやと思ふべし御身を子共おもはふぞなむやげ
んじのうちがみの正八幡大ぼさつ頼朝の御れうをあ
んをんにまぼり給へやとうしろすがたをおがみ給ふ
頼朝も立歸りふしおがませ給ひけり生れあふたる親
子ぞと御よろこびはかぎりなしさるほどに頼朝もり
ながをともし伊豆の國にくだつてほうでうひるが
こじまにて二十一年の春秋ををくらせ給ひけるとか
やつるに源氏一系んの御代となりたまひてせめしと
ころはどこゝぞいちのたにひえどりごえさぬきに
やしま長門にだんのうらはやともがおき迄も三年三

夢あはせ

去程にもりながはまださうてんの事なるに頼朝に参る君はいまだよるのところに御座ありけるにあひのしやうじをほとほととをとづれもりながが出仕申て候頼朝きこしめされいつゝよりもあだちどのがけさの出仕のはやさよりもりなが承てさん候今夜それがしふしぎなる御むさうをかうぶりで候たしかに夢物語申さむためさて出仕申て候よりも聞召れすけが吉事のゆめならばはやゝかたれたもたんとこの御謔なりもりなが承てあつばれ御前にこゝろありまの人あらば語てきみにたもたせ申さんと申おりふし御まへにおほばの平太玄こう申て候けるがきみの吉事の御夢ならばかう申大場のがゆめあはせにはまいらふするにて候はやゝ御語り候へもりなが聞て先ゆめのいとくをかたつてきかせ申さんむかしちうてんぢ

くのあるじじやうばんだいわうのきさきの宮は七月十四日に紫宸殿に御いで有ひるの御ゆめにこんじきのはだへの御僧御くちのうちにとびいらせ給ふと御夢を御覽じあくるせうへい元年に七多太子をまうけ給ふいまの釋迦は是也我朝のようめい天わうのきさきのみやはあるよの御むさうに金のたま手ばこをひだりの御衣にうつすとゆめを御らんじてしやうとくたいしをまうけ給ひなんばに四天王寺をたてもりやを退治したまふもみなこれゆめのいとくなり又わがてうのでんげうだいしはれんげをいだと御ゆめを御らんじてひえいぎんを建立しめいしゆつをあらはし給ふなりさればゆめとたかはあはせがらにて候ぞや能やうにあはせてたべや大場殿とぞ申けるおほば聞てあらめでたの夢のいとくや候はやゝ御語り候へもりなが聞て先、ばんの御むさうに東やまに松原むらさきの八重雲をかきわけつゝと出させ給ふ朝日を君の三五にいだきとらせ給ふと見参らせて候そ

のつぎの御むさうにきみはまろきじやうえにたてゑ
ぼしあさいくつをめされさがみの國やぐらがだけに
御あがり有て東西南北へ七足づゝあゆませ給ふと見
參らせて候其後やぐらがたけに御こしをやすめさせ
給ふがひがしへもみなみへもにしへもむかせたまは
すきたへむかせ給ひゑみをふくませ給ふと見まいら
せて候そのつぎの御むさうに君のゆんでの御あしを
きかいがしまのかたへふみおろさせ給ひ扱又めての
御あしをそとはまのかたへふみおろさせ給ふとこ
ろにきみの御てうあいにおぼしめす大塲の平太かげ
よしまろきへいじにてうがたにくちつゝませさかな
にくけつのはあはびをもつて御前に參るきみは御覽じ
てあはびのふときところを御手にもたせ給ひて酒を
たぶゝと御ひかへ有ていかに貴僧法師さかなひと
つとありしかばきそう承て御まへをづんと立てかも
がいれくびまぎの羽がへしさつとさひていはひのわ
かをぞあげにけるそのつぎの御むさうにきみのさう

の御たもとにさんぼんのひめこまつをぞたてをかせ
給ふとたしかにもりながめが見まいらせて候ぞやよ
きやうにあはせてたべや大塲どのとぞ申けるおぼば
きゝてあらめでたの御夢や候いづれも是は君のため
に御吉事先一番の御むさうに東山に松原むらさきの
八重雲をかきわけつるゝと出させ給ふ朝日を君の
三五にいだきとらせ給ふと御らん有て候はうたがひ
もなくわがきみは日の本のせいしやうぐんとあふが
れさせ給ふべき御すいさうの御むさう也其つぎの御
むさうにきみはまろきじやうえにたてゑぼしあさい
くつをめされ相模の國やぐらがたけに御あがり有て
東西南北へ七足づゝあゆませ給ふと御らん有て候は
七なんそくめつしつふくそくしやう是成べし其後や
ぐらがだけに御こしをやすめさせ給ふが東へも南へ
も西へもむかせ給はず北へむかはせ給ひゑみをふく
ませ給ふと御らん有て候はあふさるよみの候ぞやき
たかさぬると書てはほうでうとよみの候ぞや爰をも

場殿が合様ひとへに君の御吉事とこそ聞えけれ

つてあんするに北條の四郎を御たのみあつて御代に
たゝせ給ふべき御すいさうの御夢候也そのつぎの御
むさうにきみのゆんでの御あしをきかいがしまのか
たへふみおろさせたまひさてめての御あしをそとの
はまの方へふみおろさせ給ふ處にきみのてうあいに
思召大場の平太かげよしゑろきへいじにてうがたに
くちつゝませさかなにくけつのあはびをもつて御前
に參ると御覽有て候はあはびは海の物なればきかい
かうらいけいたんこくかいじやうはろかひのとゝか
ん程我きみの御知行にまいらふするこそめでたけれ
其次の御むさうに君の左右の御たもとに三本の姫小
松をそだて置せ給ふと御覽有て候は一本は我君一本
はあだちとの今一本はかう申大場の平太かげよし也
そも松と申は一寸だにもびぬれば千々にえださか
へぢやう千年のよはひをたもつ由を承る其松の如に
若きみあまた御まうけ有て末ははる／＼とさかへさ
せ給ふべき御すいさうの御むさう也盛長の夢物語大

馬そろゑ

さるあひだ頼朝もりながをめされ此間の事どもは夢
うつゝの吉事もんがくのうらのさすところ天命爰に
しよくわんしてくわほうの花のつぼみいでにほひか
つがうふせいなり明夢とうらかた共すでにやうく
ときをうくるくわいぶんをまはしたのふで見んとの
御誕なりもりなが承り先くわほうめたき人なれば
と思ひ海の渡りを仕り三浦の館につくかの三浦のお
ほすけよしあきらは年つもつて百六に成しがひたゝ
れのひぼつかひつくゑに置いてふしおがみまご嫡子わ
だの小太郎おほたうのひこ太郎をひそかにめされ先
祖の君の御判をおがみ申せ子共まごともよいのりに
もみやうもんにも又後生のうつたへにもなるべしさ
ればゑんぼうけんのおきなはうんなむのろすいのを
がれむとて大石によせてひちを折たいこうばうとい

つし人ゐひんのなみにつりをたるゝへうたんゑばゑ
ばむなしく草がんにゑんがちまたにゑげしれいてうふ
かくとぎす雨げんくがとほそをうるほふすに似た
るべしさればくつげんはよのうき事をうらみつゝ草
のいほりに身をかくしむかしをゑのび老にけりよし
あきらも人ならば山にもこもるべけれども此老が身
につもるゆき我身ひとつにとりなしてよるべもゑら
ぬおきのなみうらしまがたま手ばこあけてもいと
くやしきかほどめでたきわが君の御判をおがみ申事
一眼のかめのたまさかに浮木にあへるがごとしとう
とうりやうじやう申さんとて三浦三百九十三騎とな
かちやうにはんをすへきみにたのまれ奉るそれより
もりながはちばのたちにつくおりふし千葉のすけ他
行のあひだおほすけ出合見参有て子にて候つねたね
これになければちからなし昔より此ところはちばの
すけ上總のすけとて父母のごとし一方かけてかなふ
まじかづさへ御越候て歸りがけにしいしゆのやう承

り度候まづ／＼これは見ぐるしく候へどもとてがう
たる馬にくらををきよろひかぶとをひきにけりもり
ながは是をみて野にもやまにもみかたぞとそれより
いとまごひつゝ葉のたちをぞいでにけるかゝつし
と頃に千葉のすけつねたねわかたう四五騎あひぐし
さむぢんに乗て出来るもりながは是をみてのりながら
の對面恐入て候へ共君の御使にて候へばまつびら御
めんなれといふまゝにちばがこまに打寄彼あらまし
をかたるつねたね聞てさておやにて候おほすけは何
とか申され候ひつるおほすけのおほせには上總のす
けがまいらばちばのすけも參らんと御返事にて候
つねたね聞て是は何よりも恐入たる御返事を申され
て候ものかなたとひかづきはまいらずとも一騎成と
も味方參りまづさがけ高名し名を後代にあぐべき
也いで／＼りやうじやう申さむと駒よりもとんでお
り本よりも千葉のすけはせうぶげんにて候へば手せ
い多くも候はす七百騎にて參らむとてなちやうに

判をすへてきみにたのまれ奉るそれよりもりながは
いはういなんちやうほくちやうなんあひろかはかみ
うさ山のべかなたこなたをふれまはるたのまるゝ國
は十三ヶ國大名は七十餘人小名數をえらすわれをと
らじとはんをすへ君にたのまれ奉るさる間もりなが
は伊豆の田中をいでゝ百廿日と申には國々の人々の
御請のはんをとりもつてなごやの御所へぞかへられ
ける彼もりながをみし人のほめぬ人こそなかりけれ
さる間頼朝伊豆のおやまに御ちんをめされ續く味方
をまち給ふ我をとらじと參られけるをちやくたう付
て御覽すれば頼朝の御せい以上三百五十三騎にゑる
さるゝよりもちやくたうひけんの後とはすけがし
うけんのはじめなればめん／＼の馬共を一目みると
の御誕なり承り候とて先一番に君の御家の子あきの
しゝとの四郎殿のたますだれといふむまをとをされ
たり面白のむまの名やたますだれとはかけてこゝろ
やすゝしかるらんそのつぎをみてあればあふみげん

じの大將にさゝ木の四郎たかつなのよつじろに白鞍
をかせしろさほさゝせ御前をとをされたりおもしろ
のむまのふせいや所々に四つ目結のかたつきやさし
きむまのもんかなとどつとはめてぞ通されける其次
をみてあればどのころに白くらをかせ御まへを
通されたりこのむまと申はまだまき出の名馬にてい
さみにいさむで前の足をづんとあげうしろのあしを
ひつしきかしらをふつてめを見出しおどりでい
ばふこれもをとらぬ名馬かなとどつとはめてぞとを
しけるそのつぎをみてあればさても御しうとに北條
の四郎ときまさのさゝなみあしげといふむまにまろ
くらをかせしろさほさゝせ六人のとねりにひかせ御
まへをとをされたりおもしろの馬の風情やこのむま
と申は骨はふとうてすぢおほし左右のおもかほしゝ
もなくみゝはみじかくちいさくて上くびながくあつ
くして下くびつてみじかしむねはいでゝはたばり
あり尾くちいさくわけ入て尾は三ぢうのたきのお

つるがごとくなり左右のもゝはからのびはてんじゆ
とはんしゆばらりともしで二面さかさまに立て置た
る如也をつさまさんづにしゝ餘りよめのつきさまつ
まねの骨くろがねをのべたるごとしつめはあつふて
つゝたかし千里を打とつかるまじ前よりみれば秋の
鹿遠山をとびたるごとく也そばより見ればにはとり
が大庭へおどり出ときをうたふが如くなりまはりて
みれば龍が雲を引つれ虎が風に毛をふるひざうがき
をかみならししゝがはがみしたりしも是にはいかで
まさるべきあつばれむまのいきほひかなとどつとほ
めてぞとをしける是をはじめと仕りさはらの十郎が
いかづちあしげかり野すけがかなづちあしげたしろ
のくわんじや美女くりげ祐經が奥州くりげぬまたの
平内がとびすゝめ南條が小鷹がはらけふるほりがほ
かけ船三島の源太がしゝの子にさう藤太が岩くだき
つちやの三郎とらつきげ扱岡崎がみやまかげ大ぬき
の四郎が黒かすげ惣じて名馬の色々はあしかふち黒

かけつるぶちかけふちあひさうふちかうしくりげひ
めくりげ我もくとひかれたり以上三百五十三騎は
いづれもとらぬ名馬也去程に頼朝治承四年八月の
廿三日に兵見そろへ馬そろへめされていつも久しき
源氏の玄らはたをほのくとさしあげまなづるがた
うげに打あがつて御陣をめされしが御代をめされん
其爲に手勢七騎を引わかつてとひのやととかうらよ
りも御船にめされあはのれう島を心がけおきなかに
玄らはたをさしあげ給へは三浦よこ山たんこだま此
よしを御覧じあは君のおきに御座有にいざやさらば
參らんと千騎二千騎百騎二百騎うちつれく參程に
武藏の國とかやこうのろくしよぶんばいの宮の前に
てちやくたうつけて見給へばよりものの御せい廿八
萬騎にほどくならせ給ひて一天四海に光をはなつ
平家を三年三月にせめなびけ天下をおさめ給ふ事八
幡大ぼさつの御ちかひとぞ聞えける

木曾願書

爰に信濃の國の住人木曾の冠者義仲は平家をせめむ
そのために五萬餘騎を卒し信濃の國を打立て越後の
こうに着しかば木曾の給ひけるは平家大勢にてある
間となみ山を打こえ越中のひろみへ出るならば定て
かけあひの合戦にてぞあらん但かけあひの合戦は勢
の多少による事なりいつも我いくさのかれいなれば
勢を七手にわかつて方々よりもむかふべしまづ叔父
十郎藏人行家に一萬餘騎をさし從てまほのてへまは
しからめてへこそつかはされけれ殘四萬餘騎をてん
でにわかつたての六郎親忠に七千餘騎を指そへて北
くろ坂へぞむけられけるにし名高梨山田の次郎是も
七千餘騎南くろ坂へぞむけられける樋口の次郎かね
光は五千餘騎にてくりからのだうのうしろへまはさ
れけりねいこやた五千餘騎まつなかのくみのきばや

しやなぎはらに引かくす今井の四郎兼平は六千餘騎
を相えたがへわしの島をうち渡りひのみや林に陣を
取木曾殿は一萬餘騎にて黒坂の北のはづれを西への
わたりをしてはにふの森に陣をとる木曾殿のはかり
ごとにはたさしをさきにたてよとはたさしをさきに
ぞ立られける五月十一日の巳の刻ばかりに黒坂の峠
へ駒をかけあげまら旗三十ながればかり一度にさつ
と打たてたり平家も加賀を打たつてとなみ山にうち
あがり源氏の勢を御覽してあらおびたいしの大勢や
爰は山もけんそに谷もふかふしてからめてさうなく
よもまはさじ馬の草かひすいひんともにまかるべき
所なれば先々陣をとれやとて大勢さつとおり立て山
路に陳をとりたりけり
木曾はやはたの社領はにふの杜に陣をとつて四方を
きつと見わたしければ北のはづれにあたりつゝなつ
山の嶺のみどりの木の間よりあけの玉垣ほの見えて
かたそぎ造りの社壇あり前に鳥居ぞ立にける里の人

をめされておれに御立ましますはなにの宮いかなる神をあがめ申ぞいかに／＼と問給へば八幡大菩薩とあがめ奉る當國の新八幡宮はにふのやはたと申也木曾殿嬉しくて手書にだいぶかくめいを召て仰けるはさいはひに義仲當國新八幡の御寶前にちかづき奉つて合戦をとげんとほつす今度のいくさうたがひなくかちぬるとおぼふる也さるによつてかつうは後代のため又は當社のいのりにも願書を一筆かいてまいらせんとおもふはいかいあるべきかくめいむ玄かるべう候とてむまよりもとんでおりゑびらのなかよりも小硯とり出したゝ紙をしひろげ願書をかゝむとつかまつる

かくめいがその日の装束にはかちんの直垂にふし繩目の鎧にくろつのぼのそや打てぬりごめどうの弓わきばさむで木曾殿の御前にひざまづいて是を書あつばれ文武二道のあふさて達者かなとぞ見えたりけるかれかくめいはいまだ南都にさふらひし時高倉の宮

三井寺をたのふで行幸ならせ給ひし時三井寺なんなくたのまれ申南都へてう狀をこす返狀を大衆せんぎあつて彼玄んきうにかゝせられけるに清盛を平氏のさうかう武家のちんがいとかいてぞの名をあげし名人なればいかでか書は損すべき此願しよにいたく皈命頂禮八幡大菩薩は日域朝廷のほんしゆ累世明君のなうそたり寶祚を守らんがため蒼生をりせんが爲に三身の金容をあらはし三品の權扉をし開き給へり爰にけいねんよりこのかた平相國といふものあつて四海を我まゝとし萬民を惱亂せしむこれ佛法のあた王法のかたきなり義仲いやしくも弓馬の家にむまれわづかにきゝうのちりをつぐひそかに彼のぼうあくを見るに玄れうかへりみるにあたはず運を天道にまかせ身を國家になぐこゝろみにぎへいをおこさむとほつするきざみに凶徒走りぞけんととうせんりやうかの陣を取士卒いまだあはせずといへどいつちのいさみを得いま玄んゑつを守る處に今一陣にをひて旗

をあげ戦場にしてたちまちに三所和光の社壇を拜す

かはうノ誤カ

きかんのじゆんじゆくすでにあきらかなり凶徒誅戮

うたがひなしやくはんぎなんだこぼれかつがうきも

にそむなかんづく曾祖父前の陸奥守ぎかのおそ身を

宗廟の氏族にきふくして名を八幡太郎と號せしより

このかたその門葉たるものきぎやうせずといふ事な

し義仲その後胤としてかうべをかたぶけて年久しい

ま此大功を起す事たとへば嬰兒の貝をもつて巨海を

量り蟬螂の斧をいからして隆車にむかふがごとし玄

かりといへど君のため國のために是をおこす身のた

め家のためにして是を起さすこゝろざしのいたり玄

んし眞にありたのもしきかなやよろこばしきかなや

伏てねがはくばめうけんいをくはへれいじんちから

を合勝事を一時にけつしあだを四方にゑりぞけ給へ

玄からばすなはちたんき冥慮にかなひほうけん加護

をなすべくばひとつの瑞相をみせしめ給へ壽永二年

五月十一日源の義仲敬白と書たり彼かくめいが筆勢

ほめぬ人こそなかりけれ

敦盛

そも／＼此たび平家一のたにのかつせんに御一もんさぶらひ大將そうじて以上十六人のくみあしのそのなかにものゝあはれをといめしはしやうこくの御をとつねもりの御子息にむくわんの太夫あつもりにてもものゝあはれをといめたりその日の御しやうぞくいつにすぐれてはなやか也むめのにほひのはだよせのゆうなるにうらくれなるをめされねりぬきにいろいろのいとをもつてあきの野に草づくしぬふたるひたゝれゆん手のてつかいりやうめんのすねあてむらさきすそごの御きせながこがねづくりの御はかせ十六さいたるそめはの矢むらさげどうの弓れんせむあし毛なるこまになしちまき白ふくりんのくらをかせ御身かろげにめされたりめされたる御むまよろひの毛に至るまでげにゆゝしくぞ見えられける御一門と

同じく主上の御供をめされはまにくだらせたまひしが御うんのすゑのかなしさはかんちくのやうでうを大裡にわすれさせ給ひわか上らうのかなしさはすても御いであるならばさまでの事のあるまじきをつうはこのふえをわすれたらんずる事を一もむのなをりとおぼしめしとりにかへらせ給ひてかなたこなたの時こくにはや御一もんの御座ふねをはるかのおきへをし出すあらいたはしやあつもりさほやのはたをこゝろがけこまにまかせておちさせ給ふ

かゝりけるところにむさしのくにのぢうにん玄のたうのはたがしらくまがへの次郎なをさね此たび一の谷のせんちんとは申せどもさせる高名をきはめずむねんたぐひはなかりけりあつばれこゝもとをよからんかたきのとをれかしをしならべむすつくんでぶんどりせばやとおもひなぎさにそふてくだりしがあつもりを見つけ申なゝめならずによりこふでこまのたづなうつすゑて大をんあげて申あれにおちさせ給ふ

は平家がたにをきてはよき大將と見え申て候かう申
つはものをいかなる者とおぼしめす武藏國のちうに
んまのたうのはたがしらくまがへの次郎なをざねか
たきにをひてはよきかたき候ぞまさなくもかたきに
鎧のあげまきさかいたを見せ給ふものかなひつかへ
し御せうぶ候へいかにくゝとてをつかけ申あらいた
はしやあつもりくまがへときこしめしのがれがたく
はおぼしめされけれ共こまにまかせて落させ給ふか
かりけるところにはるかのおきを御覽すれば御座ふ
ねまちかくうかんでありあのふねをまねきよせのら
ふすものとおぼしめしこしよりもくれなゐに日出し
たるあふぎぬきいではらりとひらかせ給ひておきな
るふねをめにかけてひらりくゝとまねかるゝせんち
うの人々にひとしもこそおほきにかどわき殿は御覽
じてほろかけむしやの船まねくは左馬のかみゆきも
りかむくわんの太夫あつもりかあれを見よとの御ぢ
やうなり惡七兵衛承りふなばりにつゝたちあがりな

ぎなたをつえにつきかぶとをぬいできつと見ていた
はしの御事や何として御座ふねにめしをくれさせ給
ひけんつねもりの御子息にむくわんの太夫あつもり
にてわたらせ給ひ候ぞやめされたる御むまの毛よろ
ひのけにいたるまでまがふところはましまさずいた
はしさよと申けりかどわき殿はきこしめしあつもり
ならばこのふねををしよせてたすけやすいしゆかん
どりうけたまはりろかいちちをたてなをし船をなぎ
さへよせんとす此ほど二三日ふきまほりたる北風の
名ごりのなみはけふもたつかせはきほおつてなみは
ごうじやのごとく也はくらうせがいをあらひいさご
を天にあぐればたいゆきのやまのごとく也せうせん
こそをのづから弓手へもめてへもおもふさまにはあ
つかはるれことにすぐれたる大せんに大勢はめされ
たりたゝむなみにせかれつゝ次第くゝにいづれ共い
そへよるべきやうはなしあつもり此よしを御覽じて
いやくゝこのむまをおよがせてあのふねにのらふず

ものとおぼしめしこまのたづなはいくつて海上にうちひてうきぬまづみぬをよがせらるゝいたはしやあつとりらうむしやにたましまさばさんづにのりさがつてときゝこゑをたて給はゞ御むまはいちもつもおきの御座船になんくむまはつくべきにわかむしやのかなしさはむまにはなれてかなはじとおぼしめされけるあいだまへがさにのり懸てさうのあぶみつよくふみたづなにすがり給ひてうきぬまづみぬをよがせらるゝ馬いちもつとは申せどもたゝむなみにせかれつゝをよぎかねてぞ見えにけるくまがへ此よしを見まいらせまसानの平家やをきの御座ふねははるかにほどをへだてつゝまかもなみ風あらふしていかにかなはせ給ふべきひつかへし御せうぶあれなき物ならばなかざしをまいらせんと弓と矢をうちつがつてそゝる引てかゝりけりあつともり御覽じてなかなかさび矢に射あてられ一もんの名をりと思召こまのたづなひつかへしてとをあさになりしかばみづま

りばつとけたてそめはのかぶらうちつがひかうこそゑいじ給ひけれ

あつさゆみ矢をさしはけてひくときは

一本うき

返す事をはゑるかそもきみ

くまがへもこゝろある弓とりにてあつとおもひさうのあぶみをけはなつて返歌とをばしくてかくばかりいたつきのはやはつれんとおもひしに

やといふこゑにたちぞとゝまる

かやうにゑいじてまぢうけ申さるあいだあつともりゆみと矢をからりとすて御はかせひんぬいてうけて見よとてうたれたり熊谷さらりとうけながし取てなをしてちやうどうつ二うち三うちやうゝと打あはせけれどもいづれもせうぶ見えざればそれくまんもつともとてたがひにうち物からりとすてよろひの袖をひつちがへむづとくんで二人が兩馬のあひにどうとおつるあらいたはしやあつともり御こゝろはたけくいさませ給へどもらうむしやのくまがへにてものゝ

かすとはせざりけりやす／＼と取てをさへ申かぶと
ちぎりてからりとすてこしのかたなひんぬいて首を
とらんとゑたりしがあまり手よわくおもひさしうつ
ぶひてさうがうを見たてまつるにうすげしやうにか
ねくろくまゆふとうはかせさもやごとなきでんじや
う人の年れいならば十四五かと思えさせ給ふ熊谷あ
まりのいたはしさにすこしくつろげ申上らうはへい
けがたにおひてはいかなる御きんだちにてまします
ぞ御名字を御名のり候へあらいたはしやあつもありら
うむしやの熊谷にくみまかれさせ給ひよにくるしげ
なるいきをつきげにや熊谷は文武二道のめいじんと
こそきゝつるに何とて合戦にほうなき事をば申ぞ
われらは天下のてうしんとしうんかくの座敷につら
なつて詩歌くわけんのみちにうやうじたりし身なり
しか共この二三ヶ年は一門のうんつきていとをあこ
がれ出しよりこのかたぶしのいさめるほうをばあら
あら聞て候それ人の名乗といふはたがひのぢんにむ

らがつていくさみだれのをりから矢なきゑびらをこ
しにつけつばなきたちをぬきもつてこれはそんぢや
うそのくにのなにがしたれがしと名乗てうちもの
せうぶをし又くんでせうぶをけつするところきゝつ
るにわれはかたきにおさへられゑたより名のるほう
とはいまこそ聞て候へあふ心得たりくまがへ名字を
なのらせくびをとつてなんぢがしうのぎけいに見せ
んためなよし／＼それ世にはかくれもあるまじきぞ
たゝそれがしがくびをとつてなんぢがしうのぎけい
に見せよ見ゑる事もあるべしそれがみゑらぬ物なら
ばかばのくわんじやに見せてとへかばのくわんじや
が見ゑらずばこのたび平家のいけどりのいかほどお
ほくあるべきに引むけて見せてとへそれがみゑらぬ
ものならば名もなきものゝくびぞとおもひてくさむ
らにすてをけすてゝの後はやうもなし熊谷とこそ仰
けれくまがへ承て扱は上らうはぶしのいさめるほう
をばくはしくはゑろしめされぬや世に物うきはわれ

らにて候きみの御意にまつかつて身をたすけんとす
れば親とあらそひ子とたゝかひはからざるつみをの
みつくるはぶしのならひなり花のものと半日のかく
月のまへの一夜のともせいふうらうげつ飛花落葉の
たはぶれも今生ならぬきゑんと承るこのたびの合戦
に人しもこそおほきにくまがへが参りあふ事をせん
世の事とおぼしめし御名乗候へ御くびを給てたい奉
公の其ちうに後世をとぶらひ申べしあつもりは聞召
なのらじものとはをもへどもごせをとはんすうれし
さにさらば名乗てきかすべしわれをばたれとかおも
ふらんかどわきのつねもりの三なんにいまだむくわ
んばかり名にて太夫あつもり生年は十六歳いくさは
是がはじめなりさのみにものなたづねそよはやくび
とれやくまがへよくまがへうけたまはつてさては上
らうはくわんむの御すへにて御座ありけるやなに御
年は十六さいなにがしがちやくしの小次郎も生年十
六さいにまかりなる扱は御同年に参候ひけるやかほ

どなき小次郎みめわろく色くろくなさけもまらぬ
あづまゑびすとおもへ共我子とおもへばふびんなり
むざんや直家ををざねもろともに今朝一の谷のをふ
手にてかたきまれいの三郎がはなつ矢をなをいへ
がゆん手のかいなにうけとめなにがしにむかつて矢
ぬいてたべと申せしをいたでかうすでかと問ばやと
おもひしがいや／＼くまがへほどのゆみとりがかた
きみかたのまのまへにてとふべきかとおもひはつた
とにらんであらゆひにかひに字懲歟な直家や其手が大事な
らばそこにてはらをきれ又うす手であるならばかた
きとあふてうちじにをせよ味方の陣を枕としまのた
うの名ばしくだすなといひてあればまことぞとをも
ひなにがしがかたをたゞ一目見かたきのちんへかけ
入てよりそのうち又二めとも見ざりしなりさてもく
まがへがつれなく命ながらへ武藏の國にくだりなを
いへがは／＼にあひてうたれたるといふならば本ノマかんろ
のは／＼がなげくべしつねもりとやらんも花のやうな

る若君をなぎさに一人残しをきさこそなげかせ給ふらんつねもりの御しうたんとさてなをざねがおもひをばものによくくたふればりうすいおなじ水なれどふち瀬のかはるごとくなり熊谷あまりのいたはしさに又さしうつむひて御さうがうを見たてまつるにせんけんたるりやうびんはあきのせみのはにたへえんでんたりしそがは遠山の月にあひおなじ業平のいにしへかたの野邊のかりごろもそでうちはらふゆきのゑたすいたいこうがんきんしうのよそはひをたとへばゑにはうつすとも此上らうの御すがたを筆にもいかでつくすべき熊谷こゝろに安じけるは

案ノ借字

たすけ申たりと御物がたり候へととつてひつ立たてまつりよろひに付たるちりうちはらひ馬にだきのせたてまつりなをざねもともにむまにのりにしをさひて五町ばかりゆきすぎうしろをきつと見てあれば近江げんじの大將にめがたまふち井ばみつ井よつめゆひのはたさゝせ五百騎計てをつかくるゆん手をみてあれば成田ひら山ひかへたりめてのわきにはどひとの七騎でをつかくるうへの山には九郎御ざうしゑら旗をさゝせ御きんじよにとつては武藏坊辨慶ひたちばうかひぞん龜井かたをか伊勢駿河この人々をさきとしてこゑくゝに申やうむさしのくまがへはかたきとくんづるがすでにたすくるは二ごゝろとおぼえたり二ごゝろあるならばくまがへともうちにうちとれとわれもくゝをつかくるこのきみの有さま物によくよくたとふれば籠のうちのとりとかやあじろのひ魚のごとくにてもりて出べきやうはなし人手にかけ申さんよりなをざねが手につけ後世をそれかしとふらは

ばやと思ひて又むすつくんでどうと落いたはしや御
首をみづもたまらずかきおとし目よりたかくさし上
をにのやうなるくまがへも東西をえらでなきいたり
くまがへなみだをこめ御えがいをかなたこなたへ
をしうごかして見たてまつればよろひのひきあはせ
にかんちくのやうでうをえたんのいへにひちりきを
一本そへてさゝれたり又めてのわきを見てあればまきも
のくわんおはします是はなになるらんとひらいて
はいけん仕にあらいたはしやあつもりのみやこ出の
ことの葉をくれくゝとこそあそばしけれ此きみ都に
御座の御時はあんせつしの大納言すけかたのきやう
のひめ君十三にならせ給ひしが天下一のびじんにて
ましますを仁和寺おむろの御所にて月なみのくわけ
んの有しときあつもりはふえのやくおなしかくこに
てことひき給ひし御すがたを一めみしよりこひと成
てうたによみふみにかきこさるそのふみかすのかさ
なりてあふせのなかつなり給ふ中三日と申にへいけ

ていとくのくわらくをさつてさいかいのはとふにをも
むき給ふあらいたはしやあつもあり御身は一の谷に御
座あると申せ共御こゝろはさながらみやこへのみぞ
通はれける
おぼしめしいだされしときにつくられるかとおぼ
しくてえきにちやうをぞかゝれるまづせいやうの
あしたにはかきねこづたふうぐひすの野べになまめ
くえのびねややけいのかすみあらはれてそともの花
もいかばかりかさねざくらに八ゑざくらきうかさ
んぶくのなつのそらにもなりぬればふちなみいとふか
ほとゝぎす夜々のかやりびえたもえてえのぶるこひ
のこゝろすくわうきくえらんのあきにもなりぬれば
おのへのえかたつたのもみちまくらにすだきりぎ
りすさかでやはぎのさきぬらんげんとうそせつのふ
ゆのくれにもなりぬればたにのをがはもかよひちも
みなえろたへによもなりといへどもきえてあともな
しなごりおしきこきやうのきいの木ずゑを見すてつ

ついには又一のたにのこけちの下にうづもるゝつね
もりのすゑのこのむくはんの太ゆふあつもりとかき
とめてぞをかれけるかれを見これをみたてまつる
にいといなみだもせきあへず御ゑがいをばらうどう
にあづけをき御くびふえまきものともにもたせ大し
やうの御まへに参り此よしかくと申あぐるはうぐわ
ん御らんじてあらふしぎや此ふえはなにがしが見ゑ
るところの候それをいかにと申に一とせたかくらの
みや御むほんくはだてのとき天下にこえだせみをれ
とて二くはんのふえありせみををば三井でらにて
みろくにゑかうゑたまへり小枝をば御さいごまでも
たせ給ふようけ給るがみなせくわうみやうせんに
てうたれさせたまひしとき此ふえへいけのてにわた
る一もんのそのなかにふえのきようをめされしにじ
やくわんなれどもあつもりはふえにきようの人なり
とてくだされけるとうけたまはるけさ一のたにのだ
いりやくしよにてふえのとをねのきこえしは此人の

ふきけるかとして大しやうなみだをながせたまへば
ゑるもゑらぬもをしなべてみななみだをぞながしけ
るあつもりはめい大しやうくまがへいしくもつかま
つりたり此たびのけじやうにはむさしのくになが井
のしやうをとらするぞいそぎまかりくだれとの御ち
やう也くまがへらうどうどもしよちいりせんとよろ
こぶところにくまがへその御返事にをよばすなみだ
のひまよりかく計

人となり人とならばやとぞ思ふさらずばつゐに墨
染の袖かやうにゑいじ御まへをまかりたち何として
あつもりの御ゑがひをげんじごうひやうのこまのひ
づめのかよふところにすてをき申べきをくり申てあ
ればとてよもざいくわにはをこなはれじいやくを
くり申さばやとおもひゑはやはたにくだりせうせ
ん一さうこしらへざつしき二人さぶらひ一人あひそ
へじやうをかきゑたゝめ八しまのいそへぞをくられ
けるへいけは元りやくぐはんねん二月七日に一のた

にをおちうらづたひまづたひして十三日のさうて
うに八しまのいそにつくくまがへがをくりのふねも
おなじ日やしまのいそにつくかたきみかたの事なれ
ばそのあひはるかにろかいをとゝめ大をんあげて申
そもくげんじがたよりもくまがへがわたくしのつ
かひにまかりむかつて候かどわき殿の御内なるいが
のへいないざへもんのせうどのへ申たきまさいの候
とたからかによばゝるあらいたはしやへいけは一
のたにをおちかいろはるかにをちのびたればさうな
ふげんじのせいのかゝるべしとおぼしめされずた
だ此ほどのもうきにはなみまくらかちまくらゆめお
どろかすまつのかせいのちもまらぬまつらぶねこが
れてものやおもふらんこゝろぼそくもおぼせしにげ
んじのふねよときこしめしわれさきにくゝとろかい
をはやめをちゆけどもとうごくのげんじにあはんと
いへるへいけなしおほいどのゝ御らんじてふかくな
りかたぐゝ世はぎょうきにをよんでときまつぼう

にきすといふたとへばいこくのはんくわいがわたつ
てのつたりともあれほどのせうせんに何ほどの事の
あるべきぞたれかあるゆきむかつてきひて参れと有
しときへいないざゑもんうけ給はつてぞんするみち
候きひてまいり候はんとやかたのうちへつつと入て
いでたつその日のしやうぞくははなやかにこそみえ
にければだにはまろきかたびらみなしろおつてひつ
ちがへかちしのよろいひたゝれの四のくゝりをゆる
ゆるとよせさせやうばいたうりのさうのこてびやく
だん見本ノミがきのすねあてにましにぼたんのはいだてし
いとひどしのよろいのみのときとかやくをわだが
みとつてひつたてくさずりながにざつときゆつて
うはおびちやうどまめ九寸五分のよろいどをしをめ
てのわきにさいたりけり一尺八寸のうちがたな十文
字にさすまゝに三じやく八寸候ひけるしやくどうづ
くりのたちはいてなしうちゑぼしにはちまきしまら
えのなぎなたをつえにつき我におとらぬらうどう共

を七八人あひぐしはしふねををろしうちのりて表に
たてをしとませざゝめかひてをしよするはんくわい
がいきほひもあふかくやとおもひゑられてありそも
そもげんじがたよりもくまがへがわたくしのつかい
とはそも何事のゑさいぞやをくりのもの申さん候あ
つもりをくまがへがてにかけ申あまり御いたはしき
によつて御ゑがいにいろうゝのぶぐども又はゑがじ
やうをあひそへこれまでをくり申て候いそぎ御ざぶ
ぬに御うつしあれと申もとくに聞てあらふしぎやあ
つもりは一もんの御ふねにめされあはのなるとにま
しますよしをうけたまはつて候がやはかうたれさせ
給ふべきもしいつはりにてや候らんをくりのもの申
御ふしんはことほり誠いつはりをばたいせんちうを
御らんせよと申もとくにきひてげにゝこれはいは
れたりとてをくりのふねにわがふねをおしよせなぎ
なたを杖につきをくりのふねをさしうつぶひてみて
あればげにといろゝのぬいものゑたるひたゝれに

あつもりの御ゑがいとおほしきををしつゝみてぞを
きにけるむらさきすそごの御きせながこがねづく
の御はかせ十六さいたるそめばのやむらしげどうの
ゆみも有まがふところはましますもとくにあまり
のかなしさに長刀をからりとすてをくりのふねにの
りうつり御ゑがいにいだきつきなげどもさらになみ
だなしさけべどもこゑはいでざりけりやゝありても
とくにはなみだをながし申やういたはしや此きみの
一の谷を御いでるとき此きせながをたてまつるおと
なしやかにあつもりのいつしか御一もん世がよにま
しゝゝて四かいに風のおさまりつゝもとくにしよち
ゑらせ見るとだにおもひなばいかばかりうれしかる
べきとおほせられしそのときはもとくにがうれしさ
を何にたとへんかたもなしまことのときはどうてん
しめされざるあつもりを一もんの御ふねにめされつ
つあはのなるとにましますと申たるもとくにがこゝ
ろのうちのふかくさよいま一どもとくにかとおほせ

いだされ候へとてきえいるやうになきければをくり
のものとも人もげにことはりやだうりとてみなな
みだをぞながしをくりのもの申これは御つかひの

本ノマ、

みにて候いそぎ御ざぶねに御うつしあれと申もとく
にきいてげに／＼おもひにばうじおもひわすれて候
とてあつ盛の御玄がいをわがふねにうつし大船にこ
ぎよせ此よしかくと申あぐるかどわきどのもつねも
りもなにあつもりがうたれたるといふかさん候と申
あらふしぎやあつもりは一もんのふねにのりあはの
なるとにあるよしを風のたよりにきしほどはいか
ばかりうれしかりつるにくまがへが手にかゝりさて
はうたれてありけるかとなみだながらにいでたまふ
にようばうたちにとりてはにようゐんをはじめてた
まつりむねとのによくわん百六十人もはかまのそば
をとりみなふなばたにたちいで、御玄がいにいだき
つきこれはゆめかやうつ／＼かと一どにわつとさけば
れしを物によく／＼たとふればこれやこのしやくそ

んの御にうめつのきさらぎや十だいまでし十六らか
ん五十二るいにいたるまでわかれの見ちの御なげき
かくやとおもひ煮られたりやゝありてちゝつねもり
はをつるなみだのひまよりもあらむざんやあつもり
一のたにをいでしときこきやうのかたを見をくりこ
ころぼそげにてたつたりしをいさめばやと思ひあら
ふかくやとよ敦盛よ三だいくわいもんのいゑをはな
れかばねをやさんにうづみなをはんでんのくもゐに
あくべきみがらうどうのみるめをもちよかしとい
ふてあればさらぬていにてなぎさまでくだりしがふ
えをわすれて候とてとりにかへりしそのときともに
かへらむとおもひつれどもかたきみかたにをしへだ
てられ又二めとも見ざりし也なきけあるくまがへに
てかたみこれまでをくりたりむなしき玄がいこのか
たみけふはみつあすよりのちのこひしさをたれにか
たりてなぐさまんなふ人々との給ひつゝもだへこが
れたまひけりへいけがたの人々はいま一しほのなみ

だ也そのうちくまがへがをくりたるじやうをめしい
だし大しやうなれば此じやうをもしよしつねばしを
くりてあるかつかひはせひをわきまへすたいかどわ
きどのへとばかり申とてもいがのへいなきへもん
へとかきたるじやうにてあるあひだいゑながふみを
つかまつれうけたまはり候とてふねのせがいにひざ
まづき狀をたまはりこし上たからかにこそよふだり
けれなをざねつゝしんで申ふりよに此き見とさんく
はいしたてまつしあひだぎにせうぶをけつせん
はつするきざみにはかにをんできのおもひをばうじ
かへつてぶげいのいさみきえあまつさへはしゆごを
くはへたてまつるところにたせい一どうにきほひか
かつてとうざいにこれはある本ノマ、かれはたせいこれはぶ
せいはんくわいがへつてちやうりやうがげいをつゝ
しむたまゝなをざねはしやうをきうばのいゑにむ
まれたゝみをらくせいにめぐらしいのちをおなじう
すちんとうがゆふへせいはんはんにをよんでじたか

くのかんぼくをほどこせりさても此たびかなしきか
なや此きみとなをざねふかくぎやくえんをむすびた
てまつるところなげかしきかなつたなきかな此あく
えんをひるがへすものならばながくしやうじのきづ
なをはなれ一つはちすのえんとならんやかんきよの
ちしよをえめしつゝ御ぼだひをねんごろにとぶらひ
申べき事まこといつはりこうもんかくれなく候この
おもむきをもつて御一もんの御中へ御ひろうあるべ
く候よつて恐懼つゝしんで申げんりやくぐはんねん
二月七日むさしのくにのちうにんくまがへの次郎な
をざねえん上かどわきどのゝ御うちなるいがのへい
ないざへもんのせうどのへとぞよふだりけり御一も
んうんかくけいしやうどうおんにあつとかんじたま
ひげにやくまがへはをんぐくにてはあほうらせつゑ
びすなんどゝつたへしがなさけはふかゝりけるぞや
ぶんしやうのたつしやさよひつせいのいつくしさよ
かほどやさしきつはものにへんじやうなくてかなは

じとおほいどのゝへんじやうをつねもりのゑひつに
あそばしてたぶつかいはふみをたまはりいそぎ一の
谷にこぎもどりとくまがへどのにみせ奉るくまがへい
かんとしてゆみやのみやうがなくしてはつねもりの
御ゑひつをおがみ申さんといたいきひらいてはいけ
んつかまつるその御しよにいはくあつもりがゑがい
ならびにゆいもつたまはりをはんぬ此たびくわらく
をうつ立しよりこのかたなんぞ二たびおもひかへす
事のあらむやさかななるものゝおとろふるはむじや
うのならひあへるものにわかるゝ事ゑどのならひし
やくそんらごらてんの一しのわかれにあらずやいは
んやぼんぶをやさんぬる七日にうつたてしよりこの
かたつばめきたつてかたらへどそのすがたをみずき
がみつばさをつらねそらにをとづれとをるといへど
そのこゑをきかずさればかのゆいせきのきかまほし
きによつて天にあふぎちにふし是をいのるゑんめい
のなふじゆぶつだのかんをうをまつところによつて

七日がうちにこれを見るうちにはゑんくゝをいたし
ほかにはかぬいそでをひたすによつてむまれきた
れるにあへりきえつのはういなくしてはいかいその
すがたを二たゝび見んするすこぶるしゆみのいたゞ
きひきうしてさうかいかへつてあさしすゝんでこれ
をほうせんとすればくわこおんくゝたりゑりぞきこ
たへんとすればみらいやうくゝたるものかばんたん
おほしといへどひつしにつくしがたしこれはむさし
のくまがへのかへしゑやうとぞよふだりけるさるほ
どにくまがへよくくゝみてあればぼだひのゑんぞお
こりける今月十六日にさぬきの八しまをせめらるべ
しときいてありわれも人もうき世にながらへてかゝ
るものうきめにもまたなをざねやあはすらめおもへ
ばこの世はつねのすみかにあらずくさばにをくゑら
露みづにやどる月より猶あやしきんこくにはなをゑ
いじゑいぐわはさきだつてむじやうの風にさそはる
るなんらうの月をもてあそぶともがらも月にさきだ

つてうゐのくもにかくれり人げん五十ねんげでんの
うちをくらぶればゆめまぼろしのごとく也一どしや
うをうけめつせぬものゝあるべきかこれをばだいの
たねとおもひさだめざらんはくちおしかりき玄だい
ぞとおもひさだめいそぎみやこにのぼりつゝあつも
りの御くびをみればものうさにぐくもんよりもぬす
みとりわがやどにかへり御そうをくやうしむじやう
のけぶりとなし申御こつををつとりくびにかけきの
ふまでもけふまでも人によはげをみせじとちからを
そへしゑらまゆみいまは何にかせんとて三つにきり
おり三ぼんのそとばとさだめじやうどのはしにわた
しやどをいでゝひがし山くろだにゝすみ給ふほうね
ん上人をゑしやうにたのみたてまつりもとひきりに
しへなげそのなをひきかへてれんしやうばうと申花
のたもとをすみぞめのとうちのさとのすみごろもい
まきてみるぞよしなきかくなる事もたれゆへ風には
もろき露の身ときえにし人のためなればうらみとは

さらにおもはずかくてれんしやうくろだにゝろうき
よしゑやうねん念佛申てゐたりしがあるときれんし
やうこゝろのうちにおもうやうきのくにに御たちあ
るかや山へまいらばやとおもひゑやう人に御いと
ま申つたのふちをひかたにかけたのむものはたけの
つえくろだにをまだ夜をこめていでけるがみやこい
でのめいしよにひがしをながむればせいがんじいま
くまのきよみづやさかちやうらくじかのきよみづと
申はさがのていの御ぐわんじよすみとものざうりう
たむら丸の御こんりうだいどう二ねんにたてられよ
ろづのほとけのぐはんよりもせんじゆのちかひはた
のもしやあつものしやりやうとんせうぼだいと
ゑかうしてにしをながむればたんばにをひの山おり
くちにたにのだうみねのだうきたをかへりて見をく
ればうちのをいでてれんしのふなをか山のはかゑる
しみるに涙もせきあへず南をながむればとうじさい
じ四づか年はゆけども老もせぬむつだかはらとうち

ながめ山ざきたから寺せきどのゐんをうちすぎやは
たの山をげかうしてこれたかのみこの御かりせしか
たのゝはらをとをりきんやのきじはこをおもふうど
のにゑげきませがきのやどをすぐれまいとだのはら
くぼつのわうじをふしおがみ天わうじへぞまいりけ
るてんわうじと申はしやうとくたいしの御ぐはんな
り七ふしぎのありさまこうはふるともつきすまじか
めゐのみづのながれたえぬぞたつとかりけるとふし
おがみ候ひてあまのにまいらるゝ大みやうじんと申
はかうやのちんじゆにておはします御やまにほうし
をさづけてたばせたまへとねんごろにきせい申ては
やかうやさんへまいらるゝかたじけなくもかうやさ
んと申はていせいをさつて二百里きやうりをはなれ
むにんじやう八えうのみね八つのたにがいとしてき
したかしせいらんこすゑをならせどせきしつのかげ
のどかなりあふかのてらよりみゑいだうのたにたい
ざうかいの大目百八十そんをへうせりさてまた大た

うよりしおくのゐんへこれも大目の三十七そんをへ
うせうこんだうのほんぞんはあしゆくほうしやうみ
だしやかこれ又大しの御さくなり大たうと申はなん
てんのてつたうをまなんでとそつ天のばんりをかた
どり十六ぢやうのほうたうかみは千だいのあみだ中
は千じゆの二十八ぶしゆゑもはやくしの十二じんや
うくせいにきはなくゑゆじやうあくしよのつみき
えらいがうのさんぞんをおがむぞたつとかりけると
ふしおがみ候ひておくのゐんへぞまいりけるみちの
ほとりのはつこつはいさごをまくがごとくなりいよ
いよねんぶつ申おくのゐんへまいりあつもりの御こ
つをこめをきれんげだにのかたはらにちしきゐんと
申あんじつをむすびみねのはなをたをりあかのみづ
をむすびをこなひすましれんしやう八十三と申に大
わうじやうをとげにけりあくにつよければせんにも
つよしぶんぶ二だうのめいじんかんかはゑらずほん
てうにかゝるつはものあらじとかんせぬ人はなかり

けり

明暦四年戌九月吉日

山田市郎兵衛開板

なすの與一

なすの與一むねたかは大將の御前にゆみ取をなしかしこまる判官御覽じてたい今御へんをめす事べちの儀にあらすおきの平家かたよりも作りものを出して有御へんは弓の上手ときく一矢いよとの御ぢやうなり與一謹てかしこまる大將は御覽じてあらやう／＼しや只つかまつれと仰ければかさねてぢたいの儀有あしかりなんと存知あのあふぎ射する事いとやすく候とおうけを申御前をまかりたち駒引よせて打のりわだちゝぶこだまたう大せいひかへておはしますぢんのまへをとるとき與一申けるやうはそれものゝおもしろきは夏山や青葉まじりの木の玄たにひわとこがらとうぐひすとそがぢやうそのきのえだにいくこゑなくと目にはみずしてこゑばかりとんちにかける命もころさず羽もちらさず是をひきめの目のうちに

射こふでとるぞ大事なるあれ體にまのあたりにさしあらはれたるぶんの物與一くわじやにてあらすとも弓取てひかんものかなめぎはより射ちぎり海上のはなとちらさん事いとやすく候とから／＼とはわらひけれども與一もやうゆならざれば心ぼそさはかぎりなしゑほでむながひのひたるほど駒海上にうちひておきをきつとみてあればあふぎの立たる其間七八たんきりと見ゆるこゝはとをしと存すれ共ゑばらくぢんをぞ取たりけるかゝりけるところにおきの平家三萬六千餘騎月卿雲客あひのこらず只今出たるなしうちゑぼしのしよくわんはあふぎの射手かおもしろしとさゝめきわたつて見えさせ給ふまづ一番にすゝむ船女房連の御座船也そつのすけどのふげんじどのさらしなどのおぼすてどのしやうとうしの丹後の御つぼねあはの内侍に上總のおつぼねをさきとして上らうねうばう百六十人下ともに二百八十餘人がまんまくをあげさせあつばれ時の見物やとてさゝめき渡て

見え給ふ其つぎをみてあれば先帝をはじめ奉り御一門に取ては右大臣むねもり御子の中將ときざね四位少將ありもり藏人の太夫なりもりしゆりの太夫つねもり能登のかみのりつねさてそうかうにとつては三井のそうづけんしむぎやうめいぼうのあじやりほつせうじのしゆぎやうのふゑんさてさぶらひにとつては越中の次郎兵衛上總の五郎兵衛悪七兵衛景清ひだの三郎左衛門此人々をさきとして諸國のじゆりやうけんびいしかりむしやに至るまであつばれときのけんぶつやとてさいめきわたつて見えにけりさる間與一はくがを歸てみてあれば大將をはじめ奉り武州にちゝぶとの相州にわたどのたしろのくわんじやのぶつなかはごえの太郎まげいへうつの宮の彌三郎ともつな山なさと見をさきとして源氏六千餘騎がなぎさへさつとおりくだつて射やあてんすらん射やせんせむとてにあせをにぎりてかたづをのうでおはしますうしろはうりうあふはか前はむれたか松やくり八島

も近かりけり比は元暦元年三月十八日の事なるにきのふ吹たる西の風いまだなみこそまづまらねふねはうき木のものなれば浮つまづんづたゝゑふたり能登のかみのはかりごとにはげんにちじよくをかゝせんためくるりをかまへて立たればはま風ははげしくひらりくるりと舞たるはくがをまねくがごとく也與一がむまと申はあけ六さいの野取のこまなみ風にたはぶれてあがつつおちつこの馬がたづなをうつてぞくるひけるふねもさしきになをりかねあふぎ矢つばにさだまらねば乗たるむまもくるひけり持たるゆみにあせをこめあましつやうにぞ覺えけるさるあひた與一うしほをむすび手水としなむやなすのゝ龍神正八幡大ぼさつなみかせまづめてたび給へときせいを申ふりあふのひてみてあれば誠に氏神八まんの御かごにて候ひけるかなみ風ちやうとまづまつていまはかうとみゆる與一こゝろに思ふやう女の立たるぶんの物なかざしにしているときは花みてえだを手折風情と

おもひ上矢のかぶらぬき出しさつ／＼とつまよつて
 みてあればちつとこの矢羽ひろくしはまかせにふか
 れあしかりなと思ひしづわにのりゐまへわのはづ
 れにをしあてこしのかたなをするりとぬきはしり羽
 二三度さつ／＼とかひてすてければ源氏平家は御覽
 じてまことの射手ぞよくするとほめぬ人こそなかり
 けれ

そのゝち與一あぶみふんばりくらかさにつゝたちあ
 がつてだいをんじやうにてなるたゞいまげんじろ
 くせんよきがなかよりもあふぎのいてにさゝれまか
 りむかひたるつはものをいかなるものとおもふらん
 下野の國のじゆう人金村の太夫に十八代のこうゐん
 いなの庄司の其子になすの興一むねたかとして生年十
 八歳にまかりなるそれあふぎと申は上下によつてし
 やべつの候かみかかなめかいづくを矢つぽと承て仕
 らんと申大臣殿きこしめしあつばれ大がうの者かな
 あふぎならばいづくをなりとも射あてたらんをかち

とはおもはず矢どころこひつるやさしさよ自餘のも
 のはかなふまじいせんにあふぎたてたるたまむしい
 でゝ矢どころをとらせよ彼たまむしがゆらいをくは
 しくたづぬるに本は九國の佳人はなみの太夫が末子
 はなやの八郎京ばらのいもうとあざ名をあふむのま
 へとめされしが一とせ女院北山にて花見の御遊の有
 し時百首つらねて參らせあぐる日本一番のときはに
 をとらぬ美人とてまきに名をこそかへらるれ春はあ
 をやぎいとざくら夏は又藤の花秋は七夕のあまのが
 は瀬にせきすへてたえ／＼見ゆるはたきの水近くい
 ろのませばとて名をたまむしとつけらるゝむめ地の
 おりこうばい七つひとへのきぬのつまをとりふねの
 せかひにつつたちあがつてかれうびんなる聲をあげ
 あらいまめかしの射手殿やさふらふ日本ひろしと申
 共花のみやこにてとゞめたりくるまは千里をかける
 とは申共くさびをもつてほんとせりはりをさげては
 みづをを射かうがひ立てまちを射はさみものにはく

やノ音轉

がチ脱スルカ本ノマ、

しを射あふぎをたてゝはかなめをいるとは申せ共かなめのへんはめづらしからずくもでのへんをあそばせと袖かざして立たるはかなをかがゑづにうつすともふでもいかでかをよぶへき與一このよしきくよりもことに大事のところを矢つぽにさゝれつものかな射ずものとおもひてかぶらをうしほにうちひて三人張に十三束とつてからとうちつがひ本はずうらはずひとつになれときり／＼とひきゑぼりかつてつよにぞはなちける

せい兵のいる矢のくせとして手本にはならずにはひにほひととを鳴してあふぎのくもでの邊をばひふつと射切たりあふぎはやうのものなればはなのごとくさつとちるかぶらはいよ／＼とをなりして大臣殿のめされたる御座船のせかひのうちにしかいしやうへさつぷと入たりけり平家三萬六千餘騎いたりやくがの源氏いたりやしよくわんとゑばしはなりもゑづまらず大將は御らんじて神妙なりと御ぢやうにてやが

て御はんをいださるゝ

さるあひだ與一はたくる／＼とひんまひてあはのなるとのわたりをしいはやがせとをうちすきはなのみやこにつきしかばくわん東へくだつて頼朝にかくと申神妙なりと御誕にてやがて御判をいださるゝ二つの御はん給はり一門のこらずひきつれ所知入とこそ聞えけれ

未來記

去間牛若殿鞍馬の奥そうじやうががけといふ所へ夜な／＼通ひ給ひけり天下をおさめん其ために兵法けいこのたしなみなり抑兵法と申は三略のじつしより昔大唐しやうざんのぞうけいが傳へしひしよなり吉備の大臣入唐し八十四卷の中よりも四十二帖にぬき書て我朝へわたされしを坂のうへのりじん九年三月にならひ敵をゑづめたまひけり扱其後に田村九十二年三月にならひならさかやまのかなつむて鈴鹿山の盗人かゝるげきとをたいらげ天下をまほり給ひけりサシ扱其後にすたりゑいざんにこめられしを詞白河いんちのこのかうべならふとは申せ共さしたるゆゑはなかりけりさる間牛若殿唯さんがくをほしりまはり枯木の枝を傳ひ御身をからめ給ひけり爰に天狗共さしあつまり内儀ひやうちやうするやうは抑當山

は玄かく大師の祕所として行人ならでは此山へ通ふものもなかりしに鞍馬寮の牛若が我等がすみかをあざける事其いわれなき物をいざや天狗のほうばつをあてんなんど、申けり愛宕の山の天狗太郎坊申やう抑此兒ふようにて親にも師にも不孝ならば天狗のほうばつあつべけれ其父母けうやうの其ために兵法けいこのたしなみなり父母にけうやう有者はかならず天道の加護を蒙にばつしたまはんせんぞこを玄かるべくもなしといふひらの山の次郎坊進出て申やう抑我等が異名を天狗といふはいわれありむかしは人にてさふらひしが佛法を能習ひ我より外に智者なしと大まんじんをおこすゆへ佛にはならずして天狗道へおつるなりたとへまんじんおゝくして此だうへおつる共情をいかでゑらざるべきいざや牛若合力し天狗のほうをゆるし親の敵をうたせん尤然べしとてむねとの天狗七八人若山伏に出たち牛若殿の前にゆきいかに小人きこしめせ抑此あたりに人住ところ候へ

ば御出あつてゑばらく フシ御あそびさふらへや小人
ところ申けれ牛若どのはきこしめし是唯ものとおほ
さねどなんの子細の有べきと思召れるほどに山伏
のかたにのりそこ共々らぬ山を行ふかき谷にわけて
入いづく迄牛若をぐそくするぞあやしやと思召れけ
るほどに山の氣色と木のこだちかんれいがいとそび
ゑて萬木枝をならべては花しやうゑんにさかんなり
りゝたるにほひはかうばしく松柏みどり色ふかし瀧
のおとれいゝとひゝき岩間をくゝるおと是やまこ
とにしやうりやうせんのかゝどくをんかとうたがわ
る爰はほんだうならびにはいでん玉を磨きゑんでん
にしゆぎよくをつらね九重の塔は雲にそびゑ坊中む
ねをならべつゝ門々薨をつけたりかほどめでたき
みてらの此せんこくに有けりとと思召れるほどにゑ
ばらくたちておはしますコトバ懸りける所に有大坊
の客殿にむねとの大衆百人ばかり連座してくはんげ
んかうのもてあそびせうちやくきんくごげんくわん

をゑらべ面白かりける座敷なるが牛若殿を見付まい
らせ管絃をといめててうしやう申はるかのだしやう
にすへまいらせ山河のびしよくを調へちんけうをつ
くして持成申すらんぶになれば天狗共我をとらじの
あそび事てんこつの物の上手がむじんのきよくをつ
くしてわれおとらじとぞくるひける老僧たち申され
けるはあそびばかりにて事ゆくべきか源平の合戦の
此すへに有べきをかねてゑつてはんべるなり小人の
御持成にまなびて御目にかげよといううけたまはる
と申てゆゝしげなる天狗が是は平家の大将安藝守清
盛と名乗てすゝみ出安藝國嚴島の明神の御はからひ
によりつゝ此世を今よりおさむべし平家に野心の者
をば都のうちにをくべからず薩摩がた硫黄の島へ流
すべしほうわうをば鳥羽の古宮に籠てまつり清盛
が子共いよゝはんじやうし一門六十三人はいづれ
も官ろくおもかるべしちやくし次男は左右の大臣孫
は國王カ、ルあるいは百官けいしやうなりフシあふれ

源氏のすゑ／＼をたねをたつてほろぼすべし南都に敵がこもるとさくげきとこわくて手にあまらば大佛殿に火をかけよッメうけたまはると申てゆゝしげなる天狗が本三位の中將重平衡ノ假借と名乗て三千餘騎をそつして南都へ押寄て大佛殿を焼はらふ春日のおとがめこほくして既にはや清盛は火のやまうを請とつてせうねつ地獄のかなやのほむらいかではまざるべきあらあつやかなしやとこがれじにこそえんだりけるとかやうに清盛のはや一期をかたつてさつと入コトバかゝりける所にゆゝしげなる天狗が是は平家の世つぎ右大將宗盛と名乗てかむりそくたいのしやうぞくにてゆゝしげに座せられたり不思議やへいじのみだれるとき伊豆の田中へ流されし頼朝世をみだり伊豆の目代山木をうつて相模の國石橋山に幡をなびかせたてをつくおうばの三郎押寄て石橋山をいおとす頼朝主従七騎にて武藏の國へおち給ひここのろくしよぶんばいに幡をなびかしつゝくみかたをまち

給ふに我も／＼とさんせられけるをちやくたうつて見たまふに夜日三日が其うちに頼朝の御勢貳拾八萬七千餘騎はたのゑたにあひなびき先陣は相模の國小林の郷に京をたて新鎌倉とさめく爰に信濃の住人に木曾のくはんじや義仲は平家をせめん其ために五萬餘騎をそつし信濃の國をうつたつて越後の府に着しかば越路にかゝりせめのぼりッメ都まぢかき越前の火打が城に陣を取平家の人々肝をけし驚さはぎ給ひて十萬餘騎にて都をたつて近江の國とかやあらちを越てちのめ山うちこへかつるの山に陣を取源氏はくつきやうのじやうくはくに籠てさうなくおつまじかりしを有人のたばかりにようこくのせきをやぶられこらへかねて落給ふ平家跡よりせめつゝく加賀の國^越のほらあたかのかいひは天地もひゝくばかりなりそこをも義仲うちまけて加賀越中の國境くりから山に陣を取平家の人々かつにのり彼山へせめまぼる其時源氏の氏神八幡大井の御はからひによりつ

つ平家三萬六千餘騎は一夜がうちにくりからの谷の朽木とはろびはつ平家にげてのほりしを源氏跡より責かゝる平家部をおとされ神祇をとつてはるかなる福原の京に落給ふコト去間義仲は天下を守護し奉りゆゑ敷見えて今ははや木曾のせいいたうたるべきが頼朝の果報におゝはれ代を背くべきすいざう有サシクドキ平治のげきしんはさすが情の有つるにああらうかりけるかな源氏のげきふう四海にふきあれて雲の上迄浪たかし頼朝きこしめされて君をまぼらんためにこそ義仲都の守護共あれ却て天下をなやますは重而けうい成べし其儀ならばうつてをのぼせんとて大將にはかばのくはんじやのりより此牛若殿元服して九郎義經と名乗べし牛若をば鞍門の多門伊勢の兩社まぼり守護し給ひきんようをあらはしきゝうの家をつぐべきなりカ、ル是によつて教頼義經を兩大將と定めカ、ルフシ都へせめてのぼるべしフシむざんやなよしながは天下のにくまれてういのはちゆみや

のすゑもすたれはて粟津が原でうたるべしツメ義經都のけいごととして三種の神祇事故なく都へかへし申さんと三くさのたうげひよ鳥ごへからめてをまはし責入べし平家こらゑで城をおつ汀のみくづとなりはつる終には西海のあかもじだんの浦はやともが沖にて二位殿先帝宗盛を始めたてまつり平家三萬六千餘騎は水の淡と消えはつべしフシ扱其後に牛若殿兄にくまれ給ふなよ梶原に心ゆるすべからず兄弟中不和ならば其身の運はつくべきなりケル六親不和にして三寶のかごはよもあらじカタツメ爰迄すゑをばおしゑぬ扱其後をしらぬなり是迄しやうじまいらせて對面申ゑるしには天狗のほうをゆるすなり是をまぼりにかけよとてくろがねの玉を取出し牛若殿にまいらせてかきけすやうにうせければ有し所はうちうせてそうじやうががけなる松の枝にぞおはしける扱は天狗がうしわかをかどへけるよと思召東光坊にかへらるゝ

ふえのまき

さるあひだ牛若殿くらまのてら東光坊にてかくもん
きはめ給ふふでをとつての筆法にきよりんこさう水
露のてんくしらうしの筆のあとぶんじよのかすをの
こらすならひぞきはめ給ひけるときはこゝろにおぼ
しめすそれちごのもてあそびになに／＼と申ともく
わげんにすぎたる事はなしそのなかにとつてもふえ
はいちの名物なればよからんふえをもとめくらまへ
のぼせうしわかにとらせばやとおぼしめし都まちか
きよどのつのみた次郎がもとよりもふえをいくわん
かひ取て鞍馬へのぼせ給ふうしわかなゝめに思召き
さらぎなかばの比よりもふきはじめさせ給ひつゝそ
の年の神無月するゑはのころになりければ百二十調子
のがくをば吹こそきはめ給ひけれ牛若こゝろにおぼ
しめすそれ人の持たからの威徳をきかねば何ならず

此笛のいとくを聞ばやとおぼしめし淀の津のみた次
郎をぞめされけるみた次郎承てくらまでら東光坊に
まいりうしわかどのゝまします庭上にかしこまる牛
若殿は御覽じてよどの津のみた次郎とはなんじが事
かさん候と申此笛はかんちくか本ちくかきかまほし
やと仰けりみた次郎承てさん候此ふえと申はさぬき
の國びやうぶのうらにてはうき五年に生れ給ふ弘法
大師入唐し青龍寺にましますけいくわくわしやうを
玄とたのみ玄んごんのひみつをきはめ給ひわれ入唐
のついでにてんぢくりやうじゆせんにおはします大
聖もんじゆをおがまばやと思召玄ん／＼とある遠島
をわけこえ給ひけるほどにかうしうといふ國に十の
道わかつてり其中に取てもかうなんといへる道こそせ
きけんの南なれこの道にさしかゝりたいたくの野邊
ゆきすぎてはんにやだいをぞおがまれける彼はんに
やだいと申はなんがくだいしひさしくをこなひ給ふ
御寺也いま日本に生れてはまやどのわうじ聖徳たい

し共申なり衆生さいどのぢひふかしなむがくだいし
とふしおがみ又五十里をゆき過てきよくせんじとて
御寺有かのてらと申はなんがく一の弟子ちき上人の
御寺なりかの天台にかよひ御法をとかせ給ふなりあ
なたへも五千里こなたへも五千里一萬里の道なるを
夜日七日にゆきかよひ御法をとさせ給ふなりかるがゆ
へに御しやくにもけいやうわうふくとしやうばんり
ととき給ふかゝるえんたうをわけこしたまひける
ほどにたうてんちくのさかひなるりうさ河につき給
ふ彼河のひろき事は三百二十餘町なりなんばんてん
にさかのぼりいさごをあらひながせりりうさのかは
と書てはいさごなぐるゝ河とよむさうれい山のふも
とに一のはしわたる石橋と是を云しやつけうと書て
は石のはしとよむいはれにはりをつらねてはしらと
しるりをならべてかうらんとすはしげたはしらには
めなうをつくりつけはしのうへせばくして尺にもた
らずとをくしてそれる事はにじをなせるがごとくな

りみるにきもきえひざふるひ足すさまじく身のけだ
ちわたるべきやう更になしざりともこれをわたらず
ば白雲萬里をへだたりて何としてかは參るべきわた
るにこそと思召いのちをすてゝわたらるゝほうりき
なれば相違なくはやむかへにぞつき給ふ水上さして
よぢのぼりさうれいのみねにあがりつゝはるかのそ
らを見給へば夕日程もなかりけりてにとるばかりち
かくしてかすみはたにのそにあらひでんくもを
ひひかし風せううんを拂てきんはくはことにちちん
たり爰にはつせんどうじゆきあひ給ひいづくよりい
づかたへとをるものぞととひ給ふ弘法聞召れて是は
じちいきのこうぼう成がてんちくりやうじゆせんに
おはします大聖もんじゆをおがまんためこれまで參
りて候どうじきこしめし是よりりやうせんじやうど
へははくうん萬里をへだりて何としてかは參るべ
きもどれとの御ぢやう也こうぼうきこしめされて萬
里のみちも一足の下よりつゝ事なればこゝろなが

くあゆまばなとかまいらで候べきどうじきこしめされておろかなりなんちはけしにたとへたるぞくさんこくの僧が唐土をこゆるだにもありがたき事なるにましててんぢくあゆみすぎりやうさむじやうどへ參らん事なか／＼思ひもならぬ事也たゞもどれとの御錠なり弘法聞召れて國は小國なれどもじちいきと名付て目をかたどれるくになりてんぢく其名高けれど月氏國と名付て月をかたどる國なりたうどひろしと申せども晨且國と名付て星をかたどるくになり國は大小にはよるべからず只ちゑこそほんにてあるべけれどうじ聞召おもしろしこうぼうちゑくらべには參らんさてこうぼうは日本よりこれまでたつね來れるはぐちのそうにあらすやもんじゆもこゝろのうちにありりやうじゆせんもこゝろに有むねのほとりにもちながら遠島を尋ぬるはぐちのそうにあらすやこうぼうきこしめしおもしろしあのどうじ法にはじりのふたつあり心の内のもんじゆはそのもんじゆこ

れなりりやうじゆせんのもんじゆは別のもんじゆ是也別ときらへばそうもなしそうときらへばべつもなしじり惣別の不二なるをちしやとは申候ぞどうじ聞召ことばのしよけんむやくなりめいよをげんじてきとくをみせまもちゐんきどくはなにをあらはさむかみもなく筆もなくすみもなくして只今もじをひとつ書てたべ弘法聞召かゝむす事はやすけれどどうじのきどくを先見せよいで／＼さらばかゝむとはしる雲にむかつてあびらうんけんとゆびをふるあらしくもははやけれ共ぼんじはちつともみだれずあざあざとこそ見えにけれこうぼう御らんじてしゆせうなりあのどうじさらばかくとの給ひなぐるゝ水のおもてに龍といへる文字をかくさしもに水ははやけれどもんじはちつともみだれずおびをむすべるとくにあざ／＼とこそ見えにけれどうじ御覽してあの字にてんをうつてこそりうとはよまれ候へこうぼう聞召うたんす事はやすけれどもりうとならんがいぶせさ

にさてこそてんはりやくしたれなに程の事の有べきぞたゝうち給へ弘法さらばうつとの給びてひとつのてんをうちたまひいまだそのてもひかぬまにかづちなつて雨くだり大水出来たり水ばなをみたまへばもゝいろの大龍がかしらを高くさしあげ水におをたひて大木枯木のえだくだき岩をながしてくだすをと地震のゆるがごとしすはや見ようじにげ給へとありしかばどうじちつともさはがすこくうにাগり雲をふんでさらぬていに御たちあるいたはしやこうぼうにげ給へとありしかばこうぼうちつ共さはがすばんじやくのゐんをむすんで河のおもてになげ給ふ二十余丈にそびへたる大ばんじやくとなりしかば其上にとびあがりつつこをにぎりこうぼうしはらくねんじゆしたまへりどうじ御らんじてしゆせうなりとよこうぼう我を誰とか思ふらんりやうじゆせんのもんじゆ也いで本體をあらはさんうてんわりはなきかしゝいてこよとありしかばをつとこたへてほどもな

く金のほうくわんをいたゝきせきいにけんをはきししにはらつてんのくらををき御前にひつたつるどうじ則もんじゆなり五色の光りをはなちつゝしゝにめされたりければところはやがてじやうどと成りやうざん淨土これなり抑もむじゆと申はじやうるりじやうどのそのなかに八大ぼさつの惣一なり行者をむかへとりては極樂にをくらるゝ有時はりやうざんじやうどにて法花のすいさうをとき又有ときはじやくめつ道場にして三世諸法のじつぎをたてゝの上にしては又釋尊の左のわきに立給ふかゝるありがたき大聖もんじゆをまのあたりにおがみ給ふ弘法大師の御こゝろさこそうれしくおぼすらんもんじゆかさねて仰ける末世の衆生のまよひにはうごうむごう是おほし有相といへるこゝろはよろづのものをありとみる是は有相のまよひにて地獄へおつるはじめなり又無相といへるこゝろはよろづのものをなしとみるこれはむごうのまよひにて地獄へおつるはじめなり一ね

んふしやうなるをこそもんじゆのちゑと申てぞつこ
んの佛に成ものぞ此みちをまぼりはや下向せよとの
御詮なりこうぼうよくくちやうもん有てあらしゆ
せうや候さらば御いとま申とて其よりもどり給ふさ
うれいの山のふもとにひとつの瀧落るかのたきのさ
うがんに三本の竹有こうぼうけんをぬきもつて末の
よを三ふしこめてきり給ひ契りのあらば日本にてめ
ぐりあへやとの給ひて川にぞながしたまひけるそれ
よりもとはし渡りはや大唐につき給ふたうどの寺
のはじめはやうしうの白馬寺殊更たつとかりけり歸
朝のこちがふきければみやうしうに出給ふ御船にめ
すときに持ところの佛具に五ことつこさむこをこく
うへなげさせ給ひけり紫雲くだつてこれをまきはる
かの海をわけこしてきの國の高野のみねにとまれ
りさんこの松と申事此時よりのいはれ也とつこはは
なの都なるとうじの塔にとまれり五こは越後の國
くるみの寺にとまれりそれよりもだいしはのろ島

ときさみのしまはるかのにしに御覽じて堀川といへ
るみなとこそたうどのわうのみやこよりながれ出た
る大河なれそれより三日はしり過かしらなしといふ
津こそろこし船のとまりなれきみしうといへるお
きすをすぎかうらい唐土のさかひ成もめいじまをは
しり過ぎやうのみさきはくたいしゆもころいのみせ
んもゝ島きとの島もろみのしま船こしすぎてつちよ
りもあくればつしまのないにつくいきのもとおりは
しりすぎいきのさかもと目にかけてあはや筑前の箱
崎よはかたのつこそ見ゆれとてをのゝいさむ折ふ
しに惡風俄にふきおちてかうらいのおきすなるきと
の島までふきもどす大師ひるんをむすび我又歸朝す
る事ひほうのためにあらず衆生さいどのためなり順
風たべや龍王ときせいを申させ給ひければなみのう
へにどうじ一人たゝすみ此なみ風と申はかうらい唐
土の神佛大師になごりをおしみ今一度たうどへむか
へんための風なれば龍神のしよいならずとてかきけ

すやうにうせにけりこうぼうきこしめされて其ぎにて御座あらば先日本へつけてたべ我日本につくならばたうどのてらをまなびきんかうふしとがくをうつてかうらいたうどの神佛を勸請申あれにて御めにかからむときせいを申させ給ひければ梶取共がこれを見てあそこなるほうしは何をいふてさゝやくぞ死なふ事が目に見えてひとり事をするやとてわらふものもありにけり誰も命はおしいとてなげくものも有にけりだいしのきせいまことにてをひてぞふきにけるとかや過にしくわんむ天皇の御時三十七にて入唐ましゝてさて又四十七にてさがのていの御ときに御歸朝とこそきこえけれされ共人はなどやらんしらざりけるぞふしぎなるつくしのはかたにあがりふちをひ取てかたにかけみやこへ上り給ひしがきうりをしのき有によりさぬきの國びやうぶのうらにたちより父母のみはかをふしおがみあるいそべをとをらるるよりたけひとつ有あやしく思召れてとりあげ御ら

んありければ天づくりうさがはにてきりながしたるたけで有きたいふしぎにおぼしめし三ふしの竹をみつにきざみ給ひてをひのあしにゆひつけ都へのぼり給ひしが三ふしの竹がよに入は五音の聲を出す五音のこゑと申はきうしやうかくちうこれなり三くわんの笛にえり給ふおほすいれうこすいれう青葉のふえと申すあをばのふえと申はたけはしほにかれたれどあを葉はふしに一つあり枯ざるとくに名付たりこすいれうと申はしゆじやくゐんのをにが取よなくこれふきしかば天人是をとらんとて羽衣をもつてなでゝはてんにあがりなでゝはてんにあがるかるがゆへに名付てひとえかくしとこれをいふ此三くわんのふえをば天下のてうほうなりとて大裡にこめ給ひしをさごろもの中將吉野山にて花見のけうの有しとき此笛を申うけてふきて遊ばせ給ひしにまんじゆらくをふきしかば天人是をちやうもんし五すいのくをのがれてぼさつと成てまひあそぶ其後に中將院の津に

住居するちうじやう年を老て後みた次郎がおほちのみだ太郎がこんをもつわれ／＼までは三代也ふく事はなけれ共此ふえを持ぬればさいなん更に來らず佛神のかごにあづかるてうほうして候をいかなる人が申けんかみさままでも聞召めしをかせ給へばちからにをよび候はす若君とこそ申けれ牛若聞召おもしろしみた次郎いはひに三度かたれとてをし返しかたらせ猶もあかすやおぼしけむ草子にとゞめ給ひて笛のまきと申て鞍馬でらにありとかや其後にみた次郎ならんりやう五つ給はり家路へとてぞかへりける

鞍馬出

さても六はらの御所には牛若殿の悪行の身にあまる
ときこしめし御一門さしあつまり御評定はとりく
なりかの人おひたつものならば當家のゆゑしき大事
たるべしうつてすつるか忍びてながすかなんどのひ
やうちやうある母の常葉はきこしめしあるにあられ
ぬ御身にてゑのびてふみをあそばし牛若殿につけた
まふ牛若文を御覽じてかやうに母の御手より文をた
まはりいづくの國たれやの人をたのみて下るべしと
もおぼえずや所詮牛若御本尊より外たのみ申方もな
しとかうたうにお参りあり夜と共きせいを申された
りそもく比沙門と申は四天の中の第一に八天たう
の尊者たり佛法ごちの其爲に弓箭を守りたまふなり
牛若がいちごの本望は身の爲おこすむほんならず父
母教養の其ために平家を討とおもひたち兵法稽古の

嗜なり多門のしつしゆの福をば父母教養せんものに
あたへんとかひなりほんせい今にたがはずばうし
わかにかそたふべけれとふかくきせいを申しうちま
どろみたる御夢にゑろきうさぎとねずみとが袂にい
ると御覽じてうちおどろきおぼしめすうさぎは東の
ものねずみは北のいきものなり東北のすみをばうし
とらとこそ名付たれいしやなさんと申はこのはうに
おはしますかるがゆへに名付つゝ多門てんと申なり
比沙門のすみかをばいしらまなやじやうとて米の
降みやこなりいかさまにも牛若はうしとらの方に立
越て代に出よとのぢげんかやあら不思議やな北と東
のあひにはたれやの人をたのみて下るべしとおぼ
えずとまだいとけなき御心につくゝと案じたまひ
けり既に天はれまた早朝の事なるに道者四五人にう
だうす尊者とおぼしき男のうとくの人とおぼしくて
みはちに金をまき入珠數さらくとおしもんで千五
百里の道のあひだをあんのに守りたまへやとふか

くきせひを申さるゝ其後かうしのうちよりも五十ばかりなる僧出て御道者はいづくの人ぞ態とのまいりか便宜さふかいやこれは便宜ながらわざと参りて候そばなる法師これをきゝ御邊はいまだみゑらぬかあれこそ都にかくれもなき三條の金商人殿吉次殿といひければあふさる事ありめづらしやおくよりもいつの比の御登りぞ去年の冬まかりのぼりて候が餘寒漸うちとけば此間に罷下り候べしさもあれ音に承る秀平殿と申はいかほどの分限の人ぞひでひらどのと申は五十四郡のそうすいふくし白河の關よりも東は残る所もましまさずざいちやう國民あひゑたがひ勢を持事はその數をゑらす日本半國より猶おほき分限とこそうけたまはれさて其人は奥州の住人かいや都の人と承るが一年源氏のお大將八まんどのと申せしがおくへくだらせたまひさだうむねたうやすたうをたいらげ御上洛の御時奥州の守護代をかのもとひらにくだしたまふ五十四郡の國人は皆もとひらに思

ひつくこはきを和げよはきをなで民をあはれみまつりごと古法にまかせてとりおこなふ國のなびきゑたがふ事は草木の風になびくがごとくなりかくてをくを納めつゝ秀平殿の代々は吹風も聲をとめたつ波もきしをあらはずよき大將とうけたまはる秀平殿と申はぞくしやうよき人にて國をもよく納め給ふ七珍萬寶あきみちてたい長者のくらゐと申なり牛若殿はきこしめし是は多門のたくせんや秀平は先祖の家人たのみくだる物ならばなさけなくはよもあらじ吉次をたのみ道づれしてくだらばやとおぼしめし吉次とふかくけいやくをめされ東光坊にお歸りあり常のところに御いりあつてたびの出たちをゑたまふになみだもさらにせきあへすいつも御身をはなたれぬこがねづくりの御帶刀こんねんとうのこしのものこれぞゑのびてもたれたるめしつかはれしわらはのあひずりのひたゝれに御身のめされたるせいがうの大きくちをぬぎかえさせたまひ御ぐしからはにたかくあげ七さ

いの御としよりすみなれさせたまひたる東光ぼうを
たゞ一人さ夜にまぎれていでたまふすがにみたら
のおんなぐりかたえのちごたちこじどうじゆくのな
こりどもあひねんふかき人おほしみらいをかけてち
ぎりしものいまもゑらせであるならば前後をしゆく
しゆくべけれども人めをゑのぶたびなればたゞ一人
ぞおいであるこゝろざしこそあはれなれ
師匠になぐりのをしければかたみのためとおぼしめ
し一首のうたをぞのこされたる

おもひきや身をおく山にすまゐして

このみひとつになりゆかんとは

かやうに詠じたまひ庭の名木めいせきどもをいつの
よにかはたちかへりまた見んすらんあぢきなやたう
りものいはねばわがいでぬるをよもつけじ梅けいせ
つをふくめどもなどあかつきをゑらせぬぞさて本坊
を立出て地主ごんげんふしおがみあかの水もさえ
くもりかげさへやどす月もなし七つに曲るくらまざ

か夜ふけてものうき道の邊をきぶねの神のやしろこ
そげにたのもしくきこえけれなぐりぞをしきいち原
のたちとゝまりてみぞろいけちはやふるらんかみが
ものみちをたゞすのもりすぎて夜はほのゝとゑら
川や吉次にいまもあわだぐちはやまつぎかにうしわ
かどのほどなくつかせたまひけりまつぎちはみえ
すしてみののくにのぢうにんせきはらのよいちわう
ばんをうけとつて夜を目につゐでのぼりしがその夜
は天津にとまりまつぎかのあたりにてうしわかどの
にまいりあふ牛若殿は御覽じてげんじのものゑのか
どいでに平家のらうどうにあふところはむねんなり
いかさまきやつに見合みやこにひろうせさせてはあ
しかりなんとおもひあふぎをかざしあみがさをかた
むけさらぬ體にておとをりある興市が馬と申はあけ
六さいの野とりのこまものをみてはきれやすしよひ
にふつたるあまみづのみににたまりてありけるをそ
ぞろにけあげけるほどにうしわかどのゝひたゝれば

たゞまばるばかりにぬれにけるうしわかどのは御覽じてこまのあしたちしどろなりあしくもゆきあひけるやとてそなたもみずににげたまふよいちらくにほこつてにぐるこゝろのいたゐけさに手綱もとらでかけたり牛若どのは御覽じてなふまかるべく御馬をまづかにうたせたまへや我等がやうなるわらんべこそけあげの水はいとはずともみやこがたの弓とりのとがむるかたも候べし手綱にあまらばその馬をすてておとをり候へあたら馬をすてうよりをりてひけとの御ちやうなり與市むねんのこと葉をきゝこほどのものにあてられて返事をせぬものならば京いなかのものわらひとなるべしまたさらぬていとをりたらばさしてなんにもなるまじきをあれほどのわらんべあつれば路次のらうせきあてねばときのちじよく太刀のむねにてうちふせておひうしなへと下知をするうけたまはり候とてわかたう三人ちうげん六人上下九人のものどもが太刀長刀のさやはづし聲ばかり

にておどさんとておのれは／＼とぞおどしけるうしわかどのは御覽じておのれがありさまはいなりまつりかぎをんの會か加茂のまつりのものまねか其足に風をひかせんとやあおそろしうもないぞとてからからとぞわらひける與市このよしきくよりもにくいやつがこと葉かな具足よごしに切ばしするな太刀のむねにてうちふせておひうしなへと下知をする承候とて真中に取こむる牛若殿は御覽じて僧正ががけにてならはせ給し天狗の法出やう所と思食御帶刀すりと脱スルカぬいてみけんにさしかざし大勢の中へわつて入むかふものを拜みぎりめてへまはるは車切弓手にうけて左太刀よせてかへすはさゝ波ぎりこすへをもむは嵐ぎり天狗だをしのわらひぎりこゝはと思ふひじの手をば残さずこそはつかはれける牛若殿の御はかせひらめくとみえしかば手のうらいまだかへさぬまに六人死て三人は痛手負てぞひれふしける與市このよしみるよりもあれほどのわらんべたとへば十四か十五

かにいかほどかあまらじ手なみ見せんといふまゝに
こまかけよせてちやうとうつ牛若殿は御覽じてきや
つは日本一ばんのおこのものにてありけるや直にま
つてすてゝはおもひ出のあらばこそなぶり切にきや
つをしてあそばゝやと思しめしうけだちにうちてぞ
まはりけるよいちこのよしみるよりもさればこそ此
わつばは北て行かいづくまでにかさんとなげかけな
げかけ切たりけりうしわか殿は御覽じていつまで
きやつをなぶるべきとおぼしめし弓手にきれてかい
ちがひ興市が馬のさんづをひらきうちちやうどう
つ馬はうたれてはねければくらだまにとられてまつ
さかさまにとうどおつるおきん／＼とするところを
はしりかゝつてむねうちにちやう／＼とこそうつた
りけるすこしもくぼき所にて雨水にぬれにけり牛若
殿は御覽じてあふもつ體もさふらはず兒と女には御
めさふかや馬よりをるゝいんぎんさよ御供の者はい
づくにあるぞやああの馬引て興市殿をのせ申せそれ

それとありしかば返事するものなかりけり牛若馬を
引寄是にめされさふらひて御歸候へや興一どのとあ
りしかば興一あまりのはづかしさに馬も下人もふり
すて山科寺のかたはらにふかく忍びていたりけりそ
れより牛若殿奥へくだらせたまひて天下を納め給ひ
けり

ゑぼしおり

そもくあんげんぐわんねん三月中じゆんにみなも
とのうしわか殿くらまのてらを御いでありけふよろ
こびにあふみなるのだのしゆくにてきち次のぶたか
にゆきあはせたまふその日のとまりはかいみのしゆく
きち次がやどはきくやときこふるかいみのしゆく
のゆうくんざつしやうかまへ吉次殿をもてなすさる
あひだきち次世にありがほなるふせいにてじゆんの
さかづきくだしぎやくのさかづきとばせければその
のちはさか盛は成あらいたはしやうしわか殿は人め
をつゝませたまふあひだきりどのわきにすゝくと
たい一人たゝすみ給ふかゝりけるところにへいけの
さぶらひ大しやうけんもつ太郎よりかたあく七びや
うゑかげきよひだの三郎ざゑもんはやむまにのつて
ばんばのしゆくよりもふれてとをりけるは此ろじを

十六七のせう人のとをらせたまふ事のあらばみやこ
へ御とも申のぼりたらんともがらに上下をゑらます
くんこうあるべしとふれてその日にみやこへとをり
けり

うしわか殿はきこしめしそのぎにてあるならばなに
しにくらまをばいでけるぞやそれはつしやうのおほ
ぢひろしといへどとしにもたらぬうし若がみのをき
どころのなきこそなによりもつてくちをしけれさり
ながらたいいまはちごとこそふれて候へおとことふ
れてあらばこそしよせんおとこになりてくだらばや
とおぼしめし下ちよをちかづけこのへんにゑぼしお
りばしさうか下ちようけたまはつて今日みやこより
くだらせたまふ人のこれにてゑぼしを御たづねさふ
らふか去ながらゑぼしの御しよもうにて候はゝあの
むかひに見えたるたかまがりのうちこそ五郎太夫と
申てゑぼしの上手にてさぶらへうし若なゝめにおぼ
しめしもがりのうちへたづねいりあんない申さうう

ちよりたそこたふるいやくるしうも候はすきちに
のぶたかのともしてくだるくわじやにて候がゑぼし
のしよまうにてこれまでまいりて候そのときゑぼし
おりの大夫うしわかどのをしやうじ申くわじや殿の
めされうするゑぼしは大きびざうかこさびざうか
んせいやうたうせいやういかやうなるをめされうぞ
御このみ候へやがておつてまいらせう牛若どのはき
こしめしあらくちおしやゑぼしはたいくろければく
ろひとばかりこゝろへたるにあまたのありけるこ
とよなにとがなおらせうなしよせんおもひいだした
りわれらがせんぞはひだりおりをめさるゝよしをう
けたまはつて候へば人かすならぬうしわかもひだり
へ折せきばやとおぼしめしなふ太夫どの此くわじや
がきうするゑぼしはそれなる大きびにつぶのちつと
あらゝかなるをいくせ三くせませひながたにあひを
あらせくしがたをいがくゝと一ためためてひだりへ
おつてたび候へそのときゑぼしおりの太夫ことのほ

かにはらをたてさればあのやうなる下らうにものを
このますればわがみのくわかいのほどをもえらすこ
ともかたじけなやひだりおりを^めめされうする人は一
とせをはりのくにのまのうつみにてうせ給ひさま
のかみよしともその御こにて御ざ有ちやくしあくげ
んだよしひら二なんともながさんなんよりとも四郎
はあのゝ御ざうし五郎はとをたうみのかばの御ざう
しのりより六はだいごのてらのきやうの公七はおん
じやうのあくせんじのきみ八なんにあたらせたまふ
たうじくらまでらに御ざあるうしわかどのこそめさ
れうするにわどのばらがやうにきち次がともをする
くわじやがひだりおりをきうする事おもひもよらぬ
しよもうかな牛わかおかしくおぼしめしおほせはさ
にて候へどおくへまかりくだらふずせきゝゝとまり
とまりにてひだりおりをきたるよとひとのとがめの
あらんときみやこのやどにふるきゑぼしのありつる
をしよまうしてきてさうがひだりおりもみぎおりも

このくわじやはゑらぬなりかゝるむづかしきゑぼし
をせきやにあづけ申といふてうちすてゝとをるなら
ば御みのなんもあるまじきわつぱがとがものがるべ
し太ゆふきいてあらおもしろのことばづかひやいか
さまこれはやうある人とおもひ一たんは申までとい
ふてやがておりすましてまいらす

牛若烏帽子とりまはし御らんじて能烏帽子にて候か
一のなんが候太夫きいて地になんがさうかさびにく
せが候かひながたくしがたこゆびどころ何くになん
が候ぞうしわか殿はきこしめしいづくになんも候は
ずゑぼしはわがしよもうのごとくおらせまいらせて
おりふしかはりをもちあはせざるが一つのなんにて
候太夫きいてあらことくしのくわじや殿が申事や
あの吉次は一ねんに一ど二ねんに二たびおりのぼり
するそのともしてくだるくわじやどのなれば必やす
くおもはれよくわじやどのがおくはなむけにとらせ
ぞうしわか殿はきこしめし世にありがほなる太夫が

とらせことばかなうしわかよにいづる物ならばいゑ
のきずともなるべきことばなればたちをとらせてゆ
かふずるがそれは千五百里のみちのようじんもかく
るかたなをとらせてゆかばやとおぼしめし源じ御ぢ
うだいのこんねんとうのこしのもの取出させたまひ
てなふ太夫殿このかたなをゑぼしのかはりとはしお
ぼしめされ候なみやう年のなつのころおくよりもよ
きむまをようお願い申さういとま申て太夫とてうしわか
やどにかへらせたまふそのゝちゑぼしおりの太夫女
ばうをよびいだしされば此とし月かゝるげざいをつ
かまつりゑんみやうをたすかるをぶつ神三ぼうもふ
びんとおぼしめさるゝによつてこのかたなをたまは
る見たまへこれはみなこがねぞみやこのまちにてこ
きやくし一ごのうちをらくゝとすぎうす事のうち
れしさはさていかにようばうきいてなにとものを
ばいはずして太夫がもちたるかたなを一め見やがて
さめくゝとなく太夫これを見てふしぎのによばうの

ふせいかなおのこがたからまうけてよろこばゝとも
によるこばずしてわごせはなにをなげくぞにようば
うきいていまはなにをかつゝみさふらふべきさては
さきほどにゑぼしおらせたまひたるくわじやどのは
みづからがためには三だいさうおんのしうぎみにて
御ざさふらひけりそれをいかにと申に御みのもたせ
たまひたるかたなはげんじ御ぢうだいこんねんどう
と申かたなみづからをいかなるものとおぼしめすぞ
これは一とせおはりのくにのまのうつみにてうせ給
しよしとものみうちかまだがためにはいもうとなり
君にはなれまいらせみのをきどころのなきまゝに御
みにちぎりをこめことは九ねんになりさふらふ九
ねんのなさけにそのかたなをみづからにたべかしな
ふわがきみのあうしうへとはるゝ御くだりまし
すにおくはなむけにまいらせん

太ゆふきいてなかゝの事ふうふかいらうたんせつ
のわりなきいもせの中なればなにをかしておしむ

べきとにようばうにとらするにようばうなゝめによ
ろこふでへいじ一ぐてうはながたにくちつゝみこゆ
ひとりそへきち次がやどへたづねいりあんない申さ
ううちよりたそとこたふるいやくるしうもさふらは
ずさきほどにゑぼしおらせたまひたるくわじやどの
に物申さんとうちに入うしわかごにあひたてまつり
なふいかにわが君みづからをばいかなるものとおぼ
しめすぞこれは一とせこきみの御とも申のまのうつ
みにてうせたりしかまだがためにはいもうとなりな
んしのみにてもさふらはゝ御さいごの御とも申べき
がたとへおんなのみにてさふらともいかならんふち
せにもみをまづめんこそじゆんしにてはさふらへど
もすてがたきはいのちめんぼくなくはさふらへども
ゑぼしおりとちぎりをこめことは九年になりさふ
らふ九ねんのなさけに此かたなを太夫にしようもう
しわがきみのあう州へとはるゝ御くだりまします
を一めをがみ申さんためにこれまでまいりてさふら

ふぞやそれゑぼしをきるにはこゆひをゆふてきる事
ざふらふそのゑぼしたまはれこゆひをゆふてまいら
せんとはしげたやうにくも井にざつとゆいあげこの
ゑぼしをめされておくへくだらせたまひさとうひで
ひらを御たのみあつてすまんぎをいんぞつしへいけ
の人々を御こゝろのまゝにほろぼしいま一度御よに
たゝせたまへいとま申てわがきみとてにようばうや
どにぞかへりけるうしわかどのはきこしめしげんじ
のものゑのかどいでにせんぞのらうどうにあふたる
事のためたさよそれゑぼしをきるには二人のおやを
とるならひのあると申がうしわかはたれをゑぼしお
やにとらうぞしよせんおもひいだしたりわれらがせ
んぞ八まん太郎よしゑは七さいにてやはたへ御ま
いりあつてあれにてげんぶくめされ八まん太郎よし
ゑとなのらせたまふ二なんにあたり給ふはかもに
てげんぶくめされかも次郎となのらせたまふ三なん
にあたりたまふは大つのゑんらへ御まいり有てゑん

ら三郎殿となのらせたまふと承るそのごとくうしわ
かもかたおやをばうちがみ八まんをとり申さうすか
たおやをば此とし月すみなれしくらまの大ひたもん
をとり申さうすたちはたもんのつるぎかたなは八ま
んと心ざしないのはしらにたてをかせたまひ九つの
もとゆひみづからめされ御ぐし御はやしあつてゑぼ
しためつけめされへいじのさけをみづからうつした
ちのまへにも三々九どかたなのまへにも三々九どた
むけそのうちわがみも御めしあつてさもあれこんや
のきやくじんがなをばなにと申けみやうはげん九郎
じつみやうはよしつねと申なりと一人ごとをゑたま
ひてゑきのいはひをとげさせたまふあらいたはしや
このきみの御よが御よにて御げんぶくましまさばあ
めが下のしよさぶらひまいりはうこう申べきがとき
よにゑたがふならひとてよぶもこたふるもたい一人
の御げんぶくめでたきが中にもさきだつ物はなみだ
なり天あけければうしわかどのゑぼしためつけめさ

れきち次がまへにかしこまつておはしますきち次き
つと見てくわじや殿はゑぼしをめして候かそれゑぼ
しをきるには二人のおやをとるならひのあると申が
くわじや殿はたれをゑぼしおやにめされて候ぞうし
わか殿はきこしめしさん候あまり人々のゑぼしめし
つれたるがうらやましさにこゝろならずにきて候へ
どもおほせのごとくいまだなをばつかず候とてもは
や天ともちともちゝはゝともばんじは頼申^{たのみ}うへいか
やうにもなをつけてめしつかはれ候へきち次きいて
あふこのうへはちからをよばず今日よりして御みが
なをばきやうとうだかつけうぞやかしこまつて候た
だしといふに御みがやうになまめひたるわかき人を
かちにてろじをつれんずが大事今日よりしてきち次
がたちをかづいておくへくだり候へそれいなおも
ひなばこれよりみやこへのぼられ候へうしわか殿は
きこしめしこれをたとへに申かや世はまつせに及と
いへど日月はいまだちにおちたまはずてんじやうの

からにきくくだつてでいしやにまじはる事なしなに
としてげんじのちやくくがうき世をわたるきち次
がたちをもたうぞあらはかなの心やなきち次がたち
をもたばこそめいどにましますちゝよしとの御は
かせをもつにこそとおぼしめしひげきりの御はかせ
をわつそくにかけ吉次がたちをかづいておくへくだ
らせたまひけり涙のあめはたまかづらむかしはかけ
て見しものをきち次やうくくだるほどにみのく
ににきこえたるあふはかのちやうじやのしゆくしよ
につくかの長者が中のでゐには大みやうかうけの人
人だにもとまりたまはぬにきち次がとまるいはれは
よしとの御ために一けん四めんにひかりだうをた
てられしときかね五十りやうむま十ひきくわん進^{じん}に
まいるなさけのふかきものなればとており上りには
とゝまり候おほはかのゆうくんざつしやうかまへき
ち次殿をもてなすさるあひだきち次世にありがほ
なるふせいにていままいのきやうとうだはなき

かこなたへまいり上らうたちの御前にて御しやくを
申せあらいたはしやうしわか殿いつしやくとりなら
ひたる事御ざなければどもときよにゑたがふならひと
てをつとこたへてめさるゝにまことにとりならはざ
る事なれば誤しノ假借のさけをゆんでへさつゝとこぼし
たまふきち次きつと見て大のなまこにかどをたてふ
かくのもののかな人の御まへの御しやくをばさやうに
たまはるものかきつくわいなりまかりたてとゑかる
あらいたはしやうしわか殿ときならぬかほにもみち
をさつとちらしさん候われさいこくがたにてしよや
までらのしゆとのしゆつしの御とも申しきみつみあ
かのみづさやうのほうこうをこそ申ならひて候へぶ
しの御前の御しやくはこれがはじめにて候いかやう
にもをしへてめしつかはれ候へきち次きいてやさや
うの事もわたくしにてこそ申せこれは人の御ざしき
ぞたいまかりたてとゑかるあらいたはしやうしわか
殿はゝとしてざしきをたゝせたまふ

こゝにはまちどりのつぼねちやうへまいりて申され
けるはなふきみきこしめせしうだにもふかぬふゑを
いままいりのきやうとうだとやらんがふきげにさふ
らふよにありがほにふゑをひてさふらふぞやきみ
のちやうはきこしめしわごせはとうかいだうのなを
りを申ものかなげいはぬしをさげすでいのうちのは
ちすゑるをぞんりんといひゑらざるをきちくにたと
へたりいかに吉次がつれたるきやうとうだと申とも
ふけばこそふゑをばさすらめてうし一つしよまうせ
よはまちどりうけたまはつてうしわかどのゝ御をば
ちかくまいりきみのちやうよりの御しよまうにてさ
ふらふ御みのこしにさゝせたまふそのふゑ一てあそ
ばせうしわかどのはきこしめしなにこのくわじやに
ふゑふけと候ややまとだけにめをあげたるくさかり
ぶゑにて候をあづまのたびのとせんさにもちはもつ
て候へどもふく事はなかゝおもひもよらず候吉次
きいてやあなにと申ぞかみさまよりの御しよまうは

なんちがためにはしやうがいのおもひでにてはあらずやたとひきこりぶゑにてもあり又くさかりぶゑにても候へかしなどてうし一つふき申さぬぞうしわかおかしくおぼしめしこれは一たんのれいまでさらば一てふいておもいでにきかせばやとおぼしめしはゝのときはの旋のつのみだ次郎がもとよりもかいとらせ給ひたるこうぼう大師のせみをれなればいつくしきともなか／＼に申ばかりはなかりけり此ふゑをとりいだしかんごじやうさくちうろくげくとて八つとうたぐちにはなのつゆを煮めしとうばんしきにねをとつてくも井にさつとふきあげばん事を煮づめてあそばしたりちやう此よしをきこしめしおもしろのふゑのねやからはしの中將殿は日ほん一のふゑ吹ふし一けんのためにおくへ御くだりましませしが此しゆくに御つきありよゝも笛をあそばせしおんせいいきざしほどひやうしものあひすむたるところはからはしどのゝ笛にはみぎはまさつておぼえたりこ

れほどのふゑにてさだめてかくはふくらんがく一てあそばせみなもとほきこしめしてもてうしをふくうへふかばやとおぼしめし一こつでうにねをかへしゆつこんらくをあそばしやがてをしかへしくわいばいらくをあそばすちやうこのよしをきこしめしおもしろのふゑのねやあらおもしろのがくのなやくわいばいらくといふがくさかづきをめぐらすたのしみげこも上戸をしなべて酒をのめとの笛のねや煮かるべくはあすばかりきちじどのがとゞまれかしきやうとうだにふゑをふかせくわげんしてあそばんきみのちやうはきこしめしあらおもしろのふゑさふらふやみづからひとつたまはつてたゞいまのふゑののにおもひざし申さうきちじきいていかにきやうだいうちのものちかうまいりてものをきけそれがしがみやこにて申せし事はこれぞとよふゑはふかずとしにさせまいはまはずともつねにあふぎをもてと申せし事はこれなりきやうとうだがふゑをふかずばかりさま

の御さかづきをばなにとしてたまはらふぞそれ一つ
給てげんせのみやうもんごしやうのうつたへにせよ
あらうらやましのきやうとうだとさかづきをうらや
みしはことほりとぞきこえける

そのうちしわか殿三とぎこしめすうしわかどの、
さかづきをかなたこなたへまはし夜もふけければは
まちどりさかづきをおさめてみなつばね／＼へぞか
へられけるこゝにはまちどりのつばねごせたちをち
かづけていかにごせたちきゝたまへいせんにふゑふ
いたるきやうとうだとやらんはみめもいつくしいも
のふゑも上手たゝしと申におかしき事を申つるもの
かなそれふゑのなはかんちくこちくやうちくあをば
二ば天人のひとへがくしこうぼう大しのせみをれわ
がてうのふゑはうちやまとしまたけよりたけなどゝ
こそ申せまだこそきかねくさかりぶゑとはあふむか
しの人はこゝろのいたりがなふてふゑにてくさを
かりたればこそ草かりぶゑとは申つらめおかしさよ

などゝ申てとり／＼にこそわらひけれおりふしきみ
のちやうはものごしにてきこしめしわごせたちはそ
のくさかりぶゑのいはれをゑつてわらふかゑらでわ
らふかたとひ百やうをゑつたりともいちやうをゑら
ずばあらそう事なかれと申たとへのあるぞとよいで
いでわごせたちにその草かりぶゑのいはれをかたつ
てきかせんむかしわがてうにようめいてんわうと申
は十六にならせたまふまできさきのみやましまさ
ずある時くぎやうてんじやう人さしあつまつてあふ
ぎを六十六本おりゑにようばうをかゝせくに／＼へ
まはしいかならんするゑづのめしづのこなりとも此
あふぎのゑににたるにようばうやあるいそぎだり
へまいらせよ一のきさきにいはいふべしと日ほんこく
をばふれられける日ほんひろしと申せども此あふぎ
のゑににたるにようばう一人もなくしてあふぎはみ
なみやこへぞのぼりけるかゝりけるところにつくし
ぶんごのくにうちやまと申ところにもちやうじや一人

あり四はうに四まんのくらをたてゝすめば四萬のちやうじやと申せしを人の申やすきまゝにまのどのとこそ申けれ四十のゐんにいるまで子のなき事をかなしみうち山のしやうくわんおんにまいり申ごをこそゑたまひけれあらありがたやきせいゑのゑるしはやあつてほうじゆをたまはるときたの御かた御らんすればやがて御ちやくたひのみと成七月のわづらひ九月のくるしみ十月はんと申にさんのひぼたいらかなりとりあげ御らんありければ玉をのべたるごとくなるひめぎみにておはします御むさうによそへたまよのひめとなづけいつきかしづきたてまつるかのひめ十四のはるの比みやこよりゑあふぎのくだりけるをひきあわせて見たまへばものいはゐあふぎのゑがねたむべうにぞ見ゆるさるあいだいりへそうもん申されたり御かどゑいらんましゝていそぎだいりへまいらせよ一のきさきにいはふべしとやがたて勅した^{たノ字 慈削ルベ}キカつちやうじやうけたまはつてたとへせんじにても候

へたい一人のひめなればおもひもよらぬ事なりとせんじをそむき申されたりみかどゑいらんましゝてそのぎならばまのどのけしのたねを目のうちにまんだいりへまいらせよそれがかなはぬものならばひめをうじやうけたまはつてたとへいかていのものなりとも日かずをふらばもとむべきがけしのたねを目のうちに一まん石なにとしてかはもとむべきぞたいひめをだいりへ參らせよちやうじやのにようばうこれをきゝなふまの殿いとうなさばぎたまひそよ御み十八みづから十四のあきよりもちやうじやのゐんがうかうふつて四はうに四まんのくらをたてうちのけんぞくなにはにつけてともしき事はなけれどもかゝるものはときとしてくさはせにもあふやとてあのいぬゐにあたつてかやのくらをつくらせとしゝのけしのたねをとりあつめてをひたるが一まんぐくはそはゑらず十萬ぐくもあるらんちやうじやなゝめによる

こふでさらばくるまをかざれとてくるまのかずをか
ざつて目のうちに一まんごくだいいへそなへたてま
つるみかどゑいらんまし／＼てしよせんたいまのど
のは三ごく一のちやうじやであり

御かどゑいらんまし／＼て其ぎならばまのどのしよ
つかうのにしきをもつてりやうかいのまんだらをは
たいろに七ながれおりつけてまいらせよそれがかな
はぬものならばひめをだいいへまいらすべしとかさ
ね／＼のちよくしたつちやうじやうけたまはつてこ
はいかにしよつかうのにしきをもつてりやうかいの
まんだらとやらんはほとけたちのじやうどにてはす
のいとをもつておらせたまふとうけたまはるそのう
へわれらはばんぶのみとしてなにとしてかはもとむ
べきにようばうたい姫をだいいへまいらすべしちや
うじやのにようばうこれをきゝたい一人のひめなる
をだいいへそなへまいらせよくろうきんでんのう
てなのうちのすまひをせばわがことはおもふとも見

んする事もかたかるべしゆふさはなごりおしみの
くわんげんとてよ／＼ものくわんげんなりされども
あかつきはすこしまどろみたまふかゝりけるところ
にうち山のしやうくわんおん長じやふうふのまくら
がみにたちよらせ給ひていかにちやうじやきくか御
みがむすめはみづからに申ごよなおしむところもふ
びんなればもろ／＼のほとけたちをしやうじ申ちや
うじやが中のでいにてにしきをおるぞちやうもんせ
ようけたまはりてちやうもんすたなばたひこぼしの
おるひのをとはいほろ／＼こゑはさながら御のりな
りはたいろに七ながれおりつけてちやうじや殿の中
のでゐにをき給ふちやうじやな／＼めによろこふでい
そぎだいいへまいらせけり御かどゑいらんまし／＼
てしよせんたいまのどののはほとけにてましますやほ
とけのむすめをこひかねて十せんのくらゐをすべる
共なにかはくるしかるべきくらゐを御すべりましま
して十六のはるのころたどろ／＼とくだらせたまひ

けるほどに十八日と申にはぶんごのくにゝきこえた
るはやうちやまにつきたまふさるあひだみかどはと
あるせうけにたちよらせたまひ一夜のやどをかりた
まふやどのていしゆみかどを見まいらせあらいつく
しのせう人や御みはいづくの人ぞさん候これはなら
はぬたびをうきくものときまり定めぬしゆぎやうじや
にて候あらやうくしやたゞくにをとおほせ候へみや
このものにて候花のみやこの人はかゝるをんごくへ
は何のための御くだりぞさん候ほうこうののぞみに
て候そのとき太夫よこでをちやうどあはせしようの
しゆチ脱スルカ
くわじや殿がほうこうごのみや此太夫こそちやうじ
やどのゝじつしなれこのとしになるまでこをもたず
けふよりして太夫がこになり候へでんちをかうさく
せんずるとも又かいせんをせんずるともそれは御み
がまゝざうよみかどゑいらんましゝて御らんせら
れ候ごとくやうりうの風にふけたるごとくにて田ぢ
をかうさくせんこともまたかいせんやらんもなか

なかおもひもよらず候たゞほうこうならばのぞみに
て候太夫きいて此うへはちから及ばずさらばちやう
じやに申さんとちやうじやどのに参り此よしかくと
申あぐるちやうじやきこしめされていそひでつれ
てまいれうけたまはると申てみかどをぐそくしたて
まつるちやうじや御らんあつてあらいつくしのしよ
くわんや御みはいづくの人ぞみやこのものにて候な
をば何といふぞさんろと申候さんろとは山のみち人
のなにははじめて聞たあらおもしろいなやいかにさ
んろどの此ちやうじやはうしを千びきかひ候が九百
九十九ひきにはとねりがそふてかひ候があれなるあ
めなるうしをばとねりどもがはつたとにくんでくさ
をもみづをもかはぬなりけふよりしてさんろどのに
たてまつるくさをもみづをもよきにかうてたび候へ
あらいたはしやみかどはこひゆへりやうじやうした
まひてあくればうしのくちをひき千人のとねりとう
ちつれうしろの野べへいでさせ給ふ千人のとねりと

もはかりならひたる事なれば手でにかまをひつさげ
かきよせかきよせくさをはかるいたはしや御かどはい
つかりならはせたまはねばうしにうちかゝりふゑう
ちふいてましますむまはばとうくわんおんうしは大
にちによらいのけしんとうけたまはるがげにやさあ
りけるかにんげんは見しり申さねどちくしやうなれ
どもいろふせいを見しりたるかとおぼしくてくさを
もはますつのをかたぶけゑたをたれみかどのふゑを
ちやうもんす千人のとねりどもこのよしをきくより
もさんろどのがふくものゝなをばなにといふやらん
よこぶゑと申さうおもしろひぞやさんろどの草ばし
かるなふゑをふけなんちがうしにはくさをかりてか
けふぞよふけよ／＼といふほどに一どもくさをかり
たまはずこれをもちてこそよふけてこゝろすめるを
ばさんろのくさかりよるのふゑわかめかるは田ごの
うらわかくさかるほむさし野よわかめわかくさはわ
かのうらようめいてんわうのこひゆへあそばすふゑ

をこそくさかりぶゑと申なりこれはつくしの物がた
りさても都にはみかどをうしなひたてまつりくぎや
う殿じやう人さしあつまつてはかせをめさるゝには
かせまいりてうらなひ申さん候こうする八月十五日
にうさ八まんの御まへにてうはうじやうゑと申事を
とりをこなはせたまへそれはさていかていのものに
さすべきぞつくしぶんごの國うちやまと申ところ
にちやうじや一人ありかのものに御じんじをつとめさ
するものならばみかどはみやこへくわんぎよあつて
天下はめでたかるべきよしをれいもんをひいて申さ
らばつくしへゑしやをたてよとてちやうじやのもん
にさか木をたつるおりふしちやじやいであひたまひ
てこれはなにと申ゑだいでやさん候こうする八月十
五日にうさ八まんの御まへにてうはうじやうゑと申
事をとりをこなはせたまへそれはさていかていのもの
のゝ入事にて候ぞさん候しきしやうこくしやうじん
ぐわん宮人八人のやをとめ五人のかぐらおのこまい

りていとうのつゝみをうちさつゝのすゝをふりあげけいばあげむまみこのむらしゝでんがくとをつてのちやぶさめ候よちやうじやきこしめされてあらむづかしげなる事やとてきんぐくりんごうをたづぬるにのこりはことぐくそろひけれどもこのやぶさめとやらんにはたとことをかくそのとき千人のとねり共をあつめてもしなんちらが中にやぶさめばしゑつてあるかとねりどもうけたまはつてかみにだにゑろしめされずそのうへわれらはあけくれうしにこそよりならひて候へやぶさめとやらんはなかゝおもひよらず候ちやうじやきこしめされてげにゝそれはさぞ有らんあの山路はみやこのものときくもしやぶさめをゑつて御神事をつとめさするものならばたとひいかていのものなりともちやうじやがむこにとらふぞそのときみかどにつこと御わらひ有てやぶさめとやらんはなによりもやすさふなる事にて候御かどには十町にばいをやつて二町をばのけばゝとなづけ

八ところにまとをたてゝあそばすをば八つまとゝなづけてこれはくぎやうでんじやう人のわがかみのまへには三ちやうにばいをやつて三ところにまとをたてゝあそばすをばやぶさめと申てこれはぶしのゑわざにてなによりもやすさふなる事にて候ちやうじやきこしめされてさてはなんちはよく心得つるものかな此やぶさめをゑつて御じん事をつとめさする物ならばうさ八まんも御ぢけんあれせひちやうじやがむこにとつて四はうに四まんのくらをたてすたのたからをそへてゑさせうすとかたくけいやくゑたまひけりさるあひだ八月十五日にもなりしかばうさ八まんの御まへにてきんぐくりんごうの大みやうせうみやうさじきをうちらちをゆひをのゝけんぶつゑたまふちやうじやふうふもおなじくさじきをうつてけんぶつすさるあひだゑきしやうこくしやうじんぐわん宮人八人のやをとめ五人のかぐらおのこまいりていとうのつゝみを打さつゝのすゝをふりあげけいば

あげむまみこのむらしゝでんがくとをつてのちやぶ
さめになるさるあひだみかどにはいろよきしやうぞ
くたてまつりかげなるむまにかひくらをひてひつた
て御かどにたてまつるみかどなゝめにおぼしめしひ
きよせゆらりとめさればゝわたしとつて返し一のま
とちやうどあそばす二のまとはたとあたつて三のま
とに此たびひらいてかゝらせたまひけるにゑんでん
にはかにゑんどうしてゑろきすいかなたてゑぼしき
んのしやくを御もちありかたじけなくも八まんはゆ
るぎいでさせたまひてゑらすにかしこまりいかなる
御事候ぞわうは十せんかみは九せん九せんのかみの
じんじを十膳の御みとしてつとめさせたまへばいよ
いよ五すいをもうなり候いまはみかどへくわんぎよ
あれくわんぎよならぬものならばまつせのしゆじや
うをばつせうするで候ぞ人おほきそのなかにちやう
じやふうふはさじきよりこぼれおちさせたまひてい
かなる御事ぞ十せんの御みを三とせがあひだつかひ

申事どもくちおしさよと申てりうていこがれたりけ
ればみかどゑいらんましゝてよゝゝくるしかる
まじ御みがむすめをこふるゆへにみとせはほうこう
ありつるぞいまはひめを參らせよ受たまはると申て
かたじけなくもうさ八まんのかいしやくにんにてた
まよのひめは十六ようめい天わう十八と申に御かど
にくはん御なり玉ろうきんでんのうてなのうちのす
まゐしゑんあうひよくのかたらひあさからずこそき
こえけれそのゝち御こをまうけさせたまひてしやう
とくたいしと申てわがてうにぶつぼうをひろめさせ
たまふなりたまよのひめはしやうくわんおんようめ
い天わうあみだ如來のけしんしやうとく太しくせく
わんおんのけげんなりようめいてんわうこひゆへあ
そばすふゑをこそくさかりぶゑと申なれゑらぬ事を
ばわごせたちわらはぬ事であるぞとよそのゝちきみ
のちやうはまちどりをめされい前にふゑ吹たるきや
うとうだとやらんはおもへば見るところのあるにこ

なたへつれてまいれうけたまはると申てうしわか殿
をぐそくし申さるあひだうしわかどのざしきになを
らせたまふちやう此よしを御らんじてあらふしぎの
くわじやどのやざしきになをるふせいはよしとに
たがはず御めのうちはひとへにあくげん太にて御ざ
さふらふものたまふこはいろはともながにたがは
ずもしもげんじのゆかりかゝりにてましまさばはや
はや御なのりさふらへやうしわか殿はきこしめしこ
れは上らうのこにても候はずみやこは三でうよねま
ちにすまゐするげらうのこにて候ものをちやうこの
よしをきこしめしなふ御みはなにをの給ふぞみづか
らはよしとものさいちよなりまんじゆのひめと申て
わすれがたみの御ざさふらふをいらたかじのふもと
にしゆつけになしをき申なりさて此あなだに一けん
四めんにひかりだうをたてゐみだの三ぞんを安じ申
よしともあくげんだともながふし三人の御ゑいをあ
らはし申なりもしもげんじのゆかりかゝりにてまし

まさばせうかうなんどあれかしなふあらこゝろぶか
のくわじやどのやみなもときこしめしのきのたまみ
づちりくぐさつゝめどもつゝまれずさてかくせど
もかくされず父よといへるこゑをきゝやまぶきがほ
にうちにほひいまはなにをかつゝむべきよしともに
は八なんときはばらには三なんくらまのてらにすま
ゐせしうしわかと申ものなりちやう此よしをきこし
めしさてはくらまにおはせしうしわかごにて御ざあ
りけりわかぎみを見申せば去してひさしくなりたま
ふよしともの御すがたを見まいらすこゝちのあり
てなつかしさよとのたまへばみなもとも二歳のとし
はなれ申せしちゝごをばゆめともさらにわきまへず
たいいまかやうにおほせらるればめいどにまします
ちゝ御前をおがみ申こゝちのありてなつかしさよと
の給ひて御たもとにすがりつきふしゑづみてぞなき
たまふたがひにつきぬそのなみだよそのたもともぬ
れぬべしきみのちやうはまちどりをめされあれく

ぐそくし申御ゑいおがませ申せうけたまはると申て
うしわか殿をぐそくし申さるあひだうしわか殿たち
いり御らん有ければげにもよしともあくげんだとも
ながふし三人の御ゑいをあらはし申うしわかなゝめ
におぼしめしせうかう禮をまいらせならぬたびの
つかれらいばんひきよせまくらとさだめすこしまど
ろみたまひけりかゝりけるところによしとも惡げん
だともながふし三人まつくろによりうしわか殿の
まくらがみにたちよらせたまひてうれしくもおさな
ごゝろにおもひたちておくへくだるものかなきち次
きちないきち六とて兄だい三人がいふ事をわれゝゝ
ふし三人がいふ事とおもひにしをひがしきたをみな
みともそむくべからずきち次がたちをかついておく
へくだり候へいとま申てさらばとてたちかへらんと
ゑたまひしがそよまことわすれたり日ほんぐくのぬ
す人がきち次がかはごにめをかけあをのがはらによ
りきしゆふさり夜うちによせうぞようじんよきにつ

かまつれわれゝゝぶし三人のもののくさのかげにてく
ろがねのたてとなるべきぞかくてもあらまほしけれ
どもしゆらはじまるにいとま申てうしわかとてたち
かへらんとゑたまひしときみなもとゆめごゝろにあ
らおさなけな御事やいまゑばらくとおほせあつて
よろひのそでにすがるかとおぼしめしりやうがんさ
めて御らんすれば御ゑいのそでにとりつき申すさて
はゆめにてありけるやあへなのいまのたいめんやと
てりうていこがれたまひけりたしかにうしわか殿御
むさうありけるものをとおぼしめしもとのざしきに
御かへりありもゑぎにはひのはらまきをくさすりな
がにざつくとめしこんねんどうのこしのものを一も
んじに御さしありかうがひぬきいで枕とさだめひげ
きりの御はかせをはらのうへにとうどをきゆんでの
あしをさしのべめての足をきつとたてゆんでの御め
のまどろむまにめてのまなこがてんじやうをはつた
とにらんでとのゐしてこそふされけれ

さてまあをのがはらによりきするぬす人はたれ／＼ぞまづゑちごとゑなのゝさかひなる熊さかのちやうはんおやこ六人ざすせんくわうじなん大もんのゐばかりのうまのせうごちやうの興次さいくちの七郎はつたのぎやうぶかひつかみのわし次郎まどをのぞくはそらめくらよひにぬつたるなまあせをあかつきはしるけら次郎でんがくがくぼにはともをまよはすきつね三郎おなじくいたち次郎ふじにばんどうじばんどうないいづのおやまのやげじたの小六此人々をさきとして大しやうは七十よ人そのほかつがうこぬす人三百人にはすぎざりけりあをのがはらにうちよつて大まく三系にうたせ大つゝたいへいかきすへわれらがさけをのまばこそ吉次がかはごをのむなるにのめやうたへやもつともてまふつうたふつさかもりをする

かゝりけるところにくまさかのちやうはんはとうざいのなりをししつとゝゑづめなにと面／＼はおもひ

さだむるゑさいによつてさけをまいるぞいで／＼ちやうはんがぬすみゑはじめしゆらいをかたつてきかせ申さんまづそれがしがおやにて候ものはゑちごとゑなのゝさかひなるくまさかといふところたいほとけのやうなるまたうどなりそれがしはいかなるぶつしんの御はからひにや七歳のとしをかのがうといふところにておぢのむまをぬすみ取てならひいひだのいちにてうりたるにちつともゑさいが候はずそれよりぬすみはもとでも入すよきあきないとおもひさだめ日ほん六十六かこくをはしりまはつてぬすみをするに一どもふかくをかゝすかくてちやうはんはこを五人もつて候が太郎はひるがんだうがじやうす次郎はゑのびがじやうす三郎はようちがじやうす四郎はむまをよくぬすみ候五郎は人をかどひとつてあのだがゑまにてうつたるにちつともゑさいが候はすきやつばらは一ごすぎうするのふをみなもつて候かくてちやうはんこんやむねこそさはげあつぱれば三百

七十よ人が中にさいかくまはつたる人や有らんに吉次がやどへたちこゑてけごをそつと見てやがて御もどり候へ人おほきその中にいづのおやまのやけじたの小六なにがしみて參らんといふまゝにかきのすゝかけしかまのときんまゆはづかにひつこふてあふはかのきみのちやうのもんぐわいにたちよつて大音あげてよばはるくまのさんのやまぶしぶつぼうしゆぎやうのそのためにおくまつしまへとをるなり山ぶしは十人にあまつて候こんや一夜のほいたうたべやつとよばはつてうちのけごをゑづかにみてとをるやゝあつてうちよりもよねのたはらをなげいだす小六きつと見てものゑのかどいでになわかつたるものをとおもひこしのかたなをひんぬいてかけなわはらりときつてすてよねをすこしとりあをのうはらにはしり歸て中のざしきにとうとゐて二のいきほつとつぐちやうはんこれを見てさていかにやげじた殿小六うけたまはつてゑものはいくらも候八十四のかはごを

きりどのわきにつんだるは只たからの山のごとし四十二ひきのさうだ三正ののりむまいづれもみなよきむまにて候四十よ人のひやうじのものゆみやなぐひ大だちをつとりそへようじんするていには見え候へどもれいのどうづきをあつるならばきやつばらはみなゑんのゑたへかくれうすむまもかはごもやす／＼ととらうするがこゝに大事のことが候ちやうはんきいていまにはじめぬやげじた殿の大事とはなにごとぞ小六うけたまはつてかたらばきこしめせいにしへはつれてもくだらぬ十六七のしよくわんが候が此わつばがいしやうのていそつとみたるところはいろゑろくじんじやうなるがはだにはどんきんをきて候きたるひたゝれはからぎぬをもつて地をば山ばといろに一はげざつとはひて十八五しきのいとをもつてものゝじやうすがぬい物をあり／＼とぬふて候まづゆんでのひぼつけにはいがきとりゐしやだんをぬいめてのひぼつけにはたけくらべにすぎを三ぼんぬふて

げんじのうち神主らはとが十二のかひごをかひそだてはぶしとはぶしをくいちがへばつとたつてはざつとおりまひあそびたるいはひのところをあり／＼とぬふて候うしろのさく／＼とちにはきた山殿のさんざうすみよしのすいびん御むろの御しよのけいきをあり／＼とぬふて候さてまたはかまのくだりにしくうせいぐわんをまなんでたうどのましも千びき日ほんのましも千びきたおどは大きくなればせいを大きくおもてをまろくぬふて候日本は小くくなればせいをちいさうおもてをあかくぬふて候たうど日ほんのまほざかひちくらがおきといふところにてたうどのましはにほんへこさんとす日ほんのましはたうどへこさんとすこさうこさじのかまのさうのところをばあり／＼とぬふて候さて又はかまのけまはしに岩にまつつるにがめいせきにかゝるかはやなぎおきのなみがとうとうつてさつとひいてゆくまほざかひをぬふて候きたるはらまきはけはもゑぎおどしなりよのつ

ねのはらまきはくさすりを八まいさぐるが此くさすりは十二まい十二まいのくさすりにまろがねこがねをもつてやくしの十二じんをいが／＼とあらはすさいたるかたなはみなこがねづくりなりとつつけさやくちにくりからふどうみやうわうのたきつぽへとんでおりけんをのうだるところをあり／＼とほつて候おもてのめぬきはふどうのたいうらのめぬきはくらの大ひたもんの御主たいをあらはすさげをにはほけきやうの七のまきやくわうほんを三ながれくんで候どもつたるたちは二しやく六寸か七寸かとおぼえたりせつぽもゝよせうんとうかかぶとがねまことのめぬきぞらめぬきせめしびひきいしづきかはさきにいたるまで上ぼんのこがねをもつてひかめきたつて見えて候きたるゑぼしは六はらやうのたうせいむきのつぶのちつとあらゝかなるを一くせみくせませひながたにあひをあらせくしがたをいが／＼と一ためためてひだりへおつたゑぼしなりびんのかみはち

ぢむだりまゆのけはかつたりきのふかけふかの山いで此わつばがありさまをものによくゝたとふれば木ならばしたんとりならばほうわうかねならばしやきんむかしをとるならばげんじのたいしやうたうせいやうをとるならばきよもりむねもりの御きんだちでましますがいふの中にくまれあづまときいて吉次をたのみておくへくだるとおぼえたりこのわつばがめのうちを只一め見て候がゆだんする物ならば三百七十よ人のぬす人のほそくびはたすかりがたくおぼえたりちやうはん聞てやけじたどのゝものがたりさらにきもさんせぬ事にて候さりながらそのわつばがなにともはやらばはやれいのちやうはんがばうをもつて只一うちのせうぶ候よ夜はなんどきぞ八つのころじぶんはよきぞはやうつたてやもつともて手でにたいまつをとほしつれあふはかの君のちやうのものぐわいにのゝめきたつてをしよするくまさかの太郎はどうづきをつとつてどうゝとあてたみ

なもときこしめしあは夜たうよとおぼしめしわざとおもてのまゝとみを二三げん取てゑんより下へなげおろしよするぬす人をいまやおそしとまちたまふくまさかの太郎はくろかはのどうまるきかみをばつとみだしなぎなたをひきずりたいまつをふりたて人はなひぞ只参れまいれやゝとげちをなすみなもと御らんじてきやつはくせものかなきらばやとおぼしめしはしりかゝつていかづちぎりとなづけてちやうときつて御らんずればむざんやな太郎はあへなくくびをうちおとされてくびはうちへころびければどうはそとへぞたをれたる

くまさかの四郎がいそぎはしりかゝつていかなふちやうはん太郎殿こそ手おふてましませちやうはんきいてやあいた手かうすでか四郎うけたまはつていた手やらんうす手やらんくびがうせてさうばこそちやうはんこのよしきくよりもむねんの次第かなそのわつばに手なみ見せんといふまゝに八しやく五寸の

さてもばうをばくきながにをつとりのべみなもとに
わたりあふみなもとは御覽じてちやうはんがばうを
ば一しやくをひてづんときり二しやくをひてちやう
ときつて手もと計のこされたり三百七十餘人のぬす
人みなもとをまんかにとりこめてひみづになれと
もふだりけりみなもとは御らんじてたまになれたる
ほうらいのとりふせいもかくやらんおどろくけし
きもましまさず大せいの中へわつていりにしからひ
がしきたからみなみくもでがくなわすもんじ八つは
ながたといふものにわたりたてをんまはしてさんざ
んにきつてまはる天はうすまひてちはあけにそめか
へれうがみづをゑくもをわけこくうへあがるごとく
なりいまだときもうつさぬまにくつきやうのぬす人
どもを八十三ざきりふせたりちやはうん此よし見る
よりもせひそれがし手なみみせんといふまゝに六し
やく三寸のさてもなぎなたみづくるまにまはひてみ
なもとにわたりあふみなもと御らんじおほくのかた

きに渡りあひほねはをつたりげにやちやうはんはあ
らてのむしやなり大なぎなたにてたゝき立られうけ
だちになつてきつ／＼とひきたまふちやうはんこれ
をみあはよきそとこゝろへすきまなくうつてかゝり
けり
さるあひだみなもとそうじやうがかけにてならひし
さても天ぐのほうは出あふところとおぼしめしきり
のほうをむすんでかたきのかたへなげかけ小たかの
ほうをむすんでわがみにさつとうちかけちやうとき
つて御らんずればむざんやくまさかまつかう二つに
うちわられあしたのつゆときえにけりそれよりもみ
なもととおくへくだらせ給ひて天下をおさめたまひけ
り

こしこえ

去程に判官おごる平家を三とせ三月にせめなびけ三種の神器ことゆへなく二たび帝都におさめ申剩平家

の大將大臣殿父子いけどつて天下の御めにかけてまつる彼義經を見きく人あつばれ弓矢の大將かなとほめぬ人こそなかりけれ有時よしつねさんだい有てそうし申されけるやうは彼大臣殿と申は平家によつてもよき大しやうにて候へばみやこにてもうしなはるやうもや候らんか様に申せばおほそれいりたる御事なれども一には御朝敵又はわれらがいへのかたきなれば關東の頼朝にくだしたび候はゞ家の面目たるべきよしをそうし申されたりければみかどえいらんましゝて其儀ならば大臣殿ふしとらするぞいそぎしゆゑして下るべし承ると申て手勢すぐつて三百騎みやこの中のかみゝにもさまゝの御いとまを申

殊更やはたの御神は當家弓矢のしゆごじんめでたき神にてましますとやはたの御山をふしおがみ五月七日のあかつきあは田ぐちをうちすぎておほうちやまを雲井のよそにながめこしせきの清水に着給へばおほいどの思ひつゝけてかくばかり

みやこをはけふをかきりのせきみつに

又あふさかのかけやうつさん

とくちずさみたまひさしていそがぬみちなれどもこまもうちでのしゆくにつく是やてんぢてんわうの大和の國をかもとの京よりも此ところにくつりみやつくりゑたまひし其きうせきをふしおがみ勢多のからはしうちわたりのちしのはらのしゆくすぎてくもりかゝらぬかゝみやまそのかみならのおきなかゝみやまいさたちよりてみてゆかん

年經ぬる身はおひやゑぬると

おひをいとひてよみたりし其いにしへのことの葉までおもひいだされてあはれなりゑち河わたればちど

りなくをのゝほそみちすりぱり山ばんばさめがゐかしはばらをちこちのたつきもゑらぬ山中におぼつがなくもよぶこどりふはのせきやのいたびさし月もれとてやまばらなるたるゐのしゆくを打すぎてはやくあつたにつき給ふかの明神と申はかけまくもかたじけなや天照大神の其ひとつにておはしますをはり第三の宮とは申ながらもをよそは日本第三の御かみにてましますと其時こそおほいどの判官に語り給ひけれなとなるみときくからにいそべのなみにそでぬらし參河の國にいりぬればはや八橋にかゝりはしのふせいを見給ふにいさごにねふるえんあうは夏をゑらでさり水にたてるとじやくは時をむかへてひらけり花はむかしをわすれずしておなしうにぞさきにけるはしもむかしの名なれどもいくたびかわたしかへつらんかげくらからぬ赤坂のしゆくにもつかせ給ひける是や大江のさだもとが當國のかみたりけるときにかのしゆくの遊君にふかきちぎりをこめたり

しがうきよのならひのはかなさは見はてぬゆめと成たりしあかぬわかれをかなしみてぼだいのみちをさとりけんゆかりおもへばしゆせうなりすゑをいづくと遠江はまなのはしを見わたせば南には海上まんととしてきはもなしきたには又こすい有人家きしにつらなつて松ふく風なみのをといづれものりのたぐひぞとうちながめ下るほどに大井川にもつき給ふ大臣殿御らんじて我よが世にて有し時かめ山の御かうの御ともしもみぢみだれてながれ出し清瀧川や大井川思ひいだしつゝなつかしやうきしまがはらよりもふじの高根を見あぐれば時ゑらぬ雪のいろ雲井にゑろくたなびきてふもとには東西へながく見えたるぬまの有あしわけ船にさほさしてむれいるかもめのころのまゝにかなたこなたへとびさるをうらやましくやおもはれけん大臣殿ふしともに思ひつゝけてかくばかり
えほちよりたえすおもひを駿河なる

身はうきしまに名をはふしのね

御子有衛門のかみも

我なれや思ひにもゆるふしのねの

むなしきそらのけふりはかりは

はらには玄ほやのけふりへん／＼とし風にまかせて
ゆくゑも玄らすまよへり伊豆のみしまにつき給ふか
の明神と申はむかしのうゐんがなはしろ水とよみた
りし歌のみちをなふじゆありゑんかんの天より雨く
だりかれたるいな葉もたちまちにみどりの色と成た
りしめでたき神にてましませばたのもしくおもひ申
なり來世にてはかならず九品のれんだいへむかへと
らせ給へやときせいを申させたまひつゝさがみの國
に入ぬればぎけいのためによろこびをきくがはの宿
とうちながめすゑはさかわのしゆくにつく判官むさ
しをめされ案内申さでかまくら入ぶれのいたりとぞ
んするなりひきやくを立鎌倉へあんないを申べし辨
慶承てこの儀尤玄かるべう候とていせの三郎よしも

りをもつてあんないを申されたりらいてう聞召れて
扱ぎけいがさかわまでくだりけるかやめでたさよこ
のかまくらと申は玄んさうの所にて見參どころ見ぐ
るしゝげんざむところをつくらせよわかひの津より
もざいもくをあげさせよかちばんじやうをそろへつ
つ急げいそげとおほせける梶原承てをつとこたへて
御前を立てこゝろのうちに思ふやうあさましや此き
み鎌倉ましまさばまつりごと玄きでうたいしきた
みのむねまでもみな此君の御はからひとなるべしさ
あらんときにかちはらがさかのいこん残てわれわ
れ父子ひきいだされてゆいのはまにてきられん事は
うたがひ更にあるまじそのぎにて有ならば先追かへ
し奉りより／＼ざんそを仕りこのきみうしなひまい
らせてうきよのなかをらく／＼とすまばやなんと思
ひければあんじすまして梶原は又君の御まへに参り
けりいかにわがきみきこしめされ候へけうとおんむ
の輩があふさかにかくれゐて世を亂らんとたくむよ

し風聞候關東には君かくて御座有都にはぎけいのけ
いごとましゝてこそ天下はおさまりめでたかるべ
きに一ゑんに關東に御座有ては天下を誰かしゆぐ申
さん頼朝聞召れて其ぎにてあるならばさねひらをつ
かはし大臣殿ふしをうけ取てぎけいをばみやこへの
ぼせよかちはら承て御前をまかり立土肥の次郎さね
ひらをちかづけ御身さかわへうちこえおほいどの父
子うけとつて義經をば都へのぼせ申され候へさねひ
ら承てあつばれこれほ一大事の御使かなとはぞむず
れともきみの御意とある間よしもりとうちつれさか
わのしゆくに參り此よしかくと申あぐるぎけいきこ
しめされていやゝ是はよりどもの御返事ともおぼ
えすれいの梶原がちうにて申とおぼえたり只かまく
らへをし下てかちはら父子がかうべをはね此あひだ
のむねんをなさんせむとこそおほせけれさねひら承
て御ぢやう尤にて候さりながらまづ大臣殿父子をば
かまくらへうつし御申有てしばらくこのところに御

とうりうなされよりゝ御せう候はゞ實平もかく
て候うへ能やうに申なすべしととかくなだめ奉りお
ほいどの父子うけ取てかまくらへうつし申されたり
其後又いせの三郎よしもりをもつて土肥の次郎して
申されけれども是もかちはらがちうにて心得とく
とく御のぼり候へと申つけて候に長々とりうめさ
るゝこそこゝろもとなく存すれ此たびのけしやうに
はいよのくに一ヶ國を申あづけたてまつる別してち
うのあらばをつて九國の御代官を申あづけ奉らんと
の御意にて候とよしもりをかへす吉盛やがてたちか
へりさかわのしゆくに參り此よしかくと申あぐるぎ
けいきこしめされてこはいかにきそよしなかをちう
りくせしよりこのかた平家を三とせ三月にせめなび
け三種の神器ことゆへなく二たび帝都におさめ申剩
平家の大將大臣殿父子いけどつて是までくだりたる
義經にいかにぎむしんありとても一度の對面はなど
かはなふて有べきぞ是もおもへばかげときがざんし

むによるなれば頼朝にうらみさらになしまつたくふ
ちうなきよしを諸寺諸社の牛王ほうゐんのうらをも
つて申されけれ共是もかちはらがざんそによつてか
なはずがいむねんに思召いかに武藏きくかとよ一
通の狀を書て參らせ頼朝の御めにかけ返事によつて
とも角もはからふべきにてはんべる也それ／＼むさ
しと仰ければべんけい承てすみすりながし筆にそめ
さうあん迄もなくし只一筆にぞ書たりける
みなもと^{とハミノ誤カ}のよしつねおほそれながら申上候との意し
ゆは御代官のひとつにえらばれちよくせん^{誤カ}の御つか
ひとしるいだい弓せん^{誤カ}の藝をあらはしくわいけいの
ちじよくをきよむちうしやうをこなはるべき處に思
ひのほかに虎口のざんげむによつてばくだいのくん
こうをもだせらる義經おかしなふしてとがをかうぶ
るこ^{もハアノ誤カ}うもつてあやまりなしといへど御かん氣をかう
ぶるあひだむなし　こ^{誤カ}うるいにしづむつら／＼事の
こゝろをあんするにざむしやのじつぶをたゝさずか

まくらへだも入られざればそいをのぶるにあたはず
數日ををくる此ときにあたつておんがんをはいし申
さずむばこつにくどうたいのぎたえずで宿運きは
まつてむなしきに似たるか將又せんせのういんを
かんするかかなしきかな此でうこばうふそんれいさ
いたんしたまはずば誰の人か愚意のひたんを申開か
んいづれの人のあひれんをたれられむや事あたらし
き申狀じゆつくわいに似たりといへどよしつね身體
はつぶを父母にうけはくたいの時節をへずしてこか
うのとの御他界の後みなしごと成はて母のふところ
にいだかれ大和の國宇多のこほりにをもむきしより
このかた一日片時安堵の思ひに住せずかひなきいの
ちを存すといへど京都のけいくわいなんちの間諸國
をるぎやうし身を在々所々にかくし邊土遠國をすみ
かとし土民百姓等にくくじせられしかるにかうけい
たちまちにじゆんじゆくして平家の一ぞくついたう
のために上洛せしむる手あはせにきそよしなかつたう

りくの後平氏はろぼさんためにあるときはがゝとある岩石に駿馬にむちをうつてかたきのためにいのちをうしなはん事をかへりみず又有時はまんくゝとある海中のうへにして風波のなんをしのぎ身を海底にしづめん事をいたまずかばねをげいゝのあぎとにかくしかのみならずかつちうをまくらとしきうせんをげうとする本意併ばうこんのいきどをりをやすめ申年來の宿望をとげむと思ふよりほか他事なし剰はよしつね五位の尉にふにんのでう當家のちうしよく何事かこれにしかんしかりといへどいまうれへふかふしてなげきせつなり佛神のたすけにあらずよりほかたじなしこれによつて諸寺しよしやの牛王ほうゐんのうらをもつて野心を更にぞむせぬむねを日本國中の大小の神祇めうだうをおどろかし奉り數通の起請文を書進ずといへどなをもつてゆうめんなし此國は神國たりしんは非禮をうけ給ふべからずたのむところたにあらず則貴殿廣大のじひをあふぎびんぎを

うかがひかうぶんにたつしひけいをめぐらされあまりなきむねをゆうせられはうめんにあづからばしやくせんのよけい家門にをよびながくゑいぐわを子孫につたへんよつて年來のしうびをひらき一期のあんゑいとくしゆせしめん事をつきす事のこゝろをあんするに爰につの國渡邊にてさかる立のいこんによつて義經けいしのなかからずやゝもすればひまをうかがひ折を得てよしつねをうたむとほつす猶もつてかなはざれば範ノ假借教頼の御てに付てさき立て關東に下着し頼朝にちか付たてまつりよりゝざんをいたすところそのいはれなきものなりほんゝのつみのうたがひをばかるくする共無實のつみのうたがひをば重くせよ理はばんみんのよろこび非は又諸人のなげきたりけんわうは一しんのために理をまげず先車のくつがへすをみては秘こうしやをそれをなせりかみすなほなればよハニ歟まもやすし水上すまざればかりうによつて月やどらず何ぞかぢはら一人に諸國のしよさ

ぶらひを思かへられむよりいそぎ遠島にはいりうせ
られ諸家のなげきをやめちうきんのいさみをなし給
へ誠惶誠恐謹言元暦二年六月五日進上因幡のかうの
とのへ義經はんと書たりし彼辨慶がひつせいほめぬ
人こそなりかけれ

ほりかわ夜うち

さるあひだはうぐわんあければさんだい申されたり御かどゑいらんましゝていくほどなくてしやうらくはこゝろもとなくおもへどもみかどをしゆごし申さばあふさかよりにし三十三がこくをたまはるとせんじをまかりかうぶつてほりかわどのにうつらせたまふかくてきんぐくりんぐくの大みやう小みやうくわんとうよりの御しやうらくとうけたまはりくんこうけじやうにあづからんともんぐわいにこまのはなゆるすことこそなかりけれされどもくわんとうより御ゆるされなきあひだをこなひたまふ事もなし四こくさいこくはみな此きみにおもひつき申しまこそかやうに御ざありともつゐには日ほんはんぐくの御大しやうにてましますといつきかしづきたてまつるこの事くわんとうにかくれなしかぢはらはやくき

きつけらいてうの御まへにまいりいかにわがきみきこしめされ候へすではや御ざうし御ゆるされなけれどもあふ坂よりにし三十三がこくをわがまゝなりとのたまひて四こくさいこくよりもくわんとうへまいるつはものをみやこにてをしとゝめたまふ此きみみやこに御ざあらばつゐには日ほんはんは此きみの御はからひとなるべきなりいたはしくはぞんすれども此きみをうちまいらせ御けうやうねんごろに御とひあれと申頼朝きこしめされてそのぎならばいそぎうちてをのぼせよかぢはらうけたまはつてたれをかうつてにのぼすべきあふこゝにくきあひてあり御うちのとさしやうぞんはこゝろもがうにちゑふかしやゝともすればそれがしにてきをなすあひてなりかれをうつてにのぼすべしかれをうつてにのぼするならばあんふかきものにてぎけいもうたれたまふべしたとひうたれたまはずととさをばつゐにうたるべしとさだにうたれてあるならばぎけいもほろび給ふべしり

やうてきながらほろぼしてうき世のなかをらく／＼とすまばやなんとおもひければあんじすましてかぢはらはしやくとりなをし申やうたれ／＼と申とも御うちのとさしやうぞんはこゝろもがうにちゑふかしかれをうつてに御のぼせあれと申らいてうきこしめされてあふさる事あり此もの十九のときいまだこんわう丸とありしときかうのとのゝ御とも申おほりのおさだがたちにて御さいごのかつせんにおさだがこどもそのかす人をほろぼしそこにてもうたれずしそのなをゑたるものなればかれをうつてにのぼせよかぢはらうけたまはつて御はんをたまはれおほせつけんと申らいてう御はんをいださせたまふとさがやどへぞつけにけるとさは御はんをたまはりあらあさましの事どもや日ほんがよつてせむるともやはかはうたれたまふべきざけいのうつてをとさ一人におほせつけらるゝ事御まへにひきいだされくびをきらるゝほどの事ぢたい申たけれども御ゐにもれてもしやう

ぞんがいのちいきてもかいあらじたとひのぼると此事をふかくつゝめといふまゝにむねとのつはものを八十三ぎそろへつゝかまくらうちをゑのびいでみちにていでたちけるやうはかまくらどのゝ御だいくはんにくまのへまいるといひろうしてかみからゑもにいたるまでじやうゑびざふりたちきせ一めがさにゑでつけさせよろひいれたるながもちにおはけたてしめひかせひきむまどものおがみにもゆひゑできつてつけさせわたるせごとにくりをかき夜を日についでうつほどにかまくらをいでゝ廿日にはみやこいりとぞきこえける五でうあぶらの小路にやどをとるとさはきこふるめい人にてまづおんなをかたらひ御しよのけごをぞみせにけるおんなははしりかへつていつつよりも御しよさまには御ようじんもましますよきおりからと申さてはおひこそめでたけれ明々日の暮ほどに是非におゐてかゝるべしつめかゝせたるこまどものすそをひやせといひければ承ると申てぎ

つしきどもがのりつれてか原おもてに打いで駒のすそをぞひやしけるかゝりけるところに大將のみうちなる伊勢の三郎よしもりは清水にまいりをまけるが河原おもてを見わたせばかふたる馬のきよげなるをのりつれてぞひやしけるよしもり是を見て都にては大將の御内にもか程の馬はなし東國方の大名の上洛にてありげなやとはばやとおもひたちより物をとひけるにつゝみてさらにあかさすいかさまこれはやうありげなとおもひとねりおほきそのなかにくちのきひたるとねりありかれがそばへたちよりてきたるかさをひんぬいでものをばとはずしてまづのつたるむまをぞほめにけるあつぱれ御むま候やつめかみのきりやうはかまくらやう候なをつさまむかふよこはたばりおくちそうとうつまぬのくさりしゝあひほねなみよめのふしあふつくりつげたるごとくなりあつぱれ御むま候やかほどにおほき御むまのなかにうりまななんとや候らんきやうがるかはりにひきかへてま

いらせんとぞ申けるとねりこのよしきくよりも御みいかなる人なればそいろにくちのきゝやうはあやしとぞとがめけるよしもりきひてちたいわれらがならひにてくちをきかではかなはぬわざきやうとゝ中をいへとしてむまをあきなひみをすぐるもとはたんばのくにのものゐはらのことうきことてくすりかひのはりつかひすそのちをもいだすべし御むまなんどや候らん御ひけいあれとぞ申けるとねり此よしきくよりもさてはくるしうなき人やこの御むまどもこそみやうゝ日のくれほどに大事にあはんす御むまて候へすそのちりをもいたすべしやどをたづねて御いりあれあふ御やどはいづくで候ぞ五でうあぶらの小路にてとさどのゝ御やどゝたづねて御入候へとさ殿と申はほうしの御みやう候か又ぞくの御なにてましますかとねりがきいてうちわらひけふこのごろわんとうにかまくら殿の御うちなるいほうぎほうとさばうとて三人のほうしむしやありとはくにゝかくれ

もなしゑらぬはいこく人かなとてから／＼とぞわらひけるよしもりきいてさほどあらんず大みやうのしやうらくまし／＼候にくに／＼ひろうなき事はそらごとかたとぞいふたりけるひろうなきこそだうりなれ大事のかたきをうたんためゑのびてしやうらくましませばさてこそひろうはよになけれ大事のかたきのたまふは天下の御かたき候かわたくしのしゆくい候かとさどの／＼御みにあて／＼なんでうかたきの候べきかまくらどの／＼御みにあて／＼うつべき御かたき候ようたれたまひてその／＼ちみやうじかくれよもあらじなむあみだぶつと申ければよしもりともにねんぶつしさてはぎけいの御事とき／＼すましつ／＼よしもりは堀かわの御しよへぞまいりけるきみの御まへにまいりいかにわがきみきこしめされ候へとうごくのとさばうがきみのうつてにまかりのぼりたるよしを申はうぐはんきこしめされてよしつねがうつてにとさなんどをのぼせらるゝ事たうらうがをのとつてり

うしやにむかふがごとしゑこくうつしてかなふまじいそいでつれてまいれうけたまはると申てとさがやどへたづねゆきあんない申さううちよりたそとたふるいやくるしうも候はず大しやうの御うちなるよしもりなりとぞこたへけるしやうぞんきひてさればこそ人のみ／＼はかべにつきまなこは天にかけるとはいまこそおもひゑられたれゆふべついたるしやうぞんをたれやのものがまいり御しよにてかくと申つらんたいめんせではかなふまじこなたへつれてまいれうけたまはると申てよしもりをでいへしやうすや／＼ありてしやうぞんは大びやくゑにびやくだんしわたぼうしにてひたいをつ／＼みわつば二人にてをひかれいていへよろぼひいでよしもりがたいぎにどうどゐていかによしもりひさしく御めにかゝらず候それがしがたいいまのしやうらくべちのゑさいにて候はすくわんとうのきみの御いれいもつてのほかにまし／＼ていづはこねみしまわかみやのほうへいは中／＼申

ばかりもなしことにとりわき候て人かすならぬしや
うぞんはみつの御やまの御だいくわんをたまはりく
まのへまいり候がせいのこりみづにまみぎやうぶこ
ころにまかせず候へどもかゝる御きたうのおりふし
いれいと申せばくわんとうへのきこえをもそれとぞ
んじゆふべしやうらくつかまつりくわんとうよりの
御じやうなんどの候をもつてまいらんとすいぶんぞ
んじて候へどもいれいもいまだすまざればふさん申
ところおもひのほかによしもりの御めにかゝる事こ
そなによりもつてしうちやくなれなにさま御しゆを
申さんと三々九どぞまゐたりけるしゆもなかばと見
えしときしやうぞん申めんくの御中へいなかづと
のありけるをとりこしぬとぞんするなにかある御め
にかけよ承ると申てくらぐそくをぞひいたりけるし
やうぞんこれを見てあらみぐるしのくらぐそくやむ
まにそへてはなどひかぬぞかねて申せしよしもりの
れうの御むまはこしらへたるかうけたまはると申て

くろつきげなるめいばの五きにゆりたるをやどの小
にはへひきいだすさにひきたるくらぐそくまのま
へにてとりをかせ此あひだのなかたびにつめをかゝ
せてぞんすれどもこれにのつて御かへりあれ御しよ
とテ脱スルカ
さまの御きげんをばばんじはたのみたてまつるとま
ことしらかにたばかりければさけにはたけきをにが
みもとらくるならひなるあひださしもにたけきよし
もありもやすくとたばかりな事に事もか事をも御
しよさまの御事をばよしもりかくて候へば御ころ
やすくおぼしめせ御ざいきやうのあひだはかさねて
まいり候はんといとまをこふてよしもりはほりかわ
の御しよへぞまいりけるきみの御まへにまいりとう
ぐくのとさばうはかまくら殿の御だいくわんくまの
へまいると申くまのまいりのだうしやなればさしも
をかせ給へかしわがきみと申はうぐわんきこしめさ
れていやく日ほん一のよしつねをうちにのぼりた
るくせものにて萬事にきよくをかへいかさまにもよ

しもりはしやうぞんにかたらはされたとぞんする
本ノマ、
 いぶしう候御たちあれけうこうたいめん申まじいと
 御ぎをたゝせたまへばよしもりはときのめんぼくを
 うしなひひきでものこそかたきよとてむまをばおが
 みをきつてかはらおもてへをつばなしくらぐそくを
 ばやいてたゞ一人きつて入しやうぞんとさしちがへ
 てゑなんとこそくるひけれそのゝちべんけいをめさ
 れいかにむさしとうごくのとさばうがよしつねがう
 つてにのぼり五でうあぶらの小路にあるときくいそ
 ぎつれてまいれまいれといふにまいらずばくびをき
 づてまいれべんけいうけたまはつてあつばれこれは
 一大事の御つかいかなとはぞんすれどもさりながら
 あんのうちとおもひ一まどころへつつと入どうまる
 とつてうちかけうわおびゆつてちやうどゑめ一しや
 く八寸のうちがたなを十もんじにさすまゝにくろき
 むまにゑろきくらをかせひきよせゆらりとうちのり
 わつば一人あひぐし土佐がやどへつつとゆきこまを

かしこにのりはなつておちゑんにずんとあがり事の
 やうをきゝければしやうぞんはよしもりをたばか
 りおほせいまはとゆるすこゝろにておんないろごの
 みなみすゑてさかもりなかばときこふるべんけいあ
 ひのしやうじをさつとあけすいぶんしやうぞんのう
 しろをそしらぬむさしめにてよきときすすゐさん申た
 りなにさま御ゐのとをりをまぢかくまいりて申さん
 と大せいのつはものをのりこゑとをつてとさが
 たいざにとうどゐてめての小うでをむずととつて申
 せとの御ちやうの候いれいときこしめされてもりに
 むさしをまいらせらるはやゝ御まいり候へとこが
 いなとつてひつたてゝぢゝめかひてぞいでにける大
 せいのつはものどもそばなるうちものをひつたをし
 をしはいきもとをくつろげすでにたゝんとゑたりけ
 りとさは此よし見るよりもてごめにはせられつかな
 ふべきやうあらざればやあなにをさはぐぞわどのば
 らいまにはじめぬむさしどのにてじやきやうことな

くましますぞまばらくそれにてさかもりせよやがて
かへらん人々とやどの小にはにいでにけりとさが
らうどうついでいであれまで御とも申さんとわれ
もくとすゝみけりべんけいこれをみてきやつばら
にすゝめられかなふまじいとぞんすればやあめしも
なきにすいさんしてむさしめうらむなかつと大
のまなこににらまれてすこしひらむそのひまにとさ
がよはごしむすとだきくらつぽにどうとをきわがみ
もやがてとびかゝりうしろむまにうちのりゆんでに
てしやうぞんがはかまのきぎはむすとりめてにか
たなぬきすかしさもあれ御へんはいれいしてぎやう
ぶこゝろにまかせずとうけたまはつて候がおもひの
ほかにひきかへておんないろごのみなみすゑてさか
もりまたまふあやしき何事にのぼりたるぞしいし
ゆをのこさずはやかたれいかにとといひければと
さはきこふるめい人にてあふこゝにて御へんとそれ
がしがもんだうたいけつしたればとてりひをわくべ

きなかでなしとても御せんへまいるうへあれにてし
いしゆを申べしまばらくまでやむさしとてこまをは
やめてうつほどにほりかわの御しよへぞまいりける
もんぐわいにこまうつすゑてはやまいりたるよしを
申あぐるはうぐはんきこしめされてさすがにしやう
ぞんはかまくらどの、御だいくはんにくまのへまい
ると申すくまのまいりのだうしやなればまぢかくめ
せとの御ちやうにて中もんまでめされさぬきゑんぎ
をなげいだすおめすなをりしきだいしかうべをちに
つけせきめんすはうぐわん御らんじてめづらしやと
さばうげにやらんなんぢはよしつねがうつてにのぼ
りたるとなせいはいか程もちたるぞいづくにかくし
おきたるぞありのまゝに申せいつはるけしきのある
ならばまつたくそこをばたゝすまじいぞやあいかに
との御ちやうなりしやうぞんうけたまはつてさん候
それがしがたゝいまのしやうらくべちのまさいにて
候はすせんどうしもりへも申あぐるごとくくはんと

うのきみの御いれいもつてのほかになし／＼て伊づはこねみしまわかみやの御ほうへいはなか／＼申ばかりもなしことにとりわき候て人かすならぬしやうぞんはみつの御やまの御だいくわんを給りくまのへまいり候がはやらうたいにまかりなりせいのこりみづみにまみぎやうぶころにまかせず候へどもかゝる御きたうのおりふしいれいと申せばくわんとうへのきこゑもおほそれとぞんじゆふべしやうらくつまつる御ことづての御じやうなんどの候をもつてまいらんとすいぶんぞんじて候へどもいれいもいまだすまざればふさん申ところにおもひのほかによしもりを御つかひにたまはるきみの御いくわうにをそれ申しれいもすこしとりなをしかみそりしやうじつまつりまいらんといでたち候ところにいまにはじめぬ五でうの女いろこのみさけもたせかどいでいはひ候ところへあのむさし殿御いであつておさへてつれて御まいりあるくわんとうよりの御じやうなんどの

候をもつてまいらんとぞんじ候へどもをくびやうしごくのくわじやばらどもにてむさし殿の御いせいにをそれ申かなたこなたへにげさつてどうてんのあひだとりまぎれもつてまいらず候しよじのまだいをばよしもりとむさしどの、御らんせられ候うへしきよくはゆめ／＼候はずとまことしらかにたばかりければ日はん一のよしつねも二さうをさとるべんけいもまさるとさにはたばかられげに／＼それはさぞあるらん見えたる事もなきものをきつてするはむざんなりげになんぢすごさずはしやうじつゐでにきしやうをかけゆるすべしとの御ぢやうなり正尊うけたまはつて中々御ぬならばたいまつかまつらんと申はうぐわんきこしめされてそれ／＼むさしとおほせければべんけいうけたまはるとくまの、午わう一まいにすゝりをそへてぞいだされけるとさはきこふるぶんじやにてまひつにかふこそかいたりけれうやまつて申天ばつきしやうもんの事かみはぼんで

んたいしやくゑもは四大天わうゑんまほうわう五だ
うのみやうくわんげかいのちにはいせてんせう大じ
んをはじめてまつりゆやはくさんきふせんわうじ
やうのちんじゆいなりぎをんかもかすが八はたは正
八まん大ぼさつまつのおひらのむめのみやそうじて
ゑんぶだいのうちのうせいむせいかうかうたんのま
うりやうきじんきゝいれなふじゆたれたまへこんど
しやうぞんがきみのうつてにまかりのぼりたる事は
候はず又わたくしのしゆくいさらに候はずもしいつ
はり申て候はいたいま申おろすゑんばつみやうば
つをしやうぞんが四十四のつぎめ八十三のわうく
ごとにかかりかうぶり候てこんじやうにてはしやう
ぞんがゆみやのみやうがながくすたりらいせにては
むけんのをこにだざいしやうがうがかぶよさらに候
まじいよつてじやうくだんぶんぢうはんねんう月廿
日ふぢはらのしやうぞんはんとかきたるはさてみの
けもよだつばかりなりはうぐわん御らんじてきしや

うのおもてこまやかなりしんりよにまかせてかへす
ぞはやかへれとの御ぢやうなりしやうぞんわがやど
にかへりいへのこらうどうをちかづけさればゆみと
りはとにもかくにも物をかくべきものなりしやうぞ
んもんまうなりせばやたんの御めに二たびかゝる
べきかあつばれほうしよきほうしとそゝろにみをぞ
ほめにけるさりながらほりかわどのゝあんないを見
おふせぬるこそうれしけれゆふさりの夜はんにせひ
におゐてかゝるべしなごりおしみのさかもりせよう
けたまはると申てたりはらとうかうをかきすゑまふ
つうたふつさかもりするよは何どきぞ八つのころゑ
ぶんはよきぞ人々はや打たてやもつともて手々に
たいまつともしつれほりかわ殿へをしよせみなみの
もんをうちやぶつて大にはさしてみだれいるさても
そのよ御しよさまには御ようじんもましまさず十二
人のおもひ人をめされ夜とものくはんげんなりか
かる御あそびのおりからとのばらたちはむやくとて

みなくやどへぞかへされけるむさしばうべんけい
もきたじらかわにやどありてわたくしにかへりてい
ざりけりたまくありあふものとはねうばうたち
に中る人さてはじよしよくのものばかりくうた
てかりけるゑぶんかなみなくしゆゑんにくたびれ
せんごもゑらすふさせ給ふそのなかにゑづか御せん
ばかりこそよひの間にゑらぬねうばうのけごを見つ
るとあやしめゆめもむすばすまどろまでまちかくる
ところにあんのごとく夜うちうんかにみだれいるさ
ればこそとおもひぎけいの御すがたを見たてまつれ
ばせんごもゑらすふさせ給ふなふくとおこし申せ
ども御返事もましまさずゑづか心におもふやうげに
たけきゆみとりはものゝぐのをとおどろきたまふ
ときゝつるものをとおもひ御きせながをとりいだし
まくらがみにぎつくとをくぎけいかつばとおどろき
あらこそうどうしやゑづか御せんなに事やらんと
おほせければゑづかうけたまはつて夜うちの入てさ

ふらふにおきあひたまへと申ぎけいきこしめされて
夜うちといはんのことくしくしやうぞんにてある
なんなにほどの事のあるべきぞよひのくわけんにあ
まりくたびれまづゑばらくやすまんとの給ひて又こ
そやすみたまひけれゑづか見まいらせなふすでにま
ぢかくまいるなりおきあいたまへと申すぎけいかつ
ばとおどろきさらばきせながまいらせようけたまは
ると申て御きせながをたてまつるゆんでのこてをさ
したまへばめてをゑづかまいらするめてのすねあ
てゑたまへばゆんでをゑづかまいらせけりはいだ
てとつてをしあつればものゝぐのわたがみつかんで
ひつたてくさすりながにぎつくとめすうはをびゑむ
るそのひまにかたなをとつてまいらするさやがらみ
したまふまにたちをとつてまいらするおびとりゑむ
るそのひまにかぶとをとつてまいらするゑのびのを
をゑむるまにゑびらをとつてまいらするかけをゝと
どむるそのひまにゆみをばゑづかをゑはつてすびき

つるをもちやうどしてぎけいにこれをまいらせけり
ぎけいこのよし御らんじてあつばれゑづかはゆみと
りのおもひものやとの給ひてすでにすゝんでいでら
れたり

ゑづかもつゝいでにけりぎけい御らんじてささ
うなりゑづか御せんゑのべ／＼とおほせけれどもみ
みにもさらにきゝいれすまつさきにこそすゝみけれ
すゝむすがたを御らんすればもゑぎにほひのはらま
きをきぬのゑたにぞきたりけるぎけいのひさうのゑ
らゑのなぎなたゆんでのわきにかひこふでたけなる
かみをばつとみだせばくろほろやらんと見えたりけ
りぎけい御らんじてあらおもしろのかつせんや四こ
くさいこくのたゝかひにもかほどおもしろきいくさ
はなしとても事の事にてあるならばにはへいでゝのあ
そびこそはなとてうとのみだれあし見てこそこゝろ
はすみ候へやあこなたへこよゑづかとしてにしのこ
にはにいでたまふころはいつぞのころぞとよ文じぐ

わんねんう月廿日の夜の事なりとうくわはまつにか
かりていろ／＼のさうくわはかたきのひにいろをま
すらんでんしたるありさまはにゑきをさらすごとく
なりいけのみぎはにのぞむときゑづかゝすがたはは
なにていまだあきにてあらねどもをみなへしかと
うたがはるぎけいなかざしがつてやさきにかたき
はきらふまじうけて見よとのたまひてさしとりひき
つめさん／＼にこそあそばしけれおもてにすゝむつ
はもの十七八きはらりといられすこしやごろをひき
ゑりぞくぎけいゆみやをなげすて御はかせひんぬい
てきつていでさせたまへばゑづかもつゝいてきつて
いで二人のひと／＼のこゝをせんどゝきりたまへば
くつきやうのつはものを三十三ぎきつておとしたま
ふのこるつはものは風に木のほのちるやうにむらむ
らばつとひいたりけりよしつねゑづかゝてをひいて
おちゑんにつつとあがり事のやうを御らんすればて
おひゑにんのふしたるはあふさんをみだしたぐくな

りかゝつしところに大しやうの御うちなるいせの三郎よしもりはきみの御ふしんかうぶつて七でうしゆじやかにありけるがようちのよしをうけたまはつてどうまるとつてうちかけうはをびゆつてちやうとゑめ一しやく八寸のうちがたなを十もんじにさすまゝに三しやく八寸のいかものづくりのうちものをするりとぬいてうちかたげもみにもうでぞはしりしがほりかわどのにつきしかばみなみのもんにつつたつて大をんあげてよばはるやうこんやのようちの大しやうはとさばうにてましますかかう申つはものをいかなるものとおもふらん大しやうの御うちなるいせの三郎よしもりなり御みゆへにそれがしきみの御ふしんかうぶるうへてなみのほどをみせんとておもてもふらずきつていとさがらうどうどもしうをかたきにうたせじとまんなかにとりこむるよしもりこのよし見るよりも大せいの中へわつていりにしひがしきたみなみくもでかくなは十もんじやつはながたとい

ふものにわりたてをんまはしてさんくきにきつたりけりくび二つとつて大せいにてをおふせとうざいへばつとをつちらしきみはいづくにおはしますよしつねこれにひかへたりこれへくゝとありしかばうけたまはると申ておちゑんにづんどあがつて二つのくびをさしあげぎけいにこれをみせ申すかのよしもりがふるまいはたゞはんくわいもかくやらんよしつねかたさにいきをつがせてかなふまじいとたたまひて又きつていでさせたまへばゆんでにゑづかめてによしもりがすがりつき申しまはむさしもかたをかもくま井もげん八もさだめてまいり候はんと申もあへずもんぐわいに人のよばはるこゑはかすかなりむさしがひとつのふしぎにうまれつきたるすいさうありことのあらんとてはむなさばぎゑきりにしひだりのてをだにかきぬればはやことありとさとりをなすがいまことさらこのすいさうのゑきりなるにより候てほりかはどのになに事か御ざあるらん見てま

いらんといふまゝにどうまるとつてうちかけうわお
びゆつてちやうど煮めれいの大だちさげはいてよる
はつゑこそよけれとてばうをもつてぞいでたりける
せつなが間にほりかわ殿にはしりつきもんぐわいを
みわたせばあんのごとく夜うちうんかにみだれ入た
だものにてはあらじしやうぞんにてぞあるらんされ
どもかれはきこふるつはものなればもしきみやうた
れたまふらんとこゝろもとなくぞんじよばはるこゑ
にてぞ候ひけるぎけいきこしめされてむさしかやあ
これにありとの御ちやうなりべんけいうけたまはつ
てさてはこゝろやすく候かくあるべしとごしたらば
なぎなたもつてこふするものもちもならはぬばうを
ついていかゞせんされどもむさしうまれてより此か
たばうにて人をまだうたず人のもつほどにうらやま
しさにこしらへたりかのむさしがばうと申はあらし
はげしきかうざんのいはまよりをゑいでたるゑらつ
げを八しやく五寸につゝぎつてなかをあつくはしを

ひらくとうかいわたるふなるなりにこしらくしさう
かねをのべつけはむねをやつてやいばをつけ八しや
く五寸のそのうちに八十三のいばをすゑくぎのかし
らを見がきたてはざまをくろくぬつたればいばはか
かやくちはくろしやいばはゑろし物によくゝたと
ふればひとへにつるぎひしほこてつちやうなんどの
ごとくなりかゝるめいよのばうついでみなみのもん
につつたつて大をんあげてよばはるたいまこゝも
とにすゝみいでたるつはものをいかなるものとおも
ふらんめづらしからぬむさしばうべんけいなり夜う
ちの大しやうにげんざんせんやつとぞよばはりける
かゝりけるところにあらいがわのよろひきひおとし
のそでつけながふくりんのたちはいて三日月のごと
に一そりそつたるなぎなたをひらりくるとまわい
ておもてもふらずきつてかゝるべんけいこれを見て
むさしとなのるにをこのけなくもかゝるはたゞもの
にてはあらじみやうじをなのらせきかばやとおもひ

たいいまこゝもとにすゝみいでたるつはものはたう
かかうけかみやうじをなのれきかんといふみつかげ
きいてぢたい夜うちのならひにてなのるほうはこれ
はわたくしならぬ夜うちなればゑんでもめいよをせ
んためむつのくにのぢう人にあねばのへいじみつか
げとしつもつて二十六八十五人がちからなりむさし
殿のてなみのほどをうけてみると申べんけいきゝて
さてはなんぢはしやうぞんがらうどうよなんぢが
しうのしやうぞんをだにもあはぬかたきとぞんずる
にそこをひけとぞいふたりけるみつかげきいてはら
をたてさしもかくれなきむさしどのゝ御ぢやうとも
おぼえぬものかなよにある人をたのむはみなゆみと
りのならひせんぢやうにてのぞくしやうだてさらに
きかれぬ事さうよこゝろのがうなるものをこそむし
やとは申候へいやしきものゝうつたちは世にある人
の御みにたつやたゝすやうけて見たまへむさし殿と
いふまゝになぎなたのいしづきをつとりのべべんけ

いがひぎのあたりに小風をふかせさり／＼とない
だりけりべんけいこれをみてあつ事なしとおもひば
うをにはへさしおろしいしづきをおどらせ本のはが
へしといふてをいだしすそをはらつてすねあてのは
づれをくびやうがねまねきのいたばうのいしづきか
らりとあてやゝともすればみつかげはあふうたれつ
やうにぞ見えにけるさるあひだみつかげもなぎなた
は一てならふたりばうにあひては大事のものあしが
きかではかなはぬわざいかにもかたきをなぶりたて
ひらまんところを一たちとこゝろのうちにぞんずれ
ばかたきがかゝればとびゑさるなぎなたのきつてに
はこむてなぐてひらくてうしろをきるはなかりさ
ざなみぎりにみづくるまきりこみわきこみたゝくや
みうちすてがたなずいぶん大事のひしよのてをのこ
さずこそはつかひけれべんけいあまりのやさしさに
ゑばらくうたであひしておもしろいてをやつかふと
めをすまひてぞ見たりけるされどもいまはむさしに

てノ字脱スルカ

ましひ事とおもふてもなければいつまでをゐてつみ
作りにいとまとらするさらばとてばうのいしづきを
つ取のべおがみうちにもやうどうつかぶとのからく
りはらりとくだけ落花のごとくちりければ首の骨が
うちこまれてどうへとつとぞに入たる五十四郡に
かくれもなきあねはの平次光かげも武藏坊が手にか
かりみちんに成てぞ失たり

のこるつはものこれを見てむさしばうにてあればと
ておにがみにてはよもあらじもらさずうてやもつと
もとてまんなかにとりこむるべんけいこれを見てば
うのいしづきをつとりのべ八ばうをさしからんで一
はうへをんむけひしほことをしやすづきさてくしざ
しといふものにさしつなぬいてゑいとなげてやなぎ
さくらまつかゑで四ほんかゝりのにはのうちくるり
くるりと追めぐりいけのみぎはのたゝかひにさんて
うすいてうけたてつゝげんざんどころたいのやちう
もんめんろうとをさぶらひこみ入つこみだいづむさ

しがばうにあたるものいきてかへるはなかりけりか
まくらにて正ぞんは一きは十き十きは百きにむかふ
ほどのつはものを八十三きそろへしがたゞ十七きに
うちなされゆきがたゑらずおちにけりむざんやな正
ぞんもからゝゝいのちたすかつてかはらをさしてお
ちけるをよしもりとべんけいがあとをもとめてをつ
つめてからめてつれてまいりけりぎけいこのよし御
らんじてくまのまいりの正ぞんになはをかくるはも
つたいなしいかにくゝとありしかば正ぞんちつとも
さはがするだけだかにのびあがり大をんあげて申や
うめいはぎによつてかろしいのちはおんのためにた
てまつる頼朝の御ためにすつるいのちはおしからず
きみにもくしとおぼすなよとくゝいとまたびたま
へぎけいふびんにおぼしめしあつがうなりや正ぞん
たすけたくはおもへどもなんぢ二くんにつかへじさ
らばいとまとらせようけたまはると申て六でうがは
らできりにけりかの正ぞんをみし人きせん上下をし

なべかんせぬ人はなかりけり

四國落

さるほどに判官だいを退出まし／＼て堀川殿に御下向有武藏をめしておほせけるはみかどのせんじををかうぶるうへ義經みやこにあらん事いちよくの玄んとぞんするたびの出立をかまへよ辨慶承りむねとの人々二百餘騎すぐり都の内を出させ給ふ十二人のきたのかたも御供なりとぞ玄たはせ給ふぎけい此よし御覽じていかなる事ぞすではや關東よりのふけうの身に候へば天にごうのあみをはり地にさかもぎの關をすへいづくにても義經がうたれん事は治定也さあらんときはなかく御前ぐそくし奉りそこともなき遠島にすてをき中さば義經が跡のゆみ矢のきずたるべした／＼とまり給へとよ十二人の北のかた此よしをきこしめしたとへりうたつ山のおくしで三津のかはなり共にこころればうかるまじといま

るまじの都やとてさきにぞたゝせたまひけるぎけい聞召れてあふ玄たふもひとつだうりたれをたのみてまつらひめみやこにとゝめをくならば道のさはりとなるべしきれどもきられぬあひよくのうき身のさはりこれ也とて二百餘騎の人々は御こしをなかに取こめてなみだとともにたち出る是やゑんぎのせいだいにいへをはなれて三四月落るなみだは百千行萬事は皆夢のごとしより／＼ひさうをあふぐとゑいじ給ひしきうせきと今のぎけいのはいるのたびすがたはいづれがはるとも思ひはさながらひとつなり末は山崎たから寺かうないかちおりすぎければ玄どもどろにらんもむじあらむづかしやあくたがは牛島瀬川はんせうじみのをやまのこうえうにこゝろのとまる折節又うち出ればにしのみやなんぐうの御前のおきのあらゑびす松ばらどのゝ御さんさうむかしこひしとうちながめかすむうらぢはすみよしかきりのひまより松見えてなみにたゝゑふあまをぶねこゝろ

ぼそしと打ながめはや大物のうらにつく辨慶申けるやうはこれより西國へのたびのみちなむじよがんせきにて御こしのかち路ゆめ／＼かなひ候まじこれより御ふねにめされ四國にわたり伊與の河野を御たのみ有あれにゑばらく御座あり世のありさまを御覽せられ候へ四國九州一ゑんに思ひつき申さば十萬餘騎は候べしその大勢をそつし都へせめてのぼりざんしむのともがらを御こゝろのまゝにほろぼしなどか御代にたゝせ給はで候べき義經きこしめされてさらば船を用意せよ承ると申てむねとの大船八そう十二人の北の方の御供の人々二百餘騎おもひ／＼こゝろごころにとりのりをひてのかせをまつほどに日ものどかなり出せよとともづなとひてをしいだすまことに順風はよかりけり二時計の事なるにをとにきこえたる和田のみさをこゝろぼそくもはしりすぎ弓手を見ればゑしまがいそめては明石の人丸のあめのふる夜もふらぬ夜もかせのたつよもたゝぬよも島がく

れゆくあまをぶねこゝろぼそしとうちながめ尾上たかさこ過ければむろのおきにぞつきにけるぎけいおほせけるやうはいかにや水主梶取こゝかしこの津どまりにて中々ふねをよするならばゑせんのことありぬべし順風よくばたゝすぐに四國へわたせとおほせけり承ると申てかちとりなをし御座船を四國をさしてをし渡すかゝりけるところにさぬきのやしまのうへゝりも黒雲一むら立て悪風こそおこりけれ水主申けるやうはいかさま悪風のおこらんやらんくもの氣色らんとんしうみのおもてどうようしゑらなみせがいであらひいかゞはせんと申ぎけいきこしめされてそれがしもさ存る去年やしまへむかひしとき渡邊よりもふねにのりをしいだしたるかざやもにちつともちがはぬけうあひなり船をよく乗用意せよ夜ふねにならばこのふねいかさまかせにさそはれてふね人ともにうせぬべしたとひ風がはげしく共にちうをさひてやつて

見よなをしもかせかはげしくばきなかほかけてはし
らせよそれにもかせがふきこはらばほばしらばかり
でやつて見よおもかちをつよく取とりかちをよはく
とりわいろをたてけしきをみて四國をさしてやつて
見よかんどり共とぞおほせける承るとは申けれども
能程のかせにこそ思ふさまにはあつかはるれ此あく
ふうと申はつの國むこやまおろしきの國の岩山おろ
し四國の玄ろみねざむよりもおこつたる惡風にてへ
い／＼と玄たるうみのおもてに俄にたにみね出來て
玄らなみせがひをあらふなりすいしゆ梶取ろかひと
るべきやうはなし十二人のきたのかた近所從、借字の人々は
ふなどこにひれふしてきながら前後をわきまへずか
かりけるところに四方より惡風がもみあはせてふく
かせにはばしらふたつに吹折て八そうのもやひのつ
なが一度にはらりとされたりけり風にとられてふね
共がおもひ／＼におとさるゝ四國へおとす船も有西
國へおとすふねも有とさのみなとへおとすもありあ

るひはもとの明石なだひやうごのおきへおとすもあ
り八そうのふねどもがみなちり／＼になりにけりあ
らいたはしや大將のめされたる御座ふねには十二人
の北の方御供の人々三十人あらしきなみにはあてられ
つさながら前後もわきまへずやう／＼のこる人として
は義經辨慶只二人ふねの前後をあつかひてかせにま
かせておとさるゝ心ざしこそあはれなればんけい申
けるやうはそれ風は龍王の出し給へるいきとして時
のふしぎをなし給ふにたからをまづめて御覽せられ
候へさらばたからをまづめんとて十二人のきたの方
のかさねの小袖くれなるのちしほのはかま判官のこ
がね作りの御はかせ海底にまづめたまひけりもとよ
りもこの人々てらそだちのがくしやうにて法花經の
一の巻をときうつるほどこそじゆせられけれまこと
にりうわうも御なふじゆやまし／＼けんなみかせず
こしまづまればふねはこなみにゆりすゆる又八島の
うへよりもからかさほどなるひかりものが七つ八つ

とんできて惡風こそおこりけれ辨慶これをみて只事
ならずとおもひふなぞこへつつと入ときんすゝかけ
うちかけふねのへいたにつつたちあがりだいをんあ
げてよばはるたゞ今こゝもとにすゝみいでたるつは
ものをばいかなる者と思ふらんをのゝたかむら右大
臣が末孫田なべのべつたうたんぞうが嫡子生るゝと
ころは出雲の國枕木のさとそだつところは三條京極
がくもんするは天台山あくまがうふくの貴僧と生れ
本^ノ風はりうわうのいだし給へるいきとしてときの
ふしぎをなし給ふにしんぞき給へといふまゝにいら
リニアラズ
たか數珠をとりいだしさらゝとをしもんで東方に
はがうさんせみやうわう南方にくだりやしやみやう
わう西方に大いとか明王北方こんがうやしや明王ち
うわう大しやう不動明王けんがしんしやほつぼだい
しんもむがみやうしやたんあくしゆせんちやうがせ
つしやとくだいちゑちがしんしや卽身成佛とこのま
むごんのひみつにてくろけふりをたてゝいのられた

まことに龍王もさてもあくりやうも御なふじゆやま
しゝけんなみ風すこしまづまれば船はこなみにゆ
りすゆるかゝるきざみに平家のあくりやうたちその
かずゆしゆつせられけれども辨慶にかぢせられ皆海
底にいり給ふあかつきがたの事なるにそこもなき
遠島にともし火がほのゝと見ゆるぎけい御らんじ
て里ちかき浦なればこそ火は見えて有らんとあの火
をたよりにこのふねをこぎよせとの御誕なり承ると
申て火をたよりにこぎよせ見れば八十餘りなるらう
おふのつりをたれてぞゐたりけるぎけい御覽じてい
かにやせうとの此うらはいづくの國いかなるうらに
てあるやらんと御たづねありければおきなうけたま
はり其返事にはをよはずふねほとゝと打ならし一
しゆはかうぞ聞えける

ゐさり火のもしほのけふり風にきえて

ふきあかしたるおきの一むら

義經聞召れてあらおもしろや誰か此うたのこゝろを

知たる人の有やらんと御たづね有ければいづれも船
ごゝちにて前後もゑらす見えさせ給ふ十二人のおも
ひ人のなかに静御前ばかりこそふねにはゑはざりけ
るがすゝみ出て申さるゝあらうれしやこのふねえん
らはくさいしんたむとやらんへもおとされても有や
らんとこゝろもとなく思ひしになふいまはや安堵
にてさふらふぞされはおきにあなたのみやうあり
よし共申あしともいへり村といふは里の名そのうへ
ふるき歌にもゐさり火と云事はなにはいり江によせ
られたりいかさま此うらはつのくにのあしやのうら
の事やらむなふ我きみと申けり義經きこしめされて
それがしもさぞんずるいかにやせうとの此うらは津
の國あしやの浦かさむ候扱せうどのは此うらの人か
いや住吉のかたのものなりとてけすが如くにうせさ
せ給ふ扱はうたがふところなしたつみのみやうじん
の義經をあはれみてをしへ給へるたつとさよとうし
ほで手水うがひしてそなたをらいし給ひけりさるあ

ひだ御座ふねをあしやのうらへをしよする彼浦の國
氏あしやの三郎みつゑげふな子にあふてとふた船子
こたへて申さん候是はかまくらどのゝ御舍弟太夫の
判官義經西國下向ましますが惡風にふかれこのうら
によらせ給ひて候と申みつゑげ聞てさればこそ此き
みは鎌倉殿の御中たがはせ給ふ人よいぞ此君をうち
申關東へ參らせくんこうけしやうにあづからん人々
やつといふまゝに浦うちをふるゝ尤ゑかるべしとて
我もと思ひしうらの人二三百人まつくろによろひ御
座ふねを二重三重にをづ取まひてときをどつとあぐ
るいたはしや御座ふねにはいづれも船ごゝちにてせ
んごもゑらす見えさせ給ふその中に辨慶船にはゑは
ざりしがかねてようじんきびしければものゝぐこぐ
そくさしかため三十六指たる大巾黒のそやおふて五
人ばかりのまんなかにぎり船やかたにつつたちあが
つて大おんあげてよばはる
たいいまこゝもとにすゝみ出たるつはものをいかな

るものにてはんべるそやこれは鎌倉殿の御舍弟太夫の判官よしつねの西國下向しますが悪風にふかれ此うらへよらせたまひて候に御ふれ狀こそなく共御けいごをば申さずして何ぞやいまのらうせきは手なみのほどを見せんとてさしとりひきつめさんぐに射たりけりおもてにすゝむ能つはものを十七八騎はらりといられすこし矢ごろをひきゑりぞくみつゑげこのよしをみるよりも御座船に今は矢種やつきぬらんかへせもどせ人々とて御座ふねまぢかく切てかゝるべんけい是をみてゆみ矢をからりとなげすてなぎなたひんぬいてふねより下へとんでおりみつゑげとわたりあひをふつまくつつさむぐにたゝかふたりさるあひだみつゑげ辨慶が打なぎなたうけはづし候て光重がかぶとのまつかうを二つにばつかときりわられうしろはしころほろつけまへははつぶりよだれがね四まいがなどうひつ敷くさすりふたつにさつときりわられて弓手めてへさばけたり是こそいくさの

手はじめ大勢の中へわつて入西からひがし北から南くもでかくなは十文字やつはながたといふものにわたりたてをんまはしてさんぐにきつたりけり手もとにすゝむよきつはものを五十三騎さゝふせ大勢に手おふせ東西へはつとをつちらしいくさの門出めでたしとて又御座ふねに取乗すみよしのうらにあがらるすゑはんじやうと聞えけり

あつか

去間梶原平藏景時鎌倉を立て都に着判官殿の思ひ人
本ノマ、まづカトヨマス
司土御前の御行衛を尋申せど行方なしつじく^に札
を立其つうげを相待る九重のうちにもあはれ司土か
のがれよかし縦くんこう有べくとたれやのものが参
六原にて角登申さんと上下涙をもよほして哀とは
ぬ人ぞなき爰に司土が母の召使しあこやと申女有札
を讀て見るに判官殿の思ひ人司土御前の御行衛を六
原殿に参り申たらんずるともがらにじやうらうなら
ばくわんをなしけならはいと^{本ノマ、}のしやうくんこうこ
によつてけしやうのぞみたるべし景時判とかきとめ
たりあこやなゝめによろこふで此ふだをくわいちう
し六原さしていそぐ梶原は司土御前を尋かね關東下
向とて馬引立のらんとすあこやさうなく走寄人目を
ばチ脱スルカ
はかり此札を梶原がたもとへをとし入る梶原やがて

心得此女房をさき馬に取てのせ六原を出る女手綱を
ひきむけて大和おうちにさしかゝり三の橋打渡りほ
うしやうじをもさし過て伏見と深草のさかいなるし
やうとうじへ乗入て爰ぞといふて馬をとむ梶原馬の
上よりも大音上てよばゝる判官殿の思ひ人司土御前
の此寺にまします由を承り關東の梶原が御迎に参り
て候はやく御出候へ鎌倉へぐそくし申さんと大音
上てよばゝる司土も母上ももろともに夢にも人の知
らじと社ふかく頼みをかけつるにたれやのものがま
いり六原にて角と申つらんうらめしさよとかきくど
きすだれのまより見出せば年比召使しあこやと申女
さき馬に乗て來りたりあふ扱ははや此をんながちう
しんによりてけりどんよくまうねんはなさけをもす
てはてゝはぢをもさらにかへり見すあこやがゑるべ
をする上は何と思ふとかなふまじいかゝはせんと申
つゝなくより外の事はなし母のせんじすだれ卷き上
たち出梶原に見えければ先のがさじととらんとすせ

んじなみだをおさへ司土御前はきのふまで此寺に有つるがみやこの人目をつゝみかね大和の方を心がけ小夜更がたに出つるが人をつれざる道なれば宇治方にやまよふらん追手を掛させ給へやと一たん僞たりければ梶原聞てげにもさやうに候覧先さがし申てげになくば追手を掛申べし東はあく津輕のはて西はろかいのといかんする程天下の其内をさがさぬ所有まじゐ誰か有参りてさがし申せ兵どもと下知すれば司土此由きくよりもなふそれまでもさふらはすみづからは是にさふらふぞやまばらく暇たび給へ此程なじみ申びくにたちにいとま申やがて罷出べし梶原殿と有しかば景時間て腹を立更ば先より此むねを角とは仰なくして其間は門前に待社申さふらはめこなたへしされ兵ども門より外に引出すあじろのこしのふりたるに力者計をあひぐして門より内に入に鼻あら痛しや司土御前此程なじみ申びくにたちにいとまをこいなく／＼出んとま給へば母のせんじ是を見てま

ばらくなふ司土御前いとゞだに女はごしやうさんじやうゑらまれつみのふかいと聞えさふらふよしつねの草のたねやとして露もきんやらぬたらちねの其中迄もさがせといふ事あらばめいどにおもむく人ぞかしかたき手に渡らぬ間にかみそり衣ぬきかへかいたもつてめいどの道をおしへられて出給へげにげに思ひ忘れてさむらふとてひじりをしやうじたてまつり髪をろしと有しかばおとがめいかゝ有べきと人を出して梶原に出家のいとまをこひければ景時間て是は關東よりの御使也わたくしにてはかなひ候まじおぐしをつけながら御下向あれよきやうに申なし御出家の御暇をばまいらせんと申すげに／＼是も道理とて髪をばいまだつけながら髪そり計ひたいにあてかいみやうのものとなへて五戒を請させ給ひけり抑五戒と申はせつたういんまうごおんじゆ其みなもとを尋ぬるにりやうへんたしやうのかゝのなれをく

本ノマ、

が脱スルカ

んでかんしんの法をつたへたり天平勝寶六年に奈良

の都にかいだんをたて聖武皇帝はじめて受戒し給へり又天台の戒だんは弘仁五年にきんざすの立させ給ふ上下萬民をこなべて誠の道に入人の誰かは戒を請ざらん抑第一にせつしやう戒と申はものゝ命をころさぬ也其いはれをあんするに命はおもきたから也昔げんじやうさんさうのしやうけうをわたさむとて流沙を渡りそうれいのみねをこえさせ給ふ時ろくそくわう來りてしやうげうをうはい取る見る人は是をとぶらいければさんぞうのたまはくをろか也縦しやうげうはとらるゝとも命と云おもき寶をとられねば何をさのみになげかんとうれいたいろもましまさず此世一世の身ならず生々世々の命はおもきたからなるべしこのことわりを知らずしてあるひはとんにたえずゑたしきをうしなひうときをほろぼするぐちのいたせる所也今は人をころすとも因果は身につもるべし一世にものをころして七しやうまでころさるゝくわぎうの角の上にして何事をかあらそはむ石火の光水

のあわたゝまほろしの夢のよに一たんのどんにふけてせつしやうをするぞはかなき第二にちうたう戒と申は他の寶をおかさぬ也此戒をやぶる人はまどしき身と生るゝ也今もひんくに有人はさきの世にものをぬすみしと思ふべしとてうさくが三度までせんのもゝをぬすみせんきうにこめられしもさこそはくやしかりつらめとを山どりの花の色霞にこめて見えねば匂ひをぬすむ春の風おなじ其名はたちながら科にはあらじとぞ思ふおさへてあやめらるゝ事三更のふかき夜に啼郭公音をぬすみめいどの鳥と成にけり荒淺ましやかりにもちうたうをおかす事なかれ第三に邪婦戒と申すは我がいもならぬ女にことばをもかけずわがせならぬおつとのことばをもかゝらぬ也ゑつとのつみはたしやうまできちくしやうに生るゝ也むらかみのあんしのねうゐんはせいりやうでんのくわうぐうにねたまれさせ給ひしゆじやくゐんの鬼となるおそれてもあまり有じやゐんかいをたもつべし

第四にまうごかいと申は空言をいましめり此いはれをあんするに僞りおほきことばには其科多き物也されば北野の天神のかむせうじやうにておはせし時亥へいのおとゝにざんせられ心つくしへながされゑの本寺にてうせ給ふ其科におとゝはならくにまづみ給へばかんせうじやうはまさしくも今の北野の神となりまうしやうくんがいたづらに鳥のそらねにせきをあけて仇にうたれ給ひけりなをいましめのふかき事はまうごかいでとゝめたり抑第五におんじゆ戒と申は酒にゑひてひれふし□□かう事をいましめりきくわどうによといつし人は五百しやうのあひだくろのやみにまよひしもぶくしゆはかいなるがゆへあるひはしゆふうせんのおいましめとかうし又は三十六の科有ときゝへりいましめふかき酒を何とて天台山にはゆるすぞと尋ぬるに昔てんだい山におんじゆをことにいましめ酒をきらひ給ひしに九重のせうしやう御登山有し時けうおうのあまりに始て酒をゆるす事寒

をふせがため也たいれいのゆうかんになを此酒をゆるせりましてくわていのゆうれいに誰かは酒をのまざらんその前にゑいをすゝめ林水に盃をうかべしうのちやうやを見渡せば山ももみぢにゑふとかや酒をあひする人をばふくしゆと是を名付のむ事をゆるし□□かふ事をいましめたりそれはいはれぬところ佛をはじめたてまつてあなんがせうしゆぼだいづれか酒をまいりよろぼひありき給ひし酔ては心みだれつゝをのづからじたをたちまちせつがいすなをいましめのふかきはおんじゆ戒にてとゝめたりかゝる五戒をまたうして一つもやぶる事なくばてんりんわうと生るべしむかしゑしんの僧都たうぎんのぎやうかうをかならず拜み給ふそうづのあねあんやうのあまふしんをなして問給ふ何とてそうづは王をおがませ給ふぞ僧都こたへての給ふさん候王のたつときにて拜み申さずせんしやうにて戒をよくたもちいまこくわうと生れ給ふしゆくせんのおちからのたつとさ

に拜むとぞ仰けるいかにも我等さきの世にかいぎやうなき故により心もぐちにさとりなしいまこの申すかいぎやうによりゑんげうの衣のうへにかいほつをつゝみすてざれよたうらいにてはかならずじゆかいのしゆゑん淺からずむじやうとくだつ成給ひかへつて我をみちびくべし禰覺に忘れ給ふなと懇にときをしへ申す其日すでにいりあひのかねつく／＼とちやうもんす梶原は待かねて遅しといひてせめければ聖なみだをながしゑかうのかねうちならしとうみやうをけしあんじつに入せ給へばゑづかはものゝふの手に渡るともしびくらうしてすごうぐしがなんだ夜ふけねればゑめむそかのこゑとはぐしか別れをかなしみてつくり給ひしにてありけりそれは異國のものがたり是は司土が身のなげきかと和朝はかはるとも思ひの色はひとつ也かみは玉樓きんでんゑもは司土がふせやまでゑづかをおしまぬ人ぞなきみめといひのうといひ心の情の道といひたぐひもやわか有べき

と人々なげきしうたんは四方にもあまる計也かゝるあはれをもよほす處にくき事こそ候ひけれあこやと申女梶原にむかつていふやう忘れさせ給はぬさきに御約束のほうろくをいそぎたべと申す梶原聞て腹をたて何と申ぞあの女是程司土御前關東下向とて上下涙をもよほす處に申さんやなんぢはきのふがけふにいたる迄其内に有しものぞかし別れをばかなしまでほうろくのこいやうこそ心得られぬ餘りにものを知らぬ女なれば因果れきせんの道理を語てきかせんそれにてよくちやうもんせよよひには樓月をもてあそぶといへどもあかつきは離別の雲にかくれぬ心はこくうじやうじうにしてかたち計はかりの宿みゝはとせいのみゝ目はじやうはりのかゝみ口はわざはひのかど舌はわざはひの根舌三寸のさえづりにて五尺の身をはたす誰かあるあの女に引手物とらせよ承ると申てさうくるまに取て打のせて渡所はどこくぞかみは一條柳原ゑもはから九重こうぢくを渡し

見るものごとにくませ後には此女かつら河のふかき所を尋ねてふしづけにゑたりけりみやこの上下是を見てものいひしたる女房がしよ地をばたまはらでよみの國の大國をたまはつたりやと申見る人聞ものをしなべてにくまぬものはなかりけり角て梶原は司土御前をこしにのせしやうとうじを出る母のせんじもなくくちにてあくがれ出る司土此由見るよりも母をかちにあゆませ申我身がこしにのりたればとてやすき心の有べきかとしよりたる母上をのせてかけとてこぼれ出るげにくちも道理とて馬をたてゝ母をのせみやこに名殘うき思ひものうき事にあわだぐちわれをばとめよ關山玄なのすさまじさにすぎふる雪の下道をあとよりも誰か大津浦きえばや爰に栗津が原思ひはなをもせたの橋野路に日暮て篠原やうきふしゑげきかりの宿の夜ごとに物や思ふらんこのほどは心のやみにかきくもりかゝみのも見もわかず名はさめがいときくからにふかき心はいづみかない

といなみだのおほかるに兩山中やとをるらんあらしががらしふわの關月のやどるか袖ぬれてあれたるやどの板間よりゑぼりかねたるたもとかな夜はほのぼのとあか坂やうちこそはたれくわづ誤んせ河うゑしさなへのいつの間に黒田とは成てはらむらん夏はあつたとなるみがた三河にかけし八橋のすゑをいづくとをたうみ戀をするがの富士の根の煙りは空によこをれてくゆる思ひは我ばかり伊豆の三島や浦島があけてくやしき箱根やまさがみの國に入ぬればなをうき事をきく河の宿にもはやく着にけり梶原道よりもはや馬をたて司土御前をばきく河の宿迄めしぐして候道の草ばの露霜となしをやせん本ノマと申す頼朝聞召れて鎌倉までめしぐせよ尋ぬべき子細有承て司土を大御所さしてかき入る折節有合大名連所せきまでなみゐたり司土こしよりをりかゝみをも見わかすしはるかにざしきのあひたるをわがためぞと思ひ人々の方をうしろになしつゝめどこぼるゝなみだの色みだれがみ

をつたひてつらぬく玉のごとく也や、有てより朝御
對面の其ためにあをかり衣にたてゑばしめし和田ち
ちぶ左右にして御座になをらせ給ひいそのせんじが
むすめ司土とは女房が事が四國九國のたゝかい合戦
は珍しからの物がたり義經一人合戦世を治めたるこ
うにあらず頼朝がいせいによつて諸國はをのれと玄
づまりぬ世は我世にもあらぬには兵法のじゆつも叶
ずとをくいてうを尋ぬるにけいかしんぶやうはんよ
きがくびをかつてゑくわうていをねらひあはうごん
迄のぼるといへど運つきぬればうたれぬさしもなだ
かき弓取もきんの音にとらかさるいわんや義經はけ
いかしんぶやうはんよきはどはよもあらじましては
んくわいちやうりやうがいきをいにもをととりたる義
經一人戦ひ天下にみちし平家をかたぶくべしともお
ぼえずより朝がいせいのおをき所なるべしそれによ
しつね此世をくつがへさんと思ひ立義經といちみし
あひねんふかく定なきちぎりをこむるゑづかには心

をゆるすべからずたとひ女の身なれどもおんみの心
ふかきをがうてきとする也何様ひくて定なき遊女の
身と有ながらさしも頼朝うらめしき草のたねをつぐ
ときくやあいかにとの御誕なり司土うとましげにし
て袂を顔にあてながらなく／＼申けるやうは人のち
ぎりと申は定なしとはいひながら生々世々舊縁のつ
きせずちぬきえんにや昔源氏の大將もきりつぼは
はき木うつせみのもぬけの衣きたりしあまにもちぎ
り給ひぬ若むらさきすゑつむ花もみちのが花の縁あ
ふひさかき花ちる里すまや明石みをつくしせきやよ
もぎふゑあわせ松吹風や薄雲それのみならず源氏は
六十帖の物語はかなきちぎり是ををし一じゆのかげ
や一がの水をくむこともたしやうのえんとこそきけ
とめる人もいつまでぞいつ迄草のいつまでとしもが
れゆくをゑらぬぞと袂をかほにをしあてゝなくより
外の事はなし頼朝大きに腹を立給ひことばをゝしと
申せ共いつ迄草といひつるはかべに生ふる草也へい

ちにねをさすだにも秋はてぬればゑもがるゝまして
 やかべにつかぬまのねをかくる草なればみのあきは
 てぬそのさきさかりの夏にかかるればいつ迄草と是を
 いふさればにやゑづか我身の上をくわんじ源氏によ
 そへ六十帖所々かたりつなりそれはともあらばあれ
 いつまで草といひつるはよりともがことを申なりい
 ま世に出てあめがゑたを我まゝにするともいつまで
 さかふべきぞと申つる處それはゑづかいはずとも
 うひてんべんの世の習ひあすまでたのむ事や有ゑか
 りとは申せども世に有程はいつまでも久しかるべき
 ためしにかねては松をうゑをきすみよしとこそいは
 ふなれみやうをんじしやう中々うつろひやすき世中
 のいはへばかなふ事なるにそれにゑづかなんぞ其源
 氏の物語にいつまで草といひかすめ頼朝が身の上を
 てうぶくするとおぼえたりかゝるふしやうをきくみ
 みはゑいせんのがれあらざればあらふべしと覺え
 ずと御座敷をづんとたちいたあらゝかにふみならし

ない所へ入せ給ひけりれんざん有し人々一度に座敷
 をはらりとたつこゝろぼそくも司土たゞ一人ぞ残り
 ける去間梶原は思ふさまにゑすまし内々うちばらひ
 けるわノ誤ゑづかゝあたりへ立寄て是は公方の御座ちかしこな
 たへ入せ給へとてともなひ出したたりけるがいやゝ
 かゝるめしうどななどを時刻うつせばないえん有今
 夜のうちにたいたないをさがしてうてきの御すゑをか
 らさばやと思ひ宿を取てをしこめ日の暮るをぞ相待
 けるさすがに人のせんだなれば最後を知らせて其支
 度あらせばやと思ひ司土が宿へうちこへ今夜みうち
 よりたいたないをさがし申せしつけむとの御誕の候お
 ぼしめたること脱字アルカのさふらはゝ母ごせんに何事をも仰
 をかれ候へとてそらなきしてぞかたりける司土が母
 のせんじ娘にいだき付つゝ人の親のならひにてあし
 き子のあまた有だにも別れといへばものうきにまし
 てや申さんみづからはたゞ一人の司土御前みめかた
 ち心きは上下にならぶ人なしと世にもかくれぬひと

り子をさき立何と成べきぞいかなるてうてきげきし
んも女をこうす事はなしたといけんかくあらけなき
るびすのすみ家なれどもさかりの花を風なふてきり
からしたることや有うたてかりける鎌倉のまつりご
とゝかきくどきりうていこがれなきにけり能々物を
あんするに頼朝の御誼はゆめ／＼もつて有まじいた
だ是はざんしむのなせる所成べしこともなのめの時
にこそ人目もつゝみはづかしけれ御所中へまいり北
のたいへ此事を申さばやとおもひ司土御前にいとま
をこい御所中へ参り然るべき方に付て^{まづ}かゝ事を
申上る北の御方はをりふし御きげんめでたくて人の
親のならひにて子を思ふ道はあさからぬぞたといひ
かなる仰成ともみづから心得てさふらはいなどかは
たすけざるべき其上是は時刻うつしては叶ふべしと
もおぼえずはやとく／＼との御誼にて忝も北のたい
奉書をくだし給へば司土がはゝのうれしさを何にた
とへむ方もなし鳥ならば一飛にとんでもつきにけれ

共女の身のこの程の思ひにやせをとろへ夢路をそへ
るごとくたゞ一所斗におどるやうにぞ覺えける

角て梶原は日もいりあひの鐘をきゝこし一ちやうよ
ういしけいごのもの四五人けしからぬ姿にていでた
たせ司土がやどへをしよせてはやめされよと申^{まづ}
か此由見るよりも今を最後の事なればからあやのふ
たつぎぬかけおひ守りかけながらしゆへんに御きや
うとりぐしてこしの前へぞ出にける我よりもさきに
涙はたれをさそふてさきたつぞやなどやかんの母
上の都のうちを出しよりかゝるべしともゑろしめさ
れずやとてもかなはぬせうゆへけさ御所中へ出ら
れつる面影計のたちそひてけさの別れを限りぞと知
らで行つるはかなさよ親は一世ときくなればめいど
に又ぞあふべきかそれもこうくわいすべからずそれ
人間の習ひにてすゝみえんぞきとにかくにものか
るべきうき世かな心に任せざりけるはしやうじ無常
の世成けりか様にかきくどき最後の興にのり給ふの

子^子脱スルカ

るかとするば武士どもこしをちうにとばせ由井の汀へいそぐ爰にてたいないをさがさんとたちかくす所に土肥次郎實平は鎌倉のけいごにて暮れば十騎廿騎にてかまくら内をまはりしが何とは知らずはまばたにあやしく人の見えければ馬打よせてたそと問くるしうも候はず梶原是にありといふいそぎ馬よりとんでをり何事にやととへばゑづかいたないをたゝいまさぐすなりと申すそれはよくこそゑたゝむれさりながら此邊は若宮ちかき所也是より少引のけなごいが入のさんまいはいしかりなんと申おふ尤とどうじてまたこしよせてうちのせておうなごいが入江へいそぎけり司土此由見るよりも是やめいどのかしやくかきやうくろうのたびもかくやらんかねて一世ときひたりし親にはいきて別れてまたもあはぬに^{本ノマ、}よみがへりくらき闇路を入行や當鎌倉の貞神はかの若宮にゑくはなし然も八幡大菩薩そうべうのゑんとしてはうじやうゑをなしたまふ毎年八月一日より一切のう

じやうのとられてゑすべかりしをあたいをほうじてかいあつめ同じき月の十五日にいはし^{本ノマ、}私のながれにはなちてたすけ給ふ也此ことわりに任せて放生會とは申也神々ならばきこしめせ人こそ人をころすともわくわうのかげのあまねくば我をたすけてたび給へたといひのちは露の身のきえやすきならひにてなげくゑるしのあらずともいきて別れし母上を今一度見せてたび給へ神は歌にかならずなふじうましますことなればこしをれながらはう^{本ノマ、}たいのくゑいをよみてまいらせむ

なとされはなにはにすてし浦浪の

ゑつかもあらき濱の名はたつ

かやうに詠じて若宮にゑかう申されたりけるになにとは知らずうしろに人のよばゝるこゑがかすかにこそ聞えけれけいごのものきもをけし何事にやときけば司土が母のせんじのよばゝるこゑはかすかなり梶原はやくきゝつけもし奉書やくだし給ふらんにたす

けやせんくやしや何とも是非のなきさきにはからへ
やれ兵うけ給はると申てこしをちうになげをとし玄
づかを取てひきいだしがいせんとせしとき土肥の次
郎ふさがつてさねひらかうて有ながら若奉書やくだ
し給ふらんにあはてゝ後の大事とをしとめたりけれ
ば梶原いといいかつてたいがいせんと申せんじは奉
書これありとよばゝりさけびはしればゑづかは母の
こゑをきゝておそしともだへこがるゝをものによく
よくたとふればつみふかき罪人ぐしやうしんの手に
渡つてむけんださいやうのそこにをとさるべかりし
を六道のうけの地藏の尺杖をからりとうちふりから
かみさんまいとよばゝるかけすくいあげたすけんと
玄給ふも是程ぞ有つらん扱こそ奉書よみあげて司土
も母ももろともに同じこしに取乗きらくのゑみをふ
くめば司土は母にすがりつゐて是はゆめかといひけ
れば母はむすめに取付夢とないひそうつゝぞさもあ
れあやうかりつるわごせがけふの命とはらゝとな

きにけりうき時は道理ながすなみだはことわりやう
れしき今の何とてかさのみなみだのこほるらん角て
司土御前をば土肥の次郎にあづけらるゝ頼朝よりの
御誕には男子ならばてうてきにてちからにおよぶべ
からず女子のたいと有ならば母がたからたるべしと
かねて御下知ぞ下りけるゑづかも母も都に有し時に
は義經の忘れがたみにてましませばなんしに生れ給
へとねがう心を引かへてたい女子になれとぞいのり
けるされどもかなはぬうき世の有さま玉をのべたる
ごとくなる若君いでき給ふ梶原はやくきゝつけ源太
をつかはしいはするやう御さんすでに平安に御座有
由をきこしめし男子女子のあひだを見てまいれとの
御使に源太が参りて候と大音上てよばゝる司土も母
ももろ共に源太がこゑときくよりもあはう羅せつの
使のゑんまのせめをつづるかときもたましぬも身に
そはす母のせんじいそぎ出なふいかに源太殿女子を
まうけてさふらふにかねてよりの御約束のごとく母

にたべと申かげすゑきひてそれは何より目出度御事候よ何様いまのまれ人をそとおがみ申て後ともかくもと申すまづか産所よりたち出源太にうちむかひつつなくく申けるやうはなゝいろの島に八いろのふねをかくすとやらん申たとへのさふらふなれば兎に角に源太殿をこそたのみ申さふらはめ是々御らん候とて玉のやうなる若君をいだきあげて見する源太是を見てあらいつくしの御若君や候是程の御事をわたくしにては叶ひ候まじ御所中へ御供申御目にかげやがて返し申さんとたもとにつゝみふところををし入駒ひきよせてうちのり油比由井ナリの汀へいそぐ二人はあとをしたひてなふせめてなくこゑを今一度きかせてたばせたまへやとよばゝりさけびはしれども馬にはいかで追付べきあら情なや源太油比の汀にて取はづしたる體にて浪うちぎわへぞをとしける磯うつ浪なくこゑ濱松をさそふ風の音身にしみくと思へども取もとゝめぬ事なればあたりになろひふしこがれこゑ

をならべてなげゝども源太は少もあはれます沖より浪がどうときて玉のやうなる若君を落花のごとくにうちくたく其後むノ誤カふちをしとゝうち源太は家にかへりけり司土も母ももろともにちりたるしがいを取あつめたもとにつゝみかほにあてりうていこがれなきけるがまづか思ひにたえかねて身をなげんとせし時に母のせんじ是を見て道理也まづかごせ何に命のをしからんわれもつれて行やとて二人手に手を取くんで身をなげんとしたりしをおりふし有合人々がすがり付てぞとめにける思ひきりぬる道なれども心に任せぬ事なれば此人々のまうたんをあはれとはぬ人ぞなし角て日數をふるほどに御所中の女房たち大名達の北の方まづかが思ひさこそやととぶらひとなづけて其ふみどもは數知らずまづかもしゆせきよにすぐれ源氏いせ物がたりをばうちをくふみのことばにもたゞ此心計也御所の北の御方仰出されけるはうら山しやな司土はいかなるちへのふかうしてをんな

ののふをのこさずしゝたる事のゆゝしさよそれ我朝
の女はやまとことばをむねとして歌のみちをしるべ
しさのうのみこのやくもたつと歌に詠じはじめ給ひ
し我朝のまばり花郭公と月雪はあだなるものと思へ
どもゑきてんべんのむしやうをあらはすところは也
佛もたゞ此事を一大事とて五十年ときをかせ給へど
もしむなふふかうしてとゝかぬことばなりければふ
せつふかしぎなるがゆへたゞふかとくとばかりにて
ことばにのべつくされず爰をもつてまさしくもふり
うもんじなるゆへおつそふてんと是をいふたという
ばそくうばいにてかたちは女成ともさとりをうけば
佛成べし殊にかのゑづかはないてんげてんくらから
ずゑかも我朝のふうそく和歌の道達者也いまやゑづ
かにより合て源氏伊勢物語のふかき心を尋んもつと
もしかるべしとおのゝうつらせ給ひてうちとけ
あそばせ給ひけるに北の御方仰けるはいかにゑづか
ごせん歌のふしんはさまゝをゝしと申せどもいせ

ものがたりのあふぎをくはしく知る人まれなればゑ
づかごせんが情にをしへてをかせ給へやと仰出され
たりければゑづかうけ給みづからなればとていかで
かそのあぶきをば知り候べきさりながら心得てさふ
らふ程をば申べし抑いせ物がたりと申は業平の中將
の一生界をかたる也業平と申はへいせい天皇に第四
の御子あはうしんわうに第五のわうじ母はくわんむ
てんわうに第八の御むすめいとうないしんわうの御
子也てんちやう二年きのとのみのとし生れ給ふしゆ
んわ天皇の御時七歳にてわらはでんしやうし給へり
ふかくさのみかどの御時春日のりんじのまつりのと
き内裡よりれうのすがたに出立てすきびたゐのかぶ
りをきこせつのれいしむにてたちしゆへしのぶすり
のをみのころもをきたりし也又承和七年にうちのく
らんづにふせ給ふこれたかのみこの御時かたのゝみ
かりにあひぐせり彼業平の中將はしやばのほうさん
つきはて給ひ大和の國なかの郡有原といふ所にみは

かをてんじ給ふ是迄は業平の一生界をかたる也此物語をとうぐうの御所にてつくられけるにふるされ色のきぬきたる人一人來りゆゝしくも此物がたり作り給ふ物かなそれがしも歌二首入むと有し時にいづくよりの御使ぞととひければ其返事にをよばずして

神風やいせのはまをきをりしきて

たひねやすらんあらき濱邊に

思ふ事いはてたゝにややみぬへき

我にひとしきひとしなければ

かやうに詠じたちかへらんとし給ふとき人々たもとにすがりつひてさも候へいづくよりいづかたへ御とをり有ぞと申せば是はいせよりと計にてけすがごとくに失給ふさてはうたがふ處なし伊勢太神宮の御使成と心得このことわりに任せつゝいせ物語とは申也北の御方きこしめしあら殊勝やさふらふさてういかふむりと申はいかなるいはれにてさふらふそれはふか草のみかどの御時春日の祭りのときだよりよりれ

うのすかたに出立てすきびたいのかふりをはじめて給りしによつてういかふむりとは申さふらふおうこれもはや心得ぬ其外のふしんにはながめあかしつみをつくしとぶほたるぬきすといふことぞたのむのとりみのしろ衣地いろのたけしのぶすり都どり此玄な玄なのふしんはいかなるいはれにて候ぞ其玄なふしんはしんごんのごくひしあはんうんのたうにあはらかけやのこもんごちの如來のしゆじとして四季てんべんのしきさう雨土ひらはじめにちぐわつしやうの三くわううじやうひじやうのたねとしていんやうふたつ和合して玄きてんべんの色をなす春の色はあをけれど何とて花はくれなるの色にはいでゝひらくらむ夏の色は赤ければてる日もやがてごくねつす秋の色はうれいてむしの啼音はことわりや冬されぬればねはんにて雪ふる山は白妙の是を生老病死の玄きさうさだめなき事を三十一字の歌によむこの歌のすがたはしやばせかいの人の身こくうとをな

じ事にて佛としゆじやうへだてなしされば歌をよく
よめば神も佛もなうじうあつて玄ゆじやうもやがて
佛となるとときおしへ申とき北の御方をはじめまい
らせつゝ其外の女房たち和歌の道はくからずたう
とくむじやうぼだびのしんによの道に入給ふ角てう
かりしかまくらきのふけふとは思へど女房達のなさ
けの得さりがたきにほだされてふかくさのいみもは
れにけり大名かうけさしあつまつてさゝやき申され
けるやうは彼^{とチ脱スルカ}玄づか舞と申すは日本一の上手也そ
れをいかに申すにゐんじやうの夏の比ひでりをく
つゝき草木もことくくせいめうのこるべからず此
事天下のせうしとてくぎやうせんぎまち／＼たりそ
れ龍神のはらをやすめ神の心をとる事は女の舞にし
くはなしたれかめいじんなるらんと御尋有し時こむ
えの院の左大將すゝみ出で申されけるはたれ／＼と
申ともいそのせんじがむすめ司土と申しらびやうし
父は伏見の中將とて藤原氏のくぎやうたり其子に司

土生年十七歳に罷成天下にならびなし是をやめさる
べからむとせんぎ申されたりければおふもつともと
きせられやがてちよくしをたてないし所へめされす
るがの舞をまひけるにげつけいうんかくひやうしを
うつてはやされたり舞のそでへうやうしてんにん
のかけるごとく也うたな聲はさながらかれうびんがの
ごとく也きみをはじめたてまつりげつけいうんかく
かんにたへさせ給ふときてるひにはかにかきくもり
といろ／＼となる神もひやうしにあわせたりければ
雲へきらくにあつうして玄んの雨こそふりにけれこ
のほどてりし草木いつちうの雨をそゝげばみどり若
ばと成にけり扱こそ五穀葉はさかへねはふかくすゑ
は雲井にのび秋は其身のまたきことすんのいなつぶ
玉にてしやくのほどけもなかりきしんも君も此舞
をかんせぬ人はなかりけりかゝるめい人たまさかに
まれにもいかで候べきいかはせんと内談す北の御
方司土が宿へ御使有はかりをゝき事なれど日本一

の舞とやらんを一目見ばやと仰けり司土こたへて申すやうまはぬとがめにふたつなき命をめされさふらふともまはじとこそは思へども君が情のふかければまはではないかなんとしうちとけて申けり北の御方きこしめしあらうれしやさふらふまはせ給はゞ若宮殿のすきらうにてしんちよも諸人迄も目をおどろかす物ならばひとつは神のかいなさし又はわが身のいのり彼是もつてめでたしと仰出されたりければ司土も是にどうし吉日取て若宮にてかいなさしと風聞すすでに當日にも成しかば若宮殿のまやうめんに大將殿の御座敷にはまんまくをひかれたり北の御方のざしきには戸にはみすをかけうちにきちやうをひかれたり諸大名はくわいらうとおほ庭にところせきなくなみゐたり貴賤群集は中々に申に及ばさりけり彼若宮と申はうしろは山前は海左右には軒をならべみんかの門家くむねの敷おほふしてたいたうのみやうじうの津ともいつべし荒面白や寺くのろう門

はうんこんにさしはさみ峯の嵐は松にふき汀の浪はよせひいてむしゆのざいこうをあらひけり沖のかもめばかいじやうのまら浪よりもたちゐけりとうなくしんによのをきのなみほつしやうのきしをよせてうつだひじだいひの若宮はむみやうの闇をてらさんと神樂おとこのしやうこのをとときねか袂きねはれぎになる鈴いづれをきくもいさぎよくわくわうのかげ涼しく司土が舞のしやうぞくはちばどの御やくふへはちぶの六郎どのつゝみはくどうすけつね彼すけつねと申はだいりにもんやくの有し時つゝみを打てめいよをすきんろうきんちうのひやうしをだにもはやしたりし上手にてさゝるゝも道理也下武藏の住人なかぬまの五郎はとひやうしの役也司土は是にはやされてななのなさけにかまくらにて舞まふべしとおぼえずとたもとを顔にをしあてゝ泣より外の事はなし母のせんじ是を見ていかなる事ぞまづか御前かほど目出度御座敷にて舞まはぬ物ならば御とがめをばいかんせん

まづ庭はらひさふらふとてさきに立てぞ舞たりける
もとより舞は上手かたくりしほりはきをうたいすま
したりければ司土此由見るよりもあら痛しや母上の
何に心のなぐさみてかやうにうたい給ふべきぞ是も
たゞみづからをたすけんためのまいぞかしそれにみ
づからたゞいままのうき心あるまゝに舞まはぬ物な
らば母のとがめをいかせんまはばやと思ひなをし
うちぎぬのそでひきろひ袴のおひさはさみ立出た
りし心のうちさこそやと思ひやられたり見渡せばれ
きくゝと座せられたる人々に和田ちゝぶ殿江戸笠井
ちば小山宇都宮いづれか日比我まゝにふるまはざり
し人やあるぎけいと妻とありし程は大名かうけをそ
れをなし舞まはせて見る迄は思ひもよらでありつる
はきのふは人をゑたがへけふは人にゑたがへりてん
にんのごすいのほふさめぬると思へばよ所のみる目
もはづかしとはづかしながらゑづかごせん時の祝言
成ければ君をはじめておがむには千代も經ぬべし姫

小松とうたいすましたりかたちは日本一也聲はたゞ
かれうびんがめうのひいき也けりうつぶくもみな上
手ひらりとあぐるかいなにてん人もあまくだり地神
もうごく計也いりまひに成ければ

ゑつやゑつ賤かおたまきくり返し

むかしをいまになすよしもかな

とうたいすましたりければみすもきちやうもさいめ
きさけぶところに頼朝みすをおろさるゝゆへをいか
にと申にゑづやゑづゑづかをだまきくり返しむかし
をいまとうたふたはよし野て別れし義經をゑたふ所
それはよりとも見ぬところちゝぶどの申さるゝむか
しをいまとうたふたはこていのむかしいまにき世は
おさまるといふ處目出度覺えて候にみすをあげられ
候はでいかゝと申されたりければ御れうげにもとお
ぼしめしみすをさらりとあげ給ふ司土是を極樂淨土
の玉すだれかんじゆまんじゆのたまのはにあぐれば
いよゝひかりますぎよくたいつゝがなふしてあめ

がしたこそどかなれと三返ふんではればみすも
きちやうもさいめきほうしやくゆるく計也頼朝かん
にたえかね給ひてとにかいなをさし給ふ大名かうけ
ていしやうにころびおちこゑをあげてぞおめいたる
さてしも舞はおさまりぬ君よりの御誕に駿河の國神
原八十餘町たびにけり大名連のほうろくたからの山
を前につむゑづかはいよく是にはちいつぞの程に
舞まふてはうろくにはこるべきかへせばおそれあり
やとかまくらうちのみやしろみだう寺にきしむしよ
しつねの御いのりまたは我子のためにとひとつも身
にそへずみやこへとてぞのほりける

とかし

去程に判官やまぶしのすがたをまなびくだらせ給ひけるほどに加賀の國あたかの松にほどなくつかせ給ふほうぐわんまつを御らんじてあらゆふちやうなるすがたかな四國西國みやこにてそのかすまつをみてあれどかほどゆふちやうなるすがたはなし名のなき事はよもあらじたづねてまいれむさし辨慶承てまつのあたりをみてあれば十四五なるをさきとしてわらむべ四五にんまつの葉よせてぞゐたりける辨慶するするとたちよつてやあいかにわらはべ當國にてこの松はなにのまつといふぞこざかしきわらはべがすゝみいでゝ申さむ候たうごくはさかをへだてゝこなたくさふかき遠國にてかほどの松に名づくる人も候はずさりながらざいこ中將のながめにはあたかのまつ共よまれて候それのみならず鳥羽院の御内なる佐藤

兵衛のりきよはうはのそらなるこひをして北國しゆぎやうに出るとて西行とかれは名のるかのさいぎやうのうたにはねあがりのまつとよまれたりなふきやくそうと申けり判官きこしめされてもの聞給へかたがたくわんがくいんのすゝめはもふぎうをさへづりちしやのほとりのわらはべはならはぬきやうをよむとはよくこそ是はつたへたれこざかしきわらべに引出物をとらせこれよりおくひらいづみへのじゆんだうをくはしくとへんけい承てをひのなかよりいろよきあふぎとり出しわらはべ共にとらせやあいか
にわらはべ是より奥へはいづくをどなたへとをるぞとくはしくたづねとふときにこざかしきわらはべがすゝみいでてもうすさむさうらふこれよりおくへはあまたのみちが候まづかみみちしもみち中みちとして三つ道が候がいづれも是がなんじよ也先下道のなむじよをかたらば聞召るべしくろへは四十八ヶせ親玄らず子玄らずいちぶりしやうとうたのわき二三のは

ざまもがみ川あねはの松かめわり坂と申つゝ四十二
ところのめいよのこれがなんじよ也少人もおはしま
すがいかでかくだり給ふべきさてかみ道のなんじよ
はみやこのはるは過ゆけどこしちのゆきがまだきえ
ず去年の雪のむらぎえに今年のゆきのふりつもり谷
の玄た水おちあひてみづかさまり鳥ならでかよふ
べきやうさらになしなみちと申は道もじゆんだう
にて人のこゝろも玄ひなるがこゝにひとつのふしぎ
ありかまくらどのよりもこの國のとがしどのへふれ
狀がくだつて城くわくをかまへやまぶしきんせいこ
はくしておとゝひの暮ほどに九人とをる山伏をはう
ぐわんどのゝ御つれとおさへて切てかけられたり
きのふのさうてうに六人とをる山伏を五位殿の御つ
れとてこれをも切てかけらるゝゆふべも五人きらる
るけさも三人きられて候かほどなるなんじよをたし
やうごうはふるともいかでかくだり給ふべきなふき
やくそくと申ける

判官聞召れてさてはなにがし一人がゆへにゆく衛も
しらぬ山伏たちのさやうにいかほどもきられさせ給
ふことよ行てとぶらはばやとおぼしめし五人のわら
はべをさきとして松原に入て御覽すればげにも去年
のふゆのころよりもきさらぎ下旬迄きりかけたる事
なれば百ばかりほどまつしぐらにかゝる十三人の人
人はれいじせんぼうをたつとうあそばすそのなかに
べんけいせんぼうをばよますして爰かしこをはしり
廻て首共をひけんし五人のわらむべをはつたとにら
んでこの國のとがしはなにも玄らぬといふわらはべ
聞てはらをたてこの國のとがじどのゝ物玄ろしめさ
れぬいはれは候べんけい聞ていでゝとがしもの
しらぬいはれを語て聞せんらんぎやうふちやうの大
ぞくのくびをはるかのかうへにかけびんぼうをまろめ
げだつどうさうの種々のほうえを身にまとひほうか
いたうちやうにしてみろくのしゆつせに生れをなさ
うすほうしのくびはるかのかの玄もにかけたるはさても

のをばしらいでかけぬるれわらはべ聞てうちわらひ
よこ手をちやうとあはせわかれ^{本ノマ}たりきやくそうそれ
をとがめ給ふかうへにかゝつたそくのくびにあまた
のたんざく付られたりむかふはそつてさる眼こびん
の髪のちゝむでいろのまろきをばかまくらどのゝ御
舍弟に源九郎義經の御くびとがうしてはるかのかみ
にかけられたり又しもにかゝつたほうしの首にあま
したゝせ給ふな御坊のごとくにあく返せいはたか
ふてきはめていろはくろくしてまなこにくちをも
つたるがもの云たるこはつきのぎごとなき法師をば
判官殿の御うちなるひざもとさらずのさいたうの辨
慶とがうしてはるかの下にかけられたるぞ御坊とい
ひければさしもがうなるむさしばうも我身のうへと
聞なしてひざふるうてぞ立たりけるべんけい聞てさ
てはとがしはなにがしが面をばよくも見しらざりけ
るや其儀にてあるならばなにがし一人うちこえとが

しが城のていを見ばやとおもひきみの御まへにまい
り此よしかくと申あぐる判官きこしめされてこゝろ
がはりかむさしこゝろがはりに及ならばみやこのつ
ちとはなさずして北國のみちしばとならむ事こそく
ちおしけれべんけい承てこは御誼とおおぼえぬもの
かなかほどやま伏きんせいのところを一人ならず二
人ならず十三人わめひてとをりあやしめられてはい
かにちんずるともかなふまじまづなにがし一人うち
こえとがしが城のていをみんずるに見おふせんはふ
ぢやう見そんせんは治誼なり見おふする物ならば山
伏の法にてあるあひだよろこびのかひを二つ三つふ
かふず又みそんずるものならばさいごのかひをたゝ
ひとつふくべきなりかひばし一つたつならばすはや
むさしめがさいごぞとおぼしめしきたかたのみまん
堂にてきよきじがいをおはしませいとま申てさらば
とてたちはなれんとしたりしが思へばこれがさいご
なりはうばいの人々に名残やおしくおもひけん龜井

かたをか伊勢駿河まちかきさまにちかづけていかに
かたぐむさしめ一人とがしのたちへうちこえ城の
けごを見そんじたらば辨慶が腹きらふず君御はらを
めされなばしでのやまにてまち申さんおかたぐさ
きにもはらをきるならば三津のかはにてまち給へい
とま申てさらばとて名残おしげにわかれけり

かくて辨慶ひたのたくみがうつすみなはにてはあら
ね共只一すぢに思ひきつてふぢづか手とりうちすぎ
さしもまちかくるとがしのたちへ入たるは人にかは
りておぼえたりやまぶしの法にてあるあひだれいし
せんぼうをこそよむべきにむさしなにとか思ひけん
たか念佛を申あげつちもんよりつつといりとがしが
しやうをみてあればまつほどにこそこしらへたりお
もてのやぐら十三ところわきのやぐら九ところ二重
三重にたかやぐらをあげさせひがしおもてにくら
き馬を四五十疋引立てをひたりけりにしのとをさぶ
らひをみてあればとがしがわかたう百人ばかりなみ

ゐてひきめくつたり矢はひだりごしやうぎすごろく
にこゝろをいれたるところもありちやく座をみてあ
れば四十ばかり成男のひようもんのひたゝれにゑぼ
しのさしきをたぶくとあけさせふんとうにかゝり
てわかさぶらひにすごろくうたせじよごんしてゐた
りけるはこれぞ此國のとがしのすけとおぼえてあり
あらくちおしやときこそあれ日こそあれとがしのい
でたるところへなにがしきたつたるはつめたるごう
と覺えたりしのばばやとおもひしが見えたる事もな
きさきにかたきにけごを見えられてあしかりなんと
ぞんずれば大のこはねをさしあげて熊野山のやまぶ
しが佛法しゆぎやうのそのために出羽のはぐろへと
をり候ときれうたべとこうたりけりとがしこれをみ
てもつたるあふぎにてたゝみのおもてをちやうとう
つてあれを見よ人々ぐにん夏のむしとんで火に入と
よくこそこれはつたへたれこゝろをつくして待かく
るさいだうの辨慶こそ只今きたつたれうてはれから

めよさしなはなんどゝひしめひたもとより武藏我身のうへとは知たれどもきかぬていにもてなして大ぼくこぼくの花ながめそらうそぶひてぞ立たりけるちこくもうつさずとがしがわかたう百人ばかりまつくろによろひむさしを真中にとりこめたりべんけいこれをみていやゝはやりうのわかもの共にひしひしとうちとられかなはじと思ひとがしがゐたりしえんのはなへづんどあがりとがしをはつたとにらんでいかなるやしんちやうきやうのものをめしをかれたいま参りたるほつし迄うき目を見んずるやらんとよくゝ承て候へばこのほつしが身のうへと聞なして候はひが事候がとがしどのとがし聞てさて御坊は判官殿の御うちなるひざもとさらすのさいたうの辨慶にてはなきかどこに候それ山伏の名よのつねおほしと申せども判官坊ひざもとさらすなどゝいふ山伏の名今こそ聞て候へとがし聞てさやうにさいかく廻てべんせつのあきらかなるは扱辨慶にてはなきか

武藏聞てさいかく廻てべんせつのあきらかなるがべんけいならばさの給ふとがしどのも才覺まはつてべんせつのあきらかなるは扱御身もべんけいよとがし聞て何ともちんせばちんせまた辨慶と云べんけいあまりにちんじねもしかう申ほつしがひたいにべむけいといふ字ばしすはつて候か字のすはつたとおなじ事がまくらどのよりもたんじやうの有うへはうたがひあらじといふむさし聞てたんじやうはよもあらじたばかり事にいふぞとおもひしせうのあらばみんとこうたあらむざんや辨慶がいくほと命ながらへむとてたんじやうこうつるやさしさよそれゝとありしかば承ると申てとがしがわかたう四五人ばらりと立て八しやくびやうぶをとり出し武藏が前にさつとたてゑづをさらりとなげかけべんけいに見するうつしもうついたりかきも書たるゑしかなむさしがたけは六尺二ふんゑづも六しやく二分なりいろくろくたけたかくまなこのにくちをうついてありあまさへ

はむさしめがひだりのまなさきにあざのあるまでうついたのがれつやうはさらになし武藏今はことばをかへてちんせばやと思ひなふいかにとがしどのいせんこのほつし熊野山伏とのべて候は御身のこゝろをちつと引見申さんがためなりこれこそ南都東大寺のくわんじんひじり候よとがし聞てたつとう候南都のすゝめにて候はくわんしんちやうはおはすらんおがまんとこはれたり武藏なんとのすゝめとはのべたれどもくわんじんちやうのあらばこそたぬといはばばううちにうちふせられうすもつたといはんとすればあらばこそせひをむさしわきまへかねて立たりしがいやゝ持たといはばやと思ひおろかなりとがしどの三國一の大がらんすゝめをせうするひじりかくかんじんちやうをもたであるべきかせひ見参にいれんとてをひをひつたとおろしからげなはぶるぶるとひつとひて上だんに手を入からりゝとさがしけれ共みやこにていれざる事なればをひには更に

なかりけりむさしあまりのくちおしさに目をふさぎなむや八幡大ぼさつげんじのうち子をは百わう百代まぼらんと御ちかひと承りて候ぞ一つのすいさうを見せしめ給へやとからりゝとさがさるゝげにや八まん大ぼさつのあたへたびけるかみやこにてこのたびいれたりともおぼえぬせんわうらいのまきもの一巻候ひけるををつとつてさしあげて勸進帳はこれにありおがみ給へとみせにけりとがしこれを見さらば是へたべおがまんとこはれたりむさしこのくわんじんちやうがまことのくわんじんちやうならばいかにとがしがおがまじといふともおさへておがますべけれ共これはしせむのわうらい也あやしめられあしかりなんとぞんずれはおろかなりとがしどの恭も十膳善なりていわうだにもかふりのこしをかたぶけおがませ給ふくわんじんちやうをいはんや御身は大ぞくの身として手にとりおがむものならば五體すくむで立どころあやうししとおどすとがしむさしにおどさ

れさらばそれにてあそばせこれにてちやうもむを申さんむさしこのくわんじんちやうをよみおふせんはふちやうよみそんせむは治定よみそんするものならば人手にはかゝるまじあれにつゐて立たるしらえのなぎなたひんばふてとんでかゝらむ若ものどもをおもひのまゝにをつばらひあれにひかへてたつたるあしげのむまのつめかたさうていかにかけあしのはやかるらんひんばふてうち乗てみまんたうに参り一のたちにて御前がいし奉り武藏めはらをきらふずきみ御はらをめされなば十一人の人々もみなく腹をきらふずいきてはこうをなさず共死てはこうをなすべきなり日ごろ我きみ七しやうまでとちぎりをかせ給ひたる愛宕のやまの太郎坊ひらのやまの次郎坊やまゝのせうてんぐてんのやしむ八しやうじんごつめづあはうらせついきやういるいのをにどもをひきぐし候ひて本望なれば關東へせつながあひだにみだれ入てはこね山のたうげより黒雲をたなびきでんく

わうをとばせたまをみがくかまくらにしやぢくのあめをふらせやつ七がうをあらひながしにくかりしかぢはらをさうなくもころさずして百鬼神におほせ付ねつてつのゆをわかくちのうちへながし入六ふ五ざうをやきはらひ七代子孫を取ころして本望をとぐるならばかんせうじやうにてあらず共あら人がみと武藏めがあふがれむずる事どもはあんのうちとおもひければちつともさはぐけしきはなし武藏此くわんじんちやうをたかくもつてよむならばうしろなる人によまれうす又ひきくもつてよむならばまへなるとがしにそれはといはれあしかりなんとおもひ六尺二分の辨慶が七しやくゆたかにのびあがりしらうちての笠をづかうきつと着なして字ならば二くんだり三くだりそつとひらいてさうがんにをしあてゝなにとはしらねども敬白とあげたりけりうやまつて申勸じんのしやもんこくたんのちしきの狀にいはいく和州やましの里東大寺のくわん進の事ことに十方だんなの

じよじやうをかうぶらむとほつすみぎのしいしゆい
かんといふにかのがらむのらんじやうはしやうむて
んわうのきさきくわうみやうくわうぐうと申はたい
しよくわんの御むすめしやうじんのくわんおんなり
ゑかるにうろのしやうがいはいあゆみをたかひにかく
るしやくそん又さうりんのけぶりと上り給ふゑかる
にみかどきさきの御わかれたへにしてうんじやうに
くもりあればげつけいひかりをうしなへりかのつい
せんのために一字のがらんを建立し給ふいまの大佛
殿これなりみだうのたかさは二十丈本尊の御たけ十
六丈とをく異朝をたづぬるに大唐四十八ケのだいが
らむにすぐれてんちく祇園しやうじやにもこえまし
て我朝にならびなしさればしやうごんゑつぼうをち
りばめくわうえうらんけいをみがきみだうの内にし
ゆぎよくをかざりるりのかべしやこのたるきめなう
のゆきげたはりのはしら本尊はこんどうるしやなぶ
つならびに四てんはこがねをのべ十一ぢうのやうら

くこくうむかの風にみだれはなせうえんのたまのは
たかゝるぶさうの大がらんにらくわふつてくわし
つすはめつのときにあひたがはずこゝにふかくさの
みかどのきやうさうこしのきざみにかうりよくしこ
とくくみがき給ふこれはこれわうほうのはんじや
う也わうほうのはんじやうは天下のきつけいたりめ
でたかりける折節に東大寺こうぶくじ兩寺のあひだ
にしゆとけむくわをいたしたがひにはめつの火をは
なつまことにまゑんのしよいをなしけぶり庭に飛て
落らくわ雲をはしればぶつざう跡をけぶりぢぢの
はこやけはつけうのちくもはひとなす爰によたい
のみかどのぎやうざうくわんじんのちからをはげま
すとはいへども三たい御くわんもはんさくなりめで
たかりけるおりふしにこゝに平家の大將ごくあくぎ
やくのげちにゑたがつて本三位中將ゑげひら左衛門
ともかた民部ゑげよしつがうそのせい三千餘騎治承
四年十二月廿八日に南都へはせむかふ南都のしゆと

ふせぎたゝかふとはいへどもほう末世につき忝もにかいのさうもん手かひのもんにはうくわをせしむかのみやうくわみち／＼てだうとうそうばうじんじやぶつしんをきらひなく一字ものこらずやきはらひ訖けぶりうちやうてんにあがり雲と成てあらそひければ十六丈のるしやなぶつのみくしおちてつかのごとし御しんはわひてやまのごとしこんじんせかいのしやうごんをうつし奉るとうこんだうさいこんだうせつなが内にやきはらひおはぬかなしきかなやおんあひべつりの生死のをくるまかれを見是をみるにいつをかごすべきぞ御まなこしかと成て春日山にとびいり給ふひくもびくにだうぞく男女のきらひなく大佛殿のなごりをかなしみほのほのなかへとび入とびいりやけ死するものはかずあらずあなむふぞくのれいちのけさくわいじんいと成てちにふまるきやうごうほろびけいきよくたりこそたへぬ露じやう／＼たりたま／＼のこりとゝまるものししやうきやうていのか

どにたちよりゑばらくはねをやすむる爰にしゆしやうばうひじりせんせいばうかすが大みやうじんの御ぞげんをかうぶりくわんじんちやうをひたいにあてをそれ／＼ほうわうの御方へそしやうを上らるゝほうわうこんしつをはこばせ給ひ肥後肥前ちくご筑前豊前豊後日向おほすみさつま九國をよせらるゝ女院の御かたより伊與さぬきあはとき四國をよせられたり四國九國よりかち千人ばんじやう千人そま千人三千人かすが山へわけ入てざいもくを取て淀こづ河へくだす事おびたゝしゝ彼大もつせうもつをいかにとしてちきやうのおもてに引つぐべきとなけきかなしむかつごうの涙きもにめいじ三ぼうのめぐみによりたいこくよりもちしやのうしが來て一日一夜にひきつけてうし大こくへかへりけり日本人よろこうちぎやうのおもてみだうのたかさは廿丈本尊の御たけ十六丈かうは八ちやうたもんちこくぞうちやうくわうもく百よせんのふづくゑれいとつこはなさら本の

ごとくには奉るさりとはいへどみだうのくやう佛の
くやうかねのくやう三くやうをまだのべす此くやう
をのべむため六十六人の扱もこひじり六十六ヶ國へ
をのく廻てすゝむるところの勸進也いつしはんせ
む入たらんずともがらこむじやうにてはあんをんけ
らくのとくをかうぶり來世にてはぐせいの船にさほ
をさしせんえうのれんげにたはぶれんず事うたがひ
あるべからずなむきみやうけいとよみあげくるく
とひんまひて本のをひへなげいれたるむさしがあり
さま人間わざてなかりけり

おひさかし

武藏坊辨慶はとがしのたちにて勸進ちやうほうがちやうをことくくよみ上げばとがしよくくちやうもん有てまことに是は南都のすゝめにて御座ありけるをぞんじ申さで一時なれどもゑらすにたゝせ申つる事よさこそ佛神三ぼうもわれをにくしとおぼすらんそれくこなたへ申せとてべんけいをしやうせらるゝむさし安堵のおもひをなしいまはおひをこゝにをかばやと思がいやゝゑれたるものにをひさがされあしかりなんとぞんずればをひかけながらざしきにむすとなをるとがし御らんじてせうくわんじんにて候へどもとてまきぎぬ五十疋武藏のまへにつませらるゝとがしのきたのかたもまきぎぬ三十疋むさしが前にをかせらるゝそのほか心ざしの人々はむさしどのがまへにたからのやまをつむ辨慶これを見て

あらおびたゝしの御ほうがども候やたいいまも賜はりたくは候へどもこれよりおくへあまたのなんじよの候へばこうする三月のころ都のやどへつけてたべと申とがし聞てきやうはなむでうとはるむさしいつも云つけたる事なればみやこは三條河原崎の辨慶が宿へつけてたべといはんずとおもひみやこは三條かはらさきのべんといつしがあつとおもひてべんそのの御ぼうへつけてたべとぞのべにけるさらば御いとま申とてたがひにいとまをこひこはれとがしのたちをいでにけり

みまんだうにまいりてきみにかくと申ければむさしどのにてなかりけりたゝはちまんの御げんげとて御手をあはせたまひけり

その夜はみやのこしさらたけの明神に一夜のつやを申夜をこめていでたまふ里人申けるやうはこれより越中への御下向はおもひもよらぬ事にて候それはいかにと申にくりからがたうげにはとなみの七郎が七

百餘騎にさへやまぶしをし申さず玄もみちの
あひだをば加賀と能登のさかひを玄ほの小太郎がふ
さぎさら／＼やまぶしをし申さず越中への御げ
かうはおもひよらずと申判官きこしめされてびんせ
むのたよりもあれかしと仰ければべんけい聞てはま
にくだりもし能登のかたへくだる船やあると問たお
りふし能登の國すゝのみさきへ下る船こそ候ひけれ
てんのあたふるところとてこのふねにびんせんしそ
の日のうちにのとのくにすゝのみさきにほどなくつ
かせたまふおんふねよりもあがせたまひみぎはの
いはにこしをかけあたりのやまを御らんすればせき
ががんとそびへかせちゝむたる萬木はるに書たる
がごとくなり西のおきははてしもなくさうかい雲を
ひたしろかひをわたるこしふねやなまにかつきう
きまづむみづにはふれてとぶかもめみぎのいはに
なみかけてそこあらいいは間にもくだけてみゆ
るうつせがひ人のこゝろはあらいいのかた思ひ成あ

はびがひみるめなのりそとらんとてあまどうみに
おりひたりかつぎのためにうきまづむかくてべんけ
いはとあるいはまよりもにしにみるめのついたるを
とりあげて御前にまいらせければにしいきててう
ごきければみるめもともにうごきけりはうぐわん御
んらんじて御前のみやこにましまさばいきたるみめ
るをば何としてかは御覽すべきぞ遠國のはてまでも
義經がとくによりかゝるめいよのもてあそびを御覽
するよとおほせければ御せんとりあへさせたまはず
みやこよりなみのよるひるうかれきて

みちとをくしてうきめみるかな

判官きこしめされてあらおもしろの御ゑいかや候い
で／＼義經も御返歌を申さんとて

うきめをはもしほととにかきすてゝ

よろこひとなるすゝのみさきや

このうたになぐさみたまひ今は船路のたよりもなし
はる／＼のまはりをして越中へこそあゆまれけるい

そづたひ山づたひたへ／＼ほそき谷のみち順道なれはせきたうざんをふしおがみくだらせたまひけるあひだ越中の國に聞えたるろくどうしのわたりにほどなくつかせたまふわたしもりが申けるはこのわたりと申は南都ざうゑいのためなりちんなくしてはわたし申まじと申べんけい聞いていかなるせき／＼津どまりにても山伏のならひにてちんといふ法はなきぞただわたしと申いやちんなくわたし申まじその儀にてあるならばこれより御もどりあれと申ちんはなしこそがはし／＼ちさむせばあとよりもいかなる事が出来なんと御前のくれなゐのちしほのはかまとりいだしせんはうつきてふなちむにこれこそあれとてたびにけれわたしもりが申けるは是はわれ／＼が見えり申さぬ物にてちとふそくにはぞんじ候へどもさらばわたし申とてろくどうじをこきわたしはうしつをあゆみすぐいはやのわたりけふもはやうちでのしゆくとうちなかめおんとをりありしところにたび人あま

たゆきあひてこれよりおくへのみちすがら少人をあゆませ申ていかでかくだりたまふべきなふ客僧と申けるはう官聞召れてそれはせき／＼のふさがりかいはなる事にてあるやらんと御たづねありければたび人申けるやうはいやみちにせきも候はずこの國をゆきすぎて越中と越後とのさかひにくるはまをふはまをにぶしおちあひなむど／＼申てあまたのなんじよのさふらふそうじてくろへは四十八ヶせときしもはるのすゑなれば去年の雪のむらぎえにことしのゆきのふりつもり谷のゑたみづおちあひて水かさまさり鳥ならでおよぶべきやさらうになしはうぐはんきこしめされてびんせむのたよりもあれかしとおほせければおりふしゑちごの國なをえの津へくだる船こそ候ひけれ此ふねにびんせんしゑちごのくになをえの津にはどなくつかせたまふ御船よりもあがせらたまひてなをえの太郎の宿所に一夜のやどをかりたまふうちの人々さしあつまつてないぎひやうぢやうするや

うはこの浦は當國のかう善光寺へ參るみちそうじてあまたの道つじ見もえらぬやまぶしたちのせいゝつかせたまふはもし判官殿かあやしやいぎゝとがめ申さんとてわれもとおぼしき浦の人七八百人あつまつてゆみ矢をたいしひしめひたりおやどのねうばうなさけふかき者にてべんけいをまねきよせさゝやき申されけるやうはあらいたはしややまぶしたちを判官殿なりと申てからめとりまいらせて鎌倉へぐそくし申さんとてたいいもおほせいそつしてむかふなりと申辨慶聞てうちわらひあふうれしくもきかせたまひて候物かなわれゝははぐろのかたのやまぶしにてべちに子細もよも候はじ御こゝろやすくおぼしめせとてさあらぬていにもてなしさて我きみの御前に參りこのよしかくともうしあぐるぎけいきこしめされてこはいかによしつねはいかなるつき日生れるぞやてんにごうのあみをはりちにさかもぎのせきをすへ五しやくにたらぬきやうがいをかしくしかねた

るむねんさよくちおほくしてはことばのあやまりもありぬべし御へんたちはやまぶしのみねのこきとるふせいにてうへのやまに入たまへよしつねひとり残りゐてもんどうてみんするにちんじそんする物ならばあひづのかひをふかふすその時はおりくだりてともに腹をきれ承ると申て十一人の人々はかたはらにたちゑのお其跡に浦の人うんかのごとくあつまつて鎌倉殿の御舍弟太夫のはうぐわんよしつね此うらへ御つきあつたるよし承てらいてうの御だいくわんなをえの太郎が御むかひに參りて候はやゝ御出候へかまくらへ御とも申さんと大音あげて申ぎけい聞召れてなにはうぐわんどのとはいづくにましますぞいつぞやの事かとよ平家をせめんそのため十萬餘騎をそつしておくよりうつてのぼらせたまひしをはぐろのかたはらにてそと見たてまつりて候ひしがたいいまも千騎にとる事は候まじやはかかほどの小勢にてかなはせたまふべきぞ山伏たちにもたうぐたべ

でゐのとのゝ御供し一方ふせぐべしとおはせければ
うらの人々あれを聞もつてのほかに相違してあきれ
てこゝに立たりけりなをえの太郎が申やうはうぐわ
んどのと申はせいちいさくいろゑろくむかふばをつ
てさるまなこあかひげにましますとうけたまはり候
がたいいまさやうにおほせらる御ばうのぎやうさう
ちつともちがひ申さず判官殿におゐてはうたがふ所
なしはやゝ御出候へ鎌倉へ御供申さむとこゑく
に申義經きこしめされてあらうれしやついでをもつ
てをとにきくかまくらとやらんをみてとをらふにと
ふしてつれてゆきたまへ浦の人々これをきゝもしも
さもなきやまぶしをかまくらまではるくゝとぐそく
したりともさしたるかうみやうはなくしてやまぶし
どもにのろはれよかりつべしとおほえずしよせん
をひをたまはりなかをひらいてみんするに山伏のぎ
やうじやならばやまぶしのだうぐあるべし又そらや
まぶしにてあるならば山伏のだうぐよもあらじしよ

せんをひをたまはりなかを見んとこゑくゝに申はう
ぐわんちからをよばせたまはず八ちやうのをひを取
出しうら人のかたへわたしたまふうら人此をひをと
りてゆきなかをひらいてみてあればまづ一ばんのを
ひにはこんがうかいのまんだらたいざうかいのまん
だらごまの次弟諸尊のほうかすをつくしていれにけ
りめくらしふみかあやしやとうたがひ申ところにく
がみの寺よりもほうし一人來てことくおがみ知
てあしくしてばちあたるなとてほんのごとくにとり
おさむる二ばんのをひのなかにはけんみつ二しゆの
ほうしやつけうのとめい有これもかたじけ無やとて
ほんのごとくにとりおさむる第三ばんのをひにはさ
んことつこれいしやくちやうくわじやはなざらを入
にけり四番のをひのなかには五だいそのれいざう
ふどうがうまのしよてん本尊のかすをつくしたり五
番のをひの中にはへんちやうがんもんわうらいかな
まなの手本弘法の御自筆たうふうがふるひふでひほ

んのかずをつくしたり知もゑらぬをしなべてたつ
としと申つゝ手をあはせぬはなかりけりをひに子さ
るがあらばこそいざもどらんと申なぞえの太郎が申
けるは一切のわががそつじにてはかなはぬぞ残るを
ひをばたがためにをきたるぞたいさがせと申げに
げに是もいはれたりとて又つぎなるをひをとりてゆ
きなかをひらひてみてあれば判官殿の都よりもたさ
せたまひたるもえぎにほひの御はらまきこてこぐそ
くをとり出して是もやまぶしのだうぐ候かさればこ
そはうぐわんどのよとこゑぐに申判官聞召れてさ
てゝめんゝは當國しよ山寺の山伏たちを見なら
つてはぐるの方の山伏の禮儀をばゑらしめされぬか
なふ抑はぐるざんと申はゑんのぎやうじやのこけの
みちやま伏のひしよたりこゝにしゆとと名づけてわ
がまゝにふるぎふかたありやまぶしこれをそねみし
んいのいかりたへせずこれによつてぶぐきうせんを
もたぬほつしが候はゝこそこのへんにもあはよきう

りぐそくや候御ひけいあれ山伏のかつちうもつ事し
よはうにかくれ候はゝこそせけんせばやめんゝ浦
の人々是を聞げにゝにこれもいはれたりとて又つ
ぎなるをひをとりてゆきなかをひらいてみてあれば
あらいたはしや御前のみやこよりもたさせたまひた
る五しやくのかつら七尺のかけ帯からのかゝみ十二
のかけごいれたる手ばこなんどをとり出してこれは
山ぶしの道具候かあらしゆせうとをこなひすまさせ
たまひたるやまぶしたちやさればこそ判官殿よとこ
ゑぐに申よしつねちつともさわがせたまはずあふ
めんゝの御ふしんは道理まづかけをびかつらしや
うぞくの由來はそれがしがおぼごにてましますはは
ぐるのごんげむの一のみこたるによつていまむかふ
三十ここの御こしの御供のため都にてあつらへかひ
くだしたまふ掛けご手箱のゆらいは越中の國みつ
はしをとをりし時みつはしどのゝひめ君ぎやへいを
つよくいたはりぞんめい不定におはせしを此山伏の

なかにげんしやの上手あるにより七日とまりかちし
たちまちげんにつけ申是によつてさいほうをほん尊
の前にとりかくるおぼつかなくは使しやをたてみつ
はしへ問せたまふべしうらの人々これをきゝさやう
に御のべあらんにはいづくにつめの候はゞこそ御身
にてもましませ同行にても候へせひ一人賜て鎌倉へ
ぐそくし申さんとこゑぐに申判官ちからにをよば
せたまはずこしなるかひをとりいだし二つ三つふき
たもふかひのこゑだにゑづまりければうへのやまに
かくしをく人々にむさしばうべんけいひたちばうか
ひぞん龜井かたをか伊勢駿河この人々をさきとして
うちかたなまさかりめんめにもつてみだれ入て何と
てわほつしはかひをば吹ぞそれやまぶしのかひふく
はやくそくが有てふくものをさうなふかひをならす
事ひが事なりと申つゝぎけいをなかにとりこめたり
はうぐわん聞召れてなふゑづまりたまへかたぐゝこ
のうらのめんゝ此ほつし一人とりこめて判官にな

れぎけいになれと仰あれどうちもしゆじやうもなき
によりならじと申候へばたいなれゝとおほせ候程
に餘りせんばうつきはてゝたいいまのかひをふひて
候御めんあれやおほせけり辨慶がこれをきゝさて
はきたいの事かなはぐろのかたのやまぶしによしな
き事を云つけはうぐわんになれぎけいになれとはな
に事ぞとてものことにてあるならばなをえ千間をわ
れらか住家となすべきなりこゝに立たる太夫殿見ゑ
らぬかほにはゐたれ共六ちやう船のせんどう七月の
初あいதாகたこぎ出し八月のはじめ越前の國とか
やつるがの津にきこえたるせいしがもとを宿として
七里半あらちのなかやまかひ津のうらよりふねをた
てゝ大津ののほりおほちの藤太が本を宿として一年
に一度づゝおりのぼりゑたまふ六ちやう船のせんど
うと見なした事はそら事かいまこそこめはみるとも
みやうねんのなつのころいづくにても参りあひあら
くちおしや此わんれいを申さんとてからゝとわら

ひければ浦の人々これを聞はうぐわんどのでまし
さばわれらがふねのつきどころやはかはえろしめさ
るべき事のこはらぬそのさきこちこよ浦の人々とひ
とり二人にげてゆくべんけいといてをつかけてな
ことてめん／＼はをひをからげてかへさぬぞそれ山
伏のかけをひわたくしならぬ事ぞとよみねの八たい
こんがうどうじの乗うつりたまふなるかけをひをふ
ちやうの身にてとりほどこき候ひてたゞは置べきかを
ひからけて得させよとつゝいてをふていでければ手
をあはせたちもどりけんきにとかく候はゞこそ何事
もうちわすれて御めん候へ少人も御座あればてむま
なんどの御用は御めにかゝるべしといふさしもがう
なるうらの人御かいりきにおされて其後物を申さぬ
はことはりところ聞えけれ

判官武藏を召れくがをゆかば此さきにもものきこと
も有ぬべし便せんのだよりもあれかしと仰ければ辨
慶承てそうじて我君のこゝにてはびんせんかしこに

てはびんせんと思船ごのみをえたまふによつてかゝ
るむづかしき事の候ぞや四國西國のかつせんはみな
ふないくさにてあるあひだ船路の事をはよく心得て
候ふねを一そうかひとりて我とこぎくだらんになに
の子細の候べきはうぐわんげにもとおぼしめしなを
えの太郎をめされこのへんにうりふねや候御ひけい
あれなをえうけたまはりよそをひけい申迄も候はず
小鷹はやぶさなみくゞりいしわり太郎よぶこどりと
申てはやふねを七そうもつて候御ようにまかせてめ
さるべしと申義經聞召れてあらおびたゞしとまたさ
せたまひたるふね其や候そのなかにとつてもこたか
といへるふねはいか程もせよかしとて義經の祕藏に
おぼしめすゑろさやまきの御こしのものを取り出さ
せたまひてなをえの太郎にたふなをえ御こしの物を
うかべはやめされよと申十三人の人々はわれも／＼
とめされけり

うかりけるなをえの津をことゆへなくこぎいだし順
ぶうを得てほをあげりうんかいまんくとしてき
はもなしくものなみかすみのけぶりわけがたしさう
はなをみちとをしみぎはのうみはにしきに似かりほ
くてんにとびにけりいづれのせいけつかよしつねと
もろともにかへらんことをえんことはかんせうじや
うのながめなりうらやましやなかりがねははつきに
ならばきこそせめ義経はいつのときにみやこへとて
はかへるべしせめてたまつき計をばことづてむとの
たまひつゝ歌をよみ詩をつくりかぢをとりほをあげ
てなみぢはるかにふかれ行心ざしこそあはれなれ
かゝりけるところに佐度のくにほくさんのたけより
も黒雲一村立おほふ雨か風かあやしやおほせられ
けるところに又越後の國ざわうだうのうへよりもら
いでんくもをひやかすあはけしきのかはるはやまか
げかせのかくれじまいづくにかあるふねよせてこの
なんをのがるべしといふいはせもはてずして大風こ

すゑをふきくだきなぎさにいさごをとばすればへい
へいと玄たるうんかいにゆきの山こそおほかりけれ
みつをてんにふきあげさかさまのあめとぞ成たりけ
る上下ふねにゑひたまふそのなかにとつてもよしも
りと辨慶二人ばかりこそおほはだぬきにはだぬいて
ともへに立てぞまはりけるいかにもして此ふねをい
そへよすべからずあらゐそにふねをよせ船そんじて
はかなふまじかせにまかせてかぢをとればこもが風
にもまればほばたを切て風をとをせなをしも風がは
げしくはおほつなこづなをきりおとしともづなにゆ
ひつけひかすべしとりかぢより水いらばおもかぢへ
のりなをせ龜井かたをかはせんぢやうばかりのたし
なみにてかゝるときには前後をふかくに見えたまふ
ものかなふなそこへおり立てあかゆをなりとかへた
まへたとへこのふねがきかいかうらいけいたんこく
へおとさるゝと申共われゝ二人あらん程は何の子
細の候べき我君と申はうぐわんきこしめされてあの

よしもりと申は伊勢の國のものにてわたりの船にのりならつて船路の事をば心得べきがふしぎやな武藏はぶんにも武にもたつしやなるがふなちのみちをもこれほどに心得たるやふしぎやとそゝろにほめさせたまひけりあらいたはしや御せんの御身もたゞもましまさぬにあらきなみこはき風によはりはてたけとひとしきおんぐしをなみとなみだにゆりながしむづかるこゑもよはりはて今をかざりと見えたまふ十一人の人々は此よしを見まいらせげに／＼ふうふの中ほどにわりなき事はよもあらじいたはしや御せんのみやこに御座の御時は七重のひやうぶ八重のきちやう九重のまんのうちみすふきかへすかせをだにも人かといとひたまひしに今はいつしかかはりはてかゝる遠國はたうにて母はてたまはんいたはしやとをにがみをあざむくともがらもふかくのなみだながしける今迄はありともおぼえぬふねどもが其かすあまたほの見えたりあれはたすけ船かうれしやとおほせら

れけるところにさはなくしてあかはたさしあげたるむしや共がいかほどもおほくわきいでたりふしぎにおぼしめすところにふねのうちにこゑありてむねもり父子これにあり東國の九郎くわんしやこひしやとよばゝり近付とみゆる能登守のりつねはせうせん一そうに梶取めしぐしちかづくと見ゆる二位殿とおぼしきにこうせんていをいだし申たゞいまかいていし身をまづめんとてよしつねの方をうらめしげにみてたゝせたまふべんけい是をみていんだうせばやと思ひふなそこへつつといるときんすゝかけうちかけふねのへいたにつつたちあがつて大おんあげてよばはるきのふはにしのかいうんにてたせいのなげきを得けふは又北國の江にしてがんせむなげきをなす事はゆめまぼろしのごとくなり有るの法はさながらいまふく風のごとしむさのくわんをなす事はいまたつなみのごとく也大小のきろんはかせによつてかたちある一つのかせがあればこそおほくのなみもかたちあれ

ふうはの二けんはまよひのまへのゆめなり一のうみ
くうかいにしてしやうとなしとるときはかせも
なみもあらばこそいたはしやへいけにはさるべきち

しやのなければこそおほくのおんりやうをほとけと
はなさずしてしうちやくのたうしやうにりんゑゑた
まふいたはしさよ只今申辨慶がいんだうにつき法心
の一りをさとつてりんゑのきづなをはなれてめうか
くむゐのくらゐにつかせたまへと申とき二位殿のこ
ゑとしてむかしは一てんのこくむとしばんせうのせ
いしゆと有しかど今は又みもすそがはのながれ遠里
はていに身をいれししうたんのていきうしつとのし
うねんはいさごよりも猶おほしこれによつて六道お
ほくの里をめぐりさんづ八なんのきうこうをのがれ
がたく思ひしにたいいま申べんけいがいんだうにつ
き法心の一りをさとつてりんゑのきづなをはなれて
めうかくむゐのくらゐについたる事のうれしさよむ
かしはかたきいまはだうしとなりたまふいとま申て

さらばとてなみのそこにいらたまへば風もなみもま
づまつてふねはこなみにゆりすゆる人々のうれしさ
たとへんかたもなかりけり

やしま

さるほどに判官山ぶしのすがたをまなびくだらせ給ひけるほどに七十五日と申にははるかをくにきこえたる佐藤玄のぶにつき給ふ判官むさしをめされ日はやうこくを出ふさうをてらしやう／＼にしの山のはにかゝるいづくへもたちこえ家のつくり玄かるべからんするところをみて宿とり給へ辨慶承て我おひにはわか君を入申たればいかゞは思ひけんかめいがをひにとりかへれんじやくつかんでかたにかけ爰にのぼればゆん手にあたつてまるやま一つそびへり彼まゐる山のふもとにむねかどたかき家あり此家に立こえ宿とらばやとおもひほりのふなばしうち渡りおひをばいくわによせかけうちの體をみたりければいにしへはよし有人のすみけるかすみあらしたるとおぼしくて門はあれども戸びらなしついちあれどもおほひ

もなくかはらも軒もくちはてゝきうたひはかとをとぢむぐらはかべをあらそひてのきのひわだはこぼれをちちり／＼水はもりゆけどもむすびてとむる人はなしさてでいをみてあれば一ちやうのことに一めんのびはをば立ならべてはおきけれども引人のあらざればつねに松風ふきをちてざらりとひかんよりほかはびはこと玄らぶる人はなし昔にかはらぬものとはなでんのさくらほしのひかり月のひかりと日のひかり水のそにてとしをふるかはづばかりぞねをばなくうちの體のいたはしさに宿とらふする事をはつたとわすれときをうつして立たりしがにしておもてをながむればちぶつだうとおぼしくてほうぎやうづくりの御だうありたちよりおがみ申にあみだの三ぞんと人丸をえざうにうつしかけ堂のあたり四せつの玄きをまなぶあれはてゝは有けれどもそのころばかりはたがはず先ひがしは春にて大ゆふれいのむめの花むかしながらの山ざくらふし見さるだの花まで

もきゝのこずゑにさきみだれひはこがらうぐひすの
のきはの梅にはをやすめねをだしかねたる所には
フシけい／＼ほろ／＼のきじのこゑけいならばけいと
はなくしてなんぞや後のほろ／＼のこゑいつも春かと
みえにけり南は夏にてすはまに池をほらせたりい
けのその中にほうらいほうちやうゑいじうとて三つ
の島をぞつかせたる島よりろく地へはそりはしをか
けさせはしの下にはうら島太郎がつりぶねとうなん
くわちよかうつをぶねを五しきの絲にてつながらせじ
やうらくがじやうのかせふかばみぎはへよれとな
ひだるはいつも夏かとみえにけりにしは秋ににて四
方のこずゑのいろづきゑらぎくたえぬふせひきたは
ふゆかとうちみえさんがくはが／＼とそびへたりばい
たんのおきなをのがころもほうすけれどふゆをま
つこそやさしけれ冬にもなればすみをやくすみがま
のけぶりのあをふてほそくたちのぼるはいつもふゆ
かとみえにけりコトハあらおもしろやと打ながめ山

ぶしのこゑたてゝやどとるほうのあらさればこしに
付たるほらのかいのおをときのべてむさしやどとり
のかいをゑばらくふけど人をともしせずいや／＼これ
は人はなきやらんとおもひたしがへらんとせしとこ
ろにかせもふかぬにつま戸がきり／＼となるふしぎ
やと思ひそなたをきつとみてあれば六十にあまり七
十におよびたるにこうのくちばのこそでかみにつけ
すいしやうのじゆすをつまぐりくちにぶつごをと
へ十三人の山ぶしたちをつく／＼と御覽じてなにと
ものをほおほせもなくて我子の事を思ひ出してさき
だつものはなみだなりうけたまはれば御大將判官こ
のくにへ御下向のよしを申がわが子のつぎのぶたゝ
のぶが西國がたにてうたれずし御とも申てくだるな
らばはにふのこやにたちよりやどとり立たるらんも
是にはいかでまさるべきと思ひまはせば小ぐるまの
やるかたなきはこゝろかないにしへの山ぶしたちは
よくつれたもふときは五人六人こそ御とをりありし

にこのたびは上下十三人御ざある中に少人も一人ま
しますや法は萬ぼうぎやうは萬行とてよろづのぎや
うのその中に山ぶしのぎやうほどにもものうきことは
よもあらじあれほどいつくしき花のやうなる少人を
馬にもせ申くだれかしさらずばかり山ぶしたち
のかたにものせてくだらずしじやけんのまなこをふ
ませ申事のいたはしさよせう人のちゝはゝのふるさ
とにましゝてさこそなげかせ給ふらめみづからが
明くれと子どもが事をおもふにぞいとゞ思ひのかは
らじとなみだにくれてたち給ふにこう涙をとゞめこ
れはらうたいが住あらしにて候日のくれさせたまは
ぬさきに他しよにて御やどをめされさふらへ御やど
はかなひさふらふまじべんけい聞いていやゝこのと
ころにて宿とりそんじ野じゆく取てかなはじと思ひ
すゝかけのゑもれひきつくりひあらうたてのにこう
のおほせや一とをり一村雨のあまやどりも百しやう
のきゑんとうけたまはる費長房ノ假借飛鳥坊でいれいはつるの羽

がいにやどをかるだるまそんじやはあしのはにめす
ちやうはくばうがいにしへはうき木に宿をとるとこ
そ承りをよびて候へわれらばかりと思ひなばとても
ねられぬ月の夜に野にふすとてもちからなし御らん
せられ候へ十羅せつによの御あとをつがせ給ふべき
少人をたゞ一人ぐし申でいまでがいやならばのきの
玄たの御はうしの有べきなりとかりにけりにこうき
こしめしてげにゝもつとも御道理このところにて
みづから御やどを參らせすばたれやのものが心有て
參らすべきこなたへ御出候へとて十三人の山伏達を
中のでいへしやうせらるゝをのゝうつらせ給ひれ
いじせんぼうたつたうあそばすせんぼうも過ぬれば
へいじ一ぐてう花がたにくちつゝませねうばう達に
いだかせにこう出あはせ給ひ人のおやのこを思ふみ
ちほどにあはれなる事よもあらじかれらがゆくゑの
きかまほしさに自身立いで給ひ行衛もゑらぬ山伏た
ちにそゝろに酒をぞゑめられける酒もなかばとみえ

し時にこうむさしがたもとをひかへひる御宿をめされしとき都の人と仰さふらひしほどにそなたの方よりふきくる風もなつかしくさふらふもし御大將判官の行衛をばしゑろし召れてさふらふかゑろしめされてさふらはゝゆめばかりかたつて御とをり候へ辨慶聞てさてはわが君の御下向がをん國ゑんりにかくれもなくてぐちあまを出しとはするぞと心得にこうをはつたとにらんであらおかしのにこの仰やそれ山伏の名はよのつねおほしと申せ共御大將判官坊といふ山ぶしの名は今こそ聞て候へさりながらきやくそうは五人は五ヶ國十人は十國のものしつづる方もや候らんよの方へ御尋候へ此ほつしにをひてはいざゑらぬさうとあひさうなげにこたふるにこうきこしめされてげに／＼もつとも御道理人のゆくゑを問申とてわがせんぞをば申さずし御かたりあれと申ほどに御かたりなきことはりさふらふいで／＼みづからがせんぞを語てきかせ申さんは兩國のひでひらが

いもうと出羽のゑやうじがごけ次信たゝのぶ兄弟が我ははゝにてさふらふぞや一とせ御大將判官この國へ御下向有て佐藤ひでひらをもよほし十萬餘騎にちやくたうつけ御上洛の御時きみはあのむかひにみえたるまるやまのふもとに御ぢんをめすつまの庄司がつしやうかまへて參るつぎのぶたゝのぶ兄弟のもののきみの御ともと申佐藤殿聞召やあいかにこれより西國への御ともは國をへだてせきをこえはる／＼の道ぞわれ又らうたいにて子共のすがたを二度あひみん事かたしあに御とも申さばおとゝは國にとゝまれ弟御とも申さばあにはくにとゝまつて老體のちゝははがならふずるやうをみはてよあにが申けるやうは御ぢやうもつともにて候にたゝのぶは國にとゝまり父母をなぐさめ申せなにがし御共と申又おとゝが申けるはおとなしやかにつぎのぶはとゝまりちゝはゝをなぐさめ御申あれなにがし御ともと申これがたとへかや諸佛念衆生しゆじやう不念佛父母常念子々不

念父母ととかれたりもろくの佛は衆生を思ひ給へ共しゆじやう佛を思ひ申さずたかきもいやしきもおやは子をおもへど子は親をさらにおもはずわかき者共にて候程にみやこをみんするがうれしきと申たちよ刀よ馬ものゝぐと用ひず佐藤殿御らんじてちからをよばせ給はず白川二所の關まできみの御とも申こまをかしこにのりはなつて子共をかんじよへちかづけやあいかにきやうだいよ是より西國のかつせんはおくのいくさにべからずけしやういくさにてあるあひだかくるはやすけれども引が大事に有ときくかけうするときも兄弟つれてかけ又ひかうするときもきやうだいつれてひけまばらがけするなじやうをおとさばかさへまはれかさに付ておとすならばはるかのなぎさにくだつて小河についておとせ小河なれば大河に出よ大河に付ておとすならばやあかならずさとに出べしむらがらす立ならば手をひ死人のありと知てねんぶつ申とをれおきにかもめをとづればか

たきのふねと思へ西國がたにて兄をうたせ國もと候ちゝがみたう候はゝがみたいなんどゝてあにがかたみをとりのもつてたゞのぶ國へ下てらうしたわれをうらむるな弟をうたせつゝつぎのぶ國へ下るなよくはいひてあれど花のやうなる兄弟をえねとはさらにおもはぬぞたいし弓とりは名こそをしう候へ人は一代名はまつだいなについたらんそのきすはまつだいまでもようせじとても御とも申ならば命をまたふ高名をきはめとのばらもなをあげ庄司が家の名をもあげてたべとかやうにおゝせられ君に御いとま申宿所にかへらせ給ひかれらがこひしきおりゝは此ものどもがうへをきしはなぞのやまにたち入つねはなぐさみ給ひしが明れはつぎのぶこひしや暮はたゞのぶこひしや戀しゝとの給ひしこひかせやつもらんさてぢやうごうやきたりけん一日二日とすぎのまどかぎりのゆかにふし給ふみづからあまりのかなしさにいまだ庄司ぞんじやうにありしとききやうだい

のもの共に毛ぎれのしたるよろひきせみやこへのば
せたりつるがこゝろにかゝり思ふなり鎧をどしたて
よろこばせんと思ふとて兄のつぎのぶは小櫻をこの
めばこぎくらくおどしにけつかうすさてをとくのた
だのぶは卯の花をこのめばうの花をどしにけつかう
しいまやおそしとかのもの共まつしるしこそなかり
けれあらいたはしや庄司殿今をかぎりともえ給ふみ
づからかなしさに二りやうのものゝぐとり出し二人
のよめにきせ申中門にたゝせつぎのぶまいりて候ぞ
忠のぶまいりて候ぞなふちゝごせと申時今をかぎり
の庄司どのかつばとおきさせたまひて二人のよめの
すがたをつくぐと御らんじてそのいにしへのおも
かけの有とのみばかりにていまの心はなぐさみぬ三
月のなぐりにはこぎくらばかりやのこるらん四月の
なぐりには卯のはなばかりのこりけりそれ天づくの
ならひにこひしき人のおもかけをみんと思ふ時には
せいせき山にあがりいはのかどをたゝひてゑきろの

すゝをふるとかや大國のならひにはんごんかうをた
くとかやさて我朝のならひには夢にならではみえば
こそこれはうつゝにおもかけをみつるうれしさよこ
ひしのつぎのぶやあらこひしのたゝのぶとこれをさ
いごのことばにてあしたの露ときえさせ給ふ庄司に
はなれて三とせになり子共にわかれ七ねんふきや
くそうとの給ひてたもとをかほにをしあてゝはらは
らとなかせたまひけり

判官御ぎをたゝせ給ひ辨慶を召れ今迄はいかやうの
ものぞと思ひてあればさてはなにがしか命にかはり
てありしつぎのぶ忠のぶきやうだいがはゝにて有け
る事よかれら二人に一人めしつれ下りたる身にても
あらず何のいみじさにいにしへのよしつねとは名乗
べきぞむさし心得てかれらがさいごをよそながらみ
たるていにかたりにこうがこゝろをなぐさめてたべ
辨慶承て御ちやうのごとくふびんに候かたり出して
なぐさめうずるにて候とてもとの座敷になをり思ひ

よらぬ物がたりを二つ三つかたりざしきのけうをもよほし只今思ひ出したるふせいにてよこ手をちやうとあはせそのつぎのぶ忠信とやらんのさいご所をこそ此法師がみて候ひしが御のぞみにて候はゞ語てきかせ申さんといふにこう聞召れてあらうれしやさふらふかれらがゆく衛をきかんには十物十百物百をなりともつむべけれ共折ふしもちはせさふらふとてまきぎぬ三十疋むさしが前につませらるゝさて又かれらがためにとておどし立たるものゝぐをとり出しなふこれゝ御覽さふらへやかれらがこひしき折々はこのものゝぐをとりいだし人にもきせかけてもをき是をみてこそなぐさみしにきやくそうたちにまいらせてあすよりのこひしさを何にたよりてなぐさんさりとは力なしかれらが行衛をきかんにはあすの事をも思はずいでゝさらば參らせんと二りやうのものゝぐのわだかみとつて引立て武藏殿がまへにをく次信たゝのぶのわすれがたみつまのゆく衛をき

かんとてしや金百兩みつなりのたち花がたにつませつゝ四間のでいへいだき出てむさし殿がまへにをきかみからしもにいたるまで物がたりきかんずとて三戸をひそめてをともせず西塔のむさし八島のいそのかつせんをもとよりしたる事なればはじめよりをはりまで事こまかにぞかたりける年號はげんりやく元年ころは三月下じゆん四國さぬきの八しまのいそをとをりしとき源平のかつせんまつさい中とみゆるその時山ぶし六人さふらひしが二人はみんなといふ三人はとをらんと云中にもこのほつし人はなにともおもはゞ思へかやうのことをみをきてこそ熊野にまかり歸て人にもかたらばやともひおひをおろし小松のえだにかけをきはるかのなぎさに下て源平のかつせんをまづゝとみたりければさるのなかばの事なるにおきの御さぶねより六ひろばかりの小船一そうさざめかひておさするをみれば人三人のつたりけり一人はかんどり一人はわつは今一人は大将大將とおぼ

しきひとのはだには何をかめされけん大くちのそば
たか／＼とおつ取て卵の花をどしのよろひをめしな
しうちゑぼしをつこふで白あやたゝんではちまきに
むすとゑめようだうづくりの五人ばりまん中にぎり
よこたへ手矢ばかりおつ取て惣門のなぎさへ舟をさ
ざめかいておさすくがちかく成しかばふなばりにつ
つ立あがつて大音あげてぞ名のられたる只今こゝも
とにすゝみ出たる兵をいかなるものと思ふらん一ぼ
ん式部卿かづらはらの親王に九代のこうゐんかどわ
きの二なん能登の守のりつねそう門のなぎさへ度々
におひてかよふといへどいまだ東國の大將にげんざ
んせず東國の大將に見參とぞなのられける源平なり
をゑづめみやうじなのりをたしかにきく又げんじの
陣よりも大將とおぼしき人のすゝんで出させ給ふは
だには何をかめされけんあかちのにしきのひたゝれ
ひおどしのよろひをなじ毛のそで五枚かぶとにくわ
がたうつてたつがしらすへたるをゐくびにめされこ

んねんだうのこしのもの二尺七寸のこがねづくりの
御はかせあしをながにむすんでさげ二十四さいたる
きりうの矢はずだかに取てつけ三人ばりの真中にぎ
りたけ七きばかりにてまつくろなる馬に金ふくりん
のくらをかせ御身からげにめされたつしがみかたの
なかをゑづ／＼とあゆませ出あひちかく成しかばあ
ぶみふんばりくらかさにつつたちあがつて大音あげ
てぞなのられける只今こゝもとにすゝみ出たるつは
ものをいかなるものと思ふらん事もおろかやせいわ
てんわうに十代源九郎よしつねそうもののなぎさへ
度々にをひてむかふといへどいまだ能登殿とやらん
にげんざんみせず能登殿ならば花めづらしう見參と
ぞなのられけるのと殿此よし聞召れて大將の御めに
かゝりたるゑるしなくて候べきか小兵にては候へど
もなかがし一すじ奉んにいづくとやゝほを承て仕ら
んと有し時げんじの御大將のがれがたくやおもひけ
んこしよりもくれないに日を出したるあふぎぬきい

だしはらりとひらきむないたをほとくと音づれ矢
ごろはまつほじざうぞこの程をあそばせとぞお
せけるすでに御命あやうくみえさせ給ふ處に又げん
じのぢんよりもふしなはめのよろひきあし毛の馬に
のつたるむしや一騎かけ出きみの矢おもてにかけふ
さがつて大音上て名乗やう只今ちんとうにすゝみ出
たるつはものをいかなるものと思ふらん奥州の住人
に佐藤の庄司が二人の子あにのつぎのふ也のと殿の
大矢をまつたゝ中にうけとめてゑんでゑんまの帳に
てうつたへにせんとよばはつたりのと殿此よしきこ
し召あつがうなるつはものかな一騎當千とはかゝる
ものをいふらん心ざしのさぶらひをのりつねがてに
かけいをしてあればとてまけうす軍にかつべきに
てもあらず又たすけてあればとてかたうす軍にまく
べきにもあらばこそ心ざしのさぶらひをたすけてこ
そとの給ひてはめたるやをゆるされたりいしかつゝ
る處にわつばの菊王丸がさゝへ申けるやうはなふ御

誼にては候へども次のぶたゝのぶはがうの者にて候
ぞやそれをいかにと申に一の谷の落あし八島のおち
あしにもこゝにては次信かしこにては忠信と名乗て
せんてい女院の御ざぶねをもおそれずさび矢をいか
けしらうせき人にて候ぞや其上ぐん陣にてかたき一
騎うたるればみかた千ぎのつよりみかた一きうたる
ればかたき千騎のつよりと承て候ぞや其上彼者共は
異國のはんくわい張良をもあざむく程の人でさうい
くさ神の御たむけにはや一矢さうとさゝへたり能登
殿此よし聞召いしうも申たる菊王丸かな其ぎにて有
ならばなかざし一筋とらせんと十五束三かけつるぎ
のやうにみがいたるを五人ばりにからりとつがひも
とはすうらはす一つになれときりくと引しぼりま
ちをこぶしに引かけゑいやつとかつてうつたるはだ
うづきなんのごとく也一陣にすゝんだる扱も次信
がむないたにはつしとあたりちけぶりがばつと立を
し付へくつとぬけにけりむざんや次信さいごはよか

りけりたうのやをいんずとて弓とやを打つがつて打
上てひかんあふはなさんと二三度四五どしけれ共せ
い兵の大矢にきものたばねはとをされつ何かはもつ
てこらふべき弓と矢をばかゝりと捨弓手のあぶみけ
はなつてめてへかつばと落にけり今思ひあはすれば
御身の御しそくかいたはしさよとかたりけり二人の
よめ三人のまごにこうもろ共に一度にわつとさけび
ければぎけいをはじめ奉り十三人の人々も八島のい
そのかつせんを只今みる心地してすゝかけのたもと
をしぼられけりにこうなみだをとめつぎのぶは其
手にてはかなく成てさふらふか弟の忠信はさてなに
となりてさふらふぞ判官きこしめされて猶もするを
かたつてきかせよとおぼしめしむさしが方を御らん
すれば辨慶やがてふ得あらむざんや次信其後とをあ
さの事なるにかぶとの玄のひのおがきれてたぶさは
なみにゆられぬかゝりけるところに能登殿のわつば
菊王丸なにさまつぎのぶがくび取てげんざんに參ら

んと舟より下へとんでをるゝたゝのぶ此よしみるよ
りもあにのくび平家がたへわたしては弓やのちじよ
くぞと思ひ四人ばりに十四そく取てからと打つがひ
よつ引てひようといたあらむざんや菊王丸がいさみ
にいさんでをり立たるひざの口にしたゝかにたつ大
事の手なればうけもあへすいぬゐにだうどふすたい
のぶ此よしみるよりもわつばがくび取てあにのきや
うやうにほうせんとこまをかしこにのりはなつてう
ちものぬいてさしかざしもみにもふてぞよつたりけ
る能登殿此よし御覽じて一時なりともそれがしがう
ちにあらんわつばがくびげんしがたへわたしては弓
矢のちじよくとおぼし召舟よりもとんでをり菊王が
上おびをかひつかんで舟のうちへゑいやつといふて
なげられけりあらむざんや菊王丸この手にてかんび
やうするならばしぬまじかりつるものなれども大ぢ
からにふねのせがいにしたゝかになけつつけられてか
うべみぢんにくだけてつゐにはかなくなつたりけり

事かりそめとはおもひけれどもげんじにさふらいう
たるれば平家にも郎等しんだりけり能登の守のりつ
ね此よしを御覽じてすきまかぞへのたいのぶにたい
なかとをされ候ひてはあしかりなとおぼしめしお
きへ舟をおさせらるゝかどわきのへいざいしやう能
登の守のり經こそくがのいくさにしまけてあれのり
つねうたするなようつゝけつはものと仰けりうけた
まはると申てつくし大名に大とももしよきやうきうち
はらだまつらとうこれとうこれすみへづきやますみ
此人々をさきとして七百餘騎にはすぎさりけりふね
一めんにをしならべむまどもをば海上におひひてふ
なばらにひつつけゝさゝめかひておよがせらるゝ
くがちかく成しかばこまを引よせゝひたゝとう
ち乗て一まいはぎのわたりだてを馬のかしらにつき
かざし七百餘騎がむれたか松へ一度にさつとかけあ
げたり源氏二百餘騎おもてのひろきちやうだて一め
んにつかせやぶすまつつてさし取引つめさんゝ

に射たりけり平家のぐんびやう共は一さゝへもさゝ
へずしなぎさへさつと引たりけり惡七兵衛これをみ
てにくしきたなしかへせもどせとおめきさけんでか
けにけりげんじ二百よき矢だねつくればうち物のさ
やをばづしわつといふてかけ合平家のをはるゝ時も
有源氏のおはるゝ時も有おふつまくつつかけつもど
いつさるのなかばよりとりのをはり迄はかけあひの
合戦に源氏平家つかれつゝあひ引にさつと引たりけ
りさいたうのむさしばうか此よしをみるよりも是非
それがし一合戦仕りげんざんに參らんとこのむ所の
なぎなたみづぐるまにまはひてさいたうの辨慶がた
だ今かくるなり平家がたのぐんびやうどもにくしき
たなしかへせもどせと大ごゑをあげてぞかけにける
平けのくむ兵どもは辨慶がかゝるをみて中をあけて
とをしけり本より辨慶かたきにあふてはやき事ゑん
こうが本するをつたひあらたかゝとやをくゝつてき
じにあふがごとく也大こくのしうちくわいはかんこ

くのせきをやぶつてきにあふがごとくなりもとよりむさしうでのちからはおぼへたり長刀のかねはよしなぎなたをとりのべてむかふものゝまつかうにぐるものゝをしつけほろつけたかごしだうなかくさずりのあまりをあたるをさいはひにはらめかいてぞきつたりける手もとにすゝむつはものを三十六騎はらはらときりふせ大勢に手をおふせ東西へばつとをうちらしなぎなたかたにうちかたげあふみかたの陣へ引たりける武藏坊がありさまはたいはんくわいもかくやらんへいけのぐんひやう共舟よりもあかりしときは七百餘騎とみえしかども二百騎ばかりにうちなされおきへまばらにさつとひくげんし二百餘騎も八十三騎にうちなされうりうむざん本ノマ、にあがりをものゝちんどりゑづまりければいぬゐのこくにぞなりにける判官むさしをめされ奥州ミナモトの忠信はいづくにあるぞぐして參れ辨慶承て御前を罷立此へんに奥州の佐藤殿やましますつぎのいづくに有ぞ大將のめしのあ

るにとつく御參りあれとたからかによははるあらむざんやたいのぶひるしやきやうつぎのお手をひぬるとみるからに合戦こゝろにそますとあるやまのはにそなたばかりをみをくり心ぼそげにて立たりしが大將のめしと承てむさしとつれて君の御前にかしこまるはうぐはん御らんじていかにたいのぶあにつぎのぶが行衛はゑらぬか忠信承てさん候兄にて候ものひる手をひぬると見候いしか共かけあひのかつせんに隙なくしてその行衛をもぞんせすと申あふそれはさそ有らん今しやうにもあらばとふべきえさい有又えしてもあるならばきやうやうよきにすべしはやとくとくとの御ちやうなり忠信承てあら有がたの御誕や候御意くだらずともたづねたく思ひしにまして御ちやうのうへおつとこたへて御前を立めのとにゑのぶの十郎みつとををともしてはるかのなぎさにくだりけり比は三月廿日あまりの事なれば月は出すしてみちみえずなみだぞ道のゑるべなる太刀をつえにつ

きはるかのなぎさにくだりつゝ晝のいくさばは此へ
んぞと思ひてむれたかまつの西東すさきのだうの北
南なきさにそふて尋けり此へんに奥州の佐藤どのや
おはします次信やましますとゑづかによふでぞとを
りける軍みだれの事なれば手をひ死人のふしたるは
さんをみだしたごとく也手をひ其のようごゑみゝ
にふれてあはれなりのりこえゝ尋るにいとゝあは
れぞまさりけるむれ高松の事なればすさきによする
なみのをとほまちどりのともよぶ聲われを問かとお
ぼしく心ぼそさはまさりけりあらむざんや次信は大
事の手をひて有けるがおとゝの忠信にさいごのな
ごりやをしかりけん玄にもやらすしてあげふねのあ
たりに下人の男にかんびようせられてゐたりしが忠
信がこゑときゝいそうつ波ともろともにたそよとこ
そこたへけれ忠信あまりのうれしさにするゝとは
しりより御手は大事にましますか心は何と御入候ぞ
つぎのぶ聞て我身の事をばなにともしはずしゑばら

く有ていきをつきみかたはいか程にうちなされて有
ぞ大將は御手もをひ給はぬかさておことは手をばお
はぬかたゝのぶ承てさん候みかたはわづか八十三騎
にうちなされ候ひぬ大將御手もをひ給はずなにがし
も手もおはず御心やすくおぼしめせつぎのぶ聞てあ
らうれしいものかなその義にて有ならばいまだ今生
にいきのかよふ時大將の御めにかゝりたひぞぐして
參れたゝ信あまりのうれしさにすさきのだうよりも
やり戸をいそぎとりよせつぎのぶをかきのせまいら
せてさきをたゝのぶかきければあとを玄のふぞかき
にけるなみだぞみちのゑるべなり
武藏殿ひたちどの龜井かたをか駿河殿弓取と申はけ
ふは人のうへあすのわがみのうへぞかしいざや佐藤
をみつがんとはるかのなぎさにをりくだり次信をか
いしやくしてむれ高松にゐがりければひがしの山の
はに月ほのゝと出にけりはやかいて參たるよしを
申判官聞召れてちかふかけ承と申て御ざまちかくか

きよせければ忝もはうぐはん御ぎをよせさせ給ひつ
ぎのぶがかうべを御ひぎのうへにかきのせ給ひ手は
大事なるか心は何と有ぞ思ひをく事あらば只今申せ
明日にも成ならば奥州へ人をくだすべしいかに／＼
と仰けれども御返事をば申さすうちうなづいたるば
かりにてたうのうちにてよう聲ありわだち／＼ぶさう
にしてあらむざんや次信さこそ心がうなるむしやと
申ながらさいごちかづきぬればちからなしふびんな
る次第かなとておの／＼涙をながされけりあとにて
かいしやく仕るおと／＼のたゞのぶ手をひにちからを
つけばやと思ひあらかなるこゑをあげあらゆいに
本^ノひ、
かひなのつぎのぶのふせいや候たとへ事にては候は
ね共かまくらのごん五郎かげ正はくりや川の城にて
とりのうみの彌三郎にゆんでのまなこをいさせその
矢をぬかでお^{つニアラス}りかけ三日みやもつてまはりたうの矢
をいふせてこそ今かまくら御りやうのみやとい
ははれ給ふと承れそれ程にこそおはせず共か程のほ

そや一すじにさやうにやみ／＼とよはりたまふが
たじけなくもまくらもとは三代さうおんの主君弓手
はち／＼ぶのまげたいめではわだのよしもりなりあと
にてかやうに申はおと／＼の忠信にて候ぞや何事をも
御前で申させ給へとてさしもにがうなる忠信も今の
わかれのかなしさに二手のくさりをぬらしけりつぎ
のお聞てなにと申ぞたゞのぶ權五郎かげまさはくり
や川のじやうにてとりのうみの彌三郎に弓手のまな
こをいさせたうの矢をいふせけるよなそれは少事
の手なればこそ三日はもつてまはりつらめかげまさ
につぎのぶがをとるべきにてあらねども能登殿の大
矢は大國までもかくれなきにたゞ中をとをされ次信
にてあればこそ今迄もながらへ御前でものを申せゑ
い何事も／＼みないつはりとなるぞとよ國へかたみ
をくだすべしはだのまもりをば老してましますち／＼
は／＼の二人に一人ながらへてもましますばゆきみの
まどのをれ竹の世はさかさまの事なれどかたみにこ

れを參らせんびんのかみをばわか共が母にとらすべしむちとゆがけをば二人のわかにとらすべし太刀をば玄のぶにとらするぞよろひは毛ぎれしたり共わどのとつてきてつぎのぶにそふたと思ふべしかまいたいのぶよ次信うきよに有やうに心づかひを仕てはうばいにくまれ申な御いとま申て我君いとま申てはうばいたちあらなごりをしのたいのぶよかうしやうにねんぶつ十べんばかりとなへしがかすかなるこゑをあげむさしどのはいづくにぞをとくのたいのぶにめがけてたべといひすてゝをしかるべしをしむべしあしたのつゆときえにけり上下ばんみんをしなべてあはれとはぬ人ぞなき判官ふびんに思召たい今もきやうやうすべけれどもひる平家まけいくさにて有あいだもし夜うちにああるらんとようがいかまへようじん隙もまします明ければ四^{志度ノ借字カ}どの道場のひじりをしやうじきやうやうねんごろに玄給ふあらむざんやつぎのぶ度々所望せし事をかなへぬ事のむざ

んさよ所望といつば別の義にても候はずあれに候太夫ぐろか事一とせよしつね奥州へくだり佐藤ひでひらをもよほし十萬餘騎にちやくたうつけ上洛の時秀平入道大黒小ぐろとて二疋の馬をひさうしてもつ小黒といつしはあの馬よりもたけばつくんにのぼつて候ひつれ共心をくれたるによつてこぐろと名付大ぐろとはあの馬の事秀ひら申せしはそれ弓取の戦ぢやうにのぞんで高名をきはむる事馬ものゝぐに玄くはなし是にめされて御代をひらかせ給へとてもものゝぐ一りやうをしそへてゑさす何がしが手にわたりのり心よし足のはやき事とぶ鳥などのごとく也がくの名によそへてせいがいひはと名付かまくら殿のいけづきするすみかばどのゝとらつき毛何がしがせいがいひはとてわてうにうへこす馬はなしげんりやく元年正月廿日にうち川を渡り同き二月七日に一の谷てつかいがみねをおとし平家のくびおほく取て大路をわたし院の御めにかゝり太夫の判官になされ申其時馬も

源氏に吉事の馬なればとて忝もりんげんにて太夫黒にふするされはゑんぎのみかどの御ときは白さぎをいだきとつて五位になされしためしこそ候へ馬の太夫づかさはためしまれなりとて太夫ぐろにぞふせられける東寺四塚の邊にてあらむざんや次信何がしがあたりへ駒かつし／＼とあゆませあつばれ御馬候や奥にてみ申せしよりはたけばつくんにのぼつて候あはれ此馬を給れかし君のまつさきがけ討じに仕らんするいのちは露ちり程もをしからじと度々所望せしか共其比つぎのぶにおとらぬちうのぶしおほし自餘のうらみをきじと思ひ今までとらせぬ事のむざんさよさいごなれば忠信引たふこそ思ふらんよし／＼おんをみて恩をえらざるはきちくぼくせきにたとへたりいで／＼義經も太夫黒引て命のをんをほうせんと忝も手をたゆふ黒がみづつきにかけさせ給ひ次信がえがいのまはりをかなたこなたへ引まはしそのゝち忠信給りげにやつぎのぶ此世にてはし／＼と思ひ

しねんやつうじけん馬はきたのものなればほくふうにいばひてゑらあはかふてつゐにむなく成にけり以下のものはをみて正しく次信給りてめいどまでのるよとはいはぬものこそなかりけれつたへきく大國の大ぞうくわうていはひげを切てはいにやきこうしんにあたへたびにききずをいやし血をえめしせんしをなでしかば命はぎによつてかろし命は恩のためにつかはずいかにも其身のころさるゝ事をいたむまじはんでうのぎけいは忠有さぶらいに太夫ぐろをひかれけりこれをみる人々いよ／＼いさみ有べしとかんせぬ人はなかりけりあくる日の合戦にげんじ七騎にうちなされ四どの浦とかやまつがはなといふ所に陣取てまします熊野の別當たんぞう一千餘騎のせいにてみかたに參らるゝ源氏の御せい一千餘騎に成給ひをぐる平家を事ゆへなくたひらげ三しゆのゑんぎことゆへなく都にかへし給ひけるおとうとの忠のぶ吉野山まで御供すよしの山にて大しゆたちの心がはり

の有しときその時たゞのぶ判官つかさときせながを
申給り一人みねにとゞまり判官殿と名乗て吉野法師
を待うけさんぐに合戦しそこにてもうたれずみや
こへのぼつて腹切てむなしくなるその人ぐの事な
らば今生のたいめむは思ひもよらぬ事也念佛し給へ
とてむさし殿がおひより次信の形み忠信の形みを取
出し候ひてにこうに是を奉るにこう形みを取上かほ
にあてむねにあてりうていこがれかなしむ何にたと
へん方もなし判官御覽じ心づくしにいつまでつゝむ
べきと思召れける間是こそいにしへの源九郎義經と
御名乗有ければにこう承子共が事は扱置ぬ三代さう
をんの君をおがみ申こそなげきの中よろこびと悦ぶ
ことはかぎりなし是にまばらくとゞめ申てひらいづ
みへ使を立にけり秀平悦ふでちやくし西きど二男や
す平を先として三千よきのせいにて御むかいにまい
りひらいづみへ入申衣川たかだちと申所にまんざう
に御所を立やなぎの御所と申てあいたさかたつがる

がつふそとの浦ひわうばんをかまへいつきかしづき
申かの秀平が心中をばきせん上下をしなべかんせぬ
人はなかりけり

本ノマ、

きよしげ

判官武藏をめされいかにむさし聞かるとよ諸國の大名
高家たちもよしつねに心ざしのせつなき人も有らん
急ぎ廻文をまはし頼てみんとの御ぢやうなりべんけ
い承て狀を書て參らせければ判官御判をすへさせ給
ひ扱此狀をたれやのものにかふれさすべきたれ／＼
と申とも伊勢の三郎よしもり駿河の次郎清重かれら
二人ぞ候らんいそぎめせとて御まへにめされいかに
かた／＼此じやうを諸國のふしにみせてたべ萬事た
のむとの御誼なり二人の人々承て世間のやうをあん
するに合戦はひさしく候まじおなじく候は／＼と／＼ま
つて御供せんと申はうぐわんきこしめされていくさ
のともをせん事も此くわいぶんをまはさむももつて
はひとしかるべしたいたのむとの御ぢやうなり
二人の人々承てこのうへはちからをよばずとてやま

ぶしのすがたにさまをかへをいに御はんをかくしも
ちたかだちどのを出にけりかりそめながらわかれと
は後にぞ思ひゑられたるかくて二人の人々はおくち
かき國々下野上野安房かづさひたち下總かひ信濃武
藏の國へうちこえち／＼ぶどのを初七たうの人々に御
はんおがませ申本田のしゆくへぞ出にけるよしもり
がいふやうはこれより中道越よりも駿河の國へ出ん
といふ清重聞て日本の花のみやこは日のもとの大し
やうた／＼し當時は猶かまくらはなやかなる新京た
りと聞てあり四十にをよぶきよしげがきこふる名所
を見ざらんはふかくのいたりとぞんするなり此つゐ
でに鎌倉をひとめみばやと申けりよしもりがこれを
きゝかほどの大事をもちながら遊山見物むやくなり
もしも此事めでたふてお^まかまくらの御わひようあ
らば見あかうする鎌倉を^まかまるべくは駿河殿すぐに
伊豆へと申けりきよしげ聞て腹をたてかゝらんよう
のためにこそさまをかへたるいろ見ゆれ諸國一見や

まぶしのいかほどおほくとをらんかにするがばかりがあやしめられんはきよしげ計が運さうか御身は一とせかまくら おりのぼりをえげくしてみだれる人もありこそするらんいづくにあひづをさし給へやがてをつつき申さんというまのしゆくをのぼりに鎌倉さしてゆくほどにちからをよばずよしもりも同道申たけれ共おほせのごとくそれがしは大略人が見えたり駿河のくに成たけの玄たにて待申さんとくをつつかせ給へとよしもりは伊豆の國駿河次郎はかまくらへゆきわかるゝをさいごとはのちにぞおもひえられたる

さるあひだきよしげはふたまた河をわたりつるがをかくも井のみねをはるゝとうちながめけはひざかにあがりかまくらうちを見わたせばこゝろことばもをよばれずあらおもしろのかまくらや神宮寺のまつかせはりよじんの夢やさますらんぶつかくむねをならべつゝたみの在家はのきつゝきやつ七がうについ

ちのかず以上八百餘もんなりゆいのはまに大とりゐいづみがやつにいひしまは名にしおほたる名所かなしやうぐんの御所をまんかにひがしむきにぞ立られける諸大名のざい鎌くら日夜朝暮のはんすかふゆゆしかりける御くわほうかなあはれわばきみ判官をかやうにいづき申さでとおもへばたけき清重もなみだこぼるゝばかりなりその夜は若宮殿に參籠申夜もすがらげんせあんをん後生せんしよときせいしさこそよしもりがたけの玄たの宿にてまつらんものをとおもひあけゝればをひ取てかたにかけいそげばほどなく音にきくたかせ川にぞつきにけるかゝりける處に梶原の源太かげすゑはやきとりがりして歸りしが河中にてむずとゆきあふたり日比みゝえし事ぞかしあやしめられあしかりなんとぞんすれば笠をかたづけ清重はさらぬ體にてとをりけりうんのきはめのかなしさはならひの風が一もみはつともふて來てきよしげがきたりけるかさをづんと吹切てときんとつ

れてかはにおち浮つゑづむつながれたり清重これを見てさかやき人にみえられてあしかりなむとぞんすればすゝかけのさうのそでをさつとかざひて笠ををふてぞはしりける弓づえ二つえ三つえにてほどなくをつつき候ひてぬれたるかさをうち着つゝさらぬ體にてとをりけり

源太目ばやき男にてこゝをとをる山伏の河風にかさをとられしがひたいを見たればさかやきのゑろく見えつるあやしき山伏ならばとをすべしやうあらばめしとれとてかけ足はやき駒共にめんゝにむちをもみそへゝいかにこゝもとをとをり給ふ山伏にも申さんといふまゝに我もゝとをつかくる清重これをみて一あしなりとも弓取のかたきにうしろを見する事ふかくの至とぞんすれ共きみの御はんどくにぐにの人々のおうけの判共のあらはれむするかなしさにみゝにもさらにきゝ入す五町ばかりゆきすぎこだかきところにはしりあがつてをひをひつたとおろ

しをひのかたはこよりも火うちつけだけとりいだしちやうゝとうちつけ御はんとおうけのはんどもをせつなにやひてすてたりしはがう成ゆへのはやわざかなとはめぬ人こそなかりけれ

そののち大せいとりこむればをひのあしにゆひつてたる三じやく八寸のいかものづくりするりとぬいてまつかうにさしかざし大をんあげてなれるやういかにかたゝゝが見とがめたるはだうりなりはうぐわんどのゝ御うちのさぶらひ駿河次郎清重と申者にて候がきみの御意にちがひ申おくをばいだされまいらせて二ちやうのゆみをひかじため山伏のすがたにさまをかへ諸國一見まはりしがうんがつきて源太にみあひぬればちからなしいまにおひてそれがし判官殿の御内にあるなしなんどのちんばうをすべき身にても有ばこそ四國九國のたゝかひにも駿河次郎がふるまいをみても聞てもありつらんそこをひくなといふまゝに大せいのなかへわつて入するが次郎がありさま

をものによく／＼たとふればまつふくかせにかれ葉をちらし小鳥千ばに鷹一もとはなちあはせたごとくなりいまだときもうつさぬまにくつきやうのつはものを二十七騎きりふせ大勢に手をおふせ東西へはつとをつちらしがうなるものゝ自がいやうを見ならへ源太といふまゝにたちの真中をつ取てはら十文字にかき切て三十八と申にはかたせ河にて討れたる彼駿河次郎きよしげをほめぬ人こそなかりけれ

さるあひだ源太は郎等あまたうたせけれ共きよしげが首をとりなゝめならずによろこふでいそぎ頼朝の御めにかくる頼朝御覽じてぎけいがらうどうのくびならばゆいのはまにかけよとてはまのかうにぞかけられけるさるあひだよしもりは竹の下のしゆくにてやくそくの日かずをいかにまでもをそかりけりあまりひさしくぞんずれば海道にたちいでみちゆき人にも問ばやと思ひはやかいだうにぞいでにけるかゝりけるところに二人つれたるたび人のきやうのかた

へとをりしがよしもりをみるよりもやまぶしを見申せばおとゝひの事のあはれさよ人間有爲のならひとは申せどもきうせんにかゝる事なげきのなかのなげきぞとかたりすてゝぞとをりけるよしもりがこれをきゝやうありげなとおもひていそぎをつつきたび人のたもとを取てひつとゝめなふいかやうなる山伏がなにと成て候ぞわれらがやうなるものならばきかまほしやと申けりたび人聞ていふやうはさむ候おとゝひの事なるにかまくらをいでゝこなたなるかたせがはいふところにて判官殿の御内のさぶらひ駿河次郎清しげと申人にて候が梶原の源太景末に見あひぬればちからなしをひふみやぶりかたばこよりも火打つけだけ取出しちやう／＼と打つけ御判とおぼしきまきものをせつなにやひて^{季ノ借字}拵給ひ其後大勢とりこむればをひのあしにゆひ付たる三尺八寸のいかもの作りするりとぬきまつかうにさしかざし大せいのなかへわつて入そこばく人をほろぼし我身もはらをきり

給ふくびをばとつて鎌倉へのぼせられて候ぞ山ぶし
とてぞとをりける

よしもりがこれをきゝさばかりそれがしがとゞめつ
るをもちゐす扱はうたれてありけるぞやかくと申て
それがしが奥へまかりくだるならばいかばかり判官
も御こゝろほそくおぼすらんとてものがれぬあさが
ほの日かけをいとふふせいにて奥州くだりもよしな
やとて明ればやどにていとまごひ竹の下をぞ出にけ
り其よりもよしもりは都まちかき大名小名に御判お
がませ申すぐに京へぞのぼりけるたそがれとときの事
なるに備中殿のかゝりのまへを笠をかたぶけよしも
りはさらぬていにてとをりけり番のつはものは是をみ
て夜ぬんにとをるやまぶしはやう有て覺ゆるなりか
さをぬがれ候へとて一度にはらりとおり立たりよし
もりこのよしみるよりもそれやまぶしのならひにて
みね渡りをする時はこの葉を煮き木の根を枕とつか
まつりよるをもひるをもきはぬきやう出羽のはぐ

ろのやまぶしがくま野へ參るとこたへたり番のつは
ものは是を聞何の山ぶしのぎやうにてもあらばあれか
さをぬがれ候へとてよしもりがきたりけるまらうち
ての笠をひきおとしてみてあればあんの内のよしも
りなり

ばんのつはものこれを見て一度にとつとわらひてだ
うりにて御身はよるはとをり給ふぞとまんなかにと
りこむるよしもり此よしみるよりもをひやくひまの
あらざればはらくとふみやぶつてをひのあしにゆ
ひつけたる一尺八寸のうちがたなするりとぬいてま
つかうにさしかざし大おんあげて名乗やういかにか
たぐが見とがめたるは道理也判官殿の御内のさぶ
らひいせの三郎よしもりなりたいし當家のばんのも
のあはぬかたきとぞむすれどもゆみとりのまにどこ
ろをばさだめえずそこをひくなといふまゝに大勢の
なかへわつていりにしひがしきたみなみくもでかぐ
なは十文字やつはながたといふものにわりたてをん

まはしてさん／＼に切たりけり手もとにすゝむつは
ものを十七八騎きりふせ大勢に手をおふせ東西へは
つとをつちらしかなのまんなかをつとつてはら十
文字にかききつて四十三にてうたれたるよしもりが
心中を貴賤上下をしなべかんせぬ人ぞなかりける

たかだち

さるほどにかまくら殿かちはらをめされいかにかぢはらうけたまはれまことにぎけいがむほんにおゐてうたがふところなしそぎよしつねをたいぢしよをおさめんと御ちやうにてながさきの四郎に三百よきをくだしたぶ長なき三百よきを給はりいそぎおくにもつきしかばさいそくまはしせいぞろへやすひらがたちによりきしてるいの太郎をふでとりにてちやくたうをつくるまづそうりやうなればやすひらつぎにしきど四郎もとよしひづめの五郎たまつくりのまぐらの御きやうだいそのほかの人々にけつその彌七きはらのげんごくも井の小太郎あつせのぎやうぶ中じまようとうじまつしまたまつくりをしまのひやうとうをさきとしてみやうじのさふらひ七百よきそのほかつがうつはもの七千三百よきとはやちやくた

うをつくるをも／＼ころはいつなるらんぶんち五ねんうるう四月二十七日こんにつはひがらよからすみやうにちのたつの刻にむかふべしとさだめ大田やま口なかむらにすでにちんとつてひかへたりさてもたかだちの御しよにはかたきむかふよしをきこしめしさぶらびたちをめさるゝによひまではさふらひ八人大將ともに九人ときこゑしがつぐ日の御かせんに侍九人大將ともに十人のゆらいをくはしくたづぬるにきしうくまのゝぢう人すゝきの三郎ゑげいへなりあるやすゝきにようばうにかたりけるはなにがしおもふ事ありて此あかつきあうしうへまかりくだり候べしこゝろのまゝにまかりくだりきみのめでたふましまさばみやうねんのなつのころたよりのふみをまいらせんなつのころしもすぎゆかばうきよはふぢやうのならひみちのくさばのつゆしもときゑぬるよとおぼしめしあとをばたのみたてまつるいとま申てさらばとてぢたいがすゝきとのくまのそだちの人なれば

山ぶしの姿にさまをかへをいとつてかたにかけもの
うきた^はのつゑをつきそのふしぐによをこめてふ
ぢしろをたちいでゝはやこゝのへにつきにけり人め

玄のぶのたびなればいつしか花のみやこをばかすみ
とともにたちいでゝ大津のうらより舟にのりかひづ
のうらにあがりつゝほつくくみちのうきなんじよを
くだらせ給ひけるほどに人のやどをかさゝればやぶ
れただうてらいはのほらかみすみあらすやしろをば
やどなきまゝのやどとして七十五日と申にはあうし
うころも川たかだちの御しよにつきにけりすいきな
にとかおもひけんをひすゝかけをばかたはらにとり
かへしをひのなかよりもちかけとりいだしきるま
まに十二ふかけたるあみがさをぶかゝとひつこう
でたかだちどのゝていをこゝろゑづかに見たてまつ
るにきしうふぢしろにてうけたまはりをよびしとき
は日ばんたうばんをせうにんさながら御うちにみち
みちてもんぐわいにこまのたてどもなきやうにうけ

たまはりをよびしがこれはなにとてさびしく御ざあ
るやらんふしぎさよとおもひもんのからぬしきにこ
しをかけ御うちのをいきゝゐたり

さてもたかだちの御しよにはかたきむかふよしをき
こしめしさぶらひたちをめさるゝにいつもかはらぬ
むさしばうをさきとしてい上八ノきみの御まへにか
しこまるはうぐわん御らんじていかにかたぐがて
にかけくびとつてくわんとうへまいらせくんこうの
しやうにあづからばはうこうのちうにはごせをとへ
いかにゝとおほせけれども御へんじを申ものはな
しかたをかかめ井の六郎がめとめときつと見あはせ
てこはくちおしき御ちやうかなたれあつてわがきみ
の御くびをたまはつてかまくらへかうさんをば申べ
き今までおちぬ人々^びはみな御ともところおぼすらん
さはありながら此なかにもおちんと思ふ人のあらば
ひらにいとまを申ておちよたれもうらみはのこるま
じとざしきをきつと見わたせばよしだけひろつな一

どうにすゝしく申されたるものやたれもかやうに申
たき御へんじにて候ぞやおもふにかたきあかつきよ
すべしをふてからめてと二てにわけぬ事あらじみか
たはたとひぶせいなりともりやうぢんにむらがつて
いくさははなをちらすべしまだほのくらきさうてう
にあればをふてこれはからめてなにとてこゑをば
きくともすがたはみじわれも人もこゝろまづかにあ
るときにかみへ申て御しゆ給はりさいごのなごりを
おしむべしもつとも然るべしとしてしゆぐの太へい
おほづゝを御でゐへ申いだしつゝきみも御いでまし
ましてにようばうたちの御しやくにてかみにさかづ
きすはりければ下はい上八人三ごんのさけすぐれば
のちにはたがひに入みだれておもひざしおもひどり
じしやくじもりのらくあそびまふつうたふつ呑ほど
にかめ井がうだるさかづきをむさしどのおもひ
ざしたつてまひをぞまひにける
ほうらいさんにはちとせふるまつのゑだにつるすく

ういはほのかたにかめあそぶしほりみつがしらかも
のいれくびまぎのはがへしをさつとたちまはるとこ
ろにてもんぐわいを見てあればたちわきばさんだ男
のあみがさまぶかにひつこうだるがからぬしきにこ
しをかけかめ井がまひをきゝゐたり
かめ井の六郎もあればたれなるらんとおもひしがげ
にとおもひよりなければまひすでにまひおさめしや
くにてかけてゐたりしが門なるおとこのこゑとして
大のこはねをさしあげてなふく御うちへあんない
申候はんとたからかによははるなりをまづめでざし
きにはたれなるらんときく處にさいたうのむさしこ
のこゑをきゝつけてあればかたきのやつばらがあん
ないけんみのそのためにいつはりまなできたつて
さうなにさまでうのつかひをばあますまじといふま
まにはかまのそばをたかくとつてなぎなたをつとり
いでんとすかめ井の六郎もつゝいてざしきをつつと
立むさしがそでをひつといめなふまづまり給へむさ

しどのふしぎやこのこゑをきいたるやうにおもふとてむさしをとめてかめ井はしりいでゝ見てあればしやきやうすゝきのさぶらふどのたびやつれにおもやせて一人こゝにたちたまふかめ井ゆめともわきまへずするくとはしりよりすゝきがたもとにとりつけばあにもをとゝにとりつけてさていかにくとはばかりなりはるかにありてすゝきどのやあなに事かあるかめ井かめ井此よしうけたまはりその事にて候ぞやきみの御うんもわれらがうんもいま此ときにつきはてゝあすをかぎりとはやなりぬそれをいかにと申にひでひらうきよにありしほどはきみをもたつとみ申せしがうゐむじやうのならひとてひでひらここの冬はかなくなりて候ぞやそのこともわがきみにこゝろがはりをつかまつりかまくらよりのけんみにはながさきの四郎どのを申くだし給はりてさてくにの大しやうにてるゐだてがむかひつゝおほた山ぐち中むらにちんとつてあると聞てさうなどやかほどに御み

のおぼしめしたつならば二ねんも三ねんもさきに御くだりましゝて一たんらくを玄給ひておもひでとおぼしめすべきになんぞつめたる御うんかはこんにち下りたまふこそよろこびのなかのなげきなれんじやうにてみゝゑ申こそなによりもつてうれしう候へうきよのまうしうはれてあり上にも玄ろしめさるまじとがめあやしむものあらじをちこち人のふせいにて御かへりあれやすゝきどのすゝき此よしうちきいてふかくなりかめ井れうもんげんしやうの土にはねはうつめどもなをばうづむがふかくさよ玄ていしうちうふしふうふ三世のきゑんなくしては何しに今日まいるべきぞすゝきがまいりて候とかみへ申せかめ井とてわらんづぬぎすてうへにきたるうちかけぬいでふはとすておとゝひつれてはうぐわんの御まへをさしてぞまいりける

はうぐわん御らんじてめづらしやすゝきどのじやくあくによわうありいんぐわれきせんだうりによりへ

いけにきせしそのつみをいまよしつねがみにかぞへ
てきてあすをかぎりとはやなりぬさればすゑのつゆ
もとのまづくとなるふせいいしやうたもんのかたき
にうけかくなりぬるとおもひなばうらみもさらに残
るまじこれにある人々もかたきゆるすならばおとし
たくはおもへどもゆるさねばちからなしわざみは人
も見らるまじとがめあやしむものあらじをちこち人
のふせいにてはや／＼くまのへかへられ候へ見しも
のとおもひなばごせをばとふてたすゝきありても
このいくさにかつべきにてもあらばこそとうしてか
へり候へすゝきうけたまはつてこはくちおしき御ぢ
やうかなきみにをかせるとがなくてうたれさせ給
はんずるせんごをいかゞおはすらん何ぞやそもすゝ
きめが月日こそおほきに今日まいりあふ事は三世の
きゑんくちせぬゆへいくささんじてまかりくだりさ
もあれきみの御さいごどころはいづくにてかあるら
んとおもひやり申たるばかりにてもんのから井しき

にこしをかけたゞ一人すゞ／＼とはらきらんする事
どもはなんぼうむねんに候べき御ぐそく一りやうた
まはつてうちじにをせんと申きつておちんずるきし
よくはなしはうぐわん御らんじてこのうへはちから
をよばすいで／＼更ばすゝきどのにぐそくを一りや
うとらせんとてじやうもんじうつたるからうとのふ
たをあけ小ざくらおどしのよろひをとりいださせ給
ひて此よろひと申はおぐりのさとうせんもんが子共
のまうけのためにぐそくを二りやうおどしたつあに
つぎのぶは小ざくらしやていたゞのぶはうのはなお
どしにけつかうしあひまつるところにかれら二人は
うたれぬめんぼくなくれどよしつねさとうがたちへ
うちこゑこどもがさいごを語てきかすはゝのにこう
はなげかすしかゝるいへのめんぼくさふらふ御とも
申ていでしよりかへらん事はふぢやうぞとおもひま
うけてさふらへどもさはいひながらきやつばらが御
とも申てくだるならばとらせんするそのためにぐそ

くを二兩おどしたつるこれ／＼御らんさふらへやま
ちてかひなき此かたみを見つる事のはかなさよたれ
によりひをまいらせんわがきみにまいらせん小ざく
らおどしをよしつねにうのはなおどしをむさしどの
にゑさせたるぐそくなりひとつはかれらがかたみと
いひ又はさねよきぐそくなりゑせんの事のあるなら
ばよしつねちやくせんそのためにこれまでもたせて
はんべれども御へんにこれをとらするとおなじけ
の三まいかぶとにうちものそへすゝきがまへにと
うと置て旅やつれにさこそあるらんはやそこたまはれ
すゝきどのすゝきめんぼくほどこして御代が御よの
御時に千ちやうまんぢやうたまはつたるより今この
よろひにゑかじとてかはらけとりあげ三ばいくんだ
るすゝきどのがしよぞんをばほめぬ人こそなかりけ
れさいたうのむさしちつともゑはれぬまなこよりな
みだをはらくとながしいこくはゑらずほんてうに
をひてをやわがきみの御うちの人のやうにそろふた

る事あるまじそれをいかにと申にひと／＼せつぎのぶ
たゝのぶが討じにいせとするがゝきやうかまくらに
てのゑにぎまいま又すゝきどのが御ぐそく一りやう
給はつて千ちやうまんぢやうの御おんにかへじとよ
ろこふづる事のゆゑしさよかほどまでよきらうどう
をもちたまふわがきみの御くわほうのほどのうたて
さはせめて大こく四五ヶこく御ちぎやうなきこそく
ちおしけれおくがたのぐんびやうがなん千ぎにてよ
せきたると申ともくじむしやのかりびやうおもふに
さこそあらんすらん今は此よもふけゆくらんのにめ
やうたへやもつともとてまふつうたふつさか盛する
すでにそのよもやはんばかりの事なるにすゝきの三
郎ゑげいへはゐたるところをづんとたつて中もんの
らうにいで弟かめ井をちかづけいかにかめ井こんど
ゑげいへきしうふぢ代を出しときせんぞちうだいに
つたはるはらまき一りやうきてくだるみなはうばい
たちもきこしめせ此はらまきと申はかたじけなくも

くまのゝごんげんのいにしへまかだこくのあるじとしぶわうが中のぶわうにて天かをおさめたまへばかいだいことにゑづかなりゑかれどもかのみかどに御よをつがせ給ふべきわうじのたんじやうあるべきときさきのかずをそろふるにすでに千人いはひ申てうあひにおぼしめされたるきさきにわうじの御さなければましてやうときかたさまにいかでかさらにおはすべきされどもすゑのきさきに御すいでんと申こそくわいにんとおはしませ御かどゑいらんなゝめにて今ははやよのきさき御きしよくさらによからず五すいでんにたちそひてすでに一のきさきとし大りへうつし申さんとせんぎありしおりふし數百人のきさきたちこれをねたみそねみつゝみかど御座なきおりふしにものゝふをかたらひて五すいでんにみだれいりきさきをがいしたてまつりゑんざんふかくすてにけりされどいかなるふしぎにやゑがいのやぶれ損せずやかんのものもあぶさすしまんずる月にたんじやう

あるゑかもたいしとおはします人すむ山にてあらざればゑんりんさらにたちよらずこらうやかんはたちよれどもじきしぶくすこともなくしゆぐをくわへ申せしにいたはしや太しははゝのゑがいのにうみをぶくしたまへばたちまちにゑきとなりやかんのものをともとしてとし月をふるほどにあまのいはとのあけくれとはや七とせになりたまふ天下にはなげきにてをんごくゑんりはたうまでたづねたまへどましまさず世をうき事におぼしめしすではや位をすべりたまふおりふしたつとき人のましゝてきよしよをたづぬるおりふしに太しを見つけたてまつて大りへかへつてさうもん申ゑんかけいしやうふしぎのおもひをなしつゝ山中にいたつてくはしく見たてまつればかたちは五すいでんにしてそのおもかげもかはらず太し御とし七さい人を見なれたまはねばゑんらあたりへたちよるをおぢをのゝかせ給ふをちけん上人はしりより太しをいだきとり五すいでんのゑがいを

ばさんちうにべうをつきこめたてまつてそのゝに
ナ脱スルカ太しをばうんしやうへうつしたてまつる御かどゑい
 らんましゝて太しをいただきとりたまひけんひじ
 りをちかづけてくわしくとはせたまへばひじりもい
 かでぞんぢせんさんちうにいたつてじゆけ石上を心
 がけきよしよをたづねるおりふしに太しを見つけた
 てまつてそうもん申て候とありのまゝに申込みかど
 ゑいらんありあふにされるよにうまれてかいをたも
 つごういんにかゝるつみをつくる事はまるがとがに
 てあらずやかゝるものうきくにはありてゑき事なきテ脱スルカと
 てはんりのひしやとなづけてこくうをかけるくるま
 に今のたいしもろともにすでにせうじたまひけり第
 一のゑんかにのうみの大じんゑげたかおくみの中じ
 やうかねみづかれら二人をともとしてくるまのゑぢ
 にせうじてひがしをさしてとびたまふわがてうきの
 くにもろのこほりをとなしさにしては又ゆやごん
 げんとあらはれてしゆじやうをさいどゑたまへり五

すいでんのわうじはにやくわうじにておはしますの
 うみの大じんはこもりのみやとげんせらるゝおくみ
 の中じやうはひぎやうやしやこれなりその御あとを
 ゑたい申ちけん上人とびきたつてひじりのみやとげ
 んせらるゝそのほかのかみたちはゑだいゝにきて
 うしてしよしやみやうじん五だいわうじくはんじや
 う十五しやこんがうやしやしよしやとげんじたまふ
 もみな此ときの人々ぞゑかるにかめ井よくきけゑげ
 たかよりゑげいへまで十六代とおぼえたりゑげたか
 のいにしへまかだこくよりわがてうへとばせ給ひし
 おりふしみかどひやうじのそのために此はらまきを
 めされてとびきたりたまふなり代々ちやくしにつた
 はるいへのたからを今鉛きまでさうでんすぢうだい
 なればみをはなさず此たびもきてくだつておくがた
 のやつばらにとられてつゐにたもんのたからとなさ
 んおしさよそれとてもちからなしゑげいへはめんば
 くにきみのきせながたまはりぬ此たびのつかれに二

りやうかさねん事かたし御へんにこれをとらする
てからにしきおどしこがねざねの腹まきをぬいでか
め井にとらせけりかめ井はらまきひつたてこれみ給
へ人々六みやうぎやうのそのなかに人のくわほうは
ぎによつてゑなんにむまれてもそうりやうをつぐべ
しととかれたるはこれなるべしこのときいへのぢう
だいをかめ井の六郎ゆづりゑてちすぢのやさきにあ
たる共むないたにうけとめてゑなんす事のうれしや
とおどりあがつてよろこぶだるあつぱれぶしのてほ
んやとほめぬ人こそなかりけれ

すでにそのよもあけがたになりければむさしばうべ
んけいは四まどころへつつといりいつもこのむかち
んのひたゝれにみづにをしのはいだてし三びきりや
うのゆぐてさしいまだよろいはきざりけり二尺ばか
りなるうちがたなを十文じにさすまゝになしうちゑ
ぼしをつこうでゑらあやたゝんではちまきにむずと
ゑめ人々御めん候へとて四間のでゐより中もんのら

うにいでからうとにこしをかけてひがしむきにぞゐ
たりけるすゝきの三郎ゑげいへもぎよれうしますり
のひたゝれきみよりくだし給はつたる小ざくらおど
しのよろひをき同じけの三まいかぶとのををゑめ三
尺八寸のいかものづくりのたちはひて三十六さいた
る大中ぐろのそやおふて三人ばりのまんなかにぎり
これも四まのでいよりちうもんのらうにいでからう
とにこしをかけてひがしむきにぞゐたりけるわしの
おかたをかくまい太郎源八びやうゑひろつなびせん
のへい四郎けゝのよろひかぶとのををゑめたちはき
やおひてみなながらうとにこしをかけめとく
きつと見あわせたる此人くゝのありさまははんくわ
いちやうりやうあんろくさんもおもてをそばめつゝ
はぢぬべしその中にとつてもかめ井の六郎重きよは
ひときはすぐれていでたつたりはだに取てはからく
れなゐひつちがへびせいがうのはつたるによせかけ
めゆいのひたゝれのくゝりをゆつてゑめたりけりや

うばいたうりのさうのこてびやくだんみがきのすね
あてくまのかはのもみたびしろかねにてへりがねわ
たしあくち高にふんふん重複カふんごうだり玄しにぼたんのは
いだてしからにしきおどしこがねざねのはらまきざ
つくとゆりかけいとひおどしのよろひ二りやうかさ
ねはらりとときおどりあがつてたかひぼかけゆつてう
わおびちやうとゑめ九寸五分のよろひどをしをめて
のわきにさいたりけり一尺八寸のうちがたな十もん
じにさすまゝに三尺八寸候ひしあをひづくりのたち
はひて四十二さいたるたかうすべうをはすだかにと
つてつけおなじけの五まいかぶとにくわがたうつて
いくびにきしらあやのほろをさつとかけぬりこめの
ゆみの四人ばりせめのせきづるかけさせまん中にぎ
りよこたへ四間のでゐより中もんへゆるぎいでたる
その有さまものによくゝたとふればめいぼくたい
しはくたわう我てうにてはまさかどすみともよしの
山にてなをあげしあうしうのたいのぶもたいこれほ

どこそありつらめきりやうによせていでたつたりや
ところをそろへてほめたりけりすでにそのよもあけ
ければおくがたのぐんびやうもうつたつよしこそき
こえけれ先をふてへはとききのじつけん人ながさき殿
を大將にて三千八百よきころも川ひがしのもんへを
しよするからめてはだてとりのうみ三千五百よきに
しの小もんへをしよする御しよのてはをふてはす
ききやうだいかねふさたゝ三きにてかためぬからめ
てはわしのおかたをかくまる太郎源八びやうへひろ
つなびせんの平四郎以上五きにてひかへたりべんけ
いはうきむしやにてをふてのやぐらにはしりあがつ
ていくさのげちをぞゑたりけるかめ井の六郎も同じ
くやぐらにあがりかぶとをぬいてどうとをきゆみと
りなをしつるくいしめしすびきしてこそゐたりけれ
あにのすゞきが見あげてきつと見てや御へんはやぐ
らにあがりたるかかめ井がきいてさん候此じやうは
ひらじやうにて候へどもひさしくこしらへたるじや

うにてほりひろくしてそこふかしいかにかたきがつ
めかけてうめ草をこむと申とも三重のほりをばたゝ
一ときにはよもうめさうじゑげいへゑげ清きやうだ
いとなのつておくがたのぐんびやうにてなみを見せ
てくれさうすすゝきいてあふよくいふたりかめ井
たゝしゑげいへはながたびにはらまきにかたひかせ
やつばやづかもおぼゑねどもさらば射て見んかめ井
とておなじくやぐらにあがるかくてよせての人々は
をふてからめてもみあはせときをどつとあぐる六し
うゑんどうかくやらん天地ひゝいておびたゝしゝじ
やうには以上九人の人々いくさのほうとてやさしく
もときをおつとぞあはせけるものによくゝたとふ
ればいかづちわたるはるの野にふるすをいづるうぐ
ひすのはつねをつぐるごとくなりときこのゑゑづま
りければてるいの太郎たかなう一ぢんにこまかけい
だし大おんあげてなのるいかに御ちんへ申たき事の
候きのふまではうぐわん殿をしゆくとあふぎ申

といへどもかまくらどのゝ御ゐにそむきおはします
さるによつてながさき殿御ぎよしよたいし御下こう
のそのうへあめがゑたにありながらいはい申にをよ
ばざるによつてぎけいの御ゑがいましまさばかいし
やく申せとの御つかひにたかなう參て候と申させ給
へ人々としてゆんづえにすがつてひかへたりむさしば
うべんけいはやぐらのあゆみのいたをこぼれよとと
うゝどふみならしなにかういふはてるゐめかれつ
のうつたるかぶとをきようぎこつがらゆゝしくてよ
きむまに乗たればひでひらがこどものなかにはたれ
なるらんとおもひしに又らうどうのてるゐめがこの
もんぐわいまでまいりきたつてむまのうへにてのな
のりやうらうせきなり其ちんをやひいてのけとぞ申
ける

てるゐの太郎がこれをきゝかくのたまふは武藏どの
かことめづらしきざうごんかなきみをふかくたつと
めばしんをうやまふだうりありかまくらどのゝ御ぎ

ようしよたいしけふの大しやう給はつてまかりむかつたかなうにてわ人ともをはしんじつのもゝかずとおもはぬなりむようのくわうげん申さんよりもさぶらひは渡ものぞかぶとをぬいでゆづるをはづしいのちをつげとぞ申けるむさしばうべんけいはことはなくしてたつたりけりかめ井の六郎がむさしがあたりへたちよつてなふ／＼むさし殿玄んめいをもたつとまずぶめいにもをそれすほうにまかせてふるまい候ばうじやくぶじんのやつめにはなにをおほせ候ともたゞけんをけうすににたるべしむようのろんをとめたまへきみこそ御はらめさるゝともわれらがかくて候はゞいくさははなをちらすべしかう申つはものをいかなるものとおもふらんゆやごんげんの一の玄んかにのうみの大じんゑげたかよりも十六だいのこうゐんすゝきのしやうじが二なんかめいの六郎ゑげきよなりとしつもつて二十六てるゐどのにや一すぢたてまつらんやうけて見よといひもあへず四人

はりに十四をくもつてからとうちつがいもとはすうらはすひとつになれときり／＼とひきゑぼりまちをこぶしにひつかけゑいやつとかつてうつたるはどうづきなんどのごとくなり一ぢんにすゝんだるてるゐがしやていにたか野の四郎がこまひつそばめてひかへたるよろひのそでの三のいためてのはいだておぐりのいたきものたばねをするりとをしあひびき懸てうらをかきくつとぬけてあまるやがうらにひかへたるてるゐがむまのふとはらにはぶくらせめてづつぱとたつたかのはいたでなりければうけもあへずめてがへしにしころをつゐてどうどおつればてるゐがむまはいたでおひびやうぶがへしにひつたとかへしかたひび折てふしければてるゐはむまよりおりたつたじやうにはむさしすゝきをさきとして射たりや射たりとゆりあげ／＼わらひけりよせてはいられてをともせずいこくのきんくわがゆみのいもたゞこれほどござありつらめとよせてもゑたをまひたりけりあ

にすゝきが弟かめ井がすがたを見あげてきつと見てあ射たりやかめ井この五ろくねんはなれ御へんのかほどにおひたつてあるやらんとこゝろもとなくおもひきのくによりはるくくだつて見てあればようぎこつがらよりすぐれたるながやづかのおほゆみはよにもふしぎにおもひしにをしでかつてのさだまつて射たりやかめ井あいたりやかめ井どのたゞいまのそのきしよくをきのくにゝとゝめをく一ぞくどもにみせばやなきみも御いであつて御けんぶつあれかしなしげいへもや一すぢいて見せもうさんといふまゝにじゆうさんぞく三がけのなかざしぬいてあぶらひきやさまひろくとひかせいかにやおくがたのぐんびやう今のかめ井があにすゝきのしやうじとはわがことなり四こく九こくの御かせんに御とももうしどののかうみやうなをあらはし御よしづまつてきしうふぢしろはほんりやうなればあんどをたまはりしよりやうにくだりぎけいのみやこ下ちやくをばしらで

御とももうさぬなりさはありながらこの五ろくねんきしうふぢしろにありとはいへときみのおんことかめ井がゆくゑ一かたならぬによりさうてきうしふぢしろをいでいそぐとすれどかち路にて日かずつもつてきのふまで七十五日にてゆふべつき今日の御かつせんにあふたるはなんぼうくわほうのものぞいまのかめ井がやほどこそなくともうけてみよとぞいふたりけりよせてのぐんびやうはたてのはをつきかざしすゝきがいるやをまちかけたりすゝきこのよし見るよりもじゆうさんぞく三がけさんにんばりにからりとつがひもとはずうらはす一つになれときりくゝとひきしぼりかなぐりばなしにかつきとはなす一ぢんにすゝんだるてるゐがいとこにまるたの藤じがたかのがたうのや一すぢとすゝみかけたるむないたにたつよりはやくくつとぬけうらにひかへたるむぎのゝ四郎がくびのほねにびつしとたつ二きのむしやがためずしてゆんでめてへどうくゝとおちにけり

ついくぐんびやうこれを見て此ものどものやさきにはくろがねのたてをつゐたりともかなふつべしとおぼゑすやこのぢんひけやといふまゝにむら／＼ばつとひいたりけりすゝき兄だいやぐらよりくだりこぶしにけよきむしやをかひえり／＼さしとりひきつめさん／＼に射たりけりやだねつくればやぐらをゆらりととんでおりこまひきよせてうちのり衣川のなかのせをみづにかもめが一むすびなみまをつたふふせいにてあぶみのはなにてなみをたゝかせざゝめかひてわたしけりおくがたのぐんびやうこのよしをみるよりもすゝききやうだいてどりにせよたちもかたなもいるべきかとておりかさなつてひしめいたりすずききやうだい此よしをみるよりもたまになれたるほうらいのとりのおせいもかくやらんおどろくけしきはなかりけり大せいのなかへわつていりにしからひがしきたからみなみくもでかくなわすもんじやつはながたといふ物にわりたてをんまはしてさん／＼

にきつたりけりすゝきの三郎しげいへ十三ぎきつておとせば弟とのかめ井がてにかけて二十七きなぎふするげにはかたきもこらへばこそかせにこののはのちるやうにむら／＼ばつとひいたりけりこの人々はてもおはすしかわゑづ／＼とわたしもどしいきほいかつてひかへたるはいこくのはんくわいちやうりやうもかくやとおもひしられたりむさしばうべんけいはやぐらのうへにてつく／＼と見てあらおもしろとすゝききやうだいが合戦したるやうやさすがにあのかた／＼は天かの御よういくしよのいくさをしならふたる人々にてかたきのいろをさとつてかけひいつる心ねのおもしろさよしばらく人々やぐらにあがつて御まち候へべんけいもでたつてこんといふまゝに四間どころへつつといりうの花おどしのよろひきさきのなしうちゑぼしにて今度はゑらゑのなぎなたをうちかたげをふてのやぐらにはしりあがつてひがしむきにぞたつたりけりそも／＼ころはいつなるらん

ぶんぢ五ねんうるふ四月の二十八日のいまだみのこ
くばかりなるにてりにてつたるあさ日にもものゝぐの
かなものはおりからいろやまさるらんひらいたあふ
ぎはくれなゐにて日にさしむかつてたつたりけるむ
さしぼうがありさまはたうはつびしやもんゑてんわ
うのあれたるけしきもかくやらんいかにやおくがた
のぐんびやうなりをしづめてことの心をたしかにき
けそれ人げんのいのちはでんくわうてうろうつも
うたるゝもゆめのたはぶれきのふまではかたをならべ
ひざをくみし人々のけふかたきとなる事もいんぐわ
れきせんの道りによつて世をも人をもうらむまじさ
りながらなんぢらがをんごくにすんでいりとりがう
だうをしさかひのはうじをろんじ二十き三十騎こゝ
かしこにひきわけゝゝそらゐんじしてつぶて打たら
んにはにまじいぞこんにちむさしがするいくさこそ
てほんよ見ならへべんけいがなぎなたにてきりのこ
されたらんともがらは見しものとおもひなばごせを

ばとふてたべんけいが末代のものがたりにまひを
一てまはふぞやはやいてたべや人々すゝききやうだ
いもかねてよういやしたりけんやぐらよりもつゝみ
を取りだしたゝきあげてぞはやしけるぢたいむさし
はさんとにてもらんぶゑんねんの上手まひをばひと
てならふたりてうしをうかがつてたつたりしがかす
みにかすんでおほきなるこゑをはつたとあげて一せ
いをこそとつたりけれうれしやとうゝどなるはた
きの水日はてるともいつもたへせじおもしろやいか
だをくだすはおほ井川はなをながすはよしの河もみ
ぢをくだすはたつた川みやこあたりに名河はさまさ
まおほけれどをんぐくながらめいしよかなきりやま
たかねの残のゆききえたにのつらゝもとけぬれば衣
川のみかさまさつておくがたのぐんびやうをべん慶
がなぎなたにてみなとをさしてきりながす切ながす
ともみゑばしといふきよくを一ひようしはらりとふ
んでひらいたあふぎをやぐらよりころもがはへさつ

となげいれあふぎのおつるよりはやくやぐらをとんでおりたりけりさんのめだちのしらあしげ七き八ぶんあけ六さいに引よせゆらりとつたりけりわしのおかたをかゝさきにかけんとすゝみけりべんけいが

これを見ていでゝむさしあらざりせんあとをばこなせわかむしやどもとてさきがけてこそわたしけれむかひは玄のぶもとよしたけびまるたをさきとしておくにはわれとおほしきもの三百きばかりてひかへたるぢんのなかへむさしこまをぎつとかけ入たりおくがたのぐんびやうぢんをふたつにわけたりけりされどもこゝにたかたの太郎と名乗てむさしばうにわたりあふべんけいこれを見てもつてひらいてよこてぎりにがんじとさるかぶとのゆんでのふきがへしおもてのほうさきめてのかぶりのいたをかけてづんと切てぞおとしけるはなさき此よし見るよりもあきつたりやむさしどのそこをひくなといふまゝにすきまもなくかゝりけりべんけいこれを見てもつてひら

いておがみうちにもやうどうつかぶとのまつかうきりわつてうしろはしころほろ付まへははつぷりよだれがね四まいかなどうひつしきくすりふたつにざつときりわつてゆんでめてへさばけたり

玄はたの四郎がこれを見てあきつたりや武藏殿そこをひくなといふまゝにすきまもなくかゝりけりべんけいこれを見ておくがたのぐんびやうはあふ心はかうにありけるやしりぞく風せいをみせざるはてなみのほどを見せんとてもつてひらいてちやうどうつたりけりしばたもきこふるつはものにてかぶりのいたにてうけながしさらぬていにてかけとをす二ぢんにつゝいたるかめ井の六郎がむさしどのゝきりのこしをうけとつたりといふまゝにあふひづくり三尺八寸よこてぎりにがんじとさるかめいがうでやつよかりけんたちのかねやよかりけん四まいどうををしかけ二十五さひたるそやをかけしやこしのつがひをくるまざりといふものにふつときつておとしければかみ

はぬけてどうとおつればしもはくらにのつたりけり
これを初て七きの人々いれちがへもみちがへさんざ
んにきつてまはりけりかゝりけるところにとさの八
郎たかなうとかめ井の六郎まげきよむずとくんで二
人がりやうばがあひにとうどおつるかめ井ぶさうの
かうのものかたきとくむならば大せいさだめており
あふべしといろかねてさとりとさをとつておさへて
くびふつとかきおとしたちあがらんとするところへ
とさがめのとの十郎がすきをあらせすおりあひてか
めるがゆんでのかひなを承もたまらずうちおとす
かめ井ぶさうのがうのものこゝろはたかさごやたか
さこのまつのみどりとはゆれどもいたでおひぬれば
たちをつえにつきいまをかぎりに見ゆるしやきやう
すゝきのまやうじ大せいの中にてたゝかひしがをとお
とかめ井がいたでおひぞんめいふちやうなるを見
てかたきを四はうへをつちらしわがみをきつとみた
りければいたでうすでにきらひなく十三ところてお

ふたりいまはかうとおもひてかめ井をかたにひつか
けてじやうのうちへつつといりたかきところにおろ
しをきやそこではらきれかめ井なむあみだぶつとも
ろともにすゝきはしやうねん三十三かめ井の六郎二
十六さしちがへてまにけるをおしまぬものはなかり
けりむさしばうべんけいはきみの御まへにまいり
やすゝききやうだいうちじにつかまつりて候と申判
官きこしめされてなにとすゝききやうだいうちじに
したるといふかさん候と申かめ井が事はさてをきぬ
あらむざんやすゝききのくによりはるくくだりよ
になきまうのかたうどしてうたれぬこそむざんな
れけさよりよむ御きやうもはやほうなうの時分にな
るぞふせひてたべや武藏殿べんけいいうけたまはつて
こんどはそれがしがしにばんにあたつて候と申もあ
へず御でゐへつつと入くろがねをあつさ五ぶんにき
たはせたるををけがはどうとなつてかたなだまり
にぞきたりけるうのはなおどしのよろひいとひおど

しのどうまる三りやうかさねざつくときゆつてうわ
おびちやうどしめ一尺八寸のうち刀を十文じにさす
まゝにゑびらがたなくびかきがたななきたこぞり
はを取ちがへくらのまへにしめつけゆんでくま
でををつとつてめてになぎなたうちかたげひざにて
むまにのつたりける辨慶がかけいづればたゞ小山の
うごくごとくなり大せいの中へわつていりひざぐち
たかもゝむまの腹はらり／＼とひきやぶればしやう
ぎだをしのごとくなり此いきほひにをそれてすてむ
ちうつてにぐるところへ辨慶駒をかけよせくまでを
さし渡しかぶとのてへんにひつかけゑいといふてひ
きよせさげざりしてぞすてにける

いわんやかんわうもろこしまでもそのなをゑたるべ
んけいがいまをさいごのかつせんにおもてを合する
ものはなしいかれるまなこはくろくもの處々のはれ
まよりあさ日のうつろふごとくなりかたきをなびけ
ておめくこゑらいでんいなづまはたゝがみゑゝざう

とらのほふるこゑもかくやとおもひゑられたりべん
けいが二どのかけにおくがたのぐんびやうは百八十
騎うたれたり今はむかふかたきのあらざればものぐ
さひいくさかなとてこだかきところへこまかけあげ
ゑばらくちんをぞとつたりけるかゝりけるところに
ゑのぶのゑやうじが子に小太郎生ねん十八さいにな
りけるがべんけいがいせんのかけあしにちゝをうた
せびんひまをうかがつて一やいやとねらふところ
にはやこゝにて見つけ二人ばりに十二そくとつてか
らとうちつがひよつひいてひやうどいたあらむざん
やべんけいがのと／＼とひかへたるむないたにばつ
しとあたる小兵のいるやのかなしさはやたてにやを
ばためずしてひざりけるそのやがうちかぶとにから
りとしてふえのくさりにひつしとたつもの／＼とい
ふまゝにやをかひかなぐつて見てあればとりのした
にてやいたりけんやがらはぬけてねはとまるさしも
にがう成べんけいもこまよりしもにどうとおつるあ

スルカ

しチ脱

らむねんやさいたうのむさしとておにがみのやうに
いはれしにかほどのほそやにあたつてはかなく成ら
んくちをしさよさいごにきやつをきらずばよみぢの
さはりとなるべしさりながらいせんのごとくむまに
とりのりをふならばおちてさうなくちかづくまじゑ
よせんそらじにをはじめちかづかんところをきつて
くればやとおもひそば成かぶとひつかけてそらじに
してぞたるみけるゑのぶこのよし見るよりもあれあ
れ御らん候へさこそ人々のをにがみのやうにの給ひ
しむさしばうべんけいをばなにがしがてにかけいお
として候くびとつて見せ申さんといふまゝに三尺八
寸のいかものづくりまつかうにさしかざしもみにも
ふでぞよつたりける

べんけいゑころのひまよりも見あげてきつと見てあ
つばれきりやうや能きりやうかなあつたらわかいも
のをべんけいが手にかけうしなはん事のむざんさよ
たちの寸はのびたるやきやつに一たちうたれてはあ

しかりなんとぞんずればちかゞとつめよせうしお
きにかつばとおきらうせきなるやつめにてなみのほ
どを見せんとしてそばなるなぎなたをつとりのべをつ
つめさらりとないだりけりたかもゝきつておとされ
のつけにかへすところをはそくびちうにうちおとし
あけにそうだるなぎなたゆんでのかたになげかけこ
まひきよせてうちのりじやうのうちへつつといりこ
まをかしこにのりはなし大なぎなたにすがりたぢた
ぢとたいよひあらくるしやかねふさよきみはいづく
におはしますかねふさむさしがてをひいて御まへさ
してまいるはうぐわん御らんじてあれはむさしかさ
ん候と申聲をきけばいにしへのむさしすがたはたゞ
きじんのごとしうら山しやなむさしどのはしやうを
かへすたちまちにあら人がみとなりたるよなそれへ
それへと仰ければうけたまはると申ておち椽につつ
とあがりよろひのそでをかたしきていまをかざりと
見ゆるがかねふさをちかづけさいごに若君を一めお

がみ申さうかねふさわかぎみをいだし申武藏がてに渡す辨慶若君をいだし申をくれの髪をかきなでかわり山の峠にて御産あらせ給ひし時武藏が参りうぶゆをひかせ申男子は七歳迄ものあやかりと承る若君の御くわほうあやからせ給はいはくぶ頼朝に御あやかり候へかいりきは御玄んぶはうぐわんゆみはためとの御ゆんせい二さうをさといつてあくまのものゝをそれんは平のちゝぶにあやからせたまへうち物めされものゝほねきつて人におぢられたまはんはものそのかすにて候はねどもかう申むさしめにあやからせ給へいのちながくわたらせ給はんは三うらのおほすけが百六になりしにあやからせたまへと申せし事のゆめとなりいまだとをにもたらずして衣川の水のあわと消させ給はんいたはしやとはらくとなきければあらいたはしやわかぎみはなにのよしみをまゐろしめされざりしがべんけいがあらけなきいで立にもおぢたまはずむないたをくだりにあけのちしほに

みそかへしなぐるゝちを御らんじていたいいけしたる御てにてかきなでさせたまひつゝひしゝといだしつきわつとさけばせ給ふにぞ御前のようばうお末の人かねふさも武藏も消入やうになきゐたりはうぐわん御らんじてべんけいがさいごにさけをのませよかねふさうけたまはると申てながゑのてうしにもみぢのかはらけすへてまいらせあぐるはうぐわんとりあげさせたまひてこれは二世までのさかづきをさすぞたまはれべんけいあまりのかたじけなさに三度いたゞきたぶゝとうけゆくゝとほしけれどもあらなにともなやふゑがきたる事なればちにまじはりて此さけがむないたをくだりにさらりゝとながれけり

はうぐわん御らんじてべんけいがさいごはちかづきたるぞねんぶつをすゝめよかねふさうけたまはつてねんぶつをすゝめければおくがたのぐんびやう此よしをきくよりもじやうのうちにあたつてねんぶつの

こゑのきこふるはいかさむさしがはらをきるか大
がうのものゝじがいのやういざ見ならひててほんに
せんもつとも煮かるべしとてわれさきにと見だれい
るはうぐわん御らんじてあはやかたきのちかづくは
かねふさはふせぎやいよべんけいははらをきれ御き
やうせんするあひだとして御ぎをたゝせたまへばべん
けいはかたきのよばはるこはねをちからとして大庭
におどりでなぎなたにすがつて又たぢくゝとたゝ
よふはうぐわん御らんじて又うつていづるかむさし
さん候と申はうぐわんおもひつゝけてかく計
のちのよも又のちのよもめぐりあへ

そむむらさきのくものうへまで

べんけいうけたまはつて返歌とおぼしくてかくばか
り

六たうのちまたのすゑにまつそきみ

をくれさきたつならひありとも

とかやうに申てほりのふなばしをかぶゝと渡しけ

りおくがたのぐんびやうこのよしを見るよりもあら
おそろしや又べんけいがかゝるは爰をひけやといふ
まゝにわれさきにとぞにげにけるころもがわさつと
をつこしむかいのはばたにてへうたうするつはもの
を十七八ききりふせこなたのはばたへかへらんとし
たりしが次だいにしやうねみだるればにしむきにつ
つたつてなぎなたまなごにゆりたてくわうみやうし
んごんとなへつゝしやうねん三十八にしてころもが
わのたちにてわうじやうをおしまぬものはなかりけ
りおくがたのぐんびやうこのよしを見るよりもあら
おそろしや又べんけいが人をきらんずるはかりごと
よちかふよりてはかなふまじとをやにいよといふま
ゝにさしとりひきつめさんゝにこそいたりけれむ
さしにあたるそのやはあしをたばねてまきのいたど
をつくふせいもとよりしゝたるべんけいにてそのみ
をちつともいたます

ぬまだてのしやうじ此よしを見るよりもや至てこゝ

ろのがうなるむしやはたちながらしするいはれのあ
るぞたれかあるゆきむかつてゆみのはずをもつてそ
つとつて見ようけたまはると申て二十き三十きか
けよせしけれどもおちてさうなくよりつかずぬ
まだて此よしみるよりもをくびやうなるかたゝか
なそこのけぬまだてつかんといふまゝにこまのたづ
なはいくつてかつしゝとあゆませよせゆみのはず
ををつとりのべをづゝかつぱとつた本よりしゝ
た辨けいでかれ木をたをすごとくにかつぱとまろび
けりまろびけるそのせんにもつたるなぎなたがひら
りとするを見るよりもぬまだてのしやうじはしゝた
るものとまらずしてまたきつてかゝるとこゝろへき
もだましるもみにそはすこまよりまもにころびおち
うきぬまづみぬながれてころもがわのぬせきにせか
れてまんだりしをきせん上下をしなべてにくまぬも
のはなかりけり

はまいて

そも鎌倉と申はむかしは一足ふめば三ちやうゆるぐ
たいふのぬまにて候ひしをわだはたけやま惣奉行を
給はりいしきりつるのはしをもつてたかきところを
きりたいらげたいふのぬまをうめ給ふ上はつかい中
はつかい下はつかいとて三つにわる上はつかいは山
ちうはつかいは在家下はつかいは海なりけり上はつ
かいの一だん高きところにはげんじの氏神正八幡大
ぼさつをあがめいはひ奉る中はつかいのざいけをか
まくらやつ七郷にぞわられけるあらおもしろのやつ
やつや春はまづさくむめがやつつゝいきのさとやにほ
ふらん夏はすいしきあふぎがやつ秋は露くささゝめ
がやつ冬はげにもゆきの下うめがえがやつこそひさ
しけれ
遙の沖を見渡せば舟にほかくるいな村がさきとかや

いひしま江の島つゝいたりほうらいきうと申ともい
かで是にはまさるべきかるがゆへに名づけてあゆみ
をはこぶ輩は諸願かならずまんぞくせりていとうの
つゝみのをとさつゝのすゝの聲々にちはやの袖を
ふりかざす神慮すゝしめの御かぐらのをとは隙もな
し

かゝるめでたきおりふしよりともしやうらくましま
して大佛くやうをのべさせたまひ御身は左近の右大
將に經あがらせ給ひ兵衛つかさ十人右衛門つかさ十
人廿人のくわんどを申給て其ころちうの人々にあて
をこなはせ給ふ中にも左衛門つかさをは梶原の平三
景時にくだされけるを嫡子の源太にゆづる源太司を
たまはりいそぎ國にくだり此事披露申さで有べきか
と大名小名てうしやう申いつきかしづき奉る先初番
のざつしやうにはほうらいの山をからくみ中にかん
ろの酒をいれ不死の薬と名付銀のさほに金のつるべ
を結さげはねつるべにて是をくむさけにあまたの威

徳ありうとき人さへちか付したしきなかは猶ゑたし
 むをちこちのたつきもしらぬたび人になるゝも酒の
 いとく也ほうらいの山のうへにはりふじんがたちば
 なけんぼのなしさうふのしぬかゝくりゆとうなんせ
 いのくりとかや皆いろ／＼になりつれて其あぢはひ
 はしゆみをなす誠にふしのくすりぞとゑひをすゝめ
 てまいらする二日の日のざつしやうにはさかなの數
 をあつめちんのほだじやかうのへそ鑑腹卷たちかた
 な名馬の數をそろへ思ひ／＼にひかれけり三日の日
 のざつしやうには江の島まふでにこと寄て御はまい
 でとぞ聞えける忝も御れうの北の御方出させ給ふ其
 上人々の北の方もみな御供とこそ聞えけれ船のうへ
 にぶたいをたかくかざり立ゑたんくわりほくやりわ
 たしかうらんぎぼうしみがきたてぶたいの上にあや
 を敷みづひきににしきをさげぬれば浦吹風にへうよ
 うして極樂淨土は海の面に浮出ぬるかとうたがはる
 おんがのまひ有べしとてげんくわんのやくをそさゝ

れけるちゝぶの六郎殿は笛のやくとぞきこえけるな
 かぬまの五郎は調拍子とひょうしのやく也梶原の源太景末はた
 いこのやくとぞ聞えける御れんちうにはびは三面こ
 と二ちやうきんのことのやくをは北の御方引給ふ一
 めんのびはをば北條殿の御内様かづさのすけの御内
 様わごんをしらべ給ひけりげんくわんいづれも名に
 しおふたる上手也ぶたいのうへの舞ちごにちゝぶど
 のゝ二男ふぢいしどのと申て十三になり給ふしくわ
 うそだちのめいどうなり左の一とううけとりのたか
 さかどのゝつるわか殿惣じてちごは十八人九人づゝ
 にわかちて左右の舞をまひ給ふいづれもまひは上手
 なり
 龍王に一おどりげんしやうらくのさしあしはとうの
 まひのはちがへしりんたいにはさすかひな青海波
 にはひらくてことりしよに羽返しいづれもきよくを
 もらさず夜日三日ぞまふたりける打もふくもかなづ
 るもばさつのぎやう是也天人はあまくだり龍神は浮

あがり船ぎやうだうにめぐらんけもんかくちの輩
うかれて爰にたち給ふ御前の人々御所領給はり所知
入とこそきこえけれ

景清

今度頼朝の御代をめされし由來をくはしくたづぬるに御舍弟九郎御ざうし御こゝろたけくわたらせ給ふゆらひなりとぞ聞へけるかくてけんきう元年にきみうゐ京上ましゝて二度の御上洛おなしく南都のくやうをのべ給ふこうれいなればちゝぶどの先陣とぞ聞へける去間まげたい本田の次郎をめされいかにちかつねうけたまはれ今度もまげたいがせんちんを給はるや都のみにかぎらず五畿内の者共がだうぞくいちをなすときく本田どの御誼也ちかつね承りわつぱにとつてはたれゝぞかた田のくまわうほうらい丸ふくだのまんざいをさきとしてわつぱ廿人にあかぢのにしきのひたゝれをさせまるまきのたちをかつがせて弓手のわきをぞとをしけるぢしろ二十人におりえはしをさせまゐらえのなぎなたかつがせてめてのわ

きをぞとをしけるちゝぶどのゝ御せいはいは七千餘騎鎌倉殿の御せいはいは十萬よきとぞきこへけるせんちんも後ちんもへいあんぢやうを御たち有なんとへとてぞいそがれける東大寺四つの門はゆふきながぬま小山うつのみやをのゝかため給ふ其中に取てもてかいの門こそ大事なれとてちゝぶどのゝしてん王ほうしやうをあざけるほどのつはものを五百餘騎にてかためらるかくてなんとのかやうはまつさいちうと聞へけり其中にとりわきてものゝあわれをといめしは平家のさぶらひ大將に惡七兵衛かげきよにてものゝあはれをといめたりあわれよの中にひんほどつらき事あらじまたしき中はとをざかりうとき人にはいやしまれひんしやの家に生るゝほどつたなかりける事あらじうけたまはればかまくらどのなんとのかやうと聞て有ほうゑの庭とはぞんずれ共主君のかたきでましませばまゐのびみやこへのぼりつゝ頼朝を一かたなきり申大臣殿のけうやうにほうせばやとおもひけれ

ばをはりのあつたをたちいでゝ玄のびみやこへのぼりけり清水坂のかたはらにあこわうと申て遊女の有けるにあさからすちぎりければかれが宿所に立よつてなんとやうをくはしくとふあこわううけたまはりちぎるなさけのせつなさに有のまゝにぞかたりけるかげきよなゝめによろこふでいそぎ南都へ下り人の心のうちをもひき見ばやとぞんずれば出立やうこそおもしろけれどもえぎにはひのはらまきを草すりながにさつくと着もぢのころもをうへにきて上帶玄つかと玄めたりけりちやうけんのかさをもつてほうかぶりを仕りおほい殿よりも給たるあざまるといふうちがたなを十文字にさすまゝにぬつたりしけいちにあひがはにてををたてつめはきにはくまゝにつくしみのなぎなたの四尺八寸ありけるがぬけば玉ちるばかりなるをさやをばきつとはづいて弓でのわきにかひこふでちゝぶどのゝかためてましますてかひのものを景清はあふさらぬ體にてとをりけりちゝぶどの

の御うちなる本田の次郎がこれをみてあらけなふこそとがめけれあれはいかなる人さうぞこれはちゝぶどのゝかためてましますてかひの門とは玄らざるかそれよりもどれとよかげ清は聞よりもあつことなしと存ればなぎなたまてにとりなをしちかふよつて小ごゑたつて申やうなふくるしうも候はず東大寺のかたはらにすまゐつかまつるつゝ井のじやうめうめいしゆむなりやあとををしてたべとぞ申けるまくのうちなるちゝぶどの此よしをきこしめし大まくつかんでうちあげあらふしぎの事共や只今のなまりの聲はほくろくだうのかたはらのなまりのこゑと聞てありそれよりもどれといへ運命つきはてゝちつともたてつく物ならばはからへとの御誕也さうけたまはり候とて其せいは三百餘騎たち長刀のさやはづし御とまりあれとてをつかくる景清はみるよりもあらわれぬるとぞんずればはひたりしけいちをとあるところぬぎすて三百よきがまん中にて長刀のきつ手には

こむ手なぐ手ひらく手石付をかひつかんではらりは
らりとなひだりけりくつきやうのつはものを三十騎
ばかりまつしくらにきりふせのこりのつはもの共に
いた手うす手おふせて四方へはつとをつちらしきり
のほうをむすんで我身にさつとうちかけてかすが山
へつつと入世間のていをきゝゐたり景清心におもふ
やうしよせん爰にて叶すば明日はんにやじへ御まい
りと聞てあり山伏のすがたをまなびねらはばやとお
もひかきのすゝかけしかまのときんまゆはづかにひ
つこふでたけとひとしくあるをひを取てかたにうち
かけゐのめすかひたる大まさかりをうちかつぎみね
いりしたる山伏たちを廿人ばかりともなひはんにや
じのまへにてよりともの御まいりをいまやをそしと
あひまつるさるあひだゑげたゝ此よしを御らんじて
あらおびたゝしの山伏達やめんゝはどこやまぶし
と見なしたるぞゑげたゝは奥山伏と見なしたりおく
にとつてもまつしまいはしまひらいつみあけずのい

はやそとのほま大みねなどをぎやうどしていそに
つかれたるやまぶしたちと見なしたりさりながらさ
きよりも九ばんあとよりも十二番めにいかにもせい
わからたかにてなまめいたる客僧をまことの山伏と
おもひてふかくをかくなよかたゝゝあれこそきのふ
てかひのもむにてのひげ大しゆのたぐひなれたゝを
つつめからめ取君の御めにかけ申せ本田殿御誼也ち
かつね承て其勢は五百よきたち長刀のさやはづし御
とまりあれとてをつかくる景清は見るよりもあらは
れぬるとぞんずればかけたりしをひをとあるところ
になげすてあざまるをするりとぬいて五百餘騎をう
ちやぶり又きりのほうをむすんでわが身にさつとう
ちかけて人よりさきにかげきよはゑのび京へぞのぼ
りけるかの景清がふるまひはたゝはんくわいもかく
やらんあらむざんや景清いまはせんはうつきはてゝ
わが身をだいて立たりしがいかにもして主君のかた
きをうたばやとおもふゝろのうちこそあわれなれ

爰にひとつのたとへあり一とせたかくらのみや三井寺をたのみぎやうかうならせ給ふ三井寺なんなくたのまれ申南都へ重狀をこす大衆せんぎあつて返狀をかの玄んけうにかゝせられるにきよもりを平氏のさうかう武家のちんがいと書てをくる其とがにより玄んけうが討手をなんばせのおがたまはり一千餘騎をそつし南都へせめてぞのぼりけるなんとの大しゆたち玄むけう一人にたのまれきよもりとてきになりかなふまじいとせむぎしてこゝろがはりをしたまひけりあらむざんやさいせうばうがたのみ申大衆たちは心がはりをしたまへば今はせんはうつきはてゝこつがい人のまなびをし玄んのうるしをかひとつつぎめ五體に玄つかとさすみのうらかへしきるまゝにやぶれたる笠をくびにかけほそきつえをたよりしなんとを立いでゝふてゝみやこへのぼりけりならざかやはんにやじのあたりにてうつてのせいにぞゆきあひける日此はかたをならべひぎをくみしはうばい

たちまのあたりをとをれ其あれはいかにさいせうかと目がくる人もなかりけり其も心ががうなればわにのくちをのがれて鬼神が門を立いでゝなるみがたにくだりつゝいしをもとめてれうちをし本のごとくにへいゆうなつてかくてさいせうくまのにこえ新宮の十郎ゆきいへの御てにつき申ぢせう四年の夏の比あつたのみやの願書のときにさいせうばうとぞ書たりける其後信濃にくだりつゝ木曾殿の御手につき申北國となみやまはにふの宮の願書の時にさいせうばうとはかゝずしてその名をかへてきその太夫覺明とぞ書たりけるあはれ玄るしのなかりせばさいせうばうが命はあやうかりつるものぞかしかく申かけきよもそれにはすこしちがふましこつがい人のまなびをしてねらはばやとおもひ四條の町へたち出て玄んのうるしをかひとつつぎめ五體に玄つかとさす夏のうるしの物うさは五たいを玄むるそたへがたきむざんやかげきよはわが身をきつと見てかくなりはつるも

たれゆへぞ主君の爲とおもへばうらみとはさらにおもはずいかに二さうじんつうのゑげたいと申ともかの景清がふるまひをみしらるべうはなかりけりみのうらかへしきるまゝにやぶれたるかさをくびにかけきよみづ坂のかたはらに百四五十人なみわたるこつがい人にまじはりなふ人なみ／＼にこなたへもせぎやうたべよとこふときぞいとむかしをこひごろもこひごろも袖はなみだに朽ぬべしさるあひだ重忠本田の次郎をめされかゝるほうゑの庭にはすんせむしやくまと申て大事の事が候ぞあのやう成こつがい人は四季のてうしをそむくなり先春はきのへきのとにてそうてうにてあらふすなつはひのへひのとにてわうしきにてあるべし秋はかのへかのとにてひやうでうにてあらふす冬はみづのへみづのとにてばんしきにて有べしどようはつちのへつちのとにて一こつにてあらふすこれによつていしをんやうにもそうわうひやうほん一とつかひ候いまはあきにて候ほどにひ

やうでうにてあらふするがあらふしぎや只今せぎやうたべとこふつるこゑをきくもひやうでうなり弓手のまなこは玄んのごうよりつうじてそのいろくろくみゆるめてのまなこはかんのごうよりつうじて其色青くみゆるさうこくさうでうのかたちまさしく御身はこつがい人ではなくして平家のさぶらひ大將に惡七兵衛かけきよと見たわち／＼ぶがひが事かかくとぶがむねんならばかう申ゑげたいが君に御いとま申むさしへくだつてあらん時大御所えゑのびいりめんらうすきがきにてもねらひたくばねらひ候へゑげたいがあらんほどはふつつとかなふまじいとまつしるにいはれ申あつはづかしと存れば打うつぶひてぞ居たりけるかげきよこゝろにおもふやう我等がち／＼のかづさのかみをげんぶくの親とたのませたまひたらばわれらが父のたいしげはち／＼ぶのしげにてち／＼ぶのはたけ山ゑげたいと名のらせ給ふとうけたまはるえぼしおやとゑぼし子は七生までのきゑんと承て候に

なさけなくもゑげたいの一度見ゆるし給はぬところはむねむなりその儀にてあるならばとても死せんわがいのちゑげたいとまいりあひとにもいかにもならばやおもふこゝろをさきとして上なるみのをさつとぬぎすていづくにかさひたりけんあざまるをするりとぬいてみけんにさしかざしあふおとまりあれとてをつかくるちゝぶどのは御らんじて心得たりとのたまひて四尺二寸のかうひらぬいてわたりあふてぞ見へられけるあやうかりつるところに御馬まいりの人々が一度にはらりとおりたつてゑげたいをしへだてたてまつりかげきよ中につとりこめて火水になれとぞもふだりけるぢたいかげきよはこゝろはがうなりちからはつよしもちたるかたなはつるぎしんけいがじゆつはならふつ手をくだひてぞ切たりけるむまにとつてきるところこぐちとこわきおのうへさんづりうの毛からつらとからはなつかひをさむぶと切ておとす人に取てきるところまつかうこびたいさ

うのこてふりあをのけばうちかぶとほろつけとうななこてのいたのはづれをばはらりくとなひだりけり馬人のきらひなくのりこえくさんくきつてぞままはりけるくつきやうのつはものを其かずこ^本れはきりとゝめのこりのつはもの共にいたでうすでおふせて四方へはつとをつ散すそうじてかげきよがねらふところどこぞたにのたうにみねのたうをととはかづらときわの里なんとなては東大寺今度は清水まふでまで一度ならず二度ならず三十七度に及でこゝろをつくしきもをけし君をねらひ申せどもくわほういみじくまし〜てちゝぶどのにさとられ申前後にかなふ事もなしかげきよ心におもふやふいやいやかゝる事そうくしきときかげきよが京すまひはむやくなりゑよせんゑうとの大宮司をたゆみくだらばやと思ひ尾州あつたに下るさるあひだよりともかぢはらをめされいかにかちはらうけたまはれ今度頼朝よを取たりといへども取たるゑるしもなしそれを

いかにと申に平家のさぶらひ大將惡七兵衛かげきよといふものにこゝかしこにてせはめられよにもくちをしくぞんするいかにもして彼ものをちうしてすてよとおほせければかぢはら承て御まへをまかりたちしろかつしいたをそのかずあまたとりよせふだにけづらせ筆にてものをぞいはせける平家の侍大將に惡七兵衛かげきよをうつてもからめても六はらどのへまいらせたらんともがらにけしやうのぞみたるべしかげときはんとかきとめて京白川つじくゝにたつる札を立て十日ばかりはさしたるしもなかりけりかゝりけるところに清水坂のかたはらにあこわうと申女きた野まふでをしけるが京白川つじくゝにたてたるふだをよふでみるに九年つれたるわがつまのあく七兵衛景清をうたんと書てたてゝ有あこわうあまりのもののうさに此ふだをぬすみとりかも川かつら川へもながさばやと思ひしが中にてこゝろを引かへしまてしばし我こゝろ日本六十六ヶ國に平家の知

行とて國の一所もあらばこそ平家一味のものとてはつまのかげきよばかりなりつゝむとするも此事つゝにはもれてうたれうずかげきようたれて其後に不慮にをもひをせんよりも九年つれたるなさげには二人のわかのあるなればこの事かたきにまらせつゝかげきよをうちとらせ二人のわかをよにたてゝあとのゑいぐわにほこらんとおもひすましたあこわうがこゝろのうちぞおそろしき此札くわいちうし六はら殿へまいり札のおもてにまかせてまいりてさふらふと申あぐるらいてうなゝめにをばしめしあこわうをめされくわしく問せ給へばあこわう承りさん候景清がゆく衛を人のしらぬも道理とおぼしめせ此あひだはをはりのあつたにさふらひしが平家の御代の御時よりもきよみづをまにかう申月に一度は参りさふらふ明日は十八日かならずみづからがところへきたるべしもとより大酒の事なればさをすゝむる物ならば前後もしらずふすにてさふらふぞ大せいをつしをしよ

せ景清をうちとらせみづからに所知をたべなふ我君
と申らいてう聞召れてうれしう候あこわう御前たつ
て所知をばあたふべしそれ／＼とおほせければ承る
と申てまやきん三十兩わこわうにくだしたぶあこわ
うたまはりさふらひて清水坂にかへりつゝ其日のく
るゝを待たるはなさけのふこそ聞へけれあらむざん
やかげきよ是をば夢にもしらずして明日は十八日清
水へまいらばやとおもひ尾州あつたを打立て四日ち
のみちなるを其日のくれほどにきよみづかのかた
はら成我宿所へ立よつて門ほと／＼をとづるゝう
ちよりもたそとこたふるいやくるしうも候はずかけ
きよなりとぞこたへけるあこわうなゝめによりこふ
でいそぎたち出門をひらき景清をうちへぞまやうじ
ける二人の若どもはちゝをはるかに見なれねば父が
あたりへたちよつてむつまじげなるふせなりあこわ
うなみだをながす風情にてあらいたはしや景清平家
の御代の御時は悪七兵衛かけきよとて公家にもぶけ

にもにくまれず一時のまふでにもちうげん小者はな
やかに馬くら小ぐそくざんじやうにさもゆゝしくお
はせしがいつしか平家にすぎをくれ口せいきたまほ
こやつれはて御ともゝなふて景清はさこそくるしく
おはすらんかまへをきたる事なればまゆ／＼のさか
なを取りだしかけきよにさけをぞまゐたりけるか
げきよはみるよりもいとをしき子どもはなみゐた
りしやくに立たるはねうばう也いづくにこゝろが
をかるべきさしうけ／＼のむほどにさしもにがうな
る景清もかたきの事をばはつたとわすれうれしう候
あこわう御前きよみづべは明日參ふするにて候いと
ま申てさらばとてあひのしやうじをさらりとあけれ
んちうにうつりてとうのまくらになみよりて前後も
まらずふしたるはうんのきはみとぞ聞へけるあこわ
うなゝめによりこふで清水へはみづからが參らふず
るにて候とてうすぎぬ取てかみにかけ門より外へ出
ると見へしがきよみづべはまいらずして六はらどの

へ参り此よしかくと申あぐる頼朝聞召れてさらば打
たてつはものとして其勢は三百餘騎はたひとながれさ
させあこわうさきにをつたてゝあふ清水ざかへぞよ
せにけるころはいつなるらん八月十七夜のさようち
ふけての事なるに月は出てくまもなし亥たのこぐさ
にいたるまでかくるゝ所はなかりけりさるあひだあ
こわう御せんかたちを見れば春の花すがたをみれば
秋の月みめもかたちもならびなきらく中一ばんの美
人とは申せども九年ちぎりをこめたりし悪七兵衛を
うたせんとて大勢そつしよせたるはひとへに鬼神の
ごとくなり三百餘騎のつはものを門のあたりづいち
のわきにかくしをきわが身はうちへつつといりたゝ
今こそ下向申てさふらへかげきよとぞおこしけるか
げきよかつばとおきあざ丸をひざのうへにとうとを
きあこわうをつくゝと見ていやゝ御身は清水へ
はまいらぬ人と見なしたりそれをいかにと申に日本
六十六ヶ國に平家の知行とてくの一ヶ國もなしへ

いけ一味の者としてはそれがしばかりなにがしが事を
かたきの方へそせうしてうちとらせあとのゑいぐわ
にはこらんとおもふ共いんぐわたちまちむくうてま
つたふよにはいづまじいぞあこわうあまりのふしぎ
さにいやさもなひものと申てかほにもみぢをひきち
らす景清是を見てやあ有事はちんじをあることをち
んずればもみぢのいろにみゆるぞやさればけてんの
りうしゆほんけうにも七の子はなす共をんなにこゝ
ろゆるすなと申つたへて有ほどにそらうたがひに言
たるぞあこわう御せんといふこそをそかりけれひろ
ゑんにおどりいでついちのおほひに手を掛のびあが
つて見てあればかしこに二十き三十騎かぶとのはち
をならべつゝむらくもだつてひかへたりうちへはし
り歸てにつことわらふていふやうはいかにやあこわ
う御せんわごせはさなしとちんずれ共こづめづあは
うらせつかしやくをはやめてをそしゝとせむるも
いかでこれにはまさるべきさいごの別いかせんや

あねうばうとこそよばはりけりあこわうあまりのか
なしさに二人のわかの手をひいてあひの玄やうじを
はたとたてれんちうふかくいりにけりかげきよこの
よしみるよりもあらおかしのあこわうがふるまひや
たとへばをにのたいしやうはちめんだいわうがいは
をたゝんて四十餘ちやうについちをつきくろがねの
もんをたてたりともかげきよほどのつはものがなど
いつぼううちやぶらであるべきぞいはんやかみ玄や
じの一重やぶらんことはやすけれどもひごろのなさ
けとうざのゑしやく九年つれたるなさけにわごせは
こゝろかはるともかげきよはこゝろかはるまじやが
てことばをかへらるゝいかに二人のわかどもよはゝ
こそつらくともこれがかぎりのことなればちゝがす
がたをいでゝ見よわかどもとありしかばむざんや二
人のわかどもははゝがところをたちはなれちゝがひ
ざになみよりてかはをなでひげをなでちゝよゝゝと
ばかり也かげきよは御覽じて二人のわかをゆん手め

てのひざにをきをくれのかみをかきなでゝをのれが
母の心中ほどつたなかりける事あらじそれをいかに
と申になにがしが事をばかたきの方へをせうしてか
げきよをうちとらせ二人の若をよにたてゝあとのゑ
いぐわにほくらんとおもふ共いんぐわたちまぢむく
うてまつとふ世には出まじかくあさましきこゝろに
てよにしもたいはあるまじい又よの妻にもそふなら
ば一つにおもへばけいしのなか又は敵の子孫とてあ
しからふするたびごとに玄やけんのつえにてうつと
きに父よゝゝとよぶならば草のかげにて景清がみん
ずる事もむざんなりいかにきくかわか共ようらめし
きはゝにそはんよりゑんまのちやうに参り父をまて
よとかたりつゝあにいやいしをひきよせて弓手のひ
ぢのかゝりを二かたながいしてをしふするおとうと
がこれを見てあおそろしのちゝごせやわれをばゆる
させ給へとてゐたるところをづんとたちさらばよそ
へもゆかずしてころすべきちゝにすがりつくかげき

よは御らんじて何と申ぞいやわかよころす父はうら
みぞころす父はころさずしたすくるはゝがころすぞ
おなじくはあにとうちつれて去でさんづをなげきこ
しゑんまのちやうにてちゝをまでよとかたりつゝこ
ころもとを一かたなあつとばかりをさいごにて兄弟
のわか共を三かたなにがいしつゝおなじまくらにを
しふせてかたなをかしこへからりとすてつがはぬを
しのゑいやこゑうかれこひのふせひにて我身をだ
てたゝれたり

かげきよ心におもふやういやゝ弓とりの心はたけ
くもてばがうになるちつとゆるせばふかくに成只今
こゝもとへよせられたる人々の家名をたしかに承て
討死きはめばやとおもひたゝいま爰元へよせられた
る人々はたうかかうけか名字を承てうちじにを仕ら
んと大音あげて申よせての人々これをきゝえまの小
四郎よしとき御所のかげすゑ是にありとこゑゝゝに
よばはるかかげきよ聞てあふえゑ殿と申はたうきみの
こじうと御所のかげすゑいつれもかたきにきらひは

なしきことや平家のさぶらひのがうおくのところと
覺へたり命のおしき時にこそながひぐそくもほしう
候へ又れいのあざ丸ばかりでさうすは参りさうとい
ふまゝにさつゝとはしりよりもんのくわんぬきを
取てかしこへなげすてかた戸をひらいてかた戸をま
へにあてそとなるかたきをうちへとひらりゝとま
ねけどもさうなふかたきはよらざりけりあまりまで
ばひさしきにまいりさうといふまゝに三百よきがま
んなかへひらりゝとかけしをものによくゝた
とふれば玉ばんにたまらずりうの水を得くもをわけ
こくうへあがる如くなり大せいのなかへわつていり
にしから東きたから南くもでかくなは十文字八つは
ながたといふものにわりたてをんまはしさんゝに
きつたりけりくつきやうのつわものを七八十騎きり
ふせ大せいに手をおふせ東西へはつとをつちらしは
しつて門をちやうとさしころいておきたりし若共
すがりつきはらゝとなひて立たりけるのかのかげき

よの心中をば貴賤上下をしなべかんせぬ人はなかり
けり

去間景清はあこわうがゐたりけるれんちうにむかつ
て申やういかにあこわう今夜それがし死なんとする
へどもかたきのこゝろがをくびやうにてむたい兵衛
はうたれぬ也いとま申てさらばとて天じやうにあか
りはふせきいたをけやぶつて家のむねにつつとあが
りきよみづざかの事なればのきつゝきの在家を十四
五間はしつてそれよりもはやしの中へつと入せけ
んのやうをまばらしく聞けれどもちかづくかたきはな
かりけりそれより観音の御まへにまいり心しづかに
きねむして京中迄いでけるがかる折ふしかげきよ
が京住居はむやくしよせん四國西國へも落ゆかばや
と思ひしがいや／＼かゝるときこそ人をもたのみ頼
まるれ又しうとの大宮司を頼み尾州へ下らばやとお
もひみやこをば夜半斗にたち出てかもがわ白川うち
わたり祇園ばやしのむらがらすうかれごゝろかむば

たまのくろかみもわけてゆく別路とめよ逢坂の關の
明神ふしおがみ大津うちでのままちどりともよぶこ
ゑに夢さめてうきみのたびをしがのうらなみよせか
へるあまをぶねからさきのひとつ松たぐひなき身を
おもふにぞうき身のうへとおもはれていといなみだ
もせきあへず勢多のからはし打わたりひばりあかれ
る野路のしゆく露もたまらぬもり山おもかげみゆる
かいみ山馬ふちなはてこれたかのみこのうきよの中
をいとひて立をかせたまひたるむしよじをふしおが
み入てひさしき五條宿年をつもるかおひそのもり河
かせさむきたび人はさよのねぶりに夢さめてゑちが
はわたれば千鳥なくをのゝほを道すりばりやまばん
ばさめが井かしはばらいます山中うちすぎてあれて
なか／＼やさしきはふはのせきやのいたびさし月も
れとてやまばらなるたる井の宿をうちすぎてみのな
らば花もさきなんくんせかはおほくま河原の松風は
きんの音をやしらぶらんすのまたあしかをよひの橋

ひかりありたまの井の黒田のしゆくをうちすぎて走りつかひづを過しかばをはりの國に聞へたるあつたのみにまいり三十三度のらいはいをまいらせてつづ立あがつて景清は東をきつと見てあればまだよこぐもはひかがりけりかくて大宮司のたちにもつきしかば門ほとくとたゝくうちよりたそとこたふるいやくるしうも候はずかげきよなりと申うちより門のじやうをひきければかげきよ内へぞいりにけるこれにも二人のおさあひ者こそ候ひけれあらむざんや景清二人のわかを左右のひざにとうとをき今夜それがしみやこにてなんぢらが兄弟のわかどものありつるを女のこゝろがにくきによりがいしてこれまでくだりたりふびんなるぞ若どもとて涙ぐみてぞゐたりけるあらむざんやあこわうさてのみやむものならばいしかるべき事共を又六はら殿に參り彼かげきよと申者は色ごのみの男にてみづからにもかぎらずおほりの大宮司の三のひめにちぎりをこめこれも十年にな

ると承るおつるともよの方へはゆきさふらふまじしうとゝさいしをたのみをはりへおちてぞ候らんいそぎ討手御くだしあれと申よりともきこしめしあらおそろしのあこわうや九年迄ちぎりしものが重々をせうするこゝろのうちにくさよ自餘のをんなの見ごりきゝこりのためも有それはからへとの御ぢやうなり承り候とてあこわうをとつてふせざうぐるまに打のせて九重のうちをわたして其後かの女をかもとかつらのおちあひにいなせがふちのふかき所をたづねてふしづけにしたりけり上下ばんみむをしながらにくまぬものはなかりけり其後よりともかぢはらをめされてをはりへの討手にはたれをかくだすべきとの御誼也かぢはら承ておはりへの討手はしかるべうも候はずそれをいかにと申にかのかげきよと申ものは合戦にをひてはなにとしてもうたるゝ事は候まじ先しうとの大宮司をめしのぼされろしやさせられ候ひて後日の御さたにをよぶべきと申らいてうげにも

と思召やがて御狀をあそばされ大宮司のたちに付給ふ大ぐじ此御書をひらひてはいけん仕りいつよりもきらびやかにひきつくろひ御上落ときこへけり六はらの御所にもつき給へばとがは何ともしらねどもこのつじかしこのもののわきよりもくつきやうのつはものがひた／＼とおひていたはしや大ぐじを手どりあしどりなはかけてやがてろうしやと見へにけり梶原たちよつて申けるはなにとて大ぐじは君てうてきのかげきよを御ふち候ぞかけきよをいだされよ出されぬ物ならば大宮司の御いのちを給はるべしと申大宮司聞召れて扱はそれがしがすごしたるとがはなけれどもきみてうてきの景清をふちしたるいはれによつて籠者させられ候やその儀にて有ならば景清をめしのぼせかたきの手へわたさばやとおぼしめするまでしばし我こゝろ大宮司もこゝろがはりをしかけきよを敵の手にわたしたるなんどいはいれんもはづかしやむざんや我ひめのうらみの程をいかせ

んなさけなのちゝごやまさしく身づからが二世までかねし景清をかたきの手にわたしつゝきらせ給へるうたてやとふちにもせにも身を煮づめばあとのなげきをいかせんこほりはみづより生ずれども水よりこほりはひやゝかなりまごはわが子の子なれ共子よりもまごはふびんなり我身をものにたとふればをささのうへにをけるつゆ水のうへにふるしらゆきみやまがくれのをそぐくら木ずゑのはなはちりはてゝ今したえだにのこれるがさそふあらしをまつふせい我子と孫のふびんなれば大宮司このまゝきらるゝ共景清をたすけむとあむじすましておはしますかの大ぐしのこゝろのうちたとへむかたもましまさずかぢはら申けるやうはあらいたはしや大ぐじは此二三日のあひだにきられさせ給ふべしかたみのものををはりへ御くだしあれと申大宮司きこしめしこのきはにのぞむでかたみはむやくとおもへども思ふ子細の候へばすゝりれうしをたび給へ承り候とてすゝりれうし

まいらするすみすりながし筆にそめ其狀にあそばされけるやうは今度大宮司が上洛の義べちの子細ならずそのゆへは君てう敵のかげきよをふちしたるいはれによつてろうしやさせられて大ぐしはみやこにてきらるゝなりそれがきらるゝ物ならばやがて討手くだるべし討手くだらぬそのさきにいそぎ信濃にくだつてうんのもちづきむらかみたうをたのむべしそれより奥州へ下てへいむしやをたのむべしかのへいむしやと申は大ぐしがためにはをひながらえぼし子なりかれらをたのむものならば十萬餘騎は候べしその大勢をいんそつしていそぎみやこへせめのぼりうち勢多東寺をさしふさぎあみだがみねに城をしてたへてひさしき平家の赤はたらくちうにはつと打立おごるかたきをついたうして草のかげなる大宮司にただ一目見せてたべ兵衛尉へとあそばしてをはりへくだし給ひけり三日と申にこの狀をはりにつくかげきよひらいてはいいん仕り女房にかたりけるはあらめ

でたや大ぐしはこのあひだに御下向有べしとの御狀の候ぞ御こゝろやすくおぼしめせといつはりまたそれがしは大宮司の仰にゑたがて奥州へくだり候三ヶ年にてはのぼるべしそれすぎば五ヶ年五ヶ年過るものならばみちのくにて景清むなしくなりたると思召後世とぶらひてたび給へいとま申てさらばとてあつたをば立出やうゝいそきくだる程に遠江の國はま名のはしにつきにけりこゝにて景清おもふやういやゝそれがし奥州まで下りたりともはや大宮司は都にてきられさせ給ふべしゆへもなきそれがしはるゝとくだりたのまれよといはんずるにたのまるもの一人もなくしてけつく落人ありやとてきられん事は治ちやうなりとても死せんいのちをしよせんこれよりみやこへのぼり大ぐじの御いのちにかはらばやとおもひそれよりもひつかへし又都へぞのぼりけるとてもものぼるものゆゑに一時なりともとくのぼり御命にかはらばやと思ひて一足に弓つゑ二つゑ三つゑほどづゝをとりあかりはねこえひらりゝとの

ぼるほとにあつたをはたつの刻に打たつてあわだぐちにも着しかばさもあれけふの日は何時やらんとおもひてふりあをのひて見てあればほつせうじの八つのたいこをとうくと打たりけり先清水へ参らばやとおもひ観音の御まへに参りこゝろしづかにきねんしてそれよりも六はらの御所にまいり南おもてのついちをゆらりとほねこゑ御前のまゝのかゝりに二わうだちにぞたつたりけるおりふしりともはゑんぎやうだうしてましゝけるが彼かげきよを御らんじてあのまゝのかゝりにたつたる者はいかなるものぞと問給ふちゝぶのはたけやまさしよつて申さるゝあれこそきみてうてきのかげきよにて候へよりも聞召かげきよにて有ならばそれはからへとの御ちやう也承ると申て御前の人々にさんまほんま土肥つちやあすけ中將よこちかつまたの人々がひたゝれのつゆをむすんでかたをこしたちなぎなたのさやはづしかげきよをまん中にはやをつとりこめてぞ見へにける

かげきよこれを見てあらげうゝしの面々のふるまひやそれがしおもひきるならばかたゝをきりころさんも天にあがらんととも大地をわつてくゝいらんとも景清がまゝでありさりながらこのたびは大ぐじの御いのちにかはらんためにのぼりてあればたちもかたなもなにならずとからりとすててかげきよはこゝろとなはをぞかゝりけるよりももの御ちやうにはいかでぎうひやうの入たるうには入べきぞはじめてろうをつくらせよ承ると申ていち井しらかしとがくすの木ながさ一丈にとらせて地へは七尺いれうへをば三尺のつめろうにこしらへ四五の木をとりよせくもでがうしにきりくんで一尺三寸の大ききをもつてちやうゝとうち付くぎのさきをかへさねばろうのうちはほらをほつてつるぎをうへたるごとくなりてうつなはからむしにてたか手こてにいましめ七尺ゆたかのかげきよを二重にとつてをしいれかみをば七はにたばねて天じやうのかうしへ七方へつたりけり

あしをばろうよりひきいだし三寸間のかうしをあしのぶんをひろふして弓手めてへとりちがへ山出七十五人して引たるくすの大物にてあけほたしにぞうつたりけるひつつとがねと申はうすう平打けるをかげきよをいためんために丸ふとうたせたりしつちやうつめかね八さうかきがねとうくろり木千引のいしざいもくをうへにとりつつむだりこしにとうのつな三すぢゑつてつけさくびにはねほりの大つゝを三ほんまでかつがせたりむざんやかかげきよろうのうちにてかよふものはいきばかりはたらくものは兩眼なりせつたんより其ほかはすこしもうごくところなしよりどもの御ちやうにはかげきよをめしとるまでのことにてこそ候へ大宮司はよりともがためにはげしやくの祖父にてましませば對面あるべしとの御ちやうなり承ると申て梶原の源太かげすゑがろうの戸をひらいて大ぐじをぐくし申よりとも御たいめん有てこのあひだの籠者の御しんらうさこそとおもひ

やられていたはしう候このたびのけしやうにはかさねて所知をまいらせんいそぎ國にくだり給へとの御ちやう也大宮司きこしめされてあら所知もしよりやうもほしからずおなしくば景清をとまひてくだるとだにもおもひなばいかはうれしかるべきとさきだつものはなみだなりさてあるべきにてあらざれば大ぐし御いとま申て國へくだり給ひけりかくて景清ろうしやしてきのふけふとは申せども七十五日になりけりいたはしとも中々に申ばかりはなかりけりかゝりけるところに六はらのみなみおもてを京わらべの三人づれにてとをりしがさきなるものゝ申やうあのしんざうの籠にはいかなる者のいりたるぞと申跡なる者が申けるはあれこそ平家のさふらひ大將惡七兵衛かげきよの入たるろうにて候へつぎなるものがこれをきゝ彼かげきよと申ものは平家の御代の御ときは二さうをさとつてふづしんのけはんなどゝ聞つるが平家にはなれ申かけきよが二さうもなにな

らすげんじがたにまさるつはものあればこそやすやすといけどつてわづかの籠にをしこめてはをきつらんあつばれゆみとりはみると聞とはひとしからざるものかなとどつと笑てとをるかげきよろうの内にてこれをきゝげにもきやつばらは道理をいひつるものかなかげきよほどのつはものがわづかのろうにこもつてうき名をながすむねんさよさらば籠をやぶつて出ばやとおもふがとがもなき大ぐじに二たびうきめを見せ申さんもいたしく又千引のいしざいもくにあたつてなにぐゝろもなくならびゐたるろうも共をうちころさんもむざん也いかゞはせんとおもふがそれもおんびんのいたりいやゝ籠をやぶつて出末代のものがたりにせばやとおもひおくのちからをいだしゑいやつとうごきけれ共ちびきの石ざいもくがをもければろうはちつともはたらかずもとより観音をしんじ申事なればみやうがうをこそとなへけれなむやせんじゆせむげんくわん世音生々世々けう有しや

聞ノ假借

一文みやうがうめつてうざいむしやうぶつくわとくしやうしゆと此もんを三べんとなへゆんでのあしをゑいと引たまことにくわんをむのりやくこそふしぎのはうべんにてや候ひけん一しやく三寸の大くぎがふつつときれて左右のあしはうちへいるたかてのなはを一しめしむればはらりゝときれてのく七はうへつつたるかみをゑいやつとひきければかみのねがつよふしてぶるゝはつとみだれたりこしに付たるとうのつなす々にねちゝてかついだねほりの大つゝをみぢんのことくをしくだいて身をちつとほそめて籠のかうしよりつつと出てかげきよはにつことわらひてたつたるは人間のわざにてなかりけり景清ころにおもふやうとてもいでたるつゐでに又きよみづへまいらばやとおもひ観音の御まへにまいりなむや大じ大ひのくわん世音さしも草さしもかしこきちかひのすゑ一せう一ねんなをたのみ有かまへてかげきよをあつけんにおとし給ふなとねんごろにきせいを

申おくのくわんをんに参り後世の事いのりそれよりもさいもんに立いでゝみやこのかたをながむればそのいにしへぞしのばるゝいたはしや平家の御一門はなのみやこに御座のときはきんくわをつらねすいしやうを家にかざりつくわうしやにぎよしてはくわゆうのきよくらんにのぞみ給ひしも人一さかりはなひと時ふちは瀬と成世中とて名のみのこりていまはなしとてまろうより出るうへこれより四國西國へもおちゆかばやとはおもへどもしうとにうきめをみせじためもとの籠にわれといりこゝろと死をしたりける彼景清がこゝろのうち何にたとへんかたもなし其後かぢはらよりともの御前に参りなにとてかげきよをひさしくろうしやさせられ候ぞ御意をうけはからふべきと申頼朝聞召ともかくも梶原はからへとの御誼也承ると申て嫡子の源太に申付る源太承りくつきやうのつはもの共を三十余人こしらへかげきよを籠よりとつて引だし六條河原にはめいて出にしむきに

ひつすへたりかげきよなにとかおもひけんむたる所をづんとたつて南むきにぞなをりける源太これを見てげにや景清は二さうをさとつて佛神のけいんなんどゝ承りしがさいごにもなりしかばこゝろどうてんし給ひて西方をさへしらすして南方にむかひ給ふか景清これをきゝおろかなり源太殿それ法花の明文に十方佛土中ゆいいう一乗ほう無二やく無三しよぶつはうべんせつときくときは西方にかざらす十方はみなぶつどさうぞはやきり給へ源太どの源太このよしきくよりもそれは御身とそれかしがもんだうたいけついたさばこそくちはきゝをとるべくれうけて見たまへかげきよと三尺八寸のいかものづくりするりとぬきよこ手ぎりにちやうとうつおしむべき年のほど三十七と申にはくびはまへにぞおちにけるさる間源太は景清が首をとつていそぎよりともの御めにかくるよりともをはじめたてまつり八ヶ國の諸大名をの首をじつけんし給ひけりその中にちゝぶのはたけ

やま殿は清水參りをし給ひてくびの玄つけんにもあ
ひ給はず六波羅の南おもてをうつて下向し給ふ處に
こゝにひとつのふしぎありかのかげきよがろうに又
人の有て申けるはあれをとをらせ給ふはちやぶのは
たけやまどのと見申たりさいこの時は萬事頼たて
まつる玄げたいきこしめされてそれゆみとりと申
はけふは人のうへあすはわが身のうへにて候へば
御こゝろやすくおぼしめせ御さいこの御ときはかな
らず人をまいらせんとて馬よりおりしきだいしそれ
よりもすぐに六はらどのに參り何とてかけきよを
ばひさしくろうしやさせられ候ぞよりも聞召扱は
景清といふ者はいくたり候ぞ一人をば源太が手にか
け六條がはらにてちうし首はいまだこれにありそ
れ見給へとの御ちやうなり玄げたい謹言承り玄ばし
物も申さずやゝ有て申けるはこれはかけきよがくび
にても候はず又餘人のくびとも見え候よりも
きこしめしふしぎの事をのふ給ものかなたいいま迄

は景清がくびとこそおもひしに重忠のことばに付て
ちつとふしむにこそ候へよくく見給へとの御ちや
う也玄げたい承ていかでそれがしもくわしくは存
候べきそれ人間はみづと見れば魚はいへとみる天人
はるりと御らんすればがきははむらとみるこれをし
けんの不同とは申なりよくく見たてまつればせ
んじゆの御くしにておはしますかたじけなくも五智
のほうくわんよりもこんじきのひかりのたゝせ給ふ
ぞやよりもきこしめしうらやましやなかげきよ
はいかなるせんごんを仕りかゝるりやくにあづかる
らんはたけやまとの御誕なり玄げたい承てあらおろ
かの御ちやう候たとひせんごんを玄ゆするともが
らと申ともみやうりをさきだてん者は無智無形のも
のにおとり候べしたとひむちむぎやうのともがらと
は申とも諸神しよぶつを頼申さんものはなにのう
たがひの候べきそれぼさつのさんげのぎやうと申は
三つに下ると見えたりあるひはせつしやうちうたう

しやけんはういちのともがらにあひまじはり給ふ時
もありあるひはこつじきひににあひまじはりせぎ
やうをうけ給ふときもありあるひはかゝる死縁に
のぞむで其苦にかはり給ふ也五りん玄ゆしゆへん
きちくほうかいにんでんかいせ大日ととかれ佛道
ならぬ事なしかの景清と申はその身はけんんのよ
ろひをきると申せ共玄いの火をけしまうねんのち
りをはらひほんらい玄やうぐのくわんに入てあり
ければかたじけなくもくわんおんはかたちをすいゑ
んのはやしにわかちかけをきゑんの水にうかべ給へ
り大ぢひ心大びやうとう心大にんにくしんうせんち
やくしんくうくわんしんいせつしんむしやうぼだ
いしんこれ也はつかんはつねつのそこまでももらし
給はぬは大ひのりやくとこそきけこれ／＼御覽候へ
とかたじけなくも御くしをさしむかへ申せば鎌倉殿
をはじめてその座にありし人々かんたんきもにめい
じつゝひるいそでをうるはしてみならいはいをたて

まつる頼朝ふしぎにおぼし召かけきよがろうへつか
いをたて扱かけきよはいかなる佛神をたのみ申て
候らん景清承てさん候それがし玄やくねんよりもと
をきかたきを射ておとしちかき敵を切ておとすかゝ
るぶげいをこそたしなみて候へいかなる佛神をも頼
申さず候さりながらつねに清水を玄んかう申て候と
御返事を申されればよりともきこしめされて東山
清水寺へ御使たつまことにきよみづのありさま申も
おろかなりしとみかうしもみなあきて御ちやうをさ
つとをしあけてみくしもなきみそきれんげのうへに
そなはりて御身體よりあゆる血はひとへにたきのご
とく也ないぢんにあまりつゝらいばんなるとこまで
うかぶばかりに見え給ふ御使此よし見奉り六はらど
のに参りつゝありのまゝに申ければ扱はうたがふと
ころなしと諸寺のそうを千人玄やうじ一萬座のごま
をたきみくしをみそきにあわせ申二度清水寺とはや
り給ふぞありがたきよりも仰けるはかほどせんじ

ゆのふびんと思召るゝかげきよに對面有べしとの御
ぢやうにていそぎ御前にめされひとへにおことをば
清水の觀世音とおがみ申なりおことをちうするなら
ばせんじゆの御くしを二度うち申たるに似たるべし
このうへはたすくるとの御誕なりかげきよ承りあら
有がたの御たすけや候是と申も景清が十六のはるよ
りも三十七のいまゝでまいりたるりしやうとおもへ
ばありがたきはかぎりなしよりのもの御ぢやうには
平家のときの所知はいかほどさうぞかげきよ承て二
萬ちやう給て候よりともが代にも二萬ちやうあはせ
て四萬町あてをこなふいまよりのちはあくしんをひ
るがへしよりにともにつかへ候へかげきよ承てあら有
がたや候命をたすけたまふのみならず剩御おんをそ
へてたぶ君は世にありつべしともぞんせすさりなが
らたちゐにつけきみを見申さんたびことにあれこそ
主君のかたきよあつばれ一かたなうらみ申さでとを
もふ所存はつゆちりほどもうせ候まじそれおんをみ

ておんをしらざるはうへ木の鳥がをのが住えだをか
らすにことならずちゝぶどのゝこがたなをこひとつ
て兩眼をくりいだしうす折敷にならべよりものの御
めにかくるよりとも御涙をながせたまひされば唐
土に玄といふとりを三とせかふて古人ひとつのとら
をとる我朝のはぢあるさふらひにをんをよくあたふ
れば玄うのいのちにかはるとはかやうの事をや申ら
んいかにかげきよこのまゝみやこに有たきか景清承
て花の都も何ならずなかゝおもひもよらずと申さ
らばおはりに妻子があれば下りたきかとの御ぢやう
なりかげきよ承てゆくもゆめとまるも夢二世とかね
しも夢なればくだりてゑきも候はずおなじくは西國
へくだしてたべと申せばやすきあひだの事なりとて
日向みやさきの庄をたまはると御判をすへてくださ
れけりかくて景清ははだのまぼりにおさめて御前を
ばまかりたち又きよみづに參り三百三十三卷の觀音
ぎやうをどくじゆして三千三百三十三度の禮拜を奉

るありがたやくわんをんの三十三しんに身をへんじ
十九せつほう御法をのべ衆生のぐわんを見て給ふと
はいまこそおもひしられたれ内ちんよりこんじきの
ひかりさいてかげきよかうべを半時ばかりてらし給
へばとつてなかりし兩眼がたちまち出來て本のごと
くに見えにけり爰をもつてあんずるにやくがせい
ぐわん大ひちう一人ふしやう二世願かたこまうさい
くわちうふけん本覺しや大悲佛は三世にましませど
せんじゆのちかひありがたきさればうゐの法佛は夢
のうちのこんくわさて又むさの三身はかくの前の玄
つぶつゑきろのすゝのよるのこゑはんごむかうのけ

ばそつ名ばかりはたかさごのおのへの松とうちすぎ
きみにたのみをかけ川の西方淨土はちかきやらんこ
こはあみだがしゆくであり備前にきびつみや備後に
ともをのみちそれよりもかげきよ日向宮崎の庄に付
て里人をよびいだし御判おがませ三とせと申に一間
四めんひかりだうをたてをき新清水とがくをうち
朝夕他念こゝろなくねんぶつ申經をよみせんじゆの
みやうがうをとなへて八十三と申に大往生をとげに
けりかの景清が心中貴賤をしなべかんせね人はなか
りけり

ぶりこそなきおもかげのかた見なれそれよりもかげ
きよ清水を下向しつくしにくだりけりみやこを立て
東寺四塚うちすぎ月はなけれどかつら川ふねにのら
ねどくがなはてやまざきせき戸打すぎ兵庫にもつき
しかば御一もんのすみ給ひしふくはらの京とは爰な
りけりとふしおがみすまいたやとはりまにいりぬれ

きりかね曾我

安元元年神無月の比奥野の狩場にて河津の三郎うた
れし時五つや三の若有しを曾我の太郎助延養育し兄
の一満十一歳弟の箱王丸のとし物うき事こそ候ひけ
れ東八ヶ國の大名小名頼朝の御前にて御物がたりの
ありし時頼朝おほせけるやうは天下におゐて頼朝に
まして果報の者は候まじそれをいかにと申に保元の
合戦に祖父爲義をはじめ一紋門ノ假借みなうち死し中一年有
て父義朝惡右衛門督にかたらはれ其軍にかけまけ東
國さして落給ふ其時頼朝も御供申て候ひしが暗さは
くらし雨は降西近江さがり松のあたりにて追おくれ
奉り唯一人龍牙華ノ假借の間に迷ひしに横川法師め大將に大
屋の忠寄といつし跡よりも追かけすでになんぎに及
びしに北近江伊吹の麓草野の庄司にたすけられかれ
が所に年を越今はかうよとおもひしに義朝は長田を

たのみ給へどもたのむ木の下に雨もりてやみくくと
うたれさせ給ひ御首のぼり獄門にかけられ給ふ由を
きくせめてかはらせたまひたる御姿を成とも見參ら
せ猶も命のながらへばさまをかへて御菩提を問參
らせんとおもひしのびて京へのぼりしにいますかは
らといふ所にて彌平兵衛にいけどられ六はらへわた
されうたるべきにて有しを池の尻后字ニ似タリ公ノ借字カ口に助けられ北條
ひるが小島へ流され伊藤北條兩人に守護せられ廿一
年の春秋をおくりむかへて過し時伊藤の入道助近祐親に
つらくあたられ候ひつるその時の心にはあはれ伊豆
を従へ野心の者を亡しおもひ知らせばやと明暮佛神
に祈誓申せしゑるしにや日本をあつめてゑるのみな
らず四海を太平にいたす事はしかしながら君の爲身
の爲武略の功にまくなしと仰られたりければ御前
なりし人々もげにくくゆゑ敷御果報やと同音に感じ
申さるゝかゝりける處に工藤一老助經祐ノ假借すすみ出て申
けるは今こそようせうに候得共末の世に野心を存べ

き者一二人おんひぎのもとに候と申よりもきこしめされてそれはさていかなるものぞ助經さん候一とせちうせられ申たるいとうがまご河津が子一萬箱王とて二人の者候を曾我の太郎助延がやういく仕たるよしをもうすよりもきこしめされて曾我の太郎助延はさやうにふちうはあらじとこそおもひ候へそれをいかにともうすによりともが世をとりたるはじめよりふかきちうの候へばずゐぶんなたをばたのもしくおもひしによりともがすゑ世のてきとならんこそこそきつくわいなれいそぎかれらをめしのぼせよたれか有との御誕なり助經又申けるは誰々と申とも梶原の源太景末^季ぞ候らんと申しそぎ源太をめされ如何にかげすゑ伊藤が孫河津が子一滿箱王とて二人の者の候を曾我の太郎助延がやういくし成人するを待と聞いそぎ彼等をめし上せうんきはねてすつべしはやとく^{とく}との御誕なり源太承荒淺ましやとは存すれとも主命なれば背得すかしこまつて候とて御前

を罷立駒引寄て打のり曾我の里も着しかば助延の宿所にたち寄君よりの御使に源太がまゐりて候とたからかにいひければ助延やがて立出^たかけすゑに對面し扱君よりの御使はなにの爲にて候ぞ源太聞て別の子細に候はず御子息達をめし上せ御對面あるべしとの御誕にて候まだようせうの人々に御罪科は候まじはや／＼とく／＼といひければ助宣^{祐信ノ假借}聞しめしとかく返事もなかりけりあきを送るらうようは風なきに散うれひをもよほすなみだはとはざるに先おつる助延の心の中おしはかられてあはれなりやゝありての給ひけるはあはれ世の中に子に縁なき者を尋ぬるに助延にとゐめたりそれをいかに申におさなき者を二人持て候ひしがいとけなくしてはかなくなりかれらが母は別れをかなしみいく程なくてむなしくなりかつま^{なりノ下}しノ字^ナ脱スルカ^カのわかれ子ども^ナのなげき一方ならぬおもひ^{おもひノ下}とにも^{ノ字}助延も遁世修行とおもひたつて候處に伊藤の入道つねにきたりなにがしをなぐさめ物がたりのついでに承

れば曾我殿は妻子にはなれ給ふときくなにがしが孫

一萬箱王とて兄弟の候をかれらを養にし給ひて母も

子ノ字ヲ脱スルカ

ろともをき給へと再三申され候程にさすがうき世も
いとはれねばかれらをやういく仕はや七年の春秋を
送れば成人程もなし一萬生年十一歳箱王今は九つな
り身のすいらふをもかへり見ず成人するを待たるは
別のためかうらめしやげにも仇のするなれば君の仰
は理りやされ共助延君の爲いままで不忠をいたさね
ばもしやたすけ給はんとほうこうだてを申さるるい
かにがすゑよりどもの御世をめされたる始めをかた
つて聞せ申さん石橋山の合戦に御身の父の景時かう
申す助延と平家方にてむかひしに源氏の勢を見渡せ
ば唯蟬螂がおのづからはつかのせいをたなびきて雲
霞の如くの平家の勢をふせぎ給ふはあはなれるむ
かしが今に至るまで多勢に無勢叶はねば源氏合戦に
かけまけてまなづるかうら引なみの頼朝御方にをく
れ給ひふしきの中を頼つゝ御身をしのばせ給ひしは

御世のひらけんはじめなり其時かげとき助延心をあ
はせ申やう是はたくしのきにあらずせんぞのためか
う／＼也いざやとぶらひ申さんとふし木の中を見て
あれば御物具のかな物白く見ゆる處を弓の弭をとり
のべ木の葉をあつくはきかけさらぬ體にていたりし
につゝく共者あやしめかたらひよれば二人ふし木の
上にあがりとうとうとふみならしそなものか今
まで此木のほらにあるべきぞあやしきさまに宣ふは
いかさまかげとき助延に心をかせ給ふかと兎角ちん
する處に正八幡の誓ひかや此木のほらよりも鳩一番
たち出てこくうをさしてとんで行くその時二人力を
得あれ見給へやかた／＼人のあらんず木のほらに今
まで鳩のあるべきかかたきはかうこそ落つらんおつ
つけや人々と大勢の兵者をすちなき方へおしへやり
君を引たて奉り眞名鶴が浦まで御供申せし心ざしや
はかは忘れ給ふべき其時頼朝我世に出る物ならば命
の恩を忘れじと返々も宣ひしたとひおかす科ありと

などがは御免ならざらん御身の父のかげとくに此事
かたり給ひてそせうかなへてたび給へ景末聞てそれ
がしも存の事にて候父もろともに御前にてよきやう
に申べきにて候御心やすくおぼしめせといひければ
助延聞しめされて荒嬉しやさふらふ去ながら母に玄
らせ候はんと簾中にたち入此よしかくとおほせけれ
ば母は夢ともわきまへすやがてきえ入給ひけり河津
殿にはなれ申せしその時はつゆの命もおしからず消
うせばやとおもひしが兄弟に目がくれいままたかか
る身となればいつかかれら成人し助延のたよりにも
なりもやせんと佛神にきせい申せしゑるしもなく今
更かかるおもひをせんとしらずやと兄弟の若どもを
弓手めての膝に置をくれの髪をかきなでていかに二
人の若どもよおうち伊藤の科により鎌倉殿へめしの
ばせころさるべきにあるぞとよ何とて君にはか程ま
でふかき敵をばなしつらん扱若どもをさきたてゝみ
づからはなにとなるべきとりうていこがれ給ひけれ

ば二人の若ももろともになくより外の事ぞなき源太
物ごしより申けるは御なげきを承なみだにむせびて
候去なから是ノ字カ口は御使の身にて候程にはやとくくといひければ母上聞しめされてげにく御道理にて御
座さふらふ去ながら別の悲しさにこそかやうに申さ
ふらへ今は力に及ばずと二人の子どもを出立たせと
もの者どもいつよりもきらべやビノ誤かにこしらへ父もろ
ともに打つれて鎌倉へ行ぞあはれなる痛しや母上は
あるにあられぬ心にてちうもんまで出させ給ひ兄弟
の若どもか行つる方を見給へば雲かうかくのあとを
うづみおもかげだにも残らねばおもひの外にわかれ
行霧に迷へる雁がねのなく音も我をとぶらふかよし
なや今はおもはじと常の所に歸りかれらか住し所の
しやうじをあけて見給ふに常に手なれしもてあそび
こゆみにちくばつくり太刀つくりがたなのいつのま
にははやかたみとは成たるや痛しや母上は責めておも
ひのあまりにやにうぼうたちを近づけてかたりなぐ

さみ給ふやうかなはぬうき世の有さまをなげくべき
にはあらねども一代けうしゆの釋迦如來も子には迷
の親の闇らこいちやうしとき給ふましてや申さん
人間はあまたもちたる子をだにも一人におくるれば
皆に別るゝ心地あり我はたぐひもなでしこの二人が
中にもし一人いかなる事もあるならばなとなるを
の一松たぐひいかにとおもひしにかれにわかれて母
ひとりおもひこがれていきてよもあすまで命ながら
へじ此夕暮におとづれの聞まほしやとの給ひてきぬ
引かづき打ふしてりうていこがれ給ひけり去間助延
はとしよのひつじのあゆみひま行くこまのをのづか
らいそがぬたびとおもへどもその日のとりの刻には
や鎌倉に着にけりその夜は梶原が宿所にとまり二人
の子どもを左右に置夜もすがらかいしやくし定めな
き世をあんするにげにゝ心にまかせぬ別の道とお
もひきりおや子の契もけふ迄とあふ時よりもさだま
りぬなげくは迷ひの凡夫なりさとり則佛にてあふも

嬉しかるまじ別もいかがうかるべきとおもひきつて
まします處にかげすゑ申けるはなふいかに曾我殿そ
れがしも御前にてことの子細を申とも此まゝ御免は
候まし御對面も候はゞとり合よきやうに申べきにて
候とく出たゝせ給へと口にいひければ兄弟此よし聞
懇歎
に目とゝ見合てなくより外の事はなしなかねもお
やはかなしきにましてかれらを見るよりも父が心は
かきくれて覺えず落す涙かなかくて有べき事ならね
ばかげすゑ御前に參る頼朝は御らんじてあれはいか
にかげすゑ何とて昨日は歸らぬぞかれらはいかにと
仰ければめしぐして參たる由申時刻うつして叶ふま
じ由井の汀に引すへ首をきつてすつべきなりはやく
早くと仰ければかげすゑ重て申べきやうのあらすし
て我宿所にぞ歸りける痛しや助延二人の子どもに宣
ふやう助延過去に科ありと實子ならねばよも報いし
伊藤河津がつみ科今養育をうけざればなにの報のあ

るべきぞ唯願は神佛まいり給ひて兄弟を助けてたは
せたまへと祈念もいまだおはらねにはやかげすゑは
歸りけり助延いそぎ立出て上意はいかにと問給へば
源太涙にむせびつゝとかく返事もなかりけりやゝあ
りて申けるは荒口惜や候責て御對面も候はいよその
そせうも頼べきに此儘由井の汀へ御供申首を切て參
らせよ若君様の御教養に報せんとの御誼にて候と申
もあへぬ處にまた御使ぞたちにける曾我の一萬箱王
丸をとくくきつて參らせよ時刻うつらばかけすゑ
もおなじ罪科たるべしとかさねて御誼候とかたりす
てゝぞ歸ける曾我も源太も兄弟もあまりのことに肝
もきえむねふさがりて聲出す實にせんだんはふた葉
よりも香ししといふ鳥はちいさけれど虎をとる得あ
りかれは育けれどと儀による命をかるんじ後命を家
に傳えんとなげくけしきもなかりけり兄弟申けるや
うはいかに候父御前いそぎ乗物給り由井の汀へ出べ
きなりもしや頼あるにこそしばしもかくてありたけ

れ又御使たつならばかけすゑの御爲しかるべくも候
まじとても叶はぬ物故にかまへてなげかせ給ふなよ
父御前といひければ曾我は子ともにいさめられこし
さしよせて兄弟のせ由井の汀へ出けるが落る涙に目
が暮て道もさだかに見えわかずしどろもどろにあゆ
みけり鎌倉中の貴賤上下曾我の一萬箱王丸のさゝ後
の體のあはれさよと袖をまぼらぬ人ぞなきかくて汀
に着きしかば敷皮敷せこしよりおりいまが最後候よ
きられて後に我くはいかなる所へゆくべきぞおし
へてたばせ給へ父御前といひければまたようせうの
ものどもが最後をまらぬあはれさよとみな涙をぞ流
しける助宣さしよつてのたまひけるはいまが最後よ
兄弟きられて後に汝らは祖父伊藤の入道父河津の三
郎と一蓮に生べし必死て行者は佛の御前に參るなり
まづ初七日はしんくわう王本地は不動明王也二七日
は初江王本地は釋迦にておはします三七日はさうて
い王本地は大聖文珠なり四七日は五官王本地は普賢

菩薩なり五七日は閻魔王本地は地藏菩薩なり六七日は變成王本地はみろく菩薩なり七七日は泰山王本地は樂師如來なり百ヶ日は平等王本地は觀世音一周忌はとし王本地は勢至菩薩なり又三年はごだうてんりん王本地は阿彌陀如來なり七年記はあしゆく佛十三年は大日如來三十三年は虚空藏菩薩なりかくの如くの佛たちもろくの非願^{悲ノ借}おこし衆生齋度^濟したまへりいとけなければ汝らはつくる罪のなきによりかゝる佛の御前へ參るべき事どもはうたがひさだめてあるまじひがまへてふかくに見ゆるなとさもかうしやうにのたまへども見ればあまりの不便さに人目もさらにはばからずふかくの涙をながさるゝかやうに時刻をうつす處に一つのよろこび候けり三浦の儀盛^{義ノ誤}宇都宮の友綱千葉助經高この人々を先として東八ヶ國の大名に君ぞせうの爲に連參申也源太殿も曾我殿もそぞろにきらせ給ふなよと使をたて給ひ各御所へ御參ある申上られけるやうは曾我一萬箱王丸を誅せらる

るよし年まだようせうの者どもになに程の事の御座候べきたすけ御をき候へかしとおのゝ申されたりけれど頼朝聞召て誠面々の忠節いつの世にか忘れ候べきさりながらみなゝ存の如く伊藤の入道助近につらくあたられ候ひつる其時の心にはかれら程のものを千人切てあくべきか扱はめんゝは伊藤に頼朝をおもひかへ給ふか口おしさよとおほせければ連參の人々もかさねて申べきやうのあらずしてみなゝ屋形にかへらせ給ふ助延此事を汀にて傳へ聞扱はいかやう成人の御申成とも叶ふまじひとおもはれければ草のかげなる助近にうらみ事をぞせられける金はいさごにまじはれども朽ることの候か君は正しき清和のなかれ一旦落ぶれ給ふともするに頼をかけ申不忠の心なかりせばかるうきめによもあはじ北條殿は君の爲不忠の心なきにより君をむこにとり給ひ今は子孫も富榮へ肩をならぶる人もなし浦山しの北條や浦めしの助近やと過しむかしをうら見しははかな

かりける次第也さてあるべきにてあらざればはやり給へ源太殿扱々母が方へはなにと申まじひかと涙と共に仰給へば兄弟此由聞よりもさん候心にかゝる事とはよはひかたぶきおはします母御をさきに立て參らせ御あとをもとひ參らせんとおもひしにおもひの外にさきに立ち申あとにて物をおもはせ申さんこそよみぢの障りとなるべき去ながらいまこそかやうにありとも來世にては一蓮と候ゆへに生れあひ申べし叶はぬ事をたのみになげかせ給ひ候なとは、上の御心をなぐさめ給へ父御前とおとなしやかにいひければ貴賤群集の人々もみなみだをぞながしける扱あるべきにあらざればはやり給へかけすゑ念佛申せ兄弟と懇にすゝむればいとけなき聲をあげ南無阿彌陀佛彌陀佛と十返ばかりとなふればかげすゑもおもひきり太刀とりあげぬきもちてあゆみより見てあればいづくに刀を打かけてきるべきやうのあらずして本の座敷になをりけり助延御らんじてな

ふなにとてきらせ給はぬぞさん候一定きりそんじつべう候なにがしか内に吉田兵衛と申てふてきの者の候こなたへ參り兄弟の太刀とり申せとてかたはらよりも呼出す助延御らんじてなにがしが子にて候を御内の人の手にかげきれとの仰は口惜ふ候なにまでも候はずなにがしが手にかげよみぢをかくすべきなり嬉しひか一萬座敷になをれ箱王とすてたる太刀をとり上歩みよらせ給へばわれおとらじと手を合せ父にきられんうれしや兄なれば一まん先さきにとぞすすみける箱王は我を先とくくきらせ給へとて左右の袂にとり付てむつまじ^{シテ脱スルカ}なる有さまをなににたとへん方なしかやうに時刻をうつすところに一つの悦候ひけり父部の重忠はすちかい橋の屋形を出演面を見てあれば貴賤群集をなすなに事にやと問給へば曾我の一萬箱王丸を誅せらるゝと申候へばかねてもきひつる事源太殿も曾我殿もそゝろにきらせ給ふなと使をたてさせ給ひ御身は御前へ御參有申上られけるや

うは唯今出仕申とて濱をもてを見て候へば貴賤群集をなすなに事にやと尋ねて候へば曾我の一萬箱王丸を誅せらるゝ由年まだよう少のものどもに何ほどの事の候べきたすけ御置候てなにがしに御あつけ候へかしかれ成人仕もしも不忠を存はなにがしが手にかけ首をきつて參らすべし此度の命を御たすけ候はし時の面目たるべき由申上させ給へば頼朝聞しめしてなふいかに重忠かやうの事を申さねば唯頼朝がひが事もおもひ給はんする程にかたつて聞せ申べし頼朝流人たりし時北條ひるがこ島へながされ伊藤北條兩人に守護せられ廿一年の春秋を送りむかへてすぎし時伊藤が娘にいひかはしはいしよのうきをなぐさみぬかくて日かすをふるほどに若を一人まふけつゝ嬉しさたぐひ候はすかまへて果報目出度正八幡の嘉護ありて家をおこし名をあげて天下のぬしとあふがれよといつきかしづき日を送るかゝりけるところに伊藤の入道助近は三年のわうばん勤めて都より下り

しがはや此事を聞付誰がはからひに頼朝をはむこにとりてありけるぞ平家の御恩を此間天山に蒙り妻子をふちし身をたてゝ人となる助近が世になし者をむこにとり孫をまふくるものならば老のくげんに繩かかりうき目を見んこそ悲しけれとむすめをばとり返しやまきはんぐわんむこにとり三つになりし若をば伊藤がたきにしづめしはなさけなかりし次第也やがて頼朝をもうつべきにてありしを伊藤の九郎がなさけにて命ばかりはとにかくにながらへけるぞふしぎなるはぢの上本ノマのなげき本ノマのちりよくをは筆從へにもいかで盡すべきその時の心にはあはれ伊豆を下がへ假借やしんの者をほろぼしおもひゑらせばやと明幕佛神にきせい申せしゑるしにや日本國のぬしとなるやまきいとうをほろぼしくわひけひのはちをすゝぐなりさればふるきこと葉本ノマにもぞちうをばなづきをわつてずいをとりにきとうをは根をたつて葉をからせと申ことの候ぞ彼等は正敷伊藤が孫此世に助けておかん

事虎の子を野にはなし龍に水をあたふるに似たるべしよく聞給へ重忠じよの事にて候はいなにかは背き申べき此事におゐてはおもひもよらぬ事なるべし時刻うつして叶ふまじひぞはやとくきれとぞ仰ける重忠かさねて申上られけるやうは御誕を委敷承り涙にむせびて候人間不定の慣ひにてはやきむくひを存不忠致す伊藤こそ返々も口惜ふ候へさればいんぐわたちまちれきせんたり御物がたりのつゐでいんぐわの道理を申上べしいま三しやうがさきかとよ天ちくくしな國にれう王と申御門一人おはします是隱なき惡王なり彼國にいんねんほつしと申て賢人の候がひだうのちよくをそむくとて親子三人誅せらる今度はいんねん法師太唐の玄んのゆうわうに生れかはり給ふ扱天ぢくのれうわうはたいたうのごめいしこうと申民のやつこにうまれかはり給ふ玄んのゆうわうにきられ給ふこれ前生のむくひにてのがれかねたるわうじなりさればかやうのいんぐわに若君様もあへなく

むなしくならせ給ひぬ扱三じやうはちんりんすなをこのねんをすて給はでいんぐわをかへり見給はずばたがひにうつゝうたれつ生々世々に盡すまじひあれ此者兄弟を御たすけ候てともにしやうじをはなるべきたよりとならせ給へかしいかに／＼と申さるれどとかく返事もましまさずやゝやりてのたまひけるは今朝よりも八ヶ國の人々の訴訟ありつるをももちいす唯此事をは頼朝にゆるさせ給へと仰ありさうなく用給はず重忠承口おしの御誕や候今朝よりも八ヶ國の人々の訴訟ありつるそのあとに重忠が參り無用の訴訟申かゝり叶はで歸物ならば父部の家のふかく末代とても面目なしきみは正敷せい將軍にて理非をたゞし國を守り給ふ身が是程の訴訟をなどや叶へてたび給はぬぞ祖父伊藤は過し事またようせうの者どもに是程迄の御罪科あるまじき事にて候何までも候はすかゝるをせうを申さんとおもひ立て候事ちゝふみやうけん大菩薩にはなされ申此度一門の運のきは

おノ誤カ

まる處成べしかれをきらせ給は御前にて腹切てい

死出ノ傳信

とけなき兄弟がさうの手を引候て四手三づを引わた

しあびたんしやうのそこに有わうち伊藤の入道と父

古はうばい歟

河津を呼出し二人の子供を手わたして□□□□のゑ

はノ誤

るしにせんいかに本田半ざいよ濱に下りて兄弟が最

後の體を見て參れ暇申て我君と刀のつかに手をかけ

ておもひきられし有様を物によく／＼たとふれば漢

の高そのたゝかひにかううがせんにかけまけかんや

うの陣をはつしりよ馬どうをまねけどもかたきおそ

れてちかづかねば我とつるぎをぬきもつて我首をか

ききりかたきにわたすいきはいもいましげたいの有

様もいかでかおとりまざるべきコトハ頼朝仰けるは

あらふしやうの重忠の訴訟や叶はずはらきらんと

のたまふや前代未聞の事どもかな力及ばず兄弟を重

忠に參らす去ながら今朝よりもせう有つる人人

の□□はうらみも有ぬべし心得たまへとのたまひて

さにかうべを地に付給ひあら有難や候唯今のせう
叶へてたまはる事生々世々の間にやはかわすれ申べ
きとあまりの事の嬉しさに嬉しなきにぞなけれける
頓て御前を立半ざいを便給へば半ざい濱に下り重忠
の御せう有兄弟の人々を御たすけ候なり源太殿も
曾我殿もはや／＼歸らせたまへとたからかにいひけ
ればイロフシ濱にあつまるのみならず聞人ごとにイロ
フシ手を合ありがたの重忠ややさしの人の心やとよ
ろこばざるはなかりけりコトハ助延は半ざいと打つ
れ二人の若を引具し重忠に參らせ給ひあら有難や候
唯今の御せう有兄弟の者どもか命たすけてたまは
る事生々世々の間にやはかわすれ候べきとカ、ルフシ
あまりの事の嬉しさに同嬉しなきになかれければ重
忠ももろともに悦の泪をながさるる其後助延申さ
れけるはいままばらく御物がたり申度は候へども古
郷に残りたる母にて候者さこそなげき候はん先口歸
此はうしの有さまを委敷申聞せかさねて參り候はん

とねんごろにの給ひて二人の若をこしにのせ古郷にかへらるる心のうちの嬉しさをなにとへん方もなし痛しや母上は子どものおもひにたえかねてなきふしてまします處に曾我殿も若達も御よろこびにて唯今かへらせ給ふといひければ母は夢ともわきまへずカ、ルフシ二人の若もこしよりおりカ、ルフシ母の袂にとりついて是はゆめかやうつゝかとなくより外のことはなしやゝありて母上は涙とともに宣ふやう此程はげにうばたまの夜もすがらなきあかしつるかなしみに由井の汀できられしが若も夢にや來りけん死たるものはさなりとも父は夢にはよもきたらじあな嬉しの夢ならば又やわかれもあるべきとおもひこがるる心こそことはりせめてあはれなれ片ツメやゝありて助延はじめおはりの事どもくはしくかたり給へば母やめのとば手を合ありがたの事どもや重忠のましまさずばいかでふたたびあふべきとよろこぶ事はかぎりなしヶせさればういのほうふつは夢のうち

のごんくわさてまたむさのさんしんはかくのまへのしちぶつゑきろの鈴のよるのこゑ反魂香のけふりこそなきおもかげもうつるらめカッメ是はたぐひもなくとりのあくがれ母のなげきしに君のめぐみのふかうして科をゆるし理をたいしあふげはたかきつくば山をいもかへす松風のみどり子なればなきおやの君に不忠のすゑなればかくしそだてし古しへの心にいまは引かへなげきはかへり悦てノ字ヲ脱スルカの御酒もりと成にけり扱兄弟の人々成人年をかさね兄をば曾我の十郎弟を五郎時宗と隠れなきゆうしなりおやのかたき助經を野にふし由に隠れ居てねらひうかがふ有様をよその見る目も中々に心ぐるしき次第也ねらふ所はどこゝぞばんにうと日らつかおほいそこいそまりこ川あみのいつしき小田原此世をいでる屋形まで三十八度ねらひ終に本望とげつゝこうめいを家に残しけり

元服曾我

文治元年正月十三日に鎌倉殿箱根まふでとぞきこえけるさるあひだはこねにはかまくらどの、御まいりとしてだいしゆ衣を用意しちごのいしやうをけつかうす其中にかはづの三なんはこわうどのいしやうの事をばおもはずまようちではなれしち、ごの御事今のやうにおもはれてまのびの涙せきあへすこしの式部をちかづけてかまくらどの、御参りに我は出仕を申まじそれをいかにと申におほぢ伊藤ふちうの者とて御にくみ有し事世にかくれも候はずまきぶ此よしうけ給はりさも候へこれほどぢだいしゆけつかうあるによそながら御見物候へかしさらば見物申さんとてかうだうのには出かまくらどの、御まいりをいまやをそしとまち給ふかくて鎌倉殿御登山まし／＼てかうだうにうつらせ給ふ去程にはこわう殿まきぶ

たゆふをともとしてげちんのかうしのきはまで出さもあれかたきのすけつねと名のみ計はき、けれど其すがたをばいまだ見ずかたきをと^{本ノマ}はてとおぼしめしかまくらどのはいづくにまします式部殿とぞとふたりけるまきぶ此よし承りだいもんのさしぬきにたてゑぼしめされたるこそ鎌倉殿にておはしませはこわう聞召おろかの人のをしへ事やさればとてかまくらどのを見そんすべきにてあらね共かたきをとはんがためぞかしすけつねはととふならばまきぶたゆふがこゝろへてあれよとをしゆる事あらじ八ヶ國の大みやう小名の名字をとひてみんするにすけつねといふ者にとひあたらぬ事よもあらじとまだいとけなきころにもあんをまはすぞおそろしき

扱君の弓手のわきになをられたるは誰候ぞあれこそむさしにかくれなきち、ぶのまげたいと申人にておはしませ扱又めてのわきになをられたるはたれ候ぞさがみの國の住人わだのよしもりと申人にて候又き

みの御前に中座につきましますはいづくの國のたれ候ぞ伊豆の國の住人ほうでうの四郎ときまさとして君のためには御まうと其つぎなるはたれ候ぞたしろのくわんじやのぶつなとて是も伊豆には大名なりそのつぎくは誰候ぞへんみたけだ小笠原一條いたがきなむぶしもやまみなついたりといひけれどなを祐經ときかざりけり扱又げぢんのかうしをきたむきにはらりとゐながれたるはたれ候ぞあれこそ相模大名にさんまほんま土肥つちやとをたうみの國の住人にしたらなかやま皆ついたりと云けれどなを祐經ときかざりけりさて又げぢんのかうしを西むきにはらりとゐながれたるはたれ候ぞあれこそ信濃大名になたかなしうむのもちづきいぬかひすは殿原こもりしろとりはつとりたうみな御ともといひけれどなをすけつねときかざるははこわうにつゝむかおぼつかなし扱はすけつね此度の御ともをば申さゝりけるや御供申て有ならば伊藤の大將にて有あひだばつ座に

はよもあらじさらばかへらんとおもひしが又たちかへりとふたりけりさてあのらいばんのきはにうすかうそめのひたゝれを着さもゆゝしげなる大名はいづくの國のたれ候ぞまきぶ此よしうけたまはり今までまろしめされぬやあれこそ御身のためには眼せんのいとこどう一郎すけつねと申人にておはしませ箱王どのは聞召能こそたちかへりとふたりけれようちにてはなれしちゝごにすこし似てや有らんとおもへば敵ながらもなつかしく見とれてこゝにはこわうどのばうせんとしてこそおはしけれ祐經何とかしたりけんはこわうどのを見つけあふぎをあげて是へくまねきけりはこわうどのは御覽じてかたきのよぶがうれしさに大勢の中をのりこへ乗こえとをつて祐經がそばへぞよつたりけるすけつねはこわうどのをひぎのうへにかきのせ申いかに箱王殿それがしも御一ぞくのかたはしとめしをかくどう一郎祐經と申ものにて候はこわうどの此寺にましますよし承て候

へどもくはうひまなきゆへ御めにかゝらぬなり見参のはじめになにをがな参らせん少人の御ためには似合ぬ引出物なれ共家につたはる重代とてあかぎのつかにまろかねのめぬきどうがねうちたるこさすがをとり出てはこわうどのにぞ引にける

箱王此由御らんじてあらうれしやかたきの手よりもかたなを得たる事ひとへにはこねごんげんのいたさせ給ふるぎなりとつてひきよせ一かたなと思ひ切ては有けれどすけつねはふるつはものはこわうは生年十三なりうてがほそくしてきごめのうへをとをすまじとをさぬものならば鎌倉殿の御目の前八ヶ國の大みやう小名の御らんずるところにておやのかたきをうちそんじめいどにましますかはづどのまつたいそがのうきなをくださん事のむねんさよとやせんかくやあらましとあんじわづらふその時刻にかまくだのゝ御下向とて大名小名一度にぎしきをはらりと立すけつねも座敷をたつまのあたりなるかたきをう

たですぐすむねんなるそれよりもはこ王殿がくもんじよにたちかへり只この事をぞあんじけるぬればかたきが夢に見えをくれば身にそふこゝちにてがくもんこゝろにいらすかくて年月ををくるほどに十六になるはほどもなし去程にべつたうはこわうどのの御ぐしおろさんとて吉日えらび曾我へ案内を申されたり母上きこしめされて明日箱王法師になすべしとてけさころもをよういしはこねへのほせ給ふ十郎どのはきこし召ちごのすがたを今一度見ばやと思召はこねへのぼり給ひけりはこわうなゝめによりこふで一間どころへまやうじ申扱はこわうはほうしになるべく候やはこわうほうしになるならば御身にたぐふものあらしたゝしほうしになるならば一人はてらのすまゐをし祐成はさとにましますばかたきのくどうすけつねをなにとしてかは打べきぞ十郎どのとかきくどきなくよりほかの事はなしすけなりさうがんに涙をうかべあはれげによの中に兄弟にえんなきも

のは祐成にてとゞめたりそれをいかにと申に京にまします小次郎殿は都の住居とましませば身の本望をもちたりなぐさむ事もなし越後成せんじばうは國はるくにてをとづれなし二のみやのあねごはによしやうの身あるゑるしもましますはこわうさへ法師になり祐成はともゝなぎさのうつせがいくだけでものをおもふともたれかあはれととふべきぞ箱王殿とかたりつゝ又はらくとなき給ふその義ならばはこわうもおとこになりすけなりの御供申へきかたゝし母上の御ふけうもや候べき御身男になりて後たとへ母上御ふけう候ともそれがしよきやうに申なをすべしさらばおもひたらんとてつねのところ^{カヘシ歟重親本ノマ}にたちかへりくわしき事をかきとむる名残をばなごりをばはこねのおやまにとゞめをきふたつとなきいのちをばめいどにましますちゝかはづどのにたてまつるししやう同宿人々に名ごりのかずはおほけれどおもひたちぬるたび衣又こそきてもあふべけれかへすくも

なごりおしのしきぶたゆふとかきとゞめ夜のまに玄のび出にけりはまべの宮をすぢかひにやけるの露にそぼねれてそがの里にぞくだりけるすけなりおほせけるやうはやがておとこはなすべきがゑほしおやにはいかなる人を取べきぞ伊豆の北條をとるべしさりながらかちにていかゞ行べきぞ祐成馬を用意すさすがむまは一疋なりすけなり馬をひきまはし乗やはこわうめされ候へ十郎殿すけなりきこしめされてあらおろかの事やちごをかちにてあゆませ大ぞくの身として馬にのりろじをゆかうすほどのぎやくなる事の候べきかいかなる御事候ぞ舍兄をかちにてあゆませ申弟の身として馬にのり路次をゆかうするほどのぎやく成事の候べきかめされ候へ十郎どのはや乗やはこわうと兄弟馬をえきたいす時刻うつりて夜明なばおほかたのものにもれ聞えとゞめられてはかなふまじはこわうどのものり給へ助成ものらんとてむまいつびきに兄弟のりそがのさとをぞ出にける上古も今も

末代もためしすくなき次第なりこまをはやめてうつ
ほどに北條のたちに着馬場するにてむまよりおり門
外にこそたゝすみけれ折ふしえまの小四郎出あひて
いづくへの御とをりぞすけなりきこしめし是へ参る
事別の子細にて候はずこれなるわつぱにゑぼしがき
せたく候てこれまでまいりて候え殿きこし召やす
きほどの事にて候さりながら父北條に申きかせんと
てうちにいりときまさにかくと申ほうでう聞あへず
涙をさつとうかべたまひそれむかしは六十六ヶ年を
一むかしとし中比は三十三ヶ年當代は廿一ヶ年を一
昔とすあらむごんや此人々よが世にてゑぼしおやを
取ならばげんじにてはかまくらどの平家ならば小松
殿の御前にてゑぼしをきうする人々が時代にしたが
ふならひとてはうばいをたのみきたる事のあはれさ
よそれ／＼こなたへえやうせよとてなけれどでゐの
ちりをとりやれねどすだれかけなをしひきつくろへ
ばすではや時うつり返事もなかりけりはこわうお

ほきにはらを立いかによ十郎殿ふしぎやなえまどの
はなにとてをそく見ゆるぞやがて心得たり昔は伊藤
ほうでうとて鳥のふたつの羽がひくるまのりやうわ
のごとくにてをとりまさりはなかりつるに當きみの
御代と成て我々兄弟よになし者にて有あひだ北條が
いやしめてゑぼしをきせじそのために扱ばしをそく
見ゆるか其儀にて有ならばすは八まんも御ぢげんあ
れ今生此世にておやの敵はうたすともれんちうへみ
たれ入てほうでうとさしちがへ死なふするにて候ぞ
やそこのほどをば十郎殿も御用意あれとぞ申ける助
成きこしめされてよし／＼北條もさはおもはれ候ま
じこゝろをえづめてまたせ給へとせいし給ふところ
へ江馬殿たちいでぎつしやうかまへ候とてをそく参
り申て候こなたへ御出候へとて兄弟をえやうすその
時箱王いろをなをし兄弟つれてぞ入にける一にはち
ご又客人なればはこわうをゆんでのわきになをしす
けなりをめてのわきにえやうせらるゝ其外えまの小

四郎をはじめ一ぞく家のわかたうくるま座にはらりとゐなをり三ごんの酒すぎでのち北條ざしきをたち給ひゑぼし一かしら取いだしはこわうどのゝかみはやゑびんかきすましきせ申名をばほうでうの助五郎時宗とつけいかにめん／＼聞給へそれゑほしをきる事はわたくしならぬ事にて有清和天皇の御代の時異國よりも我朝へ作り物をわたされたりくぎやう殿上人納言さい相以下北面うくわんむくわん關白殿下さしあつまつてのせんぎなりみかどえいらんまし／＼て是はおのこのたましゐ名をばゑぼしといふものなりへりは大海つぶはほしくしがたは半月とがるは國のたけきさうかさくちのひろき事はいのちの長きさうにてありこゆいをゆひてきる事はさながらゑゆみのはんふくのまなびなり此ゑぼしをきる人はいのちもながく名もたかく壽命長遠徳自富貴の家に生ゝなりこのえぼしめされてすゑはんじやうといはひつつたちとかたなをとり出しはこわうどのにひき給ふ

助成御らんじてうれしやとはのたまはでなみだをさつとうかべたまひあらはづかしやむかしがいまにいたるまでゑぼし子のかたよりもゑぼし親のかたへこそ引出物をば申ならひの候に却て給はる事のはづかしさよとおもへばあせもなみだもろともにといめかねたるばかりなりほうでうとの御らんじてあらむざんや助成弟が烏帽子をきるほどに有し昔をおもひいだし涙のふせいのあはれさよすけなりがこゝろをもなぐさめばやとおぼしめしさけたぶ／＼とひかへ給ひ承はればち／＼ぶには六郎殿三浦にあさいな曾我には十郎殿一師に付て舞ならはせ給ふが中にも十郎殿の御まひすぐれたるよし承はるこれははこわうどのゝゑうげんなればたゞ一かなでとこはれたりすけなり聞召まはじものとはおもはれけれ共まはではざしきのけうもなしまはばやとおぼしめしいつせいをこそあげにけれ

ゑつやゑつ賤のをたまきくりかへし

昔をいまになすよしもかな

むかしを今になさばやとやゝしばらくうたひしがあ
ら何ともなやこれはむしやうのたいぞかしまひなを
さばやとおもひて和歌のたいをぞあげにけるきみを
はじめておかむには千代も經ぬべしひめ小松ノゝと
三返ふんてまはれば北條をはじめ奉りれつ座有し人
人一度にあつとかんじけり其後まひもすぎければい
とまをこふて兄弟曾我ふるさにかへりけり

和田酒盛

相模の國の住人わだのよしもりは一門九十三ぎをひきぐして山したじゆくかはら長者の宿所にうちよつて夜日三日のさかもりはおもしろふこそきこえければちやうじやもかねてごしたる事なればかうしやうしゆんによせきくあひと申てとらにをとらぬゆうくんを十八人すぐつて和田どのをもてなせどされどもわだの心ざすとらはざしきになかりけりつかひをたててめさるゝに一度のつかひにまいらず二度の使に返事せず三度にもなりしかばわだ大にはらをたて異國をみねばそはしらずほんてうにをひてをや武州にちゝぶ相州によしもりななどかうちよつてさかもりをせんするに人はよばずと出あひしやくをもとり今やうをもうたひすいさんせんこそほんにてあるべきにかほどめすに出あはぬとらはふしぎのものかな山

下内をいでよといへあさいなとこそいかられるははのちやうじやこのよしを聞召いやゝあしかりなんとおぼしめしとらごせのゐたりける一間所へたちいりゑやうじをへだてゝのたまはくいかにとらごせたとひまんゝの事有とも只今出てわだのまへにてゑやくとつて三うらへかへし給へそれふてんのしたに生をうけ王土にその身ををく事は大事にてあらずやとらごせとぞおほせけるとら此よしをきくよりもあらうたてのは、御、悟子の仰やけんしむは二君につかへず貞女りやうふにまみえずと申はんもむこそさふらへすけなりにけいやくし又助成をひきかへてわだにけいやくあらんとやおもひもよらぬ事なるべしとらは是にありつるがよになしものゝ十郎とちぎりをこめ鎌倉のかたへとも申させ給へはゝうへとめせどもとらはいでざりけり母のちやうじや至極のはらにすへかねていかにとらごせきゝ給へむかしもおやにかうあるともがらをわごせに語てきかすべしそれはく

ゆうは母にうたれ打つえをばかなしまでよはるつえにねをぞなくゑんのまうそうははゝのねがひ物とてときならぬゑはすにたかなをもとむるに雪くうざんにふりつみたかなさらになかりけりしよてんこれをおはれみたまひ雪のなかに竹の子三ぼんまでそだつよろこび是をとりてかへり八十にあまりたる母のねがひをみてけるとうけたまはるくわつきよはははをやしなひかね我子をつちにうづまんとうちけるくわの下よりもこがねのかまをほりいだし二度ちやうじやに成ときくさればにや人の子のたいないにやどりたねをおろすはかりごととはぼんてんよりもいとをそろし大かいのそなるはりのみゝをとをすよりなをうけがたふてまうけたり二百七十餘日はたいないにやどり神ほとけにもいまれ申九ほんのじやうどへ参る事もなしたまゝ人に生れくる其ときのくらしみはいきたるうしのかはをはぎせんからたちの其中へをひいるゝよりたへがたしげんとうそせつのふ

ゆの夜はふすまをかさねはぐくめり九夏三伏のなつの夜は松風にたはぶれてそらふく風をまねきよせをよそさんしをはぐくめり三歳になるまでのみけるにうみぼんぶいかでゑるべきぞかたじけなくも釋尊はだんどくせんのかたはらにてゑづかにさんだむして見たまふにをよそ一百八十石にゑるさるゝ此ことはりをきくときはゑろきはねはちゝのおんしゝむらははゝのおんほうじてもほうじがたきは父のおんととかれたりしやしてもしやしがたきははゝのおんととかれたりじふおんかうによしゆみせん悲母おんしむによ大海いづれをほうじつくすべきぞやあとらごせたい今いでゝ和田のまへにてしやくとつて三うらへかへし給へそれさなきものならばそうじてあの十郎殿のむまくら見るしきていにてそがよりもこれまでのしゆくがよひを思ひとゝまり給へとあららかにのたまひてちやうじやさしきへなをられしは十郎どのゝためにはめんぼくなふぞきこえけるすけなりさ

うがんになんだをうかべそれ天人の五すい人間の八
苦とて八つのくの有其中にあはれたゝひんくほども
のうき事はよもあらじひんくとだにもなりぬればま
たしきなかもうとふなりうとき人にはいやしまれた
んぼの衣をそめされば佛ぼうそをもくやうせず朝
夕ともしければ三ぼうのふせをもをこなはずひやり^{本ノマ}
しゆんしにましはらねはなぐさむかたもなしたまた
まばつ座につらなつてこゝろはかうしやうに人にす
ぐれておもへどもかさねのきぬを身にきねばかたみ
つまりてはづかしけふこのごろすけなりなんどが
たのみたらんするゆうくんををそらくばあの殿原が
ぶんとしてゆうくん出せさかもりせむなんどゝいは
しなれどもよにまがたがへばちからなしさぶらひか侍
にむかつてうでくびをにぎりきちちよくするはなら^{本ノマ}
ひ也世をも人をもくすのはのゝうらむべきにてな
しやとてはんくわいそねむ助成もわがみのほどをく
わんじつゝたもとをかほにをしあてゝなくよりほか

の事はなし

とら此よしをきくよりも十郎殿は何事を仰さふらふ
ぞむかしの人がめに見えさふらふが東方さくが九千
ざいうつゝらの八萬歳りうちくわしやうの二萬ざい
上明こしのおきなの一^千ざい二^千ざいをふるとは申
さふらへど名をのみ聞いていまは見すあすをまらざる
心にてけふのらくこそうれしけれとゝろゝとなる
かみもおもふなかをばよもさけじ一人ましますはゝ
のふけうはかうふるともざしきへはいづまじき十郎
殿とかたりけり助成きこしめされてあらやさしの女
のことはやかほどやさしきゆうくんを座敷へいだし
ぬ物ならば長者のうらみふかゝるべしと思召いかに
とうごせたいいまの言葉はやまならばしゆみせんう
みならばさうかいよりも猶たのもしく候が爰にちか
ふことのはの候おやのふけうと仰らるる事はわたく
しならずさんがいをいたゝひてまします佛の御名を
けんらう地神と申釋尊よつてとひ給ふ三がいをいた

だひてましますはいかほどをもきぞと問給へば地神
こたへてはいくしゆみの山にとうしみを一すぢをき
たるたとへよりもなをかく候が爰にをもきものあ
りおやのふけうを得しうのかんだうをかうぶりたる
ものゝとをるとき大地がわれてみがいればあたりの
本草もかれはて川をわたれば瀬だへしそのうろく
づも生をめつし地神がかうべに七尺の劔をたつるよ
りたへがたしとのたまへばしやくそんもあみだ佛三
世のしよぶつたちゑたをまひてぞおぢ給ふ又五しや
うと申は五のまきのたいばほんに一しやふとくさば
む天わう二しやたいしやく三しやまわう四しやてん
りんしやうわう五しや佛しんととかれたり三じうと
申はいとけなきとき父母の家とて家をもたねばおや
にゑたがふく一つわかくさかななる時はおつとの家
とていへをもたねばつまにゑたがふく一つさて老し
て其後子どものいへとて家をもたねば子にゑたがへ
るくひとつされば佛のとかれたり三がいにかきもな

し六道にほとりなし女に三の家なしとこゝをほとけ
のとき給ふかゝるいはれの候ぞやたいま出てわだ
のまへにてしやく取て三うらへ返し給へそれさなき
ものならば名ごりおしくは候へども助成は曾我へ歸
るべしとら此よしをきくよりもはゝごのふけうとお
ほせらるゝをさへ御身にかへておもひしに御身もふ
けうと仰あらばさらば出んといふまゝに十二ひとへ
のきぬのつまを取てざしきへこそ出られければもる
年は十七歳がいたう二ばんのゆうくんおとなげなく
もよしもりのとらにこゝろをかけられしはことはり
とこそ聞えけれとらごせ出て和田殿ともてなせども
さかづきのけうたいこゝろにそます吉盛御らんじて
いかさまにもとらごせがさかづきのげうたいこゝろ
にはますみゆるはつま十郎がうちにあるかゝるたらば
出て酒のめとつかひをたてよ虎ごせとらなゝめによ
ろこふで十郎のかたへつかひをたつるすけなりきこ
しめされて出じばやとおぼしめすがたいいま出ぬも

のならばおくしたりと思召俄の事にてある間かけえ
ばしにぞ着たりける夏の野にすりつくしぬふたるひ
たゝれ九寸五ぶんのよろひどをしたみたるあふぎを
つとりそへ前はんにぞさひたりける大まくつかんで
うちあげすけなり是に候とてざしきをきつと見わた
せばちやく座にはよしもりをはじめ虎も長者も一も
ん九十三騎くるま座にはらりと居ながれすけなりが
ゐうするざしきはなし爰に和田の右座にたゝみが一
帖あいた和田は三浦の大將とて恐れてなをる人もな
し祐成御らんじてあらことゝしや和田といふに三
誤歟
うらの大將祐成は伊藤の大將まつごかくなるさぶ
らひがわだがゐうするざしきに祐成座せて有べきか
とおめずおくせずはゝからで右座にむんずとなをる
かくてさかづき三ごんとをつてのち母の長者ゐたる
ところをづんとたつてちやうだいへつつといりまき
ゑのばんにもみちのかはらけすへていでいかにとら
ごせ此さかづきひとつのふで何方へなりともおもふ

するかたへさし給へとらこのよしをきくよりもあら
むづかしのはゝごの仰やわだへならばよしもりへ十
郎殿ならば祐成へさせとは仰もなくしていづかたへ
なりともおもふするかたへさせとは和田にさすなら
ば十郎のうらみあり又十郎にさすならば和田のうら
みありとやせんかくやあらましとあんじたりしあり
さまを物によくゝたとふればあかしのうらの人丸
のすゝりと筆とれうしをそばにをかせたまひて出る
船入ふねたつなみ吹風によそへて三十一字のことの
はにもらさじとあんじ給ひしもこれにはいかでま
さるべきふかくものにとふるに大國の事なるに御門
一人おはしますみかどの御名をはげんそうくはうて
いと申ゑかるにくわうていに三千人のきさきあり第
一のきさきをぐし君と申さてその次のきさきをこう
のうのやうげんゑんの御むすめやうきひとこそ申け
れゑかるにやうきひ三國一の美人たりみかどてうあ
ひなゝめならずきやうせんぎまちゝたりいやし

きひさぶらひの子どもやうきひか一のきさきにそな
はらばもゝしきや大宮人をふりすてわれゝ内裏を
まかり出むとそうもんすみぎをくだりにやうげんゑ
んの一たうぐしきみの一のきさきにそなはらばもゝ
しきや大宮人をふりすてわれゝ大りをまかり出ん
とそうもんすみかど此事をえいらんましゝてやう
やうしのありさまやあなたをいはへばこなたのうら
みあり又こなたをいはへばあなたのうらみありいづ
かたのうらみをもおはぬやうにと思召てんほう十二
年七月七日のひしゝむでんのかくのまに二人のきさ
きめされてるりのばんにはくせき黒石のてうづにす
いごうのつのゝさいを白かねのどうにいれはやく三
ばん一とくせうぶにかけてくらゐをあらそひ給へき
さきたちとせんじあるきさきは聞召れてうらみもこ
ひものこらすさらばうたんとてさいのめをあはせら
るはじめのかちはやうぎひそのつぎはぐし君手づめ
のせうぶに成ておりはになりければやうきひのこひ

めにてう三をこはれたりぐし君のこひめにてう四を
こはれたりやうのこゝろいくばくぞてう三にもて
う四にもかたきつておりすしどうのうちでこのさい
二つづゝにわれては四つに成てぞ出にけるやうきひ
のこはれたるてう三もおりて有ぐしきみのこはれた
るてう四もおりてありみかどえいらんましゝあふ
やさしのさいやなんぢは牛のつのなれど人のこゝろ
をちいに知てさやうにふるまふかやさらばくわんを
なせとてさいのめにしゆをさいてそのときまではて
つち重二てう三てう四でく重六と申せしをしゆさん
しうしと申事この御代よりも始まれりそのさいと申
はものゝこゝろゑつたれば二つにわれ四つでいて二
人のきさきをなはるそのごとくみづからもさしたき
かたは兩かたなりさかづきはひとつ二つにわれての
けかしとちぐさにものをあんじけるとらごせの心中
たとへんかたはなかりけりはゝのちやうじや此よし
を御らんじてあらをそやとらごせさらばそのさかづ

きひとつのふでいづかたへなりともおもはざらん方へさし給へとら此よしをきくよりもはゝごはさながらものにくるはせ給ふぞやこのことばのなかりせばらう人なりきやく人なりわだへこそさすべきに此ことばをきゝながらわだへきすならばかいたう七ヶ國の遊君のなをりたるべしなんでうこのさかづきをばわだへはさすまじものつまの十郎にさそう男なればとつてのまふずのむほどならばあさいなかふるこほりか座敷をたてぞせんすらんそのときみづからうへこそ女なりともこゝろは男子にちがふましあらなさけなしとよわだとのいろある人にいろなきは花みてえだを手折かやこゝをばひたすらみづからにゆるさせ給へとさゆるていにもてなしあさいながめてのわきにさいたる刀ひんばうてねだのこゝろもとにさしたてかへさんかたなにてみづから自がいし妻の十郎にはらきらせして三途の大河をすけなりもろともにてに手をとりにてゆかばやとたゝ一すちにおも

ひきりいかにや御一もんの人々はゝごのおもひさしせよと仰さふらふほどによそのけまふもさふらふまじとつまの十郎にさかづきをむすとさすすけなり御らんじていやゝのふでは事あしかりなんいかはせんとおぼしめすが只今のまぬものならばおくしたりと思召あらめづらしの御さかづきやともつて三度ぞくんだりけるよしもりきしよくかはつてやあ十郎只今のさかづきはのむまじきさかづきなれどもまさしく吉盛をさけてとつてのふづるものかなそれさかづきのむはうがあるぞ玄せんわかきとのばらの川がかりくりうちすぎゆうくんのもとへうちよつてさけをのむにさかもり亂舞に成ておもはしきゆうくんが一つくむでこれをばあれにまします人へとさいたるをとつてのふだるをこそ時のめんぼくなれさすは日比の女のむはひごろの男二人のものがたちいて又ざしきに人もなきやうにさかづきをさしかよはしのふづるところはよしもりがぞんじにははつくんちが

ふて存するそれおひたるをもつてうやまふを父母のごとしわかきをもつてあひするを師弟のごとしゑるをもつてゑんりんゑらぬはきちくおくせきはうばいのこらしめに座敷をとつてをつたてよはやたてよとぞいからるゝ

かみをまなぶ下なればゑも座なるわかもそばなるうちものをひつたをしゝはゝきもとをくつろげおほせにて候ぞたてとをつたつるいたはしやすけなりからのかゝみに身はひとつ立もさすがなりいぶんさんしゆに至てぢくゝになをきんぎよくのこゑありかはづとのゝ御名をばくださじものとぞんずれはいかにわだどの大名なれど三浦の大將すけなりは身こそひんなれど伊藤のこれは大將まつごかくなるさふらひに當座のはちをあたへ給ふものかな只今ざしきをたてうず者はそもをつはたに孫太郎いとひさに源八ゑがらの平太たねながあさいなぞ有らんにたゞ一人が立ざればうしろの體もさびしきによしもりも立

給へとかたなのこひくち三寸ばかりくつろげたもの下にかくしをきはんじこふてまちゐた助成の心中はゑんゑんにのぞむではくへうをふむがごとくなり

すけなりこゝろにおもひかへすおとの五郎ときむねがたびゝせいぶんしつるものをそれしゆくがよひと申はうとくなる人のしゆくがよひをば人がうらやみひんなるものゝ宿通をばかならずにくみ候馬ののりあひかさとがめにても助成うたれ給ふならば時宗一人のこりゐて親のかたきと申御身のかたきといひ何としてかはうつべきぞ理をまげて宿がよひをおもひとゝまり給へとたびゝせいぶんしつるものをもちひずし打こえあさいなかふるこほりがてにかゝつてうたれん事は治定なりゑせん命はつゆちり程もおしからねども年來のすけつねおやのかたきをばうたずしてしやうがいをうしなひなにかせんあさいなの三郎がざしきをたてといふならばたゞばやとこそ

おもはれけれかくおもひ給ひけるがそがへやつうじ
けん弟の五郎ときむねはふるゐといつしところに矢
のねをみがひてゐたりしがあまりねむさにごばん引
よせまくらとしゆたかにこそふしにけれかゝりける
ところに舍兄すけなり枕がみにたちよらせたまひて
やあいかにときむねそれ長者が眞ノ誤賊四十二ヶ條の兵法の
まき物をがくしたりといへどもさけをすごしぬれば
何にもをとれり千日したる用心もめをつよくぬれば
一夜にむになるぞかほどのはくちうにさやうにゆた
かにふす物かやあおきよくと二三度四五度おこさ
せ給ふとゆめ見てかつばとをきあたりをみるに人は
なしふしぎさよとおもひ下女をちかつて十郎殿は
と間ば下女承て宵よりもおほいそにて是にはるすと
申時宗聞て扱はうたがふところなしかたきくどうす
けつねか一騎うつてとをるを五郎だにも有ならばは
ちある矢をも一すぢいてはらきらばやと思召がかく
おもかげにたつかさらずばんどう海道十五ヶ國の

人々のうつてとをらせ給ふが十郎殿は只一騎とゑた
めにかけてねむるがかくおもかげに立かその儀にて
あるならばすはの上下も御ぢげんあれしやきやう助
成の影をば人にふますまじ物をと云まゝにちやうだ
いへつつと入しやうもんしうつたるからうとのふた
をあげおうち伊藤の入道殿よりつたはつたるさかお
もだかのはらまき四人してもちけるをわだかみつか
んで引たてくさすりながにさつくと着かたなと申に
かたきくどう祐經がはこねまふでのありしとき見ぐ
るしけなれ共とてえさせたるあかぎのつかにゑろか
ねにてめぬきどうがね打たることすがをぞさひたり
けるたちと申に河津殿おくのゝかりはのかへりあし
におほみの五藤太やはた三郎が一二のまぶしをかた
めはなちける矢にあたつてやみよくとうたれさせ給
ひしときは是をはこわうにとらせよとかたみにくだ
し給たる四尺八寸有けるがぬけばたまちるばかり成
ゑろきたづなにてまん中むすとゆふてわつそくにぞ

かけたりける御馬屋へはしり入て見てあればおりふ
しかげ成こまにゆあらひしてぞをきにけるくらをか
むひまがあらざればはづなはらがけ引ちぎつてあら
ひぐつはをはめさせひきよせゆらりとうちのりまは
れば三里すぐにうてば五十町まはらは時刻もうつり
なんとおもひ曾我中村にさしかゝりかけあをつては
しとゝうちしとゝ打てはかけあをりこまにゑらあは
かませ只一打にといそひだるときむねが心中あすは
むけんからこくゑんぶのちりともならばなれけふに
をひて時宗あつたのもしくぞみえにける

せつながあいだにちやうじやのしゆくしよにつきも
んぐわいを見てあればくらをきむまいくらも有され
ばこそとおもひおほみかどよりいらんは大はらまき
に大だち座敷の體もことなしとおもひこみかどにま
はる爰に下女一人ゆきあふたやあ此やかたのうちに
何事か有ととふた下ちよ承さんさふらふ宵よりもわ
たの一門九十三騎打よらせ給ひてさかもりのさふら

ふ座敷へ十郎殿もとらごせも出させ給ひてさかづき
のこうろんたい今なかばなりと申時宗聞て扱其さか
づきをは和田へさひたるか十郎へさひたりけるか下
女承て虎ごせのやさしくましゝて十郎殿にさゝせ
給ひてさふらふぞ時宗聞てさてそのさかづきをおく
してとつてのまざりけるかなふ御こゝろやすくおほ
しめせ取て參て候ぞときむね聞てからゝとうちわ
らひ日本六十六ヶ國に大がうのつはもの又二人とも
なかりけり舎兄すけなりにてましますよなけんじん
なる女よにおほしといふともとらにましたるけん女
よもあらじとらなればこそさひたれ十郎なればこそ
あれほどおほきかたきのなかにておくせで取てのふ
ではあれのふだりや十郎殿さひたりやとらごせとた
ちのつかをたゝもつゝとりかんしてたちにけりさて
いづくからゆくぞこなたへいらせ給へとてめんらう
くわいらうまごびさしをさし過しやうじを一問へだ
てあれなるは新左衛門ふるこほり左衛門えびな兵衛

あしな兵衛すのさきの孫太郎これなるは十郎どのといちくをしへけり

ときむねこれを見てたとひなにものなりとも舎兄すけなりにとつてかゝるものあらばしやうじの一けんものくしはらくとふみやぶつて大將とかしつき和田がほそくび中につんと討おとしあさいながみけんからたけわりといふものに二つにさつときりわりのこりのやつばらしにもたらぬしよくわんどもものゝかすにてかすならすしやうぎだをしをすることくさんぐに切てすてしやきやうすけなりとさしちがへてゑなんはあんのうちとぞんすればふんじかつて立たりしはたもんちこくぞうちやうつくりすへた二王にちつともちがはざりけりよしも御らんじてやあいかにあさいななんちは目ごろのちせうにはにぬものかな十郎をとつてをつたてよはやたてよとぞいかられるあさいなこゝろにおもふやうあふさひたるも道理又のふだるもだうりそのうへ弓とりはけ

ふは人のうへあすは我身のうへなるべしさすが名あるゆみとりにかにとしてはぢをすみべきぞげにやらんこのもの殿原兄弟は魚と水とのごとくにてあにがさけをのむときはをとがのます弟がめばあにがのまでたがひにようじんすると聞つるもの今もや弟の五郎が内に有らんにあしうかゝつて座敷をは立そんじまつかうわれあしかりなんとぞんすれば人ものはやさぬまひを立てぞまふたりけるうすをしきのそばを取て其ころかいだうにはやりし硯わりと云歌のたいをはつたとあげ半時ふんでぞまはれるよしやあしゝとてきりすてられしくれたけもくれ竹も本に一夜はある物をよしやあしゝとてつきすてられし庭くさも本しのふとてあるものをよしも此事を御はらゐさせ給ふべし十郎殿も虎ごせも心にかけ給ふなよ一かうこのよしひでにゆるし給ふべきなりとはんしふんでぞまはれるあさいなが心ざし生々世々に至るまでわすれがたくぞおぼえける舞もすぎ時分

になりしときしやうじのうちにかなものゝをとがかりとなつたさればこそとおもひこゝをちつと御めんなれやといふまゝにあひのしやうじをさつとあけ内をきつと見てあればなにはゑらねども六尺ゆたか成大おとこのむないた見ればまつしろなるが五尺あまり成たちを七八寸くつろげかゝらばきりよげに見えしかばをにのやうなるあさいなもたゝひざふるうてぞ立たりけるいかにや御身は五郎殿にてましますか舎兄助成もざしきにましますになど出てさかもりをばゑたまはぬぞと有しかばときむね聞て仰かしこまつて候へ共御らんせられ候ごとくびやくえでさうとて出もせずあさいな心に思ふやうげにやらん五郎はじやにつなを付たりとも馬ならばのらんとくわうげんすると聞つるものを座けうながらじつにちからのほどをためさばやとおもひげに御へんは出まじいかといふまゝにはしりかゝつてはらまきのくさすり二三まいかひつかんでどうのいたにひつしめ前へゑ

いやつといふて引けれ共ちとも更にはたらかすげにこれはつよかりけるぞや三うら一もんは九十三騎れんばんは四百八十餘人が中にこばやしのあさいなとて名にしおふたるそれがしが五郎をたゝいまざしきへひきいださぬものならばしやうがいなりとおもひてあさいなの三郎がちからの出るゑるしにさうのうでとかひなにちからすぢといふものが十四五三十分つゝといでにけりむねをおふるちからげごはんのおもてにあかゝねのはりをすりならべたるごとくなりどうのすぢがひたいへあがりひたいのすぢがどうへさがりものによくゝたとふればきうちやうの藤が松をからんできりんかともをこうたるにちつともちがはざりけり

あふけうゝゝのありさまやうさみくすみかはづ三ヶの庄のうちにしてあら馬のつての大ぢからの五郎とよばれあさいなほどの小男にやみゝとひかれてざしきへは出まじものげにつよく引ならば三まいの

くさずりがきるゝかひぎのふしがちがふかふまへたいたが大地へ落つくか三つにひとつはちやうのものとおもひてふんじかつてたつたはつしんをいららげ前へゑいと引たうしろへゑいとひた草ずりきれてのきけれどたちどころをさらずしてふんじかつて立たそがの五郎時宗を大ぢからと申ておぢぬ人こそなかりけれ三まいのくさずりをもつて父の御前に参りこれこれ御らん候へ五郎ときむねの内にゐられて候これをさかなにて今一つさかもりゑたまへとありしかばよしもりきしよく引かへ何五郎殿のうちにましますか舍兄すけなりも座敷にましますになどいでさかもりを玄結はぬぞとありしかばときむね承ておほせかしこまつては候へどもびやくえて候とてをもせず

去ほどに十郎殿弟の五郎ときむねがうちに有とだにも聞ければ只きまんのくきわうとらせんくのくわうをあざむくほどのつはものを千騎萬騎もちたる

より猶たのもしうぞおもはれけるなに五郎が内に有かおとなさぶらひのめしのあるになどいで御しやくを申さぬぞときむね承てびやくえてさう御めんあるぞ只まいれうけたまはると申て大はらまきをきながら大だちをもちながらゑどけなげにもいで新左衛門のめてのたい座につめ座にちやうどなをる新左衛門はいらんしてこれほどひろき座敷にてつめさかもりはしようさうそこゝをちつとくつろげたまへさかもりせんとありしかば時宗聞てなんさう新左衛門殿まいれとおほせあればこそ参りたるにざしきを立とおほせあらば只今たゝんといふまゝにはらまきの草ずり二三まいひぎのうへにゆりかけ猶つめかけてなをつたるけうさめてぞ見えにける吉盛御らんじていかに五郎殿御身はようせうよりはこねにのぼり別當の御坊にてがくもんし其後伊豆に下り北條をえぼし親にたのみ助五郎ときむねと名乗せたまふとは承はれどもげんざんは是がはじめそれゝとありしかば

うけたまはると申てもえぎにはひのはらまきにたち
とりそへて引たりける時宗これをみてたゞいまの引
手物をとらばやとおもふがまてゑばしわがこゝろ明
日に成ならば坂東かいだう十五ヶ國の人々のつたへ
聞召れてあらむざんや曾我殿原兄弟は身のひんなる
にゑたがつてひき手ものにめくれ遊君を和田へば
はれたなどゝあらんするときはこうなん也とおも
ひにかによしもりたゞ今の引手物を給はりたくは候
へども後日に三うらへ參て給はるべしそのあひだは
あれにましますわかき人にあつけ申さんといふまゝ
にたちのおびとりとはらまきのわだかみかひつかん
でしも座へからりとなぐる吉盛御覽してたゞいまの
ふせいはれうけんさうか座けうさうか時宗聞てうと
く成人のうへにこそれうけん座けうは候へひんなる
ものゝ座けうはゑらぬて候と申よしもり聞召ようさ
う五郎殿いとま申て長者とてざしきをたゝせ給へば
九十三騎はらりと立てこゝやかしこにてこまひきよ

せくひらりくとうちのる其中に和田殿大將でま
しませはえんのはなへ馬ひかせのらんとし給ふとき
むねこれを見ていせん舍兄助成にこめをみせたごと
くにおどさばやとおもひて四かく成まなこを五かく
にくわつと見ひらきいかに和田殿此やかたと申は和
田殿もたてられず十郎殿もたてられず又時宗がたて
たる事も候はずばんどうは八ヶ國海道は七ヶ國十五
ヶ國の人々のつしさかもりのそのためにたてをかれ
たやかたなりこれからの乗うちはびろうさうぞわだ
どのおりさせ給ひ候へおりられぬ物ならばすは八ま
んも御ぢげんあれときむねがたゞ今おろすべしとぞ
おどしけるよしもり聞召いや／＼きやつばら身をふ
つるものによせあはせ爰にてことをゑいだしわかた
ううたせあしかりなと思召ようさう五郎殿年はよ
つつ目は見えす日はくれがたになりさうつくらぐそ
くみんなためにひかせてこそは候へそれ／＼わかたう
むまひけやと有しかば承ると申てゑつけざかまで引

たるは五郎におちたところ也兄弟の人々はかまのそ
ばをたかくとりゆみ矢のれいぎ是まで候はや／＼め
され候へとく／＼めされ候へとひきはしまでぞをく
りける其後兄弟やかたに歸てもしも三浦より夜討に
よせやせんとて夜まはりつじがためようじんきびし
かりけれど一門の中なればよする事こそなかりけれ
此人々の心中をばきせん上下をしなべかんせぬ人は
なかりけり

小袖曾我

去ほどにそがきやうだいの人々はふじ野へのいとまごひの其ためにはうへにまいらるゝ祐なり仰けるやうはいかに五郎どの御身はまばらく待給へまづそれがし一人参り御きげんをうかがひ申御みのそせう申さんとして母うへに参りふじのへのいとまごひをぞ申されける母上聞召れてふじのとはおとに聞えたるゆきの有所なればさだめてよさむなるべしとして御こそを下さるゝ祐成謹而申さるゝ哀同は時宗にも下され候へかし母上聞召れて何時宗とはたが事ぞみづからが子共の中にときむねといふ者おぼえず京の小二郎は名乗すゑちごのせんじばうは法師の身なれば名乗ましあふさる事ありおさなくてはこわうとてわらはの一人さぶらひしをちゝのぼだいをとはせんために別當にけいやくし箱根へのぼせて候へば母が

めいをそむきはこねの寺をにげ下いづの北條をゑばしおやに頼みすけ五郎ときむねとなるときくその時宗とやらんが事申いだしたらんには今生後生ふちうのものにてあるべしと仰もあへず御なみだにむせばせ給ふ祐成うけたまはり其御事にて候むざんやなときむね十六の春のころ法師になると申て里へ人にくだすちごのすがたを今一度見ばやとぞんじはこねへのぼりて候へばはこわうなのめに祝て一間所に引入さて箱王は法師になるべく候やちごは法しになりぬれば三年は山籠と申てさうなく里へくだらぬよしを承る其うへらうしやうふぢやうのならひ此まゝ御めにかゝらぬ事もや候べきとふかくなげき候ほどに祐成ふびんにぞんじ其儀ならば里にくだり男になれと申せばさだめて母うへの御ぶけうもや候べきと申御身おとこになりて後たとひ母上の御ぶけう候ともよきやうに申なをすべしととかくすゝめよのまにはこねをにげくだりこれへ参らん事ををそれと存すぐ

にいつにくだり北條をゑばしおやにたのみあれにて
げんぶくせさせ北條の助五郎時宗とはそれがしが名
乗するにて候ぞ御ふしんむざんさはこわうつねに
なげくやう母うへの御ふしんは十郎の御とく候と明
暮うらみ候ほどにおとゝながらもめんぼくなしあは
れおなじく候はゞ時宗が御ふしんを十郎に御めん候
へかしこゝろやすくめしつれてするがのふじへまか
りのぼり候はんとかさねぐ申共つやぐ返事もま
しまさず時むね物ごしにて承りさてはいかやうの人
の御こうしゆなりともかなふまじまづかへらんとお
もひしがいま申さではいつの世に申べきぞとおもひ
しやうじのあひをばふるひぐちち出ふるへる聲を
さし上落ゑんに手うちかけおつるなみだをおしとゝ
め二時ばかりくどくにぞ上下涙をながしけるそもそ
もそれがしがみのとがをなに事やらんと只今承て候
へば男になりたる御ふしんなりそれはなによりもや
すき程の事にて候男になりては候へども五百かいを

たもち給ふ御そうの身にもおとり申さず魚とりをも
ぶくせす寺へ上たるゑるしにはちゝのけうやうのそ
のためにかみつけのほけ經を五百ぶかゝんと大願を
たて去年の秋のころ二百七ぶかたのごとかきたて
箱根へこめて候へば其御經のくりきもなかはなふ
て有べきそれのみにかぎらず日夜に經はおこたらず
ちゝのためにけうやうさて又母の御きたうとせつ
なもさらにおこたらずとめぎやうする身なれども
申上る人なふしてあくれば御かんだう又くるれば御
ぶけうとうけたまはるぞかなしきその身男の體なれ
ども道智津師律ノ誤カといつし人はいけをゑいじてわうじや
うすくわかいびくといつし人はうみをえいじてわう
じやうすはくらくてんはまさしく竹をあひして往じ
やうすゑんらうびわを引きんわうことをたむじつゝ
一心にまよはん事をかなしめばわうじやうのそくわ
いはとげん事はうたがひあらじと承る又佛に四ぶの
御弟子有びくびくにうばそくうばゐとてあま法師男

女も御弟子にてしやうあみだやくし御くしあおふし
ていとをわくるがごとしとてんとう佛の其中にけんさ
くつるぎほうはう弓矢をたいし給へ共ぐせの願あさ
からずばさつたちもみなながら男の體にてましませ
どにうはのじひこれおほし十方さつたのそのなかに
ちぞうぼさつはいはれ有かみをもたせ給はずされ
はほうねん上人の一しゆのうたにかくばかり

そめはやなこゝろのうちをすみそめに

ころものいろはとにもかくにも

とゑいじ給ひけるとかや又布衣和尚の十無やくにき
やうがくとせつにて僧形むやくとのべ給ふ我朝の開
闢ノ假借白いせ明神の御前へ法師をむかへ給はず爰をもつて
まさしくしんていはつぶをふばにうけ赤白の二てい
はたいこん兩ぶの佛にてかみひげ玄しむらは母のあ
たふるせいとくほねは父のあたふる父のあたふる骨
をばみのおはるまで捨す母のあたふるかみひげをそ
りすつるこそまよひなれとこゝを神明いましめて法

師をむかへたまはずながゝ敷は候へ共爰にたとへ
の候てんちくの事かとよせんならと申て弓とり一人
おはします玄かるにせんならぶ女とちぎりをこめ給
ひ二人のわかをまうけさせ給ふあにが名をばけんし
やう弟がなをばかうしやうばらもとぞ申けるかれ
らせいじん程もなし七月十四日にすまふのばへ出事
を玄いだしおほくの人をほろぼしあけにそふだるう
ち物を弓手のかたになげかけわがやをさして引て入
父せんならは御覺してこはそも兄弟にはものがつゐ
てくるはするか二きのひが卯月の八日七月十四日
は一年があひだの六さい日にさゝれたるに今日人を
がいする事いかゝ有べきと大きにいからせ給ひけれ
ば兄弟承はりそれをたがえらぬ事ぞ親ざしよくして
かゝるけうけはむやくかな手なみのほどを見せんと
てちゝせんならの御くびを水もたまらずうちおとす
母のぶ女は御覽じてあらあさましの事共やくわこの
しんもふかくげんざいのしむもふかとくみらいのし

んもふかとく三世ふかとくにいづれのしんかおやとなり子の手にはかゝるぞやいづれのしんが子とむまれ父のくびをはきるやらんいづれのしんが當母となり跡にてものを思ふぞやかやうにふかくなげかせ給ふ兄弟の者承りとてもちゝせんならわれらをよかれと思召るまじいさや父のけうように千人ざりしてあそばんとて爰のつちかしこの門にてきる程に九百九十九人切て今一人たらずしてせんほうだうへぞ参りけるかのだうの庭にはちすのいけありおりふし萬ごうをへたるかめがこうをほいてぞゐたりけるけんしやう申けるやうはいかにばらもんかめは萬ごうをへぬれば佛になると申しざや此かめをがいし千人の行にたつせん尤と同じて此かめ引上がいせんとせし時かめも生ある物なればもんを三度となふ我八三年龜八萬劫必生安樂國龜成佛とゝなふる母のぶ女もこのたびせんならにはなれ給ひ是も又千のいき物の命をたすけてまいり給ひしが九百九十九たすけ今ひと

つたらずしてせんほうだうへぞ参り給ひしがかめの聲を聞召いかにきやうだいたゝ今のかめの聲ばしちやうもんしけるかいやきがぬ也と申あふなんぢらが聞えらざるはだうりいでゝ語てきかせんがはちといふははらに七つの子をもつてわが身共にはやつなり七つの子をきうせんにかけん事をかなしみとなへたるもんにて有き八萬ごう必生安樂國龜成佛となふるは龜は萬ごうをへぬれば必佛になると申に只いまきうせんにかゝり佛體をやぶらん事をかなしみとなへたる文にて有されば人のこのたいないにやどりたねをおろすはかり事は梵天よりもいとをおろし大かいのそこなるはりのみゝをとをすよりもうけがたふてむまるゝなりゑろきはねは父のおんしゝむらは母のおん父のおんがいやしくばしつくと名付てなかなる骨をぬきすてよはゝのおんがいやしくば八くと名付てあかきしゝむらをそぎすてよ此ことはりにまかせて其かめをたすけよ兄弟承て我ぎやうをばたつ

せんとや人のぎやうをばやぶらんとやあふそれは尤
いはれなし只がいせんといふまゝに此かめを引あげ
てがいせんとせし時は、此よしを御覽じてみづから
かめの前にてかめをがいする物ならば九百九十九た
すけたるいき物が無にならんと思召やあをのれらが
ぎやうにはみづがらをがいせよみづからが行には其
かめをたすけんきやうだいといこそ仰けれ兄弟承てた
れもさこそは存すれとてかめをばいけにはなつて打
ものぬいてかゝりしにいかゞはよかるべきぬいたる
たちが三つにおれてのきにけり刀をぬいてかゝりし
にふたつにおれてのきにけり心得たりといふまゝに
大手ひろげてかゝりしに眼にきりふつては、のすが
たもみもわかず大ちがさうへさつとさけきやうだい
のもの共ははやならくをさしてぞまづみける母は御
覽じてなをもおその御ちひにたすけんとおぼしめし
きやうだいの者どもかたぶさをつかんでひきあげむ
とし給へばむなしきたぶさ手にとまりきやう弟のも

の共はつゐにならくにまづみける

は、は御覽じて此たぶさをなににせんとの給ひてこ
くうをさしてなげ給ふ我朝にとびきたり大和國とか

本ノマ、

やもとより山とこれが成のこるたぶさはろとうにと

どまり道まばとなつてじんばのひづめにかゝると承
て候ぞかゝる子をだにも親の御ちひにはたすけんと
ま給ふにましてや申さん五郎めが男にこそ成たれど
四をんのおもき事存知しゆにく五しんをきんかいし
ねにふしとらにおききんう東にかゝやけばじやうや
のねぶりはやさめかねつくゝとぎをまめしやもめ
がらすのうかれぐるかうぞとないてつげわたるいと
どむぢやうをさへぎればねふりもさめきも消八聲の
とりの八度なくあひべつりくのはつくつげわたると
りの聲なればあふ物に別ありさかな物もおとろへ
くわういんさらにとゝまらずかいらうの身を持たな
らわかし時につとめずばおいての後にかなしまん今
生てなげかずばみらいを誰かたすけんとかゝるいは

れを存ひめむすに經をよみ夜すがら念佛おこたらず
ぎやうじゆごくわにしては又父のためには御ぼだい
さて又母の御祈禱とせつなもさらにおこたらずつと
め行する身なれ共申あぐる人なふしてあくれば御か
んだう又くるれば御ぶけうと承ぞかなしき大ぢをい
たいいてまします佛の御名をばけんらうち神と申大
ぢはおもき事なくて親のおけうのものゝふむしたご
とに劔となり御身にたつと承るとがありての御かん
だう申ともかなひ候まじとがなくしての御ふしんは
ふびんのいたりこれなり明日も助成のふじのへ御出
あるべきになか／＼伊藤の何がしとてみゑらぬ物も
なき物をかげとかたちにて時むねも御供申て出べきに
かりばのをのゝならひにて尾こしたにごしのながれ
矢にもあたりもしもむなしくなるならばつゐにぶけ
うのゆりもせでみらいのごうをいかゞせんあはれよ
のなかに親にゑんなきものは時宗にてとゞめたりそ
れをいかにと申に父河津どのには三つの年はなるれ

ばゆめともさらにわきまへず今生にまします母上に
は七さいの春てらへのぼりしとき見まいらせしまで
にてまかりくだる事もなしちごにてありし時にこそ
よそ／＼なりと申共男になりて候は、只一人の母上
にはそひまひらせんと思ひしにあんにさほひうゐノ誤仕り男
に成たるとがによりやがてふけうとの給へば母うへ
の御すがたをおがみ申事もなしなけな御事やた
とひふけうはゆるさず共すがたをなどやみせ給はぬ
とにかくにこれもおもへばつみぞかしいとま申て女
ぼうたち御いとま申て母うへと涙をおさへてまかり
たつ心づよき母上もあひのしやうじをさつとあけ五
郎がたもとをひかへつゝ道理なりはこわうよくし
とさらにおもはぬぞおやの身にてわが子を何しにに
くしと思ふべきこれもなんぢをおもふゆへ今までふ
けうありつるぞけふよりしてはかんだうをゆるすな
りとの給ひて御涙にむせび絡へば時宗もはゝうへの
御たもとにすがり今は又うれしなきになきければ祐

成もともによろこびの涙はさらにせきあへず御前な
かるの女ぼうだちあらめたや時宗の御ふしんゆる
させ給ふ事よとさいめきあひ御さかづきをまいらせ
らる母上さかづきをとりあげさせ給ひて祐成にさし
給ふ祐成は時宗へときむねは十郎殿へとやゝゑばら
くのゑきだい也母上御覽じてはこわう法しになるな
らばさきにのむべけれ共男になる上まづすけなりの
めとのたまへば三度くんでぞほされける母上祐成の
盃を取上させ給ひ盃をひかへげにやらん五郎は父に
おとらぬまひの上手と聞一拍子うたへさかなにせん
と仰ければ時宗承て母上の御前にて舞まふべき事共
もこれをさいごと思ひければいつゝよりのまひよ
りも心ぼそくぞまふたりけるゑづやゑづゑづのをだ
まきくりかへし昔を今になす由もがな昔を今になさ
ばやとやゝゑばらくうたひしがおつる涙にめがくれ
てまひをばちうでまひとむる

母上つくゝと御覽じてげにゝちゝにもおとらぬ

舞の上手にてありけるぞや同は此まひを河津どのも
ろともにみるとだにも思ひなばいかゞはうれしかる
べきと御らくるいはひまもなし涙をとゝめ御さかづ
きを時宗にさし給ふときむね御さかづき給り三度い
たいきほさんとせし時母上御覽じてゑかしさかづき
をひかへよみづからもさかなとらせんとの給ひてか
らあやの御こそでをくださるゝ時宗給はる小袖をき
きたるこそでをぬぎとある所にをしよせこれなる小
袖あかつきみぐるしく候へ共誰か女ぼうたちへ參ら
せ候母うへ御らんじて子どものきたるこそでを女ば
うたちへはかなふまじそれこなたへと仰ければをそ
れながら母の御手に參らせあぐるはゝうへ此こそで
を取まはしゝ何と御らんせられけるぞや御かほに
をしおほひゑばしは物ものたまはすふしぎや是はす
ぎしやよひの比十郎にかしたるこそでなり祐成はつ
ねにきてみづからにこそでをかるほどにかすとのみ
ばかりにてかへすといふ事さらになしはかなやみづ

から思ふやう若者にてきふらへばあそびの女いろご
のみにもとらせけるかと思ひしにひんなるおとゝは
ごくみける心ざしこそあはれなれか程に思ひあふな
かをふしんをなせるみづからはわが身ながらもうら
めしや玄はれたる小袖哉か程玄ほるゝ小袖をみづか
らこそはふけうする共みうらのやへのおぼごはなど
やすゝいでとらせぬぞおぼごがすゝがぬ物ならば二
のみやのあねごはなどやすゝいでえさせぬぞあねご
がすゝがぬ物ならば御前なかゐの女ばうたちなどや
すゝいでたばぬぞやすゝぐとみづから見たりせばか
んだうの子也とてうへにはしかりさふらふともない
しんにうれしかるべきにおやのにくむ子共をば一ぞ
くうちのもの迄もにくみけるかやむざんさよ母うへ
涙をとゝめいかに時宗去年の五月比二のみやのあね
ごがたよりもこそでばしえたるか給はつて候それ
もあねごはとらせぬぞかんだうの子なればさぞある
らめと思ひこれよりとらせたる小袖なり又みしまの

はうじやうゑの比みうらのおぼごのかたよりもひた
たればしえたるか給はつて候それもおぼごはとらせ
ぬぞこれよりとらせたるひたゝれなりそのゝちは給
はるかたも候はずと申はゝは此よし聞召いま一しは
の御涙やる方なふぞ見え給ふいかに祐成時むねよ玉
玉あふたる事なれば何とかたるとつきすまじこよひ
はとゝまり給へかし祐成五郎承りいたはしや母上の
玄んしわりなきかなれ共さいごをゑろしめされず
かやうにとゝめ給ふとよはゝの心のいたはしさに玄
のびゝゝの涙なり祐成しやく取なをし申す我君の此
たびふじのへの御出は日本國の侍の名字なのりをゑ
ろしめされんためなり人數にまかり出にげしゝのひ
とつもとゝめ伊藤が玄そんに去物なりとゑられ申け
んめいのちのかたはしにあんどをなし出入すがたを
今一度みせ申さんがためにて候とかくいつはりさま
ざまに御いとまを申御前をまかり立これをさいごと
思はれければかたみのためと思ひやたてまきものと

りいだしすけなりのうたにかくばかり
けふいて、又もあはすはをくるまの

このはのうちになしとゑれきみ
わノ誤

ときむねもかくばかり

ちふやまおろすあらしのはけしきに

このみちりなははいかゝせん

かやうに二しゆのうたをよみしやうじの間にをし入
こま引よせて打のり門外さしてうつて出る時宗もば
ばすゑまで馬ひかせゑづくと二陣につよくあら
いたはしや母上數の女ぼうたちをひきぐして中門に立
出あれ／＼み給へ女ぼうたち兄弟の物共が馬うち
れいぎのたいしきさすけなりはあになればさそくま
みノ上ルテ脱スルカ
みしと思ひしにおとゝにいづきかしづかれ心やすく
も有やらん色もゑろくじんじやうなるや五郎ははこ
ねそだちのものなればさぞ有らめと思ひしにあにが
供をする程に月日に照されけるやらん色も黒くまみ
たる也あつたら若き物共にうさみくすみをとらせを

きいで入姿を今一度みるとだにも思ひなばいかかは
うれしかるべきと御なみだにむせび給ひけりげにま
ことわすれたり弓取のもののかどいでにあとを見
かくす事はなし皆こなたへの給ひてつねのところ
に入給ふ是をさいごの別とは後にぞ思ひゑられたる
兄弟の人々こまをはやめて打程にまりこ河につきに
けり折ふし水かさまさる祐成御覽じてふしぎや此河
のか程にごれる事はなし親の敵にあはんために兄弟
がわたるほどに水も心があればこそすまでにごれる
色みゆれ時宗承り扱は十郎殿はいづ箱根の權現のゆ
らいをゑろしめされぬや昔天ちくきやうし國の有主
をはきんくわ大王と申奉る然に二人の姫宮おはしま
す五つや三つの御時母のきさきほうぎよならせ給は
じめてきさきをそなふるに昔が今に至^マ迄けいしけい
ぼの中程にうたてかりける事はなし有時々さきの宮
しちやう官人らを召て二人の姫君をこしにのせさせ
本ノマ
うが湊へ下くわのきのうつづ船に作籠鹽みつ島の方

へながしうしなへと有しかばあかぬは君の仰なれば
いたはしや二人の姫宮をこしにのせをせうが湊へ下
くわの木うつば船に作籠鹽みつ島の方へ風に任て
つきながす先世此君果報のせうれつましましけるに
や鹽みつ島へはより給はで日本秋津島いづの國めら
がさきへより給ふ浦人はをみてより船有やとて船を
ほどいてみてあればさもゆうちやう成姫宮の一人な
らず二人迄鳴^{泣ノ假借}きはたれておはします浦人きもをけし
東西へはつとにげちりけり宮たち御覽じて是は鹽み
つ島かたとひ給へば日本あきつ島いづの國めらがさ
きと申宮たち聞召扱はうれしき物かないざやさらば
上らんとて船よりも上らせ給妾をみ奉ればすひたい
こうがんだへにしてたうりのよそほひなのめならず
まなぶたはふようにてむねは玉にことならずまがき
^{にノ下に文字アルベシ}
の菊の露をふくみ楊柳の枝よはくせいしがよそをひ
もかくやと思ひ知れたり宮たち仰けるやうはこれを
ぼたいのたねとして世をのがれんと給ひてたけ成

かみをそりおとし日本秋津島をしゆ行し給ひけりあ
ねごのりやうさいごせん三年三月と申にいづの山に
上ていづの權現とあらはれて衆生をさいどし給へり
いもうとのりやうしゆ姫も三年三月と申に箱根山に
上て箱根の權現とあらはれて衆生をさいどし給へり
か程れんげんあらた成御神とは申せ共五つや三つの
年よりも物を思はせ給ひし也いはんや我我兄弟も五
つや三つの年よりも親の敵を請取て今又敵にあはん
爲此河を渡る程に權現の哀みてながさせ給ふ涙が涙
の雨と成水の色はにぐる也其上此河はいづ箱根の權
現のみたらしにて候へば何かはくる敷候べき一首つ
らねてお通りあれや十郎殿とぞ申ける祐成聞召れて
あら殊しやうや候いづ箱ねの權現の由來を只今承て
候へと水を結んで手水とし伊豆はこねをふしおがみ
祐成の歌にかくばかり

わたるよりふかくそたのむまりこ河

あすはかたきにあふせならまし

ときむねかくばかり

まりこかはかたきのえたにけかけつゝ

かゝりあしくはきりてなかさん

とかやうに二首の歌をよみこまをはやめて打程に年
來五郎が住なれし箱ねの寺につき給ふ兄弟のうれし
さとへん方もなかりけり

つるぎさんだん

さる間曾我きやうだいの人々こまをはやめてうつほどにはこねの別當の御坊につき給ふいつしかちごどうじゆくに至るまでめづらしやいまかとてたいめんせぬはなかりけり人もまれなるところへ兄弟をしやうじべつたういであひ給ひいかにきやうだいひさしく見えさせたまはぬものかなはこわうどのは男に成て候へどもにくしと更におもはぬぞ愚老もわかきときならばともにおとこになりたひぞ此ほどはうちつづきゆめにもあしく見ゆればまたなにごとかきゝいだしらうぐにそへてこの法師がものおもはんすらんところもとなくおもひしにふじ野へいでさせ給ふこそ心もとなき次第かなはこ王との七さいにて此寺へのぼりつゝ十六まではいさゝかもおりのぼることもなくあとふところこそだてをきちしやのうげに

なしたてゝ跡をとほれんためぞかしかくあやなくもわかれて思ひをせんとゑらずやくちはつべきむれ木のつれなくうき世にながらへてきやうだいの人々の親のかたきと討死しきうせんのさきにかゝりなば一時三きのひまもなくしゆらのくをうくべきにあとをとふべき法師の一人ありとおぼしめされ候へとてくろぎやまきのかたなをばすけなりにたひ給ふ兵庫ぐさりの太刀をばときむねにこそたびにけれ別當の御ぢやうにはそれ人の持たからのいはれをきかねばなにならず時宗にまいらすたちのいはれを語てきかせ申さん昔こんぢくよたうさんにれううんといふ瀧ありかのたきのさうがんに三尺のくろがねのまるかせありて日夜に人をなやますあるときしやりふんといふものいのり出しえみ本ノマに八尺のなぎなたに打たてゝもつたりしをかううんといふものぬすみいだしこれをたうへわたすたうより日本へわたさるゝならのみかどの御ときかゝるめいよのなぎなたをたちに

せむとのせんじにてかちの上手をめさるゝにおくの
まうふさと三でうのかちとかれらはめいよの上手
とてこのなぎなたを二つにわけ二人のかちにあづけ
給ふおくのまうふさは三年にて三尺に打てまいらす
れば三でうのかちは三年三月にて二尺七寸にうち
たてゝ參らせ上るみかどえいらんましゝてにくい
かちかないかさまにもこかちはかねをぬすみたりと
てあらむざんやかちをつちのろうにをしこめ給ふ
籠のうちのすまゐなかゝ申ばかりもなしさる間ま
うふさがうつたるたちをばまくらがみと名つけて一
だん上にたてられたりこかちがうつたるたちをば寸
なしと名付て一だん玄たにたてられけりこかちあま
りのむねんさになむや九萬八千のかちの神たちこか
ちがあやまりなきところのそのまをみせ給へと
ひるいていきうしかんたんをくだきいのりければま
ことにかちのしゆごじんなふしゆありけるかすなし
さやをはづれてまくらがみにながれ懸てちやうとき

るまうふさがうつたるたちもけしやうのかねにてあ
るあひださやをはづれてわたりあひをふつまくつ
さんゝにたゝかふたり御てんのうちしんどうすみ
かとをはじめたてまつりくぎやう大じんこれはいか
なるものゝけぞとあやしめ給ふところに寸なしと枕
上さやをはづれてたゝかふたりみかどえいらんまし
ましこなたはまくら上かあなたは寸なしかあればい
かにとおほせ有御目をさますばかりなりやゝもす
ればまくらがみはうけだちになつてぞまいりける
猶も寸なしむねんにやおもひけんとあるところへ
をつつめ我たけにたちくらべきつさき三寸きつてす
てもとのさやにぞおさまりけるみかどえいらんまし
まして寸なしをひきかへともきりにくわんをなる
なノ下サチ脱スルニアラズ
さてこそこかちはあふつちの籠をばいだされけれそ
のゝち二ふりのたちたゝのまんぢうの御手にわたる
こかちがうつたるたちにてとが有ものをめしよせく
びを切て見給へばあまりにはやくくびがきれひけを

かけてきれければひびきりにくわんをなうまうふさがうつたる太刀にてとがあるものをめしよせくびをきつて見給へば餘りにはやくくびがきれひぎをかけたきれければひびきりとくわんと^{なノ誤カ}なるそのうち彼二ふりの太刀よりみつの御手に渡るこちが打たるひびきりにてをにの手をきりければをに切にくわんと^{なノ誤カ}なるまうふさがうつたるひびきりにてへんげのくもを切ければちうきりにくわんと^{なノ誤カ}なる其後二ふりのたち八まん殿の御手にわたるそれよりもためよしの御手にわたりけるそのころためよしのちやく女にたつはらのひめと申て熊野にこそまし／＼けれかのひめくま野にましますいはれは後白河のほうわう熊野さんけいまし／＼てせうじやうでんに籠らせ給ひ此やまにべつたうはなきかとたづね給ふ此やまひらけて七百餘さいのいまに至るまで別當は候はずとこたへ申おりふしなつごもりしてはなつみける法師ありほうわうえいらんまし／＼てこれをべつたうにさだ

めよとかのひじりを別當に定め給ふ御堂寺のべつたうはゑそんにつたへてもつべきにつまなくしてはかなふまじつまをかたらひたまへとてためよしのちやくぢよたつはらのひめをべつたうのつまにさだめ給ふためよし此よしきこしめしなにがしがむこにげんぺい兩家をえらみ弓矢を取てきりやうの人をむこにとらんと思ひしにゆくゑもゑらぬ法師をむこにとるこそむねんなれとふけうして音信なしかりしときのおりふしみやこに事出来たゝかふべきわざはひありけうしゆんつたへきゝこれはかんだうのむこなれどしうとのせんどなる間一見つぎ見つがんとて三つのやまには八しやうじんやまぶしなどをよほしてきの國を打立てよどやはたに陣を取てかりをたかせひかへたりためよし御らんじてあれほどの大せいはいかなるものぞととひ給へば爲義のちやくしむこたなべのべつたうけうしゆんばうとこたへらるためよし聞召さもあれけうしゆんはたがすゑどととひ給

へばさねかたの中將の末孫也とこたへらるためよし
聞召さてはさるべき人にてありちゝはあほう親王と
て世にかくれなきぞくしやうなりためよしがために
はくわぶんのむことおぼえたり此時たいめん申さん
とてたなべのべつたうけうしゆんばうにたいめんし
ちやくしにつたはるつるぎなればひけきをよしと
もにちゝうきりをたなべのべつたうけうしゆんはう
にひき給ふふけうこそゆりんめ劔給はりけうしゆん
は熊野に歸り給ひけりかくて壽永のあきのころげん
べい兩家たてをつきたゝかふべきわざはひ有けうし
ゆんの給ひけるやうはわれはすでに法師の身と有て
劔もちてもせんなしとて義經にまいらせらる此つる
ぎのとくによりおごる平家をほろぼし三しゆの神器
ことゆへなくみやこにかへしおさめ申關東へくだら
るゝかちはらざんそを仕りさかわの宿よりこのきみ
二たびみやこにのぼり給ふがこのやまにあがつて御
兄弟の御中のわびやうのいのりのためにとてごんげ

んにきしんある此とき申おろしてめんゝにたてま
つるまぼりのためとおぼしめせ明王のけんさくは萬
里がほかのてきをうち四天王のゆみ矢は四まのいく
さをふせがんだめ此劔すけつねがくびを討べきつる
ぎなり是をさかなに今ひとつまいりて御立候へとし
ゆすさらゝとをしもむでしやだんを禮し給ひけり
別當の心中末たのもしく見えにけり兄弟の人々はこ
ねのてらのいとまごひ野七里山七里たけ七里廿一里
をゆきすぎふもとの宿でこりをかきやしはのみやこ
にまいり七番つゝのかさかけあふぎをたてゝあそば
ししよぐわん成就といのつてあひさはのはらにいで
給ふ

夜討曾我

去間右大將の御れう信濃の國みはらの、御かりすぎ
其後あひぎはのはらのいとりがり三日へて駿河の富
士のすそ野へ御出ときこえけれ御れうの其日の御玄
やうぞく青狩衣にたて烏帽子をばな色毛のいちもつ
に白鞍おかせてめされたり御馬添には五郎丸赤地の
にしきのひたゝれをくだし給ひてきるまゝにちから
は八十五人がちからもえぎのはら巻を着ごめにして
君を玄ゆごし申すちゝぶどのいしやうぞく鷹すえて
御とも也和田の義盛狩装束鷹すえて御供なり千葉お
山うつ宮何もかりばの出立にてたかすえて御供成
惣じてたかは五十本犬は八十四足犬のすいたかのす
すくつはの音がさいめひて上下六萬六千餘騎さしも
に廣きふちのすそ野に駒のたちどはなし抑かのふち
山と申は仁王廿七代の御門けいたい天皇の御代せむ

き三年三月十五日に一夜がうちにこんりんざいより
ゆゑゆつゑたる山なりあら面白の名山や南は田子の
浦波ややかぬ鹽谷のけふりたつにしは海上濤々とし
てきわもなしさればよの山を下もにするがのふちな
れば雲より上の八えうは皆金銀のいさごにてまなこ
につもる白雪の所々はむらぎえて嶺には煙たえもな
しふもとにかすみたな引て山のおひかとうたがはる
山は八えう九尊葉敷にてりやうかひをへうせりみねには
九じやく明王の住給へる池有ふもとにせんげん大菩
薩のいらかをならべてたち給ふせうじやうけんごの
れひちとしてせつしやうかひをきむだんしれうしの
いらぬやまなればかせきの數は多かりけり三千餘人
のせこのものせんてうをまつくだりに岩をおこし枯
木をたゝきおめきさけんでかりくだすおほくのかせ
きけだものすそのをさしてくだるわかき出たちあひ
てをくそわれ先にと是をいてとるこのたびふちのゝ
まきがりに東八ヶ國の大名小名あるひは鹿の四かし

ら五かしらといめきみの御目にかゝり御所領給て皆
所知入ときこふる其中に曾我兄弟の人々は玄へに心
のいらざれば鹿の子の一つもとめすいかにもして
かたきすけつねにめぐりあはでとたくみけるに爰に
弓手のそばのかしわざはらの中を見るに討手のあま
た有中に四十斗成おとこひようもむの弓小手さし夏
毛のむかばきひつこうで三つある玄へにめをかけて
かりまたつかんておつかくる時宗たぞと見るにあは
すけつねと見るからに氣もそゝろぎ身ふるひうとん
花も海中にひらけるよとうれしくて玄へ矢をそろり
とすて頼しなかざしぬき出し弓をふせてうちつがひ
矢つばはおほしと申せどもわれらが父の川津殿おく
のゝかへり有ときくらの前わのはづれむかばきの引
合をいられ給ふときくものをむくひの矢なれば祐經
をもおなじ矢つばに討てをとし川津が矢目はたがは
ずと諸人に見せ十八年が間のちそくはおなじからざ
れどかりばと矢目はたがはずうてばひびきたへけば

なるおもひは餘所になのりけり身のせし科の報ぞと
玄らせばやと思ひはやあらはれていでけるがやまと
玄ばし我心五郎一人無念をはれ十郎殿をむなくせ
ば今生の恨のみならずくわうせむ迄もはれがたし父
母けうやうの矢ならば兄弟して一矢づゝとぶらふに
ぞとおもひあたりを見れば寺に瓦一つへだて十郎殿
餘所目してこそおはしけれ五郎あまりのうれしさに
鹿こそとをれ十郎殿御覽せられてさうか鹿ぞといふ
に心得て東西をきつと見るに瓦を隔たる敵なれば見
つけぬは道理五郎餘りにたえかねて夏山や玄げみの
鹿は射にくふさうそのをにあがつてせこにあひてゆ
きがたをとせ給へと申時さては此瓦のあなたにか
たきのあるぞと心得てそばをのぼりに駒かけあげて
むかひのはらをきつと見るに實も祐經爰に有玄かも
あたりに人はなし天のおしへ佛神のあたへ給ふとう
れしくて十郎はあになり一の矢をば何者かさまたぐ
べきとおもひてうつばの底のひさうのとめ矢をとつ

てからとうちつがい矢さきをさへはづかへしぢやうの矢をと心得敵のやつばかりに目をかけて馬の足は見ざりけりこゝろはやれ共人に色をさとられじとこかげにすゝめあゆませゆくに乗たる馬は國本よりもかふはまれなりのりまげしよはき馬につよく手綱を乗程にとあるふし木にむねをつきびやうぶを返すごとくにはやまつさかさまにどうとおつ五郎餘りのかなしさにいそぎこまよりとんでおりすけ成をとつてひつたて申馬をこさんとひしめくまに祐經名馬にのりたれば谷みねへだてゝうちのびぬ行方まらねばいづくをさしてたづねてゆくべき方もなし兄弟の人々たからの山にいりながらむなく歸風情してうたてやみぬる兄弟の心ざしこそ無念なれ助成涙をながしつゝあゝらゆゝしの敵の果報やうたてしの我等が運めいや候果報いみじき祐經をねらへども不叶こゝまでのきはなればいざや人目をつゝみ腹をきらん時宗承り御誼のごとく弓をれ矢つくとやらんも

かやうの事をこそ申べけれさりながら爰は人目をまげふ候へば閑所をもとめて御自害あるべき也と申兄弟つれて歸るちゝぶどの和田殿此よしを御覽じて重忠仰けるはあふあれゝ吉盛御覽せよ川津が子共のあり様を君に捨られ申みなし子と成はて中々とんせいろうきよもせでおやの敵やうたんとて年來つきそひねらふぞや此狩くらへひ見えがくれの御供申て候をあふ御とものためにてはよもあらじびんぎよくば敵にながれ矢一つとこゝろざす望にてこそ有らめと思ひつるにたがはずして唯今の有様は目もあてられぬ風情なり秋のかりにかりまたをさかさまにはぐるならひは候へども弓矢とる身の心ざしまことやさしきものかなあのとのおぼらがぶんとして祐經をねらふ事はたうろうがをのとかやちゝうがあみにあひおなじ我等もわかき子共の日數多候へば明日は身のうへにてや候らはすらんいざやかれらにこゝろをそへゆふさり夜うちにせさせん尤まかるべしとてむかばき

つゝみうちならして重忠發句をこそ出されけりなつ
山やおもひえけみのこがるゝはよし盛頓てつけたま
ふこよひふち野にとふ火もえたつ曾我兄弟は承りか
り場の庭のゆいすてはものさはがしき次第かなさり
ながら我等をとぶらひ給ふぞやよし盛こよひふち野
に飛火もえ出すとあそはしちるはゆふざりの暮程に
ようちにせよとの言葉也それをいかにと申に飛火と
いへる心はむかし大唐に諸國の武士をめさんため町
のさつみと申て町に一づゝのたいこをかけはうくわ
をそえておかれたりだいにことのあるときはうく
わをあげたいこをうてば遠嶋遠國も一度におこり即
時に都へはせ上り帝都を玄ゆごし申也此はうくわを
ばなづけてとぶ火とこれを申なりひやうかくの時の
かゝり我朝にて夜うちのときたいまつと云事は此御
代よりもはじまれりいこくの事をゆい出しわれらに
心をそへたまふは狂言ながらまことなるべしいざや
我等もつけ申さむとて十郎殿とりあえずうへもなき

戀のけぶりのあらはれて時宗やがてつけてけりあま
の岩戸を明てとへ君重忠義盛聞食さてはこよひをか
ぎり明なば跡をとぶらへとやあはれなりいたはしゝ
よにはゝかりのなかりせばとぶらひ矢をもいつべし
となみだをながし日暮れば野宿にかへり給ひけり此
人々のうれしくて柴おりむすぶ草やかたになくゝ
かへり給ひけり馬より飼鬼王だう三郎と人なみな
みには下ちし給へ共野邊の草より其外は何をさしか
かふべし余のや形にはみちゝたりと申せども曾我
兄弟の屋かたには水より外はなしかくてゆふざり敵
にあふべき身がつかれなをさでいかゝせんまちやへ
ゆきて宿とれだう三郎承と申處へ長もち一ゑだかひ
てきたる是はどれよりぞちゝぶどのより曾我殿へ御
ざつしやうと申あふめでたしかき入よだう三郎取そ
なへける處に又ながもち一ゑだかいてきたる是はど
れよりみうら殿より曾我殿へおざつしやうと申すあ
ふめでたし此間人の酒をえて吞て其振舞もなかりし

にわんれいこゝにて有べしそがとはた野は隣家まね
きよせてゑばゐに居三々九度五度七度情をかけても
りながすもとより祐成時宗は用心なれば酔ざりけり
うまかひつかれなをして酒も過れば十郎殿時宗にい
とまをこひけこ見むために出給ふ太刀脇ばさんて敵
のやかたのけこを靜に見て通るある屋形をみてあれ
ば明日は鎌倉入あるべしとて馬のゆあらひにわのり
してひしめく屋かたも有又あるやかたをみてあれば
たいこつゝみうちならしどめひてあそぶやかたもあ
りかく見てとをりければ餘りこくうに存東へ廻り家
家のまぐのもむをぞ見たりけるくぎぬき松かわ木村
こ此木村こは三浦の平六兵衛吉村の紋なり石たゝみ
は玄なのゝ國の住人ねんいの太夫大彌太あふぎはあ
さりの與市舞たる鶴は井原右衛門いほりのうちにふ
たつかしらの舞たるははするがの國の住人天智天皇
の末孫竹の下の孫八右衛門井たら具は岩長たうあみ
の手はすがはとうおほすながしは安田の三郎月に星

は千葉殿からかさはなごやどのうちわのもんは小玉
たうすそぐろにいろこ方は北條殿の紋なりつなぎ馬
は相馬おりゑぼし立烏帽子大一大萬吉白一文字は山
のうちの紋なり十文字は島津の紋車ははまのれうわ
うの末孫佐藤のもん竹笠は高はしたうきつかうわち
がひはな空穂三本がらかき雪おれ竹二つへひしうさ
見の左衛門二つがしら右どもへ小山のはうぐわん三
つがしらの左どもへはうつの宮の彌三郎友綱かぶら
矢は伊勢のみや方水色はときどの四つめゆいは佐々
木殿中ゑろは三浦のもんちゝぶとのほこもんむらが
うわりびしは武田の太郎かちわらは矢はずの紋ひた
しろは御所の御紋でありこゝに庵のうちにものつかう
ありゝと打たる紋あり是は我等が家のもんぞと思
食ひとしほなつかしく十郎殿時をうつしてたゝせ給
ふかゝりける處に祐經がちやくし犬ばうといつしわ
つばまぐの隙より見つけ父の御前にまいり十郎の御
とをり御申有と申すけつねきいてやあ十郎とはたが

事ぞあいざは十郎かぶんごにうすきの十郎がかつまたに遠江の十郎が此たびの御ともに十郎のけみやうその數をゑらすなんぢはこくう成事を申もの哉とゑかられ時ならぬかほにもみぢをさつとちらしさん候いつぞや三浦殿にて花見のけうのありし時舞まわせ給ひたるさがみの曾我の十郎の御通りと申すけつね聞て打わらひあう此もの共がおうち伊藤こそ人のさかゆるをにくみほろぶるをよろこびし人のすえなればゑたひ曾我殿はふそくの人とおぼしくてやせたる馬にこしぱりぐらざうにんの其中に打まぎれゐたるありさまは山田にたてるかゝしも是にはいかでまざるべき國よりもやうのものもたせすつかれにはのぞんず推參のためかよふで一つ吞せよ承と申てまくつかんでうちあげ十郎の袂にすがり御入あれと申そればかりのちやくし犬ばうなり尤とどうしてまくの中ゑぞいりにけるすけつねかたひざをおしたてゑ

のびに刀の柄に手をかけわざとかびんぎさうかこれへくとしやうする備前の五藤内此由を見るよりもすけつねのゑきだひはやうある人ぞとおもひたゝきやくはこなたへとしやうするあなたへなをらばやとおぼしめすがいやゝあれは他門にていせんより座上すこなたは一門の事くるしからじとおぼしめしすけつねがめての座敷になをらせたまふいまだすけ成の左右のひぎなをらざりけるにすけつねがゑたいめむのことはこそ中々以て無念なれまことやうけたまはれば面々それがしをおやのかたきとのたまひてねらひ給ふとうけたまはるそれは以の外のひが事也御身の父のかわづどののよしなき事によつてうたれさせ給ひて候を永々敷は候へども語てきかせ申さんによく御きゝ候てつねは御入候へよたとへば頼朝十三にて伊豆の田中はひゑあり伊豆さがみの人々よりあひてひやうぢやうをするやうたれか此きみの父左馬のかうのとのゝ御恩にあづからぬ人やあ

る世に有人をなぐさめ申はそれはときのきら世にな
き人をなぐさめ申さんこそさぶらひの玄ゆんしにて
は候へ尤とどうして山ごえよりも頼朝を伊藤のたち
へいりまいらせて三日三夜のさかもりはことにこえ
たるあそびなりあげくにはわか侍にはのかいりにを
りたつておごへをあげてまりをけきみの御めにかく
る時よりも南を御覽じて山の高く見えたるはいか
なる山ととひ給ふ若侍承り山の見えて候はかしわが
たうげと申也たぎつてたきのおつるをば松がえがふ
ち共申さう伊藤川の水上かまだかふちとも申也たい
せんし山についで候めいよの鹿のかよひ所鹿をか
らせて御見物我君と申されたり頼朝聞めし鹿は所望
との給へば伊豆さが見の人々赤澤山にて三日のかり
くら心ことばもおよばれず後には人々なごりおし
みのさかもりする玄ばゐの事なればこゝに座敷中に青
めな石のたけ五尺ばかりに見えたるをさがみの國の
住人に本間が年は十九にくい石の有やうかな座敷の

わづらひすてんとて此石をおつたてもちは持て候へ
共たもつ所をゑらすして本のざしきになをりけり同
國の住人大庭が玄やてい又野の五郎かげひさ此よし
を見るよりも居たる所をづんとたちてひたゝれぬい
でふわとすて此石をおつたてちうにづむとさしあげ
座敷を二三持てまはり申候て是程の石をばよのつね
のつぶてにこそ打べけれもたぬは國のなをりとては
るか東へすてんとすかゝつし所に同國の住人岡崎の
悪四郎よしさねの嫡子さなだの興一よしさだ其比年
は十三也父の代官にやさしくみゆる花うつばけてう
のひたゝれあかねのやがけ玄ちくのむち足かふちな
るこまに乗りはるか東を打てとをる又野きつと見て
爰諺をとをらせ給ふをばさなだのと見申たるが此
石をまいらせんす馬の上にてめされうすかなふさな
だ殿とぞかけたりける眞田きいてあらことゝもなや
又野殿をもかさよりなぐる石を下にて給るおこのも
のやわかさうと笑てとをる又野此よしみるよりもふ

かくなり眞田どの三浦にとつてはふる郡へん見の七郎岡崎の悪四郎おうたうみさき杉本御一門の中に岡田かたはきこふるきりやうの仁と承て候が此いしめさぬ物ならば其は三うらのなむにては候はぬか如何に／＼とかくる眞田無念に存ずればいそぎ駒よりとむでおり竹笠ひたれをはらりとかなぐりすてそれほどの石をば二つも三つもとくなげよとらんと申のとにぶんごう御袂にすがりつきこはいかなる事を仰候ぞめのとをや御供申ながら此いしもしもめされそんずるものならば大殿よりの御かんどうは一かうぶんごうめがかふむらふするにて候になふいかなる事とけうくんするさなだ聞てやあけうくんもことによるぞ三うらのなむとかくるは無念成そこはなせと云まゝにひかふるたもとふり切て此石を持たりけりぢたいまた野はおこのものゑいやつといふてなぐる五尺餘りの大石が花のごとく成興一が上へひらめいておつるを弓手にあひさけきつと取てめてのかたに

たうと置てなむぼうとつたぞ又野殿いで／＼此いしをやがて歸し申さんとゑいやつといふてなぐる又野弓手にあひ附所は取て候へ共力のおつるゑるしにはるか東へすてたりけり伊豆さがみの人々は此よしを御覽じいや又野十人が力をさなだは持て有やとて一度にどつとぞ笑ける時にとつて眞田殿はあつばれ弓矢の面目哉去間又野は諸人にどつとわらはれちつとも科もなき四方をはつたとねめまはし面々は何を笑ひ給ふぞかゝるちからわがは時によるぞすまひを取て伊豆さが見の人々をすまひのあひてにもち申かた手をはなつて百日百夜うつともやはか笑はれ申べき伊豆の人々きこし召こは無念なる次第哉同國のものがわたりあひいしをなげてとりそんじ他國をかくるはいはれぬ所あふやがて心得たり伊豆は四郡相模は八郡小國とおもひなして伊豆をかくるはどうりいづさがみはねきりのすまふにてあるべしすまいをめさぬものならば弓矢參らんとぞひしめかるゝ伊豆がた

には狩野介もち見つさがみ方には土肥の次郎二人の
ぎやうじに出給へばすでにすまいははじまりけり先
一番に宇治河の十郎よきすまい九番うつて入岩や川
の彌二郎十七番打て入ねぶかは廿三番うぬ井の太郎
九番打又野此よし見るよりも君の御座にて候にいつ
までそれがし出ざるべき唯今罷出ひとりころびして
あそばむといふまゝにすまひのこしらへおもふさま
に仕り場中へおどり出げにもちせうの如くよかつし
すまふがつつと出ればつきたをしとつと出ればはた
とはけたをし手にもためずしてはや五十九番打たり
けり今は諸方のすまいが盡て候はぬかすまひつきて
候はすはうちどめはかけひさつうぞおいとま申べし
と云かゝりける所にと井の次郎さねひらはさがみ方
のぎやうじにてましませば又野があたりへたちよつ
てあつぱれすまいやとつてきひて目ばやきすまい心
もきひたりちからもつよしげにやすまいつくればぎ
やうじ出てころぶよしうけたまはれ共彼殿年寄せ給

ふあはれ土井が年をすも廿も取てのけたらば又野殿
と一番花々と參らぬかとしてからく〜と笑ひ給ふさる
あひだ又野おとなの返事をこはく申すなんぞう土肥
殿座敷座上にて盃のとつくめされんこそおとなにて
はましませ共かゝるあそびはらうにやくをきらはぬ
習にて候へばたとひ土肥どのにてもおわせよ御出候
へ花々と一番參て老のなみにかしわがたうげのあか
土を付申さむと申土肥どのきこしめされてやあわか
いやつに言葉をかけはぢかいたりとおもはれけれど
もものゝ上手にてましませばさあらぬていになし給
ふ其比伊藤のひめを土肥に置土肥どのゝ姫をいたう
におかるゝ伊藤御覽じて此邊の河津はなきか土肥の
次郎さねひらの腹立給ふ色をば見ぬか是非川津がと
らすはいとう出てころばんとぞくるはれける河津承
せんなさよとは存れども父の仰にてある間をつとこ
たへて御前をたちすまひのこしらえひし〜と去つ
くろひ又野を引たてゝつれて場中へ出る時にや引立

すた脱ス

る所にて人の力はゑるゝものをむげに又野はよはかりけりと心の内に存ればかた手をはなつて場中へ打ていづさがみの人々のゑんるのはむらを止ばやとおもふがいやゝ名人にふかくをかゝするは却而てかわづがふかく也取てのやうを人々にみせばやなんとおもひつゝはらりとひらき手さきを取てくるりとまはるすまひの手にはむかふつきさかつきかもが入くひ水車かくればはづしいればあますたうくわのせちえの取合いさむ心ははるごまのたちとゝめぬる風情して四十八手の取てをは百やうにみたしたれば伊豆相模の人々はおもしろやとさゝめかるゝいつまでと存れば又野は人ぎわへかつぱとつきたをしとつて引立をくる時かくてもいりたらばいしかるべき事共をうてたるあとをきつと見てまゝまじきすまひなれども爰成木の根にけしとうで又野は一後期／假借のふかくをかひて候あにの大庭が是をきゝすまひのかちまけゑらね共木の根は是に有といふ伊藤殿御覽じてやあいか

にかはづよの常の辻すまひなんどこそ人ぎはなむどと申事は候へすでに又野はばんどう國ハチ脱スルカにきこえたるすまひの上手ものその數にてなけれ共坂より東三十三ヶ國が其中にすまひを取て名人とよばれ申は身のふせうまつはなゑろにせうぶをつけよ河津とぞいかられる河津承人のなさけのある時こそ我もなさけはこめらるれとる所とおもひてはらりとひらき手さきをとつてくるりとまはる又野河津にふかくをかゝせんそのためにくみいりにつつと入あましておくれをむずと取て前のつゝ一ゑめゑめてかたてをはなつてつゝけて二番とうゝと打たるはあふ中々いきたるかひぞなき兄の大庭がこれをみてすまひをとるは常の事片手をはなつて打方はそれは相手をいやしむ所いきては歸るまじなど云土肥と伊藤がひとつに成てやうないはせそたいうちころせとひしめかるゝすでに弓矢に成べかりしを頼朝如何なることゝ御けうくんあれば御詮そむきがたきによつてゆみやとはとま

りけりそのすまひのいこんによつて御身の父のかわ
づ殿をばいはう山のこなたなる赤澤山のふもとにて
おにの大庭がうつた共申又おとゝの又野が討たる共
申其比それがしは都にて傳へきこはむねん成玄だ
ひかないそぎ國にくだり大庭がたちにおしよせ一矢
いばやとねらひしに御身のおうち伊藤どのそれがし
が代官の玄わざなりとの給ひて國の留守にとゝめを
きおほみやはたをめしとつてりふぢんにきられ申す
うらみの矢をもいたけれども一つは養子の父母ふた
つにゑばしおや三つにはくふ四つにゑうとゝおもひ
ながらもさてありぬそれこそあらんめとがもなきす
けつねを親の敵とねめんより常はさし入給ひて駒に
水をけさするならばらうどうとはよもいはじ家の子
とこそいふべけれ馬なくは面々さかへに多きあら馬
を一疋取て乗ぬかひたゝれなくば犬ぼうがぬぎかへ
をとりに給へやけふよりしてはすけ成と祐經と中
にい玄ゆはあるまじいわゆのさかづきさすぞとて盃

に一つくみ十郎殿にさひたるは座敷のはちとおもは
れて無念たぐいはなかりけりあら口おしやとふにつ
らさのまさるとは今こそおもひゑられたれおんして
おかむ家の子にせんむどゝいはれては親の敵なら
ず共玄なでは何のゑきあらんくんだるさけをすけ經
がおもてへさつといつかけ一かたなうらみともなら
ばやとおもひしがまてゑばし我心時宗一人残しをき
同じよみぢといひながら本望をばとげさせでさうひ
やうの手にかけうき名ながせんする口おしさよと
やせんかくやあらましとくんだりしさをばほしか
ねてぞみえにげる二人のてうは色をみて御盃のなが
もちはおさかなの所望かや座敷にてうの有ながらい
ざやうたひてまいらせんゑかるべしとて今やうなむ
どうたひけり祐成思ひなをしつゝ時はかはると日は
かはらじすなはち今夜二人づれようちにせんす敵也
此世の中のおもひでに何共申せとがむまじいされ共
心ぐるしきは五藤内がみるめは西國武士の見るめ也

二人のてうのきくみゝは東國の人々のきこしめされ
ん所もげむざいおやの敵をまのまへにおきながらか
かるぞさんをいはせつゝきゝながらへてたちぬると
いはむ後日の恥しくよしゝそれゆふさり今のは
ぢをばすゝぐべしこのみ座敷になかいたし無念度々重
り處々の死をして時宗にうら見られむよりたうして
立にこそとおぼしめし三ごんくんで請ながしゆふさ
りは御番申度候へども北條殿の方様へ申べき事の候
明日五郎ともないまいりて御めにかゝらむと座敷を
たちて出様に敵の屋形のけごを心ゑづかに見すまし
て草やかたに歸る去間時宗は草やかたに有けるが十
郎殿を待かね申太刀おつとり出るかどの邊にて參あ
ふ痛はしや祐成ゑほゝとして出來たまふ時宗見參
らせて十郎殿の涙の風情は何事をおなげき候ぞや助
成聞召れて某がなみだの風情別のゑさゐにて候らは
ず敵祐經に對面し初對面の言葉のこはかりし時さし
ちがへてともいかにもなるべかりしを御へんにな

ごりおしうてつれなくいのち長らへ二度あふたがう
れしさにさてぞなみだやこぼるらん時宗承りあゝら
有難の御誼や候ぞひは上より下るとはいまこそおも
ひゑられて候へかう申時宗ならば助成の御事をばゆ
めにも思ひ出すまじいたまにあふたる敵なればとお
もひざしきになをらぬ先にさしちがへとにもいかに
も成べきものをおぼしめし出されて是までの御出は
ありがたふこそ候へ早々敵のやかたのてい御物語候
へ承度候祐成聞食れて安きほどの事出々語て聞せ申
さむさてもよりどもの御くわほういみ敷御座あるに
よつて北條殿の給りにてうすひはたに十八間にひた
ゑろのまくをうつてふじおろしにもませたるはたゝ
はく雲の立たるにことならず國々の大名にするがの
國に吉川舟越高橋たう遠江の國によちかつまたる
の八郎參川の國にあすけ中將星のきやうめひ尾張の
國にはんふかいとうあつたの大宮司美濃の國にはと
きとを山ひらのゝ平次八彌のくはんじやあしゝの次

郎近江國ににしごり佐々木の山本柏木木村の源藏成網やかたをならべひつしと打て君をしゆごし申なりいせの國には加藤の彌太郎伊賀の國にはつとりたう大和の國には宇野が一かう三千餘騎つくし大名に大友玄よきやう菊地原田松浦たうこれたうこれすみへつぎ山すみやかたをならべひつしと打丹後の國にはたなべの小太夫おほちのすへたけ若狹の國にはあるのかうけん玄やうくに政が末子あをの太郎鳥羽の兵衛越前の國にはあまや白崎堀江本明加賀の國にはとがしのふんせい林の六郎井上左衛門能登の國には土田武部越中の國にはいしごろ宮崎南部の殿原むく田の兵衛宮路の左衛門越後の國には五十嵐の小文次信濃の國にはにしな高梨うむの望月くはらきのあんどうじあむどうないねづの甚平これゆき上の宮のすはのほうり^{ふノ誤}下の宮のすはのほうり深山がくれのかいげんし一條板垣南部下山へん見武田小笠原下野の國にはなす玄ほの屋安戸佐竹の人々上總の國にはいほう

いなむちやうふくちやうなんあひろ河か見うさ山野へ下總の國には安さいかなまりまるとうでう武藏の國には横山たう平山たう玄んたうたんのたうせいいたう小玉たう七たうこれたうそうじて四十八たうの人々は屋形をならべひつしと打て君を守護し給ひけりさが見の國には土肥土やさむま岡崎さてもふところ島山のうちの人々ひたはらきの者どもくたんのすけつね君のまちかきやかたには我等か一ぞくに武州にちゝぶ殿相州に和田殿諸司の別當に梶原平三景時其外は千葉小山なし田星田いん田とん田すは内の殿原やかたをならべ打つゝけ君を玄ゆごし申也敵のやかたは八千八ながれなり馬はついぢ人はらんぐいきまんこくのきわうとらせつこくのらわういやおにをからめしはくたわうつなきむときやうやう田村としひとよごしやうぐん二さうをさとる人なりとたやすく此陣でおやの敵を討取てやすくと出ん事おもひもよらぬ事なれ共御身と某と心ひとつであらふぞと

本ノマ、

へんせつはたらふた言葉にはなをさかせ二時計物語
おくゆかしうそきこえけれ去間時宗は十郎殿の御物
語大息つゐてきゝ居たりは案内日雲なし夜更はお
もひたちぬべし宵の間の慰に文共書えたるめて古里
へ言傳むえかるべしとてやたて巻物取出しあぶり火
すこくかきたてありしむかしのおもひより今のうき
身のはてまでをことこまかにぞ書れける十郎殿はと
もすれば大磯の虎が名殘を書れけり五郎が筆のすさ
みには箱根の別當の御事さて其外は何れも同じ文せ
うなりけり時宗がよろこび申けるはふしぎに最後の
時大かた殿にまいりふけうゆるされ申父母けうやう
の命を富士のすそ野に捨置骨を野ぐわいにうづめど
も名をばん天にあぐる事父が子たれば取傳ふ家引お
こす弓矢の名れうもんに骨はくちながらかもんの名
をうづまつきむきよくのこゑはさんえゆちく遠島ま
でくもりなしひそかに是をおもむ見るにたうをにぎ
りけんをたいし弓馬の道にたづさはり戦場に出て命

をすつ是かうめいのためなりきはほそねむのなげ
きにはかなしみを三五の時是をうけ十八歳のえうた
んは唯二人のみなげきあり年たけ月日さつて後時に
けんきう四年五月のすゑの八つの夜天はくらしと申
せ共今宵晴候なり助成時宗判と書とゝめ次第の形見
を取あつめ筆をすてゝぞなきにけり助成には鬼王時
宗にはだう三郎と二人の者を召れ文をば御上へ參ら
せよ弓空穂をば曾我殿へはだの守とびんのかみをば
箱根の別當の御方へ馬と鞍おぼわどのはら恩なひ主
の形見ぞとおもひ出さむをりふしは念佛と申て得さ
すべし態文にはかゝぬぞ御上にて申べき事は給はり
たるおんぞを身にまとい敵とあふてえなん事いき
ての面目えゝての名只さいごに母上を拜み申心地し
てとかやうに着て出つると語り申せと云ながら又は
らゝゝとなきにけり鬼王どう三郎もなみだにくれ御
返事を申かねたる斗なりさのみなだにむせびても
はいかりおほき事なればしやく取なはし申けるはい

づくにていか程見おとされ申かゝる御誼の下るぞや
兄弟の人々のあれほど多敵うたんと出たち給ふ所に
たゞ二人ある下人がみすてゝ歸る法やさうああらう
らめしのとのゝ御誼やたとへば仰にゑたがひかたみ
のものを給りて曾我ふる里に歸りつゝはじめて人を
たのむ其ふだひの主を見すてゝゑなぬほどのゆひが
いなしが何の用にたゝむとてたれやの人が目を懸む
たとひ入道仕り世をいとふ身と成たりと思をゑらぬ
はつばらがだうゑんいかゝあるべきとうゑるゆびを
さゝるゝならば出家してもめんばく有まじ上らうも
下らうもゑぬべき時にゑなぬばいきがひはさらに候
はずいかによとの鬼王まるようちの御供をこそ申さ
ずともおくびやうゑごくのくわじやばらが腹切やう
をみせ申さむに爰へよれやといふまゝにたがひに刀
を抜持てなむあみだ佛を最後にてさしちがへむとぞ
ゑたりけるすけ成も時宗もあはてゝ中へとむで入二
人を左右へおしのけあふおもひきりたりなむぢらさ

ればせんだんのはやしはけいきよくまでかむばしゝ
わうちの砂はみな金玉と成風情我らがおもひきりた
ればなむぢらもおもひきりけるかや見をとす事はな
きぞとよこゝろざしにたゞ下れ國へかた見を届すば
時のちんじ一たんの口論にゑゝたりと人もおもひ母
上も覺しめされむする口惜さにわざとくだすぞたゞ
下れたとひ千騎萬騎味方にあると申共此ふぢ野にて
は思ひもよらず只壹人成共忍びいらばうち得む人あ
またにてかなふまじいぞはやとくゝと仰ければあ
かぬはきみの御誼とて形見と文を給り主じなきこま
の口を引ゆかむとすれば五月やみ涙にくれて道みえ
ずおもひするがの富士の根のけぶりは空によこおれ
てへだての雲となりにけりすそのゝ草は露ゑげくま
だ秋ならぬ道野べにほたるかすかにとびつれて身よ
り思ひのあまりにむしさへむねやこがすらんといゝ
なみだのおほかるになにとかはつのなきそひて井て
の屋かたをわかるらん馬も心のあればこそ北風にい

ばひけめげに心なきちくるいもなるれば玄とふ者有
ましてやいはむぞんりんにかたちにかげのそふごと
くふだいさうでんめしつかへ明ればおに王暮れば又
だう三郎と召遣れ申せしが今宵はなれてあすよりも
すけ成共時むね共たれをか申てなぐさむべき同うき
よに生るゝと曾我の十郎時宗のその殿人でなかりせ
ばかほどにものはおもふまじ我等ばかりとおもへ共
むかしを傳へてきく時は玄ちた太子は十九にてわう
くうを忍びいでだんどくせむのほうれいあら羅仙人
を師とたのみ御出家ならせ給ひし時玉のかふり石の
おび御衣諸共にぬぎすてゝ金札を書添てこんでいご
まもろ共にわうぐうへ歸し給ひけりこんでい駒もし
やの雲君くものわかれをかなし見てせむこくにいばい悲
るいていきうせし事も今のわれらにあひをなじそれ
は佛のさいどにて終には廻りあい給ふかの祐成や時
宗に今宵はなれて明日よりも又もあふべき君ならず
なごりおしとも中々に申もをろかなりけり兄弟の人

仰けるは今にはや此もの共富士の原をば過ぬらんい
ざや最後の出立せん尤玄かるべしとて十郎殿の其夜
の御玄やうぞくはだには御上より給る小袖ひつちが
へてきるまゝにむら千鳥のひたゝれのそばたからか
にさしはさみ黒ざやまきの刀をさいて三玄やく五寸
の玄やくどう作りの太刀はひてまきのたい松一尺貳
寸にたばねたるを弓手の脇にかひこふで火は持たる
か時宗とて先にすゝむでぞ出られける五郎がそのよ
の玄やうぞく是もはだには御上より給りたる小袖ひ
つちがへてきるまゝに上にはさひみにす見えにてう
を三つ二つ所々に付させ下はこむの小ばりまのそば
たからかにさしはさみ赤木のつかの刀をさいて別當
より給たる二尺七寸のひやうぐさりの太刀はひて
とうの火もつてぞ出にける玄のびて敵をねらふよは
くらきに玄くはあらね共辻々のかゝり火は天をもて
らすばかりなり草のかげなる細道までもかくるべき
やうのあらざればたゞ日中のごとくなりされ共とね

り草かりのむまかふていにもてなし屋形／＼のまへをすぐるあやしやたそとがむれは是は御内の草かりなりとこたへてかりやの御りやうの御所中へまのび入こそあふなけれ霄に見たりし事なればまよふべきにてさふらはす數千のかどをゆきすぎ祐つねがやかたへ忍び入にことによつくいふせし用心はたれもかふする物をとがめばやがて亂入てめぬきをかぎりにうちあふべしそれまではまのべとてたいまつに火をたてまづかにふつて見たりければ五藤内にいさめられやかたをかへて爰にねず惣じて人をおかざれば二人ながらあきれてさていかなりなむ弓手はやがて御所なりめてはちゝぶまへは和田後の陣は横山けいごのぶしはかりたき矢さきをそろえたてをつき御用心とよばゝるはたいなる神のごとくなりうむがつきてさとられ敵やかたをかへにけりきやうだひの人々羽ぬけどりのなかぞらにたちわづらうぞあはれるるかゝりけるところにはらまき着たる男の長刀持

てよりければ兄弟の人々あは敵ぞとおもひ太刀取なをし懸りよふされども此をとこ長刀をとりもなをさす小ごゑに成て申けるはなふくるしうも候はずちゝぶ殿のこうけんに本田の次郎ちかつねにて候昨日かりばの庭の言すての弓矢のなさけをとほんため本田をいだしたてられて候祐經は霄までは此やかたに有けるが五藤内にいさめられ御所の左の妻戸の脇にまゆくしたり先たいまつをもふりまめし太刀をもさやにおさめよいやたそといふと物云なちかつねにいませよこちへ／＼と手をぞ引うれしさはたぐひかぎりなし中門わたりろうまの前をゆき過あやしやたそとがむればちゝぶ殿のこうけむ本田の次郎ちかつね自番するといゝければさらにとがむる人はなし和田の手の人々吉盛かねて今夜はひそかなれとまめされ人をも更にとがめず御まゝと北條殿五郎が烏帽子おやなれば色兼てさとり何事ありと今夜はさうなくはしり出るなとまのび／＼にふれらるゝ心得たるやか

たには東西ひつそとしたりけりかくはすれ共外様のもの何事もあれかし時の高名仕り御感にまかりあづからんなんど、思ふもの共いれちがへてまはれどされども本田付そい引まはしとをれば更に子細はなかりけり

かくてきやうだひの人々を祐經がふしたりし妻戸のわきえをしへいれ人數にちかつねも御供せんと申助成聞し召れてまことの時の心ざしちゝぶ殿の御はうし本田殿の御なさけとかう申におよばれず若も此事ゑおふせて雑兵の手にかゝらん時御手にかけてなきあとりかくし給ひなば最後のともにはまさりなむ人あまたにてかなふまじいぞはやとくゝと仰ければ本田承げにゝ是もいはれて候さらばおるとま申とて本田ははやかへりぬたがひにとりつたへたる弓矢のなさけこゝまでとふたりめと目を見合て風はいつも吹ども今宵の風は身にぞゑむなごりはいつもをしけれど今夜ことさらをしきなり一日が間に一千歳

をふるとはいふとも萬年がそのうちにも兄弟と成事かたかるべし今宵はなれて其後に未來の契りさだめなし未敵にあはぬまに別れの姿よく見む父ゆうれいが見度ばすけ成を見給へや母かうさうとおもひて時宗をみんとてたいまつはつとふりたてゝたがひにかほを見合てもろきは今のなみだなりかゝりける所に風も吹ぬに妻戸がなつてきりゝはつとひらいた兄弟の人々さうのわきにひつそうてすまひてものを見給へば女にてこそ候へかれたれなるらんとおもひしに大磯の虎がいうとにきゑゆと申者今夜御所中に有けるが曾我殿原のようちのよしをゆめばかりほのきゝてもしきもあるならば此妻戸のかけがねをはづさんためによひよりも待こそ久しくさふらひつれなふこなたへいらせ給へとてかきけすやうにうせにけり妻戸はあひつ人はなしさらばたい松をたてよとてたひまつに火をたてゑづかにふつて見たりければ郎等共はおそれてよりつかざる座敷に五藤内と祐經只

二人宿したり助成御覽有ていかにや五郎敵を見るに
二人我等も兄弟御へんはそばにふしたる五藤内をき
れすけ成はすけつねをきるべしとぞ仰ける時宗承り
こは御誼とも存候はす五つや三つの年よりも十八年
が間ねらひたまにあふたる親の敵をば扱置て行衛も
まらぬものをきつては何ゑきあらんそうりやうにて
ましませば一の太刀をばあそばせ二の太刀におゐて
は時宗が仕らんと申すけ成聞し召れてあふ思ひあや
まつて候但ねいりたるものを切は死人を切ににたる
べしあつたら親の敵のいきかは見てきらん尤ゑかる
べしとてねやまくらにたちより太刀をつか手にとり
なをして申けるこそあはれなれ三千年に一度花さき
見のなる西王母のそのゝもゝたう花のせちゑうどん
げのはるおやのかたきにあふは稀なるとは申せ共あ
ふおもへばやすかりけるぞやいかにやとのすけつね
大事の敵もつものがかくふかくに見ゆるはおきあひ
てぞんじやうに死霄の念佛は一念な只今の十念申さ

れよちやうもむせん五藤内がさかしら今こそする所
よおきあへやつといふまゝにあゆみの板をどうとふ
むすけつねが最後もよかりけりさつしたりと云まゝ
におどろきさまに枕なる太刀おつとりすばとぬきお
きんとゑける所を助成是にありやとてもつてひらひ
てちやうとうつ弓手のかたからめてのちの下へはら
りつんときつた時宗是に有やとて持てひらひてちや
うと打腰のつがひをきりはなす五郎が太刀はつるぎ
にて壘三てううらかへしあゆみの板に切つけゑひや
つと云て引間に助成又はたと切時宗つばをかへしと
つてなをしてちやうと切せめても切てなぐさめ日比
の念やはるゝとおどりがりとびあがり三刀づゝ切
ほどに果報いみじきすけつねも六つになつてころび
けりそばにふしたる五藤内太刀風にめをさましかつ
ぱとおきてにげけるがにげはたゝもにげすゝ夜討は
曾我のとのばら明日のゑよけんは五藤内とのゝゑつ
てもみにもふでにげにけり祐成御覽じにくいやつが

唯今のことばかなにげはにがさんとおもひしに玄よ
けむといふがにくさに人とちぎるはさはなひぞとも
につれてごくそつのか玄やくのせめの所見にまかり
たてとの給ひてすけなりの太刀にてたかもゝ切てお
とされのつけに返す所を時宗是にありやとてほそく
びちうにうちおとすおとゝひあんどたまはりせむな
む人にかたらはれひかうの玄にを玄たりし五藤内が
最後をばきせん上下をしなべにくまぬものはなかり
けり

十番切

けんきう四年五月廿八日の夜半ばかりの事なるに曾我兄弟の人々はおやのかたき祐經を思ひのまゝにうちおふせこしばのかげへさつと引しばらくいきをつぐ助成おほせけるやうは本望をばとげついでやこゝにてはらきらん時宗承て御ちやう尤にて候へどもとても御れうはおうち伊藤の敵なればんちうへみだれ入頼朝を一かたなうらみ申名をこうだいにあぐべきなり助成聞召れてげに／＼これもいはれたりさりながら祐經にとゝめをさしてありけるかときむね承てあれほどになすうへなにの子細の候べき助成きこしめされてそれはさもなし五郎殿あけてじつけんあらんときあはてたるかをくれたるかあつたらおやのかたきにとゝめをさゝで打すてにしたるなんどゝあらんときかばねのうへのふかくたるべし五郎殿とあ

りしかばさあらばそれに御まち候へとて有しところに立歸りたいまつをふりたてゝ祐經をみてあれば跡も枕も見もわかずされどもしがいをひき返しむなしきかほをつく／＼とみてかまいてめいどくわうせんまでわれらうらむる事なかれ日ごろ作りじつみとがの只今むくふと思ふべし我等が父の河津殿にたむけんためめいたうなりさこそそんりやうかはづどのうれしくおぼしめさるべきいひもあへずときむねこのかたなをひんぬいてこみゝのねにさしたてすこしはたらくやうなるををしうごかしていひけるは此かたなと申は御へんがひさうせし刀いつぞや頼朝のはこねまふでの有しとき御へんは時の御ともにてまことやらん此山に河津殿の三男にはこわうの丸の有なるに見參せんとよびいだしそれがしにたいめんししたしきがむつばぬはぐちのいたせるところなり他人なれどもむつべばこれ又威せいたるべしおとなしくならん迄わざしにせよとて此刀をとり出しそれ

がしがこしにさしはやかへれよといひしときおやのかたきときくなればほかをばもとむべからず此刀にてたゞなかを一かたなとにらみしをこしの法師がいろをみてをしへだてかきいだきほんばうにかへりぬさてそのうちにこのかたなうしなはでもつ事は御へんはもとのぬしなればかへさんがそのために今までもちであるぞとよかねはかねてもしつづらんころ見給へといふまゝにめてのこみゝしたよりも弓手へとをれと三かたなさす刀めかかさなりてくちとひとつになりにつり

あけてじつけんありしときよひのざしきのざうごんにくちをさかれけるやと御ひやうちやうはとりくくなりされども遊女二人がはじめをはりをかたるにぞとゝめにこそはなりにけりよゐにははれてありけれどかたきうちける其時刻にそらかきくもり五月雨うのはなくだしぞふりにふるつじくのかゝり火も一度にはつときえければ東西俄にくらふ成ておちむど

たにもおもひなばこゝろにまかせておちぬべしされども思ひきるうへこゑくによばはるたいいま御れうのかり屋の御前にておやの敵祐經を討て出るつはものをいかなる者とおもふらん伊藤がまこ河津が二人の子十郎時宗爰に有當君の御内にゆみとりはおはせぬかなどおりあひてうちとゝめ名をこうだいにあげたまはぬやつとこゑくによばはるくらさはくらしあめはふる御ぢん俄にしんどうし弓一ちやう太刀一ふりに二人三人とりついて我人のとむばいあふつなぎむまに乘ながらむちをうつところもありみかたどうしがきりあひてかたきと思ふものもあり前後ふかくにひしめひてうへをしたへぞかへしけるされ共一番にたいらくの平馬のせうと名乗て夜討はたぞめづらしやわれくが目のまへにてらうせきをばせさすまじ手なみの程を見せんとておごゑをあげて切て出るすけなりきこしめしかほどにおほき人中に一人名乗ていづるこそたぐひすくなきゆみとりなれ侍我

の十郎是にありうけて見よと云まゝにこしばのかげよりつつと出てもつてひらいてちやうとうつゆんでうでくび打おとされて言葉には似ざりけりはや御内をさしてぞ引にける二番にあひきやうの三郎と名乗て五郎にむずとわたりあひほうさききられ引て入三番に御所かたのくろ彌五と名乗て十郎殿にわたりあひかたさききられ引て入四ばんにもて木どの五郎にむずと渡り合ひさのくちをわられて御うちをさして引給ふ五番の度には伊勢の國の住人に吉田の三郎もろしげ十郎殿にわたりあひもろひざながれ引て入六番のたびには吉川と名乗て五郎にむずとわたりあひたかもゝきられ引ている七番にはしながはと名乗て十郎殿にわたり合めての小わきをきられてまくのうちへぞひきにける八ばんのたびにはかひの國の住人に市川の別當太郎たゞすみ大音あげていひけるは夜うちといはんに何程の事のあるべきとおこゑをあげて切て出るときむねこれをきゝやあなんぢはお

とに聞えたるうすいのたうげなんどにてぬすみこそふなりともはれわざのきりあひは是はじめにて有らんに手なみのほどを見せんとともつてひらいてちやうとうつほそくびちうにうちおとされてあしたの露とぞきえにける九番につくしむしやうすきの七郎もろしげ十郎殿にわたり合まつかうわれ引て入十ばんのたびには二たんの四郎たゞつな大音あげていひけるはなにさま東西くらふしてもものゝあひ色が見えぬにたいまつ出せとよばはつたりすけなりきこしめしか程におほき人中にたいまつごのみをするやつに手なみのほどを見せんとていれちがへてきりむずぶ其ひまにたい松を我をとらじとさしいだすえびらうつばみのかさましてからかさなどをばよきたい松と火をつくるまんどろゑにはことならすいといさめるつはものが此火のひかりにちからを得さんさんに切たりけりれうが雲を引つれとらが風に毛をふるひはんくわいがほこをふりちやうりやうがいき

ほひも是はいかでまさるべきその夜五郎が手にかけ五十一人に手をおふする直に死するはたゞ一人別當太郎ばかりなりとても今夜はすごすまじつみつくりにとをもひて人をばさらに切ころさす名字を名乗て出るをこそ十人とはしるされけれ兄弟が手にかけてやみうちのすてがたな數をもしらぬところなり扱すけなりとたいつなはしのぎをけづりつばをわりきつさきよりもくわえんを出しをふつまくつつたゝかへどしばしせうぶはなかりげり二たんいかはしけん十郎のたちをうけはづし少手おひてこれまでなりいとま申てさらばとてまへのうちへ引しりぞく助成つゝいてをつかけとても今よひはすごすまじごうひやうの手にかけころさんよりも返しあはせてせうぶをせよたゞつなとて追かくる取てかへしてきりむすぶすこしあしたちかたさがり上手に成て十郎殿二たんと下へをひおろさんとはしりかゝつて打たちを二たんさらりとうけながしつかをつゐてすそをなぐ十

郎のめてのちからあしひぎのくちをさしさてつんと切てぞおとしける弓手のあしばかりにて半時おどつてたゝかふたり是やこのれうわうのぼじつにむかふほこの手入日を返し一おどろうしろをふせぎす刀百手をくだきたゝかへどゆんでの足ばかりにてさのみはいかでこらふべきいぬるにどうとまろびあたり五郎やある祐成こそたゝいま二たんにあひてうたれ候へおなしきみちと云ながらたゞつなに合てうたるればうらみとは更におもはずや御へんはいのちをまたふしてきみの御まへに参りわれらがありさま申てしねはや首とれやたゞつな二たんくびを討おとすまんずる年は二十二おしまねものはなかりけりあらむぎんやときむね弓づえ二つえ三つえ程へだてこをせんどゝたゝかひしがすけなりのさいごのよしを聞はやうつたちもよはりはて是非をもさらにわきまへずかくてはかなじと思ひ御内をさして切て入爰に御所の五郎丸と申て十八歳になりけるがうすぎぬ

取てかみにかけとあるところにひつそふて今やを
そしとあひ待る是をばあらで時宗つま戸をはつとけ
やぶつて御うちをさして切ている五郎丸やりすごし
得たりやあふといふまゝにゆん手すがひにむすとだ
くときむね是をみて女とおもひ見そんじいだかれぬ
るところくわいすされども事のかずにせずちうにづ
むどひつたてゝ七八間ははしりけり五郎丸是をみて
かなはじとやおもひけん夜討をばくみとめたりおり
あへやつとよばはつたり此こゑにしたがつておりあ
ふ者はたれゝぞみとの九郎源八またの太郎と民部
のせうわれもと思ひし大ぢから七八人おりあひて手
どり足どりなはかけて大將殿へをつたつるあふむね
んたぐひはなかりけりさるあひだよりも夜討まぢ
かく參るよしをきこしめし御はらまきをめされ小長
刀よこたへゆるぎ出させ給ふ爰に大ともの一はうし
と申て九つに成けるがきみの御きせながにすがりつ
き君はすでにせいゐしやうぐんにておはしますかゝ

るごととなどに御手をおろさせ給ふ事からゝし
くもや候らんととゞめ申たりければよりともげにも
とおぼしめしとゞまり給ふところへあんのごとく夜
討からめとつて庭上にひつすゆるよりとも御らんじ
てあふいしくも申たる一はうしかな父大ともがつた
へ聞きこそよろこび申べきにゑぼし子にせんとの給
ひて大ともの左近のしやうげん義なをとめされ大す
みさつまをくださるゝときのめんぼく世の聞えなに
事かこれにまさるべきさるあひだ頼朝さきの御しや
うぞくをあらためひろびさしまで御いであり曾我の
五郎時宗とはなんちが事かさむ候と申親のかたきす
けつねをうつは道理といひながら京かまくらのおり
のぼりみちのすゑにてもうたずし頼朝がいひの座
敷にちをあへすでういはれなし又かたきならばすけ
つね一人こそうつべきに當番のめんゝに手をおふ
するでういはれなしおなじぎいくわはかぎり有せつ
たうのつみと云ながらかゝるぢうくわはためしなし

ありのまゝに申せときむね承てさん候祐經をば京か
まぐらのおりのぼり道のすゑにてもうちたくぞんじ
て候へども君の御覺えめでたふてよきものをあまた
つれうつ時は五十騎百騎うたぬ時も二十騎三十騎に
はをとり申さすわれらは君の御ふしんかうぶり身は
どくしんとなりはておとしいよりほかむつぶものも
なきあひたつきそひねらひまはれ共おりを得ざれば
うちもえず此かりくらへの人ごみをさいはいと存ま
ざれ入てうつて候御ぢやうのごとかねてはすけつ
ね一人をこそうたむと存候ところに當番のめんく
がなまじゐになのりいでをくびやうがたなつかふて
にげあしふむがにくさにおどしにそつとたち風をお
ふせつるにて候ぢうおんをまきにかうぶり妻子をふ
ちし身をたて人となるかたぐが夜うちの入てみだ
るゝにたれあつてきみの御せんにたゝんと仕るもの
はなしとざまなれども二たんと御内の五郎丸よりほ
か御ようにたつべき者もなしその内かの手おひども

みなめしよせてじつけんあれむかふきずはおほく候
まじか程をくびやう成人々にあつたらしき御所領を
いたづらにたばんよりわれらにすこしくだしたひ御
はうしにあづからはこれほどまではにくまじやたと
へはおうち伊藤はふちうのものにて候ほどにしそん
我等にいたるまで御にくみあるは御道理さりながら
ふんしよにはいかりをたておんにむくへばかたきも
味方と成親子兄弟なれどもよくしんうちにふくめ
ばとにてきたうと書れたりせんびをくひこゝのしよ
にしたがへと古人もをしへをかれたりおうぢ伊藤は
ひが事なしむかし源平兩家のときあめがしたのしよ
さぶらひ二ちやうの弓に一すぢのつるをかけきのふ
源氏へひくゆみをけふは又ひきかへて平家へ引やか
らも有かやうに人はせしかども伊藤はこゝろふたつ
なくきれてゆみ矢をとりしなりかやうに弓矢とるも
のはたのもしき弓とりたうせんと是を名付たりそれ
に伊藤がしそんをうとみはてさせ給ひてめいをつぐ

べきたよりもなしろうてうのくもをこひこちうの魚
のわづかにあはにいきつくふせいにていきてかひな
きうき身と成とてもきゆべきつゆの身をおやのかた
きとうちじにし名をのちのよにあげむため我きみと
こそ申けれ

よりともきこしめされてさほどがうなるものがなに
とて五郎丸にはとられけるぞ又かたきうつての其後
内所をさして切ていり我にてきをなすでういはれな
しありのまゝにかさねて申せときむねうけたまはり
さん候すけつねはおやのかたきと申ながらさしてう
らみも候はすせめいちしむにきすと申てもあまりあ
りうらみ申てもつきせぬは君の御身にとめたりた
とへばおうむいとうはふちうのものにて候へども名
にあるものゝ子孫をいかでかたやしはてむと二人が
中に一人めしいだされけんめいの地のかたはしにあ
んどをなしてたぶならばたとへすけつねうちたくと
もほんりやうがおしさにおもひかへなぐさみてもす

ぎぬべしさればゆみ取のいのかへておしきはけ
んめいの地の本領なりそれにひとつものこさずめし
あげらるゝのみならず剩かたきすけつねに一ゑんに
くだしたばうへみぬわしとふるまひしかゝるうらみ
の數々のそのみなもとをたづぬるにきみの御身にと
どめたりすけつねよりもさきにそとこゝろをかけ申
せしにそれにてたつものはなし五郎丸きぬかつぎか
みゆりさげてゐたりしを女と思ひ見そんじてさうな
くとられて候ぞや五郎丸だになかりせばあつぱれ君
の御命はあやうかりつるものをやよりもきこしめ
されてあつぱれ大がうのもののかな思ひのいろをのこ
さず申あぐる事こそ神妙なれたゞし親のかたきうた
むとてまゝうちそがにはしらせけるか京の小次郎越
後のせんじ二のみやのあねはゝにはしらせざりける
かときむね承てさん候小次郎はほんしよにしこうつ
かまつりひまなき身にて候へばしらする事も渡はず
ゑちごなるせんじばうは經をよみねんぶつ申おやの

あととふその子をころして何にせんとぞんじゑらす
る事も候はず二の宮のあねむこよになきこじうとく
くみし一しよけんめいをうしなはんとよも申さじと
ぞんじゑらする事も候はずはゝにはゑらせたくは候
ひつれども人のおやのならひにてわかき子どもをさ
きにたてとしよりあとにながらへものおもはんとい
ふおやのよにあらじと存しらする事も候はずまゝ父
はなさぬ中けいしけいふのむかしよりなかき事の
あらざればゑらせずとこそ申けれ頼朝御涙をながさ
せたまひ今は問べき子細もなしはやゝいとまとら
せよと仰出されけるところにいづくよりかきたりけ
ん敵のちやくしいぬばう時宗を見つけこゑもおしま
すわつとなきもつたるあふぎにてときむねがおもて
をちやうとうつ時宗ちつともわろびれずにつこと笑
ひあふゆゝしくもうついぬばうかなうらやましやな
犬坊は霈にちゝをうたせいまてにかけてうつ事よか
なしきかなやわれゝは五つや三つの年よりも父を

なんぢが親にうたせ十八年がそのあひだ野にふし山
を家としこゝろをつくしきもをけしつゝやはたち
に餘りつゝうちたるだにもうれしきにさこそいぬばう
がこゝろもつくさずをこのけなく打をうれしく思ふ
らん是もきみの御おんぞやわどのがうでにかなふま
じうつてはらだにあるならばいか程もうてや犬坊と
かほふりあげてうたせけり御前に有し人々弓とり
たう座のちじよくをあたふる事もつたいなしといぬ
ばうをだきいるゝ頼朝よりの御誼にはときむねがさ
いごにすけなりがくびの見たくや有らん二たんは
なきかとおほせければうけたまはると申てむらちど
りのひたゝれにつゝみたりしすけなりのくびに討そ
んじたるたちをそへときむねがまへにをくあらむざ
んやときむね今まではがうのまなこを見いだしわろ
びれざりしけしきもかはりなみだをながしうつぶし
になりあらいたはしやはやくもかはり給ひたるやち
くばにむちをうちしより一つとところにおきふしすこ

しも見えさせたまはねばとや有らんかくやわたらせ
給ふらんとこゝろをそへて思ひしにかなしきかなや
今ははや五たいふんべつつかねばありしかたちも
かはりはていたづら事となりにけりとくしてわれも
かくなりておなじみちへと思ひければつゝめどこぼ
るゝなみだは庭のゑらすもぬれぬべし

そのちときむねがたちをとりいだしこれにてきれ
との上意なりときむね此たちをみてあらふしぎやあ
のたちはおとし京へのぼり四でうまちにてかひと
りゆふべのかたきをうち又このたちにてそれがしが
首をきられん事のふしぎさよとのぼらぬ京へのぼり
たると申はこのたちの出ところをかくさんための言
葉なりなはとりはほりの小次郎とぞ聞えける頼朝よ
りの御誼には大がう一のときむねなればたかゝをか
にてきれとの上意なりうけたまはると申てときむね
をひつたてたかゝをかへいそぐ折ふしありあふ貴賤
くんじゆたゝよのつねのゆみとりさへさいごのてい

はおもしろきにことさら名にしおふたるときむねな
ればさいごのていをみるとわれさきにといそぐ時
宗人のおほきをみてあらくちおしやかほどのくわう
座にてなはのはぢにをよぶ事よしゝそれも時宗
がさんぞくかいぞくをゑたる身にてもあらばこそぶ
もけうやうのそのためについたりなはにてあるあひ
だかみのまへにてみしめなは佛のまへにてせんつ
なきやうのひぼともいつつべし心あらんすゆみ取た
ちはよつて手かけてけちゑんせよ人々といふまゝに
いやたかゝをかへぞいそぎけるたかゝをかにも着し
かば九ほんのまつゑたにゑきがはをゑかせ西むき
になをて申けるはさいはいときむねがこの松のゑ
たにてきられん事もひとへに九ほんの浄土とおほふ
るなりいかにたちとりなはとりすこしのいとまを得
させよまつごの一句にじやうどの三部經をあらゝ
とひてきかすべしけもんしゆの人々もなりをゑづめ
てちやうもんあれそれ法花一乗のくりきはたつとし

ありがたきみたいしやうほうまんとくのくらゐ三世
の諸佛出世のほんくわいは衆生じやうぶつのぢきだ
う也經にあらはす時は妙法れんけの五字につゝめな
にとくときはなむあみだ佛の六字にせつするなりし
ゆいといつば座せんの異みやう座せんしゆぎやうの
てんちにいたりがたきものは六字をせうしてごくら
くに往生すぐち成ぼんぶに至てはかうしやうのほう
もん也いつしをさゝぐるそのときは大せんせかいも
こゝに有たけをうちたうをみてごだうする事ふんみ
やうなりめうらく大師の御しやくにいはいくしよけう
しよさんたさいみだ西方をもつてさきとせりゆいし
んのみだこしんの淨土なればほんらいむとうぎいか
しやう有なんぼくとくわんすべしそれ六字のみやう
がうをあつむるきやうろんはけごんきやうにて南の
字をつくりあごんきやうにて無の字を作りほうどう
きやうにてあの字をつくり大はんにやにて彌の字を
つくり法花經をもつてだの字をつくつてなむあみだ

ふつと申なり十方三世ぶつ一切しよぼさつ八まんし
よしやうげうかいせあみだととくときはちやうもん
の老若もかうべをちにつけときむねをおがめぬ人は
なかりけり

かるときむねと申はおさなかりけるとときよりもごん
ぎやうをこたらす一しむ三くわんの月はむみやうの
やみをてらしくわんねんのまどのまへにはまゆに八
字のまをたれいちしちうだうのくるまは無二無三
の門にとゞろき一乗ぼだいのこまはびようどうだい
ゑのそのにいばふとうがく一てんのほとゝぎすはめ
うかくたいせうのみねになきにうちうけんもむのう
ぐひすはげゝ衆生の谷にさへづるしよぎやうむじや
うの春の花はせしやうめつぼうの風にちりしやうめ
つめついの秋の月はじやくめつめらくのくもにかく
るゝはんさむにふんゝしかくのごとくとあるもの
をたゝねんふつを申べしとをよぶもをよばざりける
もみな念佛を申ける是はたかゝをかの事さてもきみ

の御まへにはわだちゝぶ北條殿とりゝゝせう申されけるはかのときむねと申は大かう一のつはもの又は名にあるものゝ子孫なればたすけも御をき候へかしとをのゝ申されたりければ頼朝もないゝたすけたく思召るゝ折ふし三人のせうをうれしくおぼしめしみづからあんの御狀をあそばしゑんへいの右馬のせうにたぶさてもたかゝをかにはときむねをゑきがはになをらせ太刀取うしろへまはるときゑんへいの右馬のせうたてぶみもつてはしりやあ其時宗なきつそあんの御狀是にありこれゝゝおがみ給へとて時宗がひぎにをくこてのなはをゆるされたからかにこそよふだりけれくだす狀さがみのくにの住人そがの五郎時宗はやくくわんゆうすそれくわをこんじてちうとなすゑんかうは人に有てゑかもみやうのちけんたりおやにけうのふかきものはてんたうのあたへ有是によつてらいてうもれんみんなをばげまし非をいたし理になせり天下爰に感應すそくばくの弓と

りたうけんをさし置なんだそでをうるほふしおんこむにきく物ひるいきもにめいじたりこれを更にちうばつしゑぎいになしをはんなきゝうの家たえ弓馬の道はながくすたりなんあふぎてもなをあまり有はんくわいにくらぶればときむねはまさりたりちやうりやうにあはすればかうそのなせしいせいたり一てん四かいがそのうちにかくれぬがうのものなればさきの日をかへしいまよりのちは頼朝にちうしむたるべし本領なればうさみくすみかは津三ケのしやうゑいたいあんの御狀かくのごとくみなもとのよりともはんとぞよみ上たるきせん上下のけもんしゆ一度にあつとかんじつゝゆゝしの人のくわほうやとよろこばざるはなかりけり去程にときむね御教書いたゞきなみだをながしつゝあら有がたやおなじくは此御狀を舍兄助成もろともにおがむとだにも思ひなばいかゝはうれしかるべきに惣領の助成今はうきよにおはせねばときむね一人ながらへそうりやうをつぐと

もいきたるゑるし有まじたゞ／＼きらせ給へと申こ
うてぞきられけるみる人目をおどろかしきくものこ
れをかんじけり君もあはれと思召かほどがうなるつ
はものじやうこも今も末代もためしすくなき次第あ
らんかみにいはへとてふじのすゑ野にやしろを立て
あにの宮をとゝの宮と申ていははせたまひけるとか
や今當代にいたる迄おやのかたき討人はこのやしろ
にていのればたちまちなへ給ひけり

しんきよく

つらくおもむみるにいにしへより今に至るまで朝敵を一時にほろぼし太平を四海にいたす事武略のこゝろにまはなされば代は異國まうらいのをそれもなくいてゐるをあらそふかたましまさず是併武運の天命にかなはせ給ふによつてなり爰にけんこう建武のむかしを思ふに戦場にしてかばねをさらすのみにあらずあるひは君臣の儀をまぼつて身をさうかいのなみにまづめあるひはいもせのわかれをかなしむで思ひを古郷の月にいたましむるなかにもあはれなりしは一の宮のみやす所の御事と右衛門のふしやうはたのたけぶんがふるまひなり其ころ宮すてにうゐかぶりめしてまんきうのうち人にと成給ひしかば御才覺もいみじくようがんもよにすぐれましませばさだめてとうぐうにたゝせ給ひなんとよの人皆ときめ

きあへりしに關東の御はからひとしておもひのほか
に後二條の院の御子とうぐうにたゝせ給ひたればこ
なたへ参りつかへし人々はみなぞみをうしなひみ
やもよのなかよろづに付て只うちまはれ明くれば詩
歌に御ころをそへ風月におもひを添させ給ふ折に
つけたる御あそびなど有しかどさしてけうせさせ給
ふ事もなしさるによつてはいかなる宮腹一の人の御
むすめなどなりともかくと仰いだされば御ころを
つくさせ給ふ迄の御事にはあらじと覺えしに御ころ
にそむいろもなかりけるにやこれをと思召たる御
氣色もなく只ひとりのみとし月ををくらせたまひけ
るとかや有とき關白家にてなまかんだちめ天上人さ
しあつまつてゑあはせのありけるにとうゐんの左大
將殿のいだされたるゑにげんじのむばそくの宮の御
むすめはまらにゐかくれてびはをひき給ひしにくも
がくれたりつる月の俄にいとあかくさし出たればあ
ふぎならでもまねきつべかりけりとてばちをあげ指

のぞきたるかほつきいみじくらうたげにはやかな
る御けしきを云ばかりもなく筆をつくしてぞかきた
りける宮これをつくぐと御覽じてかぎりなく御こ
ろにかゝりければこの糸を煮ばしめしをかれみる
になぐさむかたもやとまさかへし御らんじけれ
ども御こゝろさらになぐさます昔りふじんのかんせ
むでんの床にふしはかなくならせ給ひしを武帝かな
しみにたへずしてはんごむかうをたかれしにりふじ
んのおもかげのかすかに見えしを似糸にうつして御
らんせしにものいはずわらはず人をしうさずと武帝
のなげき給ひしもことはりかなと今更に思ひぞ煮ら
せたまひける我ながらはかなのこゝろまよひやまこ
とのいろをみてだにも世は皆夢のうつゝとこそおも
ひすつべき事なるにこは何のあだし心ぞやくわさん
のそうじやうへんせうをつらゆきがうたのさまは得
たれどもまことすくなしたとへばゑにかける女をみ
ていたづらに心をなやますがごとしと古今のじよに

もかきたりしそのたぐひにもなりぬるものよとおも
ひ捨てせ給へども猶あやにくなる御心むねにみちて
ぞおぼしめすさればかたへの色ことなる人を御覽じ
ても御目をだにもかけられずましてときぐのたよ
りにこととひかはされし御かたさまへはひとむらさ
めのあまやどりにもたちよらせ給ふべき御こゝろげ
もなしせめてよのなかにさる人ありと聞召御こゝろ
にかゝらばただれのひまもとむるかせのたよりも
ありぬべし又わづかに人をみしばかりなる御心あて
ならば水のあはのきえかへりてもよる瀬はなどかな
かるべき是はみしにもあらず聞しにもなくむかしは
かなき物語あだなるふでのあとに御こゝろをつくし
ていかにせんとこひかなしませ給ひて月日をぞをく
らせたまひけるせめて御心をやるかたもやと御車に
めされかものたゝすの宮にまふでさせ給ひ御手洗川
にて御てうづをめされなにとなくかはにせうようせ
させ給ひむかしなりひらがこひせしとみそぎせし事

のあはれなるやうに思召いで、

いのるともかみやはうけんかけをたに

みたらしかはのふかきおもひを

かやうにうちずんじ給ふときしもむらゑぐれのすぎ
ゆくほど木のゑたつゆにたちぬれて御そでもいと
ほしあへず日もはやくれぬと申こゑに御くるまをと
どろかして一條をすきさせ給ふにたがすむ宿とは
ゑねどもかきにこけむしかはらのまつもとしふりて
すみあらしたるやどなればものさびしげなるそのう
ちにばちをとけだかくせいがいをはをぞひきけるあや
しやたれなるらんとおぼしめしすぎかてに御くるま
をとめめはるかに見入させ給ふにみる人ありとも
ゑねらずして有明の月のくもまよりほのぼのとさし出た
るにみす高くまきあげいとあてやかなるねうばうの
秋の別をかなしみてびはをたんずるにてぞありける
せつさんこをくだく一りやうきよくこほりぎよくは
んにおつせんばんせい かきみだしたる其こゑ庭のは

おち葉にまがひつゝよそにはふらぬむらさめに御袖
もゑほるゝ計也あやしやとおぼしめしみや御めもあ
やにつくぐゝと御らんせらるゝに此ほどそゝろに御
こゝろをつくしてゆめにもせめて見ばやとこひかな
しませ給ひし似ゑにすこしたかはすなをあてやかな
るかたちはいはむかたなくぞ見えたりける御こゝろ
そらにあこがれてたとくしきほどになりしかばつ
き山の松のこかげにたちやすらはせ給ふに女みる人
ありけりとてびはをばきちやうのかたはらにさしを
きうちへまぎれいりにけり引やもすそもあからさま
なるおもかげに又たち出る事もやと夜ふくるまでた
ちやすらはせ給へばあやしげなる御所さぶらひみか
うしおろすをとしてよもふけはや人みな静まりけれ
ばかくても有べき事ならねばみやもくわんぎよあり
にけり

ゑにかきたりしかたちにだに御心をなやまされし御
事なりましてまことのいろを御覧じていかにせんと

唯今のことばかなにげはにがさんとおもひしに玄よ
けむといふがにくさに人としぎるはさはなひぞとも
につれてごくそつのかゑやくのせめの所見にまかり
たてとの給ひてすけなりの太刀にてたかもゝ切てお
とされのつけに返す所を時宗是にありやとてほそく
びちうにうちおとすおとゝひあんどたまはりせむな
む人にかたらはれひかうのゑにをゑたりし五藤内が
最後をばきせん上下をしなべにくまぬものはなかり
けり

十番切

けんきう四年五月廿八日の夜半ばかりの事なるに曾我兄弟の人々はおやのかたき祐經を思ひのまゝにうちおふせこしばのかげへさつと引しばらくいきをつぐ助成おほせけるやうは本望をばとげついでやこゝにてはらきらん時宗承て御ちやう尤にて候へどもとても御れうはおうち伊藤の敵なればんちうへみだれ入頼朝を、かたなうらみ申名をこうだいにあぐべきなり助成聞召れてげに／＼これもいはれたりさりながら祐經にとゝめをさしてありけるかときむね承てあれほどになすうへなにの子細の候べき助成きこしめされてそれはさもなし五郎殿あけてじつけんあらんときあはてたるかをくれたるかあつたらおやのかたきにとゝめをさゝで打すてにしたるなんどゝあらんときかばねのうへのふかくたるべし五郎殿とあ

りしかばさあらばそれに御まち候へとて有しところに立歸りたいまつをふりたてゝ祐經をみてあれば跡も枕も見もわかずされどもしがいをひき返しむなしかかはをつく／＼とみてかまいてめいどくわうせんまでわれらうらむる事なかれ日ごろ作りしつみとがの只今むくふと思ふべし我等が父の河津殿にたむけんためのめいたうなりさこそそんりやうかはづどのうれしくおぼしめさるべきいひもあへずときむねこのかたなをひんぬいてこみゝのねにさしたてすこしはたらくやうなるををしうごかしていひけるは此かたなと申は御へんがひさうせし刀いつぞや頼朝のはこねまふでの有しとき御へんは時の御ともにてまことやらん此山に河津殿の三男にはこわうの丸の有なるに見參せんとよびいだしそれがしにたいめんしたしきがむつばぬはぐちのいたせるところなり他人なれどもむつべばこれ又威せいたるべしおとなしくならん迄わきざしにせよとて此刀をとり出しそれ

がしがこしにさしはやかへれよといひしときおやのかたきときくなればほかをばもとむべからず此刀にてたゞなかを一かたなとにらみしをこしの法師がいろをみてをしへだてかきいだきほんばうにかへりぬさてそのうちにこのかたなうしなはでもつ事は御へんはもとのぬしなればかへさんがそのために今までもちであるぞとよかねはかねてもしつづらんこゝろ見給へといふまゝにめてのこみゝしたよりも弓手へとをれと三かたなさす刀めかかさなりてくちとひとつになりにつけり

あけてじつけんありしときよひのざしきのざうごんにくちをさかれけるやと御ひやうぢやうはとりゝなりされども遊女二人がはじめをはりをかたるにぞとゝめにこそはなりにけりよゐにははれてありけれどもかたきうちける其時刻にそらかきくもり五月雨うのはなくだしぞふりにふるつじゝのかゝり火も一度にはつときえければ東西俄にくらふ成ておちむど

たにもおもひなばこゝろにまかせておちぬべしされども思ひきるうへこゑゝによははるたゞいま御れうのかり屋の御前にておやの敵祐經を討て出るつはものをいかなる者とおもふらん伊藤がまこ河津が二人の子十郎時宗爰に有當君の御内にゆみとりはおはせぬかなどおりあひてうちとゝめ名をこうだいにあげたまはぬやつとこゑゝによははるくらさはくらしあめはふる御ちん俄にしんどうし弓一ちやう太刀一ふりに二人三人とりついで我人のとむばいあふつなぎむまに乘ながらむちをうつところもありみかたどうしがきりあひてかたきと思ふものもあり前後ふかくにひしめひてうへをしたへぞかへしけるされ共一番にたいらくの平馬のせうと名乗て夜討はたぞめづらしやわれゝが目のまへにてらうせきをばせさすまじ手なみの程を見せんとておごゑをあげて切て出るすけなりきこしめしかほどにおほき人中に一人名乗ていづるこそたぐひすくなきゆみとりなれ曾我

の十郎是にありうけて見よと云まゝにこしばのかげよりつつと出てもつてひらいてちやうとうつゆんでのうでくび打おとされて言葉には似ざりけりはや御内をさしてぞ引にける二番にあひきやうの三郎と名乗て五郎にむすとわたりあひほうさききられ引て入三番に御所かたのくろ彌五と名乗て十郎殿にわたりあひかたさききられ引て入四ばんにもて木どの五郎にむすと渡り合ひさのくちをわられて御うちをさして引給ふ五番の度には伊勢の國の住人に吉田の三郎もろしげ十郎殿にわたりあひもろひざながれ引て入る六番のたびには吉川と名乗て五郎にむすとわたりあひたかもゝきられ引ている七番にはしながはと名乗て十郎殿にわたり合めての小わきをきられてまくのうちへぞひきにける八ばんのたびにはかひの國の住人に市川の別當太郎たゝすみ大音あげていひけるは夜うちといはんは何程の事のあるべきとおごゑをあげて切て出るときむねこれをきゝやあなんぢはお

とに聞えたるうすいのたうげなんどにてぬすみこそふなりともはれわざのきりあひは是はじめにて有らんに手なみのほどを見せんとてもつてひらいてちやうとうつほそくびちうにうちおとされてあしたの露とぞきえにける九番につくしむしやうすきの七郎もろしげ十郎殿にわたり合まつかうわられ引て入四ばんのたびには二たんの四郎たゝつな大音あげていひけるはなにさま東西くらふしてもゝあひ色が見えぬにたいまつ出せとよばはつたりすけなりきこしめしか程におほき人中にたいまつごのみをするやつに手なみのほどを見せんとていれちがへてきりむすぶ其ひまにたい松を我をとらじとさしいだすえびらうつぼみのかさましてからかさなどをばよきたい松と火をつくるまんどうゑにはことならずいとゝいさめるつはものが此火のひかりにちからを得さんさんに切たりけりれうが雲を引つれとらが風に毛をふるひはんくわいがほこをふりちやうりやうがいき

ほひも是にはいかでまざるべきその夜五郎が手にか
け五十一人に手をおふする直に死するはたゞ一人別
當太郎ばかりなりとても今夜はすごすまじつみつく
りにとをもひて人をばさらに切ころさず名字を名乗
て出るをこそ十人とはしるされけれ兄弟が手につ
てやみうちのすてがたな數をもしらぬところなり扱
すけなりとたゞつなはしのぎをけづりつばをわりき
つさきよりもくわえんを出しをふつまくつつたゝか
へどしばしせうぶはなかりげり二たんいかゞはしけ
ん十郎のたちをうけはづし少手おひてこれまでなり
いとま申てさらばとてまへのうちへ引しりぞく助成
つゝいてをつかけとても今よひはすごすまじざうひ
やうの手にかけころさんよりも返しあはせてせうぶ
をせよたゞつなとて追かくる取てかへしてきりむす
ぶすこしあしたちかたさがり上手に成て十郎殿二た
んを下へをひおろさんとはしりかゝつて打たちを二
たんさらりとうけながしつかをつゐてすそをなぐ十

郎のめてのちからあしひぎのくちをさしきけてつん
と切てぞおとしける弓手のあしばかりにて半時おど
つてたゝかふたり是やこのれうわうのぼじつにむか
ふはこの手入日を返し一おどりうしろをふせぎこす
刀百手をくだきたゝかへどゆんでの足ばかりにてさ
のみはいかでこらふべきいぬゐにどうとまろびあた
りに五郎やある祐成こそたゝいま二たんにあひてう
たれ候へおなしきみちと云ながらたゞつなに合てう
たるればうらみとは更におもはずや御へんはいのち
をまたふしてきみの御まへに参りわれらがありさま
申てしねはや首とれやたゞつな二たんくびを討おと
すまんずる年は二十二おしまねものはなかりけりあ
らむざんやときむね弓づえ二つえ三つえ程へだてこ
こをせんどゝたゝかひしがすけなりのさいごのよし
を聞はやうつたちもよはりはて是非をもさらにわき
まへずかくてはかなじと思ひ御内をさして切て入爰
に御所の五郎丸と申て十八歳になりけるがうすぎぬ

取てかみにかけとあるところにひつそふて今やを
そしとあひ待る是をばえらで時宗つま戸をはつとけ
やぶつて御うちをさして切ている五郎丸やりすごし
得たりやあふといふまゝにゆん手すがひにむすど
くときむね是をみて女とおもひ見そんじいだかれぬ
るところくわいすされども事のかずにせずちうにづ
むどひつたてゝ七八間ははしりけり五郎丸是をみて
かなはじとやおもひけん夜討をばくみとめたりおり
あへやつとよばはつたり此こゑにしたがつておりあ
ふ者はたれ／＼ぞみとの九郎源八またの太郎と民部
のせうわれもと思ひし大ぢから七八人おりあひて手
どり足どりはかけて大將殿へをつたつるあふむね
んだぐひはなかりけりさるあひだよりとも夜討まぢ
かく参るよしをきこしめし御はらまきをめされ小長
刀よこたへゆるぎ出させ給ふ爰に大ともの一はうし
と申て九つに成けるがきみの御きせながにすがりつ
き君はすでにせいゐしやうぐんにておはしますか、

るこごとなんどに御手をおろさせ給ふ事かろ／＼し
くもや候らんとといめ申たりければよりともげにも
とおぼしめしとゝまり給ふところへあんのごとく夜
討からめとつて庭上にひつすゆるよりとも御らんじ
てあふいしくも申たる一はうしかな父大ともがつた
へ聞さこそよろこび申べきにゑぼし子にせんと給
ひて大ともの左近のしやうげん義なをとめされ大す
みさつまをくださるゝときのめんぼく世の聞えなに
事かこれにまさるべきさるあひだ頼朝さきの御しや
うぞくをあらためひろびさしまで御いであり曾我の
五郎時宗とはなんぢが事かさむ候と申親のかたきす
けつねをうつは道理といひながら京かまくらのおり
のぼりみちのすゑにてもうたずし頼朝がいはいの座
敷にちをあへすでういはれなし又かたきならばすけ
つね一人こそうつべきに當番のめん／＼に手をおふ
するでういはれなしおなじぎいくわはかぎり有せつ
たうのつみと云ながらかゝるぢうくわはためしなし

ありのまゝに申せときむね承てさん候祐經をば京か
まぐらのおりのぼり道のすゑにてもうちたくぞんじ
て候へども君の御覺えめでたふてよきものをあまた
つれうつ時は五十騎百騎うたぬ時も二十騎三十騎に
はをとり申さすわれらは君の御ふしんかうぶり身は
どくしんとなりはておといよりほかむつぶものも
なきあひたつきそひねらひまはれ共おりを得ざれば
うちもえず此かりくらへの人ごみをさいはいと存ま
ぎれ入てうつて候御ちやうのごとかねてはすけつ
ね一人をこそうたむと存候ところに當番のめん／＼
がなまじゐになのりいでをくびやうがたなつかふて
にげあしふむがにくさにおどしにそつとたち風をお
ふせつるにて候ぢうおんをまさにかうぶり妻子をふ
ちし身をたて人となるかた／＼が夜うちの入てみだ
るゝにたれあつてきみの御せんにたゝんと仕るもの
はなしとざまなれども二たんと御内の五郎丸よりほ
か御ようにたつべき者もなしその内かの手おひども

みなめしよせてじつけんあれむかふきずはおほく候
まじか程をくびやう成人々にあつたらしき御所領を
いたづらにたばんよりわれらにすこしくだしたひ御
はうしにあづからはこれほどまではにくまじやたと
へはおうち伊藤はふちうのものにて候ほどにしそん
我等にいたるまで御にくみあるは御道理さりながら
ふんしよにはいかりをたておんにむくへばかたきも
味方と成親子兄弟なれどもよくしんうちにふくめ
ばとにてきたうと書れたりせんびをくひこゝのしよ
にしたがへと古人もをしへをかれたりおうぢ伊藤は
ひが事なしむかし源平兩家のときあめがしたのしよ
さぶらひ二ちやうの弓に一すぢのつるをかけきのふ
源氏へひくゆみをけふは又ひきかへて平家へ引やか
らも有かやうに人はせしかども伊藤はこゝろふたつ
なくきれてゆみ矢をとりしなりかやうに弓矢とるも
のはたのもしき弓とりたうせんとはを名付たりそれ
に伊藤がしそんをうとみはてさせ給ひてめいをつぐ

べきたよりもなしろうてうのくもをこひこちうの魚
のわづかにあはにいきつくふせいにていきてかひな
きうき身と成とてもきゆべきつゆの身をおやのかた
きとうちじにし名をのちのよにあげむため我きみと
こそ申けれ

よりともきこしめされてさほどがうなるものがなに
とて五郎丸にはとられるぞ又かたきうつての其後
内所をさして切ていり我にてきをなすでういはれな
しありのまゝにかさねて申せときむねうけたまはり
さん候すけつねはおやのかたきと申ながらさしてう
らみも候はすせめいちしむにきすと申てもあまりあ
りうらみ申てもつきせぬは君の御身にとめたりた
とへばおうぢいとうはふちうのものにて候へども名
にあるものゝ子孫をいかでかたやしはてむと二人が
中に一人めしいだされけんめいの地のかたはしにあ
んどをなしてたぶならばたとへすけつねうちたくと
もほんりやうがおしさにおもひかへなぐさみてもす

ぎぬべしさればゆみ取のいのちにかへておしきはけ
んめいの地の本領なりそれにひとつものこさずめし
あげらるゝのみならず剩かたきすけつねに一ゑんに
くだしたばうへみぬわしとふるまひしかゝるうらみ
の數々のそのみなもとをたづぬるにきみの御身にと
どめたりすけつねよりもさきにそとこゝろをかけ申
せしにそれにてたつものはなし五郎丸きぬかつぎか
みゆりさげてゐたりしを女と思ひ見そんじてさうな
くとられて候ぞや五郎丸だになかりせばあつぱれ君
の御命はあやうかりつるものをやよりもきこしめ
されてあつぱれ大がうのものかな思ひのいろをのこ
さず申あぐる事こそ神妙なれたゞし親のかたきうた
むとてまゝちゝそがにはしらせけるか京の小次郎越
後のせんじ二のみやのあねはゝにはしらせざりける
かときむね承てさん候小次郎はほんしよにしこうつ
かまつりひまなき身にて候へばしらする事も涙はす
ゑちごなるせんじばうは經をよみねんぶつ申おやの

あととふその子をころして何にせんとぞんじゑらす
る事も候はず二の宮のあねむこよになきこじうとゝ
くみし一しよけんめいをうしなはんとも申さじと
ぞんじゑらす事も候はずゝにはゑらせたくは候
ひつれども人のおやのならひにてわかき子どもをさ
きにたてとしよりあとにながらへものおもはんとい
ふおやのよにあらじと存しらす事も候はずまゝ父
はなさぬ中けいしけいふのむかしよりなかよき事の
あらざればゑらせずとこそ申けれ頼朝御涙をながさ
せたまひ今は問べき子細もなしはやゝいとまとら
せよと仰出されけるところにいづくよりかきたりけ
ん敵のちやくしいぬばう時宗を見つけこゑもおしま
ずわつとなきもつたるあふぎにてときむねがおもて
をちやうとうつ時宗ちつともわろびれずにつこと笑
ひあふゆゑしくもうついぬばうかなうらやましやな
犬坊は雲にちゝをうたせいまてにかけてうつ事よか
なしきかなやわれゝは五つや三つの年よりも父を

なんぢが親にうたせ十八年がそのあひだ野にふし山
を家としこゝろをつくしきもをけしつゝやはたち
に餘りつゝうちたるだにもうれしきにさこそいぬばう
がこゝろもつくさずをこのけなく打をうれしく思ふ
らん是もきみの御おんぞやわどのがうでにかなふま
じうつてはらだにゐるならばいか程もうてや犬坊と
かほふりあげてうたせけり御前に有し人々弓とり
たう座のちじよくをあたふる事もつたいなしといぬ
ばうをだきいるゝ頼朝よりの御誼にはときむねがさ
いごにすけなりがくびの見たくや有らん二たんは
なきかとおほせければうけたまはると申てむらちど
りのひたゝれにつゝみたりしすけなりのくびに討そ
んじたるたちをそへときむねがまへにをくあらむざ
んやときむね今まではがうのまなこを見いだしわろ
びれざりしけしきもかはりなみだをながしうつぶし
になりあらいたはしやはやくもかはり給ひたるやち
くばにむちをうちしより一つとところにおきふしすこ

しも見えさせたまはねばとや有らんかくやわたらせ
給ふらんとこゝろをそへて思ひしにかなしきかなや
今ははや五たいふんべつつかねばありしかたちも
かはりはていたづら事となりにけりとくしてわれも
かくなりておなじみちへと思ひければつゝめどこぼ
るゝなみだは庭のゑらすもぬれぬべし

そのちときむねがたちをとりいだしこれにてきれ
との上意なりときむね此たちをみてあらふしぎやあ
のたちはおとし京へのぼり四でうまちにてかひと
りゆふべのかたきをうち又このたちにてそれがしが
首をきられん事のふしぎさよとのぼらぬ京へのぼり
たると申はこのたちの出ところをかくさんための言
葉なりなはとりはほりの小次郎とぞ聞えける頼朝よ
りの御諠には大がう一のときむねなればたかゝをか
にてきれとの上意なりうけたまはると申てときむね
をひつたてたかゝをかへいそぐ折ふしありあふ貴賤
くんじゆたいよのつねのゆみとりさへさいごのてい

はおもしろきにことさら名にしおふたるときむねな
ればさいごのていをみるとわれさきにといそぐ時
宗人のおほきをみてあらくちおしやかほどのくわう
座にてなはのはちにをよぶ事よし／＼それも時宗
がさんぞくかいぞくをゑたる身にてもあらばこそぶ
もけうやうのそのためについたるなはにてあるあひ
だかみのまへにてみしめなは佛のまへにてせんにつ
なきやうのひぼともいつつべし心あらんすゆみ取た
ちはよつて手かけてけちゑんせよ人々といふまゝに
いやたかゝをかへぞいそぎけるたかゝをかにも着し
かば九ほんのまつのゑたにゑきがはをゑかせ西むき
になをて申けるはさいはいときむねがこの松のゑ
たにてきられん事もひとへに九ほんの浄土とおほふ
るなりいかにたちとりなはとりすこしのいとまを得
させよまつごの一句にじやうどの三部經をあら／＼
とひてきかすべしけもんしゆの人々もなりをゑづめ
てちやうもんあれそれ法花一乗のくりきはたつとし

ありがたきみたいしやうほうまんとくのくらゐ三世
の諸佛出世のほんくわいは衆生じやうぶつのぢきだ
う也經にあらはす時は妙法れんけの五字につゝめな
にとくときはなむあみだ佛の六字にせつするなりし
ゆいといつば座せんの異みやう座せんしゆぎやうの
てんちにいたりがたきものは六字をせうしてごくら
くに往生すぐち成ぼんぶに至てはかうしやうのほう
もん也いつしをさゝぐるそのときは大せんせかいも
こゝに有たけをうちたうをみてごだうする事ふんみ
やうなりめうらく大師の御しやくにいはいくしよけう
しよさんたさいみだ西方をもつてさきとせりゆいし
んのみだこしんの淨土なればほんらいむとうぎいか
しやう有なんぼくとくわんすべしそれ六字のみやう
がうをあつむるきやうろんはけごんきやうにて南の
字をつくりあごんきやうにて無の字を作りほうどう
きやうにてあの字をつくり大はんにやにて彌の字を
つくり法花經をもつてだの字をつくつてなむあみだ

ふつと申なり十方三世ぶつ一切しよぼさつ八まんし
よしやうげうかいせあみだとくときはちやうもん
の老若もかうべをちにつけときむねをおがまぬ人は
なかりけり

かのときむねと申はおさなかりけるとときよりもごん
ぎやうをこたらすしむ三くわんの月はむみやうの
やみをてらしくわんねんのまどのまへにはまゆに八
字のまもをたれいちちうだうのくるまは無二無三
の門にとゞろき一乗ぼだいのこまはびようどうだい
ゑのそのにいばふとうがく一てんのほとゝぎすはめ
うかくたいせうのみねになきにうちうけんもむのう
ぐひすはげゝ衆生の谷にさへづるしよぎやうむじや
うの春の花はせしやうめつぼうの風にちりしやうめ
つめついの秋の月はじやくめつゐらくのくもにかく
るゝはんさむにふんゝしかくのごとくあるものを
たゝねんふつを申べしとをよぶもをよばざりける
もみな念佛を申ける是はたかゝをかの事さてもきみ

の御まへにはわだちゝぶ北條殿とりゝせう申されけるはかのときむねと申は大かう一のつはもの又は名にあるものゝ子孫なればたすけも御をき候へかしとをのゝ申されたりければ頼朝もないゝたすけたく思召るゝ折ふし三人のそせうをうれしくおぼしめしみづからあんの御狀をあそばしゑんへいの右馬のせうにたぶさてもたかゝをかにはときむねをゑきがはになをらせ太刀取うしろへまはるときゑんへいの右馬のせうたてぶみもつてはしりやあ其時宗なきつぞあんの御狀是にありこれゝおがみ給へとて時宗がひぎにをくこてのなはをゆるされたからかにこそよふだりけれくだす狀さがみのくにの住人そがの五郎時宗はやくくわんゆうすそれくわをこんじてちうとなすゑんかうは人に有てゑかもみやうのちけんたりおやにけうのふかきものはてんたうのあたへ有是によつてらいてうもれんみんをはげまし非をいたし理になせり天下爰に感應すそくばくの弓と

りたうけんをさし置なんだそでをうるほふしおんこむにきく物ひるいきもにめいじたりこれを更にちうばつしゑぎいになしをはんなばきゝうの家たえ弓馬の道はながくすたりなんあふぎてもなをあまり有はんくわいにくらぶればときむねはまさりたりちやうりやうにあはすればかうそのなせしいせいたり一てん四かいがそのうちにかくれぬがうのものなればさきの目をかへしいまよりのちは頼朝にちうしむたるべし本領なればうさみくすみかは津三ヶのしやうゑんいたいあんの御狀かくのごとくみなもとのよりとものはんとぞよみ上たるきせん上下のけもんしゆ一度にあつとかんじつゝゆゝしの人のくわほうやとよろこばざるはなかりけり去程にときむね御教書いたゞきなみだをながしつゝあら有がたやおなじくは此御狀を舍兄助成もろともにおがむとだにも思ひなばいかゝはうれしかるべきに惣領の助成今はうきよにおはせねばときむね一人ながらへそうりやうをつぐと

もいきたるゑるし有まじたい／＼きらせ給へと申こ
うてぞきられけるみる人目をおどろかしきくものこ
れをかんじけり君もあはれと思召かほどがうなるつ
はものじやうこも今も末代もためしすくなき次第あ
らんかみにいはへとてふじのすそ野にやしろを立て
あにの宮をとゝの宮と申ていははせたまひけるとか
や今當代にいたる迄おやのかたき討人はこのやしろ
にていのればたちまちかなへ給ひけり

しんきよく

つらくおもむみるにいにしへより今に至るまで朝敵を一時にほろぼし太平を四海にいたす事武略のこゝろに玄くはなしされば代は異國をうらいのをそれもなくているをあらそふかたままします是併武運の天命にかなはせ給ふによつてなり爰にけんこう建武のむかしを思ふに戦場にしてかばねをさらすのみにもあらずあるひは君臣の儀をまぼつて身をさうかいのなみにまづめあるひはいもせのわかれをかなしむで思ひを古郷の月にいたましむるなかにもあはれなりしは一の宮のみやす所の御事と右衛門のふしやうはたのたけぶんがふるまひなり其ころ宮すてにうゐかぶりめしてまんきうのうちに人と成給ひしかば御才覺もいみじくようがんもよにすぐれましませばさだめてとうぐうにたゝせ給ひなんとよの人皆ときめ

きあへりしに關東の御はからひとしておもひのほか
に後二條の院の御子とうぐうにたゝせ給ひたればこ
なたへ参りつかへし人々はみなのだぞみをうしなひみ
やもよのなかよろづに付て只うちまほれ明くれば詩
歌に御こゝろをそへ風月におもひを添させ給ふ折に
つけたる御あそびなど有しかどさしてけうせさせ給
ふ事もなしさるによつてはいかなる宮腹一の人の御
むすめなどなりともかくと仰いだされば御こゝろを
つくさせ給ふ迄の御事にはあらじと覺えしに御こゝ
ろにそむいろもなかりけるにやこれをも思召たる御
氣色もなく只ひとりのみとし月ををくらせたまひけ
るとかや有とき關白家にてなまかんだちめ天上人さ
しあつまつてゑあはせのありけるにとうゐんの左大
將殿のいだされたるゑにげんじのむばそくの宮の御
むすめはまらにゐかくれてびはをひき給ひしにくも
がくれたりつる月の俄にいとあかくさし出たればあ
ふぎならでもまねきつべかりけりとてばちをあげ指

のぞきたるかほつきいみじくらうたげににほやかな
る御けしきを云ばかりもなく筆をつくしてぞかきた
りける宮これをつくく／＼と御覽じてかぎりなく御こ
ころにかゝりければこのゑをまばしめしをかれみる
になぐさむかたもやとまきかへし／＼御らんじけれ
ども御こゝろさらになぐさます昔りふじんのかんせ
むでんの床にふしはかなくならせ給ひしを武帝かな
しみにたへずしてはんごむかうをたかれしにりふじ
んのおもかげのかすかに見えしを似ゑにうつして御
らんせしものいはすわらはず人をしうさずと武帝
のなげき給ひしもことはりかなと今更に思ひぞまら
せたまひける我ながらはかなのこゝろまよひやまこ
とのいろをみてだにも世は皆夢のうつゝとこそおも
ひすつべき事なるにこは何のあだし心ぞやくわさん
のそうじやうへんせうをつらゆきがうたのさまは得
たれどもまことすくなしたとへばゑにかける女をみ
ていたづらに心をなやますがごとしと古今のじよに

もかきたりしそのたぐひにもなりぬるものよとおも
ひ捨てせ給へども猶あやにくなる御心むねにみちて
ぞおぼしめすさればかたへの色ことなる人を御覽じ
ても御目をだにもかけられずましてとき／＼のたよ
りにこととひかはされし御かたさまへはひとむらさ
めのあまやどりにもたちよらせ給ふべき御こゝろげ
もなしせめてよのなかにさる人ありと聞召御こゝろ
にかゝらばただれのひまもとむるかせのたよりも
ありぬべし又わづかに人をみしばかりなる御心あて
ならば水のあはのきえかへりてもよる瀬はなどかな
かるべき是はみしにもあらず聞しにもなくむかしは
かなき物語あだなるふでのあとに御こゝろをつくし
ていかにせんとこひかなしませ給ひて月日をぞをく
らせたまひけるせめて御心をやるかたもやと御車に
めされかものたゝすの宮にまふでさせ給ひ御手洗川
にて御てうづをめされなにとなくかはにせうようせ
させ給ひむかしなりひらがこひせしとみそぎせし事

のあはれなるやうに思召いでゝ

いのるともかみやはうけんかけをたに

みたらしかはのふかきおもひを

かやうにうちずんじ給ふときしもむらゑぐれのすぎ
ゆくほど木のゑたつゆにたちぬれて御そでもいと
ほしあへず日もはやくれぬと申こゑに御くるまをと
どろかして一條をすきさせ給ふにたがすむ宿とは
らねどもかきにこけむしかはらのまつもとしふりて
すみあらしたるやどなればものさびしげなるそのう
ちにばちをとけだかくせいがいをはをぞひきけるあや
しやたれなるらんとおぼしめしすぎかてに御くるま
をとめはるかに見入させ給ふにみる人ありとも
ゑらすして有明の月のくもまよりほのぼのとさし出た
るにみす高くまきあげいとあてやかなるねうばうの
秋の別をかなしみてびはをたんするにてぞありける
せつさんこをくだく一りやうきよくこほりぎよくは
んにおつせんばんせい かきみだしたる其こゑ庭のは

おち葉にまがひつゝよそにはふらぬむらさめに御袖
もゑほるゝ計也あやしやおぼしめしみや御めもあ
やにつくぐゝと御らんせらるゝに此ほどそゝろに御
こゝろをつくしてゆめにもせめて見ばやとこひかな
しませ給ひし似ゑにすこしたかはすなをあてやかな
るかたちはいはむかたなくぞ見えたりける御こゝろ
そらにあこがれてたとくしきほどになりしかばつ
き山の松のこかげにたちやすらはせ給ふに女みる人
ありけりとてびはをばきちやうのかたはらにさしを
きうちへまぎれいりにけり引やもすそもあからさま
なるおもかげに又たち出る事もやと夜ふくるまでた
ちやすらはせ給へばあやしげなる御所さぶらひみか
うしおろすをとしてよもふけはや人みな静まりけれ
ばかくても有べき事ならねばみやもくわんぎよあり
にけり

ゑにかきたりしかたちにだに御心をなやまされし御
事なりましてまことのいろを御覧じていかにせんと

こひかなしませ給ふもことはりなり其後よりはたゞ
ひたすらなる御けしきに見えながらさすが御言葉に
は出されすつねに御くわいにまいりし二條の中將爲
冬いつぞやかものたゞすの御かへるさのほのかなり
し雪の間の月又も御らんせまほしくおぼしめさるゝ
にやその御事にて候はいやすきほどの御事にて候此
ねうばうのゆくゑをくはしくたづねて候へば今出河
の左大臣さんあきこうがむすめにて候を徳大寺の左
大將に申名付ながらいまだ皇太こうぐうのみくしけ
にて候なりせつにおぼしめされば歌の御くわいにこ
とよせて彼てゐにいらせ給ひたまだれのひまもみづ
から御こゝろをあらはす御事にても御覽せよと申せ
ばみやれいならず御こゝろよげにうちゑませたまひ
さらば今夜かのてゐにてほうべんの御くわいあるべ
きよしを左大臣のかたへ仰つかはされければきんあ
きこうかたじけなしととりきらめきすきの人あまた
まねきよせ案内申せばためふゆのあつそんばかりを

御ともにてかのてゐにいらせたまひけりうたの御事
は今夜さまでの本意ならねばひかうばかりにてほう
べんはなしあるじのおとゝこゆるぎのいそぎ御かは
らけ持て参りたればみやつねよりもけうせさせ給ひ
ゑいきよくげんかのためゝに御さかづきたばせた
るにあるじもいたくゑひふしぬ宮も御まくらをかた
ぶけさせ給へばはや人みなゑづまりて夜すでにふけ
にけりなかだちの左中將はこゝろありてゑはざりけ
ればかれにあんないせさせ此ねうばうの住けるにし
のだいにゑのびいらせ給ひかひまみ給へばともし火
のかげかすか成に花もみぢちりみだれたるびやうぶ
ひきまはしをきもせずねもせぬさまにゑはれふしつ
つ只いま人々のよみたりし歌のたんざく取あげてか
ほうちかたぶけたれはこぼれかゝれるびんのはづれ
よりはにほやかにほのかなるかほばせつゆをふくめる
はなのあけほの風にゑたがへるやなぎの夕部のいろ
ゑにかくともふでもをよびがたくかたるに言葉もな

かるべしよそながらほのかに見ゆる形のよに又たぐひもやあらんすらんとあやしきまでにおぼえしが猶かすならざりけりとおぼしめさるゝ程にはやほれほれと成て去らず我たましゐも其そでのうちに入ぬるやらんとおぼしめさるゝばかりなりおりふしあたりにも人もなくともし火さへかすかなるにつま戸をすこしあけ内へいらせ給ふに女おどろくかほにもあらずのどやかにもてなしやはらきぬひきかづき打ふしたりしけはひ云去らずなよかなり宮もかたはらによりふしたまひありしながらの御こゝろづくしあはれるなるまでに聞えけれどもとかくいらへも申さずたゞおもひ去ほれたるその氣色まことにほひふかうして花かほり月かすむよの手枕にみはてぬ夢の御こゝろまよひにあくるも去らず打かたらはせ給へどもなをつれなきけしきにてつゆほどもなびかぬさまなるに八こゑのとりつげわたるなみだのつららとけやらすをのがきぬゝひややかにたぐひもつらき有明

のつれなきかげにたちかへらせたまひけりそれよりしてたびゝの御せうそくありていふばかりもなき御ふみのかすははや千束にもなりぬるやらんとおぼゆるほどになりければ女もあはれるかたにこゝろひかれてのぼれは下るいなぶねのいなにはあらずとおぼゆる氣色になんあらはれたりされ其人めをなかのせきもりにて月ごろすぎさせ給ひけるにある時式部少輔秀房といふじゆしやをめてじやうぐわんせいようをよませてきこしめされしにむかし唐の太そうていしんきがむすめをこうひのくらゐにそなへてけんくわでんにかしづきいれむとし給ふをぎてういさめて申やうこの女はすでにりくしにやくせりとそうし申たりければ太宗其いさめに去たがつて宮中にめさるゝ事をやめ給ひきとだんしけりみやこれをつくゝと聞召いかなればよのきみはかくけんじむのいさめに付て色このむこゝろを捨てたまひけるぞいかなるわれなればすでに人にいひ名付事定まりた

るなかをさけて人のこゝろをやぶるべきかと昔のたとへにはぢよのそしりをおぼしめしてそれよりして御心のうちにはこひかなしませ給へどもさすが御言葉にはいだされず御ふみさへかきたえたれば女も百夜のゑちのはしがきもいまは我や數かくまじとうちわびてあまのかるもにおもひみだれて月日をぞくらせ給ひける徳大寺此よしきゝ及びやのさやうにおぼしめしたらんをいかでびんなふさる事の有べきかとはやあらぬかたへかよふみちありと聞召みやもいまは御はいかりなくして御ふみをつかはさるいつよりもくろみすきて

ゑらせはやゑほやくうらのけふりたに

おもはぬ風になひくならひを

女もあまりつれなかりし事を我ながらつらきこゝろかなとおもひ返すほどになりければことばはなくてたちぬへきうき名をかねておもはずは

風にけふりのなひかさらめや

其後よりかなたこなたへむすぶふれしこゝろのゑたひぼうちとけてさよのまくらを河島の水のこゝろもあさからぬ御中とならせ給ひけり

いきてはかいらうのちぎりふかく死ては又おなじこけのゑたにもとおぼしめしかはしていまだ十月にもたらざるに天下の亂出來一の宮は土佐のはたへながされさせ給へばみやすどころはひとりみやこにとゝまつてあけくれなげきまづませ給ふせめてなきよのわかれなりせばうきにたへぬいのちにて生れあはんする後のちぎりをもたのむべきが是は又おなじ世ながら海山をへだててたがひに風のたよりのをとづれをだにもきかせ給はず年ごろめしつかへし青侍くわんぢよの一人もまいりかよはずよろづむかしにかはりたる世とこそならせ給ひけりすみあらしたるよもぎふのやどのつゆけきに御袖のかはくひまもなくおもひくづをれ給ひていかでなみだのたまのをもながらへぬらんとわれながらあやしきほどにて思召宮も

みやこを御出より君のわかれ御身の上一かたならぬ御なげきみやすどころの御なごり今をかぎりとおぼしめし道のくさ葉の露^まもときえはつる共おしからじとおぼしめさるゝ御命のながらへてつれもなく土佐のはたといふところのあさましげなるはにふのこや此世のうちとも思はれぬ浦のあたりにながされて月日ををくり給へばはるゝまもなき御なげきたとへむかたもまします思ひくづをれ給ひしを御いたはしくや思ひけん御けいごに候ひし有井の庄司なさけ有てすゝめ申けるやうは何かはくるしく候べきみやすどころを^まのびやかにこれへくだしまいらせて御こゝろをもたがひに御なぐさみ候へとていろある御きぬ一かさねてうしん申て其外のみちのほどの用意までねんごろにさたしければみやはよろこびおぼしめしたゝ一人候ひしはたの武文を御むかひにぞのぼせらるゝたけぶん御ふみ給はりていそぎ都へのぼりしにいくほどなきに御座どころみしにもあらずあれ

はてゝむぐら^まげりてかどをとぢ松の葉つもりて道もなくをとづれかはすものとはふるき木ずゑのゆふあらし軒もる月のかげならでは住人もなくあれはてたり扱はいづくにか立^まのばせ給ふらんとかなたこなたと御ゆくゑをたづねけるほどにさがのゝおくなるさとにまつ袖がきひまあらはなるにつたはひかゝりいけのすがたもものさびしくみぎはの松風あきすさまじくふき^まほり誰すみぬらんとみるも物うげなるやどの内にびはをだんするをとしけりあやしやと思ひたちとゝまりてこれをきけばまがふべくもなきみやすどころの御ばち音なり武文うれしくおもひかきのやぶれよりうちへいり縁のまへにかしこまりたればやぶれたるみすのうちよりもはるかに御覽じいだされて何とおほせいださるゝ御ことばもなくあれやとばかり御こゑかすかにきこえながら女房たちさいめきあひてまづなくこゑのみぞ聞えけるたけぶんみやの御つかひにまかりのぼつて候と申もあへ

すえんに手打かけさめくゝとぞなきにけるやゝ有て
たいこれまでとめさるればみすのまへにひざまづき
くも井のよそに思ひやりまいらすも餘りせんかた
もなき御事にて候へばいかにもして田舎へ御くだり
候へとの御むかひにまかりのほつて候と御ふみをさ
さげればいそぎひらいて御覽せらるゝにげにと御
思ひのせつなるいろさぞと覺えてことの葉ことにを
く露の御そでにあまるばかり也

よしやいかなるひなのすまゐなり共せめては其うき
にこそたへめとてやがて御門出ありければたけぶん
かひくしく御こしなどをたづねいだし先あまがさ
きまでくだし參らせて渡海の順風をぞあひまちける
かゝりけるところにつくし人にまつらの五郎と云け
るぶし京よりぬなかへくだりけるがこれもおなじや
うにかせをまちてゐたりしが御息所の御すがたをか
きのひまより見たてまつりこはそも天人のこのどに
あまくだれるか此よの人ともおぼえずと目かれもせ

でまぼりゐたりしがあなあぢきなやたとひぬしある
人なり共又いかなる女院ひめみやにてもおはせよか
し一夜のほどのちぎりに百年の命にかへむ事何かお
しからんむばひとつてくだらはやと思ふところに武
文が下部のはま出してあぞひけるをよび寄て酒のま
せ引出物をとらせさても御へんがしうのぐそくした
てまつる上らうはいか成人ぞとひければ下らうの
ものゝかなしさはさけにふけり引出物にめで事のや
うを有のまゝにぞかたりけるまつらおほきによりこ
ふでけふ此ごろいかなる宮にてもおはせよかしむほ
んにんにてながされさせ給ふ人のところへ玄のふで
くだり給ふ上らうをみちにてむばひとりたらんはさ
したる罪科は有まじきものをと思ひらうどうともに
やどの案内見せをかせ日のくるゝをぞあひまちける
夜すでにふけければまつらがらうどう三十餘人もの
のぐひしくとさしかためたいまつに火をつけしと
見やり戸をけやぶつて前後よりうつてぞいりにける

はたのたけぶんは京家のものとはいひながら日比手がらをあらはして人にすぐるゝものなればがうたう入たると心得まくらに立たるたちをつとり中門さして切ていですゝむかたきを三人手のまたにてきりふせのこるかたきを大庭へ一度にばつとをひいだし大音あげて名乗やう右衛門のふしやうはたのたけぶんといふ大がうの者こゝにありとられぬものをとらんとてふたつとなきいのちをうしなふものゝふびんさよとのつたる太刀ををしなをして門のわきにぞ立たりけるまつらがらうどうもたけぶんひとりにきりたてられてもんの外へ引たりしがきたなしかたきは只一人ぞ返せゝといふまゝにそばなる家に火をかけおめきさけんてよせたりけり武文心はたけけれどもけぶりを風にふきかけられてかなふべきやうあらざれば内へはしり歸てみやすどころをおひまいらせむかふかたきをうちはらひみなとの船をまねきつゝいかなるふねにて候ともこの上らうを去ばらくのせ

てたべとよばはつてなみうちぎはにぞ立たりけるふねどもおほき其中にうんのきはめのかなしさは松浦が船にこれをきゝ一番になぎさへさしよする武文なめによりこふでやかたのうちへのせ申御供のねうばうたちをもふねにのせむと思ひてはしりかへつてみてあればありし宿には火かゝつて我かたさまの人人はゆきがたゑらすぞなりにける
其ひまにまつらはこの上らうのわがふねにめさるゝ事はひとへに天のあたふるところなりいそぎ船に乘やとていへの子らうどう百餘人とするものをもとりあへず皆ふねにこそ乗たりけれどもづなとひてをしいだすたけぶんなぎさに歸て船はととへばなかりけり見ればおきにぞうかんだるなふその船よせられ候へやかたのうちへのせ申上らうをあげ申さんとこゑをばかりによはばれ共順風にはをあげければふねは次第にへだたりぬたけぶんあまりのむねんさにあまのをふねに打乗てみづからろををしていそげ共をひて

を得たる大船にをつ付べきやうあらざればあふぎを
あげて其ふねとまれくともねきけるを松浦がふね
に是をきゝどつとわらふこゑしけりたけぶんやすか
らぬものかなその儀にて有ならば只いま海底のりう
じんと成てそのふねにをひてはやるまじ物をといか
つて船のへいたにつつ立て腹十文字にかき切てさう
かいのそこにぞ入にける

みやすどころは宵のまの夜うちのいりたるさはぎよ
りきもこゝろも御身にそはす夢のうきはしうき玄づ
みふちせをたどる心ちして何となりゆく事やらんと
なきふしてこそおはしけれふねのうちなるもの共が
あつばれ大がうの者かな主の上らうを人にむばはれ
てはらを切つる事よといひきたするを武文が事やら
んと聞召ながらそなたをだにも見やらせ給はずきぬ
ひきかづき屋形のうちに泣きづみてましますところ
にみるも物おそろしくむくつけげなるひげおとこの
こゑいとなまつていろのあくまでくろきが御そばに

まいり何をかさして御なげき候ぞおもしろきみちす
がら名所うらくを御覧じて御なぐさみ候へさやう
にてはいかなる者もふねにはるふ物にて候ととかく
なぐさめ申せ共御かはをもたげさせ給はず只をに
一車にのせられふの三こうにさほさすらんもこれに
はすぎじとおぼえしむくつけおとこもばうせんと成
てふなはたによりかゝりこれさへあきればはたる體
なり其夜は大物のうらにいかりをおろし世を浦風に
たいよひ給ふ明ければかせよへなりぬとておなじと
まりのふね共もほを引かちを取をのがさまくこぎ
ゆきければ都ははやあとのかすみとへだたりぬ九國
へはいつかゆきつかんずらんと人の申を聞召扱はこ
ころづくしへゆくたびなりと御こゝろぼそきにつけ
ても北野の天神のあら人がみとならせ給ひしそのい
にしへの御こゝろづくしいまもおぼしめしわすれず
ばわれをみやこへかへし給へと御こゝろのうちにい
のらせ給ふ其日のくれほどにあはのなるとをこぎゆ

きしに俄に風かはりゑほむかひ此船さうなくゆきやらず船人おどろきほをついてちかきうらによせむとすればおきつゑほあひに大のあな出来てふねを海底にゑづめんとす水主梶取共いかゞはせんとあはてゝほむしろとまをなげいれうすにまかせて其ひまにこざとをらんとしけれども船かつてはたらかずうすのまふにゑたがつてなみとともをめぐる事はちやうすををすよりもすみやか也是はいかさま龍神のざいほうにめをかけなやますと覺えたりなにをもうみに入よとて鰐腹卷たちかたなかずをつくしていれられ共うすのまふ事猶やますしも色有いしやうにやめを見いてぞ有らんとみやすところの御きぬとあかきほかまをいれければゑらなみいろへんじこうじつをひたせるごとくなり是にうすはゑづまりけれど船はおなじところに三日三夜ぞめぐりける船中の人々一人もおきあがらず皆船底にひれふして前後もゑらずぞ見えにける宮すどころはさらでだにいきたる心ち

もなきうへにこのなみのさはぎに人ごゝちもましまさずよしやいきてうきめを見んよりはいかならんずるふち瀬にも身をゑづめはやと思召けれどもさすがに今をかざりとなきさけぶこゑをきこしめせば千いろのそこのみくづとなりふかきつみにゑづみなん後の世をたれかはしりてとぶらふべきあさましさよとおぼしめす御ころのうちこそあはれなれまつらもいまはばうせんとなつてかゝるやむごとなき人を取り奉りたるゆへにいかさま龍神のとがめも有けるかせんなきわざをゑつるものかなとまことにこうくいゝの氣色也かゝりけるところに船底よりも梶取一人はひいでゝ申けるは此なるとゝ申はりうぐうの東門にあたりたるところにて何にても龍神のほしがらせ給ふものをうみへゑづめたまはねばいつもかゝるふしぎの有所にて候是はいかさまやかたのうちにめされたる上らうをりうじんの思ひかけ申されたとぞんする申も中々じやけんになさけなくは候へ共此事

一人のゆへにそこばこの者共が非分の志にをせん事は不便の次第にて候へばこの上らうを海へまづめたてまつり百餘人のいのちを御たすけあれと申まつらももとよりなさけなき田舎人の事なればもし我命やたすからんとおもひやかたの内へまいりみやすどころをあららかにひきおこし申あまりつれなき御けしきを見まいらするも本意なく候へばうみへまづめまいらすべきにて候御ちぎりふかくば土佐のはたへながれよらせ給ひてみやとやらんだうとやらんとひとつうらにすませ給へとあららかにかきいだき申海へまづめ参らせんと是程の御事になりては何の御言葉のあるべきなればつや／＼御ころをも出させたまはず御ころのうちには佛の御名ばかりとなへたえいらせ給ひぬこれをみて僧の一人便船したりしがまつらがたもとをひかへいかなる御事にて候ぞそれ龍神と申も南方むくせかいの成道をとげ佛のじゆきを得たる者にて候へばまつたくごうのたむけをばう

くべからず只經をよみだらにをみて龍神のほうらくにそなへむ事こそ眞實のいのりともなるべく候へとかたくせいしければまつらもさすがいはきならねばみやすどころを船底へあららになげつけ申さらば僧の儀に付ていのりをせよとて船中の上下一句同音に観音のみやうがうをとなへしにふしぎなるものどもが海上にうかびいでゝぞ見えにける先一番にたいこうのしちやうがながびつをかひてとをると見えてうちうせぬ其次をみてあればあし毛のこまに白鞍をき八人のとねりが引てとをると見えて打うせぬやゝまばらく有て大物のうらにてはら切てまんだりしはたのたけぶん火おどしの鎧着五まいかぶとのををまめきつきげなる馬にのりゆんづえにすがつてみなくれなるのあふぎをあげまつらがふねにむかつてとまれとまれとまねひでなみのそこにぞいりにける梶取ともがこれをみてなだをはしるふねにふしぎの見ゆるはつねの事にて候へども是はいかさま武文がおん

りやうとこそぞんじ候へ其_まるしを御らんせむがために小船一そうこしらへかこを一人あひそへ此上らうをのせまいらせなみの上につきながしいかにとこころを御覽せよと申此儀尤_なかるべしとて小船一そうひきおろし氷主一人とみやすどころをのせ参らせさばかりうすのまき返すなみのうへにぞうかべける彼さうりそくりがかいかんざむにはなされてきかんのうれへに_まづみしもそれは人すむ島なればたちよるかたもありぬべし是はうらにも島にもなくいかでなるとのなみのうへ身をすてふねのうき_まづみ_まは瀬にめぐる水のあはのきえなん事こそかなしけれされば龍神も思はぬ中をばさけられけるにや風俄にふきわけて松浦が船は西をさしてふかれゆく_やと見えしが一のたにのおきに_やてむこ山おろしにはなされてゆきがた_まらずたいよひしがげききらうふねをくつがへしてそこのみくづとなるとかや其後なみかせ静れば御息所の御船はむしまにつかせ給ひけりこの島と

申はつりするあまのいへならではすむ人もなきひまあらは成あしのやのうきふし_まげきすみかのうちへぞいれたてまつりける

此四五日のなみかせに御こゝろもやはりたえいらせたまひぬ是をみてこゝろなきあまの子共までもこはいかにしたてまつらんとなげきかなしんで御かほに水そゝぎなどしてやう／＼いき出させ給ひけり何しにうきいのちの其まゝにたえもせで又うきめをみん事よとなげかせ給へどかひぞなきさらでたになみだのかゝる御袖はかはくまもなきおりからにとまもる_まづくあらいそのいはにくだくるなみのつゆきえをあらそふふせいなりいつまでかくて有べきぞ土佐のはたとやらんいふうらへをくりてもあれかしと打わび給へはあゝ共申けるはかほどまでいつくしくまします上らうをわれらがふねにのせ申はる／＼土佐迄をくり奉らんにかなる津どまりにても人のむばいとり申事も候べきにゆめ／＼かなふまじきよしを申

ければちからをよばずなみの立居に御そでをえぼり
つゝ今年はこのにくらさせ給ふ御このうちこ
そあはれなれさても一の宮はかやうの御事をばいか
でかえらせ給ふべきなれば御息所の御むかひに武文
京へのぼされしのち月日はるかになりぬれども何と
御左右をも申さねばいかなるうきめにもあひぬるか
とえづこのろなくおぼしめして京よりくだりけるも
のに御たづねありければみやすところは去年の九月
に都を御たちましゝてはたへくだらせ給ひしとこ
そたしかに承りしがと申ければさてはみちにて人に
むははれけるか又世をうらかせにはなされていろいろ
のそこにもえづみぬるかとえづこのろなくおもひわ
づらはせたまひけり有夜の御けいごに候ひけるぶし
ども中門にとのゐして四方山の事どもをかたりける
なかにあるものゝ申けるは扱も去年の九月に阿波の
なるとをすぎて當國へわたりしときふなかにちにかゝ
りたるきぬをとりて見しかばいつくしかりつるもの

よ尋常の人のしやうぞくとは見えすこれはいかさま
だいい院御所の上らう女房たちのゐなかへ下らせ給
ふとてなんぶうにあひてうみへえづませたまひたる
そのしやうぞくにてぞ有らんあなあはれさよなどゝ
いひきたするをみやかきごしにてきこしめし去年の
九月の事ならばもしそのゆくゑにても有らんとこゝ
ろもとなくおぼしめし其きぬいまだあらば持てまい
れとおほせければいろこそそんじて候へどもわたく
しに候ととりよせて參らせあぐる宮つくぐと御
覽せらるゝに御息所の御むかひに武文京へのぼせら
れしとき有井の庄司が調進申せし御きぬなりふしぎ
やとてたちのこりたるきぬをめし出しさしあはせて
御らんせらるゝにあやのもんすこしもたがはずつゝ
きたればなにの御うたがひのあるべきなれば宮二目
共御覽せず此きぬを御かほにをしておほひなきえづま
せ給へばあり井も御前にさぶらひしがなみだをおさ
へてまかり立みやすどころを今ははや此世にましま

す人とはつゆもおぼしめされずこのきぬのかぢにかかりし日をなき人のきにちにさだめられみづから御經あそばして過去のゆうれい藤原の氏の女ならびにはたの武文ともに三界の苦海を出すみやかに九品のじやうせつに至れといのらせ給ふぞあはれなるさるほどに其年より諸國にいくさおこつて六波羅鎌倉九國北國のてうてき同時にほろびはてしかば先帝はをきの國よりもくわんかうなりたまひ一の宮は土佐のはたよりも都にかへりいり給ふ天下ことくく公家一とうの御代と成めでたしとは申せ共一のみやの御かたには御息所のおなし世におはしまさぬ御事をふかくなげかせ給ひしにあはぢのむしまに御座有よしを風のたよりに聞召御むかひをくだされかくて都に入給ふ只わうしつが山よりいで七世のまごにあひ方士がうみに入てやうきひを見たりしもかくやと思ひゑられたり御息所はおもはずもこゝろをつくしにをもむきし御あはれのみの心うさなみにたゆたふう

たかたのきえぬ身ながらなからへふたとせずし物おもひ御をしはかりもなをあさくやと御袖をゑぼり給へば宮は又とわたる船のかぢのはにかくともつきぬ御なげきわかれの中のわかれとなき跡とひし年月のかすくつもりしかなしみたい身ひとつのもの思ひわすれかねにし有さまを語過させ給ひけりかくてうかりしよのなかのときのまに引かへ人間のゑいぐわ天上のごらくきはめずと云日もなくつくさすといふ御遊もなし長生殿のうちにはりくわのあめつちくれをやぶらず不老門のまへにはやうりうのかせえだをならさずけふを千年のはじめとめでたきためしにあかしくらさせ給ひけり

張良

去聞張良は天下を治めん其ためにじゆぶうせんへぞ
まいられける彼御寺の御本尊は十一面觀世音彼御寺
に參り夜も三十三卷晝も三十三局の觀音經を讀三十
三度の禮拜をまいらせ大慈大悲の願なれば軍にたや
すく勝といふ利生をたべと祈念して七日籠せ給ひけ
りまんじける曉忝も御本尊は御帳のうちよりもあら
たに御聲を出させ給ひ我は大悲のちかひにて衆生濟
度のためなれば汝に利生をあたふべし此まへになが
れ川につゐて百日下へくだるへし百日下へくだるな
らばしやうみやう國に着べし彼國の中程に一つの橋
渡るべし彼橋の詰に七日立て待ならば八十の翁來る
べしカ、ル其翁に行會て諸願の利生を蒙べしと玄め
さるゝ御玄げんに任せて御手洗川に着やうゝ下ら
せ給ひけり百日と申にじやうみやう國につきにけり

彼國の中程に一つの橋こそ渡りけれ柱にはるりをの
べゆきげたにはこがねを敷簀子はしやことめなう也
橋は高し雲にそひ虹をなせるがごとく也されども玄
げんなりければ向に渡りて人に逢て問ばやと思ひつ
つ既にすのこをふみつたふ彼張良の心ざし末頼母敷
聞えけりッメ橋を見じと目をふさぎ漸々渡り給へば
中程に成にけり向ひを急度見てあれば八十餘りな翁
の白きかり衣めされて蘆毛なる駒に乗ながらさしも
にせばき此橋をとゝろがけして渡さるゝ張良急度見
てあとへも渡り戻て馬乗をたやすく透さはやと思ひ
しが我は先より渡るものあの馬乗は後也かへさば馬
をかへすべし我は何しに歸るべき渡るにこそと思ひ
て面もふらず渡りけりたゞ中にて馬と人かまつかな
つめに渡りあふ既にそこに馬と人打違むとせし時
に弓手の脊を張良が袖のくちに引かけ橋のすのこへ
落しけり張良仁儀たゞしくして老たる人はかならず
父母のごとくに思ふとて此脊を取上翁にあたへたて

まつるさしかけてはかんとて取はづしをとさるゝな
を取上てまいらせるいかゞはして此沓をまたこそを
とし給ひけれ取上んとせし時いさめる駒にけられて
橋より下へ落て行翁此よし御覽じてあれをくゝと仰
ければ此沓をとらんとて張良口に落にけり彼橋の高
さは三十餘丈成けり沓は水にうかべば張良水に落付
てくつをとらんとをよぎ寄川の底らんでんしふしだ
け五丈ばかりになる大蛇ひとつうかび出つかしらに
角は十六ひれに劍を突たてゝ眼はたゞ夕日の水にう
つろふごとく也紅のごとくなる舌のさきをふり立既
に張良を呑んところはしたりけれ張良急度見て少も
ひるまずおよぎ寄て大蛇にのりこぶしをにぎり角の
あひ七つ八つはりけぬば大じや怒をとめ頂き上て
張良を橋の詰にをろしをく終に沓をば取上翁にあた
へ奉る翁御覽じてあつがうなるや張良臆病にて兵法
の叶ふべしとも覺えねば汝は剛臆かゝ誤歟を見て兵法を傳ん
ため種々のごうさう現したりいざ更ば此次面に翁が

淨土を拜せん道遠して叶ましひ此翁が乗たる馬の尾
づゝに取付かた手にて目をふさぐべし承と申て左り
手にては尾づゝを取右の手にては目をふさぎ仰のこ
とく仕て候と申しければ頓て霞の鞭をあてさせ給ふ
馬は天にあがれはせつなか間に南方の觀音の淨土に
着給ふ翁御覽じて爰こそ我常に住都なれと仰ければ
馬は平地に飛をりぬ翁即觀音にて三十二さうをあら
はしてみけんびやくがう雲を分左右眼目の輪のごと
し御眉すでに桂をかき御唇は蓮のかたふくがごとく
也きよいの袖薫していきやうまどかに匂ひありさう
のてんだう幡をさし御迎に參ればにさうかんのてん
たうは雲の袖を翻し廿五の菩薩たち三十三さうに
わけ歌舞の并はこゑぐに曲をなし舞遊せうちやく
きむくごびわねうとうはつまてもたつとからすとい
ふ事なしちちくのちらべこまやかにかたん肝にめ
いじたり扱張良を引ぐして臺に入せ給ひけりあら有
難の御事や淨土を拜むめでたさよ調頓て翁は陰陽卷

と申す卷物を取りださせ給ひ此卷物のとくゆうは他

心ノ誤歟

本ノマ

神通をあきらめ代の吉山をあらはし天下太平國土安

長逆ノ誤歟

穩壽命定穩成べき事どもも此卷物の内に候ぞ給はれ

張良張良餘りのかたじけなさに三度いたゞき懷申す

一卷の書是也其後さうのどうじを出し淨土のあかた

せんと申てきらく本ノマ詞もなき酒をべいるりのつぽに

入いのちながへのてうし幸ひらく盃ちんみの菓子

肴にて給れ張良ちやうりやう餘りのかたじけなさに

たぶくと請てはさんとせし時翁御覽じて暫張良盃

ひかへよ汝がじやうみやう國にてくつの口に酒のい

とくを語て聞せんむかしながらくこの大王は父母の

恩を報せんため須彌の半ふくにあがり白石の塔を卅

六堂にくむ彼塔立て七千年と申時たうの中よりもま

かまんだらけまかまんじゆしやげとて種々のれんげ

が咲蓮ちつて百味の菓子となる有ときけぶつ菩薩は

須彌の半ふくにあがり白石の塔を拜みあらめでたや

むかしやうにこそ石に花の咲て實のなるとは申せ是

はさながらめでたさよと一つをて取ぶくするに天の

かんろのごとしいまひとつを取て笈に入なむにやう

けんといふ山にすつる彼なんにやうけんといふ山は

高さも四萬ゆじゆん廣さも四萬ゆじゆんにて菊より

外の草生ずひノ字脱スル歟彼菊の葉のひろき事まはり八十ひろにひ

ろこれり其菊のはにをく露がゑたの水更にをち合て

不老不死の藥となる藥師の淨土で不老山この淨土に

てあかだやく人間にあたふれば其名を和らげて卽酒

と申也 ッメことに彼あかだせんは一度吞ば一千人二

度のめば二千人が力つきつゝ壽命定穩なる酒なりた

まはり給へ張良張良餘りかたじけなさにうけて三度

汲にけり二獻になれば肴とて扇を一本出さるゝ此扇

と申すはたゝめば八つのほねひらけば廿五のほね有

廿五のほねは廿五の菩薩八つのほねは藥王菩薩此扇

を持ならばたといねがはすとすぐに淨土へまいるべ

し延命さうとかきて命をのぶるとよまれたり夫を肴

に今一つ給玉へ張良張良承りて亦三度こそ汲にけれ

三獻にさかなとてむちを一つ出さるゝ滄海浮とは彼
鞭此むちを腰にさし海河を渡るに船にのらねど水上
平地のごとくはしれども水の底にもゑづまず水中に
入れども其水身にもゑまぬ也身をかくさんと思ふ時
おんぎやうの法を誦し木のはのゑたにかくるれど人
の目には見えぬなりかゝるめでたき重寶ぞそれをさ
かなにて今一つ給り玉へ張良張良承り能看好酒仰は
おもしろもとよりもちやうりやうは大酒にてさし請
さし請吞程に八十一度給りぬ凡そ力は八萬一千人が
力也有難しとも中々に申に及ばざりけり酒はよく給
りぬ下向せんと思へども道を忘れてゑらばこそ其れ
うにこそ延命草とさうかいふをば給れ招かばやと思
ひて我ふる里をまねきけりへだてゝ遠き古郷にたゞ
一時に着て榮花に昌給ひけり

新群書類從第八終

黒川眞道 校
米光關月

明治三十九年十一月二十日印刷

明治三十九年十一月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

市島謙吉

編輯兼
發行者

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷者
本間季男

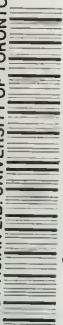
東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷所
內外印刷株式會社分工場

大正四年二月

音代子雄

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02977 5145